

次元大戦

ポコ太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

3000年前に存在した最強の『次元の王』の力を巡り、様々な次元を巻き込む戦いが幕を開ける。

そしてその戦いの果てには何が待っているのか？

※pixivでも投稿させていただいている作品になります。

目次

プロローグ

第1話	↳ 転校生は次元の王!?	↳	15
第2話	↳ 誕生!新たな『次元の王候補』!!	↳	29
第3話	↳ 明かされる秘密(前編)	↳	50
第4話	↳ 明かされる秘密(後編)	↳	70
第5話	↳ 激突!プリキュアVSレグルス帝国軍	↳	110
第6話	↳ 集う戦士たち	↳	119
第7話	↳ 反撃開始!!	↳	129
第8話	↳ 思いの力(前編)	↳	139
第9話	↳ 思いの力(後編)	↳	155
第10話	↳ 再会	↳	183
第11話	↳ 始動!グラン・ゲインズ!!	↳	202
第12話	↳ 復活の『P』&『B』	↳	217
第13話	↳ 参上!!光の使者と朱色の鬼姫	↳	228
第13・5話	↳ 転生!!その名もキュアハート・リバーシア!!	↳	238
第14話	↳ 十戒現る!!	↳	256
第15話	↳ 帰ってきた最強魔導士	↳	269
第16話	↳ 滅亡へのカウントダウン	↳	276
第17話	↳ 爆誕!!次元の王候補(デイオケイター)・ラグナ!!	↳	284
第18話	↳ 激闘の果てに	↳	298
第19話	↳ 新たな決意	↳	312
第20話	↳ 出現!ノットレイダー!!	↳	322

	第21話	〜	襲来!!ゴクウブラックとザマス	〜	339
	第22話	〜	死闘!!ラグナVSゴクウブラック	〜	358
	第23話	〜	宣戦布告	〜	372
	第24話	〜	出発!!さらば第3世界!!	〜	385
	第25話	〜	動き出す計画(プロジェクト)	〜	401
	第26話	〜	開戦!!樹海の大激闘!!	〜	415
	第27話	〜	疑惑と謎	〜	437
	第28話	〜	復活!!魔法騎士と正義の『悪』	〜	450
	第29話	〜	散る英雄…そして、目覚める『王』	〜	469
	第30話	〜	聖戦(バトル)!!『王』と『神』その果てに…	〜	488
	第31話	〜	H O P E (きぼう)を求めて…	〜	512
	第32話	〜	怒りと愛と	〜	528
	第33話	〜	復活と悲しみの勝利	〜	545
	第34話	〜	完全覚醒	〜	564
	第35話	〜	明かされる因縁!そして…	〜	582
	第36話	〜	限界突破!!『神の極意』再び…	〜	594
	第37話	〜	開始(スタート)!妖魔界奪還オペレーション!!	〜	615
	第38話	〜	見参!!灼眼の討ち手と怒りの女神	〜	627
	第39話	〜	逆襲の亡者たち(前編)	〜	648
	第40話	〜	逆襲の亡者たち(後編)	〜	673
	第41話	〜	最凶の大罪、凱旋す!!	〜	688
	第42話	〜	全身全霊!!グラン・ゲインズ VS シュラウド!!	〜	713

	第43話	〜	奇跡の決着!! 大いなる地獄と煌めくイマジネーションの力!!	735
	第44話	〜	声明	765
	第45話	〜	すれ違う意思	796
	第46話	〜	宿命の終わり…そして運命の始まり	816
	第47話	〜	狙われた『英雄の力』	836
	第48話	〜	新たな戦いの幕開け!! そして…	852
	第49話	〜	旅立ち	870
	第50話	〜	降臨!! 『もう一つのセフィーロ』	906
	第51話	〜	集合!! 未知なる新戦力!!	926
	第52話	〜	決戦!! グラン・ゲインズVSもう一つのセフィーロ!!	958
	第53話	〜	不退転	993
	第54話	〜	ゆずれない願いを抱きしめて	1013
	第55話	〜	ULTRA WARS in Lioness	1062
	前編	〜		
	第56話	〜	ULTRA WARS in Lioness	1077
	(後編)	〜		
	第57話	〜	告げられる驚愕の真実… 進之介VS次元の王	1098
	第58話	〜	最終決戦開始!! (ファイナルミッションスタート)	1117
	第59話	〜	始まる死闘…そして新たな力	1136
	第60話	〜	崇めよ… 称えよ… 降臨!! 新たな『究極神』	1166

第61話	〜	神を超えろ!!究極のトリニティ戦士爆誕す!!	〜
1189			
第62話	〜	新たなる進化の女神!その名はキュアハート・エボル	
シア!!	〜		1216
第63話	〜	対決!!『死のマジック』VS『奇跡のマジック』!!	〜
1237			
第64話	〜	激闘!!アルティメットガチンコ (前編)	〜
1262			
第65話	〜	激闘!!アルティメットガチンコ (後編)	〜
1277			
第66話	〜	動き出した聖王	〜
1295			
第67話	〜	最後の戦い!聖王VSグラン・ゲインズ!!そして:	〜
1318			
第68話	〜	惨劇: グラン・ゲインズ最大の危機!!	〜
1342			
第69話	〜	最終決戦(ラストバトル)!! 世界終末の日	〜
1365			
第70話	〜	終結の刻(とき)!!次元を駆ける『1000倍返し』	!!!!!!
1407			
最終話	〜	創造される新たな歴史(ものがたり)	〜
1423			

プロローグ

3000年前、数多の次元を支配していた邪悪な存在がいた。

彼は自らを『次元の王』と呼び、その圧倒的な力で

人々を恐怖のどん底に陥れていった。その『次元の王』を

倒すべく、とある次元に存在するグランバニア王国の第3王女で、

強力な魔力の持ち主である『ミリカ・ド・グランバニア』は、

自らが持つ次元を渡り歩く能力を使って数々の仲間を集め、

『次元の王』の傘下の組織である『神々の集団（カタストロフィー）』の

壊滅に成功する。そしてミリカ達は、『次元の王』との

最終決戦に挑むが、その圧倒的な力の前に成す術がなく、

ミリカの仲間達は次々と駆逐されていった。

残されたのは、ミリカとその幼馴染で恋人である

王国最強の剣士『シン・ザ・バーネット』の2人だけとなった…。

次元の王 『残るは貴様たち2人だけだ。まだ足掻くか？』

ミリカ 『まだです！私達は絶対にあきらめません!!』

既にボロボロの状態で立つのがやっとのミリカが

次元の王に強い口調で言い放ち、最後の力を振り絞り最強の魔法で
ある

『殲滅魔法（ファイナル・アタック）』を次元の王に向けて解き放つ。

ミリカ 『これが最後です！殲滅魔法（ファイナル・アタック）！』

神龍波動（ドラゴニック・キャノン）!!』

ミリカが金色の魔力を身に宿し、両腕を前にかざすと、

巨大な螺旋状の波動が

次元の王に向けて放たれた。だが…

次元の王 『フンッ!!』

ドガガガガガーンンンン!!!

次元の王は右手を前にかざし、拳を握りしめると、

凄まじい威力の衝撃波が次元の王の周りから放たれ、

一瞬で神龍波動（ドラゴニック・キャノン）を相殺し、

ミリカは無残にも吹き飛ばされた。

ミリカ『きやあああああああーーーーーっっ!!!』

シン『ミリカーーーーーーッ!』

倒れていたシンがミリカの悲鳴に反応し、叫び声をあげる。

そして吹き飛ばされたミリカは、地面に叩きつけられて倒れ、

悶絶し、絶望の表情を浮かべていた。

ミリカ『ウウウツ：そ：そんな：』

シン『ミ：ミリカ：大丈夫か：？』

ちょうどシンの近くに飛ばされた為、

シンは這ってミリカの傍に近づき、声をかけた。

次元の王『これでわかつただろう？貴様らは我には絶対に勝てぬ。

なぜだかわかるか？それは我が神々を超える力（次元力）

を生まれながらに持った究極にして唯一無

二の存在。

次元の王だからだ!!』

傲慢かつ高圧的な口調でミリカとシンにそう言い放つ次元の王。

シン『俺たちの力が通じないなんて：くつ：くそつ：

くそおおおおおつっ!!!』

シンは顔を俯け、屈辱と敗北感をにじませた叫び声をあげた。

ミリカ「シン：まだあきらめてはいけません：

私達があきらめたら世界は：

これからの未来は終わってしまうのです

よ：』

ミリカは優しい表情でシンに微笑みながらそう話しかけた。

シン『けど：もう打つ手が：奴を倒す方法はもう：』

シンはミリカにそう言われたが、涙を流しながら呟いた：

ミリカ『確かに倒す方法はもうありません：ですが、

打つ手はまだあります：。』

ミリカは真剣な表情でシンにそう話しかけた。
シン『何だつて…ま…まさか…』

シンは驚きの表情でミリカに話しかける。
そしてこれからミリカがやろうとしている事も
わかっている様子だった。そしてミリカに…

シン『まさか…あれを使う気か…？』

や…やめろ!!やめてくれ!!

あれを使ったら君は!!』

シンはミリカにそう懇願するが、ミリカは…
ミリカ『覚悟は既にできています…。』

シン…あなたはいつも傍にいて、

落ち込んだ時も励ましてくれて、私の事を

愛し、守ってくれた。今まで本当にありがとう…感謝して
います!』

ミリカは涙を流しながら笑顔でそう言うと、
倒れた状態ながらも左手を地面につけて、
赤い魔力を解き放った。

ミリカ『これが私の最期の魔法です!』

そうミリカが言うと、次元の王の周辺に
巨大な魔方阵が形成されて、

深紅の光が次元の王を包み込み始めた。

次元の王『な…何だこれは!』

次元の王は驚きの表情を浮かべ、ミリカの方を向く。

ミリカ『これはグランバニア王国に代々伝わる

究極の時空魔法（ドライブ・アタック）、

次元衝撃陣（デイメイション・インパクト）…

己の命と引き換えに次元の壁を破壊し、

対象のものを次元の狭間へ永久に封じる魔法です…』

ミリカは苦悶の表情を浮かべながらも次元の王に向けてそう答える。
次元の王『己の命だと…だがこんなもので、フンツ!』

次元の王は右手をかざし強力な衝撃波を放つも、
深紅の魔力の壁に阻まれ、相殺される。

次元の王 『何だと…。』

次元の王はさらに驚きの表情を浮かべ、ミリカの方に向いた。
そしてミリカは次元の王にこう言った。

ミリカ 『無駄です… 言ったでしょう…』

これは次元を破壊する魔法だと…

次元力を使うあなたの攻撃は

その魔法陣には無力です…』

グオオオオoooooooooooo!!!

深紅の光は更に増幅されて、次元の王を完全に包み込んだ。

次元の王 『バ… バカナ… この我が… こんな小娘に…』

ミリカ 『次元の王… これで最後です…』

次元衝撃陣 (ディメーション・インパクト)!!』

ピカーoooooooooooooooooooo!!!

ミリカが魔法を唱えると、魔法陣が次元の壁を破壊し、

上空に次元の狭間が出現した。そして、次元の王を

包み込んでいた深紅の光が上空に向け急速に上昇し、

次元の王を次元の狭間へと押し上げる。

次元の王 『グオオオオoooooooooooo!! おのれ小娘…』

これで終わりと思うなよ…

我は必ず蘇る。その時は全ての次元を

再び 我の手に… グ

ガアアアアoooooooooooooooooooo!!!』

oooooooooooooooooooooooooooo…

次元の王は断末魔の叫びを上げながら

深紅の光と共に次元の狭間へと消えていった。

そして、魔方阵の消滅と同時に破壊された次元の壁は修復された。

そして…

シン 『ミリカ… ミリカッ! しっかりするんだ! ミリカ!』

シンはミリカに這って近づき、ボロボロの体に

ムチを打ちながらも必死に起き上がり、倒れているミリカを自分の腕の中へと抱きかかえ、ミリカに声をかけた。

ミリカ『これで… いいのです… 私は後悔していません…』

世界は… 未来は救われたのですから…』

シン『ミリカ… ごめん… ごめんな… 俺にもっと力があれば…』

ミリカ『そんな… 事は… ありません…』

あなたには天使のような優しさと

気高き強さがあるじゃないですか…

そんなあなただから私はあなたを愛したのです…。

ウツ！ゴホツゴホツ！』

ミリカの体はもう限界だった。血反吐を吐き、まともにしゃべることもままならなかった。

シン『ミリカッ！』

シンは涙を流しながらミリカの名を叫んだ。

ミリカ『シン… 悲しまないで… これからみんなで

王国を復興させてちょうだい…』

そして、これからの未来をあなたの

愛と力で守って行ってね… 私の最期のお願いだから…』

シン『わかったよミリカ… もう泣かない… 誓うよ。』

俺は必ず王国を復興させ、みんなの未来を守って見せる！

君が命を懸けてくれたように…』

シンは涙を拭い、ミリカに天使のような微笑みを向け、力強く宣言した。

ミリカ『ありがとう… 最期にあなたのその微笑みが見れてよかった…』

シン… 愛しています…』

シン『ああ。俺もだミリカ…。もし2人一緒に生まれ変わったら、

絶対に結婚しような！』

ミリカ『はい… 喜んで… 今までありがとう… 私のシン…』

ミリカとシンは互いに愛を誓いあった。そして…

?①の問いに?②がこう説明した。

?① 『そう上手くいくのかな?』

?②の説明に対し、?①が疑問の表情を浮かべる。

?② 『不可能ではない。もし次元の王の力が手に入れば、

我らの悲願が成就することになるだろう。』

?① 『なるほどね。わかったよ。じゃあさっさと運ぼうか。

ところで、この娘の死体はどうするの?』

?② 『その娘に用は無い。丁重に葬ってやれ。』

?① 『了解。』

?①がそう言つてミリカの遺体に向けて左手をかざすと、

凄まじい光が放たれて、ミリカの遺体は爆音と共に瞬時に消滅した。

?① 『はい。処理完了。』

?①はミリカの遺体を消滅させると、冷徹な表情でそう言った。

?② 『では行こうか。我らの名のもとに。』

?②がそう言うと、右手をかざし、次元の歪みを発生させた。

そして2人は歪みの中へと消えていった…。その後…

ミリカの魂 『いけない…。このままでは…。こうなれば私の魂を…。』

事の一部始終を見ていたミリカの魂は自身の能力を使い、

自らの魂を懐中時計の様なものへと変化させた。

ミリカの魂 『シン…。あなたを次元の王になんて絶対にさせない

!

必ず取り戻してみせる!』

懐中時計へと変化したミリカの魂はそう言い残し、

虚空の彼方へと消えていくのであった…。

こうして後に、『次元大戦』と呼ばれることになる戦いは
ひとまず幕を下ろした。

そして3000年の月日が流れた今日、その次元の王の力を巡り、
数多の次元を巻き込む戦いの火蓋が切つて降ろされようとしてい
た…。

そして時は流れ…

く 3000年後 大貝町 く

マナ「そういえば…明日、転校生が来るんだって!!」

六花「転校生?」

真琴「どんな子かな?」

マナ「先生の話によれば、男の子みたいだよ!!」

レジーナ「男の子ねえ… まあ、あたしの部下に

ふさわしければいいけど!!」

マナ「もう!レジーナったら…。」

「ドン!!」

男の子「あっ!!」

と、マナ達が学校の帰り道に転校生の話をしながら

帰る途中、角を曲がったところでマナが

自身と同じくらい年のツンツン頭の

男の子と出会い頭にぶつかった。

マナ「こつちこそごめんなさい!!大丈夫!?!」

男の子「うん、平気だよ。こちらこそごめんなさい!!」

と、マナの謝罪に対し、男の子も

ペコリと頭を下げながら謝罪した。

男の子「それじゃ、僕はこれで。」

マナ「うん!!じゃあね!!」

六花「…あの男の子…。」

マナ「どうしたの?六花。」

六花「一瞬しか見えなかったけど、

きれいな首飾りしてたなと思って。」

マナ「えっ?そうだったの?」

真琴「それにいい子だったわね!!」

レジーナ「まあまあね。あの子がその転校生だったらいいのに!!」

マナ「まあまあ、それは明日のお楽しみって事で!!行こうみんな!!」

六花・真琴・レジーナ「うん!!」

と、マナ達はそう言いながらまた歩を進め、

帰宅の途へと就くのであった。

だがこの翌日、マナ達はこの男の子と

運命的な出会いを果たすと共に、

これまで経験したことがない程の

争乱の渦へと巻きこまれて行くことを

この時はまだ知る由も無かったのである…。く プロローグ(完)

く

【登場人物】

・ミリカ・ド・グランバニア (女) (18歳) (オリジナル)

3000年前に存在した神聖グランバニア王国の第3皇女。強いリーダーシップを持ち、

才色兼備である為、王国の男性達からも憧れの的になっている。強力な魔力と

戦闘力を兼ね備え、次元の王が出現するまでは、王国騎士団と共に異世界の敵から

国や民を守っていたが、次元の王の傘下の組織である

『神々の集団 (カタストロフィー)』に、王国を壊滅させられたのを機に、

幼馴染であり王国騎士団長のシン・ザ・バーネットと共に、

特別遊撃部隊 (グラン・バスターズ) を結成し、部隊長になる。

自身が持つ時空魔法 (ドライブ・アタック) で、数多の次元を渡り歩き、

王国と同じく次元の王の支配に

苦しむ国々から共に戦う仲間を集め、『神々の集団 (カタストロフィー)』を

壊滅に追い込み、ついに王国の仇をとるが、最終決戦では、

次元の王の圧倒的な力の前に太刀打ちできず、

部隊が全滅寸前まで追い込まれるが、自身の命と引き換えに

次元衝撃陣 (デイメイション・インパクト) を

発動させて次元の王を封印することに成功する。

そして、死の間際にシン・ザ・バーネットに

王国の復興を託し、自身との永遠の愛を誓い合いながら、息を引き取った。

だが、遺体は何者かに消滅させられ魂になった際、シン・ザ・バーネットが

殺害され、その体を使って新たな次元の王を擁立する計画を知ると、

魂を自身の力を秘めた懐中時計に変化させ、

3000年後の未来へと転移していった。後に、この懐中時計は、とある少女の手に渡ることになり、

その少女はミリカの力をその身に宿し、第2次次元大戦で主人公と共に部隊の中核を担って行く事になる。

・シン・ザ・バーネット（男）（17歳）（オリジナル）

神聖グランバニア王国の騎士団長を最年少で務める少年。

魔法剣（アタック・ヴァイト）の使い手であり、

王国最強の剣士でもある。元々は農民であったが、

幼馴染であるミリカの力になりたいという思いと

持ち前の身体能力と剣術の才能から12歳で王国騎士団の

入団試験を受けて、最年少で合格を果たす。

（ちなみに試験の際は、1対1の勝負で当時の副騎士団長に勝利する。）

ミリカや騎士団員と王国の平和の為に戦っていたが、

次元の王が出現した際は、ミリカと共に結成した

特別遊撃部隊（グラン・バスターズ）に加わり、副部隊長に着任する。

数々の激戦を潜り抜け、

『神々の集団（カタストロフィー）』を壊滅させる立役者となるが、

最終決戦の際では、ミリカと同じく、次元の王の力の前には

歯が立たなかった。

そしてミリカが最期に次元衝撃陣（ディメーション・インパクト）を

使って、

次元の王を封印した後、死ぬ間際にミリカから王国の復興を託されるのと同時に、

永遠の愛を誓い合って、彼女の最期を看取った。

だが、その直後、何者かに背後から攻撃を受け、自身もまた命を落とすことになってしまった。

その遺体は、謎の2人組により運ばれ、

新たな次元の王の器にする為の実験体の元にされる事になる。

実験体は謎の組織により全部で120体製造され、

数多の次元や時間軸に配置される。

後に、その内の1人で86番目の実験体であり、

今作の主人公でもある少年『桑田 進之介』が、

次元の王の力を宿した武器の1つと契約を交わして、

新たな『次元の王』候補となり、

第2次次元大戦へと身を投じていくことになる。

・次元の王（男）（年齢不明）（オリジナル）

3000年前に突如として現れた神々をも遙かに超越する

『次元力』を生まれながらに持つ謎の邪悪な存在。

次元をも破壊できる能力を持ち、その圧倒的な力で神々を

自身の傘下に置き、数多の次元を支配して

人々を恐怖のどん底に陥れていった。

『次元大戦』での最終決戦の際は、ミリカらをあつという間に

全滅寸前にまで追い込むが、最後はミリカの命をかけた

次元衝撃陣（デイメイション・インパクト）により、

次元の狭間に封印された。

しかし、理由は不明だが、己の力を宿した13個の武器を、

遙か未来の次元や時間軸に飛ばしており、

後に、その力を巡っての戦い『第2次次元大戦』が起こる

引き金になっていった。

?① (男) (年齢不明)

3000年後の未来から現れた謎の組織に所属する青年。

性格は冷静かつ冷徹で、非常に高い戦闘能力を持ち、

主にビーム攻撃を使う。ステルス能力をも持ち合わせており、

シンを殺害した際には能力を使用し、

背後から攻撃を行った。

?② (男) (年齢不明)

?①と同じく3000年後の未来から現れた謎の組織に所属する男性。

頭脳明晰であり、?①に対しても

ある程度の指示を出して動かしている。

時間や空間を操る能力を持ち、次元の歪みを出現させて、

異世界や未来を移動したり、対象者の時間を止める事もできる。

(但し、自身より力が遥かに上の者に対しては効果が無い。)

シンの殺害後は、その遺体を運び、その体を元に

新たな『次元の王』の器の実験体を製造して

数多の次元や時間軸へと飛ばした。

舞台設定と用語

・ 神聖グランバニア王国 (オリジナル)

3000年前に存在した剣術や魔法が栄えた大国。

ミリカやシンの生まれ故郷であったが、

『神々の集団 (カタストロフィー)』の襲撃により、壊滅した。

この時のミリカ以外の国王や王族の安否は明らかにされていない。

・ 殲滅魔法 (ファイナル・アタック)

ミリカが使用する魔法の中でも最上位の破壊力を持つ、

必殺技にあたる魔法である。

使用には膨大な魔力を消費する為、

使えるのは、ミリカのみになっている。

中でもプロローグで使用した『神龍波動 (ドラゴニック・キャノン)』
は、

1・2を争う威力を持つが、『次元の王』には通用しなかった。

・時空魔法（ドライブ・アタック）

ミリカが使用する主に、時間や空間を操る魔法。

次元大戦の際、ミリカはこの魔法を使用して、

数多の次元を渡り歩き、多くの仲間を集めた。

中でもプロローグで使用した究極の時空魔法である

『次元衝撃陣（ディメーション・インパクト）』は、

どんな敵でも次元の狭間へ封印する事ができる強力な魔法だが、

術者の命を必要とする。

ミリカはこの魔法を使い、『次元の王』を封印する事に成功したが、その代償として命を落とすことになった。

・魔法剣（アタック・ヴァイト）

シンが使用する魔法の力を剣に宿し、敵を倒す剣術。

シンは主にこれを使用し、次元大戦を戦った。

・次元力

次元の王のみが持つ、神々を遥かに凌ぐ力だが、詳細は不明。

・神々の集団（カタストロフィー）

次元の王が傘下に置く文字どおり、

数多の神々や神官達が所属する組織。

グランバニア王国を壊滅に追い込み、

次元大戦を引き起こした原因ともいえる存在である。

最後は、ミリカ率いる『グラン・バスターズ』との激闘の末、

壊滅したが、

第2次次元大戦では残党の神官の1人が、今作の主人公『桑田 進之介』に

家臣として仕える事になる。

・次元の王の力を宿した13の武器

次元の王の力を宿した13の武器。詳細は明らかにされていないが、

武器の1つ1つが強力な力を有しており、

全ての武器を集めれば、新たな次元の王になる資格を得るとされている。

今作は、この13の武器を巡り、第2次次元大戦が起こる原因となる。

今作の主人公『桑田 進之介』が、武器の1つである

『破壊剣（ラグナロク）』と契約し、新たな『次元の王』候補になる事となる。

第1話 転校生は次元の王!?

『次元大戦』から3000年後のA. D (西暦) 次元 第3世界

〜大貝町〜

進之介 「それじゃおじさん、いつてきまーす!」

浩一郎 「おお、進之介君、転校初日だから気をつけて行ってらっしゃい!」

進之介 「うん!ありがとう!」

そう言うのと進之介は、元気良く家から出て行った。

進之介 「いよいよ今日からかあ。みんな良い人だったらうれしいな。」

彼の名前は「桑田進之介」14歳、今日から「大貝第一中学校」に転校する事になった中学2年生である。

家を出てしばらく歩くと、1軒のレストランが視界に入った。

進之介 「ぶたのしっぽ亭。。。?こんな所にレストランがあるなんて、

今度、おじさんと食べに来ようかな!

と、進之介が言っていたら、レストランの入り口から、

1人の少女が慌てて飛び出してきた。

少女 「ああー、遅刻しちゃう!何で目覚ましが鳴らなかったのよーっ!」

進之介 「えっ?」

少女 「あつ、あぶなーい!」
ゴチーン!

慌てて飛び出してきた少女と進之介が正面からぶつかり、

進之介が尻餅をついて、倒れた。

進之介 「あいたた。。。」

少女 「ご。。。ごめんなさい!大丈夫!」

進之介 「な。。。何とかね。。。」

少女 「立てる?良かったら、つかまって。」

と、少女は右手を差し出し、進之介はその右手をつかんで、

どうにか立ち上がった。

少女 「怪我は無いかな…。？」

進之介 「大丈夫だよ。ブーツとしててごめんなさい。」

と、心配する少女に対して、笑顔で答える進之介。

そして、2人の後方から3人の少女がやって来て、

「マナーっ!!」

と1人の少女が声をかけた。

マナ 「あつ、六花、まこぴー、レジーナ！おはよう！」

六花 「おはよう、マナ。」

真琴 「おはよう！」

レジーナ 「おはよー！」

と、互いに挨拶をする4人。そして、マナが進之介の方を向き、

マナ 「さつきはホントにごめんね！それじゃ！」

と、進之介と別れて、3人と一緒に登校し始めた。

六花 「マナ、あの男の子誰？」

マナ 「さつき、慌てて家を出て行ったら、正面にあの子がたまたまいて、

ぶつかっちゃったの。」

真琴 「ふふっ、何をそんなに慌ててたの？」

マナ 「だって、今日から転校生が来るからね！」

遅刻しちやったら、格好がつかないでしょ？」

レジーナ 「転校生？」

六花 「ああ、そういえば先生が言ってたわね。んっ？

もしかしたらあの子がそうなんじゃない？

見慣れない制服着てるし。」

マナ 「えっ？」

と後ろを振り返り、ダツシユで進之介の所にもどるマナ。

マナ 「ひよっとして、あなた今日からウチのクラスに来る転校生
!？」

進之介 「えっ？ああ、たぶん、そうだと思うよ。。」

と、勢い良く訪ねるマナに、多少、引き気味に答える進之介。

マナ 「そうだったんだー！それなら早く言ってくれば良かったのに！」

六花 「やっぱり、そうだったの？」

と、六花、真琴、レジーナも引き返してきた。

真琴 「近頃、転校生が多いわね。あたしとレジーナもそうだけど。」

レジーナ 「まあ、悪くはないわね。決めた！あなたをあたしの

部下にしてあげる！」

進之介 「ええっ!？」

マナ 「ちよつとレジーナ、彼困ってるじゃない。そんなこと

言っっちゃダメだよ！」

レジーナ 「ええーっ、つまんなーい！」

マナ 「ごめんね。彼女、ワガママだけど、とても良い子だから安心してね。」

進之介 「うん。とても優しくそうな子だね。ちよつとびっくりしたけど。」

とマナの言葉に笑顔で答える進之介。

マナ 「そうだ、良かったら一緒に登校しようよ！さっきのお詫びに。」

進之介 「えっ、良いの？」

六花 「もちろんです。一緒に行きましょう。」

真琴 「そういえば、あなたの名前は？」

進之介 「そしたら、一足先に自己紹介するね。僕の名前は桑田進之介です。」

今日からお世話になります。」

と言いながらペコリと頭を下げる進之介。

マナ 「あたしは相田マナ！大貝第一中学校の元生徒会長です！

わからない事があったら何でも聞いてね！」

六花 「わたしは菱川六花（ひしかわりっか）といいます。

マナと一緒に生徒会で書記をやっていました。

よろしくお願いします。」

真琴 「あたしは剣崎真琴。アイドル歌手をやってるわ。

もしよかったら、今度、コンサートに遊びにきてね。」

レジーナ 「レジーナよ。よろしく進之介!」

と、初対面でいきなり下の名前で呼ぶレジーナ。

マナ 「ああーっ、いけない遅刻しちゃうー!みんな、ごめんけど、

急いで行こう!」

真琴 「あつ、そういえば。。。。」

六花 「行きましょう!」

進之介 「うん!」

レジーナ 「あつ、みんな待ってよーっ!」

と急いで走り始めた5人であった。

く 大貝第1中学校 マナ達の教室く

マナ 「あーあ。結局遅刻しちゃった。。。。」

六花 「まあ、よかったじゃない。桑田君がいたから転校生を道案

内

しながら登校してたって事でおとがめ無しにしてもらえたし。」

真琴 「ふふっ」

レジーナ 「進之介、早くこないかなー!」

すると、担任の城戸先生が進之介を連れて教室の中に入ってきた。

八嶋 「あの子が転校生。。。ちよっとカワイイな。。。。」

三村 「へえく。。。 (何だ。。。男か。。。)」

十条 「さて。。。頭の方はいかな物か。。。。」

と、思い思いに進之介に注目する3人であった。

城戸 「それでは紹介する!今日からこのクラスに入る事になった

桑田進之介君だ。みんな、よろしく頼むぞ!」

進之介 「今日からお世話になります桑田進之介です。」

この町にはまだ来たばかりでわからない事がたくさんあり

ますが、

みなさん、よろしくお願ひします!!」

と笑顔で言いながら、深々とお辞儀をする進之介。

八嶋 「何あの子、かわいすぎ…。それに何て礼儀正しいの…。」

三村 「…。まあ、悪くないんじゃないかね。…」

十条 「これは…。なかなかできますね…。」

と、進之介の挨拶に感心する3人。

マナ 「こちらこそよろしくね、桑田君!!」

パチパチパチパチパチ…。

マナがそう言うと、クラス全員から拍手が巻き起こった。

城戸 「それでは席だが…。相田の隣が空いているから、

そこに座ってくれ。」

進之介 「はい!」

進之介は城戸先生にそう言われると、マナの隣の席に座った。

マナ 「ごめんね。遅刻した理由に桑田君をダシに使っちゃつて…。」

進之介 「そんなこと無いよ。僕もみんなと登校できて楽しかったし。」

これからよろしくね。相田さん。」

マナ 「うん!」

マナの言葉に笑顔で答える進之介。

マナ 「そうだ! 休み時間になったら学校の中、案内してあげるネ!」

進之介 「本当? 嬉しいな。楽しみにしてるね。」

マナ 「よーし! けつてーい!!」

城戸 「相田、はりきるのが良いが、その前に授業だぞ!」

マナ 「はーい…。」

と、笑顔で張り切るマナに城戸先生が釘を刺した。

六花 「マナ、何だかともうれしそうね。」

真琴 「そう? 世話焼きなのはいつもの事だと思うけど。」

レジーナ 「あたしも同感。」

六花 「確かにそうだけど、わたしにはいつもより心の入り具合が違う様に見えるの。ひよっとしたらマナ…。」

と、マナが進之介に興味を抱き始めたかもしれないと考える六花であった。そして授業が始まり、

城戸 「よーし！じゃあこの問題、誰か解ける人いるかー？」

マナ 「えっ…？」

六花 「何、この問題…？」

十条 「これは…中学生が解ける問題ですか…？」

と、黒板には学年でもトップクラスの成績を誇る3人ですら困惑するほどの問題が書かれていた。

城戸 「ふふふ…どうだ？これは大学入試レベルの問題だ。」

この問題が解けたものには全教科満点を与えてやるぞ！

マナ 「でた…。城戸先生のいじわる問題…。」

六花 「こんなの、中学生に出す問題じゃないわよ…。」

十条 「さすがの僕でも降参ですね…。」

と、成績トップクラスの3人があきらめムードになったその時、

進之介 「あー、僕が解いても良いでしょうか…？」

と、おそるおそる手を上げる進之介。

城戸 「うんっ!!」

六花 「えっ!!」

十条 「なぬ!!」

マナ 「桑田君、この問題、解るの…？」

進之介 「うん…。多分、いけそうな気がする。」

城戸 「よ…よーし！なら桑田！解いてみる！」

進之介 「はい。」

と、進之介はクラス全員の注目を集めながら、黒板へと向かい、問題を解き始めた。

スラスラスラスラ…。

城戸 「!!!」

マナ 「正解だ…。」

マナ 「マジツツツ!!」

六花 「うそでしょ…。」

十条 「そ…そんな…。」

と、大学入試レベルの超難問をいとも簡単に解いてしまった進之介に、

城戸先生やトップクラスの3人を始め、クラス全体がどよめきに包まれていた。。。

城戸 「桑田… 何で解ったんだ…？」

進之介 「一緒に住んでいる僕のおじさんに教えてもらった問題によく似てたからそれで解ったんです。」

城戸 「そ… そうか…。(中学生に大学レベルの問題を教えるってどうなってるんだ…?)」

マナ 「先生！それじゃ、桑田君は全教科満点もらえるって事ですよね？」

城戸 「そ… そうだな…。」

進之介 「あつ、そんなのいいですよ！本当に偶然なんですから…。」と、謙遜しながら断る進之介であった。

そして、授業が終わり、休み時間になった瞬間、

クラスの女子生徒ほぼ全員が、隣の席にいたマナを押しつけて、進之介の周りに集まっていた。

女子生徒A 「桑田君、素敵!!」

女子生徒B 「かわいくて頭も超良いなんて、最高じゃん!!」

女子生徒C 「ねー、どこから来たの？おしえておしえてー!!」

進之介 「……………」

と、クラスの女子生徒から質問攻めにあい

おしくらまんじゅう状態になる進之介。

マナ 「ちよーろーろーっつと!!みんな少し離れてよ!

桑田君、苦しそうじゃん！これから学校の中を

案内するんだから!!」

と、周りにいる女子生徒を掻き分けながらそう言うマナ。

女子生徒A 「何よマナ！プリキュアだからって抜け駆けする気？」

女子生徒B 「そーよそーよ!!」

女子生徒C 「ズルーイ！ズルーイ！」

と、女子生徒達からブーイングを浴びるマナ。

進之介「プリキュア…？」

マナ「ち…ちがうわよ！元生徒会長としての勤めを果たすだけよ！

桑田君、行こっ!!」

進之介「う、うん。」

と、進之介の手を引きながら教室を飛び出すマナであった。

進之介はそのままマナに学校の中を親切丁寧に案内されて、

ランチもマナ、六花、真琴、レジーナとともに食べて、

転校初日は終わりを迎えた。

く 放課後 く

マナ「そうだ！これからあたしの家で桑田君の歓迎会しない？」

真琴「歓迎会？」

六花「急にどうしたのマナ？」

マナ「ほ、ほら、桑田君、この町に来たばかりで、何もわからないだろうから、親睦を深めながらじつくりと教えてあげようかな、

と思つて…。」

と、髪をいじりながら頬を少し赤くして照れくさそうに理由を言うマナ。

レジーナ「あたし、やりたーい!!」

真琴「まあ、悪くないわね。それじゃ、歓迎の意味を込めて、

彼に1曲何か歌つてあげようかな。」

マナ「六花は反対なのかな…？」

六花「…。いいわよ。わたしも賛成！」

マナ「ホント！さすが六花、ありがとう！

それじゃ、桑田君も良いかな？」

進之介「うん。特に用事も無いから…でも、良いのかな…？」

マナ「もちろんだよっ！それじゃ、ありすと亜久里ちゃんも誘おうかな。」

二階堂「そしたら、俺たちもまぜてくれよ！」

百田「そうだそうだ！」

と、そこへ二階堂と百田と言う名の生徒が割って入ってきた。

二階堂「こいつが例の転校生か？噂だと、超が付くほどの

天才らしいじゃねーか？」

百田「そう見たいですぜアニキ！」

進之介「桑田進之介といいます。よろしくお願いします。

ええと、二階堂君に百田君かな？」

と自己紹介しながら2人に尋ねる進之介。

二階堂「おお、もう名前を覚えたとは、お前、

なかなか見込みがあるな！」

百田「アニキの言うとうりです！」

レジーナ「またむさ苦しいのがきたわね。。

あんたたちは引っ込んでなさいよ！」

二階堂「何だとレジーナ！」

百田「そーだそーだ！」

進之介「ま、まあ、大勢いたほうが楽しいし、僕は

大歓迎だよ。レジーナさん、良いかな？」

レジーナ「まあ、あんたがそう言うなら。。。あんた達、

参加を認めてあげるから、進之介に感謝しなさいよ！」

二階堂「何でお前に認められなきやなんねーだ！歓迎会の主催は

相田だろうが！」

百田「そーだそーだ！」

マナ「まあまあ、3人共その辺にして。あつ、桑田君ちよつと

両手出してくれない？」

進之介「う、うん」

マナに言われるとうり、両手を差し出す進之介。

そして、マナが進之介の両手を握ると、

マナ「手と手を繋げばお友達！よろしくね！」

進之介「うん！こちらこそよろしくね！」

とマナが笑顔でお決まりの台詞を言うと、進之介も同じく笑顔で答

えた。

二階堂「!? (な… 何だあ… この転校生は… この俺を差し置いて相田と…!)。」

六花 「(マナ… やっぱり…。)」

マナ 「そしたらみんないくよ。レッツゴー！」

一同 「おーっ!!」

と、それぞれの思いを抱きながら、進之介達は学校を後にし、マナの家に向かった。

同じ頃、東京クロバータワー上空にて、プロローグに登場した謎の2人組が突如現れ、何やら話をしていた。

く 同時刻 東京クロバータワー上空 く

? ① 「ここが、例の実験体がいる世界の町かい？」

? ② 「そうだ。そして、その実験体はすでに13の武器の一つを所持しているとの情報がある。

まだ、覚醒はしていないみたいだな。」

? ① 「ほう、そしたらまずはその実験体に接触してみるのかい？」

? ② 「いや、まずはこの町に刺客を放ち、様子を伺う。

そして実験体が現れたらそのもの達に襲わせて、覚醒を促す。」

? ① 「なるほど。」

? ② 「では、早速始めようか。人選はお前にまかせる。」

? ① 「わかった。そしたらこいつらはどうかな？」

この世界にかつて存在した、ジコチューという怪物らしいが。」

? ② 「ちようどいいかもしれないな。始めろ！」

? ① 「了解。」

ビカーーーーン!

? ① は手に持っていたノートらしき物体から、ジコチューを5体召

喚した。

そして、大貝町は再び、戦火に包まれることになるのだった…。

く 学校の帰り道 く

マナ 「桑田君、転校初日どうだった？」

進之介 「うん。みんなとても親切だし、特に相田さんが色々教えてくれたから

何の不安も無かったよ。ありがとう！」

と、マナの問いに進之介が天使の様な微笑で答える。

その笑顔を見たマナは…。

マナ 「えっ…。(ドキッ！)。何だろ… 桑田君の笑顔を見たら、

すごく胸がキュンキュンする…。)」

と、頬を赤く染めながら進之介を見つめる。その様子を見た二階堂は、

二階堂 「(あ、あの野郎…。)」

と、嫉妬心を抱きながら進之介を睨んでいた。

進之介 「相田さん、どうしたの？」

マナ 「えっ、な、何でもないよ！うん？あつ、その首飾り、きれい！」

と、マナが目線を向けると、進之介の首飾りがキラキラと輝いていた。

真琴 「見せて見せて！あつほんとだ。すごくきれい…。)」

六花 「まるで宝石みたい…。)」

続いて、六花と真琴も、首飾りに見とれていた。

進之介 「これは、お守りなんだ。これを身に着けていれば、

何か元気になってくるんだ。僕の宝物だよ。)」

レジーナ 「あたしにも見せて!!」

進之介 「もちろんだよ。どうぞ。)」

と、首飾りを外して、レジーナに手渡す。

レジーナ 「わぁーホントにきれい…。これほしいなー。んっ？」

「ピキーン!!」

レジーナ「えっ…。」

首飾りを手にした瞬間、レジーナが何かを感じ取り、急に無口になった。

マナ「どうしたのレジーナ?」

レジーナ「う、ううん、何でもない。ありがと進之介」

進之介「うん。」

レジーナはそういうと、首飾りを進之介に返した。

レジーナ「何…今の気配…。」

進之介の首飾りから僅かながら発生した禍々しい波動をレジーナは唯一、

感じ取っていた。そして、突如、マナ達の前に、1台の車が到着した。

中から顔を出したのは、同じプリキュアの仲間である四葉ありすと円亜久里、

そして、ありすの執事のセバスチャンだった。

マナ「ありす! 亜久里ちゃん! それとセバスチャンさん、突然、どうしたの?」

ありす「マナちゃん! 大変です! クローバータワー周辺にジコチューが5体現れました!」

マナ「えー…! どういうこと?!」

六花「ジコチューが…?。」

真琴「どうして…?」

レジーナ「どういうこと? プロトジコチューはもういないのに…。」

亜久里「理由はわかりません! とにかくみんな早く車に乗ってください!」

このままだと大変なことになります!」

マナ「亜久里ちゃん… わかった! 六花、まこぴー、レジーナ、いこう!」

六花・真琴・レジーナ「うんっ!!」

マナ「桑田君、ごめんね!! 歓迎会はまた今度ね! 危ないから

気をつけてお家に帰ってね！」

マナ達4人は急いで車に乗り込み、クローバータワー方面へと向かった。

進之介「いったい何が…二階堂君、何か知ってるの？」

二階堂「お前、あいつらがプリキュアだつて知らないのか？」

進之介「プリキュア：？　そういえば、学校でもクラスの女の子が言つてた様な…。」

二階堂「なら、ジコチューは？」

進之介「いや、初めて聞いたよ…。」

二階堂「プリキュアもジコチューも知らない？　お前、マジかよ！」

プリキュアとジコチューの戦いはテレビ中継までされて、

日本中が知ってるぜ！　いくら何でも知らなさすぎだろ！！」

百田「そーだそーだ！　プリキュアを知らないなんてどうかしてるぜ！」

彼女たちはジコチューの魔の手から世界の危機を救った英

雄だぞ！」

進之介「…。そのプリキュアが相田さん達で、そのジコチューつていうのが、

今、言つてた怪物の事…？」

二階堂「ああ、そうだよ！　ちなみにあいつらは『ドキドキ！　プリキュア』つていうんだ！」

ジコチューが消えてからも、時々あいつらはああやって人助けをしてるんだ！

お前もこの町に住むのなら、それぐらい覚えとけ！」

百田「アニキの言うとうりです！　わかったか転校生！」

と、上から目線で進之介に説明する二階堂と百田。

進之介「わかったよ。ありがとう。二階堂君に百田君。んっ…！？」

「キィー…。」

突然、進之介が何かの気配を感じ、何者かが進之介の頭の中に話しかけてくる…。

(男性の声) 「君も行くんだ!このままでは、彼女たちが危ない!!」
と、進之介が男性の声を聞くと、しばらく沈黙を続けた。

二階堂「わかりやあいなんだよ!ちなみに相田は変身したら、『キュアハート』って

プリキュアになって、他のプリキュアと力を合わせてジコチューとの

戦いを終わらせたんだ!転校してきたばかりのお前がおいそれと

お近づきになれるもんじゃないんだよ!」

進之介「…?!」

二階堂「おい、聞いているのか転校生!!」

と進之介の肩を掴む二階堂。

進之介「…行かなきゃ…。」

二階堂「何?」

進之介「二階堂君、百田君、ごめん。僕、行かなきゃ!さようなら!」

二階堂「お、おいつ転校生、どこに行くんだよ!転校生!」

進之介「相田さん、みんな、今行くからね!」

進之介は二階堂と百田に別れを告げて、マナ達が向かったクローバータワー方面へ

走り去っていった…。

第1話 転校生は次元の王!? (完)

第2話く 誕生！新たななる『次元の王候補』!! く

く 東京クローバータワー周辺 く

ジコチュー「ジコチューーーーーーッ!!」

ドカンドカンドカーン!!

町民男性「うわーーーーっ!」

町民女性「きゃーーーーっ!」

謎の2人組に突如召喚された5体のジコチューは、人々や建物を次から次に蹂躪していく。

そして、クローバータワー周辺は、

ジコチューの攻撃によって、廃墟と化していった。

そして、マナ達を乗せた車が現場に到着すると、

マナ「何：これ：ひどい!!」

真琴「あのジコチュー達の仕業ね!」

六花「許せないわ：!」

ありす「セバスチャンは、町民の皆さんを避難させて!」

セバスチャン「かしこまりました。お嬢様!」

亜久里「本当にジコチューなんですネ…」

みなさん、変身しましょう!」

一同「うん!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!ラブリンク!」

亜久里「プリキュア!ドレスアップ!」

マナ達4人は光に包まれて、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットによって炎に包まれ、5人は変身を果たす。

キュアハート「みなぎる愛!キュアハート!」

キュアダイヤモンド「英知の光!キュアダイヤモンド!」

キュアロゼッタ「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

キュアソード「勇気の刃!キュアソード!」

キュアエース「愛の切り札!キュアエース!」

5人「響け!愛の鼓動!『ドキドキ!プリキュア!』」

キュアハート「愛を無くした悲しいジコチューさん、このキュア

ハートが

「あなたのドキドキ取り戻してみせる！」

と、変身を終えた5人は定番の台詞を決め、ジコチューへと挑んでいった。

レジーナ「出でよ！ミラクルドラゴングレイブ！」

そうレジーナが叫ぶと、3種の神器の1つであるミラクルドラゴングレイブが

現れて、レジーナの手に収まり、戦闘態勢をとる。

町民女性「あつ、プリキュアよ！」

町民男性「本当だ、頼むぞプリキュア！」

とプリキュアの登場に歓喜する町の人々。

キュアハート「はぁーっ！！」

キュアダイヤモンド「煌めきなさい！トウインクルダイヤモンド！」

キュアロゼッタ「えーっ！！」

キュアソード「閃け！ホーリーソード！」

キュアエース「ときめきなさい！エースショット！ばっきゅん！」

レジーナ「これでも喰らいなさい！」

6人が一斉にジコチュー達に攻撃を仕掛けていき、

ジコチュー5体「ジコチューーっ！！」

攻撃を受けたジコチュー達が、悲鳴をあげながら倒れていく。

その様子を上空から見ていた謎の2人組は、

①「… 何だい、あの小娘達は？」

②「この世界の戦士でプリキュアという者達だそうだ。

かつてあのジコチューを倒したと情報にある。」

①「ふーん。まあ、あいつらに用はないんだけど、

少し遊んでやるか！」

そういうと、手に持っていたノートが光りだした瞬間、

ジコチュー5体が一斉に立ち上がる。そして…

ジコチュー5体「ジコチューーっ！！」

キュアエース「いったいどうなっているの……。」
キュアロゼッタ「……みんな……ごめんなさい……。」

上空

?②「3000年前のグランバニアの魔法か……随分と古い手を使いな……。」

?①「まあ、使えそうだったから『サンプル』をいくつか採取しておいたのさ。それをあのジコチューに組み込んでみた。」

?②「まあ、あの程度で苦戦するようならもういい。始末しろ。」

?①「了解。」

ジコチュー5体「ジコチュー……ッッッ!!」

ジコチュー5体が再び前方に魔法陣を出現させ、火炎連弾(メギド・バルカン)を

放とうとする。プリキュア達6人は何とか立ち上がり、

キュアハート「またあれが来る……こうなったらみんな、いくよ!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース「うん!!」

キュアハートがマジカルラブリートハープの弦を爪引くと、プリキュア達5人が

エンジェルモードとなり、空中で陣形を組み立てる。そして、

「プリキュア!ロイヤルラブリートフレートフラッシュユ!」

と5人が叫ぶと、陣形の中央から強力な虹色のビームが放たれ、星屑のように

拡散される。

ジコチュー5体「初期魔法(ファーストアタック)!火炎連弾(メギド・バルカン)!」

「……ッッッ!!!」

プリキュアロイヤルラブリートフレートフラッシュユと火炎連弾(メギド・バルカン)が

両者の間で激しくぶつかり合う。

ハート・ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース「はあ……ッッッ!!」

ジコチュー5体「ジコチューーっ!!」

レジーナ「これで終わりじゃないわ!行つけえーっ!!」

「ドーーーーーッ!!」

レジーナがそう叫ぶと、ミラクルドラゴングレイブの先端から強力なビームが

放たれると、ついに火炎連弾(メギド・フレイム)をかき消し、

ジコチュー5体に命中した。

ジコチュー5体「ジコチューーっ!!」

「シューーーーーッ!!」

ジコチュー5体はプリキュアロイヤルラブリーストレートフラッシュと

ミラクルドラゴングレイブから放たれたビームを受けて、消滅していった。。

キュアハート「やったー!!」

キュアダイヤモンド「ふう。。何とかなったわね!」

キュアソード「けど、あのジコチュー、いったい何だったのかしら。。?」

キュアエース「結局、何もわからずじまいですね。。」

レジーナ「でも、これで一件落着ね!」

キュアロゼッタ「いえ、まだそうとも言い切れません..」

町や人々の被害がまだそのままです..」

キュアソード「そういえば.. 何で元に戻らないの..?」

キュアハート「.. 考えても仕方ないよ.. あたしたちもこれから町のみんなを

助けようよ!」

一同「うん!」

と、6人が人々の救助に向かおうとした時、

「キューーーーッ!!」

キュアハート「.. えっ!」

キュアエース「こ.. これは..!」

キュアソード「何が起きているの!」

6人は東京クロバータワー周辺の時間が巻き戻っていくのを驚愕した表情で眺めていた。そして時間が巻き戻り、先ほど倒したはずのジコチュー5体が再び現れた！

ジコチュー5体「ジコチューーーーーーッッッ!!」

キュアハート「う……うそ……っ」

キュアダイヤモンド「……時間が……巻き戻った……!!」

キュアソード「いったい、何がどうなってるのよ!」

レジーナ「……もう！訳わかんない!!」

キュアエース「けれど、町や人々も元に戻っているようですし、

今度こそ被害を出さないようにジコチューを

倒しましょう!」

一同「うん!」

と、勢いよく再び5体のジコチューに向かっていく6人。

く 上空 く

?①「……時間を巻き戻したのかい?」

?②「ああ。まだ我々の仕事は終わっていないからな。それに、

あれはもういいだろう。さっさと小娘達を始末しろ。」

?①「了解。それではコイツでどうかな?」

といいながら?①は再びノートを光らせた。

すると、クロバータワー上空に次元の歪みが出現し、ジコチュー

5体を

全て飲み込んだ。

キュアハート「……えっ!?!」

キュアエース「ジコチューが……吸い込まれた……?」

レジーナ「今度はいったい何なのよ!」

と上空を不安げに見つめる6人の前に、次元の歪みから巨大な光が

放たれた。

「ドオーーーーーッッッッッッッッッッ!!」

一同「キャーーーーーッッ!!」

あまりの衝撃と爆風で吹き飛ばされた6人の前に1匹の怪物が姿を現した。

??? 「グオーーーーーーッッッ!!」

その姿は、全身が鋼のような筋肉で覆われており、色白で、虎のよう
うな

容姿をしており、鋭い爪が生えて身長は3メートルをゆうに超えて
いた。

そして、体からは強力な赤い魔力のオーラが噴き出していた。。

キュアダイヤモンド「何…あの化け物…!?!」

キュアソード「ジコチュー…じゃないよね…?」

レジーナ「何でもいいわよ。1匹になっただから全員で

かかれば楽勝だよ!!」

キュアエース「レジーナ、油断は禁物です…!あの化け物からは

先ほどのジコチューよりも遥かに強い力を感じま

す。。

キュアハート「…相手が何であろうと、あたしたちはプリキュア
だよ!

あの化け物を何とかしなきゃこの町もみんなも守れな

い!」

キュアロゼッタ「はい!」

く 上空 く

?②「次元獣人(ビースト)ガレオンか…これで終わったな。。」

?①「雑魚ども相手にやりすぎたかな?けれど、

もういいかげんに現れてほしいけどね…

さもないとこの町、消しちゃうよ?

実験体ナンバー86!」

謎の2人組が話をしている間、地上ではキュアハート達6人が

新たに出現した次元獣人(ビースト)ガレオンの手により、

絶体絶命の危機にさらされていた。。

く 地上 く

キュアハート「うっ… ううっ… あたしたちの力が

通じないなんて… どうして…。」

キュアソード「つ… 強すぎる…。」

レジーナ「い… 痛い… 痛いよ…。」

キュアエース「まさか… これ程とは…」

キュアダイヤモンド「もう… 体が…。」

キュアロゼッタ「お… お父様…。」

プリキュア達6人は、次元獣人（ビースト）ガレオンに挑んでいったが、

圧倒的な力の差により手も足も出ず蹂躪され、倒れていった…。

キュアハート「… プリキュアは… 例え相手がどんなに強大でも…」

絶対に… あきらめないんだから…！」

と、まともに立つこともままならぬ状態ながら、キュアハートは必死の思いで立ち上がり、こう言った…。そして…

キュアハート「あなたに届け！ マイ・スイート・ハート！」

と次元獣人（ビースト）ガレオンに向けて、

マイ・スイート・ハートを放つが…

ガレオン「グオー… ツツツ!!」

「ドオー… ツツツ」

と、ガレオンは、口から強力な破壊光線を放つと、

マイ・スイート・ハートはあっさりと破られて、

キュアハートに直撃した。

キュアハート「あああああ… ツツツ!!!」

キュアダイヤモンド「ハート… ツツツ!!!」

「ドゴオー… ツツツ!!!」

吹き飛ばされたキュアハートは、壊れたビルの外壁に叩きつけられて、

仰向けに倒れてしまった…。

キュアハート「… そんな… こんなことって…。」

キュアハートは目に涙を浮かべながら無力感に打ちひしがれていた。

ドシン… ドシン… ドシン…

と、次元獣人（ビースト）ガレオンは、キュアハートにとどめを刺すべく歩を進め、再び、破壊光線の発射体制をとる。

「ブーーーーー…」

キュアダイヤモンド「ハート… 逃げて…。」

キュアソード「や… やめて… お願… だから…。」

キュアロゼッタ「マ… マナちゃん…。」

キュアハート「あたし… こんな所で… い… いや… まだ死にたくない…。」

まだやりたいことが… いっぱいいっぱいあるのに…。

お父さん… お母さん… おじいちゃん… みんな…。」

進之介（回想）「相田さん！」

と、絶望感に襲われるキュアハートの脳裏には家族、友達、

プリキュアの仲間や妖精たち、そして最後に、笑顔の進之介の顔が思い浮かぶ…。そして…

キュアハート「… 桑田君… 助けて…。」

と、キュアハートが涙を流しながら呟いたその時、

進之介「やめろー！ー！ー！！」

ガレオン「… …！？」

「バツ!!」

キュアハートにとどめを刺そうとするガレオンの前に、

走って駆け付けた進之介が息を切らせながら

両手を広げて立ちふさがった。

進之介「はあ… はあ… はあ… はあ…。」

キュアハート「桑田… 君…？」

キュアダイヤモンド「桑田君…。」

レジーナ「… 進之介…？」

キュアソード「… あの子… どうして…？」

上空

②「… ようやくお出ましのようだな…。」

①「やれやれ…待ちくたびれたよ…」

さあ、早く『破壊剣（ラグナロク）』を

出して見せろ!!」

く 地上 く

進之介「やめろ!この子に手を出すな!」

キュアエース「そのあなた!何をしているのです、

早く逃げなさい!」

進之介「嫌だ!!」

キュアエース「…えっ?」

進之介「この町に来てせっかくできた友達がやられそうに

なっているのに、見捨てるなんて僕にはできない。

やるなら僕をやれ!!」

キュアハート「く…桑田君…ダメっ…。」

く 上空 く

①「…どうする…?」

②「かまわんさ…やれ!!」

①「了解。それではお望みどりにしてやるよ。

やれ!ガレオン!!」

く 地上 く

ガレオン「グガーーーーーッッ!!」

とガレオンが叫ぶと、口から破壊光線が

進之介の方へと向けて放たれた。

キュアハート「い…嫌ーーーーっ!!!」

進之介「…!!!」

「ピカッ!!バアーーーーーッッッ!!!」

その時、突如、進之介の首飾りが光りだし、

それがバリバリとなつてガレオンの破壊光線を防ぎ、かき消した。

ガレオン「!!!」

進之介「こ!!!…これは…?」

く 上空 く

①「…この反応は…!?!」

?②「ついに始まったか……!!」

く 地上 く

?「……力が欲しいか……?」

進之介「……!!」

く 進之介の思考の中 く

?「汝……力が欲しいか……?」

進之介「……誰?」

ラグナロク「わが名は破壊剣(ラグナロク)… 最強の力を継ぐものなり……」

進之介「最強の……力?」

ラグナロク「汝が力を欲するなら、我と契約せよ…」

さすれば、あの少女達を救う事も容易いだろう……」

進之介「……」

(男性の声)「そうか……」

進之介「えっ!!」

と驚く進之介の隣に、彼によく似た青年の思念体が姿を現す。

進之介「その声は……さっきの……君は誰?」

思念体「俺は君だよ。桑田進之介……」

進之介「君は……僕……?」

思念体「それよりも早く破壊剣(ラグナロク)を!彼女達を助けるには

それしか方法がない!」

進之介「……わかった!!」

ラグナロク「但し、我と契約すれば、汝の命を預かる事となる。」

進之介「僕の命?……どういうこと?」

ラグナロク「力を開放するには我と汝の命を一つにせねばならん。

万が一、我が破壊される、もしくは汝が所有者の資格を

失えば、汝は死ぬ事となる。それでもかまわぬか?」

進之介「……」

思念体「進之介……」

進之介「わかった！契約する！」

思念体「良いのか？」

進之介「… 相田さん達プリキュアはこれまで命を懸けてこの世界を

守ってきたんだ。だから今度は僕が… そんな彼女達と

この世界を守る番だ!!」

と決意の表情で思念体と破壊剣（ラグナロク）に語る進之介。

思念体「進之介… よし！それならば俺も力を貸す！」

進之介「破壊剣（ラグナロク）、僕と… いや、」

進之介・思念体「僕（俺）達と契約だ!!」

ラグナロク「ハツハツハツ！気に入ったぞ小僧共！」

ならば存分に我の力を使え!!」

「カアーーーーーッッッッ」

と、漆黒の光を放つ破壊剣（ラグナロク）、そして…

思念体「進之介…。」

進之介「何？」

思念体「俺はずっと待っていたんだ… 俺の意思を継いでくれる者を…

そして、あの時守れなかったものを今度こそ守れる力を!!」

と言いながら進之介に近づく思念体。

進之介「そうだったんだ… そう言えば、まだ名前、聞いてなかったね。」

シン（思念体）「俺の名はシン・ザ・バーネット。」

後の事は頼んだぞ… 桑田進之介！」

と、シンの思念体が語ると、進之介と同化を果たした。そして…

く クローバータワー周辺 く

「バアーーーーーッッッ!!」

と、進之介から強力な魔力が噴き出し始める。さらに、

破壊剣（ラグナロク）が、漆黒の長剣へと変化し、

進之介の姿も、瞳が銀色に変色し、魔力で精製された黒い衣装と

マントを纏って、破壊剣（ラグナロク）を右手に掴んだ。そして、体から漆黒のオーラが発生して、ついに変身を果たす!!

進之介（変身体）「……………」
その姿を見たプリキュア達6人と、謎の2人組は
驚愕の表情を見せた。

キュアダイヤモンド「…変身…した…？」

キュアソード「…何…あの姿…？」

キュアロゼッタ「…これは…夢…ですか？」

キュアエース「これは…いつたい…？」

レジーナ「…これは…さつき感じた気配だ…」

「やっぱり、気のせいじゃ無かったんだね…。」

キュアハート「…桑田…君…？」

進之介（変身体）「…相田さん…もう大丈夫だから…。」

キュアハート「…えっ？」

進之介（変身体）「すぐに終わらせるよ…。まだ歓迎会、
してもらっていないからね！」

と、笑顔でキュアハートに話す進之介。

キュアハート「……………」

と、未だに目の前の現実を受けとめきれてないでいるキュアハート。

く 上空 く

? ②「…素晴らしい…これで新たな『次元の王候補』の誕生だ

!!

? ①「なかなか良い力じゃないか。それなら小手調べと行こうか
!」

と、再び、ノートを光らせると、地上にジコチュー30体が出現し、
進之介の周りを囲んだ。

く 地上 く

キュアダイヤモンド「…うそ…」

く 地上 く

キュアエース「… 何て強さ…！」

キュアロゼッタ「わたし達が全く敵わなかった相手に…。」

レジーナ「進之介… すごすぎる…！」

と、進之介のあまりの強さに圧倒されるプリキュア達6人。

ガレオン「グオーーーーーーッッッ!!」

と、ガレオンは最期の力を振り絞って立ち上がり、魔力を最大限に高め始める。

「ブオーーーーーーッッ!!」

キュアソード「… ちよつと… あれ…。」

キュアダイヤモンド「… 不味いわね…。」

と、ガレオンから溢れ出る膨大な魔力に表情が青ざめるプリキュア達…。

進之介（変身体）「… それならこつちも!!」

と、言いながら剣を構えると、進之介の足元から魔法陣が現れ、膨大な魔力が放たれると、破壊剣（ラグナロク）が共鳴し、

巨大な光の剣が形成される…。

キュアダイヤモンド「… あれは!?!」

キュアエース「… もう… 何も言うことはありませんね…。」

キュアハート「… 桑田君… 行っけえーっっっ!!」

ガレオン「ウガーーーーーッッッ!!」

「ドオーーーーーーッッ!!」

とガレオンが両手を前にかざすと、すさまじい魔力のエネルギー波が放たれたが…

進之介（変身体）「殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイト）

!!

裁きの鉄槌（オメガ・クロス）!!」

「ゴオーーーーーーッッ!!」

と、巨大な光の剣が勢いよく振り下ろされると、ガレオンのエネルギー波を消滅させ、そのままガレオンに直撃した。

ありがとう… 桑田君…

ウワー…ウワー…ウワー…ッ!!」

と、マナは感謝の言葉を述べると、再び進之介の腕の中で大泣きを始めた…。

進之介「… 相田さん、僕の方こそありがとう。

生きていてくれて嬉しいよ!」

と、進之介が言うと、マナを両腕でそっと抱きしめた…。

六花「… マナ… 良かったね…!」

亜久里「オホン! お取込み中のところ、

申し訳ないのですが…。」

と、後ろから進之介の袖をつかむ亜久里。

進之介「… えっ?」

亜久里「さっきのあなたの力は何ですか?

これはじーっくりとお話を聞く必要が

ありそうですわね…!」

進之介「あはは…。」

と困惑する進之介。

レジーナ「マナばかりズルイ! あたしもギョツて

して! 進之介!」

亜久里「ちよ… ちよつとレジーナ! はしたないことを

言うものではありません!」

レジーナ「何よ! 進之介はあたしのものなんだから

いーじゃん!!」

亜久里「いつからあなたのものになったのですか!」

真琴「(あたしも… 彼にギョツてもらいたいな…。)」

あります「うふふっ、ひとまず一件落着ですわ!」

進之介「それじゃみんな… 帰ろっか…!」

マナ「… うん!!」

と、泣き止んだマナは、進之介に笑顔で返事をした。

そして、進之介達は、帰宅の途につき始めた。

く 上空 く

？① 「…随分と気前が良いじゃないか？」

？② 「これぐらいのご褒美は与えないとな…。」
と言葉を交わす2人組。

どうやら時間を戻したのは『？②』の様である。

？② 「ようやく始まったのだ。我々の悲願の第1歩がな…！」

？① 「そしたら、今日の所は引き上げようか…」

サンプルも使い果たした事だし。」

？② 「そうだな…。ではまた会おう、『実験体ナンバー86』…」

いや、桑田進之介!!」

『？②』はそう言っていると、次元の歪みを出現させて、

『？①』と共に消えていった…。

く 帰り道 く

レジーナ「何だか色々ありすぎたな〜今日1日。」

真琴「ほんとね。」

六花「結局、誰があのだジコチューと化け物を

呼び出したのかしら…。」

あります「今、セバスチャンに調査をさせている所です。

何か分かれば良いのですが…。」

亜久里「…進之介さん、何か心当たりがありますか？」

進之介「ううん、けど、一つだけ言えるのは、僕が

狙いだったんだと思うんだ…。」

マナ「えっ、どうして…？」

進之介「…これのせいかもしれない…。」

と首飾り状態の破壊剣（ラグナロク）を

手に取り見つめる進之介。

レジーナ「やっぱりあたしが感じたとうりだったわね。それ。」

真琴「桑田君、その首飾りの事、教えてくれない？」

進之介「…これは破壊剣（ラグナロク）…最強の力を

受け継ぐ剣なんだって…けど、それ以上の事は

まだわからないんだ…。」

六花「……最強の……力……？」

進之介「これのせいでみんなやこの町を巻き込んでしまつて、

ホントにごめんなさい……。」

マナ「……そんなことないよ！桑田君と破壊剣（ラグナロク）のおかげで
あたし達みんな、助けられたんだよ。ありがとう!!」

進之介「相田さん……。」

マナ「……マナで良いよ……。」

進之介「……えっ？」

マナ「つていうか、これからはあたしの事、マナつて呼んで！

あたしもあなたの事、進之介つて呼ぶから！」

進之介「……。」

マナ「ダメ……かな……？」

と、進之介の両手を握りながらうつむくマナ。

進之介「そんなことないよ……マナ!!」

と、笑顔で答える進之介。

マナ「……！やったあーっ！ありがとう、進之介!!」

と、嬉しそうに進之介に抱きつくマナ。

進之介「ああ、それと、進之介つて言いくいかもしれないから、

『シン』で良いよ!!」

マナ「……じゃあ、シン！これからもよろしくね!!」

と笑顔で進之介に言うマナ。

真琴「したらあたしもそう呼ばせてもらうわ。

ちなみにあたしの事も『まこぴー』つて

呼んでちょうだい!!」

六花「わたしも六花で良いわ。」

ありす「わたしもありすと呼んでくださいね。」

亜久里「わたくしも亜久里でよろしいですわ。」

レジーナ「じゃあ、あたしも『さん』付けはいらなわ。」

六花・ありす・真琴・亜久里・レジーナ「シン!!」

と5人一斉にそう呼ばれる進之介。

進之介「うん。これからもみんな、よろしくね！」

マナ「よーし！じゃあこれから晩ごはんも兼ねて、シンの

歓迎会、やろうよ!!」

六花・ありす・真琴・亜久里・レジーナ「さんせーい!!」

進之介「えっ?これから?良いの?」

マナ「もつつちろんだよ!シンに美味しいオムライスを作っであげるね!」

進之介「そしたら、お言葉に甘えちやおうかな...」

マナ「よーし!けつてーい!そしたらみんな、レッツゴー!!」

と進之介の右手を引き、走り出すマナ。

その後ろから他の5人が追いかける形で、

マナの家へと向かっていった。

そんな進之介達を背後から見つめる眼鏡をかけた

1人の青年がいた...。

謎の青年「... ついに破壊剣(ラグナロク)が覚醒したか...」

これで彼を偉大なる王へと誘う事ができる...。

だがその前に、障害となるものは排除しなければ

ならないな... すまないが、彼女らには

新たな『我が主』の前から消えてもらおうとしようか...!」

第2話

く 誕生!新たな『次元の王候補』!!」 (完)

第3話 　明かされる秘密（前編）

?② 「目覚めろ…。ナンバー86。」

ナンバー86 「…。」

?② 「お前は、王となり、全ての次元を

統べる使命がある…。」

ナンバー86 「???…。」

?① 「何だかこいつも期待できそうに

無いな。」

?② 「だが、この実験体（クローン）が最も

あの男のDNAを濃く受け継いでいるようだ。

後は、あの武器さえ見つければ覚醒する

可能性はある。」

?① 「その肝心の武器は何処にあるのさ?」

?② 「A・D（西暦）次元の何処かに存在している

所までは掴めているが、それ以上の事は

まだ不明だ。」

?① 「試しにA・D（西暦）次元の何処かに

転送するのかい?」

?② 「ああ。もしこの実験体（クローン）に

王の資質があるのなら、必ず武器の方から

現れるはずだ。さあ、行ってくるがいい、

ナンバー86!!」

「ヒューーーン!!」

と、実験体（クローン）ナンバー86を

収容したカプセルが消えて、転送された…。

　　進之介の部屋　　

進之介 「うわーっ!!」

と慌てて飛び起きる進之介。

進之介 「はあ… はあ… はあ… 今のは夢… ?

それとも…。」

く 翌朝 大貝第1中学校 マナ達の教室 く
マナ「みんな、おはよう!!」

男子生徒「おおっ来た来た!!大貝町の

英雄達が!!」

六花「みんな、どうしたの?」

男子生徒「どうしたもこうしたも無いぜ。

どの新聞もトップニュースで

昨日の件を報じているぜ!!」

『プリキュア、またまた世界の危機を救う!!』

『我がドキドキ!プリキュア、万歳!!』

との見出しがおどる各社の新聞をマナ達に

見せるクラスメイト達。

真琴「何だか、照れるわね…。。」

十条「いえいえ、これぐらいの称賛は

当然ですよ剣崎さん!」

レジーナ「あつ、あたしも載ってる。

嬉しいな!!」

二階堂「お前はオマケじゃねーの?レジーナ?」

百田「アニキの言うとうりです!!」

レジーナ「何ですって、おバカさん達?良かったら

あたしがオマケをあげましょうか?

出でよ、ミラクルドラゴングレイブ!」

と、ミラクルドラゴングレイブを呼び出し、

意地悪な表情で刃先を二階堂と百田に

向けるレジーナ。

二階堂「オレ達はジコチューじゃねーぞ!」

百田「ヒイイーツ!」

マナ「レジーナ!そんな事しちやダメだよ!!」

レジーナ「はいはい。マナに免じてカンベンして

あげるわ。感謝しなさい、

おバカさん達?」

二階堂・百田「ありがとうございます。レジーナ様。」
レジーナ「わかればよろしい!!」

二階堂「ふーっ。ところでマナ、昨日あの後、転校生が
血相変えてお前たちの後を追っていったけど、
結局、どうなったんだ?」

マナ「さあ…。?わからないな…。ごめん。」

真琴「あたしも知らないわ。」

二階堂「そうだろうな。大方、道に迷ったんだろ?」

しょうがねえ奴だな。あいつが行った所で
どうにかなるもんでもねーのに。

今度こそビシツと言い聞かせてやらねーとな!

百田「アニキの言うとうりです!」

レジーナ「何よ偉そうに!!シンはね!!」

マナ「レジーナ!!」

レジーナ「あつ、そうだった…。ごめん。」

二階堂「何だよ、変な奴だな。そーいや、転校生は

まだ来てねーのか?」

六花「今朝、みんなで彼の家に行ってみただけど、

誰も居なかったわ。ひよつとしたら

今日はお休みするかもしれないわね。」

二階堂「何だよ、転校2日目でもうサボリか?」

おいマナ、そんな頭が良いだけの

ヒョロイ優男、あんまし相手にしない方が

いいぜ。それじゃな!!」

百田「アニキー待ってー!」

といいながら教室を後にする二階堂と百田。

マナ「……………」

レジーナ「マナ……………」

真琴「…これで良かったの?だって……………」

マナ「…良い訳無いじゃん…。だって…。だってえ……………」

と言いながら、突如、涙をボロボロ流し始めるマナ。

六花「…昨日現れたあの人達ね…。」
マナ「…。」

「昨日の戦いの後」
「ヒューーン!!」

マナ「…!?!」

真琴「何?急に景色が…。」

ありす「一体、何が起きたのですか?」

と、進之介の歓迎会をしようと、マナの家に向かつていく途中、急に景色が変わり、

どこかの空間へ飛ばされたマナ達。そこへ…
謎の青年「あの少年には、これ以上関わらない方が

身の為だよ。」

と言いながら、1人の眼鏡をかけた青年が姿を現す。

白いベレー帽を被っており、白い衣装を纏って、

左手には本のような物を持っていた。

マナ「…誰?」

レイス「私の名はレイス。見てのとうり、

ただの神官だよ。」

真琴「ただの神官?どういう事?」

六花「神様ってこと?」

レジーナ「神様にただも何もあるわけ?」

マナ「それより、シンにはもう関わらない方が

良いってどういう事!?!」

と声を荒げるマナ。

レイス「言葉どうりの意味さ。あの少年、いや、あのお方は

いずれ、新たなる『次元の王』となられる

存在だ。君達のような愚民が気安く傍に

居るべきでは無いという事さ。」

マナ「次元の…王…?」

真琴「何…それ…?」

レジーナ「プロトジコチューみたいなやつ？」

レイス「次元の王は3000年前、数多の次元を力と恐怖で

支配していた最強の王!!そんな小物と

一緒にしないでくれたまえ。」

六花「最強の力を持つ王?もしかして:。」

レイス「君は察しが良いようだね:。そう。

彼の持つ破壊剣(ラグナロク)は、

その次元の王の力を秘めた剣だ。

破壊剣(ラグナロク)の契約者となった彼は

新たな『次元の王候補』の1人となった。」

マナ「:..!？」

ありす「そしたら、先ほどの怪物やジコチュー達が

出現したのもあなたの仕業ですか？」

レイス「さあ?それはどうかな:..。」

と不気味な笑みをありすに向けるレイス。

マナ「そんな事はどうでもいいよ:..。」

亜久里「マナ?」

マナ「あなた、シンをそんな悪の大魔王みたいなのに

するつもりなの!!」

レイス「ならば君に問う。悪とは何だい?」

マナ「愛する心を忘れ、人々や世界を困らせる

存在の事だよ。力と恐怖で支配するって:.

まさに悪じゃん!!」

レジーナ「ついこの間まであたしも、今マナが

言ってた悪者だった:..。けど、マナや

みんなに出会って、本当の愛に気付く事が

出来た。だからこそ、今のあたしがある!」

マナ「レジーナ:..。」

真琴「彼を次元の王とかいうワケのわからないものに

しようとするのはやめてさっさと居なくなつて

ちようだい!!」

レイス「くつくつくつ： あーっはっはっはっ!!」

マナ「何が可笑しいのよ!!」

レイス「いや、如何にも愚か者が言いそうな

台詞だったからついね。。。」

亜久里「愚かですって。。。?」

レイス「そう。私から見れば『愛』など一時の感情が

生み出す幻想。。。次元の平穩を保つには

不要なものだ。必要なものは

『力』と『支配』。

それこそが絶対的な正義!!」

と、両腕を広げながら、そう力説するレイス。

六花「。。。力と支配で生み出されるのは憎しみと

悲しみしかありません。それを正義だと

言うあなたは。。。」

マナ「あたし達の敵だよ!!」

真琴「もう一度言うわ!!シンから手を引いて

今すぐ居なくなつてちようだい!!」

レイス「。。。断れば?」

亜久里「。。。あなたを倒します!!」

レイス「あつはつはつ!おめでたい少女達だ!

次元獣人(ビースト)ガレオンに手も足も

出なかつた君達が私を倒せるとでも?」

良いだろう。身の程というものを

教えてあげようじゃないか!!」

マナ「みんな、いくよ!!」

六花・ありす・真琴・亜久里「うん!!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!ラブリンク!

亜久里「プリキュア!ドレスアップ!」

キュアハート「みなぎる愛!キュアハート!」

キュアダイヤモンド「英知の光!キュアダイヤモンド!

キュアロゼッタ「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

キュアソード「勇気の刃！キュアソード！」
キュアエース「愛の切り札！キュアエース！」
5人「響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア」
レジーナ「出でよ！ミラクルドラゴングレイブ！」
と変身した5人とレジーナが戦闘態勢を取り、
レイスへと向かっていく。
プリキュア5人「はぁーっ！！」
とキュアハート達5人がレイスに向けて一斉に
攻撃を仕掛けるが…

レイス「……。」

「ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！」

と5人の攻撃を涼しい顔で難なくかわしていくレイス。
キュアハート「何で当たらないの!?!」

キュアダイヤモンド「攻撃が読まれている…?」

キュアハート「にしても、この反応速度は異常すぎます！」

レイス「ほらほら、さっきの威勢はどうしたんだい？

まあ、君達愚民が神にそうそう触れられるわけが

ないけどね。」

レジーナ「それなら、これでも受けなさい!!」

「ドーーーーーっ!!」

と、ミラクルドラゴングレイブの刃先から
ビームを放つレジーナだが…

レイス「ほいつ!!」

「シューン..」

と、レイスがビームに触れると、一瞬でかき消された…。

レジーナ「…そんな…。」

「ビュン!!」

レイス「…残念だったね。」

「ドスーーーーッ!!メリメリメリ…。」

レジーナ「!?!?…あ…がつ…ゲボツ…。」

レイスが瞬時にレジーナの前に姿を現すと、

レジーナの腹に強烈な掌底をめり込ませる。

レジーナはあまりの威力に目を見開かせ、

胃液を吐きながら気絶する……。

レイス「はい。まずは1人目。」

キュアハート「よくもレジーナを！許さない！」

と再度、レイスに攻撃を仕掛ける5人だったが……。

レイス「やれやれ……まだ力の差がわからないのか？

なら、仕方がないね！」

と言うと、プリキュア5人に向けて攻撃を仕掛けるレイス。

キュアソード「ぐはあっ!!」

キュアロゼッタ「きゃん!!」

キュアダイヤモンド「うぐうーっ!!」

エース「あうっ!!」

と、キュアハート以外のプリキュアを強烈な攻撃で

瞬時にノックアウトするレイス。

キュアハート「みんな!!くっ……。」

レイス「さあ、残るは君だけだよ。どうする？

お得意の『愛』とやらで私を倒してみるかな？」

キュアハート「なら、見せてあげる！愛を無くした

悲しい神官さん！

マイ・スイート・ハート!!」

と、キュアハートは必殺技のマイ・スイート・ハートを

レイスに向けて放つが……。

レイス「……話にならないね!!」

「ズバッ!!」「シューーン……。」

と、レイスは手刀でマイ・スイート・ハートを

一瞬でバラバラにし、消滅させる……。

キュアハート「……!?ウソ……。」

と、マイ・スイート・ハートが

一瞬で破られた事にショックを受けるキュアハート。

レイス「ひよつとして、これで終わりかい?……。」

「傷つけたのか!!」

レイス「さつきも言っただろう?その少女達は

君の覇道の障害になると。君が王になる為には

消えてもらうべき存在なのさ。」

進之介「そんなの... 知ったことかーっ!!」

「カアーーーーーッ!!」

と、破壊剣（ラグナロク）を解放し、変身を果たす進之介。

レイス「やれやれ... 困ったものだね...。」

進之介（変身体）「魔法剣（アタック・ヴァイト）！白月光（ホワイ
ト・アーク）！」

「パアーーーーーッ!!」

進之介は剣を地面に突き立てた後、白い魔力の光を辺り一面に発生
させ、

キュアハート達6人を回復させた。

キュアダイヤモンド「... 体が...。」

キュアソード「... 治った...?」

レジーナ「... もう痛くない!!」

キュアハート「ありがとう!シン!」

と、回復したキュアハート達6人は進之介の元に集まった。

レイス「お見事!!」「パチパチパチパチ...。」

と、拍手をしながら進之介を称えるレイス。

キュアハート「シン... あの人は...。」

進之介「... わかつてる。みんな、下がってて!」

あの人の相手は僕がする!!」

レイス「... いいだろう。では、レッスンの時間と行こうか!」

と正面を向き合い、対峙する進之介とレイス。

進之介（変身体）「魔法剣（アタック・ヴァイト）！疾風斬（カマイ
タチ）！」

「シュン!!」

と、疾風斬（カマイタチ）を発動させて、レイスに攻撃を仕掛ける
進之介。

だが…

レイス「……。」

「ヒュン！ヒュン！ヒュン！……。」

と、疾風斬（カマイタチ）発動による高速攻撃を難なくかわしているレイス。

キュアエース「ま… また!？」

キュアロゼッタ「彼の攻撃すら当たらないのですか!？」

レジーナ「どうなってるのよ、あれ!？」

キュアハート「シン……。」

進之介（変身体）「… くっ!？」

レイス「なかなかのスピードじゃないか… だがそれでは

私を捉えることはできないよ！」

「ドンッ!!」

進之介（変身体）「うわーっ!!」

「ドゴーーーーーン!!」

進之介の攻撃を完全に見切っていたレイスは、すかさず、カウンター気味の掌底を進之介に当て、その衝撃で進之介は吹き飛ばされる。

進之介（変身体）「ううう… それならこれで！」

魔法剣（アタック・ヴァイト）！大蛇牙（ヨルムンガンド）！

「ボシューーーーーーッ!!」

と、進之介は破壊剣（ラグナロク）に魔力を込めると、

レイスに向かって超高速で剣先を伸ばし、攻撃する。

レイス「無駄だよ！」

「ヒュン!!」

と、剣先をかわすレイスだったが…

「ズガーーーーーン!!」

レイス「!!?」

とレイスはかわしたはずの剣先が、自身の死角から

再び急激に伸びてきた為、とつさにシールドを張ったが、当たった衝撃で吹き飛ばされる。

キュアハート「…当たった!？」

レイス「…確かにかわしたはずだが…？」

進之介(変身体)「もう一度行くよ!!」

「ボシューーーーーーッ!!」

レイス「…。」

「ヒュン!!」とまた剣先を避けるが、

レイス「何!？」

「バシューーーーーーッ!!」「ビシューッ!!」

とまたも避けたはずの剣先が自身の死角から高速で伸びてきた為、反応が遅れたレイスはその斬撃を左腕に受けて、血を流した。

レイス「…そういう事か…。」

レジーナ「やった!!あいつに傷をつけたよ!!」

キュアエース「さすがです…シン!!」

進之介(変身体)「まだまだ行くよ!!」

「ボシューーーーーーッ!!」

と、レイスにめがけて再度、大蛇牙(ヨルムンガンド)を放つ進之介だったが…。

「バキーーーーーッ!!?!!」

進之介(変身体)「!!」

レイス「タネがわかればどうということは無いよ!」

と、向かってくる剣先を左手で受け止め、

そう語るレイス。

レイス「つまり、これは蛇のようなもの。

一度避けても敵に噛みつくまでどこまでも

追ってくる…か。ならば、避けなければ

良いだけの話だよ!!」

「ドーーーーーッ!!」

と、受け止めた剣先を衝撃波で吹き飛ばすレイス。

そして、進之介はその衝撃で大きく態勢を崩した。

進之介(変身体)「うわーーーーーッ!!」

レイス「今度はこちらから行くよ!!」

「ヒュン!!」

と、態勢を崩した進之介に攻撃を仕掛けるレイス。

進之介（変身体）「くっ?!魔法剣（アタック・ヴァイト）!

一点突破（スクライド）!

レイス「甘いよ!!神の右腕!!（ディオス・ランサー）!!」

「ドゴーーーーーン!!バリバリバリバリ。。。」

と、一点突破（スクライド）と神の右腕（ディオス・ランサー）が激しくぶつかり合うが。。。

「バゴーーーーーン!!」

進之介（変身体）「うわーーーーっ!!」

と、一点突破（スクライド）が破られ、神の右腕（ディオス・ランサー）の

直撃を受けてしまった進之介は吹き飛ばされ、倒れてしまう。。。

進之介（変身体）「う。。。うう。。。」

キュアハート「シン!!」

キュアダイヤモンド「あ。。。あの人。。。」

キュアソード「つ。。。強すぎる。。。」

キュアエース「あのシンが。。。手も足も出ないなんて。。。」

と、レイスの圧倒的な強さに驚愕の表情で震える

キュアハート達6人。

進之介（変身体）「く。。。くそっ。。。」

と、剣を地面に突き立てながら、何とか立ち上がる進之介。

レイス「大したものだね。まだ立てるのか?」

進之介（変身体）「こっぴなったら!!」

「バーーーーーンッ!!」

進之介は剣を構え、足元に魔法陣を出現させると、

膨大な魔力を放出して破壊剣（ラグナロク）を

巨大な光の剣へと変化させた。

キュアソード「あ。。。あれは!」

レジーナ「あの虎の化け物を倒した!」

レイス「… ならばこちらも。複製鏡（レプリカ・リフレクション）！」

「バァー………ッ!!」

キュアロゼッタ「えっ……!?」

キュアハート「う……うそっ……。」

レイスは左手を上空へかざし、複製鏡（レプリカ・リフレクション）を発動させると、進之介と同じ巨大な光の剣が現れた。

進之介（変身体）「…… だとしても!!行くよ!!」

殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイト）！

裁きの鉄槌（オメガ・クロス）！

「ゴォー………ッ!!」

進之介は、レイスにめがけて、裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を振り下ろすが……

レイス「…… 裁きの鉄槌（オメガ・クロス）！」

「ゴォー………ッ!!」

とレイスもすかさず、複製鏡（レプリカ・リフレクション）で出現させた裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を振り下ろす。

「ズガァー………ンッ!!」

魔力で圧倒的に勝るレイスの裁きの鉄槌（オメガ・クロス）が進之介の裁きの鉄槌（オメガ・クロス）をあつさり打ち破り、進之介にめがけて振り下ろされた。

そして、すさまじい衝撃と爆風が起こる。

「ドカー………ン!!」

進之介（変身体）「うわ………っ!!」

キュアハート「シ………ン!!」

レイス「……。」

「パチン！」

と裁きの鉄槌（オメガ・クロス）が進之介に直撃する寸前、

レイスが指を鳴らすと、進之介がその場から消え、

レイスのすぐ傍へと転送された。

進之介（変身体）「ううう……。」

驚く進之介とキュアハート達。

進之介「・・・おじさん・・・何で・・・どうして・・・

意味がわからないよ!!」

浩一郎（レイス）「ついに真実を話す時が来たようだね

進之介君・・・心して聞いてくれ。」

進之介「……………」

浩一郎（レイス）「そう・・・あれは、2年前のある日の事だった・・・」

↳ 2年前のとある辺境 ↳

浩一郎（レイス）「・・・破壊剣（ラグナロク）が反応を示したのはこの辺りか・・・

さて、どうしたものか・・・」

と、破壊剣（ラグナロク）が反応を示した場所をしばらく搜索していた

浩一郎（レイス）は、不自然な形で置かれてあった1台のカプセルを
発見する。

浩一郎（レイス）「何だ？このカプセルは・・・中に誰がいる様だ・・・

とりあえず開けてみるか。」

「プシューッ」とレイスがカプセルを開けると、

浩一郎（レイス）「こ・・・これは・・・子供？」

とカプセルの中は小学生程の男の子が全裸で収められていた。

だが、浩一郎（レイス）が呼びかけても、一向に反応を示さない。

浩一郎（レイス）「まるで抜け殻の様だな・・・まあいい。放っておこうか。」

と、浩一郎（レイス）がその場から立ち去ろうとした時、

「ピカーーーーーー?!!ッ!!」

浩一郎（レイス）「!!!!」

と、浩一郎（レイス）が持っていた破壊剣（ラグナロク）が突然、
激しく反応を示し、男の子に向けて光を放った。

そして、破壊剣（ラグナロク）が放った光を浴びた男の子は
目を覚まして起き上がった。

男の子「…ここ…どこ…？」

浩一郎（レイス）「こ…これは…!？」

と起き上がった男の子に近づく浩一郎（レイス）。

男の子「…おじさん…誰…？」

浩一郎（レイス）「まさか…破壊剣（ラグナロク）がこの子供を…？」

と男の子を真剣な眼差しで見つめる浩一郎（レイス）。

浩一郎（レイス）「君…名前は…？」

男の子「…知らない…。」

浩一郎（レイス）「君はなぜ、この中にいたのかな？」

男の子「…わからない…。」

と男の子は浩一郎（レイス）の質問に対して、何もわからない様子で答える。

浩一郎（レイス）「…記憶喪失…とは違うようだね…ならば…」

良かったら、おじさんと一緒に来るかい？」

男の子「えっ？ほんと…？」

浩一郎（レイス）「よし。決まりだ！そしたらそんな恰好ではいけないから

とりあえずこれを着てくれ。」

と男の子に自信が着ていたコートをかける浩一郎（レイス）。

浩一郎（レイス）「おじさんの名前は桑田浩一郎っていうんだ。

そういえば君の名前だけ…そうだ！

『進之介』というのはどうかな？」

男の子「進之介…？うん！僕、進之介がいい!!」

浩一郎（レイス）「よし！今日から君は『桑田進之介』だ！

それじゃ、いこうか？」

進之介「うん！浩一郎おじさん！」

と浩一郎（レイス）は進之介を自身が職員として

働いている研究施設へと進之介を連れていき、世話をする事になった…。

〜 (回想終了) 。

「シューーーーン…」

レイス「…そしてそのまま君を引き取り、

破壊剣(ラグナロク)を与えて、今日に至る…

という訳だ。」

と言いながら、元の姿に戻ったレイス。

進之介「……………」

キュアソード「…シンにそんな過去が……………」

キュアエース「破壊剣(ラグナロク)に選ばれた運命の子供……………」

レジーナ「…シン……………」

キュアハート「…レイスさん…あなたはシンを…

騙っていたんですか……………」

レイス「私は私のするべき事をしただけさ。破壊剣(ラグナロク)が

彼を選んだから私も今日まで彼を育ててきた。

騙されていたと思うかどうかは彼の判断だ……………」

君にとやかく言われる筋合いは無いね！」

キュアハート「…何ですって……………!？」

と、拳を握りしめ、怒りに震えるキュアハート。

進之介「…一つ聞いて良い……………」

レイス「んっ? 何かな?」

進之介「…おじさんが僕を初めて見たとき、

僕は抜け殻の人形の様だったって

さつき言ってたよね……………」

レイス「…その通りだよ。」

進之介「じゃあ…僕は…誰なの……………」

どこから来たの? 教えてよおじさん!!」

レイス「…それは私にもわからない……………」

けど、『彼ら』なら何か知っているんじゃないかな?」

と言いながら上空を見上げると、

レイス「…隠れてないでそろそろ出てきたらどうだい?

お二人さん?」

と言葉を発するレイス。

進之介「…えっ…？」

キュアハート「……？」

と進之介やキュアハート達6人が続いて上空を見上げると、

「シューイー——————ン!!」

と、ステルス能力で姿を隠していた謎の2人組が姿を現す…。

?①「…よくわかったじゃないか…。」

?②「さ~~が~~がだと言っておこうか? 神官レイス…。」

進之介「!!!」

キュアハート「…何?…あの2人…!?!」

ついに進之介とプリキュアの前に出現した謎の2人組…。

果たして彼らの正体は…そして、その目的とは…

第4話 　く明かされる秘密（後編）　く

?① 「・・・よくわかったじゃないか・・・。」

?② 「さぼがだと言っておこうか? 神官レイス・・・。」
進之介「!!!」

キュアハルト「・・・何?・・・あの2人・・・!?!」

そして、姿を現した『?①』と『?②』は、
ゆつくりと地上に降りてくる・・・。

キュアエース「こっちへ近づいてきます・・・。」

キュアソード「・・・くっ!?!」

レジーナ「何よ! やる気なの!?!」

と、プリキュア達6人は警戒態勢を取るも・・・

「ザツザツザツザツザツザツ・・・。」

キュアダイヤモンド「・・・えっ?・・・。」

キュアアロゼッタ「・・・。」

と警戒態勢を取るプリキュア達6人を無視して、
進之介とレイスの元へ歩を進める2人組・・・。

レジーナ「ちよ・・・ちよつと!! あたし達は無視なわけ!?!」

と、憤るレジーナを意に介さず、『?①』・『?②』と

レイスが会話を始める。

レイス「姿を見せてくれた礼を言うよ。ついでに

自己紹介をしてもらえると嬉しいんだが?」

?② 「いいだろう・・・私の名はバイエルン、

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の幹部が1人だ。」

?① 「僕の名はアルト・・・バイエルンと同じ

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の一員さ。」

レイス「アルト君にバイエルン君、そして、

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』か・・・

ごく丁寧な自己紹介、感謝するよ。さて、彼の疑問に答えて

くれる前に再度、礼を言おう。君達のおかげで彼は

破壊剣（ラグナロク）を覚醒させる事ができた。ありがとう。」

バイエルン「礼には及ばんさ…。我々としても、彼に破壊剣（ラグナロク）を

与えてくれた事は感謝しなければならぬからな。」

アルト「おかげで手間が省けたしね…。『サンプル』の実験を行うのにも

丁度良かった。それに…。おびき寄せるのに格好のエサが何匹か居たしね…。」

と後ろを振り返り、冷徹な目でキュアアハート達6人を凝視するアルト。

キュアアハート「…。!?まさか…。」

キュアロゼッタ「あなたの方がジコチューとあの怪物達を!？」

バイエルン「さて…。本題に入ろうか。こうして話するのは初めてだな、

桑田進之介…。」

進之介「あなた達はいったい…?」

バイエルン「さしずめ、君の生みの親…。」といったところかな?」

進之介「!!!?」

レイス「…。やはりね…。」

バイエルン「まずは君自身についてだが…。君は我々がある男の遺伝子から

生み出した新たななる『次元の王』の器にする為の

実験体（クローン）、ナンバー86だ。」

キュアアハート「…。実験体（クローン）!？」

キュアソード「クローンって…。あのクローン人間のこと…?」

キュアダイヤモンド「…。そんな…。」

キュアエース「…。シン…。」

進之介「…。」

アルト「意外だな…。あまり驚かない様だね。」

進之介「…。何となくだけど、そんな気がしてたんだ。

それにある男って、もしかして『シン・ザ・バーネット』の事?」

レイス「…ほう？」

バイエルン「…その通りだ。もしかして、その男の記憶でもあるのか？」

進之介「まだおぼろげだけど…彼の思念体が僕の中に現れて、破壊剣（ラグナロク）と

契約した時に、彼と一つになったんだ。その時に彼の記憶と力を

受け継いだんだと思う…。」

バイエルン「やはり君は、我々が数多く製造した実験体（クローン）の中でも

『シン・ザ・バーネット』のDNAを特に濃く受け継いだよ
うだな…。」

キュアソード「シン・ザ・バーネット…？」

キュアエース「その方がシンのオリジナルの人…。」

キュアハート「けど実験体（クローン）って…人を何だと思ってるの!!」

と怒りを募らせるキュアハートと進之介の正体に驚く他のプリ
キュア達5人…。

アルト「…そしたら、3000年前の出来事は覚えているかな？」
進之介「…!?!うん…。僕…いや、シン・ザ・バーネットは30
00年前、

ミリカや大勢の仲間達と一緒に『次元の王』と戦った…。」

レイス「…。」

バイエルン「そう…そして、その大勢の仲間が『次元の王』の圧倒
的な力により

駆逐され、シン・ザ・バーネットとミリカ・ド・グラン

バニアの

2人だけが残った…。そして、ミリカ・ド・グランバニ

アは

自身の命と引き換えに『次元の王』を封印し、そして死
んだ。」

進之介「… そう… 僕… いや、シンはミリカを守る事が出来な
かった…。」

アルト「そしてその直後… 僕はシン・ザ・バーネットを殺した!!」
キュアハート「!!!」

キュアソード「今… 何て言ったの…?」

キュアロゼッタ「けれどそれは3000年前の出来事のはずなの
に… どういう事ですか?」

キュアダイヤモンド「もしかしたらあの人達は… タイムスリップ
できる能力が

あるのかも…。」

進之介「… !?あなた達がシンを…?」

バイエルン「… そして我々はシン・ザ・バーネットを殺害した後、
その体を

利用して、多くの実験体（クローン）を生み出した。そ
の内の1体が

君という訳だ、桑田進之介。」

進之介「…。」

とバイエルンから語られた衝撃の事実に呆然とする進之介…。

キュアハート「… 殺したってどういう事…?」

アルト「… んっ?」

キュアハート「殺したってどういう事よ!!」

アルト「言葉通りの意味さ。実験体（クローン）を製造するには

オリジナルには死んでもらわなければならないからね。」

キュアロゼッタ「ひ… ひどい… ひどすぎます…。」

キュアダイヤモンド「… 大事な人を失って悲しみに暮れていると
ころを

殺すなんて…。」

キュアハート「あなた達は… 人の命を何だと思ってるのよ!!」

バイエルン「材料だ。」

キュアハート「!!!」

バイエルン「いや、『サンプル』と言うべきかな?我々にとって命な

ど、そこから

より優れたものを生み出す為の肥しに過ぎない。」

キュアソード「…あなた達、ジコチューの何倍をサイテーだわ!!」
アルト「君達人間が他の生物を肥しに生きているのと一緒にさ。」

キュアエース「…確かにわたくし達人間の営みは他の生物の犠牲の上で

成り立っているのは事実です…。ですが、あなた達の様

に 命を命と思わない者と一緒にしないでください!!

あなた達からは命に対する『愛』が微塵も感じられま

せん!!」

レジーナ「そーよ!!そーよ!!」

キュアハート「…もういいよ、エース…レジーナ。」

キュアエース「…えっ?」

レジーナ「…マナ…。」

キュアハート「この人達とあたし達とでは何かが根本的に違う…。」

そんな事を話しても多分、通じないよ…。」

「ザツザツザツ…。」

と、進之介の方に向けて歩を進めるキュアハート…。

進之介「…マナ…。」

キュアハート「シン…ちよつとごめんね…。」

と、キュアハートは首飾りに戻った破壊剣(ラグナロク)を進之介の首から外して、

レイスに渡そうとする…。

レイス「…何の真似だい?」

キュアハート「これ、元々あなたの何でしょう…?返すから

もうこれ以上、シンとは関わらないで!!

彼を悲しませないで!!」

レイス「…。」

キュアハート「それにあなた達もシンを次元の王つてのにするのが目的なんでしょう!?!そんな事はあたしがさせない!!」

シンは誰よりも優しく、誰よりも人を愛する心を
持つてるんだよ!!」

と、アルトとバイエルンにも強い口調で語るキュアハート。

レイス「君…それを返す事がどういう事か、わかかってて発言して
いるのかな?」

バイエルン「彼の生みの親と育ての親に向かって随分な口の利きよ
うだな…。」

まあいい、1つ教えてやろう。彼が破壊剣(ラグナロク)
の所有者の

資格を失ったら…死ぬ事になる。」

キュアハート「…えっ!」

レイス「破壊剣(ラグナロク)が力を解放するには、彼の命と一
つになる必要がある。」

だからそれはもう、彼の命そのものだと言っても良い。」

キュアハート「…本当なの…シン…?」

進之介「うん…破壊剣(ラグナロク)もそう言ってたから…。」

キュアハート「そ…そんな…。」

と、両膝をついて、うなだれるキュアハート…。

進之介「…けど僕は…次元の王になる気はないよ…。」

バイエルン「…!」

レイス「やれやれ…まだそのような事を…。」

アルト「王になる気はない?じゃあ、なぜ君は自分の命を懸けてま
で

破壊剣(ラグナロク)と契約したんだい?」

進之介「…守りたかったから…。」

アルト「…んっ!」

進之介「マナやみんなが危ないと思ったから…この町に来て折角
できた友達を

守りたかった…だから…。」

キュアダイヤモンド「…シン…。」

キュアソード「あやし達の為に…。」

キュアロゼッタ「でも、その為に彼は……。」

アルト「くつくつくつく……アーツハツハツハツハツ!!」

進之介「……。」

キュアハート「何が……何が可笑しいのよ!!」

アルト「これが笑わずにはいられるか!破壊剣(ラグナロク)と契約した理由にしては

あまりにも不純だよ!!己の野心の為ならまだしも、こんな雑魚共を守る為?

君が破壊剣(ラグナロク)と契約して喜んでみれば、とんだ失敗作だった様だね!

バイエルン、こいつはもう見切りをつけて新たな候補を

探した方が良くないか!?

バイエルン「……。」

アルト「……何なら僕が今すぐ消してやろうか?『あの時』みたいに!!」

キュアハート「もう……だまって……。」

アルト「あ?」

キュアハート「もう口を開かないで!!あなただけは……絶対に許さない!!!」

と、怒りが頂点に達したキュアハートはアルトに向けて攻撃を仕掛けるが……

「バァー……バァー……バァー……!!」

アルト「雑魚が……身の程をわきまえろ!!」

と言いながら、右手をかざした瞬間、妖しい光に包まれたキュアハートは

そのまま岩壁や地面に何度も叩きつけられる……。

「ドカン!バキッ!ズドン!グシャ!」

キュアハート「ガハッ!グフッ!ゲホッ!アグッ!」

アルト「お前、もう死ぬよ!!」

「グッ!!」とアルトが右手を握りしめると、キュアハートを包んでいた光の玉が

アルト「…何…だと…」

「ブシャー——————ッ!!!」

と右腕を切り落とされた部分から、大量の血が噴き出した。

バイエルン「…ほう？」

レイス「素晴らしい…素晴らしいじゃないか、我が主よ!!」

と、進之介の豹変ぶりに感嘆の声をあげるレイスとバイエルン。そして…

キュアソード「…うそ…うそよ…あれがシン…なの…?」

キュアエース「何という殺気…まるで別人ですわ…。」

レジーナ「…シン…やめて…怖いよ…。」

と、進之介の豹変した進之介に対して恐怖を感じ、震えながら立ち尽くすプリキュア達…。

アルト「キサマ…調子に乗りすぎだ…いいだろう、今この場で抹殺してやるよ!!」

「ビカー——————ッ!!!」

と、冷酷な目で進之介を睨みつけながら言葉を発すると、アルトの体が光に包まれる…。

進之介（変身体）「死ぬのは…お前の方だ…!!」

「バシュー—————!!」

と進之介はアルトに再び襲いかかり、切りつけるが、剣がアルトの体をすり抜ける。そして…

「バリバリバリバリ!!!」

進之介「!!!」

と今度は進之介の体から光が噴き出し、ダメージを受けて両膝をつく。

アルト「くつくつくつ… あいにく、この姿の僕には斬撃など無意味…。」

僕にはキサマの攻撃など通用しない!!」

「バァ—————ッ」

と今度は切り落とされた右腕が光になり、アルトの所へと戻り、

右腕が再生した。

キュアアロゼツタ「…腕が…。」

キュアダイヤモンド「…再生した…?」

レジーナ「何よ!!反則じゃない、あれ!!」

進之介(変身体)「…それがどうした!!」

「ゴォー………ツッ!!」

と進之介は立ち上がると、再びすさまじい殺気と魔力を放ち、アルトを睨みつける…。

アルト「ならば…これで死ね!失敗作!!」

「ブウ………ン!!」

と、アルトがパワーを高めると、すさまじい光と電流の様なものが発生し、

辺りを吹き飛ばす…。

キュアエース「…何ですか…あのでたらめな力は…?」

キュアソード「シン…もうやめて…こんなの…」

あなたらしくないじゃない…。」

アルト「消えろ!失敗作!『ライデイン・ゲイザー』!!」

「ドォー………ン!!」

と、強力な光の力を纏い、すさまじい速度で進之介に襲いかかるアルト。

進之介(変身体)「魔法剣(アタック・ヴァイト)!疾風斬(カマイタチ)！」

「シュン!!」と襲いかかるアルトに対して、疾風斬(カマイタチ)で応戦しようとする進之介。その時…。

「ピシー………ン!!」と

謎の波動が2人の周辺を通過した。すると…。

進之介(変身体)「……。」

アルト「……。」

キュアエース「…えっ?」

キュアアロゼツタ「…時間が…」

キュアダイヤモンド「…止まった…?」

キュアソード「…あの人の…仕業なの…？」
バイエルン「……………」

と、進之介とアルトが衝突する寸前、バイエルンが2人の時間を止めた。そして、その光景に驚くプリキュア達…。

バイエルン「馬鹿が…大事な実験体（クローン）を壊す気か!?」
と言いながら、時間が止まったアルトを睨むバイエルン。そして…

「ズドーーーーーーン!!!」「ドゴーーーーーーン!!!」

とアルトに向けて衝撃波を放ち、吹き飛ばした。

アルト「…あ…ぐっ…な…何故だ…バイエルン…？」

何故こんな失敗作を…。」

「ザッザッザッザッ……………」

アルト「!?!」

レイス「我が主に向かって失敗作とは許せないな…………。」

とアルトに向けて右手をかざし、攻撃態勢を取るレイス。

バイエルン「神官レイス…そこまでにしてもらおうか…………。」

こんな馬鹿でも、一応私の相棒なのでね…………。」

レイス「へえ…そんなセンチメンタルな感情が君達にもあったのかい？」

まあ、いいだろう。」

とかぎしていた右手を引き、引き下がるレイス。

「パチン!!」「ピシューーーーーーーン!!!」

とバイエルンが指を鳴らすと、止まっていた進之介の時間が動き出した。

進之介（変身体）「…僕は…今まで…何してたの…？」

と先程まで放っていたすさまじい殺気が消えて、元の状態に戻った進之介。

キュアエース「…シン…？」

キュアソード「…元に…戻ったのね…………。」

レジーナ「ふえーん！怖かったよー!…………。」

バイエルン「…戻るぞアルト…………。」

アルト「…くっ!？」

バイエルン「さて、桑田進之介…。王になる気があるまいが、

君はもう、大きなうねりに飲み込まれている事を自覚したほうがいい。」

進之介(変身体)「…どういう事…?」

バイエルン「君の持つ破壊剣(ラグナロク)を狙って、この世界はこれから、

他次元からの様々な脅威に晒される事になるだろう…。」

進之介(変身体)「…!!」

レイス「彼の言う通りだよ、我が主…。君の他にも、

『次元の王候補』は存在する…。その者達が破壊剣(ラグナロク)を

狙ってくるのは当然の事だよ。」

バイエルン「これからの君の選択肢は2つ…。この世界を出て、次元の王となる

道を選ぶか、それともこの世界に居座り、いずれ滅びるのを

足掻きながら待つか…。」

進之介(変身体)「…。」

バイエルン「よく考えてみるのだな…。だが、あまり時間はないぞ?」

何せ既に始まっているのだからな、新たなる『次元の王』の

座を懸けて…『第2次次元大戦』がな!!」

キュアダイヤモンド「…第2次…。」

キュアソード「…次元大戦…?」

キュアロゼッタ「じゃあ、これからわたし達の世界は…。」

バイエルン「では我々はこれで失礼する。君が賢明な選択をする事を祈っている。」

それと、神官レイス…彼は引き続き君に預けよう。
しっかりと彼を

王へと導いてくれたまえ…。」

レイス「…君に言われるまでも無いよ。」

アルト「…せいぜい、途中で死なないように頑張る事だね…。」

だが覚えておけ…。そいつはいずれ僕が抹殺してやる!! 必ずな!!」

バイエルン「…行くぞ、アルト。」

「ビューーーーーッ!!!」

とアルトとバイエルンはそう言い残し、姿を消した…。

進之介(変身体)「はっ!? マナ!」

と進之介は虫の息状態のキュアハートの所へ慌てて駆け寄る。
続いて、他のプリキュア達も集まる。

キュアハート「う…う…う…う…。」

進之介(変身体)「…マナ…マナしっかりと!!」

レジーナ「シン! 早くマナを治して!!」

進之介(変身体)「うん!! わかった!!」

と進之介が破壊剣(ラグナロク)を構えるが、

「シューーン…」「バーーーーッ…」

と、進之介の変身が解けて、元の姿に戻ってしまった…。

進之介「…そんな…。」

キュアソード「…これじゃ…マナを治せないじゃない…。」

キュアダイヤモンド「そんな…それじゃ…マナは…?」

レジーナ「いやだ…いやだよ…マナ…死んじやヤダーーーーッ!!!」

キュアエース「マナ…。」

キュアロゼッタ「…マナちゃん…そんな…そんな事つて…。」

進之介「…ウツ…ウツ…ウツ…ごめんねマナ…ごめんねみんな…。」

ウ…ウワーーーーッ!!!」

と、絶望的な状況に打ちひしがれるプリキュア達。

そして、号泣する進之介……。するとそこへ……

「ザッザッザッ……」

レイス「……どうやら先程の戦闘で、魔力が尽きてしまったようだね。」

キュアダイヤモンド「!?」

キュアソード「……あなた……何しに来たのよ!!」

レイス「随分な言われようだね。このまま彼女が死んでもいいのかい?」

まあ、私としてはかまわないのだが、それでは我が主の士気に

関わりそうなんでね。」

と、キュアハートに向けて、右手をかざすレイス。

レイス「治癒光（ケセラ・セラ）!!」

「パアーーーーー……」

と神秘の光がキュアハートを包み込むと、重症だったキュアハートの体は

みるみる回復していく。

キュアハート「……あれ……あたし……?」

と完全に回復したキュアハートは、そう言いながら起き上がった。

レジーナ「……マナー……ツ!!」

とすかさずキュアハートに抱きつき、涙を流すレジーナ。

キュアソード「マナ……よかった……!!」

キュアダイヤモンド「……ほんとだよ……いつも無茶ばかり

するんだから……。」

キュアロゼッタ「ふえ……ん!! マナちゃ……ん!!」

キュアエース「……でもどうして……あなたはわたくし達を……。」

レイス「……言っただろう? このまま彼女に死なれては

我が主の士気に関わると…… たかが小娘1人の事で

王となる道をあきらめてもらっては困るからね。さて

と……」

レイスはそう言うと、進之介の方に向けて歩き出した。
進之介「おじさん…ありがとう…。」

レイス「礼など必要ないよ…家臣としての当然の務めさ。

ただし、その代わりと云っては何だが、今後

この少女達とは一切、関わらないでもらおうか…

これでわかっただろう？彼女達は君の障害…

いや、それ以下の足手まといにしかないよ…。」

進之介「うん…わかったよおじさん…。」

キュアハート「!?…シン…何言ってるの…?」

キュアソード「…あたし達の聞き間違いだよね、今の言葉…。」

進之介「いや、聞き間違いじゃないよ、僕にはもう関わらないで…。」

レジーナ「…うそ…だよね…シン…うそだと言ってよ!!」

進之介「…さよなら…みんな…。」

とキュアハート達に背を向けて歩き出す進之介…。

キュアダイヤモンド「…本気なの?…シン…」

キュアロゼッタ「…せっかく仲良くなれたのに…。」

キュアハート「…シン…行っちゃダメーっ!!」

と進之介に向かって走り出すキュアハートだったが…

「ピシーーーーー?」

キュアハート「!!!」

とキュアハートの周りに結界が張られ、動きを封じられるキュアハート…。

レイス「…せっかく拾った命だ。もう少し大事にする事を勧めるよ…」

キュアハート、いや、相田マナ君。

それと言い忘れていたが、彼の事は他言無用で願おうか。

もし世間に知られでもしたら、何かと面倒なのでね。」

と、レイスはキュアハートにそう言うと、再び歩き出した。

キュアハート「嫌…嫌だよ…シン…シン…行っちゃヤ
ダーーーーッ!!」

と結界をドンドン叩いて涙を流しながら、進之介を止めようとする
キュアハートだったが……。

進之介「……さよなら…… マナ……。」

「ヒューーーーーー……。」

とキュアハートの止める声も虚しく、進之介とレイスは姿を消し
た……。

と同時に景色が変わり、通常空間へと戻ってきたキュアハート達。
そして、プリキュア達は全員、元の姿に戻った……。

真琴「……シンが……行っちゃった……。」

レジーナ「シンとは……もう会えないの……？」

六花「こんなの……悲しすぎる……。」

ありす「……。」

亜久里「わたくし達が……弱かったせいで……。」

マナ「……シンが……いなくなっちゃった……ウツ……ウ

ワーーーーーッ!!!」

と、進之介がいなくなったのを痛感しながら泣き叫ぶマナ……。

そして、進之介との別れで悲しみに暮れる一同であった……。

～現在 マナ達の教室 ～

マナ「うつ……ヒツク……。」

と涙を流しながらうつむくマナ……。

六花「あのレイスって人から言われた通り、シンの事は

もちろん秘密にするけど……。」

真琴「……神官レイス……次元の監視者（ダイダロス・アイ）……。

あの人達、とんでもない強さだったわ……今のあたし達では、

とても敵わない……。生きて帰れたのが不思議なくらい

ね……。」

レジーナ「……昨日の虎の化け物といい、あの3人といい、他の世
界には

あんな化け物がゴロゴロいるのかな……？」

六花『第2次次元大戦』か……シンはこれからあんな化け物みたい
な人達と

戦っていく事になるのよね…。」

真琴「でも… あたし達が出来ることなんて…。」

マナ「… あるよ!!」

六花「… えっ!？」

マナ「だったら、あたし達があの人達に負けなくらいに強くなればいい!!」

そして、シンと一緒に戦う!!」

真琴「マナ… 立ち直ったのはいいけど…。」

六花「あなたは昨日、3度も命を落としかけてるのよ…。」

レジーナ「どこから来るの… その自信…?」

マナ「落ちるところまで落ちた!泣くだけ泣いた!後はここから這い上がって

行くだけ!みんな… これから頑張ろっ!よーし!!」

「パシーン!!」

と自身の両頬に両手でビンタし、気合を入れるマナ。

六花「以前もそんな事やってたわねマナ…。」

真琴「けどそこからあたし達はジコチューに勝つことができた。」

レジーナ「うん!!あたしも頑張るよマナ!!」

と、自信を失っていた六花達に対して、マナはみんなを鼓舞し、立ち直らせた。

六花「でも、強くなるってどうしたら…。」

真琴「何かいい方法があるの?マナ?」

マナ「無いよ!!」

レジーナ「えーっ!っ!!」

マナ「だからみんなで力を合わせるの!!プリキュアの誓いその6、

『みんなで力を合わせれば不可能はない!!』だよ!!」

六花「そうか… そうだよね!!」

真琴「あたし達はこれまで何度も窮地に立たされてきたけど…

みんなで乗り越えてきた!!」

レジーナ「あたしはプリキュアじゃないけど、マナの

その誓いにさんせーい!!」

マナ「それじゃあ決まり!!学校が終わったらみんなでシンの家に行ってみようよ!!」

六花・真琴・レジーナ「うん!!」

と4人が改めて思いを強くしたその時…

「ドカン!ドカン!ドカン!ドカン!ドカン!ドカン!」

マナ「!!!な…何!?!」

六花「!!…爆発音…!?!」

真琴「またジコチューなの?」

レジーナ「それとも昨日のあの3人…?」

と教室の窓から4人が外を見ると、大貝町の大半が

火の海になっており、逃げまどう人々を目撃する…。

町人男性「うわーうわーうわー!!!」

町人女性「きゃーうわーうわー!!!」

六花「ひ…ひどい!!!」

真琴「誰がこんな事を…。」

マナ「…許せない!!」

と憤るマナ達の前に、数百人はいるであろう兵士の大軍と、

1人の大男が姿を現した。

「ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!」

レジーナ「な…何?あの人達…?」

六花「見たところ、人間みたいだけど…。」

真琴「人間だろうとジコチューだろうとよくもあやし達の町を!!」

マナ「…あの大きな男の人が兵隊さん達をまとめてるみた

い…。」

?「いいか、者共!!どんな手段を使っても構わん!!必ず探し出せ…

破壊剣(ラグナロク)を!!」

六花「えっ!?!」

真琴「破壊剣(ラグナロク)…!?!」

マナ「まさかあの人達…シンを狙っているの!?!」

と、突如、大貝町を襲撃した謎の軍隊…彼らはいったい何者なのか?

そして、破壊剣（ラグナロク）を狙う目的とは…？
そしてマナ達『ドキドキ！プリキュア』は、謎の軍隊に対して
いかにして立ち向かうのか… いよいよ新たなる『次元の王』を
めぐる戦いの火蓋が切つて落とされる事になった…。

？①「… よくわかったじゃないか…。」

？②「さぼがだと言つておこうか？神官レイス…。」

進之介「!!!」

キュアハルト「… 何？… あの2人…!？」

そして、姿を現した『？①』と『？②』は、

ゆつくりと地上に降りてくる…。

キュアエース「こっちへ近づいてきます…。」

キュアソード「… くっ!？」

レジーナ「何よ！やる気なの!？」

と、プリキュア達6人は警戒態勢を取るも…

「ザッザッザッザッザッザッ…。」

キュアダイヤモンド「… えっ？…。」

キュアロゼッタ「…。」

と警戒態勢を取るプリキュア達6人を無視して、

進之介とレイスの元へ歩を進める2人組…。

レジーナ「ちよ… ちよつと!!あたし達は無視なわけ!？」

と、憤るレジーナを意に介さず、『？①』・『？②』と

レイスが会話を始める。

レイス「姿を見せてくれた礼を言うよ。ついでに

自己紹介してもらえると嬉しいんだが？」

？②「いいだろう… 私の名はバイエルン、

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の幹部が1人だ。」

？①「僕の名はアルト… バイエルンと同じ

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の一員さ。」

レイス「アルト君にバイエルン君、そして、

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』か…

ご丁寧な自己紹介、感謝するよ。さて、彼の疑問に答えてくれる前に再度、礼を言おう。君達のおかげで彼は

破壊剣（ラグナロク）を覚醒させる事ができた。ありがとう。」
バイエルン「礼には及ばんさ…。我々としても、彼に破壊剣（ラグナロク）を

与えてくれた事は感謝しなければならぬからな。」

アルト「おかげで手間が省けたしね…。『サンプル』の実験を行うのにも

丁度良かった。それに…。おびき寄せるのに格好のエサが何匹か居たしね…。」

と後ろを振り返り、冷徹な目でキュアハート達6人を凝視するアルト。

キュアハート「…!?!まさか…。」

キュアロゼッタ「あなた方がジコチューとあの怪物達を!?!」

バイエルン「さて…。本題に入ろうか。こうして話をするのは初めてだな、

桑田進之介…。」

進之介「あなた達はいつたい…?」

バイエルン「さしずめ、君の生みの親…と…といったところかな?」

進之介「!!!?」

レイス「…やはりね…。」

バイエルン「まずは君自身についてだが…。君は我々がある男の遺伝子から

生み出した新たなる『次元の王』の器にする為の

実験体（クローン）、ナンバー86だ。」

キュアハート「…実験体（クローン）!?!」

キュアソード「クローンって…。あのクローン人間のこと…?」

キュアダイヤモンド「…そんな…。」

キュアエース「…シン…。」

進之介「…。」

アルト「意外だな…。あまり驚かない様だね。」

進之介「…何となくだけど、そんな気がしてたんだ。

それにある男って、もしかして『シン・ザ・バーネット』の事？」

レイス「…ほう？」

バイエルン「…その通りだ。もしかして、その男の記憶でもあるのか？」

進之介「まだおぼろげだけど…彼の思念体が僕の中に現れて、破壊剣（ラグナロク）と

契約した時に、彼と一つになったんだ。その時に彼の記憶と力を

受け継いだんだと思う…。」

バイエルン「やはり君は、我々が数多く製造した実験体（クローン）の中でも

『シン・ザ・バーネット』のDNAを特に濃く受け継いだよ
うだな…。」

キュアソード「シン・ザ・バーネット…？」

キュアエース「その方がシンのオリジナルの人…。」

キュアハート「けど実験体（クローン）って…人を何だと思ってるの!!」

と怒りを募らせるキュアハートと進之介の正体に驚く他のプリ
キュア達5人…。」

アルト「…そしたら、3000年前の出来事は覚えているかな？」

進之介「…!? うん…。」 僕…いや、シン・ザ・バーネットは30
00年前、

ミリカや大勢の仲間達と一緒に『次元の王』と戦った…。」

レイス「…。」

バイエルン「そう…そして、その大勢の仲間が『次元の王』の圧倒
的な力により

駆逐され、シン・ザ・バーネットとミリカ・ド・グラン

バニアの

2人だけが残った…。」 そして、ミリカ・ド・グランバニ

アは

自身の命と引き換えに『次元の王』を封印し、そして死んだ。」

進之介「… そう… 僕… いや、シンはミリカを守る事が出来なかった…。」

アルト「そしてその直後… 僕はシン・ザ・バーネットを殺した!!」

キュアハート「!!!」

キュアソード「今!… 何て言ったの…?」

キュアロゼッタ「けれどそれは3000年前の出来事のはずなのに… どういう事ですか?」

キュアダイヤモンド「もしかしたらあの人達は… タイムスリップできる能力があるのかも…。」

進之介「… !?あなた達がシンを…?」

バイエルン「… そして我々はシン・ザ・バーネットを殺害した後、その体を

利用して、多くの実験体（クローン）を生み出した。その内の1体が

君という訳だ、桑田進之介。」

進之介「…。」

とバイエルンから語られた衝撃の事実には呆然とする進之介…。「new page」

キュアハート「… 殺したってどういう事…?」

アルト「… んっ?」

キュアハート「殺したってどういう事よ!!」

アルト「言葉通りの意味さ。実験体（クローン）を製造するには

オリジナルには死んでもらわなければならないからね。」

キュアロゼッタ「ひ… ひどい… ひどすぎます…。」

キュアダイヤモンド「… 大事な人を失って悲しみに暮れているところを

殺すなんて…。」

キュアハート「あなた達は…人の命を何だと思ってるのよ!!」
バイエルン「材料だ。」

キュアハート「!!!」
バイエルン「いや、『サンプル』と言うべきかな?我々にとって命など、そこから

より優れたものを生み出す為の肥しに過ぎない。」

キュアソード「: あなた達、ジコチューの何倍をサイテーだわ!!」
アルト「君達人間が他の生物を肥しに生きているのと一緒に。」

キュアエース「: 確かにわたくし達人間の営みは他の生物の犠牲の上で

成り立っているのは事実です…。ですが、あなた達のように
命を命と思わない者と一緒にしないでください!!

あなた達からは命に対する『愛』が微塵も感じられま

せん!!」

レジーナ「そーよ!!そーよ!!」

キュアハート「: もういいよ、エース: レジーナ:。」

キュアエース「: えっ?」

レジーナ「: マナ:。」

キュアハート「この人達とあたし達とでは何かが根本的に違う:。」

そんな事を話しても多分、通じないよ:。」

「ザッザッザッ:。」

と、進之介の方に向けて歩を進めるキュアハート:。」

進之介「: マナ:。」

キュアハート「シン: ちょっとごめんね:。」

と、キュアハートは首飾りに戻った破壊剣(ラグナロク)を進之介の首から外して、

レイスに渡そうとする:。」

レイス「: 何の真似だい?」

キュアハート「これ、元々あなたの何でしょう: ?返すから

もうこれ以上、シンとは関わらないで!!

彼を悲しませないで!!」

レイス「……。」

キュアハート「それにあなた達もシンを次元の王つてのにするのが目的なんでしよう!? そんな事はあたしがさせない!! シンは誰よりも優しく、誰よりも人を愛する心を持つてるんだよ!!」

と、アルトとバイエルンにも強い口調で語るキュアハート。

レイス「君……それを返す事がどういう事か、わかかってて発言しているのかな?」

バイエルン「彼の生みの親と育ての親に向かって随分な口の利きようだな……。」

まあいい、1つ教えてやろう。彼が破壊剣(ラグナロク)の所有者の

資格を失ったら……死ぬ事になる。」

キュアハート「……えっ!？」

レイス「破壊剣(ラグナロク)が力を解放するには、彼の命と一つになる必要がある。」

だからそれはもう、彼の命そのものだと言っても良い。」

キュアハート「……本当なの……シン……?」

進之介「うん……破壊剣(ラグナロク)もそう言ってたから……。」

キュアハート「そ……そんな……。」

と、両膝をついて、うなだれるキュアハート……。

進之介「……けど僕は……次元の王になる気はないよ……。」

バイエルン「……!？」

レイス「やれやれ……まだそのような事を……。」

アルト「王になる気はない? じゃあ、なぜ君は自分の命を懸けてまで

破壊剣(ラグナロク)と契約したんだい?」

進之介「……守りたかったから……。」

アルト「……んっ!？」

進之介「マナやみんなが危ないと思ったから……この町に来て折角

できた友達を

守りたかった……だから……」

キュアダイヤモンド「……シン……」

キュアソード「あたし達の為に……」

キュアロゼッタ「でも、その為に彼は……」

アルト「くつくつくつく……アーツハツハツハツ!!!」

進之介「……」

キュアハート「何が……何が可笑しいのよ!!」

アルト「これが笑わずにはいられるか！破壊剣（ラグナロク）と契約した理由にしては

あまりにも不純だよ!!己の野心の為ならまだしも、こんな雑魚共を守る為？

君が破壊剣（ラグナロク）と契約して喜んでみれば、とんだ失敗作だった様だね！

バイエルン、こいつはもう見切りをつけて新たな候補を探した方が良いんじゃないか!？」

バイエルン「……」

アルト「……何なら僕が今すぐ消してやろうか？『あの時』みたい
に!!」

キュアハート「もう……だまって……」

アルト「あ？」

キュアハート「もう口を開かないで!!あなただけは……絶対に許さない!!!」

と、怒りが頂点に達したキュアハートはアルトに向けて攻撃を仕掛けるが……

「バァー……バァー……バァー!!!」

アルト「雑魚が……身の程をわきまえろ!!」

と言いながら、右手をかざした瞬間、妖しい光に包まれたキュアハートは

そのまま岩壁や地面に何度も叩きつけられる……。

「ドカン！バキッ！ズドン！グシャ！」

アルト「?… 何だい?その目は… 僕を誰だと…」

「シュバー!!!」

アルト「!!!」

と、進之介はすさまじい速度でアルトに襲いかかり、右腕を切り落とす。!!!

アルト「… 何… だと…」

「ブシャー………ツ!!!」

と右腕を切り落とされた部分から、大量の血が噴き出した。

バイエルン「… ほう?」

レイス「素晴らしい… 素晴らしいじゃないか、我が主よ!!」

と、進之介の豹変ぶりに感嘆の声をあげるレイスとバイエルン。そして…

キュアソード「… うそ… うそよ… あれがシン… なの… ?」

キュアエース「何という殺気… まるで別人ですわ…」

レジーナ「… シン… やめて… 怖いよ…」

と、進之介の豹変した進之介に対して恐怖を感じ、震えながら立ち尽くすプリキュア達…

アルト「キサマ… 調子に乗りすぎだ… いいだろう、今この場で抹殺してやるよ!!」

「ビカー………ン!!!」

と、冷酷な目で進之介を睨みつけながら言葉を発すると、

アルトの体が光に包まれる…

進之介（変身体）「死ぬのは… お前の方だ… !!」

「バシュー………ン!!」

と進之介はアルトに再び襲いかかり、切りつけるが、

剣がアルトの体をすり抜ける。そして…

「バリバリバリバリ!!!」

進之介「!!!」

と今度は進之介の体から光が噴き出し、ダメージを受けて両膝をつく。

アルト「くつくつくつ… あいにく、この姿の僕には斬撃など無意味…。」

僕にはキサマの攻撃など通用しない!!」

「バァー…ツツ」

と今度は切り落とされた右腕が光になり、アルトの所へと戻り、右腕が再生した。

キュアロゼツタ「…腕が…。」

キュアダイヤモンド「…再生した…?」

レジーナ「何よ!!反則じゃない、あれ!!」

進之介(変身体)「…それがどうした!!」

「ゴォー…ツツ!!!」

と進之介は立ち上がると、再びすさまじい殺気と魔力を放ち、アルトを睨みつける…。

アルト「ならば…これで死ね!失敗作!!」

「ブウ…ツツ!!!」

と、アルトがパワーを高めると、すさまじい光と電流の様なものが発生し、

辺りを吹き飛ばす…。

キュアエース「…何ですか…あのでたらめな力は…?」

キュアソード「シン…もうやめて…こんなの…」

あなたらしくないじゃない…。」

アルト「消えろ!失敗作!『ライデイン・ゲイザー』!!」

「ドォー…ツツ!!!」

と、強力な光の力を纏い、すさまじい速度で進之介に襲いかかるアルト。

進之介(変身体)「魔法剣(アタック・ヴァイト)!疾風斬(カマイタチ)!」

「シュン!!」と襲いかかるアルトに対して、疾風斬(カマイタチ)で応戦しようとする進之介。その時…。

「ピシ…ツツ!!!」と

謎の波動が2人の周辺を通過した。すると…。

進之介（変身体）「……………」

アルト「……………」

キュアエース「…えっ？」

キュアロゼッタ「…時間が…」

キュアダイヤモンド「…止まった…？」

キュアソード「…あの人の…仕業なの…？」

バイエルン「……………」

と、進之介とアルトが衝突する寸前、バイエルンが2人の時間を止めた。そして、その光景に驚くプリキュア達…。

バイエルン「馬鹿が… 大事な実験体（クローン）を壊す気か!？」
と言いながら、時間が止まったアルトを睨むバイエルン。そして…

「ズドーーーーーッーン!!!」「ドゴーーーーーッーン!!!」

とアルトに向けて衝撃波を放ち、吹き飛ばした。

アルト「…あ…ぐっ…な…何故だ…バイエルン…？」

何故こんな失敗作を…。」

「ザッザッザッザッ…」

アルト「!？」

レイス「我が主に向かって失敗作とは許せないな…。」

とアルトに向けて右手をかざし、攻撃態勢を取るレイス。

バイエルン「神官レイス… そこまでにしてもらおうか…。」

こんな馬鹿でも、一応私の相棒なのでね…。」

レイス「へえ… そんなセンチメンタルな感情が君達にもあったのかい？」

まあ、いいだろう。」

とかざしていた右手を引き、引き下がるレイス。

「パチン!!」「ピシーーーーーーッーン!!!」

とバイエルンが指を鳴らすと、止まっていた進之介の時間が動き出した。

進之介（変身体）「…僕は…今まで…何してたの…？」

と先程まで放っていたすさまじい殺気が消えて、元の状態に戻った

進之介。

キュアエース「…シン…？」

キュアソード「…元に…戻ったのね…。」

レジーナ「ふえーん！怖かったよー！…。」

バイエルン「…戻るぞアルト…。」

アルト「…くっ!？」

バイエルン「さて、桑田進之介…。王になる気があるまいが、

君はもう、大きなうねりに飲み込まれている事を自覚したほうがいい。」

進之介（変身体）「…どういう事…？」

バイエルン「君の持つ破壊剣（ラグナロク）を狙って、この世界はこれから、

他次元からの様々な脅威に晒される事になるだろう…。」

進之介（変身体）「…!？」

レイス「彼の言う通りだよ、我が主…。君の他にも、

『次元の王候補』は存在する…。その者達が破壊剣（ラグナロク）を

狙ってくるのは当然の事だよ。」

バイエルン「これからの君の選択肢は2つ…。この世界を出て、次元の王となる

道を選ぶか、それともこの世界に居座り、いずれ滅びるのを

足掻きながら待つか…。」

進之介（変身体）「…。」

バイエルン「よく考えてみる事だな…。だが、あまり時間はないぞ？

の
何せ既に始まっているのだからな、新たなる『次元の王』

座を懸けて…『第2次次元大戦』がな!!」

キュアダイヤモンド「… 第2次…」

キュアソード「… 次元大戦…？」

キュアロゼッタ「じゃあ、これからわたし達の世界は…」

バイエルン「では我々はこれで失礼する。君が賢明な選択をする事を祈っている。

それと、神官レイス… 彼は引き続き君に預けよう。しつかりと彼を

王へと導いてくれたまえ…。」

レイス「… 君に言われるまでも無いよ。」

アルト「… せいぜい、途中で死なないように頑張る事だね…。」

だが覚えておけ… そいつはいずれ僕が抹殺してやる!! 必ずな!!」

バイエルン「… 行くぞ、アルト。」

「ヒューーーーーーッ!!!」

とアルトとバイエルンはそう言い残し、姿を消した…。「new page」

進之介(変身体)「はっ!? マナ!？」

と進之介は虫の息状態のキュアハートの所へ慌てて駆け寄る。

続いて、他のプリキュア達も集まる。

キュアハート「う… う… う… う…。」

進之介(変身体)「… マナ… マナしつかりして!!」

レジーナ「シン! 早くマナを治して!!」

進之介(変身体)「うん!! わかった!!」

と進之介が破壊剣(ラグナロク)を構えるが、

「シューーン…」 「バァー… ツ…」

と、進之介の変身が解けて、元の姿に戻ってしまった…。

進之介「… そんな…。」

キュアソード「… これじゃ… マナを治せないじゃない…。」

キュアダイヤモンド「そんな… それじゃ… マナは…？」

レジーナ「いやだ… いやだよ… マナ… 死んじやダー… ツ!!!」

キュアエース「マナ……………」

キュアロゼッタ「………… マナちゃん………… そんな………… そんな事つて…………」

進之介「………… ウツ………… ウツ………… ウツ………… ごめんねマナ………… ごめんねみんな…………」

ウ………… ウワァ……………ツ!!!

と、絶望的な状況に打ちひしがれるプリキュア達。

そして、号泣する進之介…………。するとそこへ…………

「ザッザッザッ…………」

レイス「………… どうやら先程の戦闘で、魔力が尽きてしまったようだね。」

キュアダイヤモンド「!?」

キュアソード「………… あなた………… 何しに来たのよ!!!」

レイス「随分な言われようだね。このまま彼女が死んでもいいのかい?」

まあ、私としてはかまわないのだが、それでは我が主の士気に

関わりそうなんでね。」

と、キュアハートに向けて、右手をかざすレイス。

レイス「治癒光（ケセラ・セラ）!!!」

「パァ……………ツ」

と神秘の光がキュアハートを包み込むと、重症だったキュアハートの体は

みるみる回復していく。

キュアハート「………… あれ………… あたし…………?」

と完全に回復したキュアハートは、そう言いながら起き上がった。

レジーナ「………… マナー…………ツ!!!」

とすかさずキュアハートに抱きつき、涙を流すレジーナ。

キュアソード「マナ………… よかった…………!!」

キュアダイヤモンド「………… ほんとだよ………… いつも無茶ばかり

するんだから…………。」

キュアロゼッタ「ふえーん!! マナちゃーん!!」

キュアエース「…でもどうして…あなたはわたくし達を…。」

レイス「…言っただろう? このまま彼女に死なれては

我が主の士気に関わると… たかが小娘1人の事で

王となる道をあきらめてもらっては困るからね。さて

と…。」

レイスはそう言うと、進之介の方に向けて歩き出した。

進之介「おじさん…ありがとう…。」

レイス「礼など必要ないよ…家臣としての当然の務めさ。

ただし、その代わりといつては何だが、今後

この少女達とは一切、関わらないでもらおうか…

これでわかっただろう? 彼女達は君の障害…

いや、それ以下の足手まといにしかないよ…。」

進之介「うん…わかったよおじさん…。」

キュアハート「!?…シン…何言ってるの…?」

キュアソード「…あたし達の聞き間違いだよね、今の言葉…。」

進之介「いや、聞き間違いじゃないよ、僕にはもう関わらない

で…。」

レジーナ「…うそ…だよね…シン…うそだと言ってよ!!」

進之介「…さよなら…みんな…。」

とキュアハート達に背を向けて歩き出す進之介…。

キュアダイヤモンド「…本気なの?…シン…」

キュアロゼッタ「…せっかく仲良くなれたのに…。」

キュアハート「…シン…行っちゃダメーん!!」

と進之介に向かって走り出すキュアハートだったが…

「ピシーーーーーん!!」

キュアハート「!!!?」

とキュアハートの周りに結界が張られ、動きを封じられるキュア

ハート…。

レイス「…せっかく拾った命だ。もう少し大事にする事を勧める

よ…。」

キュアハート、いや、相田マナ君。

それと言い忘れていたが、彼の事は他言無用で願おうか。
もし世間に知られでもしたら、何かと面倒なのでね。」

と、レイスはキュアハートにそう言うと、再び歩き出した。

キュアハート「嫌…嫌だよ…シン…シン…行っちゃヤ
ダーーーーッ!!」

と結界をドンドン叩いて涙を流しながら、進之介を止めようとする
キュアハートだったが…。

進之介「…さよなら…マナ…。」

「ヒューーーーーー…。」

とキュアハートの止める声も虚しく、進之介とレイスは姿を消し
た…。

と同時に景色が変わり、通常空間へと戻ってきたキュアハート達。
そして、プリキュア達は全員、元の姿に戻った…。

真琴「…シンが…行っちゃった…。」

レジーナ「シンとは…もう会えないの…?」

六花「こんなの…悲しすぎる…。」

ありす「…。」

亜久里「わたくし達が…弱かったせいで…。」

マナ「…シンが…いなくなっちゃった…ウツ…ウ
ワーーーーッ!!!」

と、進之介がいなくなったのを痛感しながら泣き叫ぶマナ…。

そして、進之介との別れで悲しみに暮れる一同であった…。「ne
w page」

～現在 マナ達の教室 ～

マナ「うつ…ヒック…。」

と涙を流しながらうつむくマナ…。

六花「あのレイスって人から言われた通り、シンの事は

もちろん秘密にするけど…。」

真琴「…神官レイス…次元の監視者(ダイダロス・アイ)…。」

あの人達、とんでもない強さだったわ…今のあたし達では、

とても敵わない……。生きて帰れたのが不思議なくらいね……。」

レジーナ「……昨日の虎の化け物といい、あの3人といい、他の世界には

あんな化け物がゴロゴロいるのかな……?」

六花『第2次次元大戦』か……。シンはこれからあんな化け物みたいな人達と

戦っていく事になるのよね……。」

真琴「でも……。あたし達が出来ることなんて……。」

マナ「……あるよ!!」

六花「……えっ!？」

マナ「だったら、あたし達があの人達に負けなくらいに強くなればいい!!」

そして、シンと一緒に戦う!!」

真琴「マナ……。立ち直ったのはいいけど……。」

六花「あなたは昨日、3度も命を落としかけてるのよ……。」

レジーナ「どこから来るの……。その自信……?」

マナ「落ちるところまで落ちた!泣くだけ泣いた!後はここから這い上がって

行くだけ!みんな……。これから頑張ろっ!よーし!!」

「パシーン!!」

と自身の両頬に両手でビンタし、気合を入れるマナ。

六花「以前もそんな事やってたわねマナ……。」

真琴「けどそこからあたし達はジコチューに勝つことができた。」

レジーナ「うん!!あたしも頑張るよマナ!!」

と、自信を失っていた六花達に対して、マナはみんなを鼓舞し、立ち直らせた。

六花「でも、強くなるってどうしたら……。」

真琴「何かいい方法があるの?マナ?」

マナ「無いよ!!」

レジーナ「えーっっっ!!」

マナ「だからみんなで力を合わせるの!!プリキュアの誓いその6、
『みんなで力を合わせれば不可能はない!!』だよ!!」

六花「そうか... そうだよね!!」

真琴「あたし達はこれまで何度も窮地に立たされてきたけど...

みんなで乗り越えてきた!!」

レジーナ「あたしはプリキュアじゃないけど、マナの

その誓いにさんせい!!」

マナ「それじゃあ決まり!!学校が終わったらみんなでシンの家に

行ってみようよ!!」

六花・真琴・レジーナ「うん!!」

と4人が改めて思いを強くしたその時...

「ドカン!!ドカン!!ドカン!!ドカン!!ドカン!!」

マナ「!!!な... 何?」

六花「!!... 爆発音... !?」

真琴「またジコチューなの?」

レジーナ「それとも昨日のあの3人... ?」

と教室の窓から4人が外を見ると、大貝町の大半が

火の海になっており、逃げまどう人々を目撃する...

町人男性「うわーーーーーっ!!!」

町人女性「きゃーーーーーっ!!!」

六花「ひ... ひどい!!!」

真琴「誰がこんな事を...」

マナ「... 許せない!!」

と憤るマナ達の前に、数百人はいるであろう兵士の大軍と、

1人の大男が姿を現した。

「ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!」

レジーナ「な... 何?あの人達... ?」

六花「見たところ、人間みたいだけど...」

真琴「人間だろうとジコチューだろうとよくもあたし達の町を!!」

マナ「... あの大きな男の人が兵隊さん達をまとめてるみた

い...」

？「いいか、者共!!どんな手段を使っても構わん!!必ず探し出せ..

破壊剣（ラグナロク）を!!」

六花「えっ!？」

真琴「破壊剣（ラグナロク）...!？」

マナ「まさかあの人達...シンを狙っているの!？」

と、突如、大貝町を襲撃した謎の軍隊...彼らはいったい何者なのか？

そして、破壊剣（ラグナロク）を狙う目的とは...？

そしてマナ達『ドキドキ！プリキュア』は、謎の軍隊に対していかにして立ち向かうのか...いよいよ新たなる『次元の王』をめぐる戦いの火蓋が切って落とされる事になった...。

【オリジナル設定】

・ 神官レイス（男）（年齢不詳）（オリジナル）

3000年前に『神々の集団（カタストロフィー）』の一員として

『次元の王』に仕えていた神官。白いおかつぱ頭で、伊達眼鏡を

かけており、白いベレー帽を被って白い衣装を着用しているのが特徴である。

次元大戦終結後は、異世界を転々としながら『次元の王』の復活を目論んでいたが、その過程で、破壊剣（ラグナロク）を入手した為、行動理念を『次元の王』の復活から新たなる『次元の王』の擁立へと切り替える。その後、破壊剣（ラグナロク）の導きにより3000年後のA・D次元第3世界へ転移してきたのを機に姿を変えて、

『桑田浩一郎』と名乗り、破壊剣（ラグナロク）の契約者を探す為、とある研究施設に職員として忍び込み、

潜入捜査を開始する。そしてある日、『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』

によって送り込まれた実験体（クローン）ナンバー86を発見するが、

「抜け殻の人形の様」だった為、1度は放棄しようとするが、破壊剣（ラグナロク）の力のより目覚めたのをきっかけに、

『桑田進之介』と名付けて彼を引き取り、破壊剣（ラグナロク）を与えた。

そして、進之介が破壊剣（ラグナロク）の契約者となったのを機に、彼を新たな主と認定し、家臣として仕えて『次元の王』へ導こうと決める。

次元の平穏を保つ為には、『強大な力による支配』こそが必要で、それ以外の感情は不要と考えている。

その為、『みなぎる愛』のプリキュアであるキュアハートを始めとする

『ドキドキ・プリキュア』のメンバーを進之介が王へとなる為の障害になると

判断し、彼女達を進之介の傍から引き離そうと当初は対話を試みる

が、進之介を『次元の王』へとする事に猛反発された上、自身との考え

が相知れなかった為、最後は戦う事になったが、プリキュア達を圧倒する。

その後、進之介の生みの親でもある『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の

バイエルンとアルトに遭遇。互いに進之介を新たな『次元の王』へと

擁立するという考えの元に、2人とは利害関係となる。そして、アルトの攻撃により、虫の息状態だったキュアハートを

「進之介とはもう関わらない」との条件と引き換えに完全回復させ、プリキュア達を進之介から引き離す事に成功した。

戦闘力は圧倒的に高く、敵を光に包み込んで焼却する「灼熱光（ヒカリ・アレ）」や、

敵の能力を魔力の鏡で映し出し、同じ技を繰り出す「複製鏡（レプリカ・リフレクション）」、

右腕に魔力を溜め突撃し、敵を貫く「神の右腕（ディオス・ランサー）」、

対象者のダメージを完全回復させる「治癒光（ケセラ・セラ）」などの様々な

魔法や技を使いこなす。尚、敵からの攻撃を完全回避できる能力である、

「絶対領域（マスター・エリア）」の使い手でもある。

又、色々な次元を自由に行き来する事が可能な魔力のゲートを発生させる

能力もある。

・アルト（男）（年齢不詳）（オリジナル）

『?①』の正体。『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の一員である。緑色の髪をしていて、スリム体型であり、中性的な顔立ちが特徴の青年である。普段は『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の、全身がロイヤル・ブルーの制服を着用している。性格は、基本おとなしく、バイエルンの命令にも忠実であるが、根は冷酷かつ冷酷で、自身又は組織の目的の為なら、誰であろうが利用し、必要ならば容赦なく排除する。

当初は進之介が破壊剣（ラグナロク）と契約した事に喜んでいたが、契約した動機に不純を感じた事と、キョアハートを死ぬ寸前まで追い込んだ際、進之介の逆鱗に触れて、

右腕を切り落とされた事から、彼に対して憎しみを抱くようになり、その後、進之介を「失敗作」と呼び、いずれは抹殺しようと考えてるようになった。戦闘力も高く、光系主体の能力で

戦闘を行う。又、自身を光の姿に変え、敵の物理攻撃を無効化したり、攻撃してきた相手に逆にダメージを負わせる事も可能である。

・バイエルン（男）（年齢不詳）（オリジナル）

『?②』の正体。『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の一員であり、幹部の1人でもある。黒いロングヘアーで、パーマがか

かつて

いるのが特徴の男性である。普段はアルトと同じく『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』

の、全身がロイヤル・ブルーの制服を着用している。性格は冷静沈着で

頭脳明晰、そして、進之介（実験体ナンバー86）の生みの親でもある。

進之介が（ラグナロク）と契約した後に姿を現し、進之介の過去と誕生の秘密を

彼に話す。そして、進之介を倒そうとしたアルトを制圧して彼を守り、

育ての親である神官レイスに引き続き進之介を預ける事で、レイスとは

利害関係となった。その後しばらくは、進之介の行動を見守る事になるが、

その目的や行動は未だに謎に包まれている…。

又、時間や空間を自由に操る能力を持ち、対象者の時間を止めたり巻き戻したり出来る他、空間を自由に操り、過去や未来へと

タイムスリップしたり、他の次元や異世界を自由に行き来する事が可能である。

・次元の監視者（ダイダロス・アイ）

アルトやバイエルンが所属する組織。『次元大戦』終結後に次元のパワーバランスの維持と、

平穏を保つ為に設立されたと言われているが、多くが謎に包まれている。

第5話 く激突！プリキュアVSレグルス帝国軍く

くクローバータワー周辺く

犬山まな「ちよつと…せつかくクローバータワーに

遊びに来たのに、何よこの騒ぎ！」

鬼太郎「父さん、町で暴れているのは人間…でしようか？
目玉おやじ「どうやら、そのようじやのう。」

ねこ娘「で、どうするの鬼太郎？このまま放っておいたら

町にどんどん被害が出るわよ!!」

犬山まな「ねこ姉さんの言う通りだよ鬼太郎、

何とかしてあげて!!」

鬼太郎「…相手は人間だけど仕方ない…行きますよ

父さん、ねこ娘!!まな、君は何処かに

隠れているんだ。」

犬山まな「うん!!」

ねこ娘「わかったわ鬼太郎！」

鬼太郎「よし、行くぞ！」

と鬼太郎とねこ娘は町で暴れているレグルス兵に

向かって攻撃を仕掛ける。

レグルス兵「な…何だ貴様らは！これでも喰らえ！」

「ビューーーン!!」とレグルス兵は指からビームを

放つが、鬼太郎とねこ娘はそれを難なくかわし、

鬼太郎「髪の毛針!!」「ビビビビビビビツ!!」

ねこ娘「うにゃーっ!!」「ズバズバズバツ!!」

レグルス兵①「うわーっ!!」

レグルス兵②「ぐわーっ!!」

と鬼太郎は髪の毛針、ねこ娘はするどい爪でレグルス兵を

次々と倒していく。

レグルス兵「怯むな！相手はたった2人だ！数で押し込め!!」

「ビビビビビビビッ!!」

と多くのレグルス兵が鬼太郎とねこ娘に向かって再びビームを放

つも。

鬼太郎「ならば・・・体内電気!!」「バリバリバリバリバリ!!!」
レグルス兵①「ぐわーーーーーっ!!!」
レグルス兵②「ぎやあーーーーーっ!!!」

と、鬼太郎は体内電気を放ち、レグルス兵のビームをかき消して、多数のレグルス兵を気絶させた。

レグルス兵「ぼ・・・馬鹿な・・・。」「ドサドサドサドサ・・・」

鬼太郎「ふう・・・この辺りの人間達は片付いたみたいですけど・・・。」「

ねこ娘「何者なの?この人間達・・・」

目玉おやじ「何やら特殊な能力を持った人間達の様じゃの。」

犬山まな「鬼太郎ー!!ねこ姉さー!!」

とレグルス兵が倒されると、犬山まなが姿をみせ、鬼太郎と

ねこ娘の所へ合流した。

「ドカンドカンドカンドカーーーーーン!!!」

ねこ娘「な・・・何!?!」

目玉おやじ「どうやら、何処かで戦ってる者がいるようじゃの・・・。」「

鬼太郎「あちらの方向みたいですね・・・。」「

犬山まな「あそこは・・・たしか中学校がある所よ!!」

ねこ娘「そんな所で誰が・・・。」「

犬山まな「あつ、もしかしたらプリキュアが戦っているのかも!!」

ねこ娘「ああ、そう言えば、ここはプリキュアがいる町だったわ

ね・・・。」「

鬼太郎「プリキュア?」

犬山まな「プリキュアってね、ジコチューっていう怪物達から世界の危機を

救った女の子達なの。わたしと年が同じくらいの女の子達に変身して

戦うんだよ!!!」

鬼太郎「・・・ジコチュー?父さん、ご存知ですか?・・・。」「

目玉おやじ「確か、人間の負の感情から生み出される化け物だと

聞いた事があるのう…。」

鬼太郎「妖怪と似たようなものですね…。」

ねこ娘「どうする鬼太郎？加勢に行ってみる？

噂のプリキュアに会えるかもしれないわよ。」

犬山まな「わたし、プリキュアに会ってみたい!!」

鬼太郎「危険だ！まなは何処かに隠れてるんだ！」

犬山まな「えーっ！いいじゃん、会いたい会いたい!!」

目玉おやじ「まあ、良いではないか鬼太郎、何事にも興味を持つことは

良いことじゃぞ。」

鬼太郎「父さんがそう言われるのでしたら仕方ない…

ねこ娘、まなを守ってあげてくれ。」

ねこ娘「わかったわ。それじゃ行きましようか！」

と、大貝第一中学校に向かおうとした鬼太郎達に、気絶していた

レグルス兵が立ち上がり、再び襲いかかろうとする…

レグルス兵「…調子に乗るなよガキ共… パージ!!」

「ガシャーンーン!!」

と身に着けていた鎧の様な物を切り離し、軽装になったレグルス兵。

ねこ娘「何よ、まだやる気!?だったら相手になるわよ!!」

と鋭い爪を両手から伸ばし、戦闘態勢をとるねこ娘。

レグルス兵「アクセル・アップ!!」

「シュン!!」とレグルス兵が消えた瞬間…

「ドボォーッ!!」「メリメリメリッ…。」

とレグルス兵のボディーパーがねこ娘の腹にめり込んだ。

ねこ娘「あ… がはっ…」

と、目を見開き、苦しむねこ娘…。

鬼太郎「ねこ娘!!」

犬山まな「ねこ姉さん!!」

目玉おやじ「今、何が起きたんじゃ!？」

レグルス兵「まだまだまだあーっ!!」

「シユン!!」「ドカッ!バキッ!グシャ!ドスッ!ボコオッ!」

とその後、すさまじい高速移動による攻撃に蹂躪されるねこ娘…
ねこ娘「あああああーっ!!うう…鬼太郎…」

サツ…」

と攻撃を受け続けたねこ娘はついに倒れてしまった…。

鬼太郎「ねこ娘!!くそっ、よくも!!リモコン下駄!!」「ヒユン!ヒユン!」

とりモコン下駄をレグルス兵に向けて放つが、アクセル・アツプによる高速移動で

かわされ、逆に攻撃を受け続ける鬼太郎…。

鬼太郎「うっ…がっ…ぐっ…」「ガクン!!」

と、ガードはしているものの、執拗な攻撃にダメージが蓄積されていき、

ついには両膝をついてしまう鬼太郎…。

犬山まな「鬼太郎!!」

目玉おやじ「いかん!!」

レグルス兵「終わりだ、死ねーっ!!」

犬山まな「鬼太郎ーっ!!」

さくら「螺旋(スパイラル)!!」「ヒューーっ!!」

レグルス兵「な…何だあー!」

と突如、螺旋状の物体が出現し、レグルス兵を中に閉じ込めた。

さくら「小狼(シャオラン)君!!」

小狼「雷帝招来(らいていしょうらい)!!」「バリバリバリバリ
!!!」

レグルス兵「ぐわーっ!!」「ドサツ…」

と小狼が放った電撃の直撃を受けたレグルス兵はそのまま倒れた。

さくら「大丈夫ですか?」

鬼太郎「あ…ありがとう…君達は?」

さくら「わたし。木之本桜といいます。

カードキャプターをしています!

そして、この男の子は、李・小狼(リ・シャオラン)君です

!!

小狼「よろしく…。」

鬼太郎「カード…。キャプター…。？」

犬山まな「…。プリキュアじゃないよね…。？」

ケロベロス「ふっふっふっ、プリキュアなんて、わいの見込んだ

カードキャプターさくらに比べたら月とスツポンみた

いなもんや!!」

さくら「ケロちゃん!!それ良い過ぎ!!」

目玉おやじ「どうやら、普通の人間ではなさそうじゃの…。それに

その黄色いの、お主は妖怪かの？」

ケロベロス「何やてーっ!!このウルトラスーパープリティーな

封印の獣ケロちゃんを妖怪なんかと一緒にすなーっ!!」

犬山まな「ウルトラスーパープリティーって…。」

さくら「…。ごめんなさい!!ケロちゃんに悪気はないんで

す…。」

目玉おやじ「まあ、元気があつて良いではないか。」

小狼「ところで、どうする桜?あっちの方で戦闘があつてるみたい

だぞ…。」

さくら「行こう!こんな乱暴な人達、放っておけないよ!!」

ケロベロス「よっしゃー!したら行くでー!!」

鬼太郎「父さん、僕も行きます!!」

目玉おやじ「そうじゃな。」

ねこ娘「…。あたしも行くわ…。」

と、ダメージを負いながらも何とか立ち上がり、そう言うねこ娘…

犬山まな「ねこ姉さん…。大丈夫なの!?!」

ねこ娘「こんなのかすり傷よ…。そんなやわな身体してないわ!!」

さくら「したら、みんなで力を合わせて戦いましょう!よろしく

お願いします、

鬼太郎さん!ねこ娘さん!」

鬼太郎「うん。」

ねこ娘「ええ!!」

鬼太郎「そしたら、ねこ娘、桜ちゃん、小狼君、行くぞ!!」
さくら「はい!!」

小狼「ああっ!!」

ケロベロス「こちらっ！ワイを忘れるなっ!!」

と、鬼太郎とさくら達は、急いで大貝第一中学校へと向かっていった。その頃…

く大貝第一中学校く

キュアソード「閃け！ホーリーソード!!」 「ズバズバズバツ!!」

キュアダイヤモンド「煌めきなさい！トウインクルダイヤモンド
!!」 「ババババツ!!」

レジーナ「これでも受けなさい!!ミラクルドラゴングレイブ!!」

「ドーン!!」

レグルス兵①「うわーーーーっ!!」

レグルス兵②「ぐわーーーーっ!!」

レグルス兵③「うおーーーーっ!!」

と、マナ達はプリキュアに変身し、襲い掛かるレグルス兵達を次々と倒していく。

レグルス兵「こ…こいつら…こうなったら！パージ!!」 「ガ
シャーン!!」

「アクセル・アップ!!」

「シユン!!」と、着用していた鎧の様な物を切り離し、アクセル・アツ
プで

プリキュア達に襲い掛かるが…

キュアハート「何よ、そんな動き!!プリキュア！ハートダイナマイ
ト!!」

「ドドドドドドドツツ!!」

と、キュアハートの掛け声と共に、ハート型のエネルギー弾がレグ
ルス兵達を包み込み、

爆発する。

レグルス兵④「うひよーーーーっ!!!」

レグルス兵⑤「あひーーーん!!!」
レグルス兵⑥「ラブブラーーブ!!!」

とハートダイナマイトを受けたレグルス兵達は、目をハートの形にさせながら、

次々と倒れていった。

キュアハート「愛を忘れた悲しい兵隊さん達、このキュアハートが
あなた達のドキドキ取り戻してみせる!」

と、両手でハートの形を作りながら、いつもの口上を述べるキュアハート。

レグルス兵⑦「ひひーーん!!!」

レグルス兵⑧「あはーーん!!!」

レグルス兵⑨「キュンキュンキューン!!!」

とキュアハートが振りまく愛を受けたレグルス兵達は、先程やられた兵達と同じく、目をハートの形をさせ、ドキドキしながら倒れていった。

キュアダイヤモンド「もうハートつたら、愛を振りまき過ぎ!!」

キュアハート「えへへー。」とそこへ、

レグルス兵「ぐわっ!!」「ぎゃっ!!」

と遅れて、キュアロゼッタとキュアエースも合流し、レグルス兵を倒していく。

キュアロゼッタ「遅れてすみません!!」

キュアエース「戦況はこちらが優勢の様ですわね。」

キュアソード「でも油断は禁物よ!敵はまだ大勢いるわ!!」

レジーナ「わかってるわよ!」

キュアハート「それじゃみんな、行くよ!!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・レジーナ「うん!!」

と、残っているレグルス兵達に対して、攻撃を仕掛けるキュアハート達6人。

上空

バイエルン「レグルス帝国軍か...もうかぎつけて来たか。」

アルト「早速、厄介な連中に目をつけられたね。

まあ、奴らの情報網は僕たち程じゃないけど、全次元の中
も

指折りだからね。」

バイエルン「しかし、昨日の少女達もなかなか頑張っている様
だ
な。」

アルト「昨日ボロ負けして、何か吹っ切れたみたいだね。

それともただの馬鹿の集まりなのか……。」

バイエルン「それにあの大男、ブル・ドーザか……隊長格が直々に
お出ましとはな。」

アルト「とはいっても三將軍（ゼネラーレ）に成りきれなかった二
流
だ
ろ
う
？

僕たちの敵じゃないね!!」

バイエルン「確かにそうだが、今の桑田進之介にとっては格好の物
差
し
に

なるだろう。見物ではあるな……。」

アルト「早く出てこいよ失敗作……でないと右腕が疼くじゃない
か……!!」

バイエルン「……。」

く 地上 く

レグルス兵「うわーっーっ!!」「ドーっーっーん!!!」

キュアソード「これで下っ端は片付いたわ!!」

と、数百人はいたであろうレグルス兵をほぼ全員倒したキュアハ
ー
ト
達
。

キュアハート達「……。」

二階堂「す……すげえ……!!」

百田「さすがですね、アニキ!!」

十条「さすがはプリキュア！我々の英雄です!!」

キュアエース「……残るはあなた達だけです!!」

と、キュアエースの視線の先には、隊長の大男『ブル・ドーザ』と
副隊長の女性『ローリー』に上級兵士の『シャベル』、『レークン』が

いた。

シャベル「…情けない奴らだ…。」

レークン「ギャハハハハ!!! まあ、雑魚だからしょうがねーんじゃね?」

ブル・ドーザ「破壊剣（ラグナロク）はまだ見つからんのか!？」

ローリー「只今、調査中です。それと報告が…。」

ブル・ドーザ「何だ!？」

ローリー「町の中心部で活動していた兵達ですが… 何者かによって全員

倒された模様です…。」

ブル・ドーザ「何だど!?! もしかして、破壊剣（ラグナロク）の契約者か!?!」

ローリー「いえ… どうやら、女子供数名に倒された模様です。」

ブル・ドーザ「ぬわにー!?! 女子供にだど!?! それでも栄光ある我がらが

レグルス軍の精鋭達か!！」

レジーナ「精鋭って言う割には大した事無かったけど?」

キュアソード「どうやら、シンが相手をするまでも無いみたいね、

あたし達で追い返しましょう!!」

キュアハート「うん!! シンはあたし達が絶対に守る!!」

数百人のレグルス兵を退けて、ついに幹部達との激突する事になった

キュアハート達。果たして大貝町の運命は… そして、進之介は…

第6話 　　く　集う戦士たち　　く

キュアロゼッタ「町の方は、誰かに助けてもらった様ですね。」
レジーナ「もしかして、シンかな？」

キュアハート「ううん、たぶん違うかな…シンだったら

真っ先にここにきていると思う。あの隊長とか

いう人もいるんだし…。」

キュアソード「そうか…そうだよね…。」

キュアエース「さああなた達、どうするのですか!？」

シャベル「…もう勝った気でのいるのか？」

レークン「ヒヤハハハハハ!!とんだ間抜けだねアイツ!!」

ローリー「隊長…?」

ブル・ドーザ「よし、キサマら!徹底的にやれ!!破壊剣(ラグナロク)は

後からでも構わん!!」

レークン「了解!!ヒヤハハハハハ!!」

シャベル「任務了解…目標を駆逐する!!」

ローリー「それでは参ります!!」「バー…ツ!!」

と、ローリー、シャベル、レークンの3人がプリキュア達に
一斉に攻撃を仕掛ける。

キュアエース「はあ…っ!!」

「バシ…っ!!」

ローリー「…!!」

キュアエースはローリーと…

レークン「ケケケケケ!!死ね…っ!!」

「ガキ…っ!!」

キュアソード「あなたの相手はあたしよ!!」

キュアソードはレークンと…

シャベル「…破壊する!!」「ドドドドドド!!」

キュアダイヤモンド「焔めきなさい!トウインクルダイヤモンド
!」

キュアソード「…くっ!!」

と、キュアソードとレークンが対峙すると、斬撃の応酬を始めたが、キュアソードが押されていた…。

キュアソード「それなら…閃け！ホーリーソード!!」「バ
アーーーー!!」

レークン「ムダムダムダーツ!!死剣（デス・ソード）!!」「バババ
ババババ!!!」

と、ホーリーソードに対して、レークンは死剣（デス・ソード）を
繰り出し、

ホーリーソードを弾き飛ばして、キュアソードに直撃した。

キュアソード「キャーーーーーッ!!」「バタツ…。」

と、レークンの死剣（デス・ソード）をまともに受けて
全身が傷だらけになり、倒れてしまうキュアソード…。

キュアソード「あ…う…。」

レークン「さーて遊びは終わりだ…何処から切り刻んでやろうか
な

お嬢ちゃん？ヒヤハハハハハハハハ!!」

と、右手に持つ剣を舌で舐めまわしながら語るレークン。

キュアソード「…気持ち悪いわね…変態!!」そして…

シャベル「弾連射（マグナム・ブラスト）!!」「ドドドドドドドド」

キュアダイヤモンド「くっ…!!」

シャベル「逃げてばかりでは勝てんぞ!!」

キュアダイヤモンド「それなら！プリキュア！ダイヤモンドシャ
ワー！」

「ゴオオオオオオーッ!!」

と、キュアダイヤモンドはシャベルへ向けて、猛烈な吹雪を放つ
が…

シャベル「弾爆発（マグナム・バースト）!!」

「ブオオオオオオオーン!!」

と、シャベルが放った「弾爆発（マグナム・バースト）のすさまじ
い熱量により、

ダイヤモンドシャワーはかき消されて、キュアダイヤモンドに直撃した。

「ドーーーーーッ!!!」

キュアダイヤモンド「あーーーーーッ!!!」
「ド
サッ……」

と、弾爆発（マグナム・バースト）の直撃を受けたキュアダイヤモンドは

大ダメージを負い、倒れてしまった……。

キュアダイヤモンド「あ……あ……う……」

シャベル「……残念だったな……」
「ジャキッ!!」

と右手に持つ特殊な銃をキュアダイヤモンドに向けるシャベル。

と、いずれも大苦戦を強いられるキュアダイヤモンド、キュアソ
ド、

キュアエースの3人であった……。

キュアロゼッタ「ダイヤモンド：ソード… エース……」

レジーナ「あの3人なら大丈夫だよ!!」

キュアハート「うん、そうだね! あたし達はこの人を!!」

ブル・ドーザ「……去れ……」

レジーナ「は?」

ブル・ドーザ「去れと言っている…… 吾輩の目的は破壊剣（ラグナ

ロク）のみ……」

弱きお前達を倒した所で、何の手柄にもならぬ。」

キュアハート「あなた達がシンを狙ってるんだったらあたし達は戦
う!

そっちこそ立ち去りなさい!!」
「バシューッ!!」

とキュアハートはブル・ドーザの右足にキックを見舞うが、ビクと
もしない……。

キュアハート「な……何なのこの人…… 体がものすごく固い……」

キュアロゼッタ「はあーーーーっ!!」
「バキーン!!」

と続けてキュアロゼッタもパンチを打ち込むが……

キュアロゼッタ「……痛ったーーーーーい!!!」

ブル・ドーザ「…無駄だ！」

レジーナ「だったらみんなで行こう!!」

キュアハート「うん!!行くわよ!!トリプルキーーーーーック!!」

と、ハート、ロゼッタ、レジーナは3人同時に攻撃するが…

ブル・ドーザ「無駄だと言っておろう!!」「ゴオオーーーーーッ!!」

キュアハート「かつ…」

ロゼッタ「きゃあ!!」

レジーナ「あーーーーっ!!」

と、今度はブル・ドーザの反撃を受けて吹き飛ばされる3人…

「ドオーーーーーッ!!」

レジーナ「痛ったー!!なんて馬鹿力なのよ…。」

キュアロゼッタ「あの人には、生半可な攻撃は通用しません…。」

キュアハート「それでもやらなきゃ…シンが狙われてるんだから

絶対に負けれないよ!!」

ブル・ドーザ「威勢だけはいいようだな…ならば!!正拳波（フル

コンタクト!!）」

と、ブル・ドーザは右手の拳を握りしめ、気を高め始めると、

正拳突きのような構えから、すさまじい威力の拳圧を放ち、3人を

襲った。

「ゴオオーーーーーッ!!」

キュアロゼッタ「プリキュア!ロゼッタリフレクション!!」

「バキーーーーーッ!!」

とその拳圧をロゼッタが中心となり、食い止めようとする3人。だ

が…

「ピキピキピキピキ…。」

とロゼッタリフレクションにヒビが入っていき、破られそうにな

る。

キュアハート「…ダメ!ここで破られたら学校が…!」

と耐える3人の後ろには中学校がある。食い止められなかったら

校舎の崩壊を意味していた…。

キュアロゼッタ「もう…ダメ…。」

ケロベロス「何やと小娘!?このスーパーウルトラプリティイーな

封印の獣ケロちゃんに向かって何がぬいぐるみや!!」

レジーナ「はあ!?どこからどう見てもしやべるぬいぐるみじゃない!!」

ケロベロス「何やてーっ!!」

キュアハート「レジーナ!それと、ケロちゃんだっけ?

けんかしてる場合じゃないよ..。」

さくら「ご..ごめんなさい!!えーつと、ひよつとして、プリキュアさんですか?」

キュアハート「うん!そうだよ!!あたしはみなぎる愛のプリキュア、

キュアハート!!よろしくね!さくらちゃん!!」

さくら「はい!!」

知世「わたくしもいますわ!!」

さくら「知世ちゃん!無事で良かった!!」

知世「当然ですわ!さくらちゃんの活躍をバッチリ収める為なら、

どんな危険があろうともお供いたしますわ!!」

とビデオカメラでさくらを撮影しながら語る知世。

さくら「ほえーっ!!」

レジーナ「何だか、緊張感ないわね..。」

キュアロゼッタ「ふふつ、でもいけそうな気がしますわ!」

さくら「知世ちゃん、危ないから隠れてて!」

知世「はい!ご武運をお祈りいたしますわ!」

といいながら、物陰に隠れていく知世。

キュアハート「よし!!したら反撃開始だよみんな!!」

ロゼッタ・レジーナ「うん!!」

さくら「はい!!」

ブル・ドーズ「..。」

レークン「ギャハハハ!!隊長、何しくじってんすか!!

けど、こっちは確実に..。」「チャキツ..」

とキュアソードに剣を突き当てるレークン。

レークン「死ねー！ー！ー！ー！！」

キュアソード「…くっ…!?」

ねこ娘「うたやー！ー！ー！！」「シャキーン！！」
レークン「!!!」

とキュアソードにとどめを刺そうとしたレークンに向かって、
鋭い爪で襲い掛かるねこ娘。だが、レークンはすかさず回避し、
キュアソードから離れた。

ねこ娘「あんた、大丈夫!？」

キュアソード「な…何とかね…ありがとう!」

とねこ娘に礼を言いながらなんとか立ち上がるキュアソード。

ねこ娘「礼ならあいつを倒してからよ。やれる?」

キュアソード「当然でしょ!あたしは勇気の刃のプリキュア、キュ
アソードよ!!」

犬山まな「す…すごい!ねこ姉さんとプリキュアが

一緒に戦うなんて…。」

と、ねこ娘とキュアソードの共演を離れたところから見て
感動するまな。一方…

シャベル「…終わりだ!」「ブー！ー！ー！ー！！」

キュアダイヤモンド「…うっ…。」

小狼「火神招来!!」「ブオー！ー！ー！ー！！」

シャベル「ぐおっ!」

と小狼が発動させた炎の魔法を受けるシャベル。

小狼「おい、大丈夫か!？」

キュアダイヤモンド「あ…ありがとう…あなたは?」

小狼「…李小狼(リ・シャオラン)だ。そんな事より、

戦えそうか?」

キュアダイヤモンド「もちろんよ!あたしは英知の光のプリキュ
ア、

キュアダイヤモンドよ!」

小狼「構えろ!来るぞ!!」

キュアダイヤモンド「はい!!」

と、小狼とキュアダイヤモンドはそのままタッグを組んで、シャベルへと立ち向かう事となった。そして…

ローリー「…もうお終いですか?」

キュアエース「…くっ…うう…。」

と、その後、ローリーの猛攻撃を受けて、仰向けに倒れてしまったキュアエース。

ローリー「ならば、これで終わりにしましょう…」

シックス・コマンド奥義「…」

「ブーーーーーッーン!!!」

とローリーは左手に気を集中させると、すさまじい光と熱が発生する。

ローリー「滅掌底(バスター・フィンガー)!!」

「ドーーーーーッーン!!!」

とローリーに左手から、すさまじい威力の気功波が

キュアエースに向けて放たれた。

「ゴオオーーーーッ!!!」

キュアロゼッタ「…エース!」

レジーナ「何してんのよ!」

キュアハート「亜久里ちゃんーーーーん!!」

鬼太郎「霊毛ちゃんちゃんこ!!」「バシーーーーーン」

ローリー「何!!!」

と鬼太郎が間髪で登場し、霊毛ちゃんちゃんこで

滅掌底(バスター・フィンガー)を受け止めて弾き飛ばし、

キュアエースを救った。

鬼太郎「…。」

レジーナ「あの人は…?」

キュアロゼッタ「も…もしかして…?」

キュアハート「もしかしちゃうかも!!」

ローリー「な…何だお前は!」

鬼太郎「…ゲゲゲの鬼太郎だ!!」

ついに鬼太郎とさくら達がドキドキ！プリキュアのメンバーと合流を果たした。

そして一同は、見事にレグルス帝国軍を打ち破り、勝利する事ができるのか!?

小狼「こんなのかすり傷さ…君が無事でよかった…。」
キュアダイヤモンド「ありがとう、小狼君!!」

と、シャベルを頭脳戦法と息の合ったコンビネーションで
撃破した小狼とキュアダイヤモンドであった。そして…

キュアソード「はぁーっ!!」

ねこ娘「うにゃーっ!!」

レークン「ギャハハハハハハ!!」

「ガキガキガキガキガキガキ…!!!」

一方その頃、ねこ娘・キュアソード組とレークンは壮絶な斬撃の
応酬を繰り広げていた。

レークン「いいねいいねこの感じ!!!刻みがいがあるぜーっ!!」

!!!

キュアソード「刻まれるのはあなたよ、この変態!!!」

ねこ娘「あんた、いったい何なのよ!」

レークン「俺は俺だーっ!!」 「ガキーっ!!」

!!

キュアソード「くっ!」

ねこ娘「ああっ!」

とレークンはそう言いながら、体を回転させて切りかかり、

キュアソードとねこ娘を弾き飛ばした。

レークン「さーて、遊びは終わりだ!!」 「シユシユシユシユシユ

!!!!

と、レークンの周りから粒子を放出した無数の刃が出現した。

キュアソード「さっきの技とは違う…気を付けて、ねこ娘さん!!」

ねこ娘「ええ!全部叩き落してやるわ!!」

と鋭い爪をたてて身構えるねこ娘。

レークン「行けよ!!死刃(デス・ファング)!!」

「ドドドドドドドドドド!!!」

と大量の刃がキュアソードとねこ娘に向けて襲いかかる。

ねこ娘「うにゃーっ!!」

とねこ娘は死刃(デス・ファング)に向かって攻撃しようとするが…

「シユンシユンシユン!!」と死刃(デス・フアング)はねこ娘の攻撃を回避し、方向転換をして、逆にねこ娘に襲いかかった。「ズババババババババーン!!!」

ねこ娘「あああああああー!」

キュアソード「ねこ娘さん! きやあー! っ!!!」

と大量の死刃(デス・フアング)がねこ娘とキュアソードの体中を次々と傷つけていく…

犬山まな「ねこ姉さん!! キュアソード!!」

ねこ娘「こんな奴に… 負けてたまるかー! っ!!!」

とレークンに向かって特攻を仕掛けるねこ娘。

レークン「馬鹿が!! バラバラにしてやるよ、死刃(デス・フアング)!!」

と出現したほぼ全ての刃が、ねこ娘に向けて襲いかかる。

ねこ娘「今よ!!」

キュアソード「この時を待ってたわ!!」

レークン「何!?!」

キュアソード「プリキュア! スパークルアロー!!」

とキュアソードはラブハートアローの弓を展開し、大量の剣型光弾を

レークンに向けて発射した。

レークン「馬鹿が!! そこから打てばお前も喰らうぞ!!」

ねこ娘「それはどうかしら!!」 「シユババーン!!!」

とねこ娘はすかさずスライディングし、レークンの股下をすり抜けた。

レークン「何ー! っ!!!」

キュアソード「あなた、さっきの技もそうだったけど、

刃を放ってる間は動けないみたいね!!」

全方位(オールレンジ) 攻撃は確かに便利だけど、

こういう弱点もあるのよ!!」

ねこ娘「どうやら切り刻まれるのはあんたの方だった様ね!!」

「ズバズバズバズバズババーン!!!」

鬼太郎「鉄砲————っ!!」

「ド————ン!!!」

と鬼太郎の「指鉄砲」とキュアエースの「エースショット」が同時に

放たれる。そして途中で一つとなり、威力が増幅した

指鉄砲とエースショットの合体技は、霊毛ちゃんちんこごと

ローリーを打ち抜いた。

ローリー「あああああああ!!!こ…この私…が…」

サツ…

合体技の直撃を受けたローリーはそのまま倒れたのであった…。

キュアハート「やったー！エース!!鬼太郎さん!!」

さくら「すごいです!!」

レジーナ「なかなかやるじゃない。」

キュアソード「意外といいコンビかもね、あの2人。」

ねこ娘「…ムッ!!」

とキュアソードの言葉に顔をムツとさせるねこ娘。

キュアエース「ありがとうございます、鬼太郎さん…。」

鬼太郎「…。今の感じ…。」

キュアエース「…。どうかなさいましたか？」

鬼太郎「…いや、何でもないよ。」

目玉おやじ「鬼太郎、それとそこのお嬢さん、よくやったのう!!」

キュアエース「はい!!」

鬼太郎「ありがとうございます、父さん!」

と鬼太郎の髪の中から目玉おやじが姿を現し、
賞賛の言葉を鬼太郎とキュアエースに述べた。

レジーナ「さてと…。」

キュアロゼッタ「これで残るは…。」

さくら「あの人だけです!!」

キュアハート「うん!!それじゃみんな…行くよ!!」

キュアロゼッタ・レジーナ・さくら「うん!!」

ブル・ドーザ「…調子に乗りすぎだガキ共…よかろう!!」

破壊剣（ラグナロク）を手に入れる前にまずは

お前達からひねり潰してゆくわーっ！！

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！」

とブル・ドーザが気を高めると、すさまじい地響きが起こり、中学校周辺の建物や木々がビシビシと亀裂が入ってゆく…。

鬼太郎「こ…これは…？」

レジーナ「な…何する気なの…？」

さくら「ほえーっ！！！！」

キュアソード「何これ…押し潰されそうだわ！！」

キュアダイヤモンド「…くうううううう…！！」

小狼「気を高めるだけでこれほどの事が…ま…まさかあれは!?」

ブル・ドーザ「ぬん!!」「ブオオオオオーっ！！！！」

とブル・ドーザが気合を入れると、体中からすさまじい気のオーラが吹き出てきた。

「シユンシユンシユンシユン…」「バリバリッ!!バリバリッ!!」

ブル・ドーザ「……………」

キュアソード「な……………」

レジーナ「何…………あれ…？」

ねこ娘「ちよつと…こんなの聞いてないわよ!!」

キュアアロゼッタ「あんな怪物と…まともに戦えるんですか!？」

とついにボールを脱いだブル・ドーザのパワーに圧倒される一同…。

ケロベロス「それに、あいつが放ちよる力は何や?魔力じゃないみたいやけど…。」

鬼太郎「霊力や妖力でもないみたいだ…。」

小狼「…あれは多分…『闘圧』だ…。」

キュアダイヤモンド「闘…圧…?」

さくら「知ってるの?小狼君…。」

小狼「母上から聞いた事がある。魔力を持たない人間が己を鍛える事で

習得できる「気」だと…。強くなればなるほど、『自身の肉体

を強化』

『技の攻撃力を高める』『戦闘力を上昇させてパワーやスピードを高める』等が

できるそうだ……。

レジーナ「肉体を強化……？」

キュアロゼッタ「じゃあ、あの人の体が異常に硬かったのも……。」

キュアハート「……その『闘圧』っていう力のせいだったんだね……。」

犬山まな「みんな……大丈夫かな……あんな化け物に勝てるの……？」

知世「……信じましょう……さくらちゃんや鬼太郎さん、

そして、プリキュアの皆さんを!!」

犬山まな「そうだね……みんな、頑張つてーっ!!」

ブル・ドーザ「……どうした、怖気づいたか? 一つ言っておくが、

それでも吾輩はまだ本気ではないぞ?」

キュアハート「……みんな……みんなの力を、あたしに預けてくれないかな?」

キュアソード「えっ!?!」

キュアロゼッタ「も……もしかして……」

キュアダイヤモンド「あれになるつもり?」

レジーナ「その手があったわね!!」

キュアエース「わかりました。わたくし達の力、ハートに託します!!」

キュアハート「うん!!みんな、お願い!!」

とキュアハートの周りに他のプリキュアとレジーナが集まった。

そして、

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース「私たちの力をキュアハートに!!」

「ピカー………ッ!!!」

と4人が言うと、ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エースの力と、三種の神器である

マジカルラブリーパッド・エターナルゴールデンクラウン・そして、レジーナの持つ

ミラクルドラゴングレイブが光となってキュアハートを包み込む。

そして、背中から純白の翼が生え、白いマントと少し長くなったスカートを

纏って変身を果たした。

キュアハート「キュアハート……パルテノンモード!!!」「ピカーン!!!」

さくら「ほえー……っ!!!」

小狼「す……すごい!!!」

ねこ娘「あんな変身もできるの……?」

犬山まな「き……きれ……い!!!」

知世「とても美しいですわ!!!」

とパルテノンモードの姿を見たさくら達は、

見とれながら、驚きの声を上げていた。

目玉おやじ「鬼太郎よ、ここはあの子に任せた方が

よさそうじゃの。」

鬼太郎「そうですね、父さん。」

キュアハート「愛を忘れた悲しい隊長さん、このキュアハートが

あなたのドキドキ取り戻して見せる!」

ブル・ドーザ「おもしろい……やれるものならやってみるが良い!!」

ついに、闘圧を解放したブル・ドーザとパルテノンモードに変身した

キュアハートの直接対決が始まろうとしていた。

果たしてキュアハートはブル・ドーザ相手にどのような戦いを

見せるのか?そして、打ち勝つことができるのであろうか!?

第8話 　　～ 思いの力（前編） ～

　　～ 上空 ～

アルト「ブル・ドーザの奴、『闘圧』を開放してみたいだね……。」
バイエルン「さて、あの者達がどこまで食い下がれるか。」

アルト「しかし、まさかあの雑魚にあんな奥の手があったとはね……。」

バイエルン『『パルテノンモード』か…… フフツ、楽しませてくれる。』

アルト「これは、ひよっとしたらひよっとするかな？」

バイエルン「いや、現実はそう甘くないだろう。力ならばまだ今の

　　桑田進之介の方が上だ。」

アルト「だろうね。あれでもまだ失敗作以下か……。」

　　お楽しみはこれからだね。クツクツクツ……。」

　　～ 地上 ～

ブル・ドーザ「フフツ…… 来い!!」

と左手でジエスチャーをしながら、キュアハートを挑発するブル・ドーザ。

キュアハート「それじゃ遠慮なく、ハアーーーーーッ!!」

「シュン!!」「バキーーーーーッ!!」

ブルドーザ「!!!グオツ……。」「ドoooooooooooooooo!!!」

とキュアハートはブル・ドーザにすさまじいスピードで向かっていくと、

ブル・ドーザの顔面に飛び蹴りをクリーンヒットさせて、吹き飛ばした。

ケロベロス「おおっ!!」

ねこ娘「あの化け物を吹っ飛ばした……。」

ブル・ドーザ「くっ…… 油断したわい……。」

と倒れていたブル・ドーザはそう言いながら、起き上がる。そして……

キュアハート「今度はそちらからどうぞ!!」「クイツ!クイツ!」

上空に向けて、蹴り飛ばした。

「バシューーーーーーッ！！！！」

ブル・ドーザ「ぐおおおおおおッ！！！！」

キュアハート「……………」。「ビューーーーーーッ！！！！」

と続いてキュアハートも上空へと舞い上がり、蹴り上げた

ブル・ドーザを追い越して、かかと落としの体制をとる。

キュアハート「はぁーーーーーっ！！」「バキーーーーーッ！！！！」

ブル・ドーザ「ぐああああああーーーーーっ！！！！」

とキュアハートの放った強烈なかかと落としが、ブル・ドーザの脳天に直撃し、

そのまま勢いよく地上へ落下していった。

「ドゴーーーーーッ！！！！」

ブル・ドーザ「あ……が……が………。」。「ビクン……ビクン……」

と落下したブル・ドーザは白目になり体を痙攣させながら仰向けに倒れた。

さくら「キュアハートさん……すごい……。」

小狼「これが……世界を救った力……か。」

鬼太郎「どうやら、僕達の出番はなさそうですね、父さん。」

目玉おやじ「だと……いいがのう……。」

ねこ娘「……えっ？」

「シューーーーーーッ……。」

とブル・ドーザに続き、キュアハートも地上に降りてきた。

そして、倒れているブル・ドーザの元へと歩を進めた。

「ザッ……ザッ……ザッ……ザッ……」

キュアハート「気分はいかがかしら、隊長さん！！」

ブル・ドーザ「ぐっ……お……おのれ……。」

と、キュアハートの問いかけに屈辱を受けながら、声を振り絞るブル・ドーザ……

レジーナ「マナーツ！そのまま一気にやっちゃえーっ！！」

キュアダイヤモンド「今のうちに早く！！」

キュアハート「もう、みんなついたらせつかちなんだから……」

隊長さん、もう悪いことはしちやダメだよ!!」

「ピカーーーーーーッ!!!」

とキュアハートはブル・ドーザにそう言いながら、

『マイ・スイート・ハート』の発射態勢を取る。

キュアハート「あなたに届け! マイ・スイート・ハート!」

「パアーーーーーッ!!!」「ドオーーーーーッ!!!」

ブル・ドーザ「グオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

と、キュアハートが放ったマイ・スイート・ハートが命中し、

浄化が開始されると、ブル・ドーザは悲鳴を上げ始めた。

ブル・ドーザ「こ…こんな小娘に…吾輩はもうお終いだーっ!!!」

キュアハート「お終いじゃないよ隊長さん…今、あなたに『愛』を

いっぱい注いでいるところなの。

それが終わったら、悪いことはもうやめて、

みんなの為、そして世界の為にやり直してね!!」

ブル・ドーザ「はひーーーーーッ!!! ラブラブラブラーーーーッ!!!」

「バアーーーーッ」とハート型のまばゆい光がブル・ドーザを包み込ん

だ。

キュアソード「やったーっ!!!」

キュアロゼッタ「ハート…さすがです!!」

キュアエース「やはり、『愛』の力…。『思い』の力は偉大でしたね!!」

と、他のプリキュアそして、鬼太郎やさくら達がキュアハートの勝利を

確信したその時…。

ブル・ドーザ「…などと言うと思ったか?」

キュアハート「…えっ!?!」

「ドカーーーーーッ!!!」

さくら「きゃーーーーーッ!!!」

小狼「さくらっ!!!」

と、ブル・ドーザは何事も無かったかのように、マイ・スイート・

シに

勝てるなどと思ったのではあるまいな？ 思いあがるな!!」

キュアハート「あなたに人の思いが通じないならもういい…。倒す!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

とキュアハートがそう言うって気合を入れなおすと、周辺から風の嵐が巻き起こった。

キュアダイヤモンド「ハート…：ダメーーーーッ!!」

ブル・ドーザ「いいだろう、余興はもう終わりだ…。ひねり潰してやる!!」

く 上空 く

バイエルン「まあ、こんなものか…。」

アルト「ブル・ドーザの奴、力は二流でも、芝居は一流だったね。

おかげで楽しませてもらったよ。」

バイエルン「その二流より力が劣るあの少女達は三流といったところか…。」

良いものは持っているのだがな…。」

アルト「あの雑魚、失敗作が来るまで生きてれば良いんだけどね…。」

クツクツクツ…。」

く 地上 く

「ドゴーーーーーッ!!」

ブル・ドーザ「まだまだーーーーッ!! アクセル・アップ!!」

「シュン!!」「バキツ!!ドボオツ!!ガスツ!!グシャ!!ベキツ!!」

キュアハート「あああああああッ!!」

とキュアハートはまず始めに、ブル・ドーザの一撃を受けて吹き飛ばされた後、

アクセル・アップによる高速移動の連続攻撃で蹂躪されていく…。

ねこ娘「うそでしょ…。あの化け物、あの凶体であんなスピードを…。」

鬼太郎「しかも、さっきの相手よりも速い…。」

ブル・ドーザ「何？」

キュアハート「この…世界にはね…強者なんて…どこにも…いないよ…」

人は…ね…みんな…弱者…なんだよ…

だから…人間は…あたし…達は…助け合

い…ながら…

励まし…合い…ながら…強く…なつて…

いくん…だよ…

あなた…だつて…一人で…強く…なつたわ

けじゃ…

無い…でしょ…？」

と、大ダメージを受けてほとんど体が動かないキュアハートではあつたが、

ブル・ドーザが言い放つた事に対して、必死に声を振り絞りながら問いかける。

キュアダイヤモンド「ハート…。」

キュアソード「ハート…ううん、マナの言う通りよ…。」

ブル・ドーザ「フフフ…まだそんな戯れ言をほざける元気があつたか…。」

その根性だけは認めてやるぞ？ガハハハハハハ

ハッ!!!

キュアロゼッタ「戯れ言ではありません!!」

ブル・ドーザ「んっ？」

キュアエース「人は1人では生きていけません…あなたにだつて、

あなたを産んで育ててくれた両親がいて、強くしてく

れた

は、

恩師や仲間達がいたはずですよ…それでもあなた

ブル・ドーザ「弱者が知った風な口を…吾輩に親も恩師も仲間も

おらん!!

吾輩は1人であの過酷な環境を生き抜き、力を身につけ、

そして我らがレグルス帝国軍へと志願し、体一つでここまで上り詰めたのだ!!恵まれた環境でぬくぬくと

生きているキサマら弱者と一緒にするで無いわーっ

!!

ねこ娘「いいかげんにしなさいよ、あんた!!

恵まれてないのが自分だけだと思ってるわけ?

バツカじゃないの!?

ブル・ドーザ「何ー何ー!!」

ねこ娘「あんた、自分が恵まれなかったのを結局は他人のせい

にしたいだけでしょ!?恵まれた環境っていうのは与えられる

ものじゃない、協力して作り上げていくものよ!!

あたし達妖怪もね...昔は人間達に恐れられ、虐げられてい

た。

それでもわたしや鬼太郎達もその状況を変えたくて、

必死で人間達と接してきたの!!そのおかげで今は

人間達も徐々にはあるけど、私たち妖怪を受け入れて

くれる様になった!!そうなる事で、これからは人間も妖怪

も、

協力し合いながら一緒に強くなれるってわたしは信じてる

!!

鬼太郎「ねこ娘...」

犬山まな「ねこ姉さん...」

目玉おやじ「その通りじゃ...」

ブル・ドーザ「ほう...そこまで言うのなら、またまた良い余興を

思いついたわ...」

「ガシッ!!」「ドシンドシンドシン...」

とブル・ドーザはキュアハートを右手で掴むと、

そのまま校舎に向けて歩を進める。

百田「アニキーっ!! あの大男、こっちに来ますよーっ!!」

二階堂「このデカブツ!! マナを離しやがれーっ!!」

キュアソード「あいつ… 何する気なの…。」

キュアダイヤモンド「ま… まさか!？」

キュアロゼッタ「校舎を破壊する気ですか!？」

キュアエース「やめなさい!! その人達は関係ないでしょ!!」

ブル・ドーザ「この吾輩を愚弄した当然の報いだ!!」

特に小娘… お前には仲間が散っていく様を

特等席で見せてやろう…。ヌン!!」

「ブウーっ!!」

とブル・ドーザはそう言うと、左手に闘圧を集めて、

巨大なエネルギー弾を形成した。

キュアハート「や… やめ… て…。」

目玉おやじ「いかん、みんな!! 奴を止めるんじや!!」

鬼太郎「はい、父さん!! 指鉄砲!!」

キュアダイヤモンド「プリキュア! ダイヤモンドシャワー!!」

キュアソード「プリキュア! スパークルソード!!」

キュアエース「エースショット! ばつきゅくん!!」

レジーナ「ミラクルドラゴングレイブ!!」

さくら「火焰(ブレイズ)!!」

小狼「雷帝招来(らいていしようらい)!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド。」

ブル・ドーザ「フフフ… 弱者の攻撃など、吾輩には通じんな!!」

と他のプリキュアや鬼太郎、さくら達がブル・ドーザに

向けて総攻撃を開始するが、ビクともしない…。

鬼太郎「くそっ!!」

目玉おやじ「鬼太郎!! あきらめてはならん!!」

打ち続けるんじや!!」

キュアソード「このままじゃ学校のみんなが!!」

さくら「そんなの嫌だよ… 止まってーっ!!」

!!

ついに出てきたか!!」

「シュン!!」「バシツ!!」

ブル・ドーザ「ウオツ!!」

と進之介は『疾風斬(カマイタチ)』発動による

高速移動で、ブル・ドーザの右腕に掴まれていたキュアハートを救出し、

地面に着地した。

鬼太郎「は……速い!!」

ねこ娘「何……あの子!？」

目玉おやじ「あの少年……何者なんじゃ？」

只ならぬ気配をしておるぞ!!」

進之介(変身体)「……………」

キュアハート「シン……ごめんね……また……やられちゃっ

た……。」

進之介(変身体)「……魔法剣(アタックヴァイト)!!白月光(ホワ

イトアーク)!!」

「パァー………ツ!!」

進之介が白月光(ホワイト・アーク)を発動させると、キュアハートの体が

光に包まれて、ダメージが回復した。

キュアハート「……………」

さくら「ほえ………ツ!!」

ケロベロス「あんな事が出来るんか!?何もんやあいつ!!」

キュアハート「シン……ありがとう……会いたかった!!」

「ギョッ!!」と進之介に礼の言いながら、思い切り抱きついたキュアハート。

進之介(変身体)「……………」「ぐぐぐぐつ……………」

キュアハート「えっ……?」

と自信に抱き着いているキュアハートの両腕を無理矢理引き離した進之介……。

進之介（変身体）「……………」

キュアハート「あっ… シン… どうして…?」

進之介（変身体）「… 言っただでしょ? 僕にはもう関わらないでっ
て。」

キュアハート「!!!」

と進之介はキュハートにそう言い放つと、後ろに
方向転換して歩み始める…。

キュアソード「そんな…。」

レジーナ「シン… ひどいよ!!」

キュアロゼッタ「マナちゃん、頑張ったのに…。」

キュアダイヤモンド「そんな言い方…!!」

キュアエース「あんまりですわ…。」

と、進之介のまさかの言動にショックを受けるプリキュア達5人。

ねこ娘「… 何なの、あの子… あの態度!!」

鬼太郎「何か理由がありそうだけど…。」

さくら「… けど、あれじゃキュアハートさん、かわいそうだ
よ…。」

ケロベロス「せやな…。」

く 上空 く

アルト「やつと出てきたか失敗作!!」

バイエルン「随分と遅いご登場だな… 待ちくたびれたぞ。」

「シュン!!」

レイス「それはすまなかつたね。」

とアルトとバイエルンの背後にレイスが現れる。

レイス「実は先程まで塞ぎこんでてね… レグルス軍の事を話した
ら

すぐに飛んで行つたけど…。」

バイエルン「あの様子では、まだ迷いがありそうだな…。」

アルト「しっかりしてもらわないと困るな、育ての親さん…」

僕は今、アイツを消したくてウズウズしてるんだけど。」

レイス「それはご遠慮願いたいね。そうなったら今度は私が

君を消さなくてはならなくなる。」

と互いに睨みあうレイスとアルト……。

バイエルン「二人共、そこまでにしておけ……戦闘が始まるぞ。」

レイス「では、私は特等席で見させてもらおうとしようかな!!」

「シユン!!」

とレイスはそう言いながら二人の前から姿を消した……。

アルト「……………」

バイエルン「フツ……物好きな事だな……。」

く 地上 く

ブル・ドーザ「ガハハハハハ!!中々やるではないか小僧……

吾輩の手柄にふさわしいぞ!!」

進之介（変身体）「……どうでもいいよ……そんなの!!」

「ズババババババババババ……」

「ドゴ……」

ブル・ドーザ「な……何だ……と」

と疾風斬（カマイタチ）の連続攻撃を受けて吹き飛ばされるブル・ドーザ。

進之介（変身体）「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!稲妻落（ライト・ブレイカー）!!」

「ドオー……」

ブル・ドーザ「ヌグオー……」

と、すさまじい電撃の魔力を破壊剣（ラグナロク）に纏わせ、

一撃を加える進之介。その衝撃で、ブル・ドーザは再び吹き飛んだ。

進之介（変身体）「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!大蛇牙（ヨルムン・ガンド）!!」

「ボシュ……」と剣先を超高速で伸ばすと、ブル・ドーザに命中し、空中へと押し上げると、再度、落下して地面へと叩きつける。

「ドゴ……」

ブル・ドーザ「グハ……お……おのれ……つ!!」
と言いながらブル・ドーザは立ち上がると、右腕に闘圧を集中させ

る。

「ブオーーーーーーッ!!」 「バリバリバリバリ!!」

ブル・ドーザ 「砕け散れい!! 激烈破弾!! (クラッシャー・マグナム)!!」

「ドオーーーーーッ!!」

進之介(変身体) 「魔法剣(アタック・ヴァイト)!! 一点突破(スクライド)!!」

と、進之介は一点突破(スクライド)を発動すると、

激烈破弾(クラッシャー・マグナム)をかき消しながら、

ブル・ドーザへと突っ込んでいく。

ブル・ドーザ 「何!？」

進之介(変身体) 「うおーーーーーッ!!」

「ドカーーーーーッ!!」

ブル・ドーザ 「うぐあーーーーーッ!!!」

「ドカンドカンドカンドーーーーーッ!!」

そして、一点突破(スクライド)がブル・ドーザの腹に命中すると、すさまじい勢いで吹き飛んで行った。

進之介(変身体) 「……………」

さくら 「ほえーーーーーッ!!!」

小狼 「つ… 強い!!」

ねこ娘 「また芝居じゃないの？」

鬼太郎 「いや… 今度は違うみたいだよ。」

ブル・ドーザ 「はあ… はあ… はあ…」

と進之介の攻撃でダメージを負い、息も絶え絶えながら、何とか立ち上がるブル・ドーザ。

キュアダイヤモンド 「やっぱり、シンはすごい…。」

キュアアロゼッタ 「あんな怪物相手に…。」

キュアソード 「あのレイスって人が言った通り、もうシンには

あたし達なんて必要ないのかな…。」

キュアハート 「嫌だよ… そんなの…。」

レジーナ 「マナ…。」

キュアエース「わたくしも……です。」

ブル・ドーザ「フフフフ……ガハハハハハ!!!」

進之介「……?」

ケロベロス「あいつ、何笑うとんねん!!」

ブル・ドーザ「この吾輩がこれほどのダメージを受けるとは何年振りだ……?」

さすがは『次元の王』の力が宿りし武器だ……。

気に入った……。ますます欲しくなったぞ、破壊剣（ラ

グナロク）!!」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……」

とブル・ドーザは再び闘圧を高め始めると、地響きが起き、建物や木々が

崩れ始める……。

キュアソード「うそ……あの大男、まだあんな力が!」

キュアダイヤモンド「そ……そんな……」

キュアハート「……シン……!!」

進之介（変身体）「……くっ!!」

ブル・ドーザ「覚悟しろ小僧……これが吾輩の、フルパワーだ……」

ついに進之介が登場し、追い詰めたかに見えたが、

対するブル・ドーザもフルパワー状態となり、戦闘は大詰めを迎える。

果たして進之介はどう戦うのか?そして、大貝町の運命は!?

そして、恐怖と絶望感に打ちひしがれるプリキュア達。

く 上空 く

バイエルン「ここからが本番だな。さてどう戦う？ 桑田進之介……」

アルト「ああなつたブル・ドーザはもうあいつらでは止められないね!!」

失敗作の無様な姿が見られるのが楽しみだよ。アツハツハツ!!」

バイエルン「このままでは、だがな……。」

く 地上 く

ブル・ドーザ「フッフッフ、覚悟は良いな？ 小僧……。」

進之介（変身体）「……。」

レイス「なるほど……それが君の本気かな？」

「シュン!!」と突如、進之介の隣に現れたレイス。

進之介（変身体）「おじさん……。」

キュアハート「レイスさん!」

キュアソード「あいつ……何しに来たのよ!!」

キュアロゼッタ「ひよつとして、助けに来てくれたんですか!」

キュアエース「……そうは思えませんが……。」

鬼太郎「君は何者だ……?」

レイス「私の名はレイス……見ての通りただの神官さ。

はじめまして……と言っておこうか？ ゲゲゲの鬼太郎……」

ねこ娘「はあ？ ただの神官?」

鬼太郎「どういうことでしょう、父さん?」

目玉おやじ「……それはさすがのワシもわからんのう……。」

レイス「……まあいい、それより我が主……。」

ブル・ドーザ「グオー……ッ!!」

レイス「んっ?」

「グオー……ッ!!」と、レイスに目がけて

パンチを放つブル・ドーザ。しかし……。

「バシュー……ッ!!」とブル・ドーザの強烈な一撃を

進之介（変身体）「ぐはーーーーーっ!!」

ブル・ドーザ「ぬうん!!」「ドボオーーーーーッ!!!」

進之介（変身体）「ウゲエーーーーーッ!!!ゴボオーーーーッ!!!」

とブル・ドーザの強烈なボディアッパーが進之介の腹に深々とめり込むと、

進之介は胃液を吐きながら悶絶する。。。

進之介（変身体）「あ……が……おえーーーーっ……」「ビクン……ビクン……」

ブル・ドーザ「死ね!!」「ブーーーーーッ!!!」

とブル・ドーザは悶絶している進之介に向けて、

強力なエネルギー波を放った。「ドーーーーーッ!!!」

進之介（変身体）「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!疾風斬（カマイタチ）!!」

「シュン!!」「ドゴーーーーーッ!!!」

と、とつさに疾風斬（カマイタチ）を発動させて、間一髪かわした進之介だったが、ブル・ドーザが放ったエネルギー波は、

町を木っ端微塵に破壊していった。。。

さくら「ま……町が……」「ガクッ……」

小狼「何てパワーなんだ……」

とあまりの光景にショックを受けて、両膝を地面について震えるさくらと、

立ち尽くす小狼……。

進之介（変身体）「はあ……はあ……はあ……」

ブル・ドーザ「ふん!!逃げただけは速い様だな、小僧……」

進之介（変身体）「……こうなったら!!」「バーーーーーッ!!!」

進之介は剣を構えると、魔法陣を出現させると、膨大な魔力を

放出させて、破壊剣（ラグナロク）を巨大な光の剣へと変化させる。

鬼太郎「……あれは!？」

ケロベロス「何や!!このごっつい魔力は!？」

小狼「す……すごい!!」

さくら「ほえーーーーーっ!!!」

と、裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を始めて見た鬼太郎やさくら達は、一斉に驚き始めた。

ブル・ドーザ「面白い……来い!!」「ドオー……ツ!!」

とブル・ドーザは再び、闘圧を放出して、裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を待ち受ける。

キュアソード「シン……お願い!!」

キュアロゼッタ「これで決めてください!!」

キュアハート「行つけ……っ!!」

進之介（変身体）「殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイト）

!!

裁きの鉄槌（オメガ・クロス）!!」

「ゴオオオオオオオオ……ッ!!」

と、ブル・ドーザ目がけて、裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を振り下ろす進之介。

ブル・ドーザ「フン!!」「ドゴ……ン!!」

と、両腕をクロスさせて、ブル・ドーザが裁きの鉄槌（オメガ・クロス）を受け止めると、そこからすさまじい爆音と衝撃が起こった……。

進之介（変身体）「はあ……はあ……はあ……」

キュアダイヤモンド「……やったの……?」

レジーナ「決まって……お願い!!!」

ブル・ドーザ「フツフツ……」

進之介（変身体）「!!!」

と、爆風で舞い上がった砂ぼこりの中から、裁きの鉄槌（オメガ・クロス）の直撃を受けたにも関わらず、ほぼ無傷のブル・ドーザが姿を現した……。

キュアロゼッタ「そ……そんな……」

キュアソード「裁きの鉄槌（オメガ・クロス）が……」

キュアハート「通じないなんて……」

小狼「よっぽど大事な人なんだな……。」

レイス「いや、**げ**れで良い。」

キュアハート「**!!!**」

レイス「ブル・**ド**ーザ君にはもつともつと彼を追い詰めて

もらわなくては。追い詰めて追い詰めて……

そして秘めたる力を解き放つ!!そしたら彼は、

偉大なる王へまた一歩、前進する事になるだろう!!」

キュアハート「……あなたはシンの事、大切じゃないんですか……

?

2年間一緒に暮らして、彼を育てたんでしょ……

?

レイス「あいにく、私はそんなセンチメンタルな感情は持ち合わせて

いないのでね……。それに言っただろう?私は彼を『次元の王』にする為に

育てたのだと……。彼との関係はそれ以上でもそれ以下でも

無いのだよ。」

キュアハート「……そんな……。」

鬼太郎「……次元の王?」

ねこ娘「何……それ……?」

目玉おやじ『『次元の王』……はて?どこかで聞いた様な

気がするのう……。』

さくら「そんな事より、このままじゃあの人危ない!!

助けないと!!」

小狼「待て!!さくら!!」「ガシツ!!」

と進之介の所へ向かおうとするさくらを、腕を掴んで止める小狼。

さくら「小狼君!!離して!!」

小狼「止めるんだ!!お前が行ってもどうにもならない!!」

さくら「じゃあ……どうすれば良いのよ……ウワー……」

!!!

ケロベロス「……さくら……。」

小狼「……………」。「ギユツ!!」

さくら「……………」。「小狼君……………」

小狼「俺だって、悔しいんだ……………」。「自分の無力さに……………」」
と、そう言いながら、さくらを抱きしめる小狼。

キュアハート「もういいです……………」。「あなたにお願いしたあたしが

間違いました……………」

と、キュアハートはショックを受けて、レイスの所から立ち去った……………」

レイス「……………」

ブル・ドーザ「光栄に思うが良い……………」。「最後は吾輩の最強技で

キサマを葬ってやろう……………」。「ヌンツ!!!」

「ブオー……………」

とブル・ドーザが気を高めると……………」。「自身の前方に、

巨大なエネルギーの塊が出現した。

鬼太郎「……………」。「うっ……………」

ねこ娘「ちよ……………」。「ちよつと……………」。「あれ、ヤバくない!?」

さくら「……………」。「どうすれば……………」。「いいの……………」」?

小狼「……………」。「ここまでか……………」」

キュアソード「シン……………」。「逃げて……………」」

ブル・ドーザ「砕け散れい!!!大地獄砲!!」。「ヘル・バスター・キャノ

ン!!!」

「ゴオオオオオオオ……………」

と最強技である大地獄砲（ヘル・バスター・キャノン）を進之介に向けて放つブル・ドーザ。

キュアエース「いや……………」

レジーナ「……………」

進之介（変身体）「ああ……………」。「僕はもう、死んじやうのかな……………」」。「でも、それでもいいや……………」」。「僕がこのままいなくなれば、

もうみんなを巻き込まずに済むから……………」

あれっ?そもそも僕は、何の為に

戦ってるんだろう……………」?王になる為?

キュアハート「……………うううっ!!」

と進之介をかばい、大地獄砲（ヘル・バスター・キャノン）を両腕で必死に受け止めて耐えるキュアハート……。

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・レジーナ「ハート!?」
さくら「キュアハートさん!!」

ケロベロス「いくら何でも無茶やで!!」

ねこ娘「あの子!?!」

鬼太郎「……………」

進之介（変身体）「…………… マナ…………… 何してるの!?! 僕の事はもう!!」

キュアハート「……………?! いい加減にしなさい……………いい!!!!」

進之介（変身体）「!!」

キュアハート「何が!?! もう僕には関わらないで!?! よ!!」

そんなの嫌に決まってるじゃない!! じゃあ、シンはもうあたしの事なんかどうでもいいの!?! もしあたし

が

危ない思いをしても助けたくならないの!?!」

進之介（変身体）「…………… えっ?」

キュアハート「昨日会ったばかりで、シンの方はまだ何もわからないよ!!」

けど、これだけは言える!! やっぱりあたしはシンと一緒にいたい!!」

そして、シンの方をもっと知りたい!! つらいことや悲

しい事、

これから先、何があっても、シンと一緒に乗り越えて

いきたいの!!

例え、シンの方にはなれなくても、支えになる事はできるんだから……………!!!!!!」

進之介（変身体）「…………… マナ……………」

レイス「……………」

キュアハート「それでも関わるなって言うんならそれでも良いよ!!」

でもあたしは…あたしは—————っ!!!
と、涙を流しながら進之介に向けて、心に秘めていた思いを
ぶつけるキュアハート。すると…

「ピカー—————ン!!!!!!」
と、キュアハートの体が更に輝き、大地獄砲（ヘル・バスター・キャ
ノン）を

押し返し始める。「ブオ—————ン!!!!」

ブル・ドーザ「何—————っ!!!」

キュアハート「はあ—————っ!!!!」

「ゴオ—————ッ!!!」

ブル・ドーザ「うお—————っ!!!」

「ドゴオ—————ン!!!!」

と、キュアハートはついに、大地獄砲（ヘル・バスター）。キャノン
を

ブル・ドーザに向けて、押し返した。そして、押し返された

大地獄砲（ヘル・バスター・キャノン）の直撃を受けた

ブル・ドーザはそのまま吹き飛ばされた。

キュアハート「はあ…はあ…はあ…」

レイス「何…だと…?」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・レジーナ「ハート!!」

さくら「キュアハートさん!!」

ケロベロス「あいつ…やりおったで!!」

小狼「す…すごい!!」

ねこ娘「やるじゃない!!あの子!!」

鬼太郎「うん…そうだね!!」

目玉おやじ「たいしたもんじゃ!!」

キュアハート「ああっ…」。「パア—————ッ…」

と力を使い果たし、変身が強制解除されて、元の姿に戻ったマナ。

進之介（変身体）「マナーっ!!」「ガシッ!!」

と進之介は、倒れそうになったマナに駆け寄って、両腕で受け止め
た。

マナ「…シン…。」

進之介(変身体)「… マナ… どうして…。」

マナ「言ったじゃない… 力にはなれなくても、支えになる事は

できるって…。お願いだから、もう一人で抱え込まないで…。」

あたしがあなたの傍にいるから…。」

進之介(変身体)「どうして… 何で君は僕にそこまで…。」

マナ「決まってるじゃない…。」

進之介(変身体)「… えっ?」

マナ「… 大好きだからだよ!!」

と、進之介に笑顔で思いを伝えるマナ。すると…

進之介(変身体)「…!!」「ペアアアアアアア…。」

とマナの思いを聞いた進之介は心の中で何かがはじけると、体から爽やかな青白い魔力のオーラが噴き出してきた。

「シューーーーーーッ…。」

進之介(変身体)「…。」

レイス「あれは… どういう事だ…?」

キュアソード「… シン?」

キュアダイヤモンド「あれは…?」

キュアロゼッタ「今までの力と、何か違いますわ…。」

レジーナ「う… うん。」

小狼「すさまじい魔力を放ってはいるけど…。」

ケロベロス「気配はものすごい穏やかやな…。」

さくら「何だか… ポカポカするよ…。」

く 上空 く

アルト「何なんだ… あれは…?」

バイエルン「ほう… どうやら昨日の暴走とは

また違う力の様だな…。」

これで面白くなってきたな。」

アルト「ブル・ドーザの馬鹿め… さっさと終わらせないから

こうなるんだよ… やはり、二流だな奴は!!」

く 地上 く

マナ「シン……暖かいよ……ずっと、こうして居たいくらい……。」
進之介（変身体）「ありがとうマナ…… おかげで僕にも戦う理由が
見つかったよ。そして、決心もついたんだ。」

マナ「……えっ？それってどういう……。」

ブル・ドーザ「うおー……っ!!」「ドゴー……ん!!」

と倒れていたブル・ドーザが雄たけびを上げながら立ち上がった。

進之介（変身体）「マナ……ちよつとごめんね……。」「スツ……。」

と進之介はそういうと、マナをお姫様抱っこで

抱きかかえながら立ち上がった。

マナ「シン……。」「ポツ……。」

と、マナは、両頬を真っ赤にしながら進之介の名を呟いた。

ブル・ドーザ「ゴオ……!!」

「ゴオ……!!」と、立ち上がったブル・ドーザは

すさまじい勢いで進之介に向けてパンチを放つ。だが……。

進之介（変身体）「……。」「シユイ……ん!!!」

と進之介はそのパンチを瞬時にかわしながら、

一瞬で、他のプリキュア達の所へとたどり着いた。

ブル・ドーザ「何だと!？」

レイス「今の動き……まさか!？」

キュアソード「シン!!」

キュアダイヤモンド「マナ!!」

キュアロゼッタ「お二人共、良かったです……。」

レジーナ「ふえ……ん!! シ……ん!! マナー……っ!!」

進之介（変身体）「みんな……マナをお願い。」

と進之介そう言いながら、マナを降ろして、立ち上がらせる。

キュアソード「任せといて!!」

キュアエース「!お気をつけて!!」

マナ「シン……あたしの……ううん、あたしたちの思い……

全部持つて行って!!」「ギユツ!!」

と進之介の両手を握りながら、そう語るマナ。

進之介(変身体)「ありがとうマナ…みんな…行ってくるね!!」
「シューイーイーーン!!」と進之介は再び一瞬で

ブル・ドーザの前へと姿を現した。

進之介(変身体)「……………」

小狼「何だ…あの動きは…?」

さくら「動いているのかもわからなかったよ…。」

ケロベロス「…あいつが行動したつちゆう実感が

まったく掴めへん…。」

鬼太郎「…そうだね。」

と進之介の不思議な身のこなしに、驚く一同。

ブル・ドーザ「この死にぞこないが…今、楽にしてやる!!」

「ドドドドドドドドドドド!!」と、進之介に向けて、

再び、パンチの嵐を繰り出すブル・ドーザ。しかし…。

進之介(変身体)「……………」

「ヒュン! ヒュン! ヒュン! ヒュン! ヒュン! ヒュン!」

ブル・ドーザ「!!!」

と、パンチの嵐を鋭い身のこなしで次々と

かわしてゆく進之介。

レイス「!!!」

キュアソ!!ド「ちょ… ちよつと、あれって!!」

キュアロゼッタ「あの身のこなしは!!」

マナ「あの時のレイスさんと同じ動きだ!!」

ブル・ドーザ「くっ!!?おのれイーっ!!」

「ドドドドドドドドドド…」

進之介(変身体)「……………」

「ドボオーイーーンツ!!!」

ブル・ドーザ「ウオオオオオオイーーンツ!!あ… が…。」

と、進之介はパンチの嵐を全てかわすと、すかさず、

強烈なボディアッパーをブル・ドーザの腹にめり込ませた。

ブル・ドーザはその威力に目を見開かせ、悶絶する。

ケロベロス「あいつ… かわすだけやなくて、あの化けもんに

強烈な一発を喰らわしおったで!!」

さくら「うん!!」

小狼「強い……。」

ブル・ドーザ「はあ…… はあ…… ど…… どういう事だ…… ?」

先ほどまでの小僧とはまるで違う……。」

レイス「それについては彼と同意見だ…… なぜ我が主は急に…… ?」

目玉おやじ「お主、そんなこともわからんのかのう?」

鬼太郎「今の彼は、『1人』で戦っているんじゃない!!」

ねこ娘「あの子たちの思いも一緒に背負って戦ってるのよ!!」

と、マナ達プリキュア達の方に視線を向けて、

レイスに語る鬼太郎達。

レイス「『思い』…… だと? そんな物が何だというのだ!!」

さくら「その『思い』があるからこそ、人は強くなれるんです!!」

小狼「さくらの言う通りだ。あなた達の様な存在はどうかは知らないが、

人は1人では生きてはいけない種族なんだ。」

ケロベロス「せやからこそ、人っちゅうもんは、互いに

思いやる事で、時に限界以上の力を

引き出すことができるんや!!

わいは人間やないけど、さくら達と出会って、

それを学んだんや!!」

さくら「ケロちゃん……」

目玉おやじ「それが『思いの力』というものじゃ。

そして、それを引き出したのはあの子達……

特に、あの赤い髪の子じゃ!!」

レイス「『思いの力』…… だと…… すまないが、私には理解不能だ……。」

と、レイスは鬼太郎やさくら達から『思いの力』について

聞かされるが、理解していない様子だった。ただ、その心中は、

先程とは若干ではあるが、変化した様子である。

進之介(変身体)「あなたはもう… 僕には勝てない!!」
ブル・ドーザ「!!!僕には勝てない… だと?!

調子に乗るな、小僧「……………」

「ゴオー……………」と怒りが頂点に達した

ブル・ドーザは、鬼の形相で進之介に襲い掛かるが…

進之介(変身体)「魔法剣(アタック・ヴァイト)!!疾風斬(カマイタチ)!!」

「ズババババ……………」

ブル・ドーザ「ゴオー……………」

と先程とは違い、威力が増した疾風斬(カマイタチ)を受けて、
大ダメージを負い、ひざまづくブル・ドーザ。

ブル・ドーザ「こ… この吾輩が… 何故だ… 何故だ……………」

進之介(変身体)「それはあなたが… 自分の事しか考えていないからだ!!」

ブル・ドーザ「何だと?!

進之介(変身体)「けど、それでは人は強くなてなれない!!誰かの為にと

思う事で、人は強くなれるんだ!!

それに気づかせてくれたのが、僕の大切な人なん

だ…。」

とブル・ドーザに語りながら、マナの方に向き、笑顔になる進之介。

マナ「… シン!!!」

と、進之介の言葉に感動し、涙を流すマナ。

ブル・ドーザ「誰かの為… だと?!認めん… 認めんぞ!!この世は
全て弱肉強食!!強いものが生き、弱きものが死ぬのだ

!!

誰かの為など、弱者の戯言に過ぎぬわーっ!!!」

「ゴオー……………」

とブル・ドーザは、進之介の言葉を全否定すると、再び、闘圧を
最大限にまで高める。

ブル・ドーザ「破壊剣（ラグナロク）など最早要らぬ!!吾輩の…
強者の誇りにかけて、キサマを全力をもって
葬り去つてくれるーっ!!!」

「ブオーーーーーーッ!!!」

と、再び、最強技である大地獄砲（ヘル・バスター・キャノン）の
発射態勢に入るブル・ドーザ。

キュアソード「あの技はさっきの!!」

キュアダイヤモンド「まだあんな力が…。」

マナ「シン!!」

進之介（変身体）「大丈夫…。大好きなマナ、大好きなみんな、
そして、大好きなこの世界を守るために

僕は…。王様になる!!」

「キュイーーーーーッ!!!」

と進之介の決意の言葉と共に、破壊剣（ラグナロク）が突如、
激しく輝きだした。

キュアソード「シン…。今…。」

キュアダイヤモンド「王様になるって…。」

キュアロゼッタ「じゃあ、彼はこの世界を…。」

レジーナ「出ていくって事…?」

キュアエース「…。」

進之介（変身体）「ラグナロク…。僕の思いに答えてくれるんだ
ね…。」

それなら!!」

「バアーーーーーッ!!!」

と進之介は足元に魔法陣の出現させて、

殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイト）の態勢をとる。

さくら「あの魔法はさっきの…。」

小狼「けど、あの技はさっき通じなかったはず…。」

鬼太郎「いや、さっきの技とは違うみたいだよ。」

ねこ娘「えっ…?」

進之介（変身体）「殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイ

進之介「もつと優しくしてほしいな……こんな風に……」
「ギョツ……。」とマナをそつと抱きしめる進之介。

マナ「……うん!!」「ギョツ……。」

と、マナもすかさず進之介に笑顔で抱き着いた。

二階堂「……。」「チーーーーーン……。」

と、その光景を見た二階堂は、抜け殻の様になっていた……。

百田「アニキ……これはもう、しょうがないっすよ……。」

と、二階堂の姿を見ながら、こう語る百田であった……。

レイス「……良いところですか？」

進之介・マナ「は……はい……。」

と、目を点にさせながら、レイスの方へと顔を向ける進之介とマナ。

レイス「とりあえず、おめでどうと言っておこう。私の望む形では

無かったが、勝利は勝利だからね……。後、動機は何であれ、

王への道を歩む決断をしてくれた事は、素直に感謝する。」

進之介「うん、ありがとうおじさん……。それと、おじさんは

ああ言つてたけど、僕はやつぱり、マナと……みんなと

一緒にいたいよ……ダメかな……？」

レイス「……好きにしまえ。」

進之介「えっ……それって……」

マナ「あたし達を認めてくれるんですか？」

レイス「認めたわけじゃない……。だが、利用してあげても良い。

君達が言う『愛』だの『思い』だのとか言う力をね……」

進之介「おじさん……。」

レイス「それともう一つ、おじさんはもうやめてくれないか？

私はもう君の親代わりではない、家臣となるのだからね、

我が主……。」

進之介「うん、わかったよ。それじゃレイス、これからもよろしく
ね!!」

レイス「フツ……それでは私は先に帰らせてもらおう。君も夕飯ま
では

帰ってきてくれたまえ、我が主!!」

「シン!!」

とそう言いながら、レイスは姿を消していった。

レジーナ「何よ、主人に向かつて、ずいぶん偉そうな家臣じゃない!!」

キュアダイヤモンド「でも、本当に良かった!!」

キュアソード「これで彼とまた一緒にいられるのね……」

キュアロゼッタ「けどさつき、王様になるって……」

キュアエース「本気なのですか? シン……」

進之介「うん。もう決めたんだ。僕は色んな次元に行つて、

全ての武器を手に入れて、『次元の王』になるって……」

キュアダイヤモンド「でも、『次元の王』って……」

進之介「それは違うよ、六花……僕は次元を『支配』するんじゃない、
く、

次元を『守る』王になるんだ!!」

キュアロゼッタ「次元を『守る』……」

レジーナ「王……」

マナ「そうだよ……シンはそんな悪い王様にはならない…… ううん、

あたし達がさせないよ!!」

進之介「えっ…… マナ、ひよつとして、ついてくる気なの?」

マナ「えっ? あたりまえだよ!! さつき言つたじゃない、

あたしが傍にいるって!! シンが王様になるって決めたなら、

どこまでも一緒についていくよ!!」

キュアダイヤモンド「マナの言う通りよ。」

キュアソード「あたし達はもう、あなたとは深い絆で

結ばれてるんだから!!」

レジーナ「だから、ドーンとドロ船に乗ったつもりで

いなさい、シン!!。」

キュアエース「レジーナ……ドロ船では無く、大船です……」

ドロ船だと沈んでしまいますわ……」

キュアロゼッタ「こんなこともあるかと、あたしたちの事は、

既にセバスチャンに動いてもらっています。」

ですから、家族や、学校のみなさんにも
ご心配はお掛けしません。

お気になさらないください!!」

進之介「ありがとうマナ…みんな…僕もみんなと一緒に
行けるのが嬉しいよ!!これからもよろしくね!!」

マナ「うん!!」

と、進之介とマナ達プリキュアが改めて、結束を強めたところに…
? 「すみませんが、そのような事を認めるわけには参りません!!」
「シューーーーーー」

と、次元の歪みが突如、出現して中から、1人の美少女が姿を現し
た。

美少女「……………」

進之介「……………あの制服は……………連邦軍の……………?」

その美少女は、水色の長い髪をしており、頭には黄色の
髪飾りをつけて、白いワンピース型の連邦軍の制服を
着用していた。

キュアソード「誰……………あの人……………?」

キュアダイヤモンド「連邦軍の軍人さん……………?」

キュアエース「今頃やってきて……………何の用でしょうか?」

美少女「桑田進之介君……………ですね?」

進之介「は……………はい……………」

美少女「突然で申し訳ありませんが……………あなたを逮捕します!!」

進之介「えっ!?!」

マナ「えーーーーーっ!!どういう事!?!」

と、レグルス帝国軍を倒し、勝利の喜びも束の間、

突如現れた連邦軍の美少女に逮捕の宣告をされてしまった

進之介。この美少女は一体、何者なのか?

そして、進之介とプリキュア達の運命はどうなってしまうのか!?

【オリジナル設定】

ブル・ドーザ (男) (40歳) (オリジナル)

レグルス帝国軍第8戦闘部隊隊長である。

『闘庄』を使用でき、その戦闘力も高く、

キュアハート・パルテノンモードを圧倒し、

フルパワー状態では、当初は進之介を敗北寸前にまで

追い込んだが、マナ達の『思いの力』を発動させた進之介に

今度は圧倒されて、最期は、殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・

ヴァイト）

裁きの光（オメガ・ロスト）の攻撃を受けて、倒された。

ローリー（女）（27歳）（オリジナル）

レグルス帝国軍第8戦闘部隊副隊長であり、

朱色のシヨートヘアが特徴の女性である。

レグルス帝国軍の特殊体術『シックス・コマンド』の

使い手であり、その戦闘力は、キュアエースをも上回る程

ほどだったが、最後は鬼太郎に圧倒された後、

鬼太郎の指鉄砲と、キュアエースのエースショットの

合体技により、倒された。その後は、グラン・ゲインズに

より、次元管理局の本部へと転送された。

レークン（男）（30歳）（オリジナル）

レグルス帝国軍第8戦闘部隊上級兵士である。

剣術の使い手で、主にオールレンジ攻撃を得意とする。

キュアソードとねこ娘を当初は圧倒するが、最後は、

キュアソードにオールレンジ攻撃の弱点を見破られ、

キュアソードとねこ娘の連携と、自身の攻撃を

受けて倒された。その後は、グラン・ゲインズにより、

次元管理局の本部へと転送された。

シャベル（男）（33歳）（オリジナル）

レグルス帝国軍第8戦闘部隊上級兵士である。

特殊な銃である『シャベル・マグナム』を使用して

戦闘を行う。当初は、キュアダイヤモンドを相手に優勢に立つが、後から駆け付けた小狼とキュアダイヤモンドとの連携により、最後は、『シャベル・マグナム』の暴発に巻き込まれて、敗北した。その後は、グラン・ゲインズにより、次元管理局の本部へと転送された。

レグルス帝国軍（部隊名称）（オリジナル）

どこかの次元に存在する、全次元の支配を目論む巨大帝国の軍隊。その為に、『次元の王』の力を宿した13の武器を探している。

数多くの部隊が存在するが、戦闘部隊は全部で8つ存在し、ブル・ドーザの部隊は、「第8戦闘部隊」に属する。

既に支配されている世界もあり、本作においても、

「グラン・ゲインズ」の最大の障壁の1つとして立ちただかることになる。

第10話 ㄱ 再会 ㄱ

美少女「……………」

進之介「あ……あのー……………」

マナ「ちよ……ちよつと、どういう事ですか!?!」

真琴「納得いかないわ!!どうしてシンが……………」

レジーナ「そーよそーよ!!それに、貴女はいつたい

誰なのよ!?!」

アクア「……私は地球連邦軍『次元管理局』所属、

独立外部部隊『グラン・ゲインズ』隊長の

アクア・マーカーリー大佐です。」

マナ「グラン……ゲインズ?」

六花「た……大佐って……………」

あります「軍の中でもかなり階級が高い方の様ですわね……………」

亜久里「それに…………『次元管理局』って、何ですか?」

アクア「この世界を他次元の侵略から守護する為に結成された

組織で、私達はその実行部隊の1つなのです。」

ねこ娘「……そういう割には、ここへ来るのが随分と

遅かったじゃない!?!」

アクア「……私達も今まで、別の場所にてレグルス帝国軍と

戦闘を行い、退けてきたばかりなのです。

そして先程、この町に破壊剣（ラグナロク）の契約者が

現れたとの情報が入った為、私が一足早く、

ここへ来た…………という訳です。」

「ゴォー……………」

と、アクアが説明していた時、大貝町の上空に、ペガサスの様な
外見をした戦艦が現れた。

さくら「ほえ……………」

ケロベロス「何やあれは、戦艦か!?!」

六花「まさか……レグルス軍の増援!?!」

アクア「いいえ、私達の強襲戦艦…………『アルテミス』です。」

「シューーーーン……。」「グイーーーーン」

そして、『アルテミス』は大貝第1中学校のグラウンドに、そのまま着陸した。そして、入り口のハッチが開くと……

ラピス「よっしゃー!! 敵はどこだー!!」

アンズ「ラピス!! 一人で飛び出さないでよ!!」

リータ「ちよつと、二人共!!」

と3人の少女が勢いよく飛び出してきた。

アンズ「つて……あれ? 何だかもう終わっちゃってるっポイ……。」

ラピス「えっ!? うっそーっ!! せっかく活躍できると思ったのに、

ありえなーーーい!!」

リータ「あなた達……さつき、姉さまが言ってた事、

聞いてなかったの? あたし達は、この戦闘の

後処理をする為に来たのよ。」

ありす「……………」

亜久里「……………」

ねこ娘「……………」

真琴「……何? あの子達……。」

さくら「あの子達も、兵隊さんなのかな……?」

ケロベロス「何か、みよーなのが来たで……。」

「ダダダダダダダ……。」

そして、3人に続いて、連邦兵達も続々と外に出てきて、整列をする。

連邦兵①「……………」

連邦兵②「……………」

連邦兵③「……………」

鬼太郎「普段見ている人間達とは、さすがに雰囲気違いますね、父さん。」

目玉おやじ「うむ、よく訓練されておるようじゃ。感心、感心。」

と、鬼太郎と目玉おやじが連邦兵に感心の眼差しを向けていると……。

連邦兵④「姫さま……っ!!?」

連邦兵⑤ 「準備完了であります！！！！」

連邦兵⑥ 「早く、我々にご命令を！！！！」

と連邦兵は、次々と目をハートの形をさせながら、アクアからの命令を待っていた。

六花「ひ……姫さま……？」

レジーナ「何なの……あれ？」

ねこ娘「……気持ち悪い……。」

と、その様子を見て、かなり引き気味となる一同……。

アクア「はあ……わかりました。それでは始めてください！！」

連邦兵⑦ 「了解であります！！！！」

連邦兵⑧ 「姫さま、我々の活躍をとくどご覧あれ！！」

連邦兵⑨ 「では、行って参りまーす！！？」

とアクアの命令を受けた連邦兵達は、目をハートにさせながら、町中に散らばり、レグルス兵の回収へと向かった。

鬼太郎「父さん……やっぱり、前言撤回します。」

目玉おやじ「何なのじゃ、あやつらは……。」

ラピス「あーあ、つまんないの……。」

アンズ「ぼやかないのラピス、これも立派な任務でしょ。」

リータ「そうですね。では、姉姉さま、行ってきます！！」

アクア「お願いね、3人共。」

と、ラピス・アンズ・リータもレグルス兵の回収へと向かった。

進之介「……。」

アクア「さてと……ご同行願えますね？桑田進之介君……。」

マナ「だーかーら！！何でシンが逮捕されなきゃいけないんですか！！？」

六花「彼はみんなを守る為に、必死で戦ってくれたんですよ！！」

真琴「なのに、どうして！！」

アクア「……彼が破壊剣（ラグナロク）の契約者だからです……。」

あります「それだけの理由で……？」

亜久里「到底、納得できませんわ！！」

レジーナ「そーよそーよ！！」

アクア「私達の任務には、彼の様な、契約者…

『次元の王候補（ディオケイター）』の捕獲、

もしくは打倒も含まれているのです。

『第2次次元大戦』の元凶とも言える彼らの…。

それに先程、彼は『次元の王になる』という

宣言まで行いました。そんな人を

野放しに出来るわけが無いでしょう？」

ありす「次元の王候補（ディオケイター）…？」

真琴「そ…それは…。」

マナ「でも…でもシンは違うもん!!シンはみんなを守る為に!!」

アクア「『次元の王』の事を何も知らないあなた達の意見を

聞くつもりはありません!!」

マナ「!!!」

と納得がいかないマナ達の言葉を険しい表情で一蹴するアクア。

進之介「あれ…何だろう?…今のあの人の感じ…

前にどこかで…。」

と、進之介がアクアの雰囲気はどこか懐かしさを感じていると、

レグルス兵の回収に向かっていたラピス・アンズ・リータの3人と、

連邦兵達が、アクアの元へと戻ってきた。

ラピス「姉姉さま!」

アンズ「レグルス兵の回収、」

リータ「全て完了しました!!」

連邦兵達「姫さま…???」

アクア「みなさん、ご苦労様でした!!」

ねこ娘「回収したって…何処にもいないじゃない!!」

アンズ「ああ、この『捕縛転移（キャパシテイ）』システムを使って、

本部に直接、転移させたのよ。」

リータ「でなければ、これだけの人数を処理できませんから。」

ラピス「わかった?ねこのおばちゃん!!」

ねこ娘「な…んですって!?!」

と言いながら、鋭い爪を出し、憤るねこ娘。

ラピス「何よ、やる気!? 相手になるわよ、『化けねこ』のおばちゃん!!

と、ファイティングポーズをとりながら、ねこ娘を挑発するラピス。アクア「二人共、やめなさい!! 今はそんな事をしている場合ではありません!!」

ラピス「ご……ごめんなさい、姉姉さま……。」

ねこ娘「す……すみません……。」

と二人を叱責するアクアの迫力に押されて、畏縮するラピスとねこ娘。

進之介「やつぱり……あの人……。」

マナ「……シン?」

進之介「……。」

上空

バイエルン「これはこれは、珍客だな……。」

アルト「どうするんだい? このままだとあの失敗作、

連れていかれそうだけど?」

バイエルン「放っておいて構わん。それに……『3000年ぶりの再会』を

邪魔するのも野暮というものだ。」

アルト「『3000年ぶりの再会』? ああ、そういう事か……。」

バイエルン「では、いくぞアルト……。」

アルト「いつもの褒美はあげないのかい?」

バイエルン「あの女がいれば不要だ。それに、奴らに我々の存在が気付かれたら、

何かと面倒だからな……。」

アルト「了解!!」

バイエルン「ではまた会おう、桑田進之介…… これからの戦い、期待しているぞ。」

「シュン!!」と言いながら、アルトとバイエルンは姿を消した……。

地上

アクア「では次は、私の出番ですね。」

「パァー………ッ!!」とアクアは

そう言いながら、魔法陣を出現させ、魔力を解き放つ。

進之介「!!!」

ケロベロス「何や!!このごつつい魔力は!!」

六花「あの魔法陣、シンの物と似ているわ……。」

真琴「何する気なの!?!」

リータ「町を元に戻すんです。」

アンズ「そうしなきゃ、生活できないでしょ?この町の人達。」

ラピス「あんた達、ラッキーね!!姉姉さまの魔法が見られるなんて!!」

アクア「時空魔法(ドライブ・アタック)!!時間逆転(ウインド・タイム)!!」

「シュー………ン!!!」「カチ………ン!!!」

と、アクアが呪文を唱えると、大貝町全体の時間が、巻き戻っていき、

レグルス帝国軍に襲撃される前の状態に戻った。

さくら「ほえ………っ!!」

小狼「す………すごい………俺やさくらとは桁違いだ……。」

ケロベロス「何もんや、あの姉ちゃん………?」

ありす「こ………これって………」

真琴「『次元の監視者(ダイダロス・アイ)のバイエルンって人と同じ能力………?』」

亜久里「では、あの方は………!?!」

進之介「やつぱり………これではつきりしたよ……。」

「ザッザッザッザッ……。」

マナ「………シン?」

と、進之介はそう言いながら、アクアの傍へと歩を進める。

アクア「………どう………しましたか………?」

進之介「君………ミリカ………でしょ………?」

マナ「!!!」

真琴「ミリカって………確か……。」

六花「『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の2人が言ってた

3000年前に『次元の王』を封印したっていう

グランバニア王国の王女様…？」

亜久里「そして…シン・ザ・バーネットさんと恋人同士だった…。」

アクア「…… はい!!」

「ダダダダ…。」「ガバツ!!」

とアクアはそう言いながら、進之介の所に向かっていき、そのまま抱き着いた。

ラピス「ひ… 姉さま!？」

アンズ「ど… どうしたのですか… 急に…？」

リータ「あの方とお知り合いなのでしょう…。」

それに、ミリカって…。」

アクア「シン… やつと… やつと会えた!!」

進之介「久しぶりだねミリカ… でも、どうして？」

君はあの時…。」

アクア「これです…。」

と、アクアは、制服のポケットから懐中時計を取り出し、進之介に見せた。

進之介「これって… たしか僕… いや、シンが君にあげた…。」

アクア「はい… 3000年前にあなたから私のバースデープレゼントと

してもらったものです。私は3000年前に、もしもの事があつた時の為、この懐中時計に自分の力を半分を封じていたのです。

そして、私が息絶えた時に、この懐中時計に魂が宿り、この次元に

転移してきました。そして、15年前、当時2歳に事故で亡くなった

この体の少女に魂を憑依させたのです…。そして、私は『アクア・マーキュリー』として、第2の人生を歩み始めたの

です。」

進之介「… そうだったんだ…。」

レジーナ「何か… おとぎ話みたい…。」

真琴「あなた達はこの事、知っていたの？」

ラピス「し… 知るわけないじゃん!!」

アンズ「初耳です…。」

リータ「あたしも驚きました…。」

マナ「… シン… アクアさん…。」

進之介「それじゃ、僕の事も…。」

アクア「… わかっていました… けれど、あなたがシンの記憶まで

あるなんて、思いませんでした…。だから、嬉しかった…。
あなたが私の事を覚えててくれたのが…。

それならば尚更、あなたを『次元の王』にするわけには
いかないのです…。」

進之介「けど、僕は…。」

アクア「守るなら… 『次元の王』にならなくても出来る事です!!」

「ガバツ!!」

進之介「… …!!?」

アクア「ですから… 破壊剣（ラグナロク）を私に預けてくださ
い…。」

呪いを解く方法はいつか必ず見つけます!!だから…

このまま私と一緒に来てください!!

もう、あなたと離れるのは嫌です…。」

と、アクアはそう言いながら、再度、進之介に抱き着いた。

進之介「… ミリカ…。」

レイス「そうされては困るんだけどね。」

アクア「!!!」

「シューー!!!」

と、そこへ、帰ったはずのレイスが再び姿を現した。

進之介「レイス!?!」

レイス「やれやれ、妙な魔力を感じたから戻ってきてみれば……
かつての恋人同士とはいえ、我が主をたぶらかすのは
やめてもらえないかな？ ミリカ・ド・グランバニア君？」

マナ「レイスさん……。」

ラピス「何よあいつ、いきなり現れて姉姉さまに向かつて!!」

アクア「あなたは……『神々の集団（カタストロフィー）』の……

あなたがシンを!!」

レイス「勘違いしないでもらおうか？ 破壊剣（ラグナロク）が彼を

契約者に選んだのだ。そして私は、彼を王へと導く

役目があるのさ。邪魔しないでもらおうか？」

アクア「そんな事……認める訳がないでしょう!!」

レイス「ならば、どうする？ この私と勝負するかね？」

と不気味な表情をしながら、魔力を放出するレイス。

アクア「いいでしょう……あなたにシンを好きにはさせません!!」

と。対するアクアもレイスを睨みながら、魔力を解き放つ……。

「ビシビシビシビシ……。」と、二人の魔力が徐々にぶつかり合
う……。

真琴「ちよ……ちよつと!!」

ねこ娘「こんなところでやりあう気!？」

ラピス「姉姉さまーっ!! そんな奴、やっちゃえーっ!!」

ケロベロス「あかん!! あんなごっつい魔力同士がぶつかったら、

この町は滅んでまうで!!」

さくら「ほえー……っ!! そんなのダメだよ!!」

進之介「ちよつと主人共、ストーリー……ツプ!!」

アクア・レイス「!!!」

と、そう言いながら、一触即発状態だったアクアとレイスの間に
割って入り、二人を止める進之介。

アクア「シン……。」

レイス「我が主……。」

進之介「……レイス、ミリカと二人で話をさせて。」

レイス「話してどうする気だい？」

進之介「いいから……お願い。」

レイス「わかった……好きにしたまえ。」

進之介「ありがとうレイス。ミリカ、行こう……。」

アクア「は……はい……。」

と進之介はアクアの手を引き、少し離れた場所へと歩を進めた。
ありす「助かりましたね……。」

六花「ほんと……心臓に悪いわ……。」

真琴「けど、あのレイスと勝負しようとするなんて……」

あの王女様も相当なものね。」

ラピス「当ったり前じゃん!! 姉姉さま、すつごく強いんだから!!」

マナ「シン……。」

レイス「……。」

↳ 離れた場所 ↳

進之介「ミリカ……。」

アクア「シン……もう一度だけ言います……破壊剣(ラグナロク)を

渡して、私と一緒に来てください!! あなたはあの男に

騙されているんですよ!!」

進之介「……それはできない。」

アクア「どうして!? みんなを守るためと言うのなら、

破壊剣(ラグナロク)じゃなくても……。」

進之介「あの時、君を守れなかったから……。」

アクア「!!!」

進之介「3!000年前……『次元の王』に戦いを挑んだけど、僕らは

全く歯が立たなかった……。そして君に……つらい選択を

させてしまった……。僕は……シン・ザ・バーネットは

その事をずっと悔やんでいたんだ……だから、僕は、

彼の思いを継ぎたいと思い、破壊剣(ラグナロク)と

契約した。けれど、始めはそのせいでこの町を……

みんなを巻き込んでしまって、契約した事を、

後悔した時もあったんだ……。」

アクア「でしたら、尚更……。」

進之介「けど、きつきの戦いで決心がついたんだ。僕は王様になつて、

この世界を… 大好きなみんなを守るって!! その為には、この破壊剣（ラグナロク）が必要なんだ…。

だから… これは渡せない。」

アクア「……………」

進之介「そしたら… こうしょつか!!」

アクア「… えっ?」

進之介「僕は君と一緒に行く!! そして、君は僕を監視すればいい。

そして、僕がもし、道を誤った時は… いつでも倒して!!

君の判断なら… 僕は信じられるから。」

アクア「… シン…。」

進之介「ダメ… かな…?」

アクア「… わかりました!! あなたの決意を信じます!!」

進之介「ほんと!?」

アクア「はい!! それに、あなたが一緒に来てくれる…」

こんなに嬉しいことはありません!! よろしくお願いします

!!」

進之介「うん!! ありがとう、ミリカ!!」

と進之介は、ミリカに笑顔を向けながらこう語った。

アクア「……………」

進之介「… どうしたの、ミリカ?」

アクア「… あなたのその笑顔が見たかった…。」

例え、今は違う存在でも… あなたは私が愛した

シン・ザ・バーネットそのものです。」

進之介「… それじゃ、戻ろっか。」

アクア「はい!!」

と話を終えた進之介とアクアは、みんなの所へと歩を進めた。

六花「戻ってきたわ!!」

レイス「どうやら、話がついた様だね。」

マナ「シン… アクアさん… どうだったの?」

進之介「うん。僕は、この船に…『グラン・ゲインズ』に

入る事にしたんだ!!」

真琴「えっ!？」

ラピス「な…何ですってー!？」

アンズ「姉姉さま…本当ですか？」

アクア「そうよ。彼には私達のお手伝いをしてもらう事にしたの。

これからの戦い…人手が欲しいところだし、

何より、彼は信頼できます。もちろん、本部には

話は通しておきます。」

六花「何だか…すごい展開になってきたわね…。」

亜久里「まさか、連邦軍が一緒だなんて…。」

リータ「まさか、あなた達も船に乗るのですか？」

マナ「もつちろん!!シンが行くなら、あたし達も一緒だよ!!」

アンズ「姉姉さま…どうします?」

アクア「人手はいくらあってもいいですので、拒む理由はありません。

入隊を許可します。」

レジーナ「本当!?やったー!!」

ありす「これで不安なく、旅立てそうですね。」

ラピス「そういう事なら、これからビシビシとこき使ってやるから

覚悟しなさい、新入り共!!」

真琴「勘違いしないでちょうだい!!あたし達は、あなた達の部下に

なるつもりはないわ!!」

ラピス「何だと、この生意気女!!」

真琴「何よ!？」

アクア「二人共、やめなさい!!」

真琴・ラピス「は…はい…。」

と、先程と同じく、アクアの迫力ある叱責に押された

真琴とラピスであった…。

連邦兵「姫様ーっ!!大変です!!」

アクア「どうしたのですか!？」

連邦兵「トランプ共和国のジヨナサン・クロンダイク大統領より、救
援要請です!!」

トランプ共和国が何者かの襲撃を受けた模様です!!」

亜久里「トランプ共和国が!？」

マナ「そんな!?! いったい誰が……。」

進之介「トランプ共和国って……確か、まこぴーの故郷の……。」

真琴「うん…… 助けに行かないと!!」

レイス「どれどれ……」

とレイスは、左手に持っている本を開き、トランプ共和国の
現状を確認した。

レイス「これは……」

進之介「どうしたの? レイス……。」

レイス「我が主…… これを見てくれ……。」

とレイスは本に映し出された映像を、空間にそのまま投影した。

ねこ娘「な…… 何!? この化け物達!!」

マナ「赤色や灰色…… 色んな種類がいつぱいいるよ……。」

ケロベロス「それに何やあいつら…… まさか、人の魂を

喰つとるんか!？」

犬山まな「ひ…… ひどい!!」

鬼太郎「妖怪…… ではなさそうですけど……」

父さん、何者なんでしょう?」

目玉おやじ「わからん…… わしもあんな怪物は見たことないぞい。」

アクア「まさか、あの怪物たちは……。」

レイス「そのまさかだよ…… 『魔神族』さ。」

六花「魔神族……?」

レジーナ「何なの、それ……。」

レイス「こことは別の次元にある『ブリタニア』という大陸に存在
する

怪物達さ…… 彼らは人間を襲い、その魂を喰らうことで、力
を

得るんだ。かつてはそこにいるミリカ君や3000年前の

我が主も

『次元大戦』の時に交戦経験がある。」

ありす「それなら、早く助けに行かないと!!」

真琴「もう2度と、あたしの故郷を滅ぼさせはしない!!」

アクア「総員、船に乗ってください!!大至急、トランプ共和国へと

向かいます!!」

ラピス「ラジャー!!姉さま!!」

さくら「あたし達も行きます!!」

ありす「えっ!?!」

マナ「さくらちゃん…いいの?」

小狼「あんな光景を見せられて…放っておけるわけないだろ?」

六花「小狼君…。」

知世「わたくしは、さくらちゃんが行くというのなら、

どこまでもお供いたしますわ!!」

ケロベロス「そういう訳や!!」

鬼太郎「それは僕達も同じ気持ちさ。」

ねこ娘「真琴の故郷だつていうんなら、尚更行かなきゃね!!」

目玉おやじ「何の罪もない人間があんな風に襲われるのは

あつてはならん事じゃ!!」

犬山まな「わたしは戦えないけど…せめて、みんなを

応援したいの!!」

真琴「ねこ娘さん…鬼太郎さん…ありがとう!!」

と涙を流しながら鬼太郎達に、感謝の言葉を述べる真琴。

進之介「マナ、僕達も行くこう!!」

マナ「うん!!」

レイス「待つんだ、我が主。」

進之介「どうしたの、レイス?」

レイス「一つ提案だが、これから私と修行を行わないか?」

進之介「修行…?」

真琴「ちよつと!!何言ってるのこんな時に!!」

亜久里「そうです!!シンがないと、戦力が…。」

レイス「でない、今の我が主では、『彼ら』には勝てない。」
ありす「『彼ら』…？」

レイス「？…『十戒』さ…。」

進之介「!!!」

マナ「『十戒』…？」

アクア「何ですって!?なぜ『十戒』が?あの者達は3000年前に…。」

レイス「何者かが封印を解いた…。」
世界に「…。」

手引きした者がいるようだね。

どうやら、『真実』のガランと『信仰』のメラスキュラ…

この2名がバックにいる様だ。」

アクア「ガランとメラスキュラが…。」

レイス「(そして…『あの男』も…)」

進之介「でも、修行って何をするの？」

レイス「君本来の魔力を引き出す修行さ。」

進之介「僕本来の…魔力？」

レイス「そう…君はシン・ザ・バーネットの実験体(クローン)だ。」

ならば、君の中にも、魔力が備わっているはずさ。

その魔力を引き出せれば、君は破壊剣(ラグナロク)の力を

さらに引き出すことが可能になるはずだよ。」

進之介「けど、そんな時間なんて…。」

レイス「それについては、考えがある。さあどうする、

我が主…？」

進之介「…。」

マナ「シン…行って!!」

進之介「マナ…。」

マナ「これからの戦い…シンが強くならなないと、絶対に乗り切れ
ないと思う。」

だから、今回はあたしたちが頑張るから!!」

進之介「でも…大丈夫？」

マナ「当たったり前でしょ!!あたしを誰だと思ってるの？」

大貝第一中学の元生徒会長よ!!」

進之介「うん：．．わかったよマナ!!絶対強くなって戻ってくるから、

それまで無茶したらダメだよ。」

マナ「うん!!」

進之介「それと、ミリカ：．．」

アクア「わかっています：．．あなたが来るまで、この子達は、

私が責任を持って守ります。」

進之介「ありがとう、ミリカ!!」

レイス「彼女が一緒なら、時間は稼げるだろう：．．

では、行こうか、我が主!!」

進之介「うん!!」

「シューーーーーー」と

進之介とレイスはその場から姿を消した。

マナ「シン：．．気を付けてね：．．。」

アクア「相田マナさん：．．でしたね？」

マナ「は：．．はい!!」

アクア「彼の言う通り、もし『十戒』が現れたら、

絶対に手を出さないでください!!

あの者達は、今のあなた達がどうこうできる

相手ではありませんから。」

マナ「そんなに強いんですか?その『十戒』って：．．」

アクア「おそらく、今の私よりも：．．です。」

マナ「：．．：．．。」

アクア「シンが戻るまで、私達は私達の出来る事をやりましょう!!

行きますよ!!」

マナ「はい!!」

とアクアとマナはそう言いながら、最後に乗艦した。

そして、『アルテミス』は、『魔神族』の襲撃を受けている
トランプ共和国へと向かうのだった。

【オリジナル設定】

アクア・マーキュリー（女）（17歳）（オリジナル）

地球連邦軍次元管理局所属の独立外部部隊『グラン・ゲインズ』の隊長を務めている美少女で、階級は『大佐』、水色の長い髪で黄色の髪飾りを付けているのが特徴の本作のもう一人のヒロインである。

その正体は、3000年前に次元の王を封印した際に死亡したグランバニア王国第3王女『ミリカ・ド・グランバニア』の記憶と力を受け継いだ少女であるが、アクア・マーキュリー『本人』は、当時2歳に、不慮の事故で亡くなっており、ミリカの魂を宿した懐中時計が憑依して、復活を果たす。

そして成長し、父親が総司令を務める地球連邦軍へと入隊すると、すぐさま頭角を現して数々の功績をあげ、17歳の若さで、『大佐』へと昇進し、世界を他次元の侵略から守る為に

結成された『グラン・ゲインズ』の隊長に任命される。

その容姿や言動、立ち振る舞い、強いリーダーシップから、ラピス・アンズ・リータの3人娘からは『姉さま』、

他の部下からは『姫様』と呼ばれている。

レグルス帝国軍が侵攻してきた際、破壊剣（ラグナロク）の契約者である

進之介の情報を聞きつけた為、当初は捕獲を目的で彼に接近したが、

彼がかつての恋人でもあった『シン・ザ・バーネット』の記憶と力を受け継いだ事を知ると、進之介に好意を抱き、破壊剣（ラグナロク）を自身に預けて、共に来てほしいと懇願するが、断られる。その代わり、進之介から

『グラン・ゲインズ』で共に戦い、万が一、道を誤ったら、

いつでも倒して良いと、決意の提案をされると、これを快諾。

以後は進之介と共に、部隊の中核を担っていくこととなる。

強力な魔力の持ち主ではあるが、現時点では、ミリカの全盛期の三分の一にも満たない。

しかしそれでも、ラピス・アンズ・リータの3人娘や、マナ達プリキュアを遥かにしのぐ戦闘力を持ち合わせている。

ラピス・シュナイダー（女）（14歳）（オリジナル）

『グラン・ゲインズ』に所属するアクアの部下で、階級は『少尉』、ピンクのツインテールが特徴の明朗活発な少女である。戦闘は、肉弾戦が主体で、『闘庄』も使用可能で、戦闘力もかなり高い。3人娘の中ではリーダー格であり、

アンズ・リータとは大の仲良しで、常に行動を共にしている。アクアを『姉姉さま』と呼び、尊敬している。

アンズ・ハットリ（女）（14歳）（オリジナル）

ラピスやリータと同じく『グラン・ゲインズ』に所属するアクアの部下で、階級は『少尉』、赤紫色のショートカットが特徴の少女である。古くから続く忍者の一族の末裔であり、忍術が得意である。戦闘においては、連邦軍が開発した、『シャドウ・スーツ』を身に纏い、身体能力を向上させて、

主に敵の陽動・かく乱する役目となる。

ラピスと同じく、アクアを『姉姉さま』と呼び、尊敬している。

リータ・クランベリー（女）（14歳）（オリジナル）

ラピスやアンズと同じく『グラン・ゲインズ』に所属するアクアの部下で、階級は『少尉』、金髪のお団子頭が特徴の少女である。3人娘の中で唯一、魔力を

持ち合わせているが、魔法は使用できない為、連邦軍の最新兵器である『サテライト・バスター』を使用して戦闘を行う。主な役割は、敵の狙撃と、味方の後方支援である。

ラピスやアンズと同じく、アクアを『姉姉さま』と呼び、

尊敬している。

第11話 始動！グラン・ゲインズ!!

く アルテミス艦内 く

真琴「……………」

マナ「まこぴー!!」

真琴「マナ…みんな…。」

六花「大丈夫…?」

ありす「とても心配でしょうが…。」

亜久里「焦りは禁物ですわ。」

レジーナ「そーよ!!」

真琴「わかつてる。けど… あたし、怖い…。」

また、あたしの故郷が無くなってしまうんじゃないかと

思うと…。」

マナ「大丈夫!! 相手が魔神族だろうと何だろうと、

トランプ共和国は絶対に守って見せる!!」

真琴「マナ…。」

マナ「それに… あの時と違って、今はあたし達の他にも、

大勢の仲間がいるんだから!!」

ねこ娘「その子の言う通りよ、真琴!!」

真琴「ねこ娘さん、それに鬼太郎さん達…。」

鬼太郎「僕も全力を尽くすよ。」

さくら「わたしも頑張りますから!!」

小狼「だから、心配するな!!」

ケロベロス「どーんと構えとき!!」

と、真琴を励ます鬼太郎やさくら達。

犬山まな「みんなで力を合わせれば、

きつと大丈夫だから!!」

マナ「頑張ろう、まこぴー!!」

真琴「ありがとう、みんな…。」

ありがとう、マナ!!」

マナ・犬山まな「うん!!」「えっ!?!」

と、マナとまなは同時に返答したことを互いに驚きながら、顔を見合わせた。

ねこ娘「・・・そう言えば、あんたの名前、

『相田マナ』だったわよね・・・。」

犬山まな「えっ! そうなの!?!」

マナ「うん!!」

犬山まな「わたし、『犬山まな』って言います!!」

プリキュアがわたしと同じ名前だなんて、

感激だなーっ!! ぜび、お友達になってください!!」

マナ「もっちろんだよ!! 手と手を繋げばお友達!!」

よろしくね、まなちゃん!!」

犬山まな「こちらこそよろしく、マナちゃん!!」

マナ・犬山まな「うふふふふ・・・!!」

と、互いの両手を握り合い、

友情で結ばれたマナとまなであった。

ねこ娘「何だか、ややっこしいわね・・・。」

真琴「くすっ!!」

と、マナとまなのやり取りを見て、笑顔が戻った真琴。

ラピス「おーい!! みんな!! 今からブリーフィングを

始めるから、集合ーっ!!」

とそこへ、ラピスがやって来て、ブリーフィングの時間になった為、

マナ達を呼びに来た。

レジーナ「ぶりーふいんぐ? 何それ?」

六花「作戦会議の事よ。」

あります「あれだけの数を相手にするのですから、バラバラで

戦っついてはいけません。ですから、現況の確認を

含めて、作戦を立てるのです。」

亜久里「いよいよ、軍隊らしくなってきましたわね!!」

目玉おやじ「鬼太郎、わしらも行くかのう。」

鬼太郎「はい、父さん。」

マナ「行こう、まこぴー!!」

真琴「うん!!」

と、真琴の手を握り、ブリーフィングへと向かうマナであった。そして、その頃、トランプ共和国では……。

トランプ共和国

アニエス「ダイナバ・ミ・トーチ!!」

「ドドドドドド!!」

アデル「はぁーっ!!」

「ズバババババ!!」

白色魔神「!!!」

青色魔神「どぎゃーっ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

と、アニエスは呪文を唱えると、火の玉を連射して、アデルは魔法で、無数の剣を出現させて、それぞれ、魔族を撃退していった。

アニエス「お姉さま……この化け物たちはいつたい……？」
アデル「妖怪でもジコチューでも無さそうだ……」

もしかしたら、異世界の怪物かも知れん……」
アニエス「そんなのが、どうしてこんな所に……？」

アデル「詮索をしている余裕はないぞ。とにかく、少しでも被害を食い止めるぞ!!」

アニエス「わかったわ、お姉さま!!もう一発、行くわよ!!」

アデル「はぁーっ!!」

「ドドドドドドドド!!」 「ズババババババ!!」

と、アニエスとアデルは更に前へと出て、魔族を撃退していく。
ジョナサン「アニエスちゃん……アデルさん。」

兵士「大統領!!ここは危険です、避難してください!!」
ジョナサン「皆が戦ってるのに、そうもいかないさ。」

私とて、戦士のはしくれだ。この国は

必ず守って見せる!!それに、グラン・ゲインズも
もうすぐ来てくれるはずだ。」

赤色魔神「ブオーーーーーッ!!」

ジョナサン「!!!」

と、ジョナサンの背後から、ブタの様な姿をした赤色の魔人が現れて、

ジョナサンに襲いかかってきた。

アデル「大統領!!」

アニエス「ダメ……間に合わない!!」

ジョナサン「くっ……!!」

「ドオーーーーーーッ!!!」

赤色魔神「ブオオオオオオオオオッ!!!」

「ドッカーーーーーーッ!!!」

と、突如? 赤色魔神に、高出力のビームが直撃し、消滅した。

アデル「!!!」

アニエス「!何……今の……?」

ジョナサン「来てくれたか!!」

「シューーーーーーッ!!!」

と、ビームが飛んできた方向から、アルテミスが出現した。

リータ「目標、消滅しました。

アクア「危ないところでしたね……リータ、ご苦労様!!」

アンズ「さすが、うちの砲撃手ね!!」

マナ「すっごーい!!何、今の!？」

ラピス「リータの『魔砲』、『サテライト・バスター』よ!!」

六花「『魔砲』?」

リータ「わたしは生まれながらに魔力を持っていますが、

魔法を使うことはできません……。ですから、連邦軍の

最新技術を駆使して開発されたのが、この『魔砲』です。

ちなみに、単独での運用ではなく、このように、

アルテミスの副砲に接続して使用することも可能です。」

ありす「すごい技術ですね!!」

アンズ「ちなみにわたしは、連邦軍が開発した

この「シャドウ・スーツ」を装着して戦います。

わたしは、忍びの一族の末裔でして、忍術を使いこなすことができます。」

さくら「うわあ〜！見てみたいなく!!」

と、アンズに興味津々になるさくら。

ラピス「そして、あたしは喧嘩上等!!拳自慢の

『闘圧』使いだから、このままで充分よ!」

小狼「お前も『闘圧』が使えるのか?」

ラピス「何あんた、『闘圧』知ってんの?」

鬼太郎「ブル・ドーザっていう人間もそうだったから。」

ラピス「ああ、そういえば...けど、あんなゴリマッチョと

一緒にしないでくれる!?あたしのほうが

断然、エレガントで強いんだからね!!」

ねこ娘「自分で言っちゃ、世話ないわね。」

ラピス「何だとおばさん!!魔族の前に、まずあんたから

ボッコボコにしてやろうか!」

ねこ娘「上等じゃない!!かかってきなさい!!」

と、ファイティングポーズをとりながら挑発する

ラピスに対して、鋭い爪をたてながら臨戦態勢を

取るねこ娘。

アクア「あなた達、いい加減にしなさい!!

戦う相手が違うでしょう!!」

ラピス・ねこ娘「す...すみません...」

と、アクアの迫力ある叱責に、またまた委縮するラピスとねこ娘。

鬼太郎「!!!まな、あれを見てくれ!」

犬山まな「!あれは...アニエスとアデルさん!」

目玉おやじ「なぜ、あの二人が、こんなところにいるんじや?」

アクア「大統領、ご無事ですか!」

ジョナサン「マーキュリー大佐... 救援、感謝いたします!!」

アクア「後は、我々に任せて、大統領は艦内へ!!」

ジョナサン「しかし...」

アデル「大統領、あの者の言う通りです。」

アニエス「後は、わたしたちが戦うわ!!」

ジョナサン「すまない…。では、マーキュリー大佐、お願いします!!」

アクア「では、アルテミスの中へ!!」

「シユン!!」と、アクアはジョナサンを、アルテミスの中へ瞬間移動させた。

アニエス「えっ、うそ!？」

アデル「あんな芸当ができる人間がいるのか…。」

く アルテミス艦内ブリッジ く

ジョナサン「マーキュリー大佐、感謝いたします!!」

アクア「大統領の保護は、任務の一つですから、当然です。」

マナ「ジョーさん!!」

六花「お久しぶりです!!」

ジョナサン「マナちゃん!?それにみんな!?どうしてここに?」

あります「わたし達、グラン・ゲインズに入隊したんです!!」

ジョナサン「何だって!？」

真琴「そして、トランプ共和国を救う為に、やってきました!!」

亜久里「その通りですわ!!」

レジーナ「まっかせなさい!!」

ジョナサン「マコト…。亜久里…。レジーナ…。すまない、

せっかく平和に暮らしていたのに、

また巻き込んでしまった…。」

マナ「何言ってるの!!あたし達はプリキュアだよ!!」

六花「平和を脅かす者達と戦うのがわたし達の使命です。」

あります「ですから、お気になさらないでください!!」

ジョナサン「すまない、みんな…。よろしく頼む!!」

マナ「もっちろん!!行こう、みんな!!」

六花・あります・真琴・亜久里・レジーナ「うん!!」

と、マナ達プリキュアは、ブリッジから出て行った。

アクア「では総員、出撃してください!!」

とアクアが出撃命令を出すと、アルテミスのハッチが開いて、

連邦兵達「姫様!! 出撃いたします!!」

と、まずは、バトルスーツ『G7』を装着した連邦兵達が出撃していった。

さくら「ラピスちゃん、あれは何?」

ラピス「バトルスーツ『G7』よ。おっさん達は、

生身じゃ戦闘力は、からっきしだから

あれを着て、戦ってるのよ。」

ケロベロス「あのバツタみたいな顔... どっかで見た事が

あるよーな...。」

ラピス「アンズ、リータ、わたしらも行くよ!!」

アンズ・リータ「了解!!」

と続いて、ラピス・アンズ・リータの3人娘も出撃した。

鬼太郎「ねこ娘、行くぞ!!」

ねこ娘「うん!!」

犬山まな「鬼太郎! ねこ姉さん! 気を付けて!!」

それと、アニエスとアデルさんをお願い!!」

鬼太郎「わかった!!」

小狼「さくら、俺達も行くぞ!!」

さくら「うん!!」

ケロベロス「よっしゃーっ! ワイも行くでー!!」

「シューーーーーーン」と、ケロベロスはそう言いながら、

ぬいぐるみの姿から、本来の姿である翼の生えた

ライオンの様な獣の姿へと、変化した。

目玉おやじ「お主、その姿は!？」

ケロベロス「どーや、驚いたやろ?」

ねこ娘「まあ、見かけだおしで終らない様にね。」

ケロベロス「何やとーっ!!」

さくら「ケロちゃん! 喧嘩してる場合じゃないよ!!」

鬼太郎「... 行くぞ、ねこ娘!!」

ねこ娘「はいはい。」

と、鬼太郎とねこ娘も、続いて出撃した。

知世「さくらちゃん、李君、ケロちゃん、お気をつけて!!」
さくら「ありがとう、知世ちゃん!!行ってくるね!!」

木之本桜、行きまーす!!」

小狼「李・小狼、出るぞ!!」

ケロベロス「よっしやーっ!行くでー!!」

と、さくら達も出撃した。

アデル「あ… あれは!」

アニエス「鬼太郎!?それにねこ娘も!久しぶり!!」

でも、どうしてここに?」

ねこ娘「ついでに、まなも艦の中に居るわよ!!」

アニエス「本当!?まな… 会いたいな…。」

アデル「それにはまず、この怪物達を…。」

鬼太郎「蹴散らすぞ!!」

ねこ娘「OK!!」

そして、最後に…。

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!ラブリンク!!」

亜久里「プリキュア!ドレスアップ!!」

キュアハート「みなぎる愛!キュアハート!」

キュアダイヤモンド「英知の光!キュアダイヤモンド!」

キュアロゼッタ「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

キュアソード「勇気の刃!キュアソード!」

キュアエース「愛の切り札!キュアエース」

5人「響け!愛の鼓動!ドキドキ!プリキュア」

レジーナ「出でよ!ミラクル・ドラゴン・グレイブ!!」

と、マナ達5人は変身を果たし、レジーナは

ミラクル・ドラゴン・グレイブを出現させて、出撃した。

アデル「…プリキュア?」

アニエス「あの子達が…?」

キュアハート「よろしくね!魔女さん達!!」

アニエス「わたしの名はアニエス、よろしく!!」

アデル「アデルだ…。よろしく頼む!!」

アニエス「……どうしたの？あの2人……。」

鬼太郎「……さあ？」

キュアハート「あはは……。」

「とある建物の屋上」

「あらあら……随分、賑やかになってきたわね。」

「カツカツカツ!!そうではなくては、わざわざこんな異世界に

来た甲斐が無いわ!!」

「ガラン、メラスキュラ……君達の出番は、もう少し待つてくれないか？」

メラスキュラ「わたしは別にいいわよ、めんどくさいし……けど、あなたは、

暴れたくて、ウズウズしているんでしょう、ガラン？」

ガラン「カツカツカツ!!その通りじゃが、ワシとて子供ではない。

お主の指示があるまで待つてやるわい、タクティス!!」

タクティス「助かるよ。だが、破壊剣（ラグナロク）の契約者は

いない様だね……。フツ、さすがはレイスだ。」

ガラン「さては、ワシらに恐れをなして、逃げたのではなからうな？」

メラスキュラ「それに、その破壊剣（ラグナロク）っていうのが欲しいなら、

こんなまわりくどいことをせずに、さっさと殺して

奪っちゃえば良いじゃない？」

タクティス「あの少年のバックには、レイスや次元の監視者（ダイダロス・アイ）が

いるからね。僕自身が動くと、何かと面倒だからね。」

メラスキュラ「ああ、あの神々の集団（カタストロフィー）の……

けど、そしたら、あなたの味方じゃないの？」

タクティス「それは昔の話さ。今は仕えている主が違うから、

敵同士になるかもね。」

ガラン「それに、次元の監視者（ダイダロス・アイ）か……人間の分際で

ワシらを『監視』など……気に入らんわい!!」

タクティス「人間かどうかも怪しいものだけどね……。」

メラスキュラ「そしたら、もつと賑やかにしてあげましょうか。」

怨反魂の法（おんはんごんのほう）!!」

「シューーーーーー」とメラスキュラが、魔力を使うと、

ある怪物2体が蘇り、姿を現した。

怪物①「フハハハハ！お前か……私を蘇らせたのは？」

怪物②「わたしに何の用だ？」

メラスキュラ「あそこにいる子猫ちゃん達と遊んでくれない？」

わたしがいくのはめんどくさいから。」

怪物②「キサマ……このわたしに命令する気か……？」

メラスキュラ「嫌なら別にいいのよ、また消しちやっても。」

あなた達の代わりなんて、いくらでもいるんだから。

それにあの子猫ちゃん達、あなた達、見覚えあるんで

しよ？」

怪物①「何……？、!!あれは鬼太郎か!？」

怪物②「それにあれは、キュアハート!!」

メラスキュラ「さあ、どうするの？せっかく蘇ったんだし、

また、あなた達の帝国を作るチャンスだと思うけど

？」

怪物①「……良からう。私とて、この好機を見逃す手はない!!」

怪物②「今度こそ、あの小娘達を闇に染めてやろう!!」

「シューーーーーー……。」

と、怪物①と怪物②は、そう言いながら、その場から姿を消した。

メラスキュラ「行ってらっしゃい、わたしのかわいい下僕達……。」

ガラン「何じゃ、つまらんのう!!あんな雑魚共が役に立つのか？」

タクティス「まあ、エサの役割くらいは果たしてくれるだろう。」

鬼太郎「指鉄砲!!」「バキューン!!」

ねこ娘「うにやーっ!!」「ズババババババツ!!」

アニエス「ダイナバ・ミ・トーチ!!」

アデル「はあーーーーっ!!」

目玉おやじ「こやつら、手強いぞ!!」

キュアハート「それなら、あたし達が！いくよ、みんな!!」
ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース「うん!!」

とそこへ、キュアハート達が駆けつけて、戦闘態勢をとり、
キュアハートがマジカルラブリーハープの弦を爪引くと、

プリキュア達5人がエンジェルモードになり、空中で陣形を組み立てる。

そして、「プリキュア！ロイヤルラブリーストレートフラッシュ!!」
と5人が叫ぶと、陣形の中央から、強力な虹色のビームが放たれ、
星屑のようには拡散されて、灰色魔神5体に直撃した。

灰色魔神「!!!」

「シューーーーーーッ!!」

すると、灰色魔神5体は、瞬く間に浄化されて、消滅していった。
キュアハート「やったーーーーーッ!!」

ねこ娘「さすがね…!」

アニエス「これが…プリキュアの手…」

目玉おやじ「ふむ…どうやらこの魔神族とやらには、

プリキュアの力が一番、有効な様じゃのう。」

キュアハート「よし!!このままどんどん行くわよ!!って、あれ…?
?」

ラピス「これで終わりだ、ブタ野郎!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、ラピスは右手に『闘圧』を集中させると、
拳が激しく輝きだす。すると…

ラピス「ラピス・シャイニング・ブローーーーーーッ!!」

「ドボオーーーーーッ!!」

赤色魔神「ブバーーーーーッ!!」

ラピス「ぶち抜けーーーーーッ!!」

「ボシューーーーーーッ!!」

赤色魔神「バビブバビブビャーーーーーッ!!」

と、ラピスは、必殺技の一つである『ラピス・シャイニング・ブロー』

を

赤色魔神のどでっ腹にめり込ませると、そのまま腹をぶち破って、赤色魔神を撃退した。

赤色魔神「が……べ……べ……」

ラピス「よっしやーっ！っ！！」

アンズ「こっちも終わったわ!!」

リータ「こちらも殲滅完了です。」

G7兵「我々も任務完了であります!!」

ラピス「よくやったな、おっさん達!!」

鬼太郎「……何だかもう、終わったみたいですね……。」

小狼「は……早い……。」

キュアダイヤモンド「出撃して、まだ15分しか経ってないのに……。」

ねこ娘「敵の半分以上は、あの3人娘が倒しちゃったわね……。」

キュアソード「嬉しいような……悔しいような……。」

アニエス「すごいわね……この戦力……。」

アデル「ああ。これなら仮にバックベアードが現れても、

恐るるに足りないな。」

アニエス「お姉さま、不吉な事、言わないで……。」

アデル「フツ……冗談だ。」

ねこ娘「へえ……アデルもそんな冗談を言うようになったのね。」

「ピ……?……ン!!」

鬼太郎「!!父さん!!」

目玉おやじ「どうしたんじや、鬼太郎?」

と、鬼太郎は妖怪アンテナで、強力な妖気を感じ取った。

鬼太郎「アデル……どうやら、冗談では無くなった様だ。」

アデル「何!？」

怪物①「フハハハハハ!!」

アニエス「!!この声は……まさか!!」

「シュー……ン」

バックベアード「……。」

ねこ娘「なっ!？」

鬼太郎「バックベアード!!」

キュアハート「バックベアード?」

目玉おやじ「以前、鬼太郎が倒した、西洋妖怪の親玉じゃ!!」

「じゃが、なぜ蘇ったんじゃ?」

アリエス「…お姉さま…。」

アデル「わ…わたしのせいなのか!？」

と、突然のバックベアードの出現に戸惑いを

隠せない鬼太郎達。そして…

怪物②「ハツハツハツハツ!!!」

キュアエース「えっ!？」

レジーナ「この声…まさか!？」

「シューーーーーー」

プロトジコチュー「……………」

キュアロゼッタ「うそ…。」

キュアダイヤモンド「そ…そんな…」

キュアソード「プロトジコチュー!!」

さくら「ひよつとして、キュアハートさん達が

倒したっていう敵ですか?」

キュアハート「うん…けど、どういう事!？」

魔神族の群れを撃退したのも束の間、

今度は突如、復活したバックベアードとプロトジコチューが
プリキュアや鬼太郎達の前に姿を現した。

これからの戦いの行方はどうなっていくのか…

『十戒』のガランとメラスキュラは

いつ動き出すのか、そして、共にいた『タクティス』と
名乗る者の正体は…。

トランプ共和国の運命はどうなってしまうのか!？」

第11話　　始動! グラン・ゲインズ!!　　(完)

第12話 　　復活の『P』&『B』 　　

　　く アルテミス艦内ブリッジ 　　く
　　ジヨナサン「プロト…ジコチュー!?なぜ…。」

　　犬山まな「それにバックベアードも…。」

　　アクア「メラスキュラ…彼女の仕業ね…。」

　　ジヨナサン「メラスキュラ…?」

　　犬山まな「確か、ブリーフィングの時に言ってた『十戒』とかいう

　　怪物達…ですよね?」

　　アクア「ええ、そうよ。メラスキュラには死者を復活させる力があるの。」

　　しかも、恨みや憎しみで力を増幅させてね…。」

　　犬山まな「恨みや憎しみで力を増幅って…。」

　　ジヨナサン「という事は今、あの2体の力は以前より上という事か…。」

　　知世「さくらちゃん達、大丈夫でしょうか…?」

　　アクア「大丈夫よ、あの子達は強いわ。だからあなた達も信じてあげなきゃ!」

　　犬山まな「はい!!」

　　知世「わたくしはもちろん信じてますわ、さくらちゃん達の勝利を!!」

　　ジヨナサン「頼んだよ、プリキュア…そして、みんな!!」

　　く アルテミスの外 　　く

　　バックベアード「フハハハハハハハ!!」

　　プロトジコチュー「ハッハッハッハッハッ!!」

　　鬼太郎「バックベアード!!」

　　キュアハート「プロトジコチュー!!」

　　バックベアード「久しぶりだな、鬼太郎…そして、

　　アニエスにアデルよ…。」

　　アニエス「バックベアード!!」

　　アデル「何故、キサマが!」

バックベアード「悲しいものだな…。もうお前達にバックベアード様と

言ってもらえないと思うと…。」

アニエス「だれが、お前なんか!!」

アデル「わたし達はもう、お前の部下ではない!!」

バックベアード「フハハハ!! まあ良い…。お前達を葬った後、

この国や、世界の全ての人間を妖怪化し、

今度こそ、バックベアード帝国を築けばいい話よ

!!」

レジーナ「何か、絵に書いたような悪者ね。」

キュアエース「それならば、遠慮はいたしませんわね!!」

プロトジコチュー「ならば、バックベアードよ…。どちらが先にこやつらを

葬るか、勝負しようではないか…。勝った方がこ

の世界を

思うがままとし、負けた方は勝者に従う…。」

バックベアード「良かろう…。その言葉、忘れるなよプロトジコチュー!!」

ねこ娘「何か、結託しちゃってるけどあいつら…。」

キュアソード「まさに、世界最悪親玉コンビの誕生ね!!」

さくら「ほえ…。」

小狼「それで、どう戦う?」

キュアハート「それじゃあ、あたし達プリキュアはプロトジコチューと、

他のみんなは、バックベアードをお願いね!!」

鬼太郎「わかった!!」

ラピス「まあ、気に入らないけど姉姉さまがあんたをリーダーに

任命したから仕方ないわね。」

キュアハート「えへへ…。」

キュアエース「それでは、みなさん、行きましょう!!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・レジーナ「うん!!」

と、キュアハート達は、プロトジコチューの方へと向かって行った。
バックベアード「フハハハハ!! 来い、鬼太郎…そして、愚かな人間共よ!!」

鬼太郎「行くぞ、バックベアード! 一反もめん!!」

一反もめん「はいなー!!」

ねこ娘「行くわよ!!」

と、一反もめんの背中に乗り、バックベアードの方へと向かう

鬼太郎とねこ娘。

ケロベロス「よっしゃー!! 鬼太郎に続くで!!」

さくら「飛翔(フライト)!!」「キーーーーーン!!」

と、飛翔(フライト)のカードを使い、背中に透明なりボンを出現

させた。

さくら「鏡像(ミラー)!!」「キーーーーーン!!」

続いて、鏡像(ミラー)のカードを使って、透明のりボンを鏡に

映し出して、もう一つ出現させた。

さくら「じゃあ、こっちはわたしで、そっちが小狼君!!」

小狼「ありがとう、さくら!! それじゃ、行こう!!」

さくら「うん!!」

と、さくらと小狼は透明のりボンを背中に取り付けて、上空へと飛び、

バックベアードへと向かって行った。

ラピス「あたし等も行くぞ!!」

アンズ「ええ!!」

リータ「了解!!」

「ドヒューーーーーーン!!」と3人娘もそれぞれ上空へ飛び、

バックベアードに挑んでいく。

ねこ娘「あんた達、飛べるの!？」

ラピス「おう!! あたしは闘圧を解放して…。」

アンズ「わたしはこのスーツの力で…。」

リータ「わたしは魔力の応用で飛んでいます。」

ラピス「という事で、お先に!!」

「ドヒューーーーーン!!」と言いながら、3人娘は

さらに加速して、バックベアードに攻撃を仕掛ける。

鬼太郎「待て!! 不用意に近づくな!!」

バックベアード「愚か者が!!」
「ブーーーーーッ!!」

と、バックベアードは黒いひずみを空間に発生させると、

ラピス達を閉じ込めて、自身の目玉の中へ転移させた。

ラピス「な……何だよ、これーーーーッ!!」

アンズ「不覚を取りました……。」

リータ「しまった……。」

ねこ娘「何やってんのよ……あの子達!!」

鬼太郎「今、助ける!! 霊毛ちゃんこ!!」

と、鬼太郎は一反もめんの背中からジャンプすると、

霊毛ちゃんちゃんこを右腕に巻き付けて、ドリルのように

回転させながら、バックベアードの目玉に目がけてパンチを放つ。

鬼太郎「うおーーーーッ!!」

バックベアード「死ねい!!」
「ドヒューーーーーン!!」

そして、対するバックベアードは鬼太郎に目がけて、

破壊光線を放つと、鬼太郎のパンチと激突する。

「バリバリバリバリ!!」

鬼太郎「くっ……この力は!!」

バックベアード「フハハハ……その程度か!!」

「ドーーーーン!!」

鬼太郎「うわーーーーッ!!」

ねこ娘「鬼太郎!!」

一反もめん「まかせんしゃい!!」

と、一反もめんは吹き飛ばされた方へ急いで向かって、

鬼太郎を背中ではキヤッチした。

鬼太郎「ううう……。」

ねこ娘「鬼太郎……大丈夫!」

鬼太郎「な……何とか……けど、バックベアードの奴……。」

目玉おやし「気付いたか鬼太郎よ……あやつ、妖気他に」

ケロベロス「何やと!？」

アデル「くっ…!?」

アニエス「そんな…。」

バツクベアード「それで終わりか? ならば今度はこちらから行くぞ…」

ハアーーーーーッ!!」

「ブオーーーーーッ!!!」

鬼太郎「うわーーーーっ!!!」

ねこ娘「あーーーーっ!!!」

アニエス「きやあーーーーっ!!!」

アデル「ぐわーーーーっ!!!」

と、バツクベアードは体から黒い衝撃波を鬼太郎やさくら達に向けて放ち、吹き飛ばした。

「ドゴーーーーン!!!」

そして、そのまま地面へと叩きつけられる鬼太郎やさくら達…。
さくら「う…うう…。」

小狼「何て… 力なんだ…。」

ケロベロス「バケモンやで、あいつ…。」

バツクベアード「これが今の私の力だ…。この力があれば、

最早、お前達など敵ではない…

このまま葬り去って、今度こそ

バツクベアード帝国を築いてくれるわ…

フハハハハハハハハハハ!!」

鬼太郎「く…くそっ…。」

と、魔神族の力を得て、以前より力が増したバツクベアードを相手にピンチを迎えている鬼太郎達… 一方、その頃…。

プロトジコチュー「ハアーーーーッ!!!」

キュアハート達6人「キャーーーーッ!!!」

「ドゴーーーーン!!!」

と、プロトジコチューは右手から衝撃波を放つと、

キュアハート達を吹き飛ばし、大爆発を起こした。
そして6人は地面へと叩きつけられる。

キュアハート「ううう… やっぱり、こうなっちゃうよね…。」

それじゃあ、みんな、力を貸して!!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース「わたし達の力をキュアハートに!」

レジーナ「mana!!」

「ピカーーーーーー!!」

キュアハート「キュアハート… パルテノン・モード!!」

と、キュアハートは他のプリキュアの力と、3種の神器の力と融合して、

パルテノン・モードへと変化した。

プロトジコチュー「現れたか…。」

キュアハート「行くわよ!!」 「ドヒューーン!!」

と、キュアハートは猛然とプロトジコチューへと攻撃を仕掛ける。

キュアハート「はあーーーーー!!」 「バババババ!!」

プロトジコチュー「ぐぐぐぐ…。」

キュアダイヤモンド「押してるわ!!」

キュアロゼッタ「その調子です!!」

キュアエース「このまま一気に!!」

キュアハート「やあーーーーー!!」 「バキーーーーッ!!」

プロトジコチュー「ぐおっ!?」 「ドゴーーーーン!!」

キュアハートは、ラッシュの後に飛び蹴りをプロトジコチューの腹に命中させて、吹き飛ばした。そして、

キュアハート「あなたに届け! マイ・スイート・ハート!!」

「バシューーーーーン!!」 と、キュアハートは必殺技の

マイ・スイート・ハートをプロトジコチューに向けて放つ。だが…

プロトジコチュー「… 調子に乗るな!!」 「バシューーン!!」

と、プロトジコチューはマイ・スイート・ハートを片手で

受け止める。そして、そのまま握りつぶして、消滅させた。

キュアハート「そ… そんな!」

レジーナ「どうして…?」

プロトジコチュー「確かに以前のわたしなら、今ので

終わっていたのかもしれない…。だが!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、プロトジコチューはそう言いながら、メラスキュラにより与えられた

魔神族の力を解放して、更にドス黒いオーラを纏わせた。

キュアダイヤモンド「何!?この力…。」

キュアエース「先程よりも邪悪で、より強力な力を感じます…。」

キュアハート「それでも!!」「ドヒューン!!」

と、キュアハートは力を増したプロトジコチューに向かって行くが…

プロトジコチュー「……………」。「ヒュン!!」

キュアハート「消えた!？」

「ドボーーーーーッ!!!」

キュアハート「ゲボオーツ!!」

とプロトジコチューは、キュアハートの攻撃を瞬時でかわすと、

逆にキュアハートの腹へとパンチをめり込ませた。

キュアハート「あ……が……。」

プロトジコチュー「オオオオオオオオオオツ!!!」

「ドドドドドドドドドド」

キュアハート「あああああああ!」

そして、プロトジコチューのパンチの嵐を立て続けに受けていくキュアハート。

プロトジコチュー「ふんっ!!」「バキーーーーッ!!」

「ドドーーーーーッ!!」そして最後に、

前蹴りをキュアハートに放ち、吹き飛ばした。

キュアハート「う……う……う……。」

キュアダイヤモンド「ハート!!」

キュアロゼッタ「そんな…。パルテノン・モードでも

敵わないなんて…。」

キュアソード「一体、どうしたらいいの…?」
プロトジコチュー「ハハハハハハ…」「ブーーン!!」
と、プロトジコチューは不敵な笑いをしながら、右手に力を溜めて、巨大なエネルギー弾を精製する…。
キュアハート「うう…。」
プロトジコチュー「死ねい!キュアハート!!」
とプロトジコチューがキュアハートに向けて、エネルギー弾を放とうとしたその時…:

「ピカーーーーーーッーン!!」

と、プロトジコチューの背後が突如、光りだした。

キュアエース「えっ!?!」

レジーナ「何、あの光…。」

少女①「はあーーーーっ!!」

少女②「やあーーーーっ!!」

「バシューーン!!」「バキーーーーーン!!」

プロトジコチュー「ぐおーーーーっ!!」「ドゴーーーーーン!!」

と、光の中から2人の少女が現れて、プロトジコチューをダブルキックで吹き飛ばした。

少女①「……………」

少女②「……………」

キュアダイヤモンド「ま…まさか……………」

キュアソード「あの2人は!!」

プロトジコチュー「くっ…何者だ!?!」

キュアブラック「光の使者…キュアブラック!!」

キュアホワイト「光の使者…キュアホワイト!!」

ブラック&ホワイト「ふたりはプリキュア!!」

ホワイト「闇の力のしもべ達よ!!」

ブラック「とつととお家に、帰りなさい!!」

と、プロトジコチューに向けて指をさしながら、

決め台詞を言うキュアブラックとキュアホワイト。そして…

バックベアード「死ねい！鬼太郎!!」「ブーーーーーッ!!」
鬼太郎「くっ…!?」

と、バックベアードは鬼太郎達に向けて、破壊光線を放とうとする。すると…

「ピカーーーーーーッ!!」

少女③「ルミナス！ハーティエル・アंकション!!」

バックベアード「ぐおーーーーーッ!!」

と、黄色い紙の少女が光の中から現れると、

必殺技で、バックベアードの攻撃を封じる。そして…

? 「雷鳴… 鉄槌切り!!」「ズバーーーーーッ!!」

バックベアード「ぐあーーーーーッ!!」「ドゴーーーーッ!!」

と、続いて謎の『不動明王』が現れて、バックベアードを

一刀両断し、爆発させた。そして…

ラピス「ヨッシャーーーーーッ!!ふっかーーーーッ!!」

アンズ「ふう…。」

リータ「助かりました…。」

と、バックベアードに閉じ込められていた3人娘も復活した。

そこへ、龍に乗った少年と少女4人組がやってくる。

? 「3人共… 大丈夫!」

ラピス「おう!!助かったぜ!!」

アンズ「ありがとうございます!!」

リータ「あの… あなた達は?」

ナツメ「私、天野ナツメ!よろしくね!!」

ケースケ「俺、弟の天野ケースケ!!」

アキノリ「俺は、有星アキノリ!!」

アヤメ「私は姫乃アヤメと言います!!」

ナツメ「そして、あの子が…」

シャイニールミナス「輝く命、シャイニールミナス!!」

光の心と光の意思、総てを

ひとつにするために!!」

と、決め台詞を言いながら、鬼太郎やさくら達の前に

着地したシャイニールミナス。

さくら「シャイニー…ルミナス？」

小狼「新しいプリキュアか？」

ねこ娘「それに…あの不動明王は何なの？」

不動明王「……………」。「シューーーーン……………」

少年「……………」

と、不動明王は着地しながら、元の少年の姿に戻る。

ねこ娘「えっ、人間!？」

トウマ「僕は、月浪トウマ…よろしく!!」

メラスキュラの魔力により、パワーを増して復活した

プロトジコチューとバックベアードにより、苦戦を強いられていた

キュアハートや鬼太郎達だったが、突如、現れた

キュアブラック達とナツメ達にピンチを救われた。

果たして、彼女達がこの世界にやって来た目的とは…………。

そして、戦いの行方はどうなるのか!？」

第12話　　く　復活の『P』&『B』　　く　（完）

第13話 　　～ 参上!!光の使者と朱色の鬼姫 　　～

キュアブラック「……………」

キュアホワイト「……………」

プロトジコチュー「『ふたりはプリキュア』… だと!？」

キュアダイヤモンド「ブラック!!ホワイト!!」

キュアロゼッタ「ご無沙汰してます!!」

キュアソード「でも、どうして2人がここに…?」

キュアブラック「ハート!!」

と、倒れているキュアハートの元へと向かう

ブラックとホワイト。

キュアハート「ブラック… ホワイト… ありがとう…。」

キュアホワイト「立てる?」

キュアハート「うん!!」

と、ホワイトに手を引かれながら立ちあがるキュアハート。

プロトジコチュー「まあ良い… プリキュアが何人来ようが、

わたしの敵ではない!!喰らえーっ!!」

「バシューーン!!」

とプロトジコチューはそう言いながら、キュアブラックに目かけて

パンチを放つ。しかし…

「バシューーン!!」

キュアブラック「それはどうかしら!!」

プロトジコチュー「何!？」

とプロトジコチューのパンチに対し、キュアブラックも

拳をぶつけて、受け止める。

キュアブラック「どおりやシューーンっ!!」

「バシューーン!!」

プロトジコチュー「ぐおシューーンっ!!」

と、パンチを受け止めた拳でそのまま攻撃すると、

プロトジコチューの顔面にヒットして、吹き飛ばした。

「ドシューーン!!」

キュアエース「す…すごい!!」

キュアロゼッタ「さすが、大先輩です!!」

プロトジコチュー「お…おのれ!!」

キュアブラック「行くよ、ホワイト!!」

キュアホワイト「うん!!」

と、すかさずキュアブラックとキュアホワイトは

プロトジコチューへと向かって行き、怒涛の攻撃を始める。

キュアブラック「ダダダダダダダダ!!」

キュアホワイト「ハアアアアアアアア!!」

「ドドドドドドドドドド!!」

プロトジコチュー「ぐうアアアアアアアアアア!!」

と、ブラックとホワイトのすさまじい連続攻撃に

反撃できずにいるプロトジコチュー。

ブラック「はあっ!!」「バキアアアアアア!!」

ホワイト「やあっ!!」「バシアアアアアア!!」

プロトジコチュー「ぐあアアアアアアアアアア!!」

と、ブラックは強烈なパンチをプロトジコチューの顔面に

叩き込み、ホワイトは回転しながらキックを放ち、直撃させる。

プロトジコチュー「お…おのれ…死ねアアアアアア!!」

「ドオアアアアアアアアアア!!」

とプロトジコチューは破壊光線をブラックとホワイトに向けて放つが…。

ホワイト「ブラック!!」

ブラック「ホワイト!!」「グッ!!」

「パアアアアアアアアアア!!」

とブラックとホワイトが互いの手を握り合うと、

ふたりの周りがバリアで包まれて、破壊光線をかき消した。

プロトジコチュー「何アアアアアアアアアア!!」

ブラック「今度はこっちの番よ!ブラックサンダーアアアアアア!!」

ホワイト「ホワイトサンダーアアアアアア!!」

「バリバリバリバリバリ!!」

ブラックとホワイトがそう言いながら、手を上空にかざすと、黒い雷と白い雷がふたりに降り注ぐ。

ホワイト「プリキュアの、美しき魂が!!」

ブラック「邪悪な心を、打ち砕く!!」

ブラック&ホワイト「プリキュア・マーブル・スクリュー・マックス!!」

「ドオーーーーーーッーン!!」

ブラックとホワイトが掛け声を上げると、ふたりの手から、螺旋状の激しい電撃が発射され、プロトジコチューへと向かって行く。

プロトジコチュー「こんなもの!!」「バシーン!!」

と、マーブル・スクリュー・マックスを受け止める

プロトジコチュー。すると、ふたりが腕に装着しているスパークルブレスが発動して、光を放つと…

ブラック&ホワイト「スパーーーーーッーク!!!」

「ドオーーーーーーッーン!!」

とマーブル・スクリュー・マックスが虹色に変化し、更に威力を増して、プロトジコチューを飲み込んだ。

プロトジコチュー「ぐあーーーーーッーン!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーーッーン!!!」

と、プリキュア・マーブル・スクリュー・マックス・スパークの直撃を受けたプロトジコチューは、激しく大爆発を起こした。

ブラック&ホワイト「はあ…はあ…はあ…」

キュアハート「やったーーーーーッーン!!!」

キュアダイヤモンド「すごい…」

キュアソード「さすがだわ…」

レジーナ「かつこいい!!」

と、プロトジコチューを終始圧倒した、ブラックとホワイトに賞賛と尊敬の念を送るキュアハート達。だが…

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…」

キュアロゼッタ「な…何ですか!?!」

キュアエース「この揺れは……？」

キュアソード「ま……まさか……!？」

キュアホワイト「ブラック……。」

キュアブラック「うん……来るよ!!」

「ドオー……ン!!」

と、プロトジコチューが消滅したはずの場所から、

漆黒のオーラが激しく吹き出て、そこから、

黒い翼が6つ生えて、首が2つあり、10本の腕を持ち、

胴体の巨大な口を含めて全身に口がある

禍々しい姿の怪物が姿を現した。

怪物「……。」

レジーナ「な……何あれ……？」

キュアハート「プロトジコチュー……なのかな？」

怪物「我が名は、ネオ・プロトジコチュー……。」

キュアダイヤモンド「ネオ……。」

キュアエース「プロトジコチューですって!？」

ホワイト「ブラック……。」

ブラック「ちよつとヤバイかな、あれ……。」

と、プロトジコチューが消滅したと思われた瞬間、

メラスキュラによって与えられた魔神族の力が

完全覚醒して、ネオ・プロトジコチューへと姿を変えた。その頃……

く 鬼太郎側 く

ナツメ「鬼太郎さん、大丈夫ですか？」

鬼太郎「君達は一体……僕を知っているのか？」

アキノリ「俺達は、妖怪探偵団です!!」

トウマ「世界は違いますが、僕はあなたに助けられた事が

あるんです。」

アヤメ「わたしは、お会いするのは初めてですけど。」

鬼太郎「妖怪探偵団……そうか、ありがとう君達!!」

アキノリ「は……はい!!」

目玉おやじ「世界が違う… という事は、お主達は

別の世界から来たんかのう？」

ルミナス「は… はい!!」

ナツメ「実は、こちらの世界に…。」

バツクベアード「フハハハハハ!!」

鬼太郎「!!!」

「ブクブクブクブクブク…」

バツクベアード「……………」

と、倒されたはずのバツクベアードが体を変形させて、
単眼の人型の姿で復活した。

アニエス「そんな…。」

アデル「まだ、生きていたのか!!」

バツクベアード「当然だ… 再び、我が帝国を築き上げるまで

私は死なん!!」

小狼「しぶとい奴だ…。」

ナツメ「ルミナス!!ここは私達に任せて、あなたはブラックと

ホワイトの加勢に行つて!!」

ルミナス「ナツメさん… わかりました、気を付けて!!」

と、ルミナスがその場から離脱しようとした瞬間…

バツクベアード「逃がすか… 死ね……………」

「ドシュー……………」

と、バツクベアードがルミナスに向けて、破壊光線を発射した。

ルミナス「!!!」

ナツメ「ルミナス、危な……………」

「ブオー……………」

ナツメ「はっ!!!」と、ルミナスを庇おうとした

ナツメの目が、突然赤く光りだした。そして…

「ドゴ……………」

ケースケ「姉ちゃ……………」

トウマ「ナツメ……………」

ルミナス「ナツメさ……………」

バックベアードの破壊光線が、ルミナスを庇おうとした
ナツメに直撃した。だが……

ナツメ「……………」

バックベアード「何!？」

ナツメ「その程度で……わらわを倒せると思っているのか!？」

「ブオーーーーーーッ!!!」

と、ナツメはバックベアードの破壊光線を、右手の人差し指で
かき消すと、禍々しい妖気を発して、髪がほどけると、

両目が赤く光りだし、頭から2本の角を生やすと、服装も

赤色のチャイナドレス風の衣装へと変化して、覚醒を果たす。

ナツメ「……………」

ねこ娘「何……あの姿!？」

トウマ「ナツメ……まさか!？」

バックベアード「キサマ……何者だ!？」

朱夏「わらわの名は朱夏……鬼族の頂点に立つものだ!!」

鬼太郎「朱夏……!？」

目玉おやじ「鬼族じゃと!？」

ルミナス「ナツメさん……その姿は……。」

朱夏「……早く行け!!」

ルミナス「は……はい!!」

と、朱夏に促され、急いでその場を離れたルミナス。

バックベアード「おのれーーーーっ!!!」

と言いながら、バックベアードは朱夏へと襲い掛かるが……。

朱夏「ふっ……愚かな!!」「バババババツ!!!」

バックベアード「ぐあーーーーっ!!」「ドooooooooーん!!」

朱夏は、妖力で精製したムチを手にすると、

襲いかかってくるバックベアードに目がけて、

高速で連続攻撃を行い、吹き飛ばした。

朱夏「キサマごときが……わらわを倒せると思っているのか!？」

ラピス「す……すげえ……。」

アンス「まるで、姉さまみたい……。」

リータ「うん……。」

と、朱夏の圧倒的な強さに驚愕する3人娘達。
バックベアード「うがーーーーーっ!!!」

「ブオーーーーーッ!!!」

と、吹き飛ばされたバックベアードは、すかさず立ち上がると、妖力を高めて、破壊光線の発射態勢に入った。

アキノリ「しぶとい奴だな……。」

ケースケ「けど、ちよつとヤバくない？」

朱夏「鬼太郎……。」

鬼太郎「何だ？」

朱夏「わらわの力を使え!!」

鬼太郎「君の力……？」

朱夏「早くしろ!!」

鬼太郎「……わかった!!」

鬼太郎は、指鉄砲の発射態勢に入ると、

朱夏は、鬼太郎の背中に手を当てて、妖力を注ぎ込む。

「ブオーーーーーッ!!!」

すると、鬼太郎の妖力が赤色に染まり、爆発的に増幅した。

ねこ娘「す……すごい!!」

アニエス「鬼太郎……お願い!!」

アデル「行けーーーーっ!!!」

バックベアード「死ねーーーーーっ!!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

バックベアードは、妖力を最大限まで高めた破壊光線を

鬼太郎に向けて放った。

朱夏「撃て!鬼太郎!!」

鬼太郎「指……鉄……砲ーーーーーっ!!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

対する鬼太郎も、朱夏の妖力により、3倍の威力に

膨れ上がった赤色の指鉄砲をバックベアードに向けて放った。

「バリバリバリバリ!!!」

アデル「さすがだな……。」

朱夏「……。」「シューーーーーー……。」

ナツメ「ふう……。」「へタツ……。」

と、力を使い果たした朱夏は、元のナツメの姿に戻り、その場でへたれこんだ……。

鬼太郎「ありがとう……君のおかげだ！立てるかい？」

ナツメ「……はい!!」

と、ナツメは鬼太郎の手を取り、何とか立ち上がった。

ケースケ「姉ちゃーん!!」

さくら「鬼太郎さーん!!」

と、鬼太郎とナツメの周りにみんなが集まった。

目玉おやじ「ナツメちゃん……じゃったな。」

お主、何者なんじゃ？鬼族と言っておったが……。」

ナツメ「私……朱夏の生まれ変わりなんです。そして、『空亡』との

戦いで、朱夏の力に完全に目覚めたんです!!」

ねこ娘「空亡？」

トウマ「僕達の世界の妖怪で、朱夏の命を狙っていたんだ。」

アヤメ「でも、朱夏さんは、最後は最愛の人や仲間達の魂と

一緒に成仏したはずでは……。」

アキノリ「あつ、そうだった!!それじゃあ、何でナツメは

朱夏になれたんだ？」

鬼太郎「多分、君の中に、まだ朱夏の妖力が

存在しているからだと思います。」

目玉おやじ「その妖力が、何かしらの理由で発動したんじやろ

う……。」

ねこ娘「あんたが、あのルミナスって子が危ないと思って、

助けたかったから朱夏になれたんじやない？」

ナツメ「そうかな……よくわからないけど……。」

でも、良かった!!」

と、ねこ娘の言葉に、笑顔で答えるナツメ。

小狼「悪いけど、のんびり話をしている暇はないぞ！

早く、プリキュア達の加勢に行こう!!」

鬼太郎「彼の言う通りだ。みんな、行こう!!」

さくら「はい!!」

ねこ娘「うん!!」

ナツメ「了解!!」

と、バックベアードを撃破した鬼太郎やさくら、

そしてナツメ達は、プリキュア達の所へと急いで向かった。その頃…

く プリキュア側 く

キュアハート「はあ… はあ… はあ…」

キュアブラック「つ… 強い…」

キュアホワイト「あたし達の力が… 通じないなんて…」

ネオ・プロトジコチュー「あつけないものだな… この程度か!!」

「バァーーーーーッ!!!」

と、ネオ・プロトジコチューは、右手を前にかざして、

ドス黒い衝撃波を放つと、プリキュア達全員を吹き飛ばし、

大爆発を起こした。

「ドッカーーーーーーッ!!!」

プリキュア全員「キャーーーーーッ!!!」

朱夏に覚醒したナツメと鬼太郎達の活躍によって、バックベアードの野望は砕け散った。

しかし、プリキュア達は、更に強大な力を得て復活した

ネオ・プロトジコチューを相手に、手も足も出ず、

大ピンチを迎えていた。果たして、プリキュア、

そして、鬼太郎達は、この強大な敵を

打ち破る事ができるのだろうか!?

第13話

く

参上!!光の使者と朱色の鬼姫

く

(完)

)

第13・5話 　　↳ 転生!!その名もキュアハート・リバーシア!! 　　↳

メラスキュラ「あらあら、何か大化けしちゃったわね、あのお人形さん……。」

ガラン「どうなつとるんじゃ?あれは。」

タクテイス「元々、プロトジコチューは人間の負の感情の塊だ。

先程の黒と白のプリキュアの攻撃で一度分解された結果、

魔神族の力が一気に噴き出して、その負の感情を取り込み、

何らかの化学反応を起こして更に力を増幅させたの
だろう……。

多分、今のプロトジコチューは、君達と互角か、
それ以上だと思うよ。」

ガラン「カツカツカツ!!それは面白そうじゃわい!!もし、あやつが人間共を皆殺しにできたならば、次はワシが相手を
してやろう!!」

メラスキュラ「またまた、面倒くさい事になってきたわね……。

もしもの時は、あれの処理、あなたに任せていいかし
ら?

タクテイス……。」

タクテイス「その前に、あの少年が現れてくれる事を祈るよ、フフ……。」

↳ ネオ・プロトジコチューサイド 　　↳

キュアハート「ううう……みんな……大丈夫……?」

キュアダイヤモンド「な……何とかね……。」

キュアロゼッタ「だけど、あのプロトジコチューは……。」

キュアソード「でも、ここであたし達が倒れたら、トランプ共和国

は…。」

キュアエース「その通りです…ここで諦めたらいけません!!」
レジーナ「わたしも…頑張る!!」

キュアホワイト「そうよ…こんな所でやられる訳にはいかないわ
!!」

キュアブラック「わたし達にはまだ、やらなきゃいけない事が

たくさんあるんだから!!」

と、ボロボロになりながらも気力を振り絞って何とか立ち上がる
プリキュア達…。

ネオ・プロトジコチュー「ほう…まだ立ち上がるか…

だかもはや、お前達に勝機は無い…。」

キュアホワイト「例え、そうだとしても…」

キュアブラック「こんな所で、やられる訳にはいかない!!

わたし達の世界を取り戻すまでは!!」

シャイニールミナス「その通りです!!」

キュアダイヤモンド「えっ!？」

キュアソード「今、何て言ったの…?」

キュアロゼッタ「わたし達の世界を取り戻すって…。」

キュアエース「どういう事ですの…?」

キュアブラック「ホワイト、ルミナス。行くよ!!」

ホワイト・ルミナス「うん!!」

すると、シャイニールミナスがハーティエルバトンを頭上に掲げる

と、

溢れ出た光の洪水がブラックとホワイトに浴びせられる。そして、

キュアブラック「漲る勇氣!!」

キュアホワイト「溢れる希望!!」

シャイニールミナス「光り輝く絆と共に!!」

と3人が掛け声を上げると、ブラックとホワイトの前方にハート型

の

虹色エネルギーが出現する。

ブラック・ホワイト「エキストリーム!!」

シャインニールミナス「ルミナリオーーーーーッ!!」
「ドオーーーーーッ!!」

とハート型の虹色エネルギーから、強力な金色のエネルギー波が
発射され、ネオ・プロトジコチューに向かっていく。

ネオ・プロトジコチュー「小癩な。。。」

「ブウーーーーーッ。。。」

と対するネオ・プロトジコチューも右手を前方に向けると、
ドス黒い巨大なエネルギー弾を形成し始めた。。。。

ネオ・プロトジコチュー「消滅せよ。。。ダーク・スフィア!!」

「ゴオーーーーーッ!!」

と、ネオ・プロトジコチューの右手からダーク・スフィアが
発射されると、エキストリーム・ルミナリオと激突するが、
その際に、ダークスフィアの威力が、更に増大して、

エキストリーム・ルミナリオを一瞬で飲み込み、ブラック達へと
襲い掛かる。

キュアホワイト「う。。。うそ。。。」

キュアブラック「い。。。嫌だよ。。。こんな所で!!」

シャインニールミナス「どうすれば良いのですか。。。?」

と、ブラック達が絶望的な表情になった、その時。。。。

「バシューーーーーーッ!!」

ブラック・ホワイト・ルミナス「!!!」

ネオ・プロトジコチュー「。。。何?!」

キュアハート「。。。くっ。。。」

と、そこへキュアハートがブラック達の前に現れて、ダーク・スフィ
アを
受け止めた。

キュアブラック「ハート!?!」

キュアホワイト「何してるの!?!」

シャインニールミナス「無茶です!逃げてください!!」

キュアハート「やだ!!」

キュアブラック「!!!」

キュアハート「ここで逃げちゃったら、あの人に…シンに合わせる

あれば
顔が無いもん!!それに、例え敵が強力でも…思いが

必ず乗り越えられる!!」

「ドン!!ドン!!ドン!!」

と、ダーク・スフィアの威力がさらに増して、受け止めている
キュアハートの両腕を飲み込んでいく…。

キュアダイヤモンド「ハート!!」

キュアロゼッタ「マナちゃん!!」

キュアハート「六花…ありすちゃん…。」

キュアエース「ハート!!」

レジーナ「マナツ!!」

キュアハート「亜久里ちゃん…レジーナ…。」

キュアソード「マリーナーツ!!」

キュアハート「まごぴー…あたし…幸せだなー…こんなにい
い友達が…

仲間がいて…でも、だからこそ…みんなを…こ
の世界を

守りたい!!例え、この命に代えても!!は

あーーーーーっ!!」

「ピカーーーーーーン!!」

と、キュアハートの体が更に輝き、ダーク・スフィアを押し返して
いく。

キュアホワイト「す…すごい!!」

キュアブラック「この力は…。」

シャイニールミナス「これが、キュアハートの愛の…思いの
力…。」

ネオ・プロトジコチュー「…ハアーーーーーッ!!」

「ブオーーーーーッ!!!」

と、ネオ・プロトジコチューは、押し返されかけてたダーク・スフィ

鬼太郎「間に合わなかったか……。」

ねこ娘「あんた……よくも、マナを!!」

とそこへ、バックベアードを倒した鬼太郎やさくら達が合流し、ネオ・プロトジコチューに怒りを向けた。

く アルテミスブリッジ内 く

犬山まな「そ……そんな…… マナちゃん!!」

知世「う……嘘ですわ…… こんな……。」

ジョナサン「マナ…… ううう……。」

アクア「…… シンに…… 何て言ったらいいの……。」

と、アクア達も悲しみに暮れていたその時……

? 「大丈夫……。」

アクア「!!!」

? 「彼女は私がついているから……。」

と、突如、アクアの頭の中に、女性の声が出て、

そう語りかけた……。

犬山まな「…… アクアさん……?」

知世「…… どうなさいましたか……?」

アクア「…… 今の声…… ま…… まさか……。」

と。アクアは、今の女性の声に聞き覚えがある様子だった。

く アルテミスの外 く

ネオ・プロトジコチュー「ハッハッハッ!! 悲しむことは無い。

お前たちもすぐにキュアハートの

所へと送ってやろう……。」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、今度は、両手からダーク・スフィアを2つ出現させる

ネオ・プロトジコチュー……。

キュアダイヤモンド「うそ……。」

キュアロゼッタ「もう…… ダメです……。」

キュアソード「あんなの…… どうしたら……。」

ネオ・プロトジコチュー「滅びよ…… プリキュア!!」

と、ネオ・プロトジコチューがダーク・スフィアを

放とうとしたその時…

「ピカーーーーーーッーン!!!」

と、ネオ・プロトジコチューの背後が突然激しく光りだした。

ネオ・プロトジコチュー「な…何だ!？」

キュアダイヤモンド「…えっ!？」

キュアソード「あの光は…。」

キュアエース「ま…まさか…。」

く 光の中 く

? 「目覚めなさい、キュアハート… いえ、相田マナ!!」

マナ「…ん…。」

と、謎の女性の声により、マナが目を覚ますと、そこには、濃いマゼンタ色の衣装を着て、光の翼が生えた美少女が立っていた。

マナ「…あなたは…?」

パトリシア「私の名はパトリシア… 女神族です。」

マナ「女神… 族?」

パトリシア「はい、マナ… 今のあなたは肉体が消滅して、

魂だけの状態になっています。」

マナ「そつか… あたし、死んじやったんだ…。」

それじゃあ。ここは天国なのかな…。」

パトリシア「いいえ、このままあなたを死なせる訳にはいきません。

今は私の力で、あなたの魂を現世に繋ぎ止めているのです。」

マナ「あたし… どうなっちゃうの…?」

パトリシア「あなたは、私と… 一つになってもらいます。」

マナ「えーっ! 女神様と!? そしたらあたし、人間じゃなくなるんだ…。」

パトリシア「そんな事はありません… 一つになるといっても、

私の力を継いでもらうだけです。あなたは今までの

あなたと何かが変わるわけではありません。」

マナ「……………」

パトリシア「…… どうしますか？」

マナ「あたし…… 帰りたい!! 大好きなみんなの所へ……」

そして、愛するあの人の所へ!!」

パトリシア「では、決まりですね。でもマナ…… これだけは

覚えておいてください。これからの戦いは、愛だけでは

通用しません…… かといって、力だけでもいけません。

愛だけでも…… 力だけでも…… この事を胸に

秘めておいてください!!」

マナ「愛だけでも…… 力だけでも…… か…… わかった。

ありがとう! パトリシアさん!!」

パトリシア「では、始めましょう。この世界を…… そして、

あの人の事をお願いしますね、マナ!!」

「パア……………ッ!!」

と、マナとパトリシアが同化をすると、光の中からキュアハートが姿を現して、復活を果たした。そして、光が消えていくのと同時に、キュアハートの右手に濃いマゼンタ色の懐中時計が精製された。

「シュー……………」

キュアハート「ありがとう…… パトリシアさん!!」

ネオ・プロトジコチュー「な…… 何だと!」

キュアダイヤモンド「夢…… じゃないよね……?」

キュアロゼッタ「うん…… うん!!」

キュアソード「もう…… いつも心配ばかりさせるんだから……」

キュアエース「でも……」

レジーナ「良かった……」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・レジーナ「マーナー

!!」

キュアハート「みんな…… 心配かけてごめんね…… でも、もう大丈夫

夫!!」

と言いながら、キュアハートは懐中時計を持った右手を

前方に掲げると……

キュアハート「プリキュア!!ラブリバース!!」

「ピカーーーーーーッーン!!」

と、キュアハートはそう掛け声を上げながら、懐中時計を起動させると、周辺に光の輪が多数出現し、キュアハートを包み込むと、

これまでの金髪やピンクを基調としたコスチュームが濃いマゼンタ色へと

変色し、ハート型の装飾類がこれまで通り装着されると、最後に背中から光の翼が左右に出現して変身を果たす。。。

キュアハート「みなぎる愛と力の女神。。。ここに転生せん!!」

キュアハート・リバーシア!!」

キュアダイヤモンド「ハート。。。？」

キュアロゼッタ「あの姿は。。。？」

キュアソード「キュアハート。。。リバーシア!？」

ネオ・プロトジコチュー「。。。小癪なーーーーーっ!!」

「ドドドドドドドドドド。。。!!」

と、ネオ・プロトジコチューは、キュアハート・リバーシアへとすかさず襲い掛かり、パンチの嵐を繰り返すが。。。

キュアハート「。。。。。。」

「ヒュン!!ヒュン!!ヒュン!!ヒュン!!」

と、キュアハートはネオ・プロトジコチューの

パンチの嵐をその場からほとんど動かずに、あっさりとかわしていく。

ネオ・プロトジコチュー「は。。。速い!!」

キュアハート「ハアーーーーッ!!」「バキーーーーッ!!」

ネオ・プロトジコチュー「グオーーーーッ!!」

と、キュアハートは、パンチの嵐をかわしながら、

ネオ・プロトジコチューにハイキックを放ち、吹き飛ばした。

キュアブラック「マジック!」

キュアホワイト「す。。。すごい!!」

ネオ・プロトジコチュー「おのれ。。。ならば、これでどうだ!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、ネオ・プロトジコチューは、先程よりも威力を増した
ダーク・スフィアを出現させた。

キュアダイヤモンド「あれはさっきの!？」

キュアロゼッタ「しかも、さっきよりも大きくないですか…?」

キュアソード「マナーッ!!」

キュアハート「大丈夫だよ、みんな!!」

ネオ・プロトジコチュー「死ねーーーーッ!!」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、ネオ・プロトジコチューは、ダーク・スフィアを

キュアハートに向けて放つが…

キュアハート「: Aファンネル!!行つけえーッ!!」「バババババ
ババ!!」

と、キュアハートは背中の光の翼から、虹色の剣状のビットを
多数、出現させ、ダーク・スフィアへと向けて放った。

そして、Aファンネルは、ダーク・スフィアを取り囲んで、
結界を形成すると、浄化して消滅させた。

「シューーーーーーッ:。」

ネオ・プロトジコチュー「何ーーーーッ!？」

さくら「ほえーーーーッ!!」

小狼「す: すごい!!」

鬼太郎「何て力だ:。」

と、ダーク・スフィアを一瞬で浄化したAファンネルの威力に
驚愕の表情を見せるさくらや鬼太郎達:。

「ババババババ!!」

と、ダーク・スフィアを浄化させたAファンネル達は、そのまま
ネオ・プロトジコチューへと攻撃を仕掛ける。

キュアハート「当たれーーーーッ!!」

「ズバババババババ!!」

ネオ・プロトジコチュー「ぐあーーーーッ!!」

と、Aファンネルによるオールレンジ攻撃を次々と受けた

ネオ・プロトジコチューは、吹き飛ばされて、地面へと倒れこんだ。
　　アルテミスブリッジ内　　

犬山まな「マナちゃん…良かった…。」

知世「しかも、パワーアップして帰ってきましたわね!!」

アクア「あの力…もしかして…。」

と、アクアは、キュアハート・リバーシアの力を見て、

何かを感じ取った様子だった。

　　アルテミスの外　　

ネオ・プロトジコチュー「今までのキュアハートとは違う…

何だ、この力は!」

キュアハート「…これは、愛を育み、愛するみんなを守り、

そして、愛を壊す者を滅する力だよ!!」

「ピキーーーーーッ!!」

と、キュアハートの両目の虹彩が黄色に輝きだし、

凄まじい波動を放つと、Aファンネルがキュアハートの前方に

集まり、巨大な光の輪を形成する。そして、キュアハートが

両手でハートの形を作り、前方へと向けると、光の輪の中心から、

ハート型のエネルギー体が出現した。

「ブオーーーーーーッ!!」

ネオ・プロトジコチュー「オ…オ…オ…」

キュアダイヤモンド「ハート!!」

キュアロゼッタ「マナちゃん!!」

キュアソード「マナ… やつちやえーっ!!」

キュアハート「リバーシア… ジェネシック・ハート!!」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、ハートのエネルギー体から、虹色の光状の渦をしたレーザーが
放たれて、ネオ・プロトジコチューに直撃した。

ネオ・プロトジコチュー「ぐあーーーーっ!!だ…だが、人間の
の

悪意が存在する限り、我はこれから先の

未来で蘇る…そして、今度こそ、

レジーナ「マナーーーーーッ!!」

と、マナの周りに他のプリキュアもやってきて、全員で抱擁をかわした。

キュアブラック「大したものね!!」

キュアホワイト「うん!!」

シャイニールミナス「本当に……良かったです!!」

と、その様子を遠くで見つめてマナを称えるブラック達。

ラピス「さてと……これで残るは……。」

アンズ「十戒だけね……。」

リータ「これが、一番厄介なのですが……。」

アルテミスブリッジ内　　く

犬山まな「やったーーーーッ!! マナちゃんが

勝ったーーーーッ!!」

知世「さくらちゃん達も……良かったですね、

アクアさん!!」

ジョナサン「彼女達がやってくれましたよ、

マーキュリー大佐!! っつて、あれ?」

と、今まで知世の隣に立っていたアクアが、いつの間にか居なくなっていた……。

犬山まな「アクア……さん?」

知世「どちらに行かれたのでしょうか……?」

く　アルテミス内のとある部屋　　く

アクア「くっ…… あともう少しなのに…… ごめんなさい、

みんな…… 私が来るまで何とか持ちこたえて……。」

「キューーーーーッ!!」

と、アクアはそう言いながら、右手に持った懐中時計を光らせていた……。

く　とある建物の屋上　　く

メラスキュラ「…… どういう事? なぜ、人間の小娘が女神族の力を……。」

タクティス「どうやら、あの力は、『聖魔天使』の力のようだね……。」

ガラン「聖魔天使じゃと!?あの『四大天使』にも匹敵すると
言われたあの女神族の端くれ共か!!まあ良い…

では、いよいよワシの出番じゃのう!!」

タクティス「君は、あの少年が現れるまでのとっておき

だったんだけど…仕方ないね。」

メラスキュラ「けれど、油断は禁物よ、ガラン!!」

ガラン「せっかく異世界に来たんじゃ!少しは楽しませてくれん
のう。

それとも…このワシが負けるとでも?」

タクティス「フツツ…仲間思いで良いじゃないか。ああ、それと

もう一つ…やりすぎも禁物だよ?」

ガラン「わかつとる!!さつきも言ったがワシはそんな子供ではない
ぞ!!

では、『人間皆殺しゲーム』に、行ってくるわーい!!」

「ドシューーーーーーン!!」

と、ガランはその場から跳躍して、一瞬で消えていった…。

メラスキュラ「…全然、わかってないわね、あれ…。」

タクティス「やれやれ…。」そして…

鬼太郎「そういえば、さつき何か言いかけてなかったかい、

ナツメ?」

ナツメ「あつ、そうだった!!あの…この世界に破壊剣(ラグナロ
ク)の

契約者さんって、いるんですか?」

キュアホワイト「わたし達、その人に会いに来たのよ。」

マナ「あつ、その人…シンの事だよ!!」

アキノリ「知ってるのか!?それなら話が早いな!!」

トウマ「今、どこにいるんだい?」

レジーナ「シンなら、修行に行ってるわよ!」

アヤメ「修行…ですか?」

キュアダイヤモンド「でも、シンに何の用なの?」

キュアソード「まさかあなた達…シンを狙ってるの!?!」

キュアブラック「ち…違いわよ!!そのシンって人の

力を借りたいのよ!!」

キュアエース「まさか、先程言っていた『わたし達の世界を取り戻す』」

と言われた事と関係が…?」

ナツメ「実は、私たちの世界… 占領されてしまったんです…。」

マナ「えー…っ!?」

さくら「占領…っ…。」

小狼「どういう事だ?」

トウマ「僕から説明するよ… 僕達の世界の敵である空亡やドツクゾーンとの

戦いが終わってしばらくした後、『レグルス帝国軍』という勢力が現れたんだ。」

マナ「レグルス帝国軍って…。」

鬼太郎「あのブル・ドーザっていう人間がいた軍隊か…。」

目玉おやじ「しかし… お主達程の力の持ち主がいながら

占領されてしまうとは…。」

トウマ「… 僕達やプリキュア、そして多くの仲間達が戦いました…。」

戦力差があまりにありすぎて… それに、敵も強すぎました…。」

ナツメ「奴らのボスに、エンマ様が挑んで行ったんですけど…。」

アキノリ「手も足も出ずにやられてしまったんだ…。」

鬼太郎「エンマ様?もしかして、閻魔大王の事かい?」

ナツメ「はい。」

ねこ娘「そっちの世界の閻魔大王って、人間界で戦ったりするの!」
アキノリ「ああ。俺達が敵わないようなヤバイやつが出てきたときには

いつも助けに来てたんだ!!」

トウマ「そして、エンマ様が敵のボスにやられて撤退した後、

僕達の住む人間界や妖魔界も…。」

キュアブラック「光の園もあつという間に……」

ナツメ「占領されてしまったの……。そして今は、エンマ様が

組織したレジスタンス軍でレグルス帝国軍に抵抗運動を

しているんです……」

シャイニールミナス「そして、わたし達は、エンマ様の指示で、

破壊剣（ラグナロク）の契約者という方に

会って、共に戦ってくれる様、

お願いしに来たんです……」

キュアソード「そうだったんだ……。ごめんなさい!!」

勘違いをしてしまった……。自分の世界を占領された

つらい気持ちは、あたしもわかってたはずなの

に……」

キュアブラック「いいいいいよ、気にしないで!!」

レジーナ「でも、そのエンマ様って、どれぐらい強いのか？」

トウマ「さっきのバツクベアードっていう妖怪なら……」

アキノリ「多分、秒殺だろうな……」

アニス「うそ!?!」

アデル「だとしたら……」

ねこ娘「めちやくちや強いじゃん、それ……」

鬼太郎「その閻魔大王が手も足も出なかつた相手って、

いったい誰なんだい？」

アヤメ「確か、三將軍（ゼネラーレ）の、ラー・カインって

名前だった……」

キュアダイヤモンド「ラー・カイン……」

キュアホワイト「わたし達も、その戦いを見てただけど……」

キュアブラック「その、ラー・カインって人、化け物すぎるよ……

今のわたし達じゃ、とても敵わない……」

シャイニールミナス「そうですね……」

キュアエース「という事は……あのブル・ドーザよりも

遥かに格上……と考えた方がいいでしょうね……」

キュアロゼッタ「そんな敵にわたし達、勝てるのでしょうか……」

ケロベロス「こうなったら、シンの奴にごつつ強うなって

帰ってきてもらわないかな…。」

マナ「大丈夫!!ブラック!!ホワイト!!そして、ナツメちゃん!!

シンなら絶対に力になってくれるよ!!何たってシンは…

『次元の王』になる人なんだから!!」

キュアブラック「えっ!？」

キュアホワイト「次元の…」

ナツメ「王…?」

ガラン「ほう…それは楽しみじゃのう!!」

鬼太郎「!!誰だ!？」

と鬼太郎がそういつた瞬間…

「ギューーーーーー!!」「ドーーーーー!!」

キュアダイヤモンド「きゃあーっ!!」

キュアエース「くうーっ!!」

ねこ娘「今度は何なのよ!？」

と、突然、上空から一体の大鎌を持った怪物が急降下してきた。

そして、その着地の衝撃で、凄まじい爆風と煙が辺りを覆った。

ガラン「…………。」

ナツメ「何…あの化け物!？」

ラピス「ついに出やがったな…!!」

さくら「えっ?ま…まさか…」

鬼太郎「あれが…。」

マナ「十戒…!？」

キュアハートの奇跡の転生により、ネオ・プロトジコチューを

見事撃破したグラン・ゲインズであったが、ついに、

最大の障壁である『十戒』が姿を現した。

一同は、この難敵にいかに向かうのか…

そして、見事に打ち勝つことができるのか…

そして、ナツメ達から語られた衝撃の事実…

今後の運命は、どうなっていくのであろうか!？」

第13.5話
（完）
転生!!その名もキュアハート・リバーシア!!

アズ「……………」

リータ「……………」

と、怯えるキュアロゼッタとレジーナの後ろからラピス達3人娘が通り過ぎ、ガランの前へと現れた。

ラピス「あたし等と遊ぼうぜ……おっさん!!」

ガラン「ほう……？」

マナ「ちよ……ちよつと3人共!!作戦では、十戒の相手は、

アクアさんがするはずじゃ……？」

リータ「先程、艦長から連絡があり、姉さまは今、

ブリッジにいないそうです……。」

キュアソード「えっ!!」

ねこ娘「何よそれ!?話が違うじゃない!!」

アズ「だからこそ、あたし達が戦うんです!!」

ラピス「あんな奴、姉さまが戦うまでもねーよ!!

あたし等で片づけてやる!!」

「スタッ!!」「スタッ!!」

キュアホワイト「それならわたし達も!!」

キュアブラック「いっちょ、暴れてやりますか!!」

マナ「ブラック!!ホワイト!!」

ラピス「まあ、良いけどよ……足手まといになったら、

承知しねーぞ!!」

ガラン「カッカッカッ!!泣かせるのう……仲間の為に、

自分の命を捧げる……良からう!!その心意気に

免じて、ワシは、しばらくの間、お主等に

攻撃はしないで置いてやろう……。」

どうじゃ?おぬし達の力、ワシに見せてみる!!」

キュアブラック「何よそれ!?随分、舐められてるじゃん!!」

ラピス「まあ、良いじゃねえか……それなら、見せてやるぜ!!」

「ドヒュー……………」

と、闘圧を解放するラピス。

ガラン「ん？」

ラピス「後悔すんなよ、おっさん… ドオリヤー… ツ!!」
「ブオー… ツ!!」

ラピスは、闘圧を極限までに高めると、全身の筋肉が膨張し、凄まじい気の嵐を放ちながら、驚異の変貌を遂げた。

「シユンシユンシユンシユンシユン…」 「バリバリ!! バリバリ!!」

ラピス「これがあたしの… フルパワーだ!!」

さくら「ほえ… ツ!!」

小狼「す… すごい!!」

ねこ娘「あの子… あんな力が!!」

ケロベロス「こらまた随分、ムキムキになりおったな…」

あの小娘…」

ラピス「それじゃ、いくぜおっさん!!」

「シユン!!」 「バキ… ツ!!」

ガラン「ごあ… ツ!!」

と、ラピスの強烈な右ストレートが、ガランの顔面へとめり込むと、そのまま吹き飛ばした。

「ドゴ… ツ!!」

ガラン「ぐおお…」

ラピス「次、行くぜ!!」

「バゴオー… ツ!!」

ガラン「ぐべあ… ツ!!」

と、今度は、ガランの後頭部に、かかと落としを直撃させて、地面に、大きくめり込ませた。

そして、間髪入れずに…

キュアブラック「ダダダダダダ!!!」

キュアホワイト「ヤア… ツ!!」

アンズ「ハア… ツ!!」

「ド… ツ!!」

ガラン「ぐおおおおおお… !!」

と、今度は、キュアブラックとキュアホワイト

そして、アンズの3人が、ガランに、怒涛の連続攻撃を仕掛けて、

あまり、調子に乗らない事ね!!」

「ドゴーーーーーッーン!!」

ガラン「……………」

と、ガランが砂埃の中から、ほぼ無傷の状態で姿を現した。

ラピス「なっ…!?」

アンズ「そんな…。」

リータ「確かに、手応えはあったのに…。」

キュアホワイト「くっ…。」

キュアブラック「どうなってるのよ、あいつ!!」

ガラン「カッカッカツ!!確かに少しは効いたがのう…。」

じゃが、所詮は人間の攻撃…この程度では、

マツサージにしかならんわい!!」

ラピス「そうかよ…ならもつとマツサージしてやるぜ!!」

と、ラピスが再び、戦闘態勢をとった瞬間…。

「ピキーーーーーッーン!!」

ラピス「!!う…ぐっ…うわーーーーーッつ!!」

「バリバリバリバリバリ!!……………」

と、突然、体中から、鬨圧が一気に噴き出して、

悶え苦しむラピス…。そして、力を使い果たし、

膝をついて、四つん這いになって倒れてしまった…。

アンズ「ラピス!!」

キュアブラック「ちよつと、急にどうしたの!?!」

リータ「やっぱり、フルパワーの反動が…。」

キュアホワイト「フルパワーの反動…?」

ラピス「あ…ぐ…くそっ…。」

さくら「ラピスちゃん!!」

小狼「自分の鬨圧に、体が耐え切れなかったのか…。」

ケロベロス「やばいで、これは!!」

ガラン「カッカッカツ!!もうお終いかのう?ならば、今度は、

ワシがじっくりとかわいがってやるわい…。」

「ザッザッザッザッ…。」

そう言いながら、ラピスの方へと歩を進めるガラン。
キュアホワイト「そんな事：。」

キュアブラック「させない!!」

アンズ「リータ!!」

リータ「はい!!」

と、ラピスを守る為に、ガランへと攻撃を仕掛ける4人。

ガラン「邪魔じゃあ!! 紊粗断(ぶんざらだん)!!」

「ブバーーーーーーッ!!」

ブラック・ホワイト・アンズ・リータ「ああーーーーーッ!!」

と、ガランは大鎌を振り回して、向かってくる

キュアブラック達を切り付けて、吹き飛ばした。

ブラック「ううう。。。」

ホワイト「あ。。。う。。。」

アンズ「ラ。。。ラピス。。。」

リータ「に。。。逃げて。。。」

ガラン「フン。。。雑魚が!!。。。さて。。。」

「ガシッ!!」

ラピス「あう!!」

と、キュアブラック達を退けたガランは、そのままラピスへと

近づき、頭をわし掴みにした。

ガラン「ぬうん!!」「メキメキメキ。。。」

ラピス「ぐあああああああっ!!!」

とガランは頭を掴んだ手に、じわじわと握力を加えて、

ラピスに苦痛を与えていく。。。。

ねこ娘「このーっ!!」

キュアソード「その子を放しなさい!!」

「バーーーーーッ!!」

と、ラピスを助ける為に、ガランに攻撃を仕掛ける

ねこ娘とキュアソード。

アデル「行くぞ、アニエス!!」

アニエス「はい、お姉様!! ダイナバ・ミ・トーチ!!」

現れて、ガランに次々と命中した。そして：
アクア「それなら今度は、その大嫌いな魔女が

相手になるわよ、ガラン!!」

ナツメ「あの人は…」

マナ「アクアさん!!」

と、ガランの前に、遅れてきたアクアが現れて、
宣戦布告を行った。

ねこ娘「あんた、今まで何やってたのよ!？」

アクア「ごめんなさい… ちよつと、準備に手間取っちゃって。

けど、遅れてきた分、ちゃんと働きます!!

それと2人共、大丈夫でしたか？」

アデル「あ、ああ…。」

アニエス「ありがとうございます!!」

アクア「さてと…。」「パチン!!」「シユン!!」

ラピス「あいてて…。」

アンズ「う…ぐ…」

リータ「ひ… 姉さま…。」

キュアブラック「うう…。」

キュアホワイト「あ…う…。」

と、アクアは指を鳴らすと、ガランによって重傷を負わされた5人
を、

瞬時に自身の近くに集めた。そして…

アクア「白魔法（ホワイト・アタック）!! 治癒（ホイル）!!」

「パァー…。」

と、アクアが魔法を唱えると、5人が眩い光に包まれて、
ダメージが回復した。

キュアホワイト「傷が…」

キュアブラック「治った!!」

ラピス「よっしゃーっ!! 復活したぜ!!」

アンズ「ああ…」

リータ「ありがとうございます…。」

ラピス・アンズ・リータ「姉姉さまーっ!!」「ガバツ!!」
と、回復した3人娘は、アクアに抱き着いた。

アクア「みんな、遅れてごめんなさい…」

よく頑張ってくれたわね!!」

ラピス「当たったり前じゃん!!」

アンズ「えへへ!!」

リータ「はい!!」

「ドシンドシンドシン…。」

ガラン「おのれ…小賢しい小娘が…。」

と、言いながら、アクア達の前に近づいていくガラン。

アクア「3人共、そして、そのあなた達…一緒に下がちなさい。

ここから先は、私の仕事です!!」

ラピス「姉姉さま、ここはあたし等も一緒に!!」

キュアブラック「そうだよ!!一人で戦うなんて…。」

アンズ「だめよ、ラピス…あなたもわかっているでしょう?」

リータ「この化け物は、あたし達の手に残ります…。」

ここは、姉姉さまに任せて下がりますよう。」

ラピス「くっ…姉姉さま、絶対に勝ってくれよ!!」

アクア「はい!!」

キュアホワイト「気を付けてください!!」

キュアブラック「よろしくお願いします!!」

と、3人娘とブラック・ホワイトの2人は、アクアの

指示通りに退却していった。

アクア「さてと…始めましょうか!!」

時空魔法(ドライブ・アタック)!!次元壁(ディメイション・

ウォール)!!」

「ピキーーーーーッ!!」

と、アクアは、自身から半径500mまでの場所を、透明な魔力の壁で

四方に囲い、ガランとメラスキュラを閉じ込めた。

ラピス「姉姉さま!?!」

アンズ「一体、何を…。」

マナ「アクアさん…。」

メラスキュラ「一体、何のつもりかしら…?」

ガラン「カッカッカッ!! 敵わぬとみて、観念でもしたかのう?」

アクア「何言ってるの? こうしたのは… あなた達をまとめて倒す
為よ!!」

「ピキーーーーーッ!!」

と、アクアは、懐中時計を左手で持ち、発動させると、そこから強
力な

魔力が溢れ出し、アクアを包み込んだ。

ガラン「何じゃと!」

メラスキュラ「何なの… この魔力は!」

そして、魔力の光に包まれたアクアは、髪の色が金髪に変色し、
衣装も、これまでの白いワンピース型の軍服から、

青い魔導士のローブへと変化し、最後に、ロザリオの首飾りが
装着された。そう… その姿は、アクアの正体であり、

3000年前に『次元の王』を自身の命と引き換えに封印した
あの『ミリカ・ド・グランバニア』であった。

「パアーーーーーッ!!」

ミリカ「…。」

ラピス「姫… 姉さま?」

さくら「姿が… 変わった?」

ケロベロス「いや… 変わったのは姿だけやないで…」

何や、このごっつい魔力は!」

マナ「もしかして、あの人か!」

ガラン「どういう事じゃ…? なぜ、貴様が

こんな所にいるんじゃない?」

メラスキュラ「ミリカ・ド・グランバニア!!」

ミリカ「さてと… 裁きの時間よ、『十戒』!!」

と、アクアは、本当の正体である

「ミリカ・ド・グランバニア」へと姿を変えた。
そして、その事に驚愕するグラン・ゲインズの
メンバーと十戒の2人… この戦いの行方は如何に!?

第14話 〽「十戒現る!!」 〽（完）

第15話 帰ってきた最強魔導士

く アルテミスブリッジ内 　く
犬山まな「アクアさん……変身しちゃったよ……」

知世「あのお姿は一体……」

ジョナサン「マーキュリー大佐……」

ナットー艦長「あれが……姫様の本当のお姿だ。」

知世「えっ!?!」

ジョナサン「本当の……姿?」

犬山まな「けど、あの化け物達相手に、一人で戦うなんて、

無茶だよ!!」

ナットー艦長「いや……むしろ、その逆だな……」

ジョナサン「どういうことですか? ナットー艦長……」

ナットー艦長「見てればわかりますよ、ジョナサン大統領。」

く アルテミスの外 　く

キュアブラック「な……何が起きたの!?!」

キュアホワイト「変身……とは違うみたいだけど……」

ナツメ「うん……」

マナ「……ミリカさんだ……」

キュアダイヤモンド「マナ?」

マナ「あの人……ミリカ・ド・グランバニアさんだよ!!」

キュアソード「あの人が!?!」

キュアエース「では、元の姿に戻ったという事ですか……?」

アンズ「あれが……本当の姉さま……」

リータ「あたし……今、とても感動しています!!」

ラピス「何か、スゲー事が起きそうな気がする!!」

と、アクアがミリカの姿に戻ったのを驚きと尊敬の表情で見つめる

一同。

ガラン「ぐぬぬ……」

メラスキュラ「ミリカ・ド・グランバニア……」

ミリカ「どうしたの? 早くいらっしやい!!」

暗憺の繭（あんたんのまゆ）!!」

「ブウーーーーー……」

と、メラスキュラは暗憺の繭（あんたんのまゆ）を発動させると、ミリカの周りを影で包み込んだ。

メラスキュラ「あなたの魂をいただくわよ…… ミリカ!!」

招来魂（しょうらいこん）!!」

と、メラスキュラはミリカの背中に手を当てて、魂を抜き取ろうとするが……

「バリバリバリバリ!!!」

メラスキュラ「ぎゃあーーーーーっ!!」

と、メラスキュラの体に突如、強大な魔力の波動が流れ込み、大ダメージを負わせた。

ミリカ「おあいにく様ね、メラスキュラ……

こんな事もあるうかと、あたしの魂に

ちよつとした細工をしておいたのよ!!」

「パアーーーーー……」

と、メラスキュラが、ミリカの魂を抜き取るのに失敗すると、周辺の暗闇が晴れて、元の風景に戻った。

メラスキュラ「くうう…… ミリカーーーーーーッ!!」

ミリカ「黒魔法（ブラック・アタック）!! 飛翔剣（ツルギノマイ）!!」

「ズバババババババババーーーーーッ!!!」

メラスキュラ「あああああーーーーーっ!!!」

と、ミリカは無数の魔力の剣をメラスキュラの周りに召喚すると、次々と切り付けて、大ダメージを負わせた。そして、メラスキュラは最後にガランの近くへと吹き飛ばされて、地面へと倒れこんだ。

メラスキュラ「あ…… あ…… あ……」

キュアダイヤモンド「な…… 何て人なの……？」

キュアロゼッタ「あんな化け物相手に……」

ケロベロス「エ…… エグいで、あの姉ちゃん……」

ミリカの圧倒的な強さに驚愕する一同。

魔力を使い果たし、アクアの姿へと戻ったミリカ。それと同時に、アクア達の囲んでいた

次元壁（ディメイション・ウォール）も跡形もなく消滅した。

アクア「… やっぱり、いきなり殲滅魔法（ファイナル・アタック）は

無茶だったかな… 体中が痛い…。」

タクティス「お見事!!」「シユン!!」

アクア「!!!」

と、そこへ、高見の見物をしていたタクティスが、

アクアの前へと降り立った。

タクティス「さすがは、3000年前の『次元大戦』最強の魔導士だ。

格が違ったね… けど、喜ぶのはまだ早いよ!!」

アクア「何… ですって… ?」

「ピキーーーーーッーン!!」

と、ガランとメラスキュラが消滅した場所から、突如、光の柱が出現して、2体が蘇った。

ガラン「……………」

メラスキュラ「……………」

さくら「ほえーーーーッーンっ!!」

ケロベロス「ど… くないなっとなねん、これは!」

キュアホワイト「うそでしょ…。」

キュアブラック「ありえない…。」

と、ガランとメラスキュラの復活に驚愕する一同。

タクティス「やあ、気分はどうだい?お二人さん…。」

ガラン「良いわけが無かるう!!ここまでコケにされて!!」

メラスキュラ「あんたの仕業ね、タクティス…。」

タクティス「念の為に、保険をかけておいて良かったよ。」

「スツ…。」と、タクティスは、一枚のマジック・カードを

取り出し、ガランとメラスキュラに見せた。

タクティス「これは、死者蘇生（レアニマシオン）のカードさ…」

このカードの力を君達にかけておいた。
そうすれば、例え完全に消滅したとしても、
一度だけ、完全に復活することができるのさ。」

メラスキュラ「いつの間に……。」

ガラン「お主……ワシ達が負けると思っていたのか!？」

タクティス「備えあれば患いなし……というやつだよ。」

現に君達、完膚なきまでにやられちゃったじゃないか
?」

ガラン「ぐぬぬ……。」

メラスキュラ「……まあ、良いわ。今はこの女は『ミリカ』じゃない……。
い……。」

それに、魔力も使い果たしちゃったみたいだしね。」

ガラン「さてと、これからじわじわとなぶり殺してくれるわ!!」

タクティス「ああ……残念だけど、君達ももう良いよ。」「スツ……。」

と、タクティスは、懐から一枚のカードを取り出して、ガランと
メラスキュラの方へと向けて、発動させた。

「ピカー………ツ!!」「ドオー………ツ!!」

メラスキュラ「な……何よ、これは……。」

ガラン「どうなつとるんじや……。」

と、ガランとメラスキュラが、光の柱に包まれると、

そのまま上空へと昇り、巨大な光の十字架へと変化した……。

マナ「な……何よ、あの十字架!？」

タクティス「さあ……最後のゲームを始めようか!!」

と、ミリカが、圧倒的な強さでガランとメラスキュラを倒したのも

東の間、タクティスの魔法によって蘇った彼らが、

今度は謎の巨大な光の十字架に変貌を遂げた。

一体、この十字架は何なのか……

そして、この後、トランプ共和国の存亡をかけた最後の戦いの

火蓋が切って降ろされようとしていた!!

第15話 帰ってきた最強魔導士 (完)

第16話 滅亡へのカウントダウン

アクア「まさかあれは… 『滅びの十字架（スタヴロス）!』」
タクティス「ご名答!!」

キュアダイヤモンド「滅びの十字架（スタヴロス）…?」
レジーナ「何?それ…。」

キュアエース「それに、あの十字架の周りを飛んでいる

丸い物体は何でしょうか…?」

と、『滅びの十字架（スタヴロス）』と呼ばれる巨大な十字架と、
その周りを飛んでいる丸い物体に驚きを隠せずにいる一同…。

タクティス「では、説明してあげよう… あれは

『滅びの十字架（スタヴロス）』… この世界で言う

大量破壊兵器の様なものさ… そして、周りを

飛んでいる丸い物体は『光晶玉（オーブ）』…

全部で10個あるだろう? あれは、1分経過するごとに
1個つつ消えていく… そして、あの『光晶玉（オーブ）』

が

全て消滅したら、『滅びの十字架（スタヴロス）』が発動

して、

この世界は、塵と消える…。」

キュアソード「!!!」

ねこ娘「な… 俺ですって!」

ナツメ「う… うそでしょう!」

トウマ「という事は、あと10分であの十字架が発動して、

この世界が滅びるのか…。」

ケースケ「えーっ!っ!!超ヤバイじゃん、それーっ!っ!」

キュアブラック「だったら、あの十字架を壊せば!!」

キュアホワイト「待って、ブラック!!そんな事をしたら、爆発して、

この世界が滅んでしまうかもしれないわ!!」

キュアブラック「じゃあ、どうすれば良いのよ!」

タクティス「安心したまえ… もちろん、この世界が生き残る

チャンスは与えるよ!!」「スッ…。」

と、タクテイスは再度、懐から1枚のカードを取り出し、発動させた。

「ピカーーーーーーッ!!」

さくら「ほえーーーーーッ!!」

小狼「くっ!!」

ケロベロス「な…何や、この光は!」

と、タクテイスが発動させたカードが光りだすと、その中から、紫色の剣と盾を装備した1体の鎧が姿を現した…。

?「…。」

キュアロゼツタ「な…何ですか、あの鎧は…?」

アクア「あ…あれは、『ガイソグ』!!」

タクテイス「ご名答!!これは、さまよう鎧、『ガイソグ』…。

私のお気に入りさ…このガイソグと

あの『滅びの十字架（スタヴロス）』の核（コア）を

連動させておいた。『滅びの十字架（スタヴロス）』を

止めたければ…。」

ガイソグ「我に…勝て!!」

ラピス「上等じゃねーか…!!」

鬼太郎「やるしかない様だな…。」

ナツメ「よし、それじゃ召喚!!」「シャドウ!!…。」

と、ナツメは、妖怪アークを妖怪ウオッチエルダに差し込み、左に回して、シャドウサイドの召喚を行った。

ナツメ「私の友達…出て来い、ジバニャン!!」

と、ナツメが叫ぶと、妖怪ウオッチエルダが光りだして、

ナツメの足元から、大きな影が姿を現し、その中から

『シャドウサイド』状態のジバニャンが召喚された!!

ジバニャン「っしやーーーーーッ!!」

ねこ娘「ジバニャン?」

ジバニャン「お前、誰ニャン?」

ねこ娘「にやんにやにやんにやにやん!!」

不動明王・界「参る!!」

次に、ラピス・アンズ・不動明王・界がガイソグへと立ち向かっていった。

ラピス「ラピス!! シャイニング・パーパーンチ!!」

アンズ「ハットリ流奥義… 龍剣断!!」

ガイソグ「……………」

「ガキ……………ン!!!」 「バリバリバリバリ!!!」

と、ガイソグは、ラピスの攻撃を盾で、アンズの攻撃を剣で受け止めた。

ラピス「今だ、トウマ!!」

不動明王・界「雷・轟・電・撃!! 雷鳴… 鉄槌斬り!!」

「ゴォ……………ッ!!!」

と、不動明王・界は、ガイソグに向けて、雷鳴鉄槌斬りを放つが…

ガイソグ「フン!!」 「バキ……………ン!!」

ラピス「うわ……………ッ!!」

アンズ「きやあ……………ッ!!」

ガイソグ「エンシエント… ブレイク!! エッジ!!」

「バ……………ッ!!」

と、ガイソグは、受け止めていたラピスとアンズを吹き飛ばした後、

剣圧を十字架の形にして放ち、雷鳴鉄槌斬りと激突させた。

「バリバリバリバリ!!!」

不動明王・界「ぐぬ……………ッ… うわ……………ッ!!!」

「ドツカ……………ン!!!」

と、不動明王・界はガイソグが放ったエンシエント・ブレイク・エッジに

雷鳴鉄槌斬りを破られると、そのまま直撃を受けて吹き飛ばされ、元のトウマの姿へと戻った。

トウマ「ううう…。」

ナツメ「トウマ!!」

キュアブラック「ブラックサンダー!!」

小狼「さくらーーーーーっ!!」

と、全反撃（フル・カウンター）で跳ね返された必殺技の直撃を受けた

鬼太郎達は大爆発を起こして吹き飛ばされ、大ダメージを負い、倒れてしまった。。。

鬼太郎「……………」

アニエス「あ……あ……あ……」

アデル「う……ア……アニ……エ……ス……」

キュアブラック「う……」
「シューーン……」

なぎさ「……………」

キュアホワイト「あ……」
「シューーン……」

ほのか「……………」

キュアエース「が……」
「シューーン……」

亜久里「……………」

と、ブラック・ホワイト・エースの3人も、大ダメージを受けた影響で、変身が強制解除されてしまった。。。

小狼「さ……さくら……大……丈夫……か……？」

さくら「わたしは……大丈夫だよ……でも……でも!!」

小狼「よ……良かった……」
「ガクツ……」

さくら「小狼君!!嫌だ……嫌だよ……うわーーーーーっ!!」

と、さくらは幸い、軽症で済んだが、小狼はさくらを庇った事により、

爆発のダメージで重傷を負い、意識不明の重体となってしまった。。。

アクア「全反撃（フル・カウンター）ですって……」

ま……まさか、ガイソウグの正体は……!?!」

キュアダイヤモンド「そ……そんな……」

キュアロゼッタ「つ……強すぎますよ……あの鎧……」

レジーナ「ど……どうすれば良いのよ……」

マナ「お願い……シン……早く来て……このままじゃ、

一体、どれほどの力を身につけたのか？

そして、タクティスが召喚したガイソークの正体とは…

最後の決戦がいよいよ始まる!!

トランプ共和国滅亡まで、あと5分である!!

第16話　　く　滅亡へのカウントダウン　　く　（完）

第17話　　爆誕!!次元の王候補(デイオケイ
ター)・ラグナ!!　　)

進之介「…ただいま!!」

アクア「シン…」

マナ「おかえりなさい!!」

シャイニールミナス「あの人が…?」

ナツメ「破壊剣(ラグナロク)の契約者さん…」

タクティス「やつと、現れてくれたね…待ちくたびれたよ!!」

「シュン!!」

レイス「それはすまなかったね、タクティス…」

マナ「レイスさん!?!」

アクア「神官レイス…」

と、進之介に続いて、レイスも姿を現した。

タクティス「久しぶりだな、レイス…3000年前と

何も変わっていない様だね…」

レイス「君がそれを言うかい?まあ、ゆつくりと昔話でも

したい所だが、そうも言っていられない様だね…」

と、レイスは『滅びの十字架(スタヴロス)』の方に顔を

向けながらそう語った。

タクティス「その通りさ。あと5分でこの世界は消滅するから

ね…

さあ、ゲームの続きと行こうか、ガイソーグ!!」

ガイソーグ「…」。「チャキツ!!」

と、剣を構えて、戦闘態勢をとるガイソーグ

レイス「では、我が主よ…健闘を祈るよ!!」

進之介「うん!!」

「ブオー…ッ!!」。「シュンシュンシュン…」

と、進之介は、生身の状態から、凄まじい魔力を放出し、

戦闘態勢をとった。

アクア「シン!？」

マナ「普通の姿のまままで魔力を出してる!!」

進之介「あつ、その前に…」

魔法剣（アタック・ヴァイト）!! 白月光（ホワイト・アーク）

!!

「パアーーーーーッ…」

と、進之介は持っていた剣を地面に突き立て、

白月光（ホワイト・アーク）を発動させると、辺り一帯が

光に包まれて、重傷を負っていた鬼太郎やプリキュア達の

傷が回復した。

鬼太郎「き… 傷が…」

ねこ娘「治った!!」

ジバニャン「よっしやーーーーっ!!」

なぎさ「す… すごい!!」

ほのか「ありがとうございます!!」

亜久里「ああ、シン様…」

真琴「…（ますます惚れ直しちゃった…）」

と、頬を真っ赤にしながら、進之介を見つめる真琴。

小狼「うう… さくら…?」

さくら「小狼君… 良かったーーーーっ!!」

「ガシッ」と、意識を取り戻した小狼に涙を流しながら

抱きついたさくら。

進之介「これで良しっ!! それじゃ、行くよ!!」

ガイソーグ「… 来い!!」

「シュン!!」「ガキーーーーン!!」「ドオーーーーン!!」

と、進之介の剣とガイソーグの剣がぶつかり合うと、

2人の周りから、凄まじい爆風と衝撃が起こった。そして、

進之介「魔法剣（アタック・ヴァイト）!! 疾風斬（カマイタチ）!!」

ガイソーグ「… 神千斬り（かみちぎり）!!」

「ドガガガガガガッ!!」「ゴオーーーーッ!!」

と、その後、進之介とガイソーグが斬撃の応酬を始めると、

更に凄まじい爆風と衝撃が巻き起こり、周囲の地形や建物が崩壊し始める。

さくら「ほえーーーーーっ!!」

ほのか「す…すげえ!!」

なぎさ「な…何なのよ、この戦い…?」

トウマ「次元が…違いすぎる…。」

レジーナ「シン…そのままの姿で、

魔法剣（アタック・ヴァイト）使ってる…。」

と、別次元の戦いを繰り広げる進之介とガイソグに驚愕の表情をする一同。

「ガキーーーーーッ!!」

ガイソグ「くっ!?」

進之介「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!一点突破（スクライド）!!」

「ゴオーーーーーッ!!」「バキーーーーン!!」

と、進之介はガイソグを疾風斬（カマイタチ）の一太刀で後退させた後、

一点突破（スクライド）で追撃を仕掛ける。そして、

ガイソグはとっさに持っていた盾で、進之介の攻撃を受け止めた。

進之介「うおーーーーーっ!!」

ガイソグ「ぬおーーーーーっ!!」

進之介「…はあっ!!」

「ピキピキピキピキ…」「バゴーーーーーッ!!」

と、進之介の一点突破（スクライド）が、ガイソグの盾を粉碎して、

そのまま攻撃が命中し、吹き飛ばした。

ガイソグ「ぐおーーーーーっ!!」

「ドゴーーーーーッ!!」

ラピス「す…すげえ…」

キュアダイヤモンド「シン…破壊剣（ラグナロク）も使わずに…」

マナ「これがシンの…修行の成果!!」

進之介「もう、お終いなのか？」

タクティス「いいや、まだこれからが本番だよ……。」

「ガチャ……ガチャ……ガチャ……」

ガイソーグ「……。」

「ピキピキピキピキ……」「バリー……」

と、ガイソーグは立ち上がって進之介の方へ向かうと、兜が碎け散り、素顔が露わになった……。

ガイソーグ「……。」

進之介「き……君は……？」

アクア「やっぱり……メリオダス!!」

レイス「これはこれは……とんだサプライズのご登場だね!!」

と、ガイソーグの正体は、メリオダスと呼ばれる

金髪で少年の様な容姿をした男性だった……。

メリオダス「……。」

アニエス「メリオダス……？」

アデル「何者だ……？」

タクティス「ご名答!!そう……彼の名はメリオダス……」

魔神王の息子にして、『十戒』の元統率者の魔神族である!!

だが今は、その魔神族を裏切つて人間側へと寝返り、

『七つの大罪』という騎士団の団長を務めて

『憤怒の罪（ドラゴン・シン）』と呼ばれているらしいがね……」

さくら「七つの大罪……？」

小狼「憤怒の罪（ドラゴン・シン）……」

鬼太郎「魔神王の息子だつて……？」

目玉おやじ「しかも、『十戒』の元統率者じゃと!？」

メリオダス「……。」

「キーーーーー……」「ドooooooooooooッ!!」

と、メリオダスは魔神族の力を解放すると、顔に魔神族の紋章が浮かび上がり、漆黒の強大な魔力が体中から噴き出した。

キュアロゼッタ「な……何ですか、あれは!？」

キュアダイヤモンド「あれは……魔神族の力!？」

亜久里「あのガランやメラスキュラよりも

強い力を感じます…。」

アクア「メリオダス、やめなさい!!私よ!ミリカよ!!」

タクティス「無駄だよ!!ガイソグの鎧を完全に破壊しない限り、

彼の精神は支配されたままだ!!」

進之介「…やるしかないみたいだね…。」

メリオダス「…行くぞ…。」

「バキーーーーーッ!!」「ドooooooooooooooooooooん!!」

進之介「うわーーーーーっ!!」

と、メリオダスは進之介に襲いかかり、強力なパンチを繰り出す。

進之介はとっさに剣で受け止めるが、あまりの威力に耐え切れず、

大きく吹き飛ばされてしまった…。

マナ「シン!!」

進之介「痛たたたた…。」

メリオダス「…………。」「バooooooooooooooooooooッ!!」

と、メリオダスは間髪入れずに倒れている進之介に襲いかかる。

進之介「疾風斬(カマイタチ)!!」「ズバババババババ!!」

メリオダス「…遅い:」「ズバババババババババ!!」

進之介「ぐわーーーーーっ!!」

と、進之介はすぐに起き上がり、疾風斬(カマイタチ)を発動させ

て、

応戦するが、メリオダスは疾風斬(カマイタチ)を遙かに凌ぐ速度

で

進之介を攻撃して、大ダメージを負わせた。

キュアダイヤモンド「そ…そんな…」

レジーナ「シンでも…敵わないの…?」

進之介「はあ…はあ…はあ…はあ…やっぱり、

こうなっちゃうよね…」

と、大ダメージを受けて倒れていた進之介は、そう言いながら

何とか立ち上がった。

メリオダス「…終わりだ…神千斬り(かみちぎり)」

「バアーーーーーッ!!」

とメリオダスは、何とか立ち上がった進之介にとどめを刺すべく、神千斬り（かみちぎり）を発動させて襲いかかった。

アクア「ああっ!!」

マナ「シューーン!!」

進之介「だったら僕も…本気で行くよ!!」

「キーーーーーン!!」「バアーーーーーッ!!」

メリオダス「何!？」

と、進之介はそう言うのと、胸元が激しく光りだし、金色に輝いた以前より大きめの首飾りが現れた。

そして、その影響で起こった衝撃波により、メリオダスは吹き飛ばされた。そして…

進之介「うおおおおおーーーーっ!!」

「バアーーーーーッ!!」「ドオーーーーーッ!!」

と、進之介が雄叫びを上げると、足元から巨大な魔法陣が出現して膨大な魔力が溢れ出し、辺り一帯が真っ赤に染まっていく。

アニエス「な…何よ、この魔力は!？」

アデル「こんな魔力…感じるのは初めてだ…。」

タクティス「ついに…始まるのか!!」

レイス「さあ、我が主よ…今こそ王たる資質を見せる時だ!!」

進之介「変身!!」「ブオーーーーーッ!!」

と、進之介が掛け声を上げながら首飾りを発動させると、金色の魔力の渦が出現して進之介を包み込む。

そして、魔力で精製された漆黒の衣装とマントを纏い、金色に輝いた胸当てや肘当てなどのプロテクター類が装着され、顔には目元が開いた漆黒の仮面で覆われた。最後に、持っていた剣が漆黒の長剣へと変化し、体中から金色の強大な魔力が放出されて変身を遂げた。

進之介（変身体）「…。」

ほのか「あ…あれが…!？」

なぎさ「あの人の… 本当の力…？」

ルミナス「す… すごい!!」

レイス「刮目せよ!!この姿こそ、破壊剣(ラグナロク)の真の解放…
そして!!いずれ全世界を統べる次元の王者となるお方だ!!

その名も… 『次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ』で
ある!!」

アクア「次元の王候補(ディオケイター)…」

マナ「ラグナ!!」

タクティス「くつくつくつ… あーっはっはっはっ!!!

私はこの時を待っていた!!この為に、この世界を…

下等な人間共を追い詰めてきたのだ!!

今こそ破壊剣(ラグナロク)の力をいたたくぞ!!」

「ピカーーーーーーッーン!!」「シュオーーーーーーッーン!!」

と、タクティスは懐からマジック・カード『吸収(ドレイン)』を発
動させて、

ラグナとなった進之介の魔力を吸い込んでいく…。

ねこ娘「ああっ!」

鬼太郎「不味い!!」

真琴「シン!!」

タクティス「素晴らしい力だ!!この力があれば私は『ギガデウス』や

『破壊神』共を凌駕することができる… 神の頂点へと

君臨する事ができるのでだーーーーっ!!!」

「バリバリバリバリバリ!!!」「ズガーーーーーッーン!!!」

タクティス「ぐおーーーーっ!」

と、ラグナの魔力を吸い込んでいたタクティスだったが、

その膨大かつ強大な魔力を受け止めきれずに、オーバーヒートを起
こして、

ダメージを受けた。

レイス「愚かな… 君ごときが、彼の力を受け止めきれると思った
のかい?」

彼の力は… 『次元の王』の力だよ!!」

タクティス「お… おのれーっ、こうなったら!!」

「ピカーーーーン!!」「ガシン!!ガシン!!ガシン!!」

メリオダス「!!」

と、タクティスは、メリオダスにカードを向けて発動させると、ガイソーグの鎧が強制的に解除されて、タクティスの体へと装着された。

レイス「なるほど… そう来たか…。」

ガイソーグ（タクティス）「こうなれば、私が彼を倒し、

破壊剣（ラグナロク）の契約者と

なってくれる!!」

さくら「ほえーっ！っ!!」

ケロベロス「今度はあいつが、あの鎧を付けたで…。」

アクア「!!メリオダス!!」「パチン!!」「シユン!!」

と、アクアは、ガイソーグから開放されたメリオダスを自身の近くへと瞬間移動させた。

メリオダス「ううう…。」

アクア「良かった… どうやら、大丈夫みたいね…。」

アンズ「姉姉さま…？」

ラピス「こいつ… 敵じゃないのかよ!!」

アクア「大丈夫よ!!彼は悪い夢を見ていただけ…」

すぐに目を覚ますわ!!」

リータ「それより… あの十字架を見て下さい…」

ナツメ「えっ!?!」

ケースケ「あーっ！っ!!もう丸いのが1個になってるよーっ!!」

と、一同が『滅びの十字架（スタヴロス）』に目をやると、

周りを飛んでいた『光昌玉（オーブ）』が、いよいよ、

あと1個のみとなってしまっていた。

キュアダイヤモンド「そ… それじゃ、トランプ共和国は…」

キュアロゼッタ「あと1分で…」

レジーナ「滅亡しちゃう…？」

真琴「シン… 早く、そいつを倒してー！ー！ー！！」
ガイソグ（タクティス）「ハツハツハツ！！これは面白くなってきたな！！」

『滅びの十字架（スタヴロス）』が発動して滅ぶのが先か… 私に倒されて死ぬのが先か… 競争と行こうじゃないか！！」

レイス「タクティス… 残念ながら、そのどちらにもならないよ！！」
ガイソグ（タクティス）「何だと…！？」

「ピシーーーーー！！」

と、『滅びの十字架（スタヴロス）』の周りを、波動が走ると、『光昌玉（オーブ）』の時間が止まり、動きを停止した。

アクア「時間が… 止まった!?」

マナ「これって… もしかして!!」

「シュン!!」「シュン!!」

バイエルン「早速、修行の成果が出ているようだな…。」

アルト「そうでなければ、わざわざ付き合ってた

意味が無いよ!!」

レジーナ「あー！ー！ー！！あの2人は!？」

亜久里「次元の監視者（ダイダロス・アイ）!!」

「さくら「あの人達が…？」」

小狼「俺達は、見るのは初めてだな…。」

ケロベロス「見るからに、胡散臭そうな奴らやな…。」

ガイソグ（タクティス）「貴様等… 何のつもりだ!？」

バイエルン「勘違いしないでらおうか… 私達はただ、

彼の修行の成果をじっくりと見てみたいだけだ…。」

アルト「別にこの国がどうなるうが、知ったことじゃないよ!!」

真琴「……………」

トウマ「な… 何だ、あの2人は?」

ナツメ「感じ悪っ!!」

アキノリ「けど、とりあえずは助かったな!!」

レイス「では我が主… 存分に戦われよ!!」

ラグナ「うん!!」

ガイソグ (タクティス) 「ならば… 我が下僕達… 出でよ!!」
「ピカーカーン!!」 「シュン!! シュン!! シュン!! シュン!! シュン!! シュン!!」

セル 「……………」

ダーブラ 「……………」

ザガート 「……………」

ジャアクキング 「……………」

羅仙 「……………」

なぎさ 「うそ!？」

ほのか 「どうして、ジャアクキングが!？」

トウマ 「羅仙までいる……………」

アキノリ 「どういう事なんだよ!？」

マナ 「あと、見たことがない人達までいる……………」

ねこ娘 「ちよつとあんた、卑怯じゃない!!」

ガイソグ (タクティス) 「戦争に卑怯も何もあるのか?」

それにこれは、私自身の力で召喚した者たちだ……………」

下等な人間や妖怪共が… 神に気安く意見するな!! 行け!!」

ダーブラ 「死ね……………」 「バ……………」

と、まずはダーブラが、先陣を切ってラグナへと襲い掛かるが……………」

ラグナ 「魔法剣 (アタック・ヴァイト) !! 炎殺断 (メギド・スラッ

シュ) !!」

「ズバゴ……………」

ダーブラ 「ぐわ……………」

「ドドドドドドドツカー……………」

と、ラグナは、剣に強力な黒い炎を纏わせると、ダーブラを

一振りで粉碎した。

セル 「おのれ……………」

ザガート 「闇爆殺襲 (ストラトス) !!」

「ゴ……………」

と、続いて、セルとザガートがラグナに向けて、

必殺技で攻撃を仕掛ける。

ラグナ「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!大風撃（サイクロン）!!」
「ブオゴガアーーーーー!!!」

セル「何だと!？」

ザガート「うおおおおおおおおーーーーっ!!」

「ドドドドドドドドドドドツカーーーーー!!!」

と、対するラグナは、大風撃（サイクロン）を発動させて、前方に巨大な風の渦を放ち、かめはめ波と闇爆殺襲（ストラトス）をかき消して、セルとザガートに直撃させ、粉碎した。

ジャアクキング「小癩なーーーーっ!!」

羅仙「死ねーーーーっ!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

「ドコーーーーーッ!!!」

マナ「シーーーーン!!」

と、ジャアクキングの闇のエネルギー弾と、羅仙のエネルギー弾がラグナに直撃したかに見えたが…

「シュン!!」

ラグナ「どこを見ているの?」

ジャアクキング・羅仙「何!？」

「バリバリバリバリ!!!」 「ドオーーーーーッ!!!」

アクア「こ…この魔力は!？」

ラピス「す…すげえ…。」

ラグナ「融合魔法剣（ダブル・アタック・ヴァイト）!!

雷疾風斬（サンダー・ストーム）!!」

「ズバドーーーーーッ!!!」

と、ラグナは、凄まじい雷撃を帯びた剣で、ジャアクキングと羅仙を

瞬時に一刀両断し、雷撃の渦を巻き起こした。

ジャアクキング「ぐわーーーーーっ!!」

羅仙「ごわーーーーーっ!!」

「ドドドドドドドドドドツカーーーーーッ!!!」

そして、ジャアクキングと羅仙は大爆発を起こし、跡形もなく消滅

した。

なぎさ「マジ!？」

ほのか「ジャ・・・ジャアクキングと・・・。」

ナツメ「あの羅仙が・・・。」

トウマ「一撃で・・・。」

シャイニールミナス「信じられません・・・。」

ガイソグ（タクティス）「何という力だ・・・。」

「スタツ・・・」

ラグナ「君は、僕を怒らせた・・・。」

ガイソグ（タクティス）「何!？」

ラグナ「君は自分の欲の為に、多くの人々を巻き込み・・・

利用し・・・そして、僕の大切な友達を泣かせた・・・

君は神でも何でもない!!ただの小悪党だ!!」

真琴「シン・・・ううう・・・。」

マナ「まこぴー・・・。」

と、ラグナの言葉に涙を流しながら感動する真琴。

ガイソグ（タクティス）「人間ごときが・・・調子に乗るな!!」

「バアーーーーーッ!!」「ピカーーーーン!!」

と、ガイソグ（タクティス）は、持っている全てのカードを

自身の周囲に出現させると、カードの力を剣に集中させた。

ガイソグ（タクティス）「コオーーーーーッ!!」

「ブウーーーーーン!!」

と、前方に巨大な禍々しい漆黒のエネルギー体が発生した。

そして、その影響で、周囲の空間に次々と亀裂が生じていき、

崩壊し始めた。

アルト「フン・・・追い込まれた事で、この国ごと奴を抹殺する気の

様だね・・・。」

バイエルン「火事場の馬鹿力という事か・・・少々、厄介だな・・・。」

ラグナ「ハアツ!!」「ドオーーーーーッ!!」

対するラグナも、破壊剣（ラグナロク）を強大な魔力へと変換し、

自身に纏わせて、ガイソグ（タクティス）の攻撃を待ち構えた。

ガイソグ (タクティス) 「神の力を思い知れ!! 『神魔闇弾』
(ブラックホール・ブラスタ) !!」

「ドオーーーーーーッ!!」

ガイソグ (タクティス) は、巨大な漆黒のエネルギー弾を、
ラグナに向けて放った。だが…

ラグナ 「終焉魔法剣 (オメガ・アタック・ヴァイト)…」

「ドシューーーーーン」

と、ラグナはその場から跳躍し、空中へと舞い上がると、
飛び蹴りの態勢をとり、右足に魔力を結集させて、
強大な剣状のエネルギー体を形成させた。

アクア 「シン!!」

マナ 「やつちやえーーーーっ!!」

ラグナ 「破壊剣・滅殺撃 (ラグナロク・デストロイヤー) !!」

「ゴオーーーーーッ!!」

と、ラグナは、凄まじい威力の飛び蹴りを放ち、
神魔闇弾 (ブラックホール・ブラスタ) へと向かっていき、激突
した。

「バリバリバリバリ!!」 「ドドドドドドドドド!!」

ラグナ 「うおーーーーーッ!!!」

ガイソグ (タクティス) 「ゴオーーーーーッ!!!」

ラグナ 「はあーーーーーッ!!!」

「バリーーーーーン!!!」 「ドゴーーーーン!!」

ガイソグ (タクティス) 「ぐあーーーーーッ!!!」

そして、ラグナの『破壊剣・滅殺撃 (ラグナロク・デストロイヤー)』
が

『神魔闇弾 (ブラックホール・ブラスタ)』を粉碎し、

そのままガイソグ (タクティス) に直撃して、吹き飛ばした。

「ピキーーーーン…」

レイス 「君は、見誤ったね… 『次元の王』の力を…」

タクティス 「何だと…」

と、レイスはテレパシーで風前の灯火のタクティスに語り掛け

る…

レイス「君がもし、『ギガデウス』にたぶらかされていなければ、
又、違った結果になっていたかもしれないのに…惜しい
な…」

タクティス「お前の意見など…聞く気は…無い!!」

レイス「そうか…残念だよ…ではさらばだ、かつての友よ…」

「シューーーーーーン…」

ガイソグ（タクティス）「ぐはあーーーーーっ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドツカーーーーーーン!!」

そして、テレパシーで、レイスとの最期の会話を終えた

タクティスは爆散し、跡形もなく消滅していった…。

第17話　　爆誕!! 次元の王候補（ダイオケイター）・ラグナ!!
　　（完）

ハッチが開いた。

犬山まな「鬼太郎ーっ!!ねこ姉さーん!!みんなーっ!!」

知世「さくらちゃん、李君、ケロちゃん、みなさまーっ!!」

鬼太郎「まな!!」

ねこ娘「ほら、アニエス。。。」

アニエス「まなーっ!!」

犬山まな「アニエスーっ!!」「ガバツ!!」

と、犬山まなとアニエスは抱擁を交わし、再会を喜び合った。

犬山まな「アニエス。。。良かった。。。」

アニエス「こうして、また会えるなんて嬉しい。。。」

いっぱい話したい事があるの!!」

犬山まな「わたしもよ。。。後で聞かせてね!!」

アニエス「うん!!」

アデル「良かったな、アニエス。」

犬山まな「アデルさんも。。。お元気そうで良かったです!!」

アデル「お前もな、まな。。。」

さくら「知世ちゃん!!」

知世「さくらちゃん!!」「ガバツ!!」

と、さくらと知世も互いに抱擁を交わし、勝利と無事を喜び合った。

小狼「大道寺も無事で良かった。。。」

ケロベロス「まあ、お前は死にかけてたけどな、小僧。。。」

小狼「う。。。うるさいぞ、ケロベロス!!」

さくら「ケロちゃん!!そんな事言っちゃダメでしょ!!」

小狼君。。。ありがとう!!」

小狼「い。。。いや。。。お前が無事でいてくれたら、俺は。。。」

と、互いの顔を真っ赤にしながから見つめあうさくらと小狼。。。

さくら・小狼「んっ?」

知世「あっ、どうぞお構いなく!!」

さくら「ほえー。。。っ!!」

と、さくらと小狼の様子をビデオカメラに収めて、

ご満悦になる知世。

ケロベロス「いつもの光景が戻ったなーっ!!」

ラグナ「……………」。「シュー……………」。

進之介「ふう……………」。

と、進之介もラグナから元の姿へと戻った。そこへ…

マナ「シュー……………」。

六花「やったね!!」

ありす「お見事でした!!」

亜久里「さすがはわたくしのシン様ですわ!!」

レジーナ「何言ってるのよ亜久里!!?あたしのシンよ!!」

進之介「あつ、みんな!!無事で……………」。

「ダダダダダ……………」ガバツ!!」

真琴「……………」。

と、真琴は全速力でマナ達より真つ先に進之介の傍へ向かい、

そのまま抱き着いた……………」。

真琴「ううう……………」ひつく……………」。

進之介「まこぴー……………」。

真琴「ありがとう……………」シン……………」この国を救ってくれて……………」

うわ……………」

と、真琴は感謝の言葉を述べながら、進之介の胸の中で号泣し始めた。

マナ「シン……………」まこぴー、とてもつらかったんだよ……………」慰めてあげて……………」。

進之介「……………」うん!!」。「ギュツ……………」

と、進之介は真琴をそのまま優しく抱きしめた……………」。

亜久里「……………」仕方ありませんわね。今日のところは……………」

真琴に譲って差し上げますか……………」レジーナ。」

レジーナ「……………」わかったわよ……………」。

レイス「さすがだ、我が主!!」

進之介「えっ!?!」

と言いながらレイスがやってくると、進之介と真琴は慌てて抱擁を解き、顔を赤くしながら立ち尽くした……………」。

六花「この人は……」

ありす「少しは空気を讀んでもらいたいですよね……」
マナ「あはは……」

レイス「この世界は救われた!!そして君もまた一歩、
新たな『次元の王』へと近づく事ができた。

改めて忠誠を誓おう……」
「スツ……」

と、レイスはそう語りながら、進之介の前にひざまづいた……

進之介「ごめん、レイス……僕は君の仲間を……」

レイス「彼は偉大なる王が誕生する為の偉大なる礎となったのだ。

気にする事は無いさ……」

アクア「私はまだ、認めていませんけどね……」

進之介「ミリカ……」

レイス「やれやれ、まだその様な事を……」

ラピス「どうしてだよ、姉姉さま……破壊剣（ラグナロク）の力が

あれば、

あたし等、負ける気がしねーぜ……?」

アクア「破壊剣（ラグナロク）の力ばかりに頼ってどうするのです
!?!」

アンズ「姉姉さま……」

アクア「先ほどのシンの姿……そして力……あれはまさしく、

『次元の王』に近いものでした……」

このままシンがラグナに変身し続けたらもしかしたら……

そう思うと私、怖いのです……」

進之介「……」

マナ「ミリカさん……」

メリオダス「まあ、ミリカがそう思うのも無理ねーわな!!」

アクア「メリオダス!!」

ラピス「お前、もう動けるのかよ!?!」

メリオダス「おう、おかげ様でな!!」

…… 確かに『次元の王』の力のヤバさは俺も良く

わかってはいるつもりだぜ。けどな、ミリカ……

お前がシンの事を思ってるなら、信じてやれよ!!

俺はシンが悪の大魔王みたいになるとは思わねーぜ!!」

進之介「メリオダス……。」

アクア「わかってる……わかってるわよ!!でも……でも……。」

マナ「ミリカさん……. だったら、あたし達みんなでシンを支えようよ!!」

アンズ「私も、その意見に賛成です!!」

リータ「私も……. 彼を信じたいです!!」

ラピス「コイツがもし、姉姉さまを泣かせる様な事したら、

あたしがぶっ飛ばしてやる!!だから、信じようぜ!!」

アクア「あなた達……. わかりました……. !!」

進之介「ミリカ……。」

アクア「シン……. あの時、私にこう言いましたね……。」

進之介(回想)「もし僕が道を誤ったら……. その時は、僕を倒して!!

ミリカの判断なら、僕は信じられるから……。」

進之介「……. うん!!」

六花「えっ!？」

真琴「シン……. そんな事言ったの……. ?」

アクア「けれど、私はあなたを倒す事なんてできない…….

いや、出来る訳がありません……. ですから……. もしあなたが

道を誤った時には、私達全員であなたを止めます!!

だから、あなたを信じます……. 信じさせてください!!」

と、アクアは進之介の両手を握りながらそう語った。

進之介「ありがとうミリカ……. みんな!!」

マナ「うん!!」

ラピス「へへっ!!」

メリオダス「おう!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーの結束が更に深まった所に…….

「シュン!!」「シュン!!」

アルト「やっと、無駄話が終わった様だな……。」

バイエルン「我々も用があるのだが、よろしいかな?」

ありす「次元の監視者（ダイダロス・アイ）…。」
レジーナ「用って、何なのよ!？」

バイエルン「いや、『これら』の処遇をどうするのか、

決めてもらいたくてな…。」

「パチン!!」と、バイエルンが指を鳴らすと…

「ドサドサツ…!!」

ガラン「……………」

メラスキュラ「……………」

メリオダス「ガラン… メラスキュラ!!」

ラピス「こいつ等… 生きてるのかよ!？」

アデル「魔力はほとんど残っていない様だが、

息はあるみたいだな…。」

アクア「考えるまでもありません!!次元管理局に転送し、

しかるべき裁きを受けてもらいます!!」

進之介「… 待って!!」

アクア「シン…?」

進之介「バイエルン… この2人を元の世界に帰してあげてくれな

いかな?」

バイエルン「… 何?」

ねこ娘「ちよ… ちよつとシン!？」

ラピス「お前… 正気かよ!？」

アクア「シン… この2人、『十戒』がどんなに危険な存在か…

わからないあなたじゃないでしょう…?」

進之介「わかってるよ… 確かに、この国やみんなを傷つけた事は

許せない… けど、この2人も利用されていただけなん

だ…。」

黒幕はもう倒したし、この国でやった事に対するの罰は、

充分受けたと思うから…。」

マナ「シン…。」

ケロベロス「けど、元の世界に戻したとしてもこいつら、

またやらかすと思うで…。」

進之介「その時は、その世界の人々が彼らを止めると思うよ…
そうだろ？メリオダス…。」

メリオダス「… ああ!!」

アクア「わかりました… あなたがそう言うのなら…。」

進之介「ありがとう、ミリカ!!まこぴー… 良いかな…？」

真琴「うん。シンならそう言うと思ってたから…。」

バイエルン「いいだろう… では我々が責任を持って、

この2人を元の世界へと帰そう…。」

アルト「だが、まだまだお前も甘いな、失敗作…。」

敵は倒せるうちに倒すのが基本だというのに…。」

進之介「確かにそうかもしれない… けれど僕は、例え敵であろう
と、

救える時には救ってあげたいし、許せる時には

許してあげたいんだ… そんな自分でありたいし、

王様としてもそういう気持ちを持つ事は大切だと思うか

ら…。」

鬼太郎「シン…。」

目玉おやじ「良い少年じゃな、彼は…。」

鬼太郎「はい、父さん…。」

アルト「フン… その甘さがどこまで続くか見ものだな。

言っておくが、本当の地獄はこれからだぞ…。」

バイエルン「ところでメリオダス、君はどうするかね…？」

メリオダス「その事なんだが、ミリカ… 俺をお前達の

仲間に加えてもらえねーか？」

進之介「えっ!？」

アクア「それは… 断る理由はありませんが、でも良いのですか…
？」

も…
あなたの仲間達も心配してるだろうし、それに他の『十戒』

メリオダス「相手が『十戒』だけなら帰る所なんだが…」

今回の件で、魔族と『ギガデウス一派』がつるんでる

事が

わかった・・・という事は、魔神族の目的は、ブリタニアの支配だけではとどまらなくなる・・・。」

アクア「まさか・・・彼らは『ギガデウス一派』と組んで、

他の次元の支配を・・・？」

メリオダス「ああ。だから今、俺がブリタニアに戻っても

どうしようもねえ・・・。もし奴らにまとめて

かかって来られたら、いくら俺でも負ける・・・。

奴らが本格的に動き出す前に、出来る事を

少しづつでもしておきてーんだ!!それに、

迷惑をかけつちまったお前達に、借りも

返してーしな・・・。」

進之介「うん。わかったよメリオダス、一緒に行こう!!」

アクア「我々、グラン・ゲインズはあなたを歓迎します!!」

メリオダス「シン・・・ミリカ・・・ありがとう!!

後、バイエルン・・・だったか?もう一つ頼みたい事がある。」

バイエルン「何だね?」

メリオダス「俺の仲間・・・『七つの大罪』のみんなも俺達の所に

連れてきてもらえねーか?これからの戦い・・・

あいつ等の力が絶対に必要になる!!」

バイエルン「フツ・・・良いだろう・・・だが、我々として

こう見えて忙しい身でな・・・時間はかかるかもしれないが、

それでも構わないかな?」

メリオダス「ああ、よろしく頼むぜ!!」

進之介「ありがとうバイエルン・・・アルト・・・。」

バイエルン「礼には及ばんさ。その方が我々にとつても

何かと都合だからな・・・では、これからの

健闘を祈るぞ、桑田進之介・・・いや、

『次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ』よ!!

行くぞ、アルト……。」

アルト「了解!!」「シユン!!」「シユン!!」

と、アルトとバイエルンはガラン・メラスキュラと共に、その場から撤収していった……。

六花「何かと好都合……?」

ありす「どういう事でしょうか……?」

レジーナ「相変わらず、訳が分からない連中ね……。」

メリオダス「さてさてさーて!!今度は、あいつ等がお前と

話したそうにしているぜ?」

進之介「えっ?」

ナツメ「あ……あのー……。」

なぎさ「……初めまして……。」

ほのか「あなたにお願いしたい事が……。」

進之介「僕に?どうしたの?」

マナ「シンと一緒に戦ってほしいんだって!!」

なぎささん達の世界を取り戻す為にね。」

アクア「彼女達の世界……レグルス帝国軍に

占領されているらしいのです……。」

進之介「レグルス帝国軍……あの人達か……。」

メリオダス「何だ?そいつ等は……。」

アクア「全次元の支配を目論んでいる大規模なテロリスト軍よ……。」

そして、彼らも『次元の王』の力を宿した13の武器を

探しているのよ……。」

メリオダス『『次元の王』の力を宿した13の武器……』

破壊剣（ラグナロク）と同じ力の武器か……』

じゃあ、お前達の世界が占領されっちまったのは、

その武器があるからなのか?」

アキノリ「そこまでわかんねーよ!!」

アヤメ「エンマ様からは破壊剣（ラグナロク）の事を

聞いてはいましたけど……。」

レイス「いや……彼らの情報網は全次元の中でも一、二を争う程

だ……。

そんな彼らが現れたという事は、13の武器が存在する可能性が

高そうだね……。我が主、どうやら行ってみる価値はありそうだよ。」

進之介「もちろんそのつもりだよ!!みんな……。僕で良ければ

喜んで力になるよ!!」

ナツメ「本当ですか!？」

なぎさ「やったーっ!!」

ほのか「ありがとうございます!!」

アクア「では、我々の次の任務（ミッション）は……

A・D次元第5世界の奪還と、13の武器の入手とします

!!

ラピス「よっしやー!!腕が鳴るぜ!!」

アンズ「いよいよ異世界ですか……。」

リータ「頑張りましょう!!」

ナツメ「A・D次元第5世界……?」

なぎさ「わたし達の世界……。そんな風に呼ばれているんですか?」

アクア「ええ、そうよ!!我々、次元管理局が名付けた

シリアルナンバーみたいなものよ。

A・D次元には全部で13の平行世界が存在していて、

今、私達がいるこの世界は、『第3世界』と

呼ばれているのよ。」

マナ「へえ……。そうだったんだ!!」

六花「知らなかった……。」

ありす「まあ、普通は知る事はないですものね。」

さくら「……。」

鬼太郎「……。」

ケロベロス「さくら……。どないしたん?」

ねこ娘「鬼太郎もどうしたのよ?」

さくら「そしたら、わたし達……。この世界を出ていくって事に

なるんですよね……。」

鬼太郎「そういう事になるな……。」

小狼「さくら……。」

犬山まな「鬼太郎……。」

さくら「アクアさん…… 出発までまだ時間はありますか……？」

アクア「ええ。出発は3日後にする予定だから。」

鬼太郎「そしたら、少し時間をくれないか？僕達も今後、

共に行くのかどうか…… みんなと話し合ってみるから……。」

さくら「わたしも…… 考える時間をください……。」

小狼「さくら……。」

ねこ娘「鬼太郎……。」

ケロベロス「せやな…… いつこの世界に戻れるかどうか

わからんし、考える時間は必要やろ……。」

アクア「わかりました…… では、今後も我々と共に行くのか、

出発までにじっくりと考えて、悔いのない

答えを出してください!!」

さくら「ありがとうございます!!」

鬼太郎「わかった。感謝するよ!!」

ジョナサン「マナちゃん…… みんな……。」

マナ「ジョーさん!!」

真琴「大統領!!」

アリス「ご無沙汰してます!!」

亜久里「無事で何よりでした!!」

ジョナサン「みんなのおかげで、このトランプ共和国は

救われた…… 改めてお礼を言わせてくれ。

ありがとうございます……。」

六花「いえ…… 当然の事をしたまでです!!」

レジーナ「そうだよ!!」

ジョナサン「けれど、君達はまたこれから、

更に過酷な戦いへと足を踏み入れる事になる。

そう思うと……。」

マナ「その気持ちだけでも嬉しいよ、ジョーさん!!」
ジョナサン「マナちゃん……。」

マナ「これは、あたし達自身が決めた事なの。だから大丈夫!!
グラン・ゲインズみんながいるし、それに……」

シンも一緒だから……。」

進之介「マナ……。」

ジョナサン「そうか……では、桑田進之介君……みんなの事を
よろしく頼むよ!!」

進之介「はい!!」

アクア「それでは大統領……我々はこれで失礼します!!」

ジョナサン「マーキュリー大佐……ありがとうございます!!」

マナ「じゃーねー、ジョーさん!!」

ジョナサン「マナちゃん……みんな……必ず、この世界に

帰ってくるんだぞ!!」

真琴「はい!!」

ラピス「はあ…… やつと少しはゆつくりできそうだな!!」

アンズ「本部に戻ったら、ティータイムにしましょう!!」

リータ「それでは私、クツキー焼きます!!」

メリオダス「へえ…… そりゃ楽しみだな!!」

ラピス「何だお前?本部についてくる気かよ……。」

メリオダス「ああ。ここはブリタニアじゃねーから、

あまりウロウロしねー方が良いと思ってな!!」

アンズ「それは言えてるわね……。」

リータ「あなたがその気になれば、町の1つや2つ、

直ぐに壊滅してしまいますからね。」

メリオダス「おいおい…… 人を大怪物みたいに言うなって……。」

ラピス「充分、大怪物だよ!お前は!!」

ほのか「なぎさ…… 出発までわたし達、どうしようか……?」

なぎさ「そうね……。」

ひかり「やつぱり…… マナさん達と一緒に رفتった方が良いと思いま
すが……。」

進之介「…… だったら、僕の家に来ないかな？ 部屋も幾つか空いてるし……。」

なぎさ「本当!？」

ほのか「良いんですか?」

ひかり「ご迷惑じゃありません?」

進之介「迷惑だなんて…… いっぱい人がいた方が、僕も楽しいし。」

なぎさ「それじゃ、けつてーい!!」

ほのか「ありがとうございます!!」

ひかり「えーつと…… 桑田進之介さん…… でしたっけ……?」

進之介「シンで良いよ…… みんなもそう呼んでるし!!」

なぎさ「わたし、美墨なぎさ!! キュアブラックだよ!!」

ほのか「雪城ほのか…… キュアホワイトよ!!」

ひかり「九条ひかりといいます!! シヤイニー・ルミナスです!!」

なぎさ「よろしくね、シン!!」

進之介「うん!!」

マナ「……。」

六花「どうしたの…… マナ?」

マナ「よーし…… こうなったら……。」

ありす「マナちゃん……?」

真琴「マナ…… まさか……」

アクア「…… (本当は私もシンと一緒にいたいのですけど……)

仕方ありませんね…… 我慢我慢!!」

アルテミス…… 発進!!」

「ブシュー……」

と、グラン・ゲインズのメンバーが全員、艦に乗り込むと、

アクアはアルテミスを発進させて、トランプ共和国を

後にするのであった……。

そして、鬼太郎とナツメ達は、ゲゲゲの森がある町へと、

さくら・小狼・知世・ケロベロスの3人と一匹は友枝町へ、

進之介やマナ達、そしてなぎさ達は、大貝町へと

それぞれ送り届けて、アクアとラピス・アンズ・リータの3人娘、

そしてメリオダスは次元管理局へと帰還していった…。

トランプ共和国その後のとある場所

① 「フン… 『次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ』か…。

② 「しかし、『ギガデウス一派』も情けない事だ…

神が人間に負けるなど、あつてはならないと言うのに…。」

① 「だが、あの戦闘力は侮れんぞ… 『破壊神ビルス』程では

無いしろ、『孫悟空』や『ベジータ』には匹敵するかもしれない

ん…。」

② 「どうやら今度は、今我々がいる世界へと向かうみたいだな…。

丁度いい… 思いあがっている人間共に神の裁きを下してやろう…。

私の不死身の能力と… お前の『ロゼ』の力でな!!」

① 「フツ… 楽しみだな…。」

「ドシューーーーーーッ!!!」 「シユンシユンシユンシユン…。」

と、①は、気を高めると、毛髪や瞳の色が淡いピンク色に変色し、全身からは紫がかった赤紫色のオーラを発生させた。

② 「今度こそ成就させてやる… 『人間0（ゼロ）計画』をな!!」

激闘の果てに無事、トランプ共和国を救い、帰還した

グラン・ゲインズのメンバー達。果たして、

今後も共に戦い続けるのか迷いを見せる

さくらや鬼太郎達はどのような答えを出すのか…。

そして、最後に現れた謎の2人組の正体とは…？

いよいよ異世界へと旅立つことになる進之介達を

どのような運命が待ち受けているのであろうか!?

第18話 激闘の果てに （完）

第19話 　　新たな決意 　　

　　く ゲゲゲの森 　　

鬼太郎「・・・と言う訳なんだけど、みんな・・・

　　僕はどうしたらいいと思う・・・？」

ねずみ男「やめとけやめとけ!!そんな戦いに首突っ込んだら、

　　命がいくつあっても足りやあしねーよ!!」

ねこ娘「ねずみ男・・・あんたねえ!!」

ねずみ男「俺やあ、鬼太郎の為に言っつけてやってるんだぜ!!

　　俺達妖怪が、そんな人間の駒にされちまって

　　良いのかっつけて言っつけてるんだよ!!」

子泣き爺「ほう・・・ねずみ男にしては、真つ当な事を言っつとるの
う・・・」

ナツメ「ねずみ男さんの言っつけてることも分かります・・・。

　　人間と妖怪が仲良くなるには、まだまだ時間が

　　必要だっつて事も・・・」

ねこ娘「けど、これでも随分、進歩したのよ。

　　以前は、人間とああやって一緒に戦うなんて、

　　考えられなかったもの・・・」

アニエス「私も、まなに出会って、人間の印象が随分と変わったも
の・・・」

アデル「アニエス・・・そうだな・・・」

目玉おやじ「鬼太郎・・・お前はどうしたいんじゃ？」

鬼太郎「正直言っつて、僕がこの森を離れるわけにはいかないと

　　思います・・・」

トウマ「鬼太郎さん・・・」

アキノリ「そうか・・・そうだよな・・・」

鬼太郎「でも、彼の・・・シンの力になりたいと思っつている自分もい
る・・・」

犬山まな「鬼太郎・・・」

砂かけ婆「何を迷っつとるんじゃ!!そこまで惚れ込んだる少年なら

ば、

一緒に行けば良からう!!自分の気持ちに正直に
ならんかい!!」

鬼太郎「でも、僕が離れたら、この森は…。」

「お……い、鬼太郎!!」

油すまし「……………」

タンコロリン「……………」

提灯お化け「……………」

山小僧「……………」

かわうそ「……………」

鬼太郎「みんな……………」

かわうそ「おいら達の事なら気にするな!!」

油すまし「鬼太郎が居なくても、この森は立派に守って見せるぞ!!」

山小僧「だから鬼太郎……自分の気持ちに正直になってよ!!」

ねこ娘「あんた達……………」

目玉おやじ「鬼太郎よ……答えはもう出とるんじゃないかのう……

？」

鬼太郎「……………」

ナツメ「鬼太郎さん……………」

鬼太郎「……わかった!!僕も君達と行くよ!!」

アキノリ「本当か!」

ケースケ「やったあーっ!!」

ねこ娘「そう来なくっちゃね!!」

砂かけ婆「ようし、これからワシらも忙しくなりそうじゃのう!!」

鬼太郎「砂かけばあ……ついてくる気なのかい?」

砂かけ婆「当然じゃ!!それに、ついてくるのはワシだけでは

ないぞい!!なあ、子泣き爺よい?」

子泣き爺「ほえっ?ワシもかいのう?」

砂かけ婆「当たり前前じやろうがい!!鬼太郎が行くというのに、

お主はのんびり酒でも飲んでく気かい!」

子泣き爺「まあ……違う世界にもうまい酒があるなら良いがの

う……。

ナツメ「わたし達の世界を取り戻したら、いくらでもぐちそうしま
すよ、

子泣き爺さん!!」

ぬりかべ「ぬりかべー!!」

ねこ娘「ぬりかべも、やる気マンマンみたいね!!」

一反もめん「ワシもおるばーい!!」

アニエス「わたしも……一緒に行く!!」

アデル「アニエス……」

アニエス「わたし……今回の戦いで思ったの……バックベアード

みたいな奴に苦しめられている人達がまだまだ大勢い
るって……

力不足かもしれないけど、1人でも多くの人達を救いたい
の。

それに……」

ねこ娘「それに……?」

犬山まな「どうしたの?アニエス……顔、赤いよ?」

アニエス「な……何でもない……」

と、顔を赤くしながら、ねこ娘とまなに話すアニエス。

アデル「アニエス……(ああ……そういう事か……)」

鬼太郎「君もシンの事が気に入ったみたいだな、アニエス……」

ねこ娘「マジっ!?!」

犬山まな「アニエス……そうなんだ!!」

アデル「鬼太郎……余計な事を……」

アニエス「そ……そうよ……悪い!?!」

ねこ娘「ううん、良いんじゃないの?彼、いい子だし……」

犬山まな「応援するよ、アニエス!!」

アニエス「まだ話したこともないけど……ありがとう、まな!!」

砂かけ婆「ほほう……そんなにいい男なのか……こりゃあ、会うのが

楽しみになつてきたわい!!」

ねこ娘「あはは……」

ナツメ「鬼太郎さん……みなさん……ありがとうございます!!」
目玉おやじ「よいよい!!こうせんと、きつとワシらも後で

後悔すると思うからのう……。」

鬼太郎「そう……これは僕の……いや、僕達の選択したことなんだ……。」

お礼なんて必要ないよ。これからもよろしく、

妖怪探偵団のみんな!!」

トウマ「はい!!」

アキノリ「こちらこそ!!」

アヤメ「よろしくお願いします!!」

ケースケ「鬼太郎さん、よろしく!!」

ねずみ男「ケッ!!どいつもこいつも……俺あー絶対に行かねーぞ!!」

鬼太郎「いいや、お前も来るんだ、ねずみ男……。」

ねこ娘「どうしてよ鬼太郎!!こんな奴、ほっとけば良いじゃない!」

鬼太郎「僕が留守の間に、また悪い事を企んでもらっては困るからな。」

だから、僕の目の届くところに居てもらおう。」

ねずみ男「冗談じゃねえ!!何で俺が!!」

ねこ娘「うっさいわね!!鬼太郎を困らせる気!」「シヤキーン!!」

と、ねこ娘は、鋭い爪を両手から伸ばし、ねずみ男に向ける……。

ねずみ男「わ……わかったよ、行きやー良いんだろ行きやー!!」

ナツメ「うふふ……。これから賑やかになりそうね!!」

こうして、グラン・ゲインズに正式に加わる事を決めた

鬼太郎ファミリーであった……。一方、その頃……。

友枝町

さくら「……………」

知世「さくらちゃん……。」

ケロベロス「さくら……悩んどるな……。」

「ザッ……ザッ……ザッ……」

小狼「さくら……。」

さくら「小狼君……ねえ、小狼君はどうしたいの……？」

小狼「俺は、お前が決めたことについていく。それだけだ……」

ただ……今後は、これまで以上に激しい戦いになるのは

間違いないと思う……だから、俺はお前に、気安く

戦おうとは言えない……」

さくら「小狼君……でも、わたしは強くなりたい……」

小狼「さくら……？」

さくら「戦うのは怖いけど、もっと怖い思いをしている人達を

守ってあげられる様に、強くなりたいの……」

小狼「……俺もだ、さくら……」

さくら「小狼君……」

小狼「そりやあ、シんみたいにはいかないけど、俺だつて、

さくらや、大好きな人達……そして、この町を守る様に

強くなりたい……それには、グラン・ゲインズのみなどと

一緒に行くのが一番だと俺は思う。」

ユエ「ならば……己の気持ちに素直に従うといい……」

と、そこへケロベロスと同じもう一人の守護者であるユエが

さくらの傍へとやってきた……

さくら「ユエさん……」

小狼「ユエ……」

ケロベロス「何やお前、来とつたんか。」

ユエ「ただし……行くのなら、お前の家族にもちやんと

話しておけ……特に、桃矢にはな……」

桃矢「呼んだか……？」

さくら「お兄ちゃん!？」

ケロベロス「あ……あかん!!」「……」

と、そこへ、さくらの兄である木之本桃矢がやってくると、

ケロベロスは慌ててぬいぐるみのフリをした。

桃矢「……もうバレバレだぞ、しゃべるぬいぐるみ……」

ケロベロス「何やてーっ!!誰がぬいぐるみや!？」

小狼「……」

桃矢「……………」

さくら「小狼君…？お兄ちゃん…？」

ユエ「桃矢…実は…。」

桃矢「わかつてるって。さくらだって、もう子供じゃないんだ。

自分が進むべき道は、自分で決められる…。俺はそれを

止めるつもりはないし、止める権利もない。」

さくら「お兄ちゃん…。」

桃矢「ただし、これだけは約束しろ…必ず無事に帰ってくるって
な!!」

父さんには、俺から説明しておくから。」

さくら「えっ!?お父さん…もしかして、わたしの事を…？」

桃矢「知ってたみたいだぜ…まあ、さすがに戦いに首を突っ込んで
でる

事までは知らないみたいだけだな…。」

さくら「お兄ちゃん…心配かけてごめんなさい…」

それから、お父さんにも…。」

桃矢「別に、お前一人で行くわけじゃないんだろう？お前はお前の
できる事をすれば良いんじゃないのか？それに…

聞いたところによると、あのプリキュア達も一緒なんだろ？」

さくら「うん!!それにプリキュアのみんなだけじゃないよ。」

アクアさんに鬼太郎さんに、そしてシンさん…

みんないい人達ばかりなんだよ!!」

桃矢「それなら、何も心配する事はねーわな。

行つてこい、さくら!!」

さくら「お兄ちゃん…ありがとう!!」

ユエ「しかし桃矢、なぜ急に…？」

桃矢「昨日から、様子がおかしかったからな…大方、
また何か悩んでるんだろうと思つてついてきてみたら、

案の定だった…と言う訳だ。」

ケロベロス「はは…やっぱり桃矢兄ちゃんにはかなわんな、さく
ら!!」

さくら「うん……。」

ケロベロス「ところでユエ……お前はどうするんや？」

ユエ「俺は残る……お前達が留守の間、誰かがこの町を
守らなければならぬだろう？」

桃矢「ユエ……。」

ケロベロス「そういう事やったらわかったわ。まかせたで、ユエ!!」

ユエ「お前もなケロベロス……主の傍から決して離れるなよ……。」

桃矢「さくらを頼むぞ、ケロベロス……。」

ケロベロス「桃矢兄ちゃん……よっしゃーっ!!まかせとき!!」

桃矢「あと……小狼だったか?お前も頼んだぞ。」

小狼「……は……はい!!」

知世「お兄様!!さくらちゃんの活躍は、わたくしがちゃんと

記録して参ります!!楽しみにしててくださいね!!」

桃矢「あ……ああ。よろしく頼むな……。じゃあ、俺は

もう行くわ。もうすぐバイトの時間だから……」

さくら、出発する前に、ちゃんと準備は済ませておけよ!!」

と言いながら、桃矢はその場から去っていった。

さくら「お兄ちゃん、ありがとう……。行ってきます!!」

と、さくらは去っていく桃矢に対して、

一礼をしながらそう言った……。

小狼「さくら……これから大変になるだろうけど、

何があっても俺がお前の傍にいる。

だから、頑張ろうな!!」

ケロベロス「小僧だけやないで。ワイ達もや!!」

知世「ケロちゃんの言う通りですわ!!」

ユエ「お前なら大丈夫だ……。自分を信じろ……。そして、

仲間を信じろ。」

さくら「ありがとう、ユエさん……。」

それじゃあ、みんな、行こう!!」

小狼「ああ!!」

知世「はい!!」

ケロベロス「よっしやーっ!!行くでーっ!!」

こうして、さくら達もグラン・ゲインズに正式に加わる
決意を固め、帰路へと着いていくのであった。

そして、大貝町では…。

く 大貝町 進之介の家 く

マナ「シーーン!!そっちの準備はどう!？」

進之介「もうすぐだよ、マナ!!」

なぎさ「マナ、これはどうするの?」

マナ「それはこつちにお願いします!!」

ほのか「そしたら、これは?」

マナ「それは向こうへお願いします!!」

レイス「… マナ君… 君は、家出でもしてきたのかい?」

マナ「えっ?違いますよ。どうしてですか?」

レイス「いきなり、これだけの荷物を持って押しかけて

来るとは… しかも、我が主の部屋を勝手に模様替え
を…。」

マナ「だってえーっ… なぎささん達がシンの家に泊まるって聞い
たら、

居ても立ってもいられなくって…。」

なぎさ「大丈夫よマナ!!横取りなんてしないから!!」

ほのか「本当?なぎさって、シンみたいなタイプ、

けっこう好みだと思っただけ?」

ひかり「私もそう思いますよ!!」

なぎさ「うっ…。」

マナ「ほら、やっぱり!!だからこうやって押しかけてきたのよ!!

それにシンも、みんなでいたほうが楽しいって言ってたし、

後から、六花達も来るんだ!!シンの部屋は広いから、

ちゃんと片付ければ2く3人は一緒に寝られるし。」

進之介「ありがとうマナ。おかげで楽しくなりそうだよ!!」

マナ「シン…。」

レイス「どうでもいいが、早く終わらせてくれないか?」

私も忙しいんだがね……。」

なぎさ「よし!!それじゃあ、頑張りますか!!」

『ピーンポーン!!』

六花「シーン、マナーツ!!」

ありす「今、到着しました!!」

真琴「はぁーい!!」

亜久里「お邪魔しますわ!!」

レジーナ「来てあげたわよ、シン!!」

進之介「みんな!!いらつしやい!!」

マナ「さあ、こんな所に立ってないで、上がって上がって!!」

レイス「…いつから、ここは君の家になったんだい?マナ君…。」

と、進之介の家に六花達も到着して直ぐに、全員総出で部屋の

模様替えを終えると、決起集会パーティーの準備に取り掛かった。

その頃、大貝町では…。

♪ 大貝町上空 ♪

?①「フン…ここが『次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ』

が

いる町か…。」

?②「汚らわしい人間共がウヨウヨしてるな…。奴への挨拶代わり

に

滅ぼしていくか?もう一人の私よ…?」

?①「それもいいな…だが、下手に行動して、『ラー・カイン』の

手下共に見つかつたら何かと面倒だからな…」

我らの計画を本格化させるまで、ここは我慢だ…。」

?②「情けない話だ…。我ら神が人間ごときに気を遣わねば

ならないとは…。計画が成功したら、今度は奴らも

滅ぼしてくれる…。」

?①「ならば、行くか!!『次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ』

の

品定めにな…。」

?②「んっ?…あれは何だ?」

「シューーーーーー」

と、トランプ共和国に現れた謎の2人組の近くに、

謎の円盤が出現した。

?① 「宇宙船か…?」

?② 「中から何か出てくるぞ…。」

謎の宇宙人「まったく…どうなってるんだ!?急に時空の歪みが

現れて飲み込まれるとは…しかもここはいつもの観

星町でも

わたし達の世界でもないではないか!!まあいい…

せっかく来たのだ。この世界の地球を我ら『ノットレイ

ダー』の

支配下にして、『ダークネスト』様へ献上してくれるわ!!

この…『カツパード』様の手でな!!」

と、大貝町上空に『カツパード』と名乗る河童の姿をした宇宙人が

姿を現し、こう宣言した。

?① 「…何だ、あのゴミは…?」

?② 「消していくか…?」

?① 「いや…どうやら、あのゴミ…使えそうだな。

奴をおびき出すエサに利用させてもらおうか。

消すのはそれからでも遅くはない…。」

と、鬼太郎やさくら達が正式にグラン・ゲインズのメンバーに加わる決意をした直後、大貝町上空にトランプ共和国に現れた謎の2人組と、『ノットレイダー』の『カツパード』と名乗る宇宙人が姿を現した。『A・D次元第5世界』に旅立つ前日に、大貝町は再び、戦火に巻き込まれる事になってしまふのであった!!

第19話 く 新たなる決意 く (完)

第20話 　　出現！ノットレイダー！！ 　　

　　～ 大貝町 進之介の家 　　～

マナ「みんな、準備はいい？」

六花「いつでもいいわよ!!」

真琴「あたしも!!」

なぎさ「こっちもOKよ!!」

レイス「では、我が主… 始めようか？」

進之介「うん!! それでは、ささやかながら、

決起集会パーティーを始めま…」

「プルルルルル…」

と、ありすのスマートフォンから着信音が鳴り出した。

ありす「あつ、すみません。セバスチャンからです。」

進之介「いいよ、ありす。電話に出てよ!!」

ありす「はい!! もしもし、セバスチャン、どうしましたか？」

六花「セバスチャンさんからの電話…」

真琴「何か、嫌な予感が…」

ありす「えっ!? わかりました。すぐに向かいます!!」

マナ「ありすちゃん。セバスチャンさん、何だつて？」

ありす「クローバータワー上空に… UFOが出現したとの事

す…」

ほのか「UFO!？」

なぎさ「マジ!？」

六花「マナ、どうする？」

マナ「あたし… UFO見たい!!」

真琴「やっぱりね。」

亜久里「それでは、行きましようか!!」

レイス「マナ君… 君達は先に行ってくれたまえ。

私は、我が主と話がある。」

マナ「はい、わかりました!! みんな、行こう!!」

一同「うん!!」

と、マナ達は、クローバータワーへと向かっていった。
進之介「レイス……話って何？」

レイス「我が主……これを見てくれ。」「ピカーン!!」
と、レイスは左手で持っているノートを開くと、

そこには、現在のクローバータワー周辺が映し出されていた。
進之介「あつ、本当だ。UFOがいる……。」

それに、あのカツパみたいな人と、顔に『N』って
書いてある人達は、誰だろう？」

レイス「彼らは、『ノットレイダー』……。異世界のプリキュアの敵で
あり、

宇宙人で構成されている組織だ。」

進之介「異世界のプリキュア？ マナやなぎさ達の他にも、

まだプリキュアっているの？」

レイス「どうやら、そのようだね。しかも彼らは、時空の歪みに巻
き込まれて、

この世界へ来てしまった様だ。だが、クローバータワーに
堂々と

現れたという事は、戦闘でも仕掛けるつもりだろう……。」

進之介「それは大変だ!! 僕達も急いで行かなきゃ!!」

レイス「彼らは、マナ君達に任せて問題ないだろう。」

肝心なのはここからだ。これを見てくれ……。」

と、レイスはノートに映した謎の2人組の姿を進之介に見せた。

進之介「……何？ この2人組は……。」

レイス「我が主……この2人組は、おそらく、これまで以上の
強敵だろう……とてもじゃないが、彼女達が敵う相手ではな
い。

それに、下手をすれば、この町……いや、世界が壊滅しかね
ない。

だから、私と我が主で、この2人組の相手をする。」

進之介「わかった。けど、この2人組は何者なの？」

レイス「『D・B次元』の……神だ!!」

く クローバータワー上空 く

二階堂「な… 何だ!? あいつらは…」

百田「UFO… ? という事は、宇宙人ですか!? アニキ…」

二階堂「お… 俺が知るか!!」

カツパード「ハツハツハツ!! ではまず手始めに、この辺りから始めるよ

するか!! 行け!! ノットレイ達よ!!」

ノットレイ達「ノットレイ!! ノットレイ!!」

「ピュー!! ピュー!! ピュー!!」

と、カツパードの合図でノットレイ達は、一斉に持っていた光線銃で

町の人々を攻撃し始めた。

町民男性「うわーっ!!」

町民女性「きゃーっ!!」

二階堂「な… 何だこいつら!! いきなり撃ってきやがった!!」

百田「アニキーツ!! 早く逃げましょう!!」

二階堂「馬鹿野郎!! 俺達の町を、あんなヘンテコな奴らの好きにさせて

たまるか!! マナ達が来るまで、俺達も戦うぞ!! うおーっ

!!」

と、二階堂は町の人達を襲っているノットレイ達に立ち向かっていった。

!!」

カツパード「ほう… 中々勇敢な事だな。だが、無駄だ!!」

やれ!! ノットレイ達!!」

ノットレイ達「ノットレイ!! ノットレイ!!」 「バババババツ!!」

と、ノットレイ達は一斉に二階堂に襲い掛かった。

二階堂「く… くそっ!!」

マナ「待ちなさい!!」

カツパード「んっ?」

ノットレイ達「ノットレイ?」

なぎさ「あなた達の好きにはさせないわよ!!」

六花「大丈夫?二階堂君:。」

二階堂「あ:。ああ。助かったぜ。」

マナ「二階堂君:。無茶したらダメだよ。早く逃げて!!」

二階堂「ああ。後は頼んだぞ、マナ!!みんな!!」

百田「アニキ、早く行きましょう!!」

と、二階堂と百田はマナ達に後を託し、その場から退却していった。

亜久里「あなた達、何者ですか!!?名を名乗りなさい!!」

カツパード「フツ:。良かろう!!我らは『ノットレイダー』:。」

そして、我が名はノットレイダーの中で

一番のイケメン戦士:。『カツパード』だ!!」

六花「ノットレイダー:。?」

真琴「それに、どこがイケメンなわけ?」

レジーナ「ただのカツパじゃない。」

カツパード「お:。お前達:。ただの小娘の分際で、私を愚弄する

とは:。」

やれ!!ノットレイ達よ!!」

ノットレイ達「ノットレイ!!ノットレイ!!」

マナ「あいにくだけど!!」

なぎさ「ただの小娘じゃないわよ!!」

カツパード「何!?!」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

ひかり「ルミナス!!シャイニング・ストリーム!!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!!ラブリンク!!」

亜久里「プリキュア!!ドレスアップ!!」

と、マナやなぎさ達は、いつもの掛け声を上げると、

プリキュアに変身していった。

キュアブラック「光の使者:。キュアブラック!!」

キュアホワイト「光の使者:。キュアホワイト!!」

ブラック・ホワイト「ふたりはプリキュア!!」

「バキィーーーーーッ!!」

カッパード「うおーーーーーッ!!」

「ドゴーーーーーッ!!」

ルミナスがカッパードの攻撃を相殺した後、

すかさずブラックとホワイトがダブルキックを放ち、

カッパードを吹き飛ばした。

カッパード「う……うぐ……」

キュアホワイト「どうやら、相手が悪かった様ね!!」

キュアブラック「これ以上、怪我をしない内にとつと帰りなさい

!!」

カッパード「お……おのれ……プリキュア……んっ?」

進之介「おーい!!みんなーっ!!」

キュアハート「シン!!」

キュアソード「待ってたわよ!!」

キュアエース「何を話していたのですか?シン様……」

進之介「ちよつとね……状況はどうなってるの?」

キュアロゼッタ「もうすぐ決着がつきそうですけど……」

カッパード「な……何だ?あの少年は……すさまじいイマジネー

ションを

感じるぞ。ならば!!」「スッ……」

と、倒れていたカッパードは、突如立ち上がり、両剣を構える。

キュアホワイト「ブラック……」

キュアブラック「あんた、まだやる気なの!」

カッパード「当然だ!!さあ、我が刃よ、とくと吸え!!」

歪んだ……イマジネーション!!」

「バァーーーーーッ!!」

進之介「ほえっ?」「ピューーーーーッ!!」

と、カッパードは、決めポーズを取りながら、持っていた両剣から

不気味な緑色の光を発生させると、進之介の体から、黒みがかつた

青紫色のハートが抜き取られて、カッパードの持つ両剣に吸い込ま

れた。

すると…「ブオーーーーーーッ!!!」
カッパード「な…何だ、これはーーーーッ!!!」
両剣から、すさまじい漆黒のオーラが発生し、カッパードを飲み込むと、

まるでラグナの様な姿をした、漆黒の怪物へと変貌を遂げた…。

怪物「ぐおおおおおおおっ!!!」

キュアホワイト「!!!」

キュアブラック「な…何よ、あの怪物!？」

キュアダイヤモンド「あれって…ラグナ…?でも、何か違う…。」

キュアソード「あんな化け物とラグナを一緒にしないでよ!!」

シャイニールミナス「けれど…そういう事でしょうか？」

「シュン!!」

レイス「どうやら、あのカッパ君が持っていた刃が、我が主の

イマジネーションを吸いとったからの様だね…。」

キュアハート「レイスさん!!」

キュアダイヤモンド「イマジネーション…?」

キュアロゼッタ「イマジネーション…つまり、想像力ですか?」

レイス「その通り。どうやら、あの刃は対象者のイマジネーションを

吸い込み、力を増幅させる効果があるようだ。

だが、我が主のイマジネーションをコントロールする事が

できずに暴走して、逆に取り込まれてしまったのだろう…。

フツ…愚かな事だ。」

キュアソード「イマジネーションを吸い取られた人はどうなっちゃうの?」

レイス「通常なら、あの刃に取り込まれてしまう所なのだろうが…。」

我が主の場合は…あの通りみたいだよ。」

進之介「ZZZZZZZZZZ…。」

と、イマジネーションを吸い取られた進之介は、

気持ちよさそうに爆睡していた。

レジーナ「シン……寝ちやつてる。」

キュアハート「……………」

キュアダイヤモンド「ハート……どうしたの？」

キュアハート「シン……かわいい!!」

キュアソード「うふふ……ホントね!!」

レイス「君達……見とれるのはけっこうだが、あれを何とかしない限り、

我が主は、永久にこのままだよ？」

キュアハート「え……………っ?!寝顔かわいいけど、そんなのダメだよ!!」

キュアエース「早く、あの怪物を倒しましょう!!」

レイス「とはいえ、用心したまえ……姿だけではなく、おそらくは我が主と同等の能力も持ち合わせているかも知れないね……。

さしずめあれは……『アナザー・ラグナ』とでも言っておこうか?」

キュアロゼッタ「アナザー・ラグナ……。」

キュアブラック「それじゃ、行くよホワイト!!」

キュアホワイト「うん!!」

「バ……………ッ!!」

と、まずはブラックとホワイトが先行して、速攻を仕掛けるが……。

アナザー・ラグナ「グガ……………ッ!!」

「ズバババババババ……………ッ!!!!」

キュアブラック「キ……………ッ!!!!」

キュアホワイト「あ……………っ!!!!」

「ド……………ッ!!!!」

と、向かってくるブラックとホワイトに対して、

アナザー・ラグナと化したカッパードは、持っていた剣で、

超高速で切り付けて、吹き飛ばした。

キュアブラック「ううう……。」

キュアホワイト「あああ……。」

キュアダイヤモンド「そ……そんな!!」

キュアロゼッタ「い……今のつて……。」

キュアソード「疾風斬(カマイタチ)……?」

レイス「フツ……やはりね。」

アナザー・ラグナ「グオー……ッ!!」

「ドオー……ッ!!」

と、ブラックとホワイトを退けたアナザー・ラグナは、
今度はキュアハート達へと襲い掛かった。

キュアエース「来ますわ!!」

キュアハート「レイスさん、シンをお願いします!!」

行くわよ、みんな!!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・レジーナ「うん!!」

「バァ……ッ!!」

と、キュアハート達は散り散りとなり、それぞれの方向から
アナザー・ラグナに対して、攻撃を仕掛けた。

キュアハート「ハートダイナマイト!!」

キュアダイヤモンド「プリキュア!!ダイヤモンドブリザード!!」

キュアロゼッタ「プリキュア!!ロゼッタリフレクション!!」

キュアソード「ソードハリケーン!!」

キュアエース「ときめきなさい!!エースショット!!ばつきゅん

!!」

レジーナ「これでも喰らいなさい!!ドラゴンブレイブビーム!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド……!!!」

アナザー・ラグナ「グオオオオオオッ!!」

「バリバリバリ……。」

と、キュアハート達の攻撃に対して、アナザーラグナは、

今度は、魔法剣(アタック・ヴァイト)稲妻落(ライト・ブレイカー)
の様な

攻撃を繰り出し、キュアハート達の技を相殺した。

キュアロゼッタ「そんな……今度は……。」

キュアソード「稲妻落（ライト・ブレイカー）。。。」「
キュアダイヤモンド「これじゃあ。。。シンと戦ってる様なものじゃ
ない。。。」

「キュアエース「当然でしょうけど、手強いですわね。。。」
アナザー・ラグナ「グガアーーーーーッ!!」

「ボシューーーーーーッ!!」

と、アナザー・ラグナは、今度は魔法剣（アタック・ヴァイト）
大蛇牙（ヨルムンガンド）の様に、剣先を超高速で伸ばし、
キュアハート達に攻撃を仕掛けた。

キュアソード「大蛇牙（ヨルムンガンド）!？」

キュアダイヤモンド「避けなきゃ!!」

キュアロゼッタ「ダメ。。。間に合いません!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドド!!」

一同「キャーーーーーッ!!」

と、キュアハート達は、回避しようとしたが間に合わず、
大蛇牙（ヨルムンガンド）の直撃を次々と受けてしまった。

キュアソード「ううう。。。」

キュアダイヤモンド「あ。。。あ。。。あ。。。」

キュアハート「ま。。。まだだよ。。。まだ終わりじゃないよ!!」

と、他のプリキュアが倒れている中、キュアハートが何とか立ち上
がった。

アナザー・ラグナ「グガアーーーーーッ!!!」

「ゴオーーーーーッ!!!」

と、キュアハートが立ち上がったのと同時に、
アナザー・ラグナは、剣先に魔力を溜め始めた。

キュアエース「ス。。。一点突破（スクライド）。。。？」

レジーナ「マ。。。マナ。。。」

アナザー・ラグナ「グオーーーーーッ!!」

「ドオーーーーーッ!!」

と、アナザー・ラグナは、魔法剣（アタック・ヴァイト）
一点突破（スクライド）の様な攻撃を、キュアハートに

とどめを刺すべく繰り出し、向かっていった。

キュアブラック「ハ…ハート…。」

キュアホワイト「に…逃げて…。」

キュアハート「シンの偽物なんか…負けない!!」

「ピカー…?!!」

アナザー・ラグナ「!!!」

と、突如、キュアハートの体から、眩い光が発生し、

アナザー・ラグナを吹き飛ばした。そして、光が消えるのと

同時に、彼女の右手の中には、あの懐中時計…

『リバーシア・ウォッチ』が収められていた。

キュアダイヤモンド「あ…あの懐中時計は…?」

キュアソード「ま…まさか…?」

キュアハート「…プリキュア!!ラブリース!!」

「ピカー…!!」

と、キュアハートは、そう掛け声を上げながら、

リバーシア・ウォッチを起動させると、周辺に光の輪が多数出現して、

キュアハートを包み込むと、髪の色やコスチュームが濃いマゼンタ色へと

変化し、ハート型の装飾類が装着されると、最後に背中から

光の翼が左右に出現して、変身を果たした。

キュアハート・リバーシア「みなぎる愛と力の女神…ここに転生

せん!!

キュアハート…リバーシア!!」

レイス「mana君…その姿は…?」

キュアハート・リバーシア「これが、あたしの新しい力…

キュアハート・リバーシアです!!」

レイス「なるほど…どうやら、私が出る幕は無さそうだね。

では、頼むよ、キュアハート・リバーシア!!」

キュアハート・リバーシア「はい!!」

アナザー・ラグナ「グオー…ツ!!」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、アナザー・ラグナは、再度、魔法剣（アタック・ヴァイト）一点突破（スクライド）の様な攻撃を、キュアハート・リバーシアに

向けて繰り出した。だが……。

「バシューーーーーーッ!!」 「ドオーーーーーーッ!!」

と、キュアハート・リバーシアは、アナザー・ラグナの攻撃を、左手一つで難なく受け止めた。そして、その余波で、リバーシアの背後にあつた建物や地面が激しく吹き飛んだ。

アナザー・ラグナ 「!!グオオオオオオッ!!!」

「ズバババババババババッ……!!!」

と、アナザー・ラグナは、今度は疾風斬（カマイタチ）の様な攻撃を、

超高速で繰り出すが……。

キュアハート・リバーシア 「……遅いわよ!!」

「ヒュン!!ヒュン!!ヒュン!!ヒュン!!ヒュン!!」

と、リバーシアはアナザー・ラグナの攻撃を、すさまじい反応速度で、その場から動かさずにかわしていく。

キュアハート・リバーシア 「ハアーーーーーッ!!」

「バキーーーーーッ!!」

アナザー・ラグナ 「グオーーーーーーッ!!」

と、リバーシアは攻撃を避けながら、カウンター気味に

右ストレートを放ち、アナザー・ラグナの顔面にめり込ませて、吹き飛ばした。

キュアハート・リバーシア 「まだだよ!!」 「バシューーーーーーッ!!」

と、リバーシアは吹き飛ばしたアナザー・ラグナの背後に一瞬で到達し、追撃態勢をとる。

アナザー・ラグナ 「グオーーーーーーッ!!!」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、アナザー・ラグナは体勢を立て直すと、口から強力な破壊光線を放ったが……。

キュアハート・リバーシア「ヤアーーーーーッ!!」
「ゴオーーーーーッ!!」「ドゴーーーーーッ!!」

と、リバーシアはそのまま右足で、かかと落としを
繰り出して破壊光線を切り裂いていき、

アナザー・ラグナの脳天に直撃させて、地面へと叩きつけた。

アナザー・ラグナ「グオー……。」

キュアハート・リバーシア「Aファンネル!!」

「ピキーーーーン!!」「バババババ……!!」

と、リバーシアの両目の虹彩が黄色に輝きだすと、

光の翼からAファンネルが多数出現して、アナザー・ラグナへと
向かっていくと、そのまま取り囲んで結界を形成して、

閉じ込めた。そして……

キュアハート・リバーシア「あなたのハート、いただきます!!」

リバーシア・チエックメイト!!」

と、リバーシアは、両手からハート型のエネルギー体を放ち、

命中すると、取り囲んでいたAファンネルにより、更に力が増幅し
て、

アナザー・ラグナの体から、漆黒のオーラが激しく噴き出して、
黒いハート型になると、最後は弾けて消滅し、浄化された。

アナザー・ラグナ「ウガーーーーーッ!!!」

ラーブラーブラーーーーーブ!!!」

「シューーーーーーッ……。」

カッパード「ううう……。」

そして、アナザー・ラグナが浄化されると、

カッパードの姿も元に戻った。

キュアハート・リバーシア「あなたのハート…… 確かにいただきます
ました!!」

キュアブラック「やった!!」

キュアホワイト「さすがだね!!」

キュアソード「あっ…… シンは!?!」

「シューーーーーーッ……。」

進之介「ムニヤムニヤ……」

と、カッパードに吸い取られた進之介のイメージネーションも元に戻ったが、まだ本人は、眠りこけていた……。

レジーナ「シン……まだ寝てる。」

キュアダイヤモンド「もう……人の苦勞も知らないで……」

キュアブラック「大丈夫!!すぐに目を覚ますわよ!!」

キュアエース「でも、もう少しこの寝顔、見ていたいですわね。」

キュアソード「うふふ、そうね。」

と、プリキュア達が進之介の寝顔に見とれていたその時……

? 「目覚めよ……カッパード!!」

「バァー……ッ!!」

キュアホワイト「な……何!?!」

カッパード「うう……?」

と、突如、緑色のオーラが出現し、身体には長いマント付きの

蛇が巻き付いた様な鎧を身に着けて、顔には大蛇が口を開けたよう

な

兜を装着した禍々しい赤色の目が特徴な筋肉隆々の男が姿を現した。

カッパード「お……おお!!ダークネスト様!!」

キュアロゼッタ「ダーク……ネスト?」

キュアソード「じゃあ、あれが……」

レイス「ノットレイダーの支配者の様だね。」

ダークネスト「カッパードよ……次元の王候補(デイオケイター)の

イメージネーションを取り込むなど、愚かな事を

したものだな……。まあ良い……早急に我が宇宙へと

帰還せよ。これからゲートを開いてやる。

そして、プリンセス・スター・カラーペンを

手に入れよ!!」

「ブウ……ッ!!」

と、ダークネストがそう語ると、上空にゲートが出現した。

カッパード「次元の王候補(デイオケイター)ですと!?!」

あの少年が…なるほど、どうりで…。
はっ!!このカッパード…直ちに帰還致します!!」
キュアブラック「このまま、逃がしちやって良いのかな…?」
キュアホワイト「去っていくのなら、わざわざ戦う事は無いわ。」
カッパード「異世界のプリキュアよ…今回はお前達に助けられた
様だ。

だが、礼は言わんぞ!!次に会ったときは、必ずお前達を
仕留めてやる!!我らノットレイダーが宇宙を
支配した後でな!!では、さらばだ!!」

と、カッパードがゲートの中に侵入しようとしたその時…。

?①「いいや…お前はここで死ね!!」

「ドシューーーーーー!!」

カッパード「!!!あ…が…。」

と、カッパードの背後から突如、謎の人物が出現して、

気を纏わせた手刀で右胸を串刺しにした。

キュアダイヤモンド「!!!」

キュアロゼッタ「きゃあーーーーっ!!!」

「ブシューーーーーー。」

カッパード「ダ…： ダークネスト…： 様…。」
「ヒューー
ン…。」

そして、謎の人物が、貫いていた手刀を引きぬくと、

カッパードはダークネストの名を呼びながら、地面へと落下して
いった。

そして、灰色の道着の様な服を身に着けた黒髪の男性と

黄緑色の肌をした青年が姿を現した。

?①「フン…。」

?②「汚らわしいゴミに相応しい最期だな。」

キュアブラック「な…： 何なのよ、あんた達!!」

キュアホワイト「いきなり後ろから…： ひどい!!」

キュアソード「…： 許せないわ!!」

レイス「…： ついに、出てきた様だね。」

「ダークネスト「何だ、貴様らは!!」

?②「お前達、下等生物に名乗る名は無いが、まあ、いいだろう。」

私の名は『ザマス』..。』

?①「俺は... そうだな、『ゴクウブラック』... とでも

名乗っておこうか。」

キュアハート・リバーシア「ザマス... ゴクウブラック!？」

ザマス「早速だが、お前達には...。」

ゴクウブラック「消えてもらおうか!!」

突如、大貝町に現れたノットレイダーを退けかけてたプリキュア達だったが、今度は『ゴクウブラック』と『ザマス』と名乗る2人組が姿を現した。彼らの目的とは...

そして、この後、大貝町... そして、世界の命運をかけた戦いの火蓋が切って降ろされようとしていた!!

第20話 出現!ノットレイダー!! (完)

第21話 　　襲来!!ゴクウブラックとザマス 　　

ゴクウブラック「クツクツクツ……」

ザマス「フツフツフツ……」

キュアハート・リバーシア「ゴクウブラック……ザマス!？」

レイス「ついにお出ましの様だね……」

ダークネスト「貴様ら……我らをノットレイダーと知った上での愚行か!？」

ゴクウブラック「フン……知らんな!!」

ザマス「貴様こそ……たかが宇宙人の分際で、神に舐めた口を聞くな!!」

ダークネスト「神だと……ふぎけるな……」

「ドォォォォォ……ッ!!!」

キュアエース「くっ!？」

キュアダイヤモンド「きやあ!!」

と、ダークネストはゴクウブラックとザマスに向けて、

「衝撃波を放ち、直撃させるが……」

ザマス「フツフツ……」

ゴクウブラック「フン……その程度か？」

ダークネスト「何!？」

と、ダークネストの衝撃波をまともに受けたはずの

ゴクウブラックとザマスだったが、2人は、ほぼ無傷の

状態で煙の中から姿を現した。

ゴクウブラック「目障りだ……消えろ!!」

「ドォォォォォ……ッ!!!」

ダークネスト「ぐお……ッ!!!」

「シュー……ン……」

と、今度はゴクウブラックが左手からエネルギー波を放つと、

ダークネストに直撃して、消滅させた。

ザマス「フン、消えたか。愚かな宇宙人め……」

ゴクウブラック「ああ……だが、あれは幻影だった様だな……」

前方に展開してバリアを張り、ゴクウブラックのエネルギー弾を全て防いだ。

ザマス「ほう…。」

キュアハート・リバーシア「いきなり、何するのよ!!」

「バキーーーーーッ!!!」

その後、キュアハート・リバーシアは、ゴクウブラックに攻撃を仕掛けた。

そして、2人の拳が激突すると、周辺から爆発が起きた。

「バキーーーーーッ!!!」「ドゴーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック「馬鹿め…俺に敵うと思っているのか？」

キュアハート・リバーシア「思ってるよ!!」

「ドドドドドドドド!!!」「ドゴン!!ドゴン!!ドゴーーーーーッ!!!」

そして、キュアハート・リバーシアとゴクウブラックが、凄まじい打撃の応酬を開始すると、更に激しい爆風と衝撃が起きて、

周辺を巻き込んでいく…。

レジーナ「きゃあーーーーーッ!!!」

キュアエース「何で、凄まじい攻防なのですか!？」

キュアソード「こっちまで、吹き飛ばされそうだわ!!」

キュアハート・リバーシア「ハアーーーーーッ!!!」

「ブン!!」

ゴクウブラック「甘い!!」

「ゴオーーーーーッ!!!」

キュアハート・リバーシア「甘いのは、そっちだよ!!」

「バキーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック「何!？」

と、キュアハート・リバーシアが放った右ストレートを、

ゴクウブラックが一旦は回避し、反撃しようとするが、

反撃を読んでいた彼女は、すかさず体を反転させて、

回し蹴りを放ち、吹き飛ばした。

そして、更に追撃を仕掛ける。

ゴクウブラック「調子に乗るな…小娘!!」

「ドドドドドドドドドドドド!!」

と、態勢を立て直したゴクウブラックは、キュアハート・リバーシアに

「エネルギー弾を連続して放つが…。」

キュアハート・リバーシア「あなたの動きは…全部お見通しだよ!!」

「ピキーーーーーシューン!!!」 「シューン!!シューン!!シューン!!シューン!!」

と、彼女の両目の虹彩が黄色に輝きだすと、ゴクウブラックが放つた

エネルギー弾の弾幕を難なく回避していった。

ザマス「な…何だと!？」

「シューン!!」

レイス「見とれている場合じゃないよ、ザマス君…。」

神の右腕（ディオス・ランサー）!!」

「ドゴーーーーーシューン!!」

ザマス「ぐわーーーーっ!!」

ゴクウブラック「おのれ!!」

キュアハート・リバーシア「ハアーーーーーッ!!」

「バキーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック「ぐわっ!!」

キュアハート・リバーシア「Aファンネル!!」

「バババババババ!!!」

と、キュアハート・リバーシアは、ゴクウブラックをキックで吹き飛ばすと、Aファンネルを放ち、自身の前方へと輪の形で形成する。そして…

キュアハート・リバーシア「リバーシア・ジェネシック・ハーーーーーッ!!」

「ドオーーーーーシューン!!!」

「ドオーーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック「クッククツツ。。。」

キュアホワイト「あの、ゴクウブラックっていう人も。。。」

キュアブラック「ていうか、今、何食べたのよあの人。。。」

レイス「どうやら、仕切り直しの様だね。。。油断せずに行こうか？

マナ君。。。」

キュアハート・リバーシア「はい!!レイスさん。」

ザマス「仕切り直しだと？笑わせる。。。」

ゴクウブラック「お前達は。。。ここで終わりだ!!ハアアアアアア

アツ!!!」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。。?。」「ドシューーーーーーッ!!!」

キュアダイヤモンド「!!!」

キュアロゼッタ「な。。!!!何が起きているのですか!？」

キュアエース「ゴクウブラックのパワーが。。。どんどん高まってい

ます!!」

「ピカーーーーーーッ!!!」

そして、ゴクウブラックは、パワーが最高潮に達すると、毛髪や瞳

が

淡いピンク色に変色し、全身からは、紫がかった赤紫色のオーラを

発生させて、変身を果たした。

「ブオーーーーーーッ!!!」「シンシンシンシンシン。。。」

ゴクウブラック「クッククツツ。。。」

キュアダイヤモンド「あ。。あ。。あ。。」

キュアソード「な。。何?あの姿。。。」

キュアエース「こんな力。。今まで感じたことがありません。。。」

キュアブラック「ありえない。。。」

レイス「ほう、これは驚いたね。その姿。。『超サイヤ人』とやらか

な?」

ゴクウブラック（ロゼ）「少し違うな。この姿は『超サイヤ人』を超

えた、

そうだな。。『超サイヤ人口ゼ』とでも言っておこ

うか?」

キュアハート・リバーシア「超サイヤ人… ロゼ!?」

ザマス「さて、いくか、もう一人の私よ…。」

ゴクウブラック(ロゼ)「待て、ここは俺一人で充分だ。お前は人間共の

始末にでも行け!! 良い余興になる…。」

ザマス「なるほど… ではそうさせてもらおうか!!」

「バアーーーーーッッッ」

と、そう言いながらザマスはその場を離れて、町の人々の攻撃に向かった。

キュアブラック「そんな事させない!! いくよ、みんな!!」

一同「うん!!」「ババババババ…!!」

と、キュアブラック達は、ザマスを止める為に、後を追っていったが…。

「シュン!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「クツクツクツ… 何処へ行く気だ?」

と、そこへゴクウブラックが瞬時にプリキュア達の前に現れて、立ちはだかった。

キュアブラック「そこを… どいてーーーーッッ!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「フツ… 馬鹿が!!」

「バキッ!! ドゴッ!! ガスッ!! ボコッ!! ドボッ!!」

キュアブラック「ぐはーッ!!」

キュアホワイト「うぐーッ!!」

シャイニールミナス「ああーーーーッ!!」

キュアダイヤモンド「あぐあーーーーッ!!」

キュアロゼッタ「きゃん!!」

キュアソード「げぼーーーーッ!!」

キュアエース「あんっ!!」

レジーナ「があっ!!」

「ドゴーーーーーッッッ!!」

と、ゴクウブラックは、向かってくるプリキュア達を

ゴクウブラック（ロゼ）「ならば、ここで人間と共に朽ち果てるがいい。

神官レイス!!」

「ドオーーーーーーッ!!」 「シンシユンシユンシユンシユン……。」

と、ゴクウブラックは更にパワーを高めて、戦闘態勢に入った。

レイス「フツ…… あいにく我が主を王にするまで消えるわけには

いけないのだよ、私は!!」

「バアーーーーーッ!!」

と、対するレイスも白い魔力のオーラを放ち、戦闘態勢をとった。

ゴクウブラック（ロゼ）「行くぞ……。」 「ザッ……。」

レイス「来たまえ……。」 「スツ……。」

「ドオーーーーーーッ!!!」

と、レイスとゴクウブラックは、すさまじい爆風と

衝撃を放ちながら、戦闘を開始した。

キュアハート・リバーシア「ハアーーーーーッ!!」

「バキーーーーーッ!!」

ザマス「チツ…… 小賢しい小娘が!!」

キュアハート・リバーシア「あなたは…… あなただけは絶対に許さ

ない!!」

Aファンネル!!」

「ドドドドドドドド!!!」

と、キュアハート・リバーシアは、Aファンネルを放ち、ザマスに

次々と命中させるが……。

「シューーーーーーッ……。」

ザマス「フツフツフツ…… 無駄だ!! 私は不死身だと言っただろう

？」

キュアハート・リバーシア「それがどうしたのよ!!」

「バアーーーーーッ!!!」

ザマス「愚か者め…… 神を舐めるな!!」 「スツ……。」

と、ザマスはキュアハート・リバーシアの攻撃を、受け流すと、

手刀で反撃しようとするが……。

キュアハート・リバーシア「そっちこそ…人間、舐めるなーっ!!」

「バキーーーーーッ!!」「ドゴーーーーーン!!」

ザマス「ぐわーーーーっ!!な…何!？」

と、ザマスの攻撃を読んでいたキュアハート・リバーシアは手刀を回避すると、カウンターでキックを放ち、吹き飛ばした。ザマス「ば…馬鹿な…タイミングは完璧だったはずだ…

何故、回避された!？」

キュアハート・リバーシア「……………」

ザマス「何だ…あの目は!？」

と、ザマスが近づいてくるキュアハート・リバーシアの

両目の虹彩が黄色に輝いている事に気付き、驚きの表情を見せた。

ザマス「なるほど…あの目の輝きが発する力で、私の動きを

読んでいたという事か…小賢しい!!…んっ?」

二階堂「がんばれ!!マナーっ!!俺たちがついてるぞーっ!!」

百田「そうですよーっ!!」

十条「がんばってくださいー!!」

ザマス「フッフッフツ…愚かな人間共め!!」「バーーーーッ!!」

「ピキーーーーン!!」

キュアハート・リバーシア「!!ダ…ダメーーーーッ!!」

と、たまたま近くにいた二階堂!がキュアハート・リバーシアに声援を送っていると、それを見たザマスは、すかさず手刀を繰り出し、

二階堂達に襲い掛かった。

百田「ア…アキーーーーッ!!」

二階堂「う…うわーーーーっ!!」

「ズバーーーーン!!!」

キュアハート・リバーシア「あーーーーッ!!」

と、キュアハート・リバーシアは、ザマスの手刀から

二階堂達を庇い、切りつけられて、倒れてしまった…。

キュアハート・リバーシア「ううう…。」

二階堂「マナーーーーーッ!!」

百田「大丈夫ですかーーーーッ!!」

十条「相田さん…しっかりしてください!!」

と、自分達を庇い、倒れてしまったキュアハート・リバーシアの傍へと駆け寄る二階堂達。そして…。

健太郎「マナーーーーーッ!!」

あゆみ「しっかりしてーーーーッ!!」

と、偶然、避難するために通りかかったマナの両親である

健太郎とあゆみも、キュアハート・リバーシアの元へと駆け寄った。

キュアハート・リバーシア「お父…さん…お母…さん…逃げ…て…。」

健太郎「お前を置いて…行けるわけないだろう!!」

あゆみ「ううう…。」

ザマス「フン…汚らわしい光景だ。」

「シュン!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「どうやら、決着がつきそうだな…。」

ザマス「ほう…そっちのほうは?」

ゴクウブラック（ロゼ）「問題ない。少々手こずったが、こちらも片付いた…。」

レイス「…。」

と、レイスはゴクウブラックとの戦闘に敗れて、ビルの外壁にめり込んだ状態で倒れてしまった…。

キュアハート・リバーシア「レイスさん…そんな…。」

ザマス「さて…。」

ゴクウブラック（ロゼ）「とどめと行くか!!」

「ブウーーーーーッ…。」

二階堂「あ…あ…あ…。」

百田「ア…アニキ…。」

十条「ひ…ひい…。」

あゆみ「マナ!!」

健太郎「お前だけは、絶対を守る!!」

「ガバツ!!」

ゴクウブラックは、とどめを刺すべく、エネルギー波のチャージを始める。健太郎とあゆみがキュアハート・リバーシアの前方に立ち、盾になろうとする。

キュアハート・リバーシア「お父さん…お母さん…ダメ…。」

ゴクウブラック（ロゼ）「ならば…まとめて死ね…。」

「ドオー…。」

二階堂「う…うわ…。」

百田「もうだめだ…。」

十条「ひい…。」

健太郎「くっ!!」

あゆみ「マナ…あなた…。」

キュアハート・リバーシア「い…嫌…。」

と、キュアハート・リバーシア達に、エネルギー波が直撃しそうになったその時…。「new page」

進之介「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!一点突破!!（スクライド）

!!」

「ドオー…。」

と、目覚めた進之介がキュアハート・リバーシアの前に現れて、

一点突破（スクライド）でエネルギー波を相殺した。

ゴクウブラック（ロゼ）「何!？」

進之介「…お待たせ!!」

キュアハート・リバーシア「シン!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「フン…ようやくお目覚めか。」

ザマス「人間め…舐めた真似を…。」

進之介「魔法剣（アタック・ヴァイト）!!白月光（ホワイトアーク）

!!」

「パア…。」

と、進之介は、地面に剣を突き立てて、白月光（ホワイトアーク）を町中へと放つと、負傷した人々が、回復していった。

ほのか「あっ…。」

なぎさ「これって…。」

亜久里「シン様ですわ!!」

真琴「やっと目が覚めたのね!!」

カッパード「き…傷が…治っていく…。」

レイス「フツ…。」

と、なぎさ達プリキュアやレイス、そして、ゴクウブラックに串刺しにされて瀕死の重傷を負っていたカッパードも回復していった。

ゴクウブラック（ロゼ）「ほう…。」

ザマス「フン… わざわざゴミ共を回復させるとはな…。」

キュアハート・リバーシア「シン!!」

進之介「マナ… ごめんね…。」

キュアハート・リバーシア「いいのよ。あなたがいてくれたら、

あたしはそれだけで…。」

と、互いに顔を赤くしながら見つめあう進之介と

キュアハート・リバーシアであった…。

二階堂「くおらー！ー！ー！つ!! 転校生!! ボーツとしてないで、

早くあいつらを何とかしろーっ!!」

あゆみ「あらあら… マナったら!!」

健太郎「あ… あの男の子の事を!」

キュアハート・リバーシア「んもうっ!! みんなったら…。」

進之介「アハハ… それじゃ行こうか、マナ!!」

キュアハート・リバーシア「うん!!」

と、進之介とキュアハート・リバーシアは戦闘態勢に入った。

ザマス「んっ!」

ゴクウブラック（ロゼ）「どうした… 変身しないのか?」

進之介「まだ、そこまで魔力が回復していないんだ。」

キュアハート・リバーシア「だから… あたし達が相手だよ!!」

ザマス「フン、まあいい… それならば!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「すぐに消してやる!!」

進之介「それじゃ行くよ!! 魔法剣（アタック・ヴァイト）!! 疾風斬

(カマイタチ)!!」

「ズババババーン!!」

ザマス「ぐおーっ!!」

進之介「マナ!!」

キュアハート・リバーシア「Aファンネル!!」

「ババババババババ!!!」 「ピキキキキキキキキ!!!」

ザマス「何!?!」

と、進之介は、疾風斬（カマイタチ）でザマスに先制攻撃を仕掛けて吹き飛ばすと、

キュアハート・リバーシアが、Aファンネルをザマスの周りに展開させて、

結界を形成し、中に閉じ込めた。

キュアハート・リバーシア「しばらくそこで大人しくしてなさい!!」

進之介「よし… これなら!! 疾風斬（カマイタチ）!!」

「シュン!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「なるほど、考えたな… だが!!」

「キンッ!!」

進之介「くっ!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「その程度では、俺には勝てんぞ!!」

「ドゴーっ!!」

進之介「うげえーっ!!」

と、進之介は、疾風斬（カマイタチ）でゴクウブラックに攻撃を仕掛けるが、

斬撃を指一本で止められると、反撃で前蹴りを腹に喰らい、吹き飛ばされた。

キュアハート・リバーシア「シン!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「人の心配をしている場合か?」

「バキキキキキキキキッ!!」

キュアハート・リバーシア「あぁーっ!!」

「ドゴーっ!!」

そして、キュアハート・リバーシアもゴクウブラックの攻撃を

受けてしまい、進之介の近くへと吹き飛ばされた。

進之介「う… ううう…」

キュアハート・リバーシア「シ… シン…」

ゴクウブラック（ロゼ）「2人仲良く… 死ね!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

進之介「うわ…!!!」

キュアハート・リバーシア「ああ…!!!」

そして、ゴクウブラックは、2人に向けてエネルギー弾を連続して次々と放ち始めた。

ゴクウブラック（ロゼ）「クツクツクツ… アーッハッハッハ!!!」

レイス「くっ… まずいな、何とかしなければ… んっ!?」

と、レイスが懐に手を入れると、豆の様な物が、一粒出てきた…。

レイス「これは… フツ、どうやら天は、我が主に味方をしている様だね。」

進之介「あ… あ… あ… マ… ナ…」

キュアハート・リバーシア「シ… シ… シン…」

ゴクウブラック（ロゼ）「フツ… そろそろ死ね!!」

進之介とキュアハート・リバーシアが絶体絶命のピンチに陥ったその時…

カッパード「カッパード・ストライク!!」

「ドゴ…!!!」

と、突如、カッパードが現れて、カッパード・ストライクで

ゴクウブラックを攻撃をした。そして、エネルギー弾の連続攻撃が収まった。

進之介「はあ… はあ… はあ… カッ… カッパさん…」

キュアハート・リバーシア「あ… ありがとう…」

カッパード「勘違いをするな。お前達を助けた訳では無い!!」

ただ、奴らに一泡を吹かせたかっただけだ!!」

それに、私はカッパさんではない、カッパードだ!!」

「シユン!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「笑わせるな… 死にぞこないのカッパごと

きが

俺に一泡を吹かせるだど…？

「バキーーーーーッ!!」

カッパード「ぐわーーーーーッ!!」「ドゴーーーーン!!」

と、そこへ、ゴクウブラックが、煙の中からほぼダメージ無しで姿を現し、

カッパードに一撃を喰らわして、吹き飛ばした。

カッパード「あ…ぐ…。」

ゴクウブラック（ロゼ）「目障りなカッパめ…消えろ!!」

「シュン!!」

レイス「ナイスアシストだったよ、カッパ君!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「貴様…。」

進之介「レ…レイス…。」

キュアハート・リバーシア「レイス…さん…。」

レイス「我が主…これを。」

と、レイスは進之介に、懐に紛れ込んでいた豆の様な物を差し出した。

進之介「こ…これは…？」

ゴクウブラック（ロゼ）「貴様…何故、『仙豆』を!」

レイス「どうやら、君との戦闘の最中に私の衣服に紛れ込んでいた様だね。」

さあ、我が主…早く!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「チイツ…させるか!!」

「バアーーーーッ!!」

レイス「それはこちらにセリフだよ!!神の右腕（ディオス・ランサー）!!」

「バキーーーーーッ!!」

と、ゴクウブラックの手刀と、レイスの神の右腕（ディオス・ランサー）が

激しくぶつかり合う。しかし…。

ゴクウブラック（ロゼ）「邪魔だーーーーッ!!」

進之介は『仙豆』を食べて、体力・魔力共に全快した。だが、プリキュア達の総攻撃は、ゴクウブラックにはほとんど効いておらず、逆にエネルギー弾の連続攻撃で返り討ちにあった。

ゴクウブラック（ロゼ）「フン…：ゴミ共が!!んっ?」

「キーーーーーッ!!」

進之介「僕の仲間は…：ゴミなんかじゃない!!」

うおおおおおおおーーーーっ!!」

「バーーーーーッ!!」「ドーーーーーッ!!」

と、進之介は、首飾りを出現させて雄叫びを上げると、足元から巨大な魔法陣が

出現して膨大な魔力が溢れ出し、辺り一帯が真っ赤に染まっっていく。

ゴクウブラック（ロゼ）「こ…：これは?!」

キュアハート・リバーシア「シン…：。」

レイス「後は任せたよ、我が主…：。」

進之介「変身!!」「ブーーーーーッ!!」

と、進之介が掛け声を上げながら首飾りを発動させると、金色の魔力の渦が出現して、進之介を包み込む。

そして、魔力で精製された漆黒の衣装とマントを纏い、

金色のプロテクター類が装着されると、顔には目元が開いた

漆黒のマスクで覆われた。そして、最後に持っていた剣が、

漆黒の長剣へと変化し、体中から金色の強大な魔力が放出されて、

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナへと変身を遂げた!!

ラグナ「…：。」

ザマス「くっ…：人間め!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「フン…：ついに出てきたか。ならば!!」

「パリポリパリポリ…：。」「ドーーーーーッ!!」

と、進之介がラグナに変身すると、ゴクウブラックも最後の一粒となった

『仙豆』を食べて、全快した。

ラグナ「ここからが… 本当の勝負だ!!」
ゴクウブラック（ロゼ）「来い… 次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ!!」

と、プリキュアのみんなやレイスといった仲間達の加勢もあり、進之介は、

ついに次元の王候補（ディオケイター）・ラグナへと変身を遂げた。そして、対するゴクウブラックも、最後の一粒となった仙豆を食べて、

全快した。最終局面を迎えた2人の勝負の行方は一体、どうなってしまうのか!?

第22話 〽 死闘!! ラグナVSゴクウブラック

〽

ゴクウブラック(ロゼ)「来い… 次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ!!」

と、進之介が次元の王候補(ディオケイター)・ラグナへと変身し、ゴクウブラックが仙豆を食べて、体力を全開させた後、互いに戦闘態勢を取ると、周囲に緊張が走った…。

キュアダイヤモンド「シン…。」

キュアソード「お願い… 勝って!!」

キュアエース「信じましょう… わたくし達のシン様を!!」

レジーナ「シン!! 頑張れーっ!!」

キュアハート・リバーシア「… … …。」

レイス「フツ… 神にでも祈ってるのかい? マナ君…。」

キュアハート・リバーシア「今のあたしには、こうすることしかできないから…。」

レイス「いや、不死身のザマスをあやつって封じているだけでも

大したものだ。おかげで我が主は、ゴクウブラックとの

戦いに、専念できるからね。」

あゆみ「そうよ、マナ… 後は、あの子の勝利を信じましょう!!」

健太郎「母さんの言う通りだな。」

二階堂「頼むぞ! 転校生!! 大貝町の運命は、お前にかかっているんだからな!!」

ラグナ「みんな…。」

ゴクウブラック(ロゼ)「クツクツクツ… 下等生物同士で、仲の良い事だな…。」

それならば、貴様を倒した後、すぐにあの者達も後を追わせてやろう…。せめてもの、神の慈悲で

な!!」

ラグナ「いらなないよ!!魔法剣(アタック・ヴァイト)!!疾風斬(カマイタチ)!!」

「シュン!!」「ズバーーーーーーン!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「何!?くっ……。」

と、ラグナは疾風斬(カマイタチ)を発動させて、攻撃を仕掛けた。ゴクウブラックは、ラグナのスピードに反応できず、斬撃を受けて、ダメージを負った。

ザマス「な……は……速い!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「……パワーが上がったからと言って、調子に乗るな!!」

「バアーーーーーッ!!!」

ラグナ「魔法剣(アタック・ヴァイト)!!炎殺断(メギド・スラッシュ)!!」

「ゴオーーーーーッ!!」「ガキーーーーーン!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「くう……!!」

ラグナ「うおおおおーーーーっ!!」

「ズバゴオーーーーーッ!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「ぐわーーーーーっ!!」

「ドゴーーーーーン!!」

と、ゴクウブラックは、気を纏わせた手刀で、ラグナに攻撃を仕掛ける。

対するラグナも、炎殺断(メギド・スラッシュ)で応戦し、

ゴクウブラックの手刀を粉碎して、吹き飛ばした。

ゴクウブラック(ロゼ)「お……おのれ、これならどうだーーーーっ!!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

キュアエース「あ……あれは!?!」

キュアソード「何よ、あの力は!?!」

キュアロゼッタ「ま……まずいですよね?あれ……。」

ゴクウブラック(ロゼ)「この世界ごと、吹き飛ば!!かくめくはくめく……」

波——————つ

!!!

「ドォ——————ン!!!!!!」

と、ゴクウブラックは、両手を右腰付近に構えて、パワーを最大限に

高めると、ラグナに向けて、『かめはめ波』と呼ばれる大技を放った。

キュアハート・リバーシア「シン!!」

レイス「我が主!!」

ラグナ「わかつてる!!融合魔法剣(ダブル・アタック・ヴァイト)!!

王蛇牙突(コブラ・ツイスター)」

「ボシユォ——————ツ!!」「ドドドドドドドドドドドド!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「何だと!?ぐわ——————っ!!!!」

「ドゴン!!ドゴン!!ドゴン!!ドゴン!!ドゴン!!」

と、ラグナは、剣に蛇の様な形の魔力を形成すると、そのまま

超高速で螺旋状のエネルギー体を放ち、かめはめ波を粉碎し、

ゴクウブラックに直撃させて、吹き飛ばした。

キュアホワイト「あれほど苦戦してたゴクウブラックを圧倒してる

!!」

キュアブラック「さすがね、シン!!」

二階堂「す…すげえ…。」

百田「あんな、化け物を相手に…。」

十条「これで、勝利は間違い無しですね!!」

「ドゴ——————ン!!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「はあ…はあ…はあ…。」

ザマス「まさか…これほど圧倒されるとはな…。」

ラグナ「…まだ、続けるの?」

ゴクウブラック(ロゼ)「クツクツクツ…これが次元の王候補

(デイオケイター)の

力か…なるほど…さっきとは、スピード

もパワーも

比べ物にならない…だが!!」

と、界王拳ロゼとなったゴクウブラックはラグナに
猛攻を仕掛ける。対するラグナも疾風斬（カマイタチ）で応戦する
が、

徐々に押され始める。

ラグナ「くうううううっ!？」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「クツクツクツ… さっきまでの

勢いはどうした!？」

「ドゴォー………ン!!!」

ラグナ「うわ………っ!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「まだまだ………っ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

ラグナ「があ………っ!!!」

そして、ラグナは、ゴクウブラックに前蹴りで空中に吹き飛ばされ
ると、

無防備の状態から、次々と猛攻を受けて、ダメージを追っていく。

キュアハート・リバーシア「シン!!」

ラグナ「くっ… このお!!魔法剣（アタック・ヴァイト）!!一点突

破（スクライド）!!」

「ドォー………ン!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「無駄だ… 死

ね………っ!!!」

「ドォー………ン!!!」

ラグナ「ぐわ………っ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

そして、ラグナは、一点突破（スクライド）で反撃に出るが、

ゴクウブラックが、すかさず放ったエネルギー波により、

一点突破（スクライド）を粉碎されて直撃し、大爆発を起こした。

キュアダイヤモンド「あ… あ… あ…」

キュアエース「シン様………っ!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「フン… くだばったか。んっ!？」

「ドシュー………ッ!!!」

ラグナ「うおおおおー—————っ!!!」

「バキ—————ン!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「チイツ!!まだ生きてたか… しぶとい奴め!!」

ラグナ「そう簡単に… やられる訳にはいかない!!」

「ズガガガガガガガガガ!!!」

と、ラグナは爆発を起こした場所からすぐに立ち上がり、

ゴクウブラックの方へと向かっていくと、再び、斬撃の応酬を開始した。

ラグナ「ハア—————ッ!!!」

「ズバ—————ン!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「くうっ… 人間風情が!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

ラグナ「うわ—————っ!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「これで… 終わりだ!!かめはめ波

!!!」

「ドオ—————ン!!!」

ラグナ「ぐわ—————っ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド—————ン!!!」

レイス「いかん… 我が主!!」

ザマス「よし… 勝負あったぞ!!」

ラグナ「……………」

キュアロゼッタ「ああ—————っ!?!」

キュアソード「そ… そんな…」

と、ラグナは、懸命に応戦したが、ゴクウブラックに圧倒されて、最後は、かめはめ波の直撃を受けてしまい、ついに倒れてしまった…。

ラグナ「あ… あ… あ…」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「フィン… まだ息があるか。よし、とどめは、

我が刃で直接刺してやろう!!」

ラグナ(？)「神ごときが我に向かって『貴様』とはな…」

まあ、いいだろう!!?!。 我的名は『次元の王』…」

キュアハート・リバーシア「!!!」

キュアダイヤモンド「じ…次元の…王!?!」

ザマス「何だと…?」

ゴクウブラック(界王拳ロゼ)『次元の王』… だと?!?ふざけるな…!!?!」

「バア…!!?!」

ラグナ(？)「愚かな… 我に勝てると思っっているのか!!」

「シュン!!」 「ズババババババババババ…!!?!」

ゴクウブラック(界王拳ロゼ)「ぐわ…!!?!」

「ドゴン!!ドゴン!!ドゴ…!!?!」

と、ラグナは、突如、口調と気配が豹変すると、自らを

『次元の王』と名乗った。そして、向かってくる

ゴクウブラックを、瞬く間に返り討ちにした。

ラグナ(？)「フン… まだまだだな… 今の時点では、この程度の

力か…。」

ゴクウブラック(界王拳ロゼ)「お… おの

れ…!!?!」

「バア…!!?!」

キュアハート・リバーシア「シン!!」

ラグナ(？)「愚か者が… まだ我に勝てんと分からぬか!!」

「ブオー…!!?!」 「ドゴ…!!?!」

ゴクウブラック(界王拳ロゼ)「うお…!!?!」

と、ゴクウブラックは、再び立ち上がり、ラグナへと

向かっていったが、今度は、ラグナが放ったエネルギー体の中に

閉じ込められて、大爆発を起こし、大ダメージを受けた。

そして、界王拳ロゼの力が、強制解除されて、

元のゴクウブラックへと戻った。

ザマス「な… 何というパワーだ…。まるで、『破壊神』ではないか…。」

レイス「素晴らしい… これぞまさに、『次元の王』の力!!」
キュアソード「うそ… だよね…?」

キュアエース「あれが… シン様ですの…?」
ゴクウブラック「あ… が…」

ラグナ(?)「さて… とどめといくか!!」
「ブウ…」

と、ラグナ(?)は、ゴクウブラックにとどめを刺すべく、右手に魔力を溜めはじめる。

二階堂「こ… これって、勝てるんじゃないのか?」

十条「そうみたいですけど… 何か様子がおかしいですよ?」

ラグナ(?)「フハハハハハハ… 死ね!!」

キュアハート・リバーシア「ダメ…」
「ババババババババ!!」
「ピキキキキキキ!!」

と、キュアハート・リバーシアは、ザマスを閉じ込めていたAファネルを

解いて、ラグナ(?)の周辺へと展開させて、結界を形成し、閉じ込めた。

レイス「mana君!?何を!!」

キュアハート・リバーシア『次元の王』なんかにならないで!!元のシンに…

戻って…

「キュイ…」

ラグナ(?)「!!!」

「シュー…」

ラグナ「あれ… 僕は一体…?」

と、キュアハート・リバーシアがラグナ(?)に向けて、語りかけると、

『エックス・モーション』による脳波の波動が、Aファネルと共鳴し、眩い光が発生して、ラグナ(?)が、元の進之介の人格へと戻った。
キュアハート・リバーシア「シン… 元に戻った… 良かった…」
「パ…」

ラグナ「マナ!!」

「バァー………ツ!!」 「ガバツ!!」

マナ「シン……。」

ラグナ「ごめんね、マナ…… 迷惑かけちゃったみたい……。」

マナ「いいのよ…… 言ったでしょ? あなたが間違った方向に

行っちゃった時には、あたし達が止めるって……。」

ラグナ「ありがとう…… マナ……。」

ザマス「フツフツ…… だが、その代償は大きかったな!!」

と、ラグナの背後から、Aファンネルの結界から解放された

ザマスが姿を現した。

ラグナ・マナ「!!!」

レイス「ザマス!!! くうっ!?!」

ザマス「死にぞこないが…… お前は後でじつくりと消してやる……。」

まずは、お前からだ…… 死ね!!」

ゴクウブラック「待て!!」

ザマス「!!!」

ゴクウブラック「ラグナに手を出すな……。」

と、倒れていたゴクウブラックが、どうにか立ち上がると、

ラグナに攻撃しようとしていたザマスを制止した。

ザマス「何のつもりだ? もう一人の私よ……。」

ゴクウブラック「ラグナは俺がやると言っている…… お前は手

出すな!!」

ザマス「フン…… サイヤ人の体だからと言って、

性格まで似てきたか? いいだろう…… 待ってやる。」

と、ザマスはそう言いながら、その場から離れた。

ラグナ「ごめん…… 余計な邪魔が入っちゃったね。」

ゴクウブラック「フン…… お互いにもうパワーは残ってないはず

だ……。」

次の一撃で最後だ!!」

「ドォー………ーン!!」

と、ゴクウブラックは、最後の力を振り絞り、超サイヤ人口ゼへと

変身した。

そして、そのまま、かめはめ波の発射態勢へと入った。

ゴクウブラック（ロゼ）「か〜め〜は〜め〜は〜め〜。：。：。」

ラグナ「終焉魔法剣（オメガ・アタック・ヴァイト）：。：。」

「ドシューーーーーーッ！！」

と、対するラグナは、その場から跳躍し、空中へと舞い上がると、飛び蹴りの態勢をとり、右足に魔力を結集させて、強大な剣状のエネルギー体を形成させた。

ゴクウブラック（ロゼ）「波ーーーーーッ！！！！」

「ブオーーーーーーッ！！」

ラグナ「破壊剣・滅殺撃（ラグナロク・デストロイヤー）！！」

「ゴオーーーーーーッ！！」

と、ゴクウブラックが、かめはめ波を放つと、

ラグナも、破壊剣・滅殺撃（ラグナロク・デストロイヤー）を発動し、突撃していった。

「ドオーーーーーーッ！！！！」「バリバリバリバリ！！」

ラグナ「うおおーーーーーッ！！」

ゴクウブラック（ロゼ）「はあーーーーーッ！！」

キュアダイヤモンド「シン！！」

キュアロゼッタ「頑張ってください！！」

ラグナ「うおおーーーーーッ！！！！」

ゴクウブラック（ロゼ）「人間め……消えろ！！」

「ドオーーーーーーッ！！！！」

と、破壊剣・滅殺撃（ラグナロク・デストロイヤー）と、かめはめ波が、激しく衝突するが、ゴクウブラックが押し返している。

だが、ラグナも負けじとその場で踏ん張る。

ラグナ「くっ……うおおおおおおおっ！！」

ゴクウブラック（ロゼ）「クッククック……。」

キュアソード「シン！！」

キュアエース「シン様！！」

レジーナ「シン!!あたしがついてるわよーっ!!」
ラグナ「くうううううううううう!!!」

キュアブラック「シン!!」

キュアホワイト「頑張って!!」

シャイニー・ルミナス「お願いします!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「そろそろ終わりにするか!!」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、かめはめ波の勢いが更に上がり、ラグナを追い詰めていく。
ラグナ「うああああああああ!!!」

二階堂「転校生!!いや、進之介!!頑張れーーーーっ!!」

百田「アニキの言う通りです!!」

十条「僕達の命……君に預けましたよ!!」

あゆみ「進之介君!!」

健太郎「頼む!!」

レイス「我が主!!」

ラグナ「二階堂君……みんな……」

マナ「シン……やっちやえーーーーっ!!」

「パアーーーーー?」

ラグナ「!!!!そうだ……僕は一人じゃない……」

僕達は……ひとつだーーーーっ!!」

「バリバリバリバリ!!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「何ーーーーっ!?!」

ラグナ「うおおおおおおおーーーーっ!!」

「ズガーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「うわーーーーっ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーっ!!!」

と、追い詰められていたラグナだったが、仲間のみんな、
そして、マナの思いを力に変えて、かめはめ波を粉碎し、

ゴクウブラックに破壊剣・滅殺撃(ラグナロク・デストロイヤー)を
直撃させて大爆発を起こし、打倒を果たした。

そして、ゴクウブラックは、力尽きて、元の姿へと戻った。

「シューーーーーーッーン……。」

ゴクウブラック「あ……が……」

レイス「見事だ、我が主……。」

マナ「シン……良かった!!」

ラグナ「……………」。「シューーーーーーッーン……。」

進之介「僕の……いや……僕達の勝ちみたいだね……。」

ザマス「フツ……それはどうかな？」

「バキーーーーーッーンッ!!」

進之介「うわーーーーーッーンッ!!」

「ドゴーーーーーッーン!!」

と、ゴクウブラックに勝利したのも束の間、

今度はザマスが突如現れて、進之介に攻撃を仕掛けた。

レイス「我が主!!」

マナ「シン!!」

ゴクウブラック「お前……何のつもりだ……？」

ザマス「フン……あれだけ大口を叩いておきながら敗北とはな……。」

まあいい。相棒のよしみだ……お前の敗北を、

私が帳消しにしてやる!!それに、今ここで始末しなければ、

我らの計画の妨げになる!!」

「ブシューーーーーーッーン……。」

と、ザマスはそう言いながら、右手に気を纏わせて、手刀を形成する。

そして、もう立ち上がる力すら残っていない進之介に向けて、刃を突き付ける。

進之介「あ……あ……あ……」

ザマス「クツクツクツ……『次元の王』と共に消えろ……人間!!」

? 「待て??:。」

ザマス「!!!誰だ!!」

「ドオーーーーーッーン」

と、ザマスを制止する声があった瞬間、辺り一帯を強力な闘圧が発生し、空間に亀裂が入って、中から白装束を纏い、

銀色の長髪をした男が、姿を現した。

?「……………」

ザマス「お……お前は!？」

ゴクウブラック「ま……まさか……直接、現れるとはな……………」

シャイニー・ルミナス「あ……あ……あ……あ……」

キュアホワイト「あの……人……は……………」

キュアブラック「ま……まさか!？」

キュアエース「3人共……どうしたのです!？」

と、銀髪の男が現れた途端、キュアブラック・キュアホワイト

そして、シャイニー・ルミナスの3人が、突如、震えだした……………」

レイス「これは……最悪の展開だね……………」

マナ「レイスさん……あの人は……………」

レイス「……『ラー・カイン』だ!!」

ラー・カイン「……………」

と、激しい死闘の末に、ゴクウブラックを撃破した進之介だったが、突如、『A. D 次元第5世界』を占領した張本人である

レグルス帝国軍『三將軍（ゼネラーレ）』の一人である

『ラー・カイン』が姿を現した。

その目的とは……そして、大貝町……いや、この世界の運命は一体、どうなってしまうのであろうか!？」

第22話　　死闘!!ラグナVSゴクウブラック　　（完）

第23話 〽 宣戦布告 〽

ラー・カイン「……………」

キュアホワイト「あ……あ……」

キュアブラック「ラー……カイン!!」

マナ「あの人が……なぎささん達の世界を……?」

ラー・カイン「ザマス……そして、ブラックよ……」

何故、余の許可なく、その少年に

手を出したのだ?」

!?
ザマス「くっ……何故、貴様の許可など、もらわなければならない

我々とお前達の立場は、対等のはずだ!!」

ゴクウブラック「……………」

キュアダイヤモンド「何……この人達、仲間なの!」

シャイニー・ルミナス「けれど、わたし達の世界が襲われた時には、

あの2人は、いませんでしたけど……」

ラー・カイン「対等?余とお前達がか……?」

「ドォー……………」

ゴクウブラック「グォ……………」

ザマス「グァ……………」

と、ラー・カインは、そう言いながらゴクウブラックと

ザマスに向けて闘圧を放ち、2人を押し潰して行く……

キュアロゼッタ「ひ……ひ……………」

キュアソード「な……何よ、これ!」

キュアエース「あのゴクウブラックと、ザマスが……」

レイス「くっ……何という闘圧だ!」

ラー・カイン「勘違いをするな……余の部下になる必要は無いとは

言ったが、対等だといった覚えは無いぞ……」

「シュー……………」

ゴクウブラック「はあ……はあ……はあ……」

ザマス「お……おのれ……人間め!!」

と、ラー・カインは、ゴクウブラックとザマスを押し潰していた闘
圧を

解除し、そのまま、進之介の元へと歩を進めた…。

ラー・カイン「さて…次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ
よ…

余と来てもらおうか…？」

進之介「…えっ…？」

キュアダイヤモンド「な…何ですって!？」

キュアソード「シンをどうする気なの!？」

ラー・カイン「答える必要は無い…。」

キュアエース「そんな事…させませんわ!!」

レジーナ「シンから離れなさい!!」

「バァーーーーーッ!!!」

キュアホワイト「ああっ!？」

キュアブラック「ダ…ダメーーーーーッ!!」

と、ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・レジーナの
5人は、ラー・カインへと、向かっていくが…。

ラー・カイン「虫ケラ共め…気安く余に近づくな…。」

「ドォーーーーーッ!!!」

キュアダイヤモンド「あ…がはっ…。」

キュアロゼッタ「あ…が…あ…。」

キュアソード「く…は…。」

キュアエース「か…はっ…。」

レジーナ「く…くる…しい…。」

と、ラー・カインは5人に向けて、再び闘圧を放ち、
押し潰して行く。

ラー・カイン「消えよ…。」

「ブウーーーーーッ!!!」

そして、ラー・カインは、押し潰されている5人に向けて、
指先から、強力な破壊光線を放った。

マナ「みんなーーーーーッ!!!」

と、ラー・カインの放った破壊光線が、5人に直撃しそうになったその時……。

メリオダス「全反撃（フル・カウンター）!!」

「シュン!!」「ドオ?」「シューシューシューシューシュー!!」

ラー・カイン「!!!」

「シューシューシューシューシュー……」

と、5人の前方に、突如、メリオダスが現れて、

全反撃（フル・カウンター）で破壊光線を跳ね返した。

だが、ラー・カインは、跳ね返ってきた破壊光線を

自身の周辺にバリアを展開し、相殺した。

そして、5人は、押し潰されていた闘圧から解放された。

キュアソード「はあ……はあ……はあ……はあ……」

キュアエース「あ……あなたは……!?!」

メリオダス「よっ!!生きてるか?」

キュアダイヤモンド「メリオダスさん!!」

キュアロゼッタ「どうして、こちらに?」

メリオダス「俺だけじゃないぜ!!」

「シューシューシューシューシュー……」

鬼太郎「みんな、大丈夫か!?!」

さくら「遅くなって、ごめんなさい!!」

ラピス「あたし等もいるぜ!!」

と、空間から、鬼太郎やさくら、そして、グラン・ゲインズの

メンバーも次々と現れた。

マナ「みんな……来てくれたんだ!!」

ねこ娘「当たり前でしょ!!」

ケロベロス「ワイらは、グラン・ゲインズやで!!」

ナツメ「けど……まさか、あいつが現れるなんて……」

トウマ「ラー・カイン……」

アキノリ「お前!!俺達の世界を返しやがれ!!」

ラー・カイン「……虫ケラに用は無い……」

と、ラー・カインは、グラン・ゲインズのメンバーを無視して、

進之介の元へと向かっていくが…。

「パチン!!」「シュン!!」

ラー・カイン「何…?」

アクア「残念だったわね… シンは渡さないわよ!!」

と、アクアも現れて、進之介を自身の傍へと瞬間移動させた。

進之介「ミ… ミリカ… ありがとう…。」

アクア「ちよ… ちよつとシン… ボロボロじゃない!!」

待ってて。白魔法（ホワイト・アタック）…。」

ラー・カイン「その少年を渡せ…。」

「ブウ…。」

メリオダス「欲しければ、力づくで奪ってみろ!!」

「バキ…。」

と、ラー・カインは、アクアに向けて破壊光線を放とうとするが、

メリオダスがラー・カインに攻撃を仕掛けて、食い止めた。

ラー・カイン「貴様…。」

メリオダス「ミリカ!!早くシンを!!」

アクア「わかったわ!!白魔法（ホワイト・アタック）!!治療（ホイ

ル）!!」

「パア…。」

進之介「よし… ありがとう、ミリカ!!」

メリオダス、僕も行くよ!!」

メリオダス「だめだ!!奴の狙いはお前なんだ。ここは俺達任せろ

!!」

鬼太郎「彼の言う通りだ、シン!!霊毛ちゃんちゃんこ!!」

「ドゴ…。」

さくら「わたし達も頑張るから!!火焰（ブレイズ）!!」

「ゴオ…。」

ラピス「だから、お前は大人しくしてな!!」

ラピス!!スペシャル・プリティー・キャノン!!」

「ドオ…。」

進之介「みんな…。」

アクア「シン…みんなを信じましょう!!」
進之介「…うん!!」

ラー・カイン「愚かな…」

「ドオーーーーーーッ!!!」

鬼太郎「うわーーーーーッ!!」

さくら「きゃーーーーーッ!!」

ラピス「ち…ちくしよーーーーッ!!」

「ドゴーーーーーッ!!!」

ねこ娘「鬼太郎!!」

小狼「さくら!!」

メリオダス「くっ!?…。」

と、ラー・カインは、鬨圧を放ち、鬼太郎達を

吹き飛ばしたが、メリオダスは、何とか、その場で踏みとどまった。

ラー・カイン「ほう…余の鬨圧に耐えたか…。」

メリオダス「まあな…お前は、ここで倒す!!」

「キイーーーーーッ!!!」

ラー・カイン「何…?」

メリオダス「神千切り（かみちぎり）!!」

「ズババババババツ!!!」

と、メリオダスは、魔神族の力を発動させて、

神千切りで、ラーカインに猛攻を仕掛ける。

ラー・カイン「くっ…。」

ナツメ「すごい…ラー・カインを押ししてる!!」

アキノリ「そのまま行けえーーーーーッ!!!」

ラー・カイン「小癩な…聖なる雷（ラー・ブレイク）!!」

「ドオーーーーーーッ!!!」

メリオダス「ぐわーーーーーッ!!!」

と、ラー・カインは、右手からエネルギー体を出現させて、

メリオダスを閉じ込めると、更に、強大な稲妻の様な物を放ち、

直撃させて、大ダメージを負わせた。

メリオダス「ぐうう…。」

ラー・カイン「虫ケラめ… 聖なる連弾（ラー・コンボ）!!」

ドオーーーーッ!!!

メリオダス「うわーーーーーっ!!」

と、ラー・カインは、前方にエネルギー体を出現させると、そこから、強力なエネルギー弾を次々と発射して、メリオダスに直撃させていく…。

進之介「メリオダス!!」

アキラ「シン!!」

「ガシッ!!」

と、メリオダスの元へ向かおうとする進之介を、アキラは右腕を掴んで制止した。

進之介「ミリカ…。」

アキラ「… メリオダスを信じましょう!!」

メリオダス「ううう…。」

マナ「メリオダスさん!!」

トウマ「あの人でも… 勝てないのか…？」

ラー・カイン「終わりだ…。」

「ブウーーーーーッ…。」

と、ラー・カインはメリオダスに向けて、指先から破壊光線を放とうとする。だが…。

メリオダス「それは、こっちの台詞だぜ!!」

「ドオーーーーッ!!!」

ラー・カイン「何!?!」

と、メリオダスはそう言うと、体から膨大な魔力が溢れだした。

ケロベロス「な… 何や、このごっつい魔力は!?!」

鬼太郎「す… すごい…。」

マナ「ミリカさん… あれは…？」

アキラ「あれは、メリオダスの必殺魔法『リベンジ・カウンター』…。

魔力を解除した状態で、あらゆる攻撃を体内に蓄積、チャ-

ジして

「一気に解き放つ大技よ!!」

レイス「だが、一步間違えば、自滅必死の諸刃の剣でもある…。」

ラー・カイン相手にそれをやるとは… 思い切った賭けに出たね…。」

メリオダス「覚悟しろ、ラー・カイン!!」

リベンジ… カウンター… ツ!!!」

「シュン!!」「ゴォ… ツ!!!」

ラー・カイン「うお… ツ!!!」

この… 余が… こんな… 虫ケラ共

に… ツ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドツカ… ツ!!!」

と、メリオダスはリベンジ・カウンターを放ち、

ラー・カインへと直撃させた。そして、ラー・カインは、断末魔の叫びを

あげながら、爆散し、消滅していった…。

ザマス「な… 何だと!？」

ゴクウブラック「…。」

キュアホワイト「や… やったの…?」

キュアブラック「あの… ラー・カインを…?」

ナツメ「倒したんだ!!」

一同「うお… ツ!!!」

と、メリオダスの勝利に歓喜する一同。

アキノリ「やった… やったぜ!!」

アヤメ「すごい… すごいです!!」

進之介「メリオダス!!」

メリオダス「よっ!! シン、ミリカ… 何とか成ったみたいだぜ!!」

アクア「さすがだね… あなたが味方で良かったわ!!」

マナ「よおーし!! これで後は、なぎささん達の世界を取り戻すだけだね!!」

レジーナ?「もう、親玉も倒したし、取り戻したも同然よ!!」

レイス「!!!」

進之介「… レイス？」

アクア「どうしたのです？」

レイス「我が主… どうやら、安心するのは、まだ早い様だね…。」
進之介「えっ？」

「ドォー!!!?」

アクア「!!!」

メリオダは「ま… まさか!？」

と、勝利の喜びも束の間、空間の歪みが再び出現し、
中から、倒したはずのラー・カインと謎の4人組が
凄まじい闘圧を放ちながら、姿を現した。

ラー・カイン「……………」

?①「……………」

?②「……………」

?③「……………」

?④「……………」

ナツメ「うそ!？」

トウマ「ラー・カイン… 今、倒したはずなのに!？」

アキノリ「どうなってんだよ!？」

レイス「どうやら、今、倒したラー・カインは偽物だった様だね…。」

キュアホワイト「に… 偽物!？」

キュアブラック「な… 何ですって!？」

シャイニー・ルミナス「そ… そんな!!」

ザマス「やはり、そう甘くは無かったようだな… しかも、今度は
親衛隊（ホワイト・ナイト）まで現れるとは…。」

マナ「ホワイト… ナイツ!？」

ナツメ「ラー・カインの手下達よ!!あいつらが、妖魔界や…。」

キュアブラック「光の園をメチャクチャにしたのよ!!」

ケロベロス「けれどこれ… ちよつとヤバイんとちゃうか!？」

ねこ娘「今、あいつらと戦ったら…。」

アクア「… 全滅は免れないでしょう… そして、この世界は…。」

ラー・カイン「なるほど… 余の複製（コピー）を倒すとは、虫ケ

ラの中にも

少しはマシなのがいる様だな… だが、まだ我々の足元にも及ばない…。」

ラピス「何だ?! 上等じゃねーか!!」

アーンズ「ラピス!! だめっ!!」

リータ「悔しいですけど… あの人の言う通りです…。」

ラー・カイン「次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ…

そして、グラン・ゲインズよ…。」

『余の世界』へと来るがいい… そこで、お前達の真価を見定めてやろう…。」

進之介「えっ?!」

アクア「どういう風の吹き回しかしら… 私達を見逃すというの?」

ラー・カイン「ただし… お前達、次元管理局が捕えている我々の同胞達を解放してもらおうか…

さもなければ、この世界を潰して行く…。」

ラピス「て… てめえ!!」

アクア「わかりました… その条件を飲みましょう…。」

アーンズ「姉姉さま!」

リータ「いいんですか!」

アクア「今、この人達と戦っても、100%勝ち目はありません…。」

それに、この世界の人達の命には代えられません!!」

マナ「ミリカさん…。」

ラー・カイン「ザマス… そして、ブラックよ… お前達も、

我々と共に撤収せよ… 次に、勝手な真似をすれば、消えてもらうぞ…。」

ザマス「くっ?! 仕方あるまい… 行くぞ、もう一人の私よ。」

ゴクウブラック「…。」

ラー・カイン「では、さらばだ… グラン・ゲインズの諸君…。」

進之介「待って!!」

ラー・カイン「何だ?」

マナ「シン…?」

進之介「さつき、あなたは『余の世界』って言ったよね？」

ラー・カイン「それがどうかしたか？」

進之介「それは違う!!今、あなたがいる世界は、なぎさやほのか…

そして、ナツメ達、第5世界にいるみんなの世界だ!!

僕達は、必ずあなた達を倒し、第5世界を取り戻す!!

これは、僕…いや、僕達からの『宣戦布告』だ!!」

マナ「シン…。」

レイス「我が主…フツ…。」

?①「小僧が…調子に乗りおって…ならば!!」

ラー・カイン「待て、かまわん…。」

?①「ラー・カイン様!?!?! わかりました。」

と、進之介の宣戦布告に憤慨した『?①』が攻撃しようとするが、

ラー・カインがこれを制止した。

ラー・カイン「よかろう…虫ケラ共がどこまで這いあがってくる

か、

楽しみにしておこう…。総員、撤収せよ。」

ザマス「忌々しい人間共…次に会った時には、必ず貴様等を

葬り去ってくれる!!」

「シューーーーーーシューーーーーーシュー…。」

と、ラー・カインと親衛隊（ホワイト・ナイツ）の4人組、

そして、ザマスとゴクウブラックは空間の歪みの中へと

消えていった…。

進之介「……………」

マナ「シン……………」

メリオダス「へへっ…カッコ良かったぜ、シン!!」

リータ「でも、ヒヤヒヤさせないでください。

ホントに攻撃してきたら、どうするつもりだったんですか

!?!」

進之介「だって…。」

なぎさ「でも…嬉しかったよ。ありがとう、シン!!」

ナツメ「私も、スカツとした!!」

鬼太郎「僕もさ……これで、ますます頑張らないといけないね。」

さくら「はい!!」

進之介「鬼太郎さん……さくらちゃん……。」

マナ「あたし達と来てくれるんですか?」

鬼太郎「ああ!!僕達の仲間も一緒にね。シン……」

君の『王』になる目標……僕達にも手伝わせてくれ!!」

ねこ娘「鬼太郎……。」

さくら「わたしも……もう迷いません!!この世界……そして、

苦しんでる他の世界の人達を救えるように……」

グラン・ゲインズのみなさんと一緒に強くなります!!」

小狼「さくら……。」

ケロベロス「よつしやー!それでこそワイの見込んだ

『カードキャプターさくら』や!!」

進之介「鬼太郎さん、さくらちゃん、みんな……ありがとう!!」

レイス「それは良いが……この町の有様はどうするかね?ミリカ

君……。」

と、グラン・ゲインズのメンバーが結束を固めた一方で、

大貝町は、度重なる戦闘で、甚大な被害が発生していた……。

キュアダイヤモンド「確かに……。」

キュアアロゼッタ「このまま、この世界を出ていく訳には

行きませんよね……。」

レジーナ「あつ、そうだ!!アクアが時間を戻して直せば良いじゃない

い!!」

ラピス「そうだぜ!!姉姉さま、サクツと直してよ!!」

アクア「……ごめんなさい……。」

キュアソード「えっ?」

アクア「この町の時間……前に一度戻しちゃったから、

もう、『時間逆転(ウインド・タイム)』は使えないの……。」

キュアエース「えっ!」

マナ「それじゃあ……この町は……。」

と、一同が困り果てていたその時……。

「シュン!!」「シュン!!」

バイエルン「お困りの様だな……。」

アルト「たかが町一つで、随分と騒がしい事だな……。」

キュアソード「あなた達!?!」

キュアダイヤモンド「次元の監視者（ダイダロス・アイ）!!」

レジーナ「何しに来たのよ!?!」

バイエルン「相変わらず、随分な言われ様だな……。要件は2つある。」

良い報告と悪い報告があるのだが……

どちらから聞きたいかな?

アクア「シン……どうする?」

進之介「それじゃあ……良い報告からお願い!!」

バイエルン「良いだろう。では諸君……出てくるがいい!!」

「パチン!!」「シューーーーーーン……。」

と、バイエルンが指を鳴らすと、空間から

謎の8人(?)組が姿を現した。

?①「よう!!生きてたか?団くちよ♪」

?②「突然いなくなるなんて!!」

?③「ボク達……心配したんだよ!!」

?④「団長、発見……。」

?⑤「フフツ、そう簡単にやられるはずがなからう。」

?⑥「いかにも。この『私』の次に強い男ですからね……。」

?⑦「メリオダス様……良かった!!」

?⑧「久々だな、ブタ野郎!!」

進之介「この人達……。」

マナ「……誰なの?」

メリオダス「お……お前等……来てくれたのか!!」

と、ラー・カイン達が撤退していった後、アルトとバイエルンが謎の8人(?)組と共に姿を現した。メリオダスを『団長』と呼ぶ彼らは一体、何者なのか…。そして、バイエルンの言う『悪い報告』とは…。鬼太郎やさくら達も合流し、グラン・ゲインズはいよいよ『A・D次元第5世界』奪還へと向けて、動き出すのであった!!

第23話　　宣戦布告　　(完)

第24話 　　～ 出発!!さらば第3世界!! 　　～

メリオダス「お前ら… 来てくれたのか!!」

マナ「メリオダスさん、この人達は…?」

進之介「ひよつとして…。」

メリオダス「ああ!!俺の仲間、『七つの大罪』だ。

みんな、よろしく頼むぜ!!」

鬼太郎「…………。」

さくら「…………。」

ラピス「…………。」

メリオダス「… どうした?お前ら…。」

ねこ娘「いや、何と言うか…。」

あります「随分と個性的な方々と言うか…。」

ナツメ「て言うか、まるでサーカス団みたい…。」

?①「ああ?何か言ったか♪」

と、七つの大罪の1人である『?①』が、ナツメを凝視しながらそう言った。

ナツメ「い… いえ、何でもありません!!」

(こ… 怖…?… 何?このメチャクチャがらの悪い人…。)

メリオダス「おい、バン!!びびらすなって!!悪いな、ナツメ。」

こう見えても良い奴だから安心してくれ!!」

ナツメ「は… はい…。(この人… 苦手かも…。)

バン「じゃ、とりあえず自己紹介するぜ。」

俺は、七つの大罪『強欲の罪(フォックス・シン)』のバンだ。

キング「おいらは『怠惰の罪(グリズリー・シン)』のキング。よろしく!!」

ディアンヌ「ボクは『嫉妬の罪(サーペント・シン)』のディアンヌだよ!!」

ゴウセル「七つの大罪が1人、『色欲の罪(ゴート・シン)』ゴウセル…」

キュピーン☆!!」

と、ポーズを決めながら、自己紹介をするゴウセル。

真琴「キュピーン☆つて…。」

マナ「あはは…。」

マーリン「おほん!!私には『暴食の罪(ボア・シン)』マーリンだ。よろしく頼む。」

エリザベス「私は、エリザベス・リオネスです。皆様、よろしくお願ひします!!」

アクア「えっ!?エリザベス…。」

進之介「あっ!!ひよつとして、あのエリザベス…?」

エリザベス「あの…どこかでお会いしましたか?」

進之介「ほえ?」

アクア「あつ、ごめんなさい…人違いだったかしら…。」

メリオダス「…(そうか…ミリカとシンは、3000年前に会ってるもんな…。)」

ホーク「そして、俺様が栄えある残飯処理騎士団団長のホーク様だ!!よろしくな!!」

ケロベロス「おおっ!!しゃべる豚かい!!珍しいなあ。」

ホーク「そう言うおめえこそ、しゃべるぬいぐるみじゃねえか。」

ケロベロス「何やてーっ!!」

ホーク「やんのか!?このブタ野郎!!」

さくら「ケロちゃん!!」

マーリン「ホーク殿。そこまでにしておけ…。」

ケロベロス「フン!!まあ、さくらに免じて、ここでカンベンしたるわ!!」

ホーク「ケツ!!そりゃあ、こっちのセリフだぜ!!」

さくら「あの…ごめんなさい!!」

マーリン「気にする事は無い…。お前、名前は?」

さくら「木之本桜と言います。よろしくお願ひします。マーリンさん!!」

マーリン「さくらか…。」「スツ…。」

さくら「えっ?」

と、マーリンはそう言いながら、さくらの右頬に手をかざした。
マーリン「なるほど…。良いものを持っているようだな。」

興味が湧いてきたぞ…。」

さくら「…。(何だろう？この人…。初めて会った気がしない…。)」

小狼「さくら…。」

ラピス「そして、最後はあのデカイおっさんだな!!」

？「おこがましい…。」

ラピス「ああ？」

？「おこがましい…。何故、自分より弱い者に先に名乗らねばならぬ？」

まずは、キサマから名乗れ…。」

ラピス「何だと？やんのか、オッサン!!」

マーリン「エスカノール!!よさないか!!」

アクア「ラピスも、やめなさい!!」

ラピス「ご…ごめんなさい…。」

エスカノール「仕方ありませんね…。私は全ての種族の頂点に立つ者、

『傲慢の罪（ライオン・シン）』エスカノール様だ。」

六花「えっ？」

あります「全ての種族の頂点に立つ…。？」

レジーナ「何よ、偉そうに!!」

亜久里「まさに、『傲慢の罪』ですわね…。」

メリオダス「さてさてさーて!!自己紹介が済んだ所で…。」

今、ブリタニアの状況はどうなっている？マーリン…。」

マーリン「それは…。この男から聞いた方が良いでしょう。」

メリオダス「この男？バイエルンからか？」

バイエルン「そう。これは、これから話す『悪い報告』にも

関係してくる事だが…。」

進之介「…どういう事？」

バイエルン『ギガデウス』が復活しようとしている。
アクア「!!!」

進之介「ギガデウス……ま……まさか……」

レイス「確かに……それは最悪な報告だね。」

メリオダス「やっぱり……あいつが……」

なぎさ「ギガデウス……？」

ほのか「誰ですか……？」

バイエルン「神官レイス……それは君から説明した方が

良いのではないか？」

レイス「ギガデウスは、3000年前の『次元大戦』時に

神々の集団（カタストロフィー）の頂点に君臨していた最強

の神だ。

そして……『次元の王』と唯一、対等に渡り合った存在でもあ
る……」

マナ「えー……っ!?」

鬼太郎「最強の……神!?!」

目玉おやじ『『次元の王』と唯一、対等に渡り合った存在じゃと!?!』

レイス「そう。かつての神々の集団（カタストロフィー）の中にも、

『次元の王』派と『ギガデウス一派』に別れていてね……」

『次元大戦』終盤にその両派が激突したのさ。」

さくら「ほえ……っ!!」

ケロベロス「神様にも派閥があるんか……」

ありす「何か……想像するだけで恐ろしいです……」

レイス「そして、次元の王とギガデウスが激闘を繰り広げた末に、

次元の王が勝利し、ギガデウスは肉体を消滅させられた。」

ナツメ「そんな化け物が、復活しようとしてるんですか……？」

メリオダス「そういう事みたいだな。もしギガデウスが完全復活し
て

あいつらが本格的に動き出したらとんでもないことにな
るぜ。」

バイエルン「では、現在のブリタニアの状況だが……その『ギガデ

ウス一派』と

魔神族の連合軍の支配下に落ちた。」

メリオダス「・・・やっぱりか・・・。」

マーリン「すまない、団長殿・・・。だが、相手が悪すぎた。」

キング「おいら達、必死で戦ったんだけど・・・。」

ディアンヌ「あの人達・・・。とんでもなく強くて・・・。」

バン「まあ・・・。エスカノールが、ガランとメラスキュラをぶっ倒して

一矢は報いたんだがな・・・。」

六花「えっ!？」

真琴「ガランとメラスキュラ!？」

ラピス「このオツサンがぶっ倒したのかよ・・・。」

エスカノール「まあ、私にとっては朝飯前ですよ・・・。」

ケロベロス「やっぱり、あいつら、またやらかしおったか・・・。」

アクア「せっかくシンが見逃したというのにな・・・。」

進之介「・・・仕方ないよ・・・。」

バイエルン「我々は、ガランとメラスキュラを十戒の元に返した後、既にブリタニアの進行を開始していたギガデウス一派と

魔神族の連合軍との戦いで劣勢だった彼らを集めて

これまでの経緯を話し、ここへ連れて来たという訳だ。」

アルト「その過程でギガデウスの復活を知ったんだけどね。」

メリオダス「そうだったのか・・・。リオネスはどうなったんだ?」

バイエルン「安心しろ。リオネス王国なら我々が国ごと異世界へ転移させた。」

メリオダス「そんな事ができるのか!？」

アルト「当たり前だ。僕等を誰だと思ってる?」

マーリン「だから、国王や聖騎士のみんなも無事だ。この者達には何から何まで世話になったぞ。グラン・ゲインズの入隊を

条件にな・・・。」

キング「これ以上ない条件だよ。メリオダス・・・。君もいるし、

奴らに反撃できるチャンスもできたんだから!!」

メリオダス「そうだったのか…。バイエルン、アルト、恩に着るぜ!!」

アルト「フン…。まあ、貸しにしておこうか。」

バイエルン「では、我々はこれで失礼する。」

進之介「待つて!!」

バイエルン「何だね…。？」

進之介「えー…つと…。あつ、いた!!」

と、進之介はゴクウブラックの攻撃を受けて気絶していた
カッパードを発見した。

真琴「そういえば、忘れてたわね…。」

ありす「あのカッパさんの事…。」

進之介「カッパさん、大丈夫!？」

カッパード「うう…。お前は…。」

進之介「バイエルン…。このカッパさんも元の世界へ

返してあげてほしいんだ。」

バイエルン「なるほど…。ノットレイダーか…。」

アルト「おい、失敗作…。僕等は運び屋じゃないんだぞ。」

それに、このカッパは敵じゃないのか？」

進之介「…。多分、そうだと思う。でも、カッパさんが

助けてくれなかったら、今頃どうなってたか

わからない。だから…。」

マナ「あたしからもお願いします!!」

バイエルン「いいだろう。では、カッパよ。我々についてきたまえ。」

カッパード「だから私はカッパではない!!カッパードだ!!」

アルト「そんな事はどうでもいい。来るのか？来ないのか？」

カッパード「ぐぬぬ…。仕方ない…。ついて行くでしょう。」

レイス「バイエルン君…。すまないが、その前に…。」

バイエルン「ああ、そうだったな。」

「パチン!!」「シューシュー…。」「カチーン!!」

と、バイエルンが指を鳴らすと、大貝町の時間が戻り、元の風景へと戻った。

「ディアンヌ「うそ!?何これ!!」

ゴウセル「時間を戻したのか…。」

マーリン「やはり、只者ではないな、あの男…。」

バン「そういや、俺達の所に来た時も時間を止めてやがったな。」

バイエルン「これで用は済んだな。では行くぞ、アルト。」

そして、カッパードよ。」

カッパード「… やつと名前を覚えたか。」

進之介「カッパさん!!ありがとう!!」

マナ「元気でねーっ!!」

カッパード「だから私はカッパさんではない!!カッパ…。」

「シュン!!」「シュン!!」「シュン!!」

と、進之介にそう言いかけた途中でバイエルンとアルトと共に、その場から姿を消していった。

メリオダス「… 結局、何だったんだ?あのカッパは…。」

ラピス「知らねー。」

鬼太郎「妖怪ではなさそうですね。父さん…。」

目玉おやじ「うむ… まあ、何でも良いじやろう。」

進之介「よし!!これで一件落着だね。ありがとう、みんな!!」

マナ「うん!!」

鬼太郎「当然の事をしたまでさ。」

さくら「わたし達、仲間じゃないですか!!」

アクア「けど、本番はこれからね。」

レイス「明日には、いよいよ第5世界に突入だからね。」

メリオダス「ああ!!七つの大罪のみんなも来てくれたし、

戦力は更に上がったな!!」

ナツメ「けど、良いんですか?メリオダスさん達の世界も

大変な事になっているんじゃない?」

キング「確かにそうだけど… 今のオイラ達ではとてもじゃないけど、

ギガデウス一派と魔神族の連合軍には対抗できない。」

ディアンヌ「ボク達…もつともつと強くなって、いつかブリタニアを

取り戻すんだ!!それにはメリオダスやみんなと一緒に…

グラン・ゲインズに参加するのが一番だって思ったの!!」

マーリン「その通りだ。まあ、私としては『次元の王』とやらにも興味はあつたしな。」

ゴウセル「だから、気にする必要はない。」

バン「つー訳で、団長共々、世話になるぜ♪」

エスカノール「まあ…くれぐれも私の足手まといにならないようにしてください。」

エリザベス「グラン・ゲインズの皆様…よろしくお願い致します!!」

ホーク「えっへん!!俺様に加わったからには千人力だぜ!!」

六花「…いろんな意味で頼もしそうな人達ね…。」

真琴「うまくやっていけたら良いわね、この人達と…。」

メリオダス「それじゃ、ミリカ。一度本部に戻るか!!」

アルテミスの準備もしなきゃいけないだろ?」

アクア「…そうですね…。」

と、言いながら進之介を見つめるアクア。

進之介「どうしたの?ミリカ?」

アクア「あつ…いえ、何でもありません。本部に戻りましょう。」

ラピス「…姉姉さま、ここに残りなよ!!」

アクア「えっ?」

メリオダス「ああ、そういう事か。それなら、俺と3人娘と

七つの大罪のみんな準備しておくぜ!!」

アンズ「だから、姉姉さま…。」

リータ「ここに残ってください!!」

アクア「あなた達…も、もう!!そこまで言うのなら

仕方ありませんね。シン、ここに残って良いかな…？

進之介「もちろん!!それならミリカも僕の家においでよ!!」

アクア「本当!?ありがとう、シン!!」「ガバツ!!」

と、言いながら、進之介に嬉しそうに抱き着くアクア。

さくら「ほえーっーっーっ!!」

ケロベロス「またまた大胆やなっつ。」

小狼「……………」。(顔を真っ赤にしながら沈黙している小狼)

エリザベス「…それなら、わたくしも!!」「ガバツ!!」

と、今度はエリザベスもメリオダスに思いきり抱き着いた。

メリオダス「エリザベス…。」

エリザベス「メリオダス様…無事で良かった!!」

メリオダス「ごめんな、エリザベス…心配かけつちまって。」

もう、お前の傍からは絶対に離れねーからな!!」

エリザベス「…はい!!」

ディアンヌ「いいな…。」

マーリン「フフツ…これが若さか…。」

キング「…(ディ…ディアンヌ…オイラで良ければ…。)」

エスカノール「…(マーリン…私はいつでも待っています

よ…。)」

ゴウセル「???'」

バン「あ…あ????? やっぱり、エレインも連れてくれば良かったかな?」

エリザベス「バン様…エレインは…。」

バン「ああ…わかってるぜ姫さん。ブリタニアを

取り戻すまでの辛抱だ。」

ホーク「その意気だぜ!!バン!!」

バン「うるせーよ、師匠♪」

メリオダス「それじゃみんな、行くか!!ラピス、頼むぜ!!」

ラピス「おう!!現れる!!本部へ続くサーキット!!」

「シューーっーっーん!!」

と、ラピスが前方に手をかざすと、ゲートの様な物が出現した。

アンス「…何、そのセリフ?」

リータ「わざわざそんな事を言わなくても、普通にボタンを押せば

ゲートは出てくるけど…。」

ラピス「う…うるせえ!!ちよつと言ってみただけだ!!」

アクア「それじゃ、メリオダス…みんなをお願いね!!」

メリオダス「おう!!任せとけ!!楽しんで来いよ、ミリカ!!」

ラピス「シン!!姉姉さま泣かせたら、承知しねーぞ!!」

アンズ「それでは!!」

リータ「また明日お会いしましょう!!」

マーリン「では、我々も行くのでしょうか。」

エリザベス「はい!!マーリン様!!」

ホーク「またな!!ブタ野郎ども!!」

「シューーーーーーシューシューシュー…。」

と、メリオダスと3人娘、そして七つの大罪のメンバーはゲートの中へと消えていき、本部へと帰還していった。

目玉おやじ「鬼太郎、ワシらも戻るとするかのう。」

鬼太郎「はい、父さん。」

ナツメ「わたし達も行くのか。みんなの準備も

手伝わないと行けないし。」

トウマ「そうだね。」

ねこ娘「それじゃ、また明日ね!!」

と、鬼太郎とねこ娘はカラスのヘリコプターで、

ナツメ達妖怪探偵団は青龍の背中に乗って、

ゲゲゲの森へと帰っていった。

知世「さくらちゃん!!」

さくら「あつ、知世ちゃん!!」

と、知世が自家用車でさくら達を迎えに来た。

そして、さくら達は車に乗り込んだ。

小狼「それじゃ!!」

ケロベロス「また明日なーっ!!」

さくら「シンさん!!アクアさん!!プリキュアのみなさん!!

さようなら!!」

と、さくら達も知世の自家用車で友枝町へと帰っていった。
進之介「いよいよ、明日か……」

マナ「そうだね……。シンと出会ってからまだ一週間だけど、
色んな事があつたなー。」

健太郎「マナ……」

あゆみ「いよいよ明日なのね。」

マナ「お父さん……お母さん……今までありがとう!!」
「ガバツ!!」

とそう言いながら、両親に抱き着くマナ。

健太郎「ああ。マナはマナの使命を果たしなさい……」

そして、必ず帰ってくるんだぞ!!」

あゆみ「進之介君やみんながいるから、きっと大丈夫よ!!」

二階堂「進之介……」

進之介「二階堂君……」

二階堂「マナを……そして、プリキュアのみんなを頼んだぜ!!」

百田「アニキの言う通りです!!」

十条「皆さんの無事を祈っていますよ!!」

進之介「二階堂君……みんな……ありがとう!!」

と、マナの両親と二階堂達も、それぞれ別れの挨拶を済ませて、
帰路へと着いた。

アクア「それではシン……行きましょう!!」

進之介「うん!!」

と、アクアは進之介の手を繋ぎ、歩き出して行った。

マナ「……」

なぎさ「マナ……どうしたの?」

マナ「やっぱり、シンのさっきの変化……まだアクアさんには

言わない方がよいね……」

ほのか「そうね……」

レイス「だが、いずれまた出てくるだろうね、あの方は……」

亜久里「深く考えても仕方ありませんわ。その時はその時です!!」
レジーナ「だって、シンはシンだもん!!」

マナ「そうか…。 そうだよね!! それじゃみんな!! 帰ってパーティーの続きしよ!!」

一同「うん!!」

と、進之介とアクアの後を追って、マナ達も帰路へと着き、パーティーの続きを心行くまで堪能したのであった。そして…。

く 翌日 次元管理局本部アルテミス内 く
アクア「みんな、そろってるわね?」

進之介「うん!!」

マナ「プリキュアチーム、全員、揃ってます!!」

メリオダス「七つの大罪組もOKだぜ!!」

バン「おう♪」

キング「何か…。 ドキドキするな…。」

ディアンヌ「キング、頑張ろうね!!」

キング「ディアンヌ…。 君の事は、オイラが絶対に守るから!!」

ディアンヌ「ボクも…。 キングの事、守るよ!!」

ゴウセル「キングとディアンヌの心拍数、急激に上昇…。」

マーリン「さてと、何が待ち受けているのやら…。」

エスカノール「まあ、少しは手応えがある事を祈りますよ。」

エリザベス「大丈夫ですよ…。 例え、どんなに大きな困難が待ち受けていても、

七つの大罪…。 いえ、グラン・ゲインズの皆さんとなら

乗り越えていきます!!」

ホーク「エリザベスちゃんの言う通りだぜ!!」

鬼太郎「僕等もそろってるよ!!」

ねこ娘「いよいよね…。」

子泣き爺「うい…。」

砂かけ婆「もう、酔っぱらつとるのか? この爺は!!」

犬山まな「子泣き爺さんらしいわね!!」

アニエス「ホント!!」

アデル「…。 緊張感無いな。」

ねずみ男「けっ!! のんきな奴らだぜ!! 生きて帰ってこれるか

わからねーつてのによ!!」

ナツメ「でも…何か、行けそうな気がする!!」

トウマ「そうだね…その為に僕等はここにいるんだ!!」

さくら「わたし達もOKです!!」

小狼「いつでも出られるぞ!!」

ケロベロス「よっしゃーっ!!行くで!!」

アクア「それでは…次元転移システム、起動!!」

「ブウーーーーー」

と、アクアが号令をかけると、アルテミスの前方から巨大なゲートが出現した。

六花「す…すごい!!」

ありす「まるで、SF映画みたいです…」

進之介「さようなら…第3世界。」

マナ「シン…これから先に何があっても、

あたしが傍にいる!!だから…絶対に帰ってこようね!!

立派な王様になつて!!」

と、マナは進之介の手を握りながら進之介にそう語った。

亜久里「マナだけではありませんわ!!わたくしもです!!」

レジーナ「あたしもよ!!」

真琴「フフツ…あたしもよ!!」

進之介「みんな…ありがとう!!」

アニエス「…」

アデル「アニエス…」

ねこ娘「行ってくれば?シンの所に。」

アニエス「いいの…今はまだ。これからは一緒何だし…」

もう少し、彼の役に立つてからじゃないと…」

犬山まな「うふふ…ライバル多いもんね!!」

オペレーター「システムオールグリーン!!姫様、いつでも行けます

!!」

アクア「では、行きましょう!!目的地、『A. D次元第5世界』!!

アルテミス… 発進!!」

なぎさ「みんな…待っててね!!」

ナツメ「今、行くから!!」

「ゴォー……」
「シュー……」

と、アクアが号令をかけると、アルテミスはゲートの中へと進入し、
『A. D次元第5世界』へと転移していった。

『A. D次元第5世界』のとある廃墟

？「はあ… はあ… はあ… 一体何なんだ、あなた達は!？」

いきなり襲ってくるなんて!!」

サン格拉斯の男「……」

「ドカツ!!バキツ!!ドスツ!!」

？「ぐわっ!!あぐっ!!げぼーっ!!」

と、中学生ぐらいの少年が、サングラスをかけた男に一方的に
殴られ続けていた。

？「ううう… ど… どうして… 僕がこんな目に…」

サングラスの男「どうした… 何故、向かってこない？」

美少女「男の子でしょ… 『阿久津マサト』君？」

マサト「な… 何故、僕の名前を!?あなた達は一体…」

と、『阿久津マサト』と呼ばれた少年の前には

サングラスをかけたスーツ姿の長身の男と、

オレンジのロングヘアの美少女がたたずんでいた。

サングラスの男「…ならば、次の手といくか… 連れていけ。」

謎の男達「はっ!!」

マサト「!!!何するんだよ!!離せ… 離せよ……っ!!」

「バタン!!」
「ブウ……」

と、サングラスの男が指示を出すと、謎の男が5人現れて、

マサトを車に無理やり押し込むと、そのまま走り去っていった。

サングラスの男「……」

美少女「あの子が… 本当にそうなんですか？」

サングラスの男「ああ… 間違いない。これからは基地で彼を追い
詰めていく…」

そうすれば、彼は『次元の王候補（ディオケイター）』へと

覚醒することができるとは。だが…

奴ら『鉄血龍（オル・ドラゴン）』が動き出すまであまり時間がない。急がねばな…。」

エンマ大王「けれど… あまりやり過ぎるなよ!!」

ぬらりひよん「『次元の王候補（ディオケイター）』については、

まだまだ不明な事が多すぎるからな。」

サングラスの男「これはエンマ大王… そして、ぬらりひよん氏。」と、そこへエンマ大王とぬらりひよんが現れた。

エンマ大王「やれやれ… レグルスの奴らだけでも厄介なのに、

今度は『鉄血龍（オル・ドラゴン）』とはな…。」

ぬらりひよん「15年前に壊滅した彼らが… 何故、このタイムイングで…。」

エンマ大王「さあな。ああ、それと、一つ言っとくぜ。

もうすぐグラン・ゲインズがこの世界に到着するみたいだぜ。」

サングラスの男「本当ですか!?それは心強い…。では、例の少年も？」

ぬらりひよん「ああ。到着したらそちらへ向かうように伝えておこう。」

先ほどの少年と桑田進之介を出合わせれば、何か進展があるかもしれない。」

美少女「わかりました。心遣い、感謝致します!!」

エンマ大王「それじゃ、俺達は行くぜ。あいつらを出迎えなきゃな!!

いくぞ、ぬらり!!」

ぬらりひよん「はい、大王様!!」

と、エンマ大王とぬらりひよんは、そう言いながら、その場を去っていった。

美少女「沖原さん…。」

沖原「ああ… 我々は基地へと帰還しよう。いくぞ、美香。」
美香「はい!!」

と、『七つの大罪』のメンバーも入隊し、グラン・ゲインズはいよいよ『A・D次元第3世界』を出発し、『A・D次元第5世界』へと旅立っていた。

一方、その第5世界では、『阿久津マサト』という少年が、サングラスの男『沖原』とオレンジのロングヘアーの美少女『美香』と

呼ばれる人達に連れ去られていった。果たして、彼らは何者なのか…。

『阿久津マサト』は『次元の王候補（ディオケイター）』なのか…。

そして、『鉄血龍（オル・ドラゴン）』とは何者なのか…。

いきなり、波乱の予感が漂う展開に、

グラン・ゲインズの運命はどうなってしまうのであろうか!?

く 第24話 出発!!さらば第3世界!! く （完）

第25話 　　動き出す計画（プロジェクト） 　　

「シューーーーン。。。」

と、アルテミスは転移を終えて、『A・D次元第5世界』へと到着した。

進之介「着いたーっ!!」

マナ「ここが第5世界!!」

なぎさ「ついに帰ってきた。。。」

ナツメ「私達の世界に。。。」

キング「さっきの世界もそうだったけど、この世界もオイラ達の

世界とは全然違うね。」

ディアンヌ「本当!!大っきな建物がいっぱい建ってる!!」

ゴウセル「興味深いな。。。」

マーリン「さて、アクア殿。。。今後の我々の行動は?」

アクア「レジスタンス軍を率いているエンマ大王と会う事になってるんだけど。。。」

ここで待っていれば良いの?ナツメちゃん。。。」

ナツメ「はい!!この船は目立ちすぎるから俺達が出迎えるって言っていました。」

ラピス「そりゃ、言ってるな!!」

鬼太郎「この世界のエンマ大王って、どんな感じ何ですかね?父さん。。。」

目玉おやじ「そうじゃのう。。。ナツメちゃんの話によると、これまでの

エンマ大王のイメージとは随分、違うと言ったから
のう。」

ねこ娘「今から会うのが楽しみね!!」

オペレーター「姫様!!艦の前方に2人組が現れました。」

アクア「来たわね。。。」

エンマ大王「よう!よく来てくれたな!!歓迎するぜ。グラン・ゲインズ!!」

俺がエンマ大王だ。よろしく頼むぜ!!」

ねこ娘「えー……っ!?!」

鬼太郎「あれが……エンマ大王?」

犬山まな「めちやくちやイケメンじゃない!!」

ナツメ「フフツ……驚いたでしょう?それと隣にいるのが……」

ぬらりひよん「大王様の補佐を務めている『ぬらりひよん』だ。

よろしく頼む。」

砂かけ婆「なぬ……っ!?!」

目玉おやじ「お主が……ぬらりひよんじゃと!?!」

アニエス「何?同じ妖怪でもこの違いは……」

アデル「そうだな……」

エンマ大王「到着早々悪いが、俺達のアジトに行く前に、

『青木ヶ原樹海』へ向かってくれないか?」

アクア「青木ヶ原樹海ですか……?何故、そのような場所に……」

ぬらりひよん「君達には、そこでの警戒にあたってほしい。

敵の手から『ある物』を守る為にな……」

なぎさ「敵って……レグルス帝国軍ですよね?」

ぬらりひよん「それもあるが……本命は別の勢力だ。」

ほのか「別の勢力……何者なんですか?」

メリオダス「それに、『ある物』って何だ?」

エンマ大王「すまないが、それは言えない……」

俺達も実際に見た訳では無いからな……」

レジーナ「何よ、それ!!」

亜久里「そんな不確かな情報で動けと言うんですか!?!」

真琴「あたし達を馬鹿にしてるの!?!」

ねこ娘「ちよ……ちよつと、あんだ達!!」

ナツメ「相手は、エンマ大王様だよ……」

アクア「確かに……それだけで軍を動かすというのは……」

進之介「いいじゃない、行こうよミリカ!!」

マナ「シン!!」

アクア「シン……でも……」

亜久里「シン様が行くと言うなら、わたくしもいきますわ!!」
レジーナ「わ……わたしも!!」

真琴「……あたしもよ!!」

アニエス「わ……私も!!」

亜久里・レジーナ・真琴「えっ?」

と、アニエスを一斉に見つめる3人。

アニエス「うっ……」

と、顔を真っ赤にしながら下にうつむくアニエス。

アクア「はあ……仕方ありませんね。では、青木ヶ原樹海に向かい
ましようか。」

エンマ大王「あ……ああ。よろしく頼むぜ!!」

ぬらりひよん「では、武運を祈る。」

と、モニターが消えて、エンマ大王とぬらりひよんはその場から
去っていった。

バン「おい……何だありや?」

キング「すごい手のひらの返しようだね、あの子達……」

メリオダス「まつ、モテモテだからなシンは!!未来の王様だしよ!!」

アクア「ではこれより本艦は青木ヶ原樹海へと向かいます。」

アルテミス、発進!!」

と、グラン・ゲインズはエンマ大王の依頼で、青木ヶ原樹海へと
向かっていった。

エンマ大王「やれやれ……桑田進之介のおかげで助かったぜ。」

しかし、どこの世界でもプリキュアってのは

気が強えーな……」

ぬらりひよん「しかし大王様、よろしかったのですか?これで……」

エンマ大王「まあ……でかい賭けにはなりそうだけどな。」

後は、あいつら『ラスト・ウォーリア』が

うまくやってくれる事を祈るが……」

ぬらりひよん「ラスト・ウォーリア……そして、阿久津マサト……」

果たして、この世界の救世主となるのか……

それとも……」

一方、その頃……。

く 青木ヶ原樹海『ラスト・ウォーリア』本部 く

マサト「出せ……っ!!ここから出せよ……っ!!」

沖原「お前は、我々の実験体になる為に両親に売られたのだ。

いい加減に観念しろ……。お前にはもう帰る場所はない!!

では1時間後の実験を再開する。覚悟しておけ……。」

「ギ……っ」 「ガチャン……。」

と、沖原は独房に収容しているマサトにそう言い残し、その場から去っていった。

美香「沖原さん……。」

沖原「ああ……わかってる。しかし、もう一刻の猶予も無い。

彼には何としても、『天滅槍（ゼロライド）』を発動させて

次元の王候補（ディオケイター）になってもらわなければならぬ。

美香「それは、わかっていますが……。」

職員「沖原本部長!!青木ヶ原上空にグラン・ゲインズの

アルテミスが出現しました。」

沖原「来たか……。では行くのでしょうか。後は頼んだぞ、美香。」

美香「はい……。」

と、沖原は美香にそう言い残し、本部の外へと出て行った。

美香「……『ゼロライダー』……か……。」

く 鉄血龍（オル・ドラゴン）の要塞 く

ユラ「我らが鉄血龍（オル・ドラゴン）……復活の時は来た!!思えば15年前……」

一人の裏切り者から地に潜らねばならなくなった我ら……

そして、地の底で命を落とした前皇帝……他、多くの民人……

だが、我らは再び、機を……力を得た!!今こそ鉄血龍（オル・

ドラゴン）が

総力を挙げて、この世界を征服し……このユラがこの世界の

『王』へと君臨する!!」

?② 「だがその前に… まずは、裏切り者を処断せねば!!」

?③ 「『木羅(きら) マサキ』を…。」

?④ 「15年前… 我らから『天滅槍(ゼロライド)』を奪い去り、要塞の中枢を破壊した大罪人… 木羅マサキ!!」

?⑤ 「だが、その木羅は既に死亡している事が明らかになった。」

?③ 「奴が… 死んだ!」

?⑥ 「のたれ死んだか…。」

?⑦ 「ふさわしいな…。」

?⑤ 「残された使命は… 『天滅槍(ゼロライド)』の奪還あるのみ!!」

ユラ 「鉄血龍(オル・ドラゴン)が誇る七龍星(セブン・シユテルン)が強者達よ!!」

我こそはというものは居らぬか…?」

ドーカベン 「その役目… 『地龍』のドーカベンが!!」

リ・アイン 「いいえ!! 『炎龍』のリ・アインと!!」

リ・マイン 「『氷龍』のリ・マインが!!」

リ・アイン&リ・マイン 「賜りたく存じます!!」

バルキリス 「この『雷龍』のバルキリスにお任せを!!」

エグザイム 「『天滅槍(ゼロライド)』を奪還し、敵を殲滅せよとのご命令ならば… この『白龍』のエグザイムが必ず

や…。」

ヴァンスター 「鉄血龍(オル・ドラゴン)の初勝利は…」

この『風龍』のヴァンスターがもたらしましょう…。」

ユラ 「… ガロンはどうじゃ?」

ガロン 「この『黒龍』のガロン… まだ私が出る幕ではない…。」

と、ユラの問いに七龍星(セブン・シユテルン)最強の

『黒龍』のガロンがそう答えた。

ユラ 「… 『風龍』のヴァンスター!! 『天滅槍(ゼロライド)』は

現在、日本政府の管理下にある。奪還… あるいは破壊を命じよ

う!!」

ヴァンスター 「… はっ!!」

「シューーーーン……」

と、ユラはヴァンスターにそう命じると、その場から姿を消した。ガロン「冷たいお方よ……死ぬかもしれない戦に、わざわざ」

己が愛しき者を選ぶとは……」

リ・アイン&リ・マイン「フフフ……」

エグザイム「できれば……私まで回していただきたいものだな……」

ヴァンスター殿。」

ヴァンスター「……できぬ相談だ。」

「ザッ……ザッ……ザッ……」

と、ヴァンスターはそう言いながら、その場から去っていった。

バルキリス「ご寵愛を受けているからといって、調子に乗り追つて……」

ドーカベン「だが……ユラ様のお言葉には逆らえん。」

リ・アイン「だが、相手は……」

リ・マイン「次元の王候補（デイオケイター）か……」

「ザッ……ザッ……ザッ……」

と、他の七龍星（セブン・シュテルン）もそう言いながら

その場から立ち去って行った。

そして……『風龍』のヴァンスターが青木ヶ原樹海へと

出撃しようとしていた。

ヴァンスター「お気持ちは……わかっているつもりです。」

鉄血龍（オル・ドラゴン）の長を愛するに足る

男かどうか……身をもって証明せよと言われるので

すね……」

私は必ず使命を果たして参ります。

只……一言そうだと……この身を愛するからこそ……

出撃を命じられたのだと……おっしゃっていただけ

れば、

私は……」

ユラ「思いあがる出ない!!誰に申しておるのか……?」

ヴァンスター「ユラ様……」

ユラ「七龍星（セブン・シユテルン）は我が手足…

我が命令に従っておれば良い!!」

ヴァンスタター「…了解いたしました。では、『風龍』のヴァンスタター…

出撃いたします!!」

「ゴオーーーーーーッ…。」

と、ヴァンスタターはユラに見送られながら、出撃していった。

ユラ「…許せヴァンスタター… 私は鉄血龍（オル・ドラゴン）の長…。」

あなただけに出撃するなど言えない…。

生きて帰れとは言えなかった…。」

と、ヴァンスタターが青木ケ原樹海へと出撃し、ついに鉄血龍（オル・ドラゴン）が

本格的に動き出すのであった。そして…

く レグルス帝国軍基地『ラー・パレス』く

ラー・カイン「鉄血龍（オル・ドラゴン）が動き出したけど？」

レグルス「はっ!!先程入った情報ですが、鉄血龍（オル・ドラゴン）の

要塞から、七龍星（セブン・シユテルン）の1人が高速で飛び立ち、

青木ケ原樹海へと向かっていったとの事であります!!」

ラー・カイン「青木ケ原樹海か… よし、『デューク』はおるか？」

デューク「はっ!!」

そして、親衛隊（ホワイト・ナイツ）の1人であるデュークが姿を現した。

ラー・カイン「デュークよ… 青木ケ原樹海へと向かえ。

おそらく『天滅槍（ゼロライド）』もそこにある可能性が高い。

鉄血龍（オル・ドラゴン）… そして、グラン・ゲインズ…

奴らより先に手に入れて参れ。兵なら幾らでも連れ

ていくがいい。

何なら… 例の『試作品』を投入しても構わぬぞ。」

デューク「はっ!!このデューク… 身に余る光栄であります!!

それでは遠慮なく使わせていただきます。

では、出撃いたします!!」

「シューーーーーーン…。」

そして、デュークはそう言いながら、背後に時空の歪みを

出現させて、その場から姿を消した。

ゴクウブラック『『天滅槍（ゼロライド）』か… 確か、破壊剣（ラ
グナロク）と

同じ、次元の王の力を宿した武器だったな…。」

ラー・カイン「ブラック… そして、ザマスよ… 来ておったか。」

ザマス「例の人間達も現れた様だな… 私達も行かせろ。」

「今度こそ、奴らを滅ぼしてくれる…。」

ラー・カイン「お前達が動くのはまだ早い…。それに、『天滅槍（ゼ
ロライド）』

については、まだ不明な点があるからな… 待機を命
ずる。」

ザマス「ちっ…。」

ゴクウブラック「そうぼやくな… 奴らが逃げる訳では無いだろう
からな。」

仕留める機会はず来る。」

ラー・カイン「さて… どう動く? 鉄血龍（オル・ドラゴン）…

そして、グラン・ゲインズよ…。」

と、ラー・カインも親衛隊（ホワイト・ナイツ）の1人であるデュー
クを

出撃させて、鉄血龍（オル・ドラゴン）… そして、

グラン・ゲインズの動向を探りにかかった。

く 青木ヶ原樹海上空 く

アクア「ここが青木ヶ原樹海ね…。」

メリオダス「何もねーじゃねーか…。」

ナツメ「エンマ様は、何を考えているんだろう…?」
オペレーター「姫様!!通信が入っています!!」

アクア「繋いでちょうだい。」

沖原「グラン・ゲインズの方々ですか?」

アクア「そうですけど…あなたは?」

沖原「私は日本政府直轄組織『ラスト・ウォーリア』本部長の

沖原と申します。」

アクア「私は、次元管理局直属独立外部部隊『グラン・ゲインズ』の

部隊長…アクア・マキキュリーです。」

マナ「ラスト・ウォーリア…?」

なぎさ「そんな組織があったの?」

ほのか「わたしも聞いた事は無いけど…。」

沖原「ところで…桑田進之介君はどちらですか?」

アクア「シン…ですか?」

進之介「僕ならここにいます。」

レイス「我が主に何の用かな?それに、何故君が

彼の事を知ってるんだい…。」

沖原「彼にはある人物と面会してもらいたいです。

それ以上の事は話せません。」

バン「ああ?何だそりゃ!」

キング「どういう事さ!」

マーリン「確かに…話が一方的すぎるな…。」

亜久里「シン様!!行く事はありますわ!!」

レジーナ「そーよそーよ!!」

真琴「どう考えても怪しすぎるわ!!」

アニエス「わ…私もそう思う!!」

進之介「いいよ。行くよ!!」

マナ「やっぱりね!!」

ねこ娘「でも…いくら何でも人が良すぎるわよ。」

アクア「はあ…仕方ないわね…わかりました。今から

彼を降ろしますので、よろしく願います。」

沖原「了解しました。ご協力、感謝いたします。」
進之介「それじゃ、行ってくるね!!」

「シューーーーン……」

と、進之介はアルテミスから降りて、沖原と合流し、ラスト・ウオーリアの基地へと向かっていった。

鬼太郎「父さん……シンに会わせたい人物って一体……？」
目玉おやじ「まさかとは思うが……」

さくら「次元の王候補（ディオケイター）……ですか？」
レイス「そう考えてまず間違いないだろうね。」

まさか、これほど早く見つかるとは……。
「ディアヌ「あの子……大丈夫かな……？」」

メリオダス「シンなら心配いらねーよ。俺達はいつでも出られるよ
うに」

待機しておこうぜ!!」

ラピス「そういや、あのデカイオツサンは何処に行ったんだ？」
キング「でかいオツサン？」

ゴウセル「エスカノールの事か？」

マーリン「フツ……エスカノールなら、お前の隣に居るぞ。」
ラピス「えっ？」

エスカノール「ど……どうも……」

と、ラピスの隣には小柄で貧弱な体になったエスカノールが立って
いた。

さくら「ほえーーーーーっ!!」

ケロベロス「こいつが……あの大男やて!？」
メリオダス「そういや、今はもう夜だったな。」

小狼「どういう事だ？」

バン「エスカノールは昼間は筋骨隆々の大男で夜になったらご覧の
通り。」

最強から最弱になるブツ飛んだ野郎だ!!」

アキノリ「ますます訳わかんねえ……」

砂かけ婆「妖怪にもそんな奴は居らんぞい……」

アデル「何かの呪いなのか…?」

メリオダス「もし、敵が現れてもエスカノールは待機決定だな!!」
エスカノール「はは…生きていてすみません…。」

ひかり「い…いえ!!」

と、エスカノールが深々と頭を下げると、ひかりも慌てた様子で頭を何度も下げた。

六花「…傲慢とは程遠いわね…。」

ありす「でも、あれはあれでちよつと…。」

真琴「あたし…このまま勝負しても勝てそうだもん…。」

「ファンファンファンファン!!」

アクア「!!!」

アンズ「警報!」

リータ「敵襲ですか!」

犬山まな「アルテミス周辺に敵影多数!!これは…レグルス帝国軍です!!」

ラピス「さっそく出てきやがったか!!」

マナ「って…まなちゃん?」

ねこ娘「あなた、何やってんの?」

犬山まな「わたし…戦う事ができないから、せめてこの位はと
思っ、オペレーターに志願したの!!」

鬼太郎「まな…。」

目玉おやじ「まなちゃん…ありがとう。」

一反もめん「連邦軍の制服も似合うとるばーい!!」

アデル「アニエス、行くぞ!!」

アニエス「はい、お姉様!!まな…行ってくるね!!」

犬山まな「行ってらっしゃい!!」

バン「さてと、俺達もいくか♪」

キング「グラン・ゲインズとしての初仕事だね!!」

ディアンヌ「よーし…張り切っていくぞー!!」

ゴウセル「おーっ!!」

ホーク「お前ら、気合入れて行けよ!!」

エスカノール「みなさん…気を付けてください…。」

さくら「私達も行くこう!!小狼君!!ケロちゃん!!」

ケロベロス「おう!!」

小狼「ああ!!」

知世「さくらちゃんの活躍…ビデオにばっちりと収めますわ!!」

マーリン「さくら…。」

さくら「マーリンさん…どうしたんですか?」

マーリン「私と組んでみないか?」

さくら「マーリンさんと…ですか?」

小狼「どういう事だ?」

マーリン「お前の持つクリアカードとやらに興味を持ってな…

間近で見えてみたいと思ったのさ。そして…

お前も私に興味を持ったと思ってな。」

ケロベロス「:(確かに、この姉ちゃんの魔力…どこかクロウに似とるな。

ひよつとしたら、さくらもこの姉ちゃんに…)」

さくら「はい!!わたしで良ければ、一緒に戦いましょう!!」

マーリン「フッフ…そう来なくてはな…。では行くか、さくら

!!」

さくら「はい!!よろしくお願いします、マーリンさん!!」

エリザベス「メリオダス様…気を付けて!!」

メリオダス「ああ…任せとけて!!」

アクア「では、総員…出撃してください!!」

一同「了解!!」

と、非戦闘員を除くメンバー全員が

アルテミスから出撃していった。そして…。

↳ ラスト・ウォーリア基地内部 ↳

職員「阿久津マサト、出る…。」

マサト「…どうかしたんですか?」

職員「敵襲らしい…お前を別の場所へと連れていく。早くしろ!!」

マサト「わかりまし… た!!」

「ドカツ!!」

職員「ぐわっ!？」

と、マサトは職員をタックルを浴びせる。そして、
怯んだ隙に拳銃を奪い、職員へと突き付けた。

職員「き… 貴様…。」

マサト「おっと、動くなよ… 今の僕はあなたを殺す事に

何にも感じないからな!!」

「ダダダダダダダ…。」

と、マサトはそう言いながらその場から走って逃げ去った。

沖原「何? そうか… では彼を例の場所へと誘導しろ。」

進之介「… どうしたんですか?」

沖原「いや、大したことはない。それより、君に見せたい物がある。

付いてきてくれたまえ…。」

進之介「は… はい。」

と、進之介は沖原に連れられて、ラスト・ウォーリアの基地へと入っていった。

マサト「くっ?!? ここもダメか… んっ? あそこは行けそうだな。」

「ダダダダダダダダ…。」

と、通路を塞がれて袋のネズミになっていたマサトが行けそうな通路を駆け出して行ったその時…。

「ガチャン!!」「ヒューーーーーーン…。」

マサト「うわーーーーーっ!! お… 落ちる!! ぶつか
るーーーーーっ!!」

と、突如、通路の落とし穴が開いて、マサトが落ちていった。

そして、地面に激突しそうになった瞬間…。

「ピカーーーーーーッーン!!」

マサト「な… 何だ、この光は!？」

と、地面から突如、光が発生し、マサトを包み込んだ。
すると、落下が止まり、宙に浮いた状態になっていた。

美香「マサト君…聞こえる？」

マサト「君は…あの時の女の子!？」

美香「おめでどう!!君は『天滅槍（ゼロライド）』の契約者に選ばれたのよ!!そして、君にはこれから…」

『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』に

なってもらわ!!」

マサト「『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』

…ゼロライザーだって!？」

と、グラン・ゲインズは『A・D次元第5世界』に到着早々、エンマ大王からの依頼で、青木ヶ原樹海にて『ラストウォーリア』という組織の防衛任務を行う事になった。

果たして、ラストウォーリアの目的とは…

又、『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』とは…

そして、そのラスト・ウォーリアの基地に鉄血龍（オル・ドラゴン）七龍星（セブン・シュテルン）の一人、『風龍』のヴァンスターとレグルス帝国軍親衛隊（ホワイト・ナイツ）の一人であるデューク
の

魔の手が近づこうとしていた。

グラン・ゲインズのメンバーは見事、敵を退け、

ラスト・ウォーリアを守り抜く事が出来るのであろうか!？」

第25話　　動き出す計画（プロジェクト）　　（完）

第26話

開戦!! 樹海の大激闘!!

レグルス兵の集団「……………」

メリオダス「こりやまたゾロゾロと出てきましたなーつ。」

マナ「よーし…みんな、変身よ!!」

なぎさ・ほのか・ひかり「うん!!」

六花・ありす・真琴・亜久里「うん!!」

ディアンヌ「…何が始まるの?」

ゴウセル「変身…?」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

ひかり「ルミナス・シャイニング・ストリーム!!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア・ラブリンク!!」

亜久里「プリキュア・ドレスアップ!!」

と、マナ達プリキュアは、いつもの様に変身を始めた。

キュアブラック「光の使者…キュアブラック!!」

キュアホワイト「光の使者…キュアホワイト!!」

キュアブラック・キュアホワイト「ふたりはプリキュア!!」

キュアホワイト「闇の力のしもべ達よ!!」

キュアブラック「とつととお家に帰りなさい!!」

シャイニールミナス「輝く命…シャイニールミナス!!」

光の心と光の意思…全てを一つのする為に

!!

キュアハート「みなぎる愛…キュアハート!!」

キュアダイヤモンド「英知の光…キュアダイヤモンド!!」

キュアロゼッタ「陽だまりポカポカ…キュアロゼッタ!!」

キュアソード「勇気の刃…キュアソード!!」

キュアエース「愛の切り札…キュアエース!!」

5人「響け!愛の鼓動!ドキドキ!プリキュア」

バン「あん?何だありや…。」

キング「あの子達、変身して戦うみたいだね!!」

ディアンヌ「すごい!!」

マーリン「なるほど、あれがプリキュアとやらか……。」

さくら「はい!!プリキュアはわたし達の世界では英雄なんです!!」

ナツメ「召喚!!私の友達……。出てこいジバニャン!!」

ジバニャン「ツシャーーーーーッ!!」

トウマ「憑依!!剣武魔神、阿修羅……。我に力を!!」

阿修羅「阿修羅……。参上!!」

アキノリ「妖怪ウオッチアニマス……。来い、幻獣朱雀!!」

朱雀「朱雀……。参上!!」

と、ナツメ達もそれぞれ妖怪を出現又は憑依させたその時……。

「ドオーーーーーッ!!!」

小狼「な……。何だ、この気配は?」

ケロベロス「何か来るで!!」

「シューーーーーーッ……。」

デューク「……。」

ラピス「あ……。あいつは!!」

鬼太郎「確か、ラー・カインと一緒にいた……。」

ナツメ「親衛隊（ホワイト・ナイト）……。デューク!!」

と、空間の歪みから凄まじい気配を放ちながら、

親衛隊（ホワイト・ナイト）の1人であるデュークが姿を現した。

デューク「よく来てくれましたね、グラン・ゲインズ。

我々の世界へようこそ……。歓迎の意を込めて、

この私デュークと、500人の兵がおもてなしをしましよ

う!!」

アキノリ「ふぎけるな!!何が我々の世界だ!!」

アデル「そう言っていてられるのも今の内だ。」

アニエス「覚悟しなさい!!」

デューク「フフツ、威勢だけは良いようですね……。

では、みなさん……。客人をたっぷりと

おもてなしして差し上げなさい!!」

レグルス兵の集団「オオオオオオーーーーーッ!!!」

「バババババババババッ!!!」

!!!!!!

と、デュークの合図と共に、500人のレグルス兵が、
一斉にグラン・ゲインズのメンバーに襲い掛かった。
メリオダス「来るか・・・行くぞ、みんな!!」

一同「おう!!」

一方、その頃ラスト・ウォーリアの基地では・・・。

ラスト・ウォーリア基地内部

進之介「あれは・・・まさか!？」

沖原「察しの通りだ。あれは『天滅槍（ゼロライド）』・・・

君が持つ『破壊剣（ラグナロク）』と同じ、

次元の王の力を宿した武器だ。」

マサト「何だ・・・僕はこれを知っている・・・何故なんだ!？」

美香「マサト君・・・敵がそこまで来ています。変身しましょう!!」

マサト「変身って・・・どうするんだよ!?!それに、敵って・・・。」

美香「大丈夫・・・私を信じて!!」

進之介「あの2人は・・・?」

沖原「少年の方は『阿久津マサト』・・・たった今、『天滅槍（ゼロライド）』の

契約者になった者だ。少女の方は『小室美香』・・・彼女は

『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』のサポート

役だ。

進之介「『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』!？」

美香「天滅槍（ゼロライド）・・・解放!!」

「パァーーーーッ!!!」

と、美香がそう叫ぶと、天滅槍（ゼロライド）が光の粒子に変化してマサトを包み込んだ。

マサト「ええい・・・こうなればヤケだ。変身!!」

「バァーーーーッ!!!」

進之介「うわっ!？」

沖原「ついに始まったか!!」

と、マサトの周辺から眩い光が発生し、光が消えるのと同時にマサトと美香はその場から姿を消した。

進之介「消えた…。」

沖原「後は頼んだぞ… 『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』!!」

そして…

く 青木ケ原樹海 く

キュアブラック「はぁーっ!!」

キュアホワイト「やぁーっ!!」

キュアハート「プリキュア・ハートシユート!!」

キュアダイヤモンド「プリキュア・ダイヤモンドシャワー!!」

キュアロゼッタ「プリキュア・ロゼッタリフレクシヨン!!」

キュアソード「プリキュア・スパークルソード!!」

キュアエース「ときめきなさい! エースショット! ばつきゅん!!」

レジーナ「ミラクルドラゴングレイブ… 行っけーっ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

レグルス兵の集団「うわーっ!!」

鬼太郎「髪の毛針!!」

ねこ娘「うにゃーっ!!」

子泣き爺「ふぎやく! ふぎやく!」 「ドオオオオオーン!!」

砂かけ婆「これでも喰らえ、砂つぶて!!」

ぬりかべ「ぬりかべーっ!!」

「ババババババババツ!!」

レグルス兵の集団「ぐあーっ!!」

ジバニヤン「百猫烈弾!!」

阿修羅「そーらよつと!!」 「ゴオオオオオオツ!!」

朱雀「喰らえ!!」 「ブワオオオオオツ!!」

レグルス兵の集団「ぶひーっ!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーはレグルス兵の集団を次々と蹴散らしていった。

バン「へえ… やるじゃねえか!!」

キング「オイラ達も負けてられないね!!」

レグルス兵「グラン・ゲインズめ、調子に乗りおつて……。

こうなれば……『パージ』!!」

「ガシャン!!ガシャン!!」

と、レグルス兵の集団は身に着けていた鎧を外し、軽装になった。キュアハート「あつ……みんな、気を付けて!!」

鬼太郎「あれが来るぞ!!」

レグルス兵の集団「アクセル・アップ!!」

「シユン!!シユン!!シユン!!シユン!!シユン!!」

と、レグルス兵の集団は一齐に『アクセル・アップ』を発動させて、高速攻撃を仕掛けるが……。

鬼太郎「その手はもう通じないぞ!!体内電気!!」

ねこ娘「その通りよ!!うにゃーっ!!」

アデル「行くぞ、アニエス!!」

アニエス「はい、お姉様!ダイナバ・ミ・トーチ!!」

ゴウセル「ただ速いだけではな……双弓ハーリット!!」

ディアンヌ「双子の虚像(フィレアンドロス)……行っけえーっ

!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!」

と、アクセル・アップは最早、グラン・ゲインズには通用せず、次々と返り討ちにしていくメンバー達。

メリオダス「こりゃ、みなさん派手ですなーっ!!」

レグルス兵①「何、余裕かましてやがる!」

レグルス兵②「死ねーっ!!」

メリオダス「さてさてさーて!誰に言っているのかな?」

「ズバババババババババツ!!」

レグルス兵①「ぐわーっ!!」

レグルス兵②「ぎゃーっ!!」

と、襲い掛かってくるレグルス兵をメリオダスはあっさりと返り討ちにした。

レグルス兵③「こ……こいつら……。」

レグルス兵④「ば……化け物か!」

レグルス兵⑤「ひ… 怯むな!!行くぞ!!」

キュアダイヤモンド「まだ来るの!?!」

キュアソード「しつこいわね!!」

キュアハート「こうなったら… みんな、行くよ!!」

と、キュアハートがマジカルラブリートハーブの弦を弓引くと、

5人はエンジェルモードとなった。

そして、空中で陣形を組み立てると…。

5人「プリキュア・ロイヤルラブリートフラッシュ!!」

「ドドドドドドドドドドッ!!」

レグルス兵の集団「うわーーーーーっ!!

ラーブラーブラーラーっ!!」

「ドドドドドドドドドドッカーーーーーーん!!!」

と、プリキュア・ロイヤルラブリートフラッシュによつて、

残っていた全てのレグルス兵は一掃された。

キュアハート「やったーっ!!」

キュアダイヤモンド「ふう…。」

キュアブラック「これで、後は…。」

キュアホワイト「デュークだけね!!」

シャイニールミナス「このまま、一気に押し切りましょう!!」

デューク「やれやれ… やはり前菜(ザコ)だけでは満足頂けませ

んでしたか。

では、続いて… 副菜(試作品)と行きましょうか!!」

「パチン!!」「シューーーーーーん…。」

レグルス兵10人「…。。。」

と、デュークはそう言いながら、新たにレグルス兵を10人出現さ

せた。

だが、そのレグルス兵は今までのタイプとは様子が違っていた。

ナツメ「また出てきた!!」

レジーナ「でも、相手はたったの10人じゃない!!」

アニエス「早く片付けちゃいましょう!!」

小狼「… あれは!?!」

レイス「『トランザムシステム』を使用できる。

能力を格段に向上させる事ができるんだ。」

メリオダス「それを早く言えって!!」

マーリン「団長殿!!」

メリオダス「どうした、マーリン。」

マーリン「あの者達は我々に任せて、団長殿はデュークの相手を!!」

メリオダス「わかった。気をつけろよ!!」

マーリン「ああ。バン! キング! デイアンヌ! ゴウセル! お前達も

団長殿の加勢を!!」

バン「りょーかい♪」

キング「わかった!!」

デイアンヌ「よーし!!」

ゴウセル「任せてくれ。」

マーリン「では行くぞ!!」

「パチン!!」「シユン!!」

マーリンは指を鳴らして、メリオダス達をデュークの近くへと瞬間移動させた。

デューク「んっ?」

「ガキーーーーー!」

メリオダス「お前の相手は俺達だ!!」

デューク「ほう… あなた達は確か、七つの大罪の皆さんでしたね…。」

レグルス兵（トランザム）「ハハハハハッ!! 死ねーーーーっ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドド!!」

と、トランザムシステムを^{!!!}発動させたレグルス兵10人は、引き続き

猛攻を仕掛けていた。グラン・ゲインズのメンバーはその超高速の動きを

捉えきれずに、成す術なく攻撃を受け続けていた…。

アニエス「お… お姉様…。」

アデル「ア… アニエス…。」

キュアホワイト「動きが…速すぎる…。」

キュアブラック「一体、どうしたら…。」

レグルス兵（トランザム）「そらそら、どうした!!」

「ガガガガガガガガッ!!」

鬼太郎「ぐう…。」

子泣き爺「ひ…ひいっ!!」

砂かけ婆「お…おんどれーっ!!」

マーリン「…さくら!!」

さくら「マーリンさん？」

マーリン「長引けばこちらが持たない。まとめて

片付けるぞ。奴らを引き付けられるか？」

さくら「はい!!これなら…『重力（グラビテーション）』!!

「キーーーーーッ!!」

と、さくらはレグルス兵を引き付けようと

重力（グラビテーション）のカードを発動させるが…。

ケロベロス「あかん!!こんなじゃ足りんで!!」

マーリン「いや、これで良い…。」

小狼「えっ!？」

マーリン「魔力増強（パワーアンプリファイ）!!」

「ドオーーーーッ!!」

と、マーリンはさくらに魔力増強（パワーアンプリファイ）をかけて、

重力（グラビテーション）の威力を増幅させた。

すると、レグルス兵がさくらの近くにまで吸い寄せられていく。

レグルス兵（トランザム）「な…何?うわーーーーっ!!」

小狼「す…すごい!!」

ケロベロス「これなら行けるで!!」

マーリン「さくら…今だ!!」

さくら「はい!!火焰（ブレイズ）!!」

マーリン「殲滅の光（エクスターミネイトレイ）!!」

「ドオーーーーッ!!」

メリオダス「…それなら!!」

「キーーーーーン!!」

デューク「ほう…魔神族の力ですか…面白い!!」

メリオダス「神千斬り!!」

「ズババババババツ!!」

と、メリオダスは魔神族の力を発動させて、

神千斬りでデュークを攻撃するが…。

デューク「ですが無駄です。『反射鏡（ミラー・フォース）!!」

「ズババババババツ!!」

メリオダス「うわーーーーーっ!!」

バン「团长!!」

キング「メリオダス!!」

ラピス「メリオダスの攻撃でも通じないのかよ!?!」

アンズ「どうすれば…。」

キュアハート「…。」

キュアダイヤモンド「ハート…どうしたの?」

キュアハート「もしかしたら…行けるかもしれない!!」

キュアソード「ハート!?!」

キュアハート「プリキュア・ラブリバース!!」

「キーーーーーーン!!」

と、キュアハートはリバーシアウオッチを前方にかざして発動させると、眩い光に包まれて、

キュアハート・リバーシアへと転生した。

キュアハート・リバーシア「みなぎる愛と力の女神…ここに転生せん!!」

キュアハート・リバーシア!!」

キュアブラック「待ってました!!」

キング「す…すごい!!」

マーリン「あの力は、まさか…。」

キュアハート・リバーシア「メリオダスさん!!」

メリオダス「お前…その姿は?」

く アルテミスブリッジ く

アクア「さすがにやるわね、親衛隊（ホワイト・ナイツ）……。」

ホーク「メ……メリオダス達相手にたった1人で……。」

エリザベス「強敵ですね……。」

ねずみ男「や……やばすぎだろ、あんにやろう……。」

犬山まな「アクアさん!!」

アクア「どうしたの!？」

犬山まな「識別不明の何者かが超高速でこちらに飛来してきます!!」

知世「レグルス軍でしょうか……?」

アクア「いえ、違うわ。あれは多分、エンマ大王が言っていた……。」

く アルテミスの外 く

「ブオー………!!!」

ナツメ「キヤー………ッ!!」

阿修羅「何だ、この突風は!？」

朱雀「くっ……。」

さくら「ほえ………っ!!」

ケロベロス「これは……ただの風やな………い!!」

メリオダス「……来るぞ!!」

「バァ………ッ!!」

ヴァンスター「……。」

と、青木ヶ原樹海に突如、突風が吹き荒れた。そして、

突風が止んだのと同時に、鉄血龍（オル・ドラゴン）

七龍星（セブン・シユテルン）の1人である

『風龍』のヴァンスターが姿を現した。

アニエス「こ……今度は何よ!？」

キュアエース「レグルスの増援でしょうか……?」

マーリン「いや……どうやら別の勢力の様だな……。」

デューク「やれやれ……もう現れてしまいましたか。」

鉄血龍（オル・ドラゴン）七龍星（セブン・シユテルン）の

1人……

『風龍』のヴァンンスターさん…。」

キュアブラック「鉄血龍（オル・ドラゴン）…？」

キュアホワイト「七龍星（セブン・シュテルン）…？」

キュアハート・リバーシア「『風龍』のヴァンンスター!？」

ヴァンンスター「レグルス帝国軍…そして、あれがグラン・ゲインズと

やらか…だが、今の私の使命は『天滅槍（ゼロライド）の（ド）の

奪還のみ!!悪いが、お前達の相手をしている暇は無い。」

ラピス「こつちも悪いんだけど、お前を行かせる訳にはいかねーんだよ!!

行くぞ、アンズ、リータ!!」

アンズ「うん!!」

リータ「わかりました!!」

ヴァンンスター「ならば仕方あるまい…暴風（タイ・フーン）!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

ラピス「うわーーーーーッ!!」

アンズ「こ…これは!？」

リータ「これでは…近づけません!!」

メリオダス「参ったな、こりや…。」

ヴァンンスター「このまま大人しくしているがいい…。」

さて、『天滅槍（ゼロライド）』はどこだ…？」

と、ヴァンンスターがグラン・ゲインズのメンバーの動きを封じて

『天滅槍（ゼロライド）』を捜索に向かったその時…。」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、地面の下から光の柱が天に昇っていき、中から人影が出現した。そして、その姿は白銀の鎧の様な物で全身を覆われて、胸部に光球がついていた。

その名も…『次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザー』である。

アクア「沖原さんから通信があつて、ゼロライザーの戦いには
手出し無用ですつて……。」

キュアハート・リバーシア「ゼロライザー……?」

レイス「あの次元の王候補(ディオケイター)の名前か……。」

ねこ娘「でも……あれじゃ、やられちゃうわよ!!」

ゼロライザー(マサト)「くっ…… うおおおおっ!!」

「ドシューーーーーーッ!!」

と、ゼロライザーは気を高めると、竜巻波(トルネード・バスター)
を

吹き飛ばした。

ラピス「あの風を……簡単に吹き飛ばしやがった!!」

アンズ「すごいパワーね……。」

リータ「シンに勝るとも劣りませんわね……。」

美香の声「そう!!その調子よ、マサト君!!」

ゼロライザー(マサト)「何故だ……?僕はこの力を知っている……

……という事だ……。」

ヴァンスター「吹き飛ばしただと……ならば、これでどうだ!

風神刃(ストーム・チェイン)!!」

「ズバーーーーーーッ!!」

ゼロライザー(マサト)「くっ!」

「キーーーーーッ……。」

ゼロライザー(マサト?)「フン……。」

「バーーーーーッ!!」「ドドドドドドドッ!!」

と、ヴァンスターは続いて、風神刃(ストーム・チェイン)と
呼ばれる巨大な風の刃を放つが、その時、マサトの目の眼光が
突如、鋭くなると、自身の周りにバリアを張り、相殺した。

マーリン「ほう……。」

キュアエース「あんな強力なバリアが張れるんですか!」

アクア「……。」

メリオダス「どうした…… ミリカ?」

アクア「ほんの一瞬だけど、あの人…… 気配が変わらなかった?」

「ブオーーーーーーッ!!」

さくら「ほえーーーーーッ!!」

小狼「な…何だこれは!」

ケロベロス「こりや…ヤバすぎるで!!」

ヴァンスター「ゼロライザー…覚悟せよ!!大暴風(グレート・タイ・フーン)!!」

「ゴオーーーーーーッ!!」

ゼロライザー(マサト)「うわーーーーーッ!!」

美香の声「マサト君!!」

と、ヴァンスターは最強技である大暴風(グレート・タイ・フーン)を

ゼロライザーに向けて放ち、直撃させた。

メリオダス「おい…やべえぞあれ…」

キュアホワイト「このままじゃあ…」

キュアブラック「あの人…死んじゃうよ!!」

デューク「やれやれ…あつけないものですね…」

ラスト・ウオーリア基地内

沖原「くっ…」

進之介「このままじゃ…やられちゃう!!」

青木ケ原樹海

ヴァンスター「このまま戦闘不能にして、運び去ってくれる…」

ゼロライザー(マサト)「…」

美香の声「マサト君!!しっかりして…マサト君!!」

ゼロライザー(マサト?)「…勝てる…」

「ブオーーーーーーッ!!」

ヴァンスター「な…何だと!」

と、又も、マサトの眼光が鋭くなると、ゼロライザーの体から凄まじいオーラが発生する。そして、空から白銀の長い槍が

出現して右手に掴むと、大暴風(グレート・タイ・フーン)が消滅した。

ゼロライザー(マサト?)「フン…来たか天滅槍(ゼロライ

ド)。。。」

ナツメ「槍が。。。出てきた。。。」

鬼太郎「それだけじゃないよ。。。」

メリオダス「さつきミリカやマナが言った通り。。。気配が明らかに変わった!!」

マーリン「何だ。。。この禍々しい気配は。。。まるで別人だな。」

アクア「。。。とりあえず、様子を見ましよう。」

ゼロライザー(マサト?)「風か。。。フン。。。その程度の力でこの俺を

倒すつもりか?随分となめられたものだな。」

美香の声「マサト。。。君?」

ゼロライザー(マサト?)「罰として。。。塵一つ残さず、消滅させてやる。」

「ドオーーーーーーッ!!」

と、ゼロライザーは、天滅槍(ゼロライド)を強大なオーラに変化させると、

両手に纏った。そして、胸部にある光球に両手を重ね合わせると、凄まじい威力のエネルギーが発生する。

バン「お。。。おい。。。何だありや。。。」

キング「パワーがどんどん膨れ上がっていく。。。」

メリオダス「みんな!離れろ!!」

ゼロライザー(マサト?)「『王』の力の前に消え去るがいい。。。」

天滅波動撃(ゼロ・スレイブ)!!

「ブオワーーーーーッ!!」

ヴァンスター「負けられない。。。この戦だけは。。。ユラ様ーーーーーッ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーッ!!!」

ゼロライザーの必殺技である天滅波動撃(ゼロ・スレイブ)の直撃を受けた

ヴァンスターは最期までユラへの愛と忠誠を誓いながら、

跡形もなく消滅していった……。

ラピス「い……一撃かよ……。」

キュアダイヤモンド「何て……威力なの……。」

メリオダス「おいおい……マジかよ……。」

アキラ「あ……あの力は……まさか……。」

レイス「ああ……『次元力』の様だね……。」

ゼロライザー（マサト？）「くつくつく……勝ったぞ……勝った……。」

美香の声「マサト君!!怪我はない!!」

ゼロライザー（マサト）「はっ!?ぼ……僕は一体何を……教えてくれ……。」

ゼロライザー……ゼロライザーって、

何だ……!!!

デューク「どうやら今日の所はここまでの様ですね……。」

グラン・ゲインズ……そしてゼロライザー……

またお会いしましょう……。」

「シュー……。」

と、デュークはそう言いながら、空間の歪みを発生させて、姿を消していった……。

く ラスト・ウォーリア基地内 く

沖原「成功だ!!我が国は……最強の力を手に入れた!!」

進之介「……。」

と、第5世界での初戦闘は、グラン・ゲインズの勝利で幕を閉じた。

しかし、次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザーとは何か……。

そして、阿久津マサトの突然の豹変は何なのか……。

更に謎が深まったラスト・ウォーリアとゼロライザーは

果たして、敵か味方か……

これからの戦いの行く末はどうなってしまうのか!?

第26話

く

開戦!! 樹海の大激闘!!

く

(完)

第27話 〽 疑惑と謎 〽

〽 ラスト・ウォーリア基地内 〽

沖原「これが君だ。阿久津マサト君……。」

マサト「これが……僕？」

と、マサトは沖原そして美香と共に、15年前の記録映像を見ていた。

そしてそこには、研究者達が試験管ベビーを作り出している所だった。

マサト「僕が試験管ベビーだったって……そういう事ですか!？」

沖原「君はある目的の為に、純粹培養された唯一の個体なのだ……。」

美香「次元の王候補（ディオケイター）となる為にね。」

マサト「……………」

〽 鉄血龍（オル・ドラゴン）要塞 〽

ユラ「……………」

リ・アイン「ヴァンスターが死んだ……。」

リ・マイン「ゼロライザー……まさかこれほどの力とはな……。」

ドーカベン「ユラ様!!次こそはこの私に出撃の命を!!」

バルキリス「いいえ!!このバルキリスに!!」

エグザイム「奴の首は……この私が!!」

ユラ「皇帝になるまでは……私も七龍星（セブン・シユテルン）の1人だった……。」

そして……天滅槍（ゼロライド）は本来ならば、私の物となるはずだった……。

次は……私が出る!!」

一同「!!!」

と、ユラの言葉に驚きを隠せない七龍星（セブン・シユテルン）の一同であった。

〽 アルテミスブリッジ 〽

ラピス「……………」

メリオダス「……………」

鬼太郎「……………」

さくら「……………」

ホーク「みんな、どうしちまったんだ？黙り込んでしまったよ……」

せつかく勝ったつてのによ……」

ケロベロス「当たり前や。あんな化けもんみたいな力を見た後やで……」

マーリン「ゼロライザーか……確かに、とんでもない力だったな……」

しかしアクア殿、良かったのか？このまま撤収しても……」

アクア「このまま残っても私達に出来る事は何も無いわ……」

それに、ラスト・ウォーリアもこちらと会うつもりも

無かったようだし……」

レイス「とりあえず、エンマ大王からの依頼は果たしたからね。

ラスト・ウォーリアとゼロライザーについては、

我が主から話を聞くとしよう……」

「シューーーーン。」

進之介「みんな、ただいま。」

マナ「シン!!」

亜久里「シン様、お帰りなさいませ!!」

真琴「無事で良かった!!」

レジーナ「あの人達に、変な事されなかった!?!」

進之介「うん。みんなも無事で良かったよ!!」

それとミリカ…… 沖原さんからの伝言だけど、

『基地の防衛感謝する。』だって。」

アクア「そう…… やっぱり、私達と接触する気は無かったみたいね。」

ねこ娘「何よそれ!?!シンに伝言頼んだ上に、その一言だけで

終わらせるなんて!!」

ディアンヌ「感謝してるなら、自分で言えば良いのに!!」

レイス「我が主、早速ですまないが…… ラスト・ウォーリアと

ゼロライザーについて何かわかった事はあるかい？」

進之介「あまり大した事じゃないけど……。」

と、進之介は、ラスト・ウォーリアとゼロライザーについて、わかった事をみんなに話した。

アクア「なるほどね……つまり、天滅槍（ゼロライド）は元々、

鉄血龍（オル・ドラゴン）という組織が所持していたけど、

1人の裏切り者に奪われて、ラスト・ウォーリアに

もたらされた……。」

レイス「そして、その天滅槍（ゼロライド）と契約して、

次元の王候補（ディオケイター）・ゼロライザーとなったのが、
『阿久津マサト』という少年と、『小室美香』という少女とい

う訳か。」

メリオダス「じゃあ、そのゼロライザーってのにその2人が

変身してることか？」

進之介「僕が見た限りでは、美香って子が天滅槍（ゼロライド）を解放して、

マサト君が変身しているみたいだった。

その後、すぐに2人は消えちゃったからそれ以上の事は

わからなかったけど……。」

レイス「何にせよ、ゼロライザーについてはまだまだ謎が多そうだね。

『次元力』を使用した事も含めて……。」

アデル「次元力……？」

アニエス「さっきも言ってたけど、それって何なの？」

レイス「『次元を破壊する力』さ……。」

バン「ああ!？」

トウマ「次元を破壊する力……？」

ねずみ男「いや、サラツと言っちゃってるけどよ……

それって激ヤバなんじゃねえのか!？」

レイス「その通り。次元力は『次元の王』のみが使える

神々の力すら足元にも及ばない程の力だからね……。」
ナツメ「でも、さつきゼロライザーが使ってたのも、

その『次元力』何ですよね……？」

レイス「ああ……。だが、『次元の王』が表に出てきた我が主なら
ともかく、まだ次元の王候補（デオケイター）である
ゼロライザーが本来、使えるはずが無いのだが……。」

リータ「えっ!？」

ラピス「お前、今何て言った……？」

鬼太郎「『次元の王』が表に出てきた……？」

アクア「本当なの？シン……。」

進之介「うん……。ゴクウブラックと戦った時にね……。」

六花「あちやー……。」

ありす「言っちゃいましたね……。」

マナ「レイスさん!!何でしゃべっちゃうんですか!？」

レイス「良いじゃないか。遅かれ早かれ、いずれわかる事だ。

それに……。あの時、我が主が使った力にせよ、

ゼロライザーが使った力にせよ、次元力本来の力からした
ら、

ほんのごく一部に過ぎないのだからね。」

アキノリ「あれでほんのごく一部なのかよ!？」

アヤメ「恐ろしいわ……。」

アクア「そう……。本当に恐ろしいのよ……。『次元力』……

そして、『次元の王』というのは……。」

けど私……。もう決めたから。これから先、何があっても

あなたを信じるって。だから大丈夫よ、シン!!」

進之介「ミリカ……。ありがとう!!」

アクア「マナちゃん達にも変な気を使わせちゃったみたいね。

ごめんなさい。」

亜久里「いいえ、かまいませんわ!!」

マナ「でも、本当に良かった、アクアさん!!」

メリオダス「そういや、マナ……。さつきお前が使ってた力、

ありや『パトリシア』の力か？」

マナ「メリオダスさん、パトリシアさんを知ってるんですか？」

メリオダス「知ってるも何も、3000年前の俺の仲間だったからな!!」

マナ「えっ!? そうなんですか!」

マーリン「しかし、プリキユアであるお前が何故、『聖魔天使』の力を？」

マナ「話せば長くなるんですが……」

エリザベス「パトリシア…… 聖魔天使…… どこかで聞いたことが……」

ホーク「エリザベスちゃん？」

メリオダス「エリザベス…… (まさか、記憶が……)」

マーリン「…… まあ、いいだろう。この話は、おいおい聞くとしようか……」

犬山まな「アクアさん!! エンマ大王とぬらりひよんさんが

艦の前方に來ています!!」

アクア「来たわね…… 繋いでちょうだい!!」

エンマ大王「よう!! ラスト・ウォーリアの防衛、ご苦労だったな!! 礼を言わせてもらおうぜ!!」

アクア「いいえ、どういたしまして…… それより、

あのラスト・ウォーリアとゼロライザー…… そして、

鉄血龍（オル・ドラゴン）について教えてもらいたいのですか？」

と、冷めた眼差しでエンマ大王を見つめながら語るアクア。

エンマ大王「あはは…… やっぱそういう顔になるわな……」

ぬらりひよん「彼らについては、残念ながら我々も多くはわからない……」

鉄血龍（オル・ドラゴン）は15年前に一度、壊滅したが

最近になって復活し、世界征服を企てる組織。

そして、その鉄血龍（オル・ドラゴン）を倒す為に

結成されたのがラスト・ウォーリアである…
という所までしか把握していない。」

レイス「本当にそれだけかな？」

エンマ大王「どういう意味だ？」

レイス「これはあくまで私の想像だが…あのゼロライザーを

生み出すのに君達も一枚噛んでいるんじゃないのかな？」

ぬらりひよん「だとしたら、その想像は的外れだな。君達も知って
の通り

我々はレグルス帝国軍、そして、ラー・カインと戦う
同志を

集めている。その過程でラスト・ウォーリアと

鉄血龍（オル・ドラゴン）の事を小耳に挟んだだけに

過ぎない。」

レイス「…まあ、良いだろう。そういう事にしておこうか。これ
からは

我々と君達はその同志とやらになる事だしね…。

だがこれだけは覚えておきたまえ。天滅槍（ゼロライド）は

我が主がいただく!!」

ぬらりひよん「……………」

アクア「ああ、それともう一つ…。もしゼロライザーが我々にとつ
て

危険な存在と判断した場合は然るべき処置を

取らせていただきますので、あしからず…。」

エンマ大王「わかった…。その辺はお前達に任せるぜ。それじゃ、
俺達の拠点に案内するからついてきてくれ。」

と、そう言い残すと、通信を終えた。

ナツメ「エンマ様…。ぬらりひよんさん…。」

メリオダス「まあ、深く考えても仕方ねえさ。ミリカ、行こうぜ!!」

アクア「そうね…。行きましょう!!アルテミス、発進!!」

と、アクアの号令と共に、アルテミスはレジスタンス軍の拠点があ
る

東京へと向かっていった。そして、翌日……

く 東京タワー周辺 く

光「海ちゃん！風ちゃん！お待ちせ!!」

海「遅いよ、光!!」

風「うふふ……それじゃ行きましようか。」

と、赤い髪で三つ編みをした少女『獅堂光』、

水色のロングヘアの少女『龍咲海』、

黄色の髪で眼鏡をかけた少女『鳳凰寺風』

の3人が、待ち合わせ場所へと集合し、

東京タワーへと向かおうとしていた。

海「あれからもう一年経つのね……。」

風「セフィーロの皆さんは元気になっているでしょうか……。」

光「大丈夫だよ!!クレフやフェリオ、そしてランティスもいるし……。」

そう言われたら、何だか会いたくなっちゃったなあ……。」

海「でも、セフィーロが平和になった今、もう私達が

行く事はできないわ……。」

風「レグルス帝国軍なら行けるかもしれないけど……。」

光「レグルス帝国軍……あの人達が来たせいで、

わたし達の世界は……。」

海「光……。」

町民女性「キャーキャーキャーツ!!」

レグルス兵①「女……レジスタンスだろう……。アジトは何処にある!?!」

町民女性「違います!!私はレジスタンスではありません!!」

レグルス兵②「嘘をつけ!!調べはついているんだぞ……?」

シラを切るつもりならまあいい……。

お前の体にじっくりと聞くとしよう……。来い!!」

町民女性「いやーっ!!誰か助けてーっ!!」

海「レグルス兵!?!」

風「ひ……ひどい!!」

光「何て事を… やめろーーーーーっ!!」

「バキーーーーーッ!!」

レグルス兵③「ぐわっ!!」

と、襲われている女性を助けようと、持っていた木刀で、レグルス兵を追い払う光。

光「大丈夫ですか!？」

町民女性「あ… ありがとうございます!!」

レグルス兵①「小娘… キサマ!!」

レグルス兵②「天下のレグルス帝国軍に舐めた真似を…。」

レグルス兵③「覚悟はできているんだろうな…?」

と、光に銃を突きつけながらそう語る3人のレグルス兵。

海「光!!」

風「光さん!!」

光「何が天下のレグルス帝国軍だ… わたし達の世界から

出て行けーーーーーっ!!」

「バアーーーーーッ!!」

と、そう叫びながら、レグルス兵に向かっていく光。

レグルス兵①「馬鹿が… 死ね!!」

と、レグルス兵3人が光を攻撃しようとしたその時…。

? 「燃え散れ…!!」

「ブオワーーーーーッ!!」

レグルス兵①「うわーーーーーっ!!」

レグルス兵②「ぐわーーーーーっ!!」

レグルス兵③「ひでぶーーーーーっ!!」

海「えっ!？」

風「こ… これは…?」

光「青い… 炎?」

と、突如、青い炎が出現し、レグルス兵3人を一瞬で燃え散らした。

? 「…………。」

海「あの人…。」

風「どなたでしょうか…?」

うまくみんなをまとめてたし、リーダーに
適任かも知れないわね!!」

マナ「そしたら…シンやメリオダスさん達はアルテミスに
残ってもらって、他のみんなはあたしと一緒に

出撃してください!!」

鬼太郎「わかった!!」

さくら「はい!!」

ナツメ「よし、行くわよ!!」

ディアンヌ「僕達、待機なの…?」

バン「相手は魔神族だぜ…?」

ラピス「心配すんなって!!魔神族はいっぺん

ぶちのめした事があるからよ!!」

メリオダス「だからって油断するなよ、3人娘!!」

アンズ「はい!!」

リータ「行ってきました!!」

マーリン「団長殿…まるで、あの少女達の保護者の様だな。
メリオダス「そうか?そういうマーリンさんこそ、随分と

さくらに肩入れしている様に見えますが?」

マーリン「フツ…さくら、気を付けて行け。」

さくら「はい!!マーリンさ…。」

「キーーーーーン…。」

光・海・風「はあ…はあ…はあ…。」

謎の魔導士「私はまだ…やられるわけにはいかない…。」

と、さくらの脳裏に光・海・風が走っている様子と、

白装束を着た白髪で背が低い魔導士の様な男性が

ボロボロになっている様子が映し出されていた。

さくら「えっ? (何だろう…今の人達…?)」

小狼「さくら…?」

ケロベロス「どないしたん…?」

さくら「な、何でもないよ!!それじゃマーリンさん、行ってきます
!!」

マーリン「ああ……。」

エリザベス「マーリン様、どうかなさったのですか？」

マーリン「いや、何でもない……。 (さくら…… 何かを感じ取ったのか?)」

進之介「マナ、みんな、気を付けてね!!」

マナ「うん!!」

真琴「アルテミスをお願いね、シン!!」

亜久里「シン様!! わたくしの活躍をしっかりと見ていてくださいね!!」

レジーナ「わたしの活躍もよ、シン!!」

アニエス「わ……わたしの事も見ててね!!」

真琴・亜久里・レジーナ「えっ?」

と、一斉にアニエスの方へと向く真琴・亜久里・レジーナの3人。

進之介「アニエスちゃん…… だっけ? 気を付けてね!!」

アニエス「…… はい!!」

と、進之介の言葉に感激しながら返事をするアニエス。

ねこ娘「良かったわね、アニエス!!」

六花「フフツ…… ライバルが増えたわね、マナ。」

マナ「あはは…… それじゃみんな、行くよ!! プリキュア! ラブリンク!!」

「ピカー………ン!!」

と、進之介やメリオダス達『七つの大罪』のメンバーを除く

全てのメンバーがアルテミスから出撃していった。

ぬらりひよん「大王様…… 彼らは来ているでしょうか……?」

エンマ大王「ああ、多分な……。」

進之介「ほえっ?」

アクア「エンマ大王…… 彼らとはいったい……?」

エンマ大王「それは…… 次回のお楽しみだ!!」

く 東京タワー周辺のとある場所 く

?①「フフン、ここっすか…… 今メリオダス達がいる世界は……。」

?②「どうやらその様だな…… あの妙な船の中から気配を感じる。」

？③「しかし、まさかセファイロの魔導士までこの世界に来ていたとはね。」

？①「セファイロ？ああ、この前あつしらが襲撃した世界っスか……」

確かその際にとある魔導士が世界ごと時の狭間に

封印したらしいっスけど……」

？②「そのおかげで、セファイロにはもう干渉できなくなってるんだっただな。」

？③「大したものだよ。あの男、『導師クレフ』は……」

だがあの様子では、魔神族のエサになるのも時間の問題か。」

？①「まあ、そんな事はどうでもいいっスよ。さっさとメリオダス達を

やっちやいましょうか、ドロール君？」

ドロール「そう慌てるなグロキシニア……どうやらあの中には

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ、そして、

例のエスカノールという者もいる様だ……」

少々、厄介かもしれんぞ。」

グロキシニア「ふうん……まあ、その辺はちゃんと考えてるんやしよ？」

バリオス君？」

バリオス「ああ。ギガデウス様の復活も近い……。その前に

次元の王候補（ディオケイター）はできるだけ排除せねばならない。」

と、『十戒』である初代妖精王『安息のグロキシニア』

巨人族の始祖『忍耐のドロール』

そして、『ギガデウス一派』のバリオスが

東京タワー周辺へと魔神族を送り込み、姿を現していた。

ドロール「ギガデウスか……まさか今度は我々の同志になるうとはな……」

グロキシニア「そんだけ、事態は深刻って事っスよ。」

『次元の王』の復活だけは何としても阻止しなければ

ならないっすからね……。でないど、3000年前の
繰り返しになっちゃうっすよ。」

バリオス「では……。始めるとしようか!!」

と、東京タワー周辺は、今、まさに戦火の渦に巻き込まれようとしていた。

戦場へと駆け出して行った光・海・風の3人と

『セフィーロ』と呼ばれる異世界から第5世界へと逃れてきたクレフの運命は……。

又、『十戒』のグロキシニアとドロール、

『ギガデウス一派』のバリオスの目的とは……。

そして、鉄血龍（オル・ドラゴン）の次なる一手とは……。

更に激しさを増す第5世界での戦いにグラン・ゲインズはどう立ち向かっていくのであろうか!?

第27話　　〈 疑惑と謎　　〉　　（ 完　　）

第28話 復活!!魔法騎士と正義の『悪』

赤色魔神「ブウウ……。」

青色魔神「グウウ……。」

刻「へっ……こりやまた妙な化け物達だな……。」

泪「あんた……大丈夫か？」

クレフ「す……すまない……君達は……？」

平家「我々は『コード・ブレイカー』……『悪を裁く悪』……ですよ。」

クレフ「コード……ブレイカー？」

遊騎「2番……さっさと片付けてまおうで。」

刻「全く……こんな時に『大神』の奴、どこほつつき歩いてんだよ
!!」

平家「じきに現れるでしょう……。では皆さん、ゴミ掃除と行きま
しょうか!!」

一同「了解!!」

と、コード・ブレイカーの4人は魔神族の群れへと挑んでいった。

一方……

白色魔神「グウウ……。」

緑色魔神「ウウウ……。」

海「な……何よ、この化け物達は!？」

風「セフィロにいた魔物達とは違うタイプの様ですわね。」

光「町を襲うなんて……許せない!!ヤー……ッ!!」

青色魔神「グギャーッ!!」

「バキ……ッ!!」

光「キャ……ッ!!」

海「光!!」

風「光さん!!」

と、青色魔神は、向かってくる光を体当たりで吹き飛ばした。

光「ううう……。」

赤色魔神「ブウウ……。」

「ドシン……ドシン……ドシン……。」

と、更に赤色魔神が倒れている光に近づいていく。
海「や・・・やめて!!」

風「光さん・・・逃げてください!!」

赤色魔神「ブオーーーーーッ!!」

光「くっ・・・!?!」

と、赤色魔神が光にとどめを刺そうとしたその時・・・。

さくら「火焰（ブレイズ）!!」

「ブオーーーーーッ!!」

赤色魔神「ブワーーーーッ!!」

と、さくらが颯爽と現れて、『火焰（ブレイズ）』のカードで赤色魔神を撃退した。

風「えっ・・・？」

海「これは・・・魔法？」

光「また、炎だ・・・」

さくら「あの・・・大丈夫ですか？」

光「う、うん・・・ありがとう!!あなたは？」

さくら「わたし・・・木之本桜といいます。カードキャプターです!!」

光「さくらちゃん・・・カードキャプターか・・・わたしは獅堂光!!」

海「私は龍咲海。」

風「私は鳳凰寺風といいます。」

さくら「あれ・・・？さつき、頭の中に出てきた人達だ・・・ひよっとして・・・」

小狼「さくら、大丈夫か!？」

ケロベロス「何や？この3人は・・・」

さくら「えーっと・・・この人達は・・・」

光「何？このしゃべるぬいぐるみ、かわいいーッッ!!」
と、ケロベロスを両手で掴み、頬づりする光。

ケロベロス「だ・・・誰がぬいぐるみや!!」

海「光・・・そんな事してる場合じゃ・・・」

小狼「とにかく・・・早くあの追われている魔導士を助けに行かない

と!!」

さくら「そ… そうだね!!」

風「魔導士… ですか?」

海「ま… まさか!」

光「ねえ… その魔導士って、どんな人なの?」

ケロベロス「んっ? そんな事聞いてどないするんや?」

海「その魔導士… 私達の知り合いかも知れないの!!」

小狼「何だって!」

ケロベロス「んー… 確か髪が白くて、白い服着とって、

後、子供みたいな背丈をしとったな…。」

風「間違いありませんわ…。」

光「クレフだ!!」

さくら「やつぱり、その魔導士さんと知り合いだったんですね!!」

ケロベロス「そしたら、そいつの事はワイらに任せて、

お前達はどこかに避難しときーや!!」

海「いえ… 私達も一緒に行くわ!!」

小狼「えっ!」

ケロベロス「アホ言うな!! ただの小娘のお前達に何ができんねん!?

あの魔神族のエサになるのがオチやで!!」

風「確かに、『今』はそうですけど…。」

光「クレフに会えば… わたし達も戦える!!」

ケロベロス「どういうこっちゃ…?」

さくら「わかりました… 行きましょう!!」

光さん、海さん、風さん!!」

小狼「おいおい… 良いのか、さくら…。」

さくら「うん!! クレフさんの所に着くまで、わたし達で守ろう!!」

小狼君、ケロちゃん!!」

ケロベロス「まあ… さくらがそう言うなら、しゃあないわ。」

小狼「わかった。俺も協力する!!」

さくら「2人共、ありがとう!! それじゃ、行きましょう!!」

光・海・風「うん!!」

刻「ガウスキャノン!!」

泪「斬影!!」

遊騎「うがー！！！！」(口から超音波を吐いている。)

魔神族の群れ「ブヒーーーーー！！！！」

平家「これで、全部片付きましたか？」

刻「こいつら、異世界の怪物かよ？何でこんな所に来るんだよ……。」

泪「あんた……こいつらに追われていたの？」

クレフ「すまない……私達の世界もあの怪物達に襲われてね……。」

何とか、この世界に逃れてきたがこのザマだ……。」

遊騎「とりあえず、この人どうするん？2番……。」

平家「ひとまず、私達の拠点にかくまうしかないでしょう。」

刻「けど、あつちはまだドンパチやっているみたいだけど、良いのか？」

泪「エンマが言っていたグラン・ゲインズとかいう連中か……。」

平家「彼らなら問題ないでしょう。では、行くとしましょうか……。」

?「フフフフ……。」

遊騎「!!誰や!!」

クレフ「こ……この声は!?!」

「シューーーーーー……。」

と、空間の歪みから1人の女魔導士が姿を現した。

泪「何だ？この女は……。」

クレフ「アルシ……オーネ!!」

アルシオーネ「フフフ……いい恰好ですわね、導師クレフ……。」

クレフ「お前達……今度は魔神族や神々と結託して、

今度は何を企んでいる!?!」

アルシオーネ「さあ……？全ては『あの方』の意志のままですの
で……。」

あなたにはここで消えていただきますわ!!」

刻「話の途中で悪いんだけどよ、あんた何者だ？オバさん……。」

アルシオーネ「オ……オバさんですつて!?!この坊や……あなた達も

導師もろとも消してあげるわ!!

お前達、やっておしまい!!」

「シューーーーーーッーン……。」

魔神族の群れ⑤「グウウ………。」

と、アルシオーネは右手を前方にかざすと、再び魔神族の群れが出現した。

泪「また出現した!!」

刻「おいおい……マジかよ……。」

遊騎「でもまあ……やるしかなさそうやな!!」

平家「では……行くとしましょうか!!」

「バァーーーーーッーン……ッ!!」

と、コードブレイカーの4人は、再度、出現した魔神族の群れに攻撃を仕掛けていくが……。

「シューーーーーーッーン……。」

赤色魔神?「グウウ………。」

クレフ「!!」

アルシオ!!「ネ「フフフ……おバカさん達ね……。」

と、アルシオーネはすかさず、クレフの背後に赤色魔神を出現させる。

泪「しまった!!」

刻「早く逃げろ!!」

アルシオーネ「フフフ……さようなら、導師クレフ!!」

赤色魔神「グオーーーーーッ!!」

クレフ「くっ!!?ここまでか……。」

と、赤色魔神がクレフに襲い掛かったその時……。

さくら「疾風(ゲール)!!」

小狼「雷帝招来!!」

「!!!!」

赤色魔神「ブオーーーーーッ!!」

アルシオーネ「何!?!」

と、間一髪の所で、さくらと小狼が赤色魔神を同時攻撃し、

撃退した。

さくら「大丈夫ですか!?クレフさん!!」

クレフ「き…君達は…?何故、私の名を…。」

小狼「あの3人からあなたの事を聞いたんです。」

光「ぬいぐるみさんスゴイ!!こんな姿になれるの!？」

風「まるで、セフィーロにいる精獣みたいですよ…。」

ケロベロス（真の姿）「だーかーら!!誰がぬいぐるみやねん!!」

海「クレフ…」

と、続いて、光・海・風の3人が真の姿になったケロベロスの背中にまたがり、現れた。

刻「何だ?あいつらは…。」

泪「もしかして…。」

平家「フツ…グラン・ゲインズの方々の様ですね…。」

クレフ「光…海…風…どうして君達がここに!？」

海「ちよつと!!久しぶりに会えたのに、最初の言葉がそれな訳!？」

光「どうしても何も…ここはわたし達の世界だよ!!」

風「そう言うクレフさんこそ…セフィーロで何かあったんですか?」

小狼「お前達…その人を連れて逃げろ!!」

光「ううん、わたし達も戦う!!クレフ…」

わたし達を『魔法騎士（マジックナイト）』にしてよ!!」

海「お願い、クレフ!!」

風「お願いします!!」

さくら「魔法騎士（マジック…ナイト）?」

クレフ「すまない、3人共…今の私は、セフィーロを時の狭間に

封印したのを

引き換えに、魔力を全て失ってしまったんだ…。」

光「えっ!？」

海「セフィーロを…封印ですって!？」

風「どういう事ですか!？」

クレフ「話せば長くなるが…君達だけでも逃げてくれ!!」

海「そ…そんな…。」

さくら「…魔力があれば良いんですね？」

風「さくらさん…?」

さくら「だったら…わたしの魔力を使ってください!!」

クレフ「何!？」

光「さくらちゃん…。」

小狼「さくら…。」

さくら「ダメ…ですか？」

クレフ「…いや、やってみよう!! 3人共、そこに立ってください!!」

光・海・風「うん!!」

と、光・海・風の3人は、クレフの前に立った。

クレフ「君…名前は？」

さくら「木之本桜です!!」

クレフ「そうか…ではさくら、君の魔力を借りるぞ!!」

さくら「はい!!」

クレフ「魔法伝承（アクセプト）!!」

「パァー………ッ!!」

と、クレフはさくらの手を握り、『魔法伝承（アクセプト）』を

発動させると、クレフが持っている杖から眩い光が放たれて、

光達を包み込む。すると、3人はコスチュームが変化し、

剣や防具が装備されて、伝説の『魔法騎士（マジックナイト）』へと

変身を遂げた!!

光・海・風「……。」

刻「な…何だ、ありや!？」

泪「変身…した?」

遊騎「プリキュアか? あれ…。」

平家「いや、どうやら違う様ですね…。」

光「また…なれた!!」

海「魔法騎士（マジックナイト）に…。」

風「これで…戦えます!!」

小狼「あ…あれが魔法騎士（マジックナイト）…。」

極度に力を消耗し、満身創痍となっていた。

そして、リーダー役のキュアハートが休憩を提案したその時……

？「ブオー………ツ!!」

ナツメ「えっ!？」

トウマ「な……何だ!？」

「ドシン!!ドシン!!ドシン!!」

巨獣アルビオン「ブオー………ツ!!!」

と、魔神族の巨獣アルビオンがキュアハート達の前に姿を現した。

ねこ娘「う……うそ……」

アデル「ちよつとまずいな……」

キュアダイヤモンド「今のわたし達の状態では……」

キュアホワイト「あれの相手をするなんて……」

巨獣アルビオン「ブオー………ツ!!!」

「ブウ………ン……」

と、巨獣アルビオンは、口から破壊光線を発射する態勢をとった。

アキノリ「や……やべえ……」

シャイニールミナス「もう……力が……」

巨獣アルビオン「ブオー………ツ!!!」

「ドオー………ン!!!」

キュアハート「あ……ああ……」

鬼太郎「くっ……!？」

と、巨獣アルビオンから強烈な破壊光線が放たれて、

キュアハート達に直撃しそうになったその時……

？「……燃え散れ!!!!」

「ブオー………ツ!!!」

巨獣アルビオン「!!!」

と、キュアハート達の前に突如、青い炎が発生して、

巨獣アルビオンの破壊光線を相殺した。

砂かけ婆「な……なんじゃこれは!？」

キュアエース「青い……炎?」

アリエス「あそこに……誰かいるわ!!」

？「何だ… もうへばっているんですか？ 案外、大した事はないです
ね。」

グラン・ゲインズというのは…。」

ラピス「な… 何だと、このヤローっ!!」

アンズ「あ… あなたは？」

零「俺は『コード：ブレイカー』… 大神零だ。」

キュアハート「コード… ブレイカー？」

鬼太郎「大神… 零？」

と、キュアハート達を助けた青い炎を操る少年は

『コード：ブレイカー』の『大神零』と名乗った。

巨獣アルビオン「ブオーーーーーーッ!!!」

「ブウーーーーーッ!!!」

キュアブラック「ま… また来るよ!!」

ナツメ「まずい!!」

零「下がっている…。」

アニエス「えっ…？」

ラピス「お前… 何する気だよ!」

零「目には目を… 歯には歯を… 悪には… 悪を!!」

「ピン!!」「ドオーーーーーッ!!!」

アデル「な…!!」

レジーナ「何… これ…？」

と、零は左手に付けている指輪を外すと、青い炎が勢いよく噴き出
した。

そして、その炎は禍々しい骸の様な姿になっていた。

鬼太郎「父さん… これは!」

目玉おやじ「わからん… じゃが、まるで煉獄の炎の様じゃ…。」

零「奴は俺が… 燃やし尽くす!!」

巨獣アルビオン「ブオーーーーーーッ!!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

と、巨獣アルビオンは零に向けて強烈な破壊光線を放ったが…。

零「行け… 煉獄の炎（サタン・ブレイズ）!!」

「ブオワーーーーッ!!!」

「シューーーーーン……。」

と、零はすかさず、『煉獄の炎（サタン・ブレイズ）を放つと、その炎は巨獣アルビオンの破壊光線を喰らい、消滅させた。

ナツメ「マジっ!?!」

トウマ「あの炎……あの怪物の攻撃を……。」

アキノリ「喰いやがった……。」

キュアブラック「ありえない……。」

零「終わりだ……。」

「ブバーーーーッ!!!」

と、今度はその炎を無数に分裂させて、巨獣アルビオンの体中に喰いつかせていく。そして……。

零「…… 燃え散れ!!」

「ゴオーーーーッ!!!」

巨獣アルビオン「グギャーーーーッ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドッカーーーーン!!!」

と、零はそう言いながら親指を立てた左手を逆さまに落とすと、

巨獣アルビオンの体中が激しく燃えだし、断末魔の叫びを上げなが

ら

黒コゲとなり、消滅していった……。

ラピス「す…… すごい……。」

アンズ「あの怪物を……。」

リータ「あつという間に……。」

キュアハート「大神…… 零さん……。」

と、巨獣アルビオンを瞬く間に燃え散らした

大神零の力に驚愕の表情を見せるキュアハート達であった。そし

て……

泪「今のは…… 零か？」

刻「やっと来やがったか、あいつ……。」

遊騎「6番、遅いわ……。」

平家「まあ、良いでしょう…… もうすぐこちらも片付きそうですし

ね。。。」

魔神族の群れ「……………」

と、魔神族の群れは平家の異能である『光』の能力によって束縛されていた。

泪「相変わらず、良い趣味してるな平家……………」

平家「フフツ……『目には目を…… 齒には齒を…… 悪には永遠の束縛を』が

私のモットーですからね……………」

光「はあ……………」

「バキ……………」

アルシオーネ「くっ!?!」

と、光とアルシオーネの戦いは、光が優勢に進めていた。

海「その調子よ、光!!」

風「そのまま押し切ってください!!」

クレフ「さすがだな…… 久しぶりだというのに、この強さか。」

さくら「光さん、すごいです!!」

アルシオーネ「くっ…… この私ที่こんな小娘に

ここまで追いつめられるとは…… こうなれば、

この子と一緒に戦うしかない……………」

ケロベロス（真の姿）「あの姉ちゃん…… 何する気や!?!」

光「???」

アルシオーネ「割れと契約せし精獣よ…… 真の姿を現せ!!」

真の姿となつて、汝を纏いし者……

我を招き入れよ!!」

アルシオーネの精獣「!!!」

「ブワ……………」

光「えっ!?!」

海「こ…… これは!?!」

風「何ですか!?!」

クレフ「いかん…… みんな、離れろ!!」

と、アルシオーネは自身の肩に乗っていた精獣を変化させて、

体に纏わせると、巨大な生物の様な姿へと変貌した。

アルシオーネ(?)」「……………」

さくら「ほえ……………」つ!!!」

ケロベロス(真の姿)「な…何や、あれは!？」

海「う…うそ…」

風「あ…あれは…」

光「魔神(マシン)…だよな？」

クレフ「そうだ…。もう一つのセファイアの魔導士は

そのほとんどが魔神(マシン)を持っているらしい。」

魔神アルシオーネ「フフフ…これでもうあなた達に勝ち目は無
くつてよ?」

消えなさい!!氷尖撃射(アライア)!!」

「ドドドドドドドドドドドドツ!!!」

光「キャ……………」ツ!!!」

海「ああ……………」つ!!!」

風「うぐう……………」つ!!!」

と、魔神となったアルシオーネはすかさず、光達を攻撃した。

そして、あまりの威力で、周囲にいたさくらやコードブレイカーの
4人も巻き込まれた。

刻「なんつう威力だ…。」

遊騎「こりや、マズいかもしれへんで…。」

ケロベロス(真の姿)「くそ…魔力がケタ違いに上がつとる…。」

小狼「今の俺達では、かなわないかもしれない…。」

さくら「光さん…。」

光「くつ…どうすれば…。」

?「光…。」

光「こ…この声は…?」

「キイ……………」

く 光の心の中 く

?「光…聞こえているか…?」

光「聞こえるよ。あなたはまさか…『レイアース』なの…?」

エンマ大王「安心するのはまだ早いと思うぜ。」
ぬらりひよん「大王様の言う通りだ。まだ本命は残っている様だぞ？」

バン「本命だあ？まさか……。」

ゴウセル「そのままさかだ。」

「ドツカ——————ン!!!」

エリザベス「きゃあ——————ン——————ッ!!」

ホーク「エリザベスちゃん!!」

ねずみ男「な……何だあ——————ッ!？」

と、突如、アルテミスが何者かの攻撃を受けて、艦が激しく揺れ動いた。

メリオダス「言ったそばから来やがったか……。」

レイス「我が主……どうやらここからが本番の様だ。」

出撃するでしょう。」

進之介「うん!!ミリカ……行ってくるね!!」

アクア「お願いね、シン!!」

メリオダス「俺達も行くぞ、みんな!!」

一同「おう!!」

と、アルテミスに待機していた進之介やメリオダス達七つの大罪のメンバーが急いで出撃していった。

く アルテミスの外 く

グロキシニア「フン……命中したっス！しかし、丈夫な船っスねえ。」

結構本気で撃ったんスけど、あの程度っスか……。」

ドロール「まあ……いぶりだすには丁度良からう。」

バリオス「あのセフィーロの女魔導士もいい仕事してくれたしね。」

おかげで我々の今回の目的もうまくいきそうだよ。」

グロキシニア「しかし……思ったよりこの世界の人間は

中々、強力だったっスねえ……。アルビオンを

あつさり燃やした人間といい、さっきのデカイ奴とい

い……」

ドロール「油断大敵……と言う事だ。気を引き締めていくぞ。」
バリオス「では……私の下僕達も呼ぶとしようか!!」

「シューーーーーー……」
ギガデウス兵の集団「……………」

と、バリオスは新たに空間の歪みからギガデウス一派の
兵隊を数多く召喚した。

グロキシニア「まだ、そんな戦力があつたんすか……。」

ドロール「喰えない男だな……。」

バリオス「フフフ……タクティスみたいにならない様にしなれば
いけないからね。」

これで準備は整った。では……第2試合開始といこうか
!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーやコード・ブレイカー

そして、再び魔法騎士（マジックナイト）となった光・海・風達の
活躍により、見事、敵の第一陣を退けることに成功した。

だが、アルテミスの周辺では、間もなく更に激しい戦いが
始まろうとしていた。果たして、進之介やメリオダス達は
勝利を収める事ができるのだろうか!?

第28話　　復活!!魔法騎士と正義の『悪』　　（完）

第29話 散る英雄…そして、目覚める『王』

ギガデウス兵の集団「……………」

グロキシニア「フン…久しぶりっスね、メリオダス。」

バイゼル以来っスか？」

ドロール「あの時はいつの間にかいなくなっていました、

今度はそうは行きませんよ…。」

メリオダス「グロキシニア…ドロール…お前達だったのか。

俺を追いかけてわざわざこんな所まで来たのかよ？」

グロキシニア「うーん…それもあるんスけど、今回のあつしらの

目的はあの少年っスよ。」

と、進之介に指をさしながらそう語るグロキシニア。

ドロール「桑田進之介…いや、

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナよ…。」

進之介「ほえ？僕？」

バン「へへへっ！何だお前、敵からもモテモテじゃねーか？」

メリオダス「どういう事だ？まさか、お前らも次元の王の力を

宿した13の武器を集めてんのか？」

グロキシニア「違うっスよ。あつしらの目的は、次元の王の復活を

阻止する事っス!!」

ドロール「その為には、復活の鍵となる次元の王候補（ディオケイター）を

打倒しなければならぬ。その少年に恨みは無いが、仕留めさせてもらうぞ。」

バリオス「そういう事さ。」

レイス「…君は何者だ？」

バリオス「初めまして、神官レイス…私の名はバリオス。

ギガデウス様の配下です。」

レイス「確かに、君と会うのは初めてだ。ということは、

3000年前の次元大戦終結後に、君は誕生した様だね。。。」

バリオス「その通り。もう少し、先輩と語り合いたい気もあるが…消えてもらうよ。かかれ!!」

ギガデウス兵の集団「イー—————ッ!!!」
「ババババババババババ!!!」

ギガデウス兵の集団は、進之介やメリオダス達に一斉に襲い掛かった。

バン「獲物狩り（フォックスハント）!!」

キング「霊槍シャフティフォル!!」

ゴウセル「双弓ハーリット!!」

ディアンヌ「マーリン!!」

マーリン「絶対強制解除（アブソルート・キャンセル）」

と、マーリンが絶対強制解除（アブソルート・キャンセル）を

ディアンヌにかけて、ディアンヌの姿が本来の巨人族の姿に戻った。

ディアンヌ「よし、行くよ!!乱撃衝（クレイジーラッシュ）!!」

「ドドドドドドドドドドドド!!!」

ギガデウス兵の集団「イー—————ッ

!!!!」

と、バン達は向かってくるギガデウス兵の集団を

次々と蹴散らしていった。

マーリン「団長殿！エスカノール！シン！ここは我々に任せて、

お前達は十戒とバリオスの相手を!!」

メリオダス「わかった。行くぞ、シン！エスカノール！」

進之介「うん!!」

エスカノール「良いでしょう。」

と、進之介・メリオダス・エスカノールの3人は、

グロキシニア・ドロール・バリオスへと仕掛けていった。

グロキシニア「来るっスか…霊槍バスキアス!!」

ドロール「巨神の手甲!!」

比較しても、遜色ない力だな……。」

グロキシニア「出てきたっスね……。」

ドロール「さて、どうしたものか……。」

バリオス「彼の相手は私が務めよう。君達は他の連中の

相手をしていてくれたまえ。」

グロキシニア「了解っス!!」

ドロール「心してかかってください。」

ラグナ「行くよ!!」

バリオス「いいだろう……。(フフツ……これで良い。これで私は

さらなる高みへと昇る事ができる……。)」

鬼太郎「父さん、どうやらアルテミスの方でも戦いが始まった様です。すね。」

目玉おやじ「その様じゃな。まあ、あやつらなら心配はいらんじやろう!」

キュアハート「きつとシンも戦ってる。あたし達も行くこう!!」

キュアエース「もちろんですわ!!」

キュアソード「疲れている場合じゃないわよ!!」

レジーナ「そーよ!そーよ!」

アニエス「わ……私もまだ行けるわ!!」

零「……何なんですか?この人達は……急に元気になりましたね……。」

ねこ娘「まあ……あの子達はいつもこんな感じよ。」

刻「へっ!!遅れてきた奴が、エラそうにこいてんじやねーよ!!」

泪「まったくだな……。」

と、そこへコードブレイカーのメンバーと、

さくらや光達が合流してきた。

さくら「みなさん、無事ですか?」

キュアダイヤモンド「うん!さくらちゃん達も無事で良かった!!」

キュアアロゼッタ「あの……その3人は、どちら様ですか?」

光「わたし、獅堂光!!」

海「私は龍咲海です。」

風「鳳凰寺風といます。」

零「ああ……さっきの3人か。」

海「あなたは!？」

光「ゴミ掃除のバイトさんだ!!」

風「あの……先程はありがとうございました!!」

遊騎「何や、6番の事知つとったんか。」

平家「さて、みなさん。自己紹介はそれぐらいにして……来ますよ!!」

「シューーーーーーシューーーーーー。」

ギガデウス兵の集団「………。」

と、そこにギガデウス兵の集団が出現した。

ナツメ「また何か出てきた!!」

クレフ「今度は、ギガデウス一派の兵達か……。」

海「ギガデウス一派……?」

風「先程の魔物達とは、また違いますわね。」

零「さてと……もうひと掃除と行きましようか。」

光「うん!!」

キュアハート「よし、行こうみんな!!」

と、キュアハート達は、出現したギガデウス兵の集団に

向かって行った。そして……。

グロキシニア「メリオダス、一つ聞きたい……何故君は、

次元の王になるかもしれないあの少年に

ついてるんすか?次元の王の恐ろしさは

君も充分過ぎる程、わかってるはずっすよ?」

メリオダス「ああ……かつての俺の仲間や居場所は次元の王に

消されちまった……。そして、この俺自身も奴に

手も足も出ず、ズタボロにされちまった……。

その時の恐怖は今もこの体に染みついでるぜ……。」

グロキシニア「だったらなぜ……次元の王の復活の鍵である13の

武器と

次元の王候補(ディオケイター)を抹殺する事こそが

全ての世界の為だとわからないんスカ!？」

メリオダス「わからねえな……大事な友達（ダチ）を犠牲にしてみ
て

作る世界なんてよ!!それに、ギガデウスの奴が復活
しちまつたら、それこそ全ての世界が神に支配されつち
まう。

俺が……いや、俺達が目指しているのは、くだらねえ覇
権争いを

終わらせて、全ての種族が平和に暮らせる世界を作る事
何だよ!!」

グロキシニア「君の言う全ての種族というのは、愚かな人間達も
含まれているんスよね……。それこそ夢物語の幻想つ
ス。

やはり、君達とあつしらの考えは相知れないって事つ
スね。」

メリオダス「残念だぜ、グロキシニア……。ならば、お前らはここで
倒す!!」

「キーーーーーッーン!!」

と、メリオダスは魔神族の力を発動させた。

ドロール「それはこちらのセリフです……。 碎破（ギガクラッシュ）
!!」

「ドドドドドドドドドッ!!!」

メリオダス「くっ!?!」

エスカノール「……………」

ドロール「落山（ギガ・フォール）!!」

グロキシニア「霊槍（バスキアス）!!」

「ブォーーーーーッ!!!」

と、ドロールは碎破（ギガクラッシュ）でメリオダスとエスカノ
ールを

上空に吹き飛ばすと、すかさずドロールが落山（ギガフォール）、
グロキシニアが霊槍（バスキアス）で攻撃するが……。

メリオダス「神千斬り!!」

エスカノール「微塵切り（スーパー・スラツシユ）!!」

「ズババババババババババツ!!」

グロキシニア「ぐあーーーーーっ!!!」

ドロール「ぐおーーーーーっ!!!」

と、メリオダスとエスカノールはすかさず反撃し、

グロキシニアとドロールに大ダメージを負わせた。

グロキシニア「う：あ：」

ドロール「ぐ：う：」

メリオダス「あきらめろ：」

エスカノール「あなた達に：勝機など微塵もありませんよ。」

ラグナ「魔法剣（アタック・ヴァイト）！一点突破（スクライド）!!」

「ドオーーーーーッ!!」

バリオス「ぐわっ!!」

「ドゴーーーーーン!!!」

と、ラグナと戦っていたバリオスだったが、終始劣勢で、

倒れていたグロキシニアとドロールの近くへと吹き飛ばされた。

そして…

ラグナ「融合魔法剣（ダブル・アタック・ヴァイト）!!

雷疾風斬（サンダー・ストーム）!!」

「ズバドーーーーーン!!!」

グロキシニア「うわーーーーーっ!!」

ドロール「おおおーーーーーっ!!」

バリオス「：：。（フツ、これでいい：。）」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーン!!!」

と、雷疾風斬（サンダー・ストーム）の直撃を受けた

グロキシニア・ドロール・バリオスの3人は、大爆発を起こした。

バン「へえ：」

ディアンヌ「やった!!」

キング「やっぱりすごい：あの3人は!!」

ゴウセル「団長やエスカノールの力は知っての通りだが、

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナか……」

マーリン「フフツ…… 大したものだな……」

メリオダス「あばよ、戦友……」

グロキシニア「……」

ドロール「……」

バリオス「フツフツ……」

ラグナ「!!!」

と、爆発の煙の中から、倒れてたグロキシニアとドロールが姿を現したが、大ダメージを受けたにも関わらず、

余裕の笑みを浮かべながらバリオスが立ち上がっていた。

レイス「何がおかしいのかな？バリオス君……」

メリオダス「まだやろうってのか!?!」

バリオス「その通り……。礼を言おう、

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナよ。

君のおかげで私は更なる高みへと昇る事ができる……

見せてあげよう……。私が『学んだ』力を!!」

「キーーーーーン!!!」

と、バリオスはそう言いながら、破壊剣（ラグナロク）の首飾りに似た物を出現させた。

レイス「何だと!?!」

ラグナ「あ…… あれって!?!」

バリオス「変身……!!」

と、バリオスは首飾りの魔力を解放すると、足元から魔法陣を発生させた。そして、バリオスの体が漆黒の光に包まれると、

全身が紫の衣装で覆われて、漆黒のマスクやプロテクターが装着される

ると、全身から禍々しい膨大な魔力が放たれて、変身を果たした。

「ブオワーーーーーッ!!!」

ディアンヌ「キヤーーーーーッ!!!」

キング「うわーーーーーッ!!!」

バン「クソがーーーーーッ!!!」

と、変身したバリオスから放たれた膨大な魔力に
吹き飛ばされたメリオダス達であった。その一方……
零「燃え散れ!!」

光「炎の……矢……………っ!!!」

ギガデウス兵「イ……………ッ!!!」

「シュー……………ッ……。」

海「やった!!」

刻「これで全部かよ？」

風「もう、増援は来ないようですわね……。」

キュアハート「よし……今度こそシン達の所に……。」

「ドォ……………ッ!!!」

ねこ娘「な……何よ、今の爆発は!？」

キュアブラック「あれは!？」

ラグナ「くっ!?!……………」

メリオダス「ちいつ!？」

マールン「フツ……随分、派手にやってくれたな……。」

と、キュアハート達の所にバリオスが放った膨大な魔力で

吹き飛ばされたメリオダス達が現れた。

キュアハート「シン!!」

ラピス「メリオダス!!」

さくら「マールンさん!!」

ケロベロス（真の姿）「一体、何が起こって……。」

「ドォ……………ッ!!!」

子泣き爺「な……何じや……………っ!？」

アデル「こ……この巨大な魔力は!？」

鬼太郎「父さん!!」

目玉おやじ「来るぞ!!」

「シュー……………ッ……。」

バリオス（変身体）「フフフツ……どうだい、素晴らしいだろうか?」

と、メリオダス達に続いて変身したバリオスが姿を現した。

キュアダイヤモンド「な……何よ、あの人は!？」

キュアホワイト「誰かが変身してるの…?」

レイス「ああ…だが、どういう事だ?何故君が、

破壊剣(ラグナロク)と同じ首飾りを…。」

バリオス(変身体)「教えてあげよう…」

私の能力『神の知恵(ディオス・ラーニング)』の
力き…。

魔力を解除した状態で対象の攻撃を受ければ、

攻撃した者の力を得る事ができる。こうして私

は、

めでたく次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ

の力を

会得する事に成功した…だが、もちろん次元の

王の力の

全てを受け止められないから、私がこれまでに会

得した

能力の全てを結集し、最後のスパイスとしてラグ

ナの力を

加えて完成したのがこの姿…『バリオス・ヴィ

ダール』さ!!」

ラグナ「バリオス…ヴィダール…。」

レイス「この力…ゴクウブラックと互角…いや、それ以上か!!」

光「よし…あいつも敵なら!!」

クレフ「よせ!光!!」

海「どうしたの?クレフ…。」

クレフ「あの者は…君達がどうこうできる相手ではない…。」

風「えっ!?!」

バリオス・ヴィダール「フツ…さすがは導師クレフ。身の程は
わきまえている様だね…だが、安心すると

いい。

そちらのお嬢さん達に用は無いよ。

私の目的はあくまで、この少年だからね!!」

と、煙の中からほぼ無傷状態のバリオス・ヴィダールが姿を現した。
さくら「そ…そんな!!」

ケロベロス（真の姿）「嘘やろ… あれを喰らって…。」
バリオス・ヴィダール「さてと… 次こそ君の番だよ…。」

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ!!」

キュアハート「そうはさせない!!プリキュア!ラブ・リバーズ!!」
「ピカー…ーン!!」

と、キュアハートはマゼンタ色の懐中時計を発動させると、
キュアハート・リバーシアへと転生した。

キュアハート・リバーシア「みなぎる愛と力の女神… ここに転生
せん!!」

キュアハート・リバーシア!!」

ラグナ「マナ!!」

キュアハート・リバーシア「行くくよーっ!!」

メリオダス「行くぜ!!」

「バア…ーン…ッ!!」

と、まずはメリオダスとキュアハート・リバーシアが
攻撃を仕掛けるが…。

「バシ…ーン…ーン!!」

メリオダス「何!？」

キュアハート・リバーシア「そんな!!」

バリオス・ヴィダール「こんなものかい? 神の閃光（ディオス・レ
イ）!!」

「ドオ…ーン…ッ!!」

メリオダス「うわ…ーン…ッ!!」

キュアハート・リバーシア「キャ…ーン…ッ!!」

と、バリオス・ヴィダールはメリオダスとリバーシアの攻撃を
難なく受け止めてると、そこから神の閃光（ディオス・レイ）を放
ち、

2人を吹き飛ばして、大ダメージを与えた。

メリオダス「く…く…。」

キュアハート・リバーシア「シ…シン…。」

ラグナ「マナ!!メリオダス!!」

「シユン!!」

バリオス・ヴィダール「人の心配をしている場合かい？」

ラグナ「うっ!?!」

レイス「やらせん!!神の右腕(ディオス・ランサー)!!」

「バアーーーーーッ!!」

バリオス・ヴィダール「ならば私も…神の右腕(ディオス・ラン

サー)!!」

「バリバリバリバリ!!」

レイス「くうう…うわーーーーっ!!」

「ドゴーーーーーッ!!」

と、ラグナの背後に回り込んだバリオス・ヴィダールを

神の右腕(ディオス・ランサー)で攻撃を仕掛けたレイスであった

が、

対するバリオス・ヴィダールも同じく神の右腕(ディオス・ラン

サー)で

反撃すると、レイスの攻撃を難なく蹴散らし、吹き飛ばした。

ラグナ「レイス!!くそっ…魔法剣(アタック・ヴァイト)!

炎殺断(メギド・スラツシュ)!!」

バリオス・ヴィダール「無駄だよ!!神の太刀(ディオス・カリバー

!!」

「ズバアーーーーーッ!!!」

ラグナ「うわーーーーーっ!!」

「ドゴーーーーーッ!!」

そして、ラグナは炎殺断(メギド・スラツシュ)で攻撃を仕掛ける

が、

バリオス・ヴィダールの神の太刀(ディオス・カリバー)により、

炎殺断(メギド・スラツシュ)は破られて、直撃を受けてしまい、

吹き飛ばされてしまった。

ラグナ「ううう…。」

アニエス「キャーーーーーッ!!」

アデル「アニエス!!」

零「くうう……。」

平家「おお……素晴らしい……何という光景だ……。」

ラグナ「うおおおおおおおーーーーーッ!!」

バリオス・ヴィダール「……滅びよ!『神・魔・滅・殺』!!」

「ゴオーーーーーッ!!」

ラグナ「ぐわあああああああーーーーーッ!!!」

「ドゴーーーーーッ!!」

「シューーーーーーッ!!」

進之介「あ……が……ゲボオツ……」

と、バリオス・ヴィダールは『神の怒り(ディオス・アルマゲドン)』
で

破壊剣・滅殺撃(ラグナロク・デストロイヤー)を粉碎すると、

そのままラグナに直撃させ、吹き飛ばした。

そして、大ダメージを受けてしまったラグナは変身が強制解除され
てしまった。

キュアダイヤモンド「あ……あ……あ……」

キュアロゼッタ「そ……そんな……」

鬼太郎「シンが……負けた……?」

バリオス・ヴィダール「フフフ……全力を出し切って私に敗れた。

これでもう悔いは無いだろう?」

「ブウーーーーーッ!!」

と、バリオス・ヴィダールはそう勝ち誇りながら指先に魔力を集中
させる。

ラピス「や……やべえ……。」

アンズ「このままじゃ……。」

リータ「でも……私達の力では……。」

さくら「マーリンさん!何とかならないんですか!」

マーリン「……無理だ……。今の奴は……全てを超越している……。」

今の我々が敵う相手では無い……。」

ゴウセル「団長の魔力が…消滅した…。」

マーリン「団長殿…。」

く アルテミスブリッジ く

犬山まな「メ…メリオダスさんの反応が…消失…しました…。」

エリザベス「メ…メリオダス様…いやーーーーーっ
!!!」

ホーク「マ…マジかよ…メリオダスが…。」

アクア「G7部隊!!急いでメリオダスの捜索に向かってちょうだい
!!」

連邦兵「姫様!!了解いたしました!!」

ねずみ男「何てこった…よりによって、最初の犠牲者があいつか
よ…。」

ホーク「おい、ネズミ野郎!!勝手にメリオダスを殺すんじゃないよ
!!」

ねずみ男「おいおい…あんな攻撃をまともに喰らって生きてると
思つか!?」

エリザベス「メリオダス…様…ううう…。」

ホーク「てめえ、ネズミ野郎!!エリザベスちゃんを泣かせるんじゃないよ!!」

ローズ・ハム・アタック!!」

「ドゴーーン!!」

ねずみ男「ぐへーーーーっ!!」

アクア「メリオダス…生きていて…。」

く アルテミスの外 く

バリオス・ヴィダール「フフフ…愚かな男だね。さあ!今度こそ
消えてもらうよ!!」

「ブウーーーーー…。」

キュアハート・リバーシア「シ…シン…逃げ…て…。」

と、そこへキュアハート・リバーシアが進之介の所へ地面を這いな
がら

近づいてきた。

進之介「ぼ……僕のせいだ……僕のせいでメリオダスは……」
バリオス・ヴィダール「そう……全ては君のせいなんだよ……」

君が破壊剣（ラグナロク）と契約などしなければ、

こんな事にはならなかったのに……。

だがもう遅い。自責の念に駆られながら滅

びるがいい!!

『神の超閃光（ディオス・グランレイ）!!』

「ドオー………ン!!」

と、バリオス・ヴィダールはそう語りながら、進之介に向けて、

『神の超閃光（ディオス・グランレイ）』を放った。

キュアハート・リバーシア「シ……シン……。」

鬼太郎「シン!!」

さくら「シンキ………ん!!」

バリオス・ヴィダール「フフフ……」

進之介「だけど……メリオダスをやったのは……お前だ!!」

うおああああああ……っ!!」

「ドオー………ツ!!」

と、進之介がそう語ると、体から禍々しい膨大な魔力があふれ出ると、

『神の超閃光（ディオス・グランレイ）』を一瞬でかき消した。

そして、そのまま立ち上がり、進之介は再び、

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナへと変身を果たした。

だが、その風貌は今までのものとは明らかに異なっていた。

バリオス・ヴィダール「バ……バカな……まだこんな力が……」

それに、なぜ『神の超閃光（ディオス・グラ

ンレイ）』が

かき消された……あれはあらゆる魔力の効

果は

効かないはずだ……。ま……まさか……まさ

第30話 聖戦（バトル）!! 『王』と『神』その果てに…

「ポタツ…」「シューーーーン…。」

グロキシニア「ふう…危なかったっス…。もう少してまたまたあの世へ旅立つ所だったっスねー…。」

と、瀕死の重傷を負っていたグロキシニアは予め発生させておいた『月の華（ムーンローズ）』の生命の雫で自身を回復させた。

ドロール「……………」

グロキシニア「ああ…ドロール君…何という哀れな姿に…待っててね…今、治してあげるから…。」

「ポタツ…」「シューーーーン…。」

ドロール「うう…グロキシニア…戦いはどうなった!？」

グロキシニア「うーん…それが周りに、だーれもないんすよ…。」

バリオス君も何処へ行ったやら…。」

「ドオーーーーー!!!!!!」

ドロール「!!!!!!」

グロキシニア「な…何スか何スか!?この巨大な魔力は!!」

「シュン!!」

?「どうやら、『奴』が目覚めた様だな…。」

ドロール「何!?!」

グロキシニア「おや?ゼルドリス君、来てたんすか…。」

ゼルドリス「俺だけではない…『十戒』全員だ!!」

「シュン!!」「シュン!!」「シュン!!」「シュン!!」「シュン!!」

エスタロツサ「……………」

モンスピート「……………」

デリエリ「……………」

フラウドリン「……………」

グレイロード「……………」

メラスキュラ「……………」

と、メリオダスの弟で、魔神王の代理でもある『ゼルドリス』を
始めとした『十戒』全員が姿を現した。

グロキシニア「おやおや… 穏やかじゃないっスねー…。」

十戒が全員集合するとは…。」

ドロール「倒されたガランを除いてな… しかし、メラスキュラ…」

生きていたのか…。」

メラスキュラ「当然よ… ここまで私をコケにしてくれた人間共に

復讐するまでは死ねないわよ!!」

グロキシニア「ところでゼルドリス君… 『奴』とはまさか…。」

ゼルドリス「ああ… 『次元の王』だ!!」

ドロール「何だと!?!」

グロキシニア「なるほどっスねえ… この巨大な魔力は…。」

しかし、何で『次元の王』が出てきたんスか?」

ゼルドリス「次元の王候補（ディオケイター）・ラグナについて調べ
た所…」

どうやら奴は『次元の狭間』に封印されている『次元の

王』と

破壊剣（ラグナロク）を介してリンク状態にあるらし

い…。」

それが何らかの理由で『次元の王』が表に出てきたのだ
ろう…。」

フラウドリン「お前達と行動を共にしていたあのバリオスが

関係しているのかも知れんな…。」

グロキシニア「バリオス君… 面倒な展開にしてくれちゃったっス
ねえ…。」

エスタロツサ「そんな事はどうでもいい… とりあえず、

その何とかの王つてのを仕留めに行こうぜ…。」

ゼルドリス「確かに… あの『次元の王』とはいえ、今は封印され
ている状態…。」

しかも、次元の王候補（ディオケイター）・ラグナの意識

シャイニー・ルミナス「ああーーーーっ!!」

キュアブラック「じょ…冗談でしょ?まだこんな力が!」

と、バリオス・ヴィダールは更に魔力を高めて、フルパワー状態となった。

デイアンヌ「う…嘘…化け物なの?あの人…。」

バン「くそつたれが…!!」

マーリン「この力…まず間違いなく、『十戒』や『四大天使』以上だ…。」

あるいは、もう既にその先のレベルになっているかもしれない…。」

さくら「そ…そんな…。」

バリオス・ヴィダール「素晴らしい!!力がみなぎってくる…。」

これぞ私が求めていた物だ…。」

さつき、君が言ったことをそのまま返そ

う…。」

覚悟はいいな?行くぞ!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

と、バリオス・ヴィダールはそう言いながら、ラグナ(次元の王)へと

攻撃を仕掛けていくが…。」

ラグナ(次元の王)「愚かな!!」

「ズバズバズバズバズバズバズバズバズ!!!」

バリオス・ヴィダール「ぐわああああああああああつ!!!」

「ドゴン!!ドゴン!!ドゴーーーーーッ!!!」

と、ラグナ(次元の王)は向かってくるバリオス・ヴィダールに対して、

目にも止まらぬ速さで何度も斬りつけて吹き飛ばし、大ダメージを与えた。

鬼太郎「な…?!」

ねこ娘「今…何が起こったの…?」

目玉おやじ「どうやら、攻撃したようじゃが…。」

変身が強制解除されて、ほとんど虫の息になった状態で倒れていた。

ラグナ（次元の王）「ほう… まだ生きていたか…。ならば!!」
「ブウーーーーー」

と、ラグナ（次元の王）は倒れているバリオスに向けて右手をかざし、

とどめを刺そうとしたその時…。

「ドオオーーーーー」

ラグナ（次元の王）「… ん？」

ディアンヌ「な… 何!？」

マーリン「あれは!？」

ゼルドリス「……………」

エスタロツサ「……………」

モンスピート「……………」

デリエリ「……………」

フラウドリン「……………」

グレイロード「……………」

グロキシニア「……………」

ドロール「……………」

メラスキュラ「……………」

と、そこへゼルドリスを始めとする『十戒』が全員姿を現した。

キュアハート・リバーシア「あ… あの人達… まさか……………」

キュアダイヤモンド「十戒…?」

キュアソード「そ… そんな……………」

キュアエース「十戒が… 全員、現れたという事ですか!？」

レジーナ「う… 嘘……………」

ケロベロス（真の姿）「まあ… あのガランはおらんみたいやけど、
メラスキュラは生きとったんか……………」

ラグナ（次元の王）「フン… 誰かと思えば、『魔神王』の犬どもか……………」

懐かしいな……………」

と、ラグナ（次元の王）はグレイロードが吐き出した蟲の大軍をエネルギー弾で殲滅した。そして、本来ならばグレイロードの戒禁『不殺』の効果により、全ての時を奪われて死に至るはずだが……。

ラグナ（次元の王）「フハハハハハハハハ!! 愚かな……」

魔神王の戒禁ごとき…… 我には通用せん!!

ハア………!!!

「ブバ………!!!」

フラウドリン「バ…… バカな………!!!」

グレイロード「何の…… 変化もない…… ぎゃあ………!!!」

!!!

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカ………!!!」

!!!

しかし、ラグナ（次元の王）に魔神王の戒禁は通用せず、

何の変化も起きなかった。そして、すかさず左手に

魔力を纏わせて前方にかざすと、フラウドリンとグレイロードは

大爆発を起こして、跡形もなく消し飛んだ……。

バン「な………!?!」

キング「あの十戒を…… 一瞬で4人も……」

ディアンヌ「シン…… やだ…… 怖いよ……」

グロキシニア「…… 君達はどこから早く逃げるっス!!」

ドロール「そして、できるだけ多くの人々を非難させなさい……」

キング「グロキシニア様……!?!」

ディアンヌ「ドロール…… さん？」

キュアブラック「…… どういう事？」

キュアホワイト「あなた達、十戒は……」

シャイニー・ルミナス「敵ではないのですか!?!」

グロキシニア「確かに、あつしらは十戒…… そして

君達の敵っスけど……」

ドロール「優先順位というものです…… まずはあの次元の王を

止める事が先決なのだ。」

グロキシニア「わかつたらさっさと行くっス!!君達にチョロチョロ
されたら

邪魔なんスよ。行くよドロール君!!

霊槍バスキアス第2形態…『守護虫(ガーディア

ン)』!!

ドロール「巨神の抱擁(ギガント・エンブレス)!!」

と、ドロールは『巨神の抱擁(ギガント・エンブレス)』で

ラグナ(次元の王)を岩石の中に閉じ込めると、

グロキシニアが『守護虫(ガーディアン)』で攻撃を仕掛けるが…。

ラグナ(次元の王)「ハアーーーーーッ!!!」

「バアーーーーーッ!!!」

グロキシニア「うわあああああああーーーーーっ!!!」

ドロール「ぐおわあああああーーーーー!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーッ!!!」

!!!

と、ラグナ(次元の王)は体から強大な魔力で形成された

エネルギー体を放ち、『巨神の抱擁(ギガント・エンブレス)』と

『守護虫(ガーディアン)』を一瞬で消滅させると、

そのままグロキシニアとドロールに直撃し、大爆発を起こした。

キング「グロキシニア様ーーーーーっ!!!」

ディアンヌ「ドロールさーーーーーん!!!」

エスタロツサ「おいおい…マジかよ…。」

メラスキュラ「じよ…冗談じゃないわ!!あんな化け物の相手なん

て、

出来るわけが無いでしょ!!」

「バアーーーーーッ!!!」

と、死の恐怖を感じたメラスキュラはその場から逃走しようとする
が…。

「シュン!!」

ラグナ(次元の王)「フフフ…どこへ行くのだ?」

メラスキュラ「ひ…ひいいいいいいーーーーーっ

!!!!

ラグナ（次元の王）「魔法剣（アタック・ヴァイト）…」

稲妻落（ライト・ブレイカー）!!

「ズドバー——————ッ!!!」

メラスキュラ「ぎやああああああ——————ッ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッ——————ッ!!!」

と、ラグナ（次元の王）は、逃走を図るメラスキュラに一瞬で追いつき、

魔法剣（アタック・ヴァイト）・稲妻落（ライト・ブレイカー）を放ち、消滅させた。

風「あ…あ…あ…」

海「そ…そんな…」

光「ば…化け物…」

クレフ「3人共…しつかりするんだ!!」

と、ラグナ（次元の王）のあまりに強大な力と非情さに恐怖する光・海・風の3人…

ラグナ（次元の王）「フッフ…魔法剣（アタック・ヴァイト）か…久しぶりに使ってみたが、悪くはないな…」

キュアダイヤモンド「久しぶり…?」

キュアソード「どういう事…?」

エスタロツサ「隙あり!! 反逆剣（リベリオン）!!」

「バババババババババツ!!!」

ラグナ（次元の王）「フハハハハハハハハハハ!! 隙ありだと…魔法剣（アタック・ヴァイト）・疾風斬（カマイタ

チ）!!」

「ズババババババババババツ!!」

エスタロツサ「かかったな… 全反撃（フル・カウンター）!!」

「シユン…」 「ドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!」

エスタロツサ「ぐおあ——————ッ!!!」

と、エスタロツサが攻撃を仕掛けると、ラグナ（次元の王）は

疾風斬（カマイタチ）ですかさず反撃する。その瞬間、
エスタロツサは物理攻撃をすべて跳ね返す

『全反撃（フル・カウンター）』を発動させるが、攻撃を跳ね返せずに
全ての斬撃を受けてしまい、大ダメージを負った。

エスタロツサ「お…お…お…お…」

ラグナ（次元の王）「愚かな…貴様ごときの魔力で、私の攻撃を

跳ね返せると思っているのか…？」

「バアーーーーーッ!!!」

と、ラグナ（次元の王）はそう言いながら、足元に魔法陣を

出現させると、そこから強大な魔力が溢れ出す。そして、

破壊剣（ラグナロク）を巨大な光の剣へと変化させた。

ねこ娘「あ…あれって!？」

鬼太郎「ま…まさか…。」

ゼルドリス「まずい…兄者ーーーーーっ!!!」

と、ゼルドリスは危険を察知すると、

エスタロツサの所へと向かっていった。

エスタロツサ「う…うえあーーーーーっ!!!」

ラグナ（次元の王）「死ぬ…殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・

ヴァイト）

裁きの鉄槌（オメガ・クロス）!!」

「ゴオオオーーーーーッ!!!」

エスタロツサ「ぐげああああああーーーーーっ!!!」

ゼルドリス「兄ーーーー者ーーーーっ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーン!!!」

と、殲滅魔法剣（ファイナル・アタック・ヴァイト）

裁きの鉄槌（オメガ・クロス）の直撃を受けた

エスタロツサとゼルドリスは大爆発を起こした。

これでバリオス…そして十戒全てがラグナ（次元の王）によって
倒された…。

く アルテミスブリッジ く

犬山まな「バリオス及び十戒…全て撃破されました…。」

ホーク「ムチャクチャだ…強すぎるぜ!!」

エリザベス「あれが…次元の王…何て恐ろしいの…?」
アクア「シン…あなた…。」

「シューーーーーーン…。」

G7部隊「姫様!!メリオダス殿を発見しました!!」

ですが…意識不明の重体であります!!」

メリオダス「……………」

ホーク「メリオダス!!」

エリザベス「ああ…メリオダス様…良かった…」

待ってて…今、治してあげるから!!」

「パアーーーーーッ……………」

と、エリザベスは右目に女神族の紋章を浮かび上がらせると、
メリオダスに魔力を発動させて、回復させようとするが…。

メリオダス「……………」

ホーク「…全然、治らねえ…。」

エリザベス「そんな…どうして…メリオダス様…。」

アクア「多分…バリオスが放った攻撃のせいね…」

確か、あらゆる魔力を無効化するって言っていたから…。」

知世「そ…そんな…。」

アクア「とりあえず…メリオダスを医務室へ!!できるだけの

治療を行ってちょうだい!!」

G7部隊「はっ!!姫様、了解であります!!」

と、G7部隊はメリオダスを医務室へと運んで行った。

エリザベス「メリオダス様…メリオダス様…。」

アクア「エリザベス…ここはいいから、

メリオダスについてあげてちょうだい。」

ホーク「そうだけ、エリザベスちゃん!!後の事は俺達に任せろ!!」
ねずみ男「けっ!!エラそうに…おめえは何にもしてねえじゃねえ

か!!」

ホーク「何だと、ネズミ野郎!!お前も同じじゃねえか!!」

スーパー・ロース・イリユージョン!!」

ラグナ（次元の王）「ほう……しぶといな……ならば!!」
「ブウ……」

と、ラグナ（次元の王）は、ゼルドリスにとどめを刺すべく、
右手に魔力を溜めはじめる。

キュアハート・リバーシア「シ……シン……駄目……」

キュアエース「シン様！もういいです……これ以上は!!」

キュアソード「お願いシン……もう止めて!!」

ラグナ（次元の王）「フハハハハハハハハハハ!!死ね……」

と、ラグナ（次元の王）は右手からエネルギー波を放とうとしたそ
の時……

「ピキピキピキ……」
「ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ!!!」

ラグナ（次元の王）「!!!」

と、突如、空間がひび割れると、そこから巨大な光の柱が

出現する。すると、中から赤くて長い蠶（たてがみ）をした

長身で茶色のコートの様なものを纏い、大剣を手にした男が姿を現
した。

? 「……………」

鬼太郎「あれは……」

ねこ娘「今度は誰よ!?!」

ゼルドリス「お……お前は……」

ラグナ（次元の王）「貴様は……」

レイス「ギガデウス一派ナンバー2……『ヴォルクルス』!!」

ヴォルクルス「……………」

と、そこへ、ギガデウス一派のナンバー2である

『ヴォルクルス』が姿を現した。

ナツメ「何か……凄いのが来ちゃったんですけど……」

トウマ「ギガデウス一派……ナンバー2だって!?!」

ラグナ（次元の王）「フン……ギガデウスの腰巾着か……何しに来た

?

まさか、我を倒しに来たというのならば、

無駄な事だ……」

ヴォルクルス「確かにな……だが本来のお前ならばともかく……

今のお前は遅るるに足りぬ。」

ケロベロス(真の姿)「何やあいつ……出てきたとたん大口叩きよるで……

大丈夫か!？」

さくら「うん……あの人からは何の魔力も感じないけど……。」

マーリン「それは違うぞ、さくら……『感じない』のではない……

『感じる事ができない』のだ……。」

さくら「……えっ?」

ケロベロス(真の姿)「……どういうこっちゃ?」

マーリン「つまり、あのヴォルクルスという者は……我々はもちろん、

それこそあのバリオスや十戒ですら足元にも及ばない程の

領域に立っている……という事だ……。」

アニエス「えっ!？」

アデル「何だと……?」

ラグナ(次元の王)「面白い……試してみるか? ハ
アーーーーーッ!!!」

「バーーーーーッ!!!」

と、ラグナ(次元の王)は右手から凄まじい威力の衝撃波を放ち、
ヴォルクルスを攻撃するが……

ヴォルクルス「……斬!!」

「ズバーーーーーッ!!!」

と、ヴォルクルスはすかさず、右手に持っていた大剣を

振り下ろすと、辺り一帯が真っ白になり、大剣から放たれた

剣圧がラグナ(次元の王)の衝撃波を一瞬でかき消し、

そのまま直撃して、吹き飛ばした。

ラグナ(次元の王)「うおおおおおーーーーーッ!!!」

「ドゴーーーーーッ!!!」

キュアハート・リバーシア「シーーーーーッ!!!」

キュアダイヤモンド「今のシンを…一振りで…？」

レジーナ「何なのよ…あいつ…。」

ヴォルクルス「……………」

ラグナ（次元の王）「お…おのれ…舐めた真似を…。」

ハア……………ツ!!!」

「シュー……………ン…。」

ラグナ（次元の王）「…何!？」

ヴォルクルス「無駄だ…今の私の『斬』でお前の力は消滅した。

もつとも…本来のお前ならば、こつも簡単には

行かないだろうがな…。」

ラグナ（次元の王）「見くびるなよ…貴様ごときの力でこの我

が…

ぬおおおおおお……………ツ!!!」

「ブオワ……………ツ!!!」

と、ラグナ（次元の王）は何とか立ち上がるど、

ありつただけの魔力を解放しようとするが…。

「ババババババババババツ!!!」

ラグナ（次元の王）「うおおお……………ツ!!!」

ヴォルクルス「愚かな…。」

と、ラグナ（次元の王）の体が無理な魔力の解放に耐え切れずに

オーバーヒートを起こして、四つん這いになって倒れてしまっ

た…。

鬼太郎「シン!!」

ねこ娘「自分の力に耐え切れなくなったの…?」

目玉おやじ「マズイぞ…これは!？」

ヴォルクルス「どうやら、ここまでの様だな…

このままお前を葬るのは簡単だが…

それだと何が起ころはわからん…

ギガデウス様の復活に支障をきたしては

いけないからな…ならば!!」

「バア……………ツ!!!」

と、ヴォルクルスはラグナ（次元の王）の周辺に巨大な魔法陣を形成すると、そこから深紅の光が放たれる……。

キュアブラック「な……何よ、あれは!？」

キュアホワイト「空間が……壊れていく……?」

ラグナ（次元の王）「これは……あの時、グランバニアの小娘が

使った、我を封印した……。」

レイス『次元衝撃陣（ディメイション・インパクト）』か!!

だが……何故、あの男が!？」

「シュン!!」

アクア「……どうやら、そうみたいね……。」

ヴォルクルス「……何?」

ラピス「姉姉さま!？」

アンス「どうしてここへ……?」

リータ「まさか、あの人を……。」

ラグナ（次元の王）「貴様……グランバニアの小娘か……何しに来た!？」

アクア「はあ……大ピンチのくせに、相変わらずエラそうね……。」

こうしにきたのよ!!」

「バアーーーーーッ!!」

と、アクアはヴォルクルスに向けて、魔力を解放すると、

『次元衝撃陣（ディメイション・インパクト）』の発動を

抑えにかかった。だが、魔力で圧倒的に勝るヴォルクルスに

全く歯が立たず、発動を抑えきれないでいた。

アクア「くう……。」

ラグナ（次元の王）「貴様……何のつもりだ……我を誰だと……。」

アクア「うるさいわね!!次元の王でしょ!?!?そんなのわかりきってるわよ!!」

でも、その体はシンの物なのよ!!だから……

このまま消えるのは絶対に許さないからね!!」

キュアハート・リバーシア「そうだよ!!シンはあたし達が守る!!」

「バアーーーーーッ!!」

と、そこへキュアハート・リバーシアもアクアの加勢に現れた。
アクア「マナちゃん…あなた…。」

キュアハート・リバーシア「えへへ…アクアさんばっかりにいい思
いは

させないんだから!!」

キュアダイヤモンド「ハートの言う通りよ!!」

キュアロゼッタ「わたしも頑張ります!!」

キュアソード「あたし達のシンを…消えさせなんてしない!!」

キュアエース「その通りですわ!!」

レジーナ「そーよ!!そーよ!!」

キュアブラック「それじゃ、あたし達もいっちょやりますか!!」

キュアホワイト「うん!!」

シャイニー・ルミナス「はい!!」

アニエス「私も…同じ気持ちよ!!」

さくら「わたしも…頑張るから!!」

マーリン「フツ…微力ながら、加勢させてもらおうか…。」

と、そこへキュアダイヤモンド達も駆けつけて、

アクアやキュアハート・リバーシアと一緒に

ヴォルクルスの魔力を押し返そうとしていた。

アクア「みんな…ありがとう!!」

キュアハート・リバーシア「それじゃ、行くよーっ!!」

一同「はあーっ!!」

「ブオーーーーーッ!!」

と、アクア達は力を合わせて、膨大な魔力の波動を発生させると、
ヴォルクルスの魔力を押し返していく。すると、

『次元衝撃陣（ディメイション・インパクト）』の魔法陣が

少しづつ小さくなっていった…。

風「す…すごい!!」

海「何て魔力なの…?」

光「みんな…頑張れーっ!!」

ヴォルクルス「実に見事だ…だが!!」

「ドォー………」

ヴォルクルスは一呼吸置くと、更に魔力を高めて、アクア達の魔力の波動を押し戻していく…。

そして、『次元衝撃陣（ディメイション・インパクト）』の魔法陣がますます広がりを見せた。

小狼「まずい!!」

ケロベロス（真の姿）「さくら!!みんな!!」

目玉おやじ「このままでは…みんな、あの魔法陣に飲み込まれてしまうぞ!!」

アクア「くうう…」

キュアハート・リバーシア「こ…こんなもの…」

マーリン「くっ…やはり、奴の魔力は桁違いだ…。どうしたものか…」

ラグナ（次元の王）「愚か者共め…貴様達ごときの力でどうにかできると

思ったのか…？フンツ!!」

「バァー………!!」

キュアダイヤモンド「キャー………ツ!!」

キュアソード「あぁ………ツ!!」

キュアエース「くうう………ツ!!」

と、ラグナ（次元の王）は、突如、右手から衝撃波を放ち、アクア達を

吹き飛ばした。そして、かろうじて抑えていたヴォルクルスの魔力が

一気に解放されると、『次元衝撃陣（ディメイション・インパクト）』の

魔法陣が完成し、深紅の光がラグナ（次元の王）を包み込み始めた。

ラグナ「……」

アニエス「ううう…」

レジーナ「い…いきなり何するのよ…!!」

マーリン「待て…あれは…？」

「シューーーーーーシューーン……。」

進之介「……。。。。。」

キュアハート・リバーシア「シン!!」

アクア「元に……戻ったの……?」

キュアエース「シン様!!」

と、ラグナ（次元の王）は、放った衝撃波で全ての魔力を使い果たすと、

『次元の王』としての人格が消えて、元の進之介の姿に戻った。

進之介「マナ……ミリカ……みんな……今までありがとう……。」

アクア「シ……ン……?」

キュアハート・リバーシア「な……何言ってるの……?」

進之介「ヴォルクルスさん……だっけ?僕はこのまま『次元の王』……」

そして、『破壊剣（ラグナロク）』と一緒に行くよ……。

その代わりに約束して!これ以上、みんなには手を出さないって!!」

ヴォルクルス「……いいだろう。約束しよう……。」

鬼太郎「シン!!何を言ってるんだ!」

ねこ娘「あんた……こんな所で終わる気なの!」

キュアブラツク「そんな……嫌だよシン……約束したじゃない!!」

キュアホワイト「あたし達の世界を取り戻してくれるって!!」

シャイニー・ルミナス「そうですよ……お願いですから、

いなくならないください!!」

進之介「……今の僕はこの世界を救うどころか、壊してしまうかもしれない……」

だから、これで良いんだ。大丈夫!!みんなが力を合わせれば

きつと乗り越えられるよ!!」

「グオオオオオーーーーーシューーン……。。。」

と、深紅の光がさらに増幅されて、進之介を完全に包み込んだ。

アクア「嫌ーーーーーシューーっ!!」

キュアハート・リバーシア「シューーーーーーシューーン……シューーン!!!!!!」

ヴォルクルス「… 『次元衝撃陣(ディメイション・インパクト)』!!」
「ピカーーーーーーッーン!!」

ヴォルクルスがついに『次元衝撃陣(ディメイション・インパクト)』を

発動させると、魔法陣が次元の壁を破壊し、上空に次元の狭間が出現した。

そして、進之介を包み込んだ深紅の光が上空に向けて急速に上昇し、

次元の狭間へと押し上げられる。

進之介「さようなら、マナ… ミリカ…」

さようなら、グラン・ゲインズみんな…。」

「シューーーーーーッーン…。」

そして、進之介は、そう言い残すと、深紅の光と共に、次元の狭間へと封印されていった…。

キュアダイヤモンド「あ… あ…。」

キュアソード「そ… そんな…。」

レジーナ「う… 嘘だつて言つてよ…。」

キュアロゼッタ「ううう…。」

キュアエース「シン様ーーーーーッつ!!」

ヴォルクルス「さらばだ… 誇り高き戦士…」

次元の王候補(ディオケイター)・ラグナよ…。」

「バアーーーーーッ!!!」

と、ヴォルクルスは左手を上空に掲げて、魔力を発動させると、ラグナに倒されたバリオス… そして十戒全員が全快、あるいは復活を遂げた…。

バリオス「…。」

ゼルドリス「…。」

バン「何だど!!」

キング「くっ!!」

ディアンヌ「そ… そんな…。」

ゼルドリス「すまないな、ヴォルクルス… お前まで引きずり出し

てしまつて……。」

バリオス「しかし……何故、わざわざ封印を？あなたの力ならば、葬ることもたやすくできたはず……。」

ヴォルクルス「全てはギガデウス様の復活の為だ……それ以上でもそれ以下でもない……。」

モンスピート「まあ、良いじゃない……これであの忌々しい次元の王は居なくなつたんだから。」

デリエリ「ん……。」

フラウドリン「ところで……あの人間達は、どうするのだ？」

ヴォルクルス「この世界にもう用は無い。撤収するぞ……。」

このまま……。」

ヴォルクルス「……。」

と、憤るメラスキュラに対して、ヴォルクルスは睨みを効かせて、抑止した。

メラスキュラ「う……わ……わかつたわよ!!」

グロキシニア「では、戻るとしまししょうか!!命拾ひしたっスね、君達……。」

ドロール「次元の王候補（ディオケイター）・ラグナ……」

いや、桑田進之介に感謝するのだな……。」

グレイロード「フフフフ……。」

エスタロツサ「あーあ……このままじゃ面白くねえな……」

やつぱり、2〜3人ぐらいは……。」

ゼルドリス「兄者!!」

エスタロツサ「冗談だつて!!怖い顔するなよ……。」

バリオス「では、グラン・ゲインズの諸君……ごきげんよう!!」

これから先、頑張つて足掻いてくれたまえ!!」

「シュー……。」

と、ヴォルクルスとバリオス……そして、十戒全員は空間のひづみの中に入つていき、消えていった……。」

アクア「……。」

マナ「……………」

さくら「アクアさん… マナさん…。」

小狼「さくら… 今は、そつとしておいてやろう…。」

ケロベロス「せやな…。」

マーリン「では、みんな… 先にアルテミスに戻るとしようか…。」

と、グラン・ゲインズのメンバーはその場を離れて、

一足先にアルテミスへと戻っていった。

アクア「ううう… シンが… シンが…。」

マナ「居なく… なっちゃった…。」

マナ・アクア「うわあああああああー！！！！ん！！！！」

そして… 進之介が消えた場所で、マナとアクアは

お互いを抱きしめ合いながら号泣し、悲しみに暮れていくのであつた…。

ラグナ（次元の王）の圧倒的な力で、バリオス・ヴィダール
そして… 十戒全員は一度は倒された。しかし、突如現れた
ギガデウス一派のナンバー2であるヴォルクスの介入により、
進之介は次元の狭間に封印されてしまい、バリオスと十戒が
再び蘇ってしまった。しかし、彼らは進之介との約束を守り、
グラン・ゲインズを見逃して、第5世界から消えていった…。
だが… その代償はあまりに大きく、進之介はいなくなり、
メリオダスも又、意識不明の重体に陥ってしまったのであつた…。
一度にエース2人を失ってしまったグラン・ゲインズ…。
これからの戦いは一体、どうなってしまうのであろうか!?

第30話 く 聖戦（バトル）!! 『王』と『神』その果てに…

く （完）

アンズ「でも……まだ不安はありますよ。」
リータ「その為に、わたし達が援護しているんです。」

焦りは禁物ですよ!!」

と、戦闘を終えたグラン・ゲインズのメンバーは
ラスト・ウォーリアの基地へと戻っていった。

く ラスト・ウォーリア基地内 く

沖原「みんな……ご苦労だったな。今はゆっくりと

休んでくれ。」

刻「ああ!とにかく休ませてもらうぜ……。」

エンマ大王「すまないな、沖原……レグルスとの戦いに

巻き込まれてよ……。」

沖原「いえ、構いません。そちらの状況は理解しているつもりです
し……。」

今は一致団結して、この状況を打破する事が先決ですから。」

泪「おい、ぬらり!!いつまでこんな事を続けているつもりだ?」

ぬらりひよん「今は辛抱してほしい。ラー・カインに打って出られ
る程の

戦力は現状の我々には無い……。」

エンマ大王「桑田進之介が居なくなり、メリオダスが目を覚まさない
い

この状況ではな……。」

沖原「桑田進之介……実に惜しい人材を失いました……。」

だが、彼がいなければ、今頃この世界は

終わっていたかも知れませんか……。」

アキノリ「ああ。でも、なんだかじれたいな……。」

トウマ「確かに……このまま防戦一方だと、いずれは

こちらが参ってしまうかもしれない……。」

砂かけ婆「そうじゃのう……。」

子泣き爺「何か良い方法は無いんかのう……?」

ナツメ「うーん……せめて、シヤナちゃんが戻ってきてくれた
ら……。」

アキノリ「それは……ちよつとアテにできないだろ？」

エンマ大王「ああ……『フレイルムヘイズ』のシヤナか……」

確かに、加わってくれたら大きな戦力にはなるが……。」

鬼太郎「シヤナ？」

ねこ娘「誰よ？それに、『フレイルムヘイズ』って？」

ナツメ「空亡との戦いでわたし達と一緒に戦った女の子で

すごく強いんです!!」

トウマ「後、『フレイルムレイズ』というのは……『紅世の王』と契約し、

力を得た人間の事なんだ。シヤナはそのフレイルムレイズの

中でも

1. 2を争う程の実力者なんだ。」

ねこ娘「じゃあ……その『紅世の王』って？」

ぬらりひよん「私から説明しよう。この世界には妖魔界の他に、

『紅世』という異世界が存在する。そこの住人を

『紅世の徒（ともがら）』と呼び、

その中でも強大な力を持つ者の総称を

『紅世の王』と呼ばれるのだ。

そしてレグルス帝国軍が侵攻してくる少し前まで、

その『フレイルムレイズ』と『紅世の徒』の争いが

行われていた。」

目玉おやじ「それは何故じゃ？」

ぬらりひよん「紅世の徒は、この世に存在し続ける為に、

人を喰らうことで『存在の力』というものを得ていた。

しかし、そうする事でこの人間界と紅世のバランスが

崩れることを危惧していた紅世の王達は、人間達と

契約を交し、フレイルムレイズを多数、誕生させて

紅世の徒を討つ為に、これまで戦いを繰り返していた

のだ。」

キング「人を喰らうって……まるで魔神族みたいだね。」

バン「どこの世界にでもいるんだな、そういう化け物はよ……。」

ディアンヌ「でも…その戦い、どうやって終わらせたの？」
エンマ大王「紅世の徒の大集団である『仮装舞踏会（マル・バスケ）』
という

組織の盟主が人間界と紅世の狭間に人を喰らう必要の
無い

新世界『無何有鏡（ザナドウ）』を創造し、そこにフレイ
ムヘイズと

紅世の徒を移住させて、永きに渡る抗争に終止符を打っ
た…

というわけだ。」

トウマ「ちなみに、その盟主というのが、シヤナの恋人である

『坂井悠二』って人だったんだけどね。」

ねこ娘「ということは…そのシヤナって子と悠二って子が

戦った事になったんだよね。」

アキノリ「ああ。人と紅世の徒の共存が達成されるまで、一人で

『無何有鏡（ザナドウ）』に行こうとした悠二さんと、

一諸に行く事を望んだシヤナとな…まあ、最後は

悠二さんもシヤナの思いを受け入れて、2人で

『無何有鏡（ザナドウ）』に旅立って行ったんだ。」

光「わあ…すつごいロマンチックね!!いいな…。」

海「うん!!」

風「そうですね!!」

鬼太郎「そうだとしたら…こちらの世界に戻ってくる事は

ないかもしれないね。」

エンマ大王「まあ…そもそも『無何有鏡（ザナドウ）』に

一旦、行っちまったら人間界には

干渉できなくなるらしいからな…。」

マーリン「あの『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』の二人なら

行けるかもしれないが…。」

ケロベロス「それこそアテにならんやろ…。」

それに、レイスの奴はどないしたんや？

シンが居なくなつてから姿が見えんけど……。」

さくら「レイスさん、もしかして……シンさんを救い出す方法を
探しに行ったのかな……?」

小狼「そうだといいいけどな……。今は、俺達に出来る事を

精一杯やっつけていくしかない。例え、シンが居なくても

敵は待ってくれないからな……。」

零「それと……あの女隊長とプリキュアとかいう連中は

まだ塞ぎこんでいるのか?」

鬼太郎「アクアさんやマナ達か……。」

ねこ娘「やっぱり……まだ立ち直れないのね……。」

アニエス「……。」

アデル「アニエス……気持ちはわかるが……。」

アニエス「わかつてるわ、お姉様。でも……でも……ううう……。」

ディアンヌ「その気持ち、わかるよ……僕でも好きな人を

守れなくて、目の前から消えちゃったら、

そうなると思う……。」

キング「ディアンヌ……。」

ラピス「シンの奴……姉姉さまを泣かせやがって……

帰ってきたら、一発ブン殴ってやる!!」

アンズ「ラピス!!それは……。」

リータ「シンだって、どんな思いで……。」

ラピス「んな事はわかつてるよ!!でも……悔しいんだよ……

あんな化け物達相手に何もできなかった自分に……。」

さくら「ラピスちゃん……。」

マサト「……沖原さん、少し外に出てきても良いですか?」

沖原「それは構わんが……。」

美香「マサト君、それなら私も一緒に……。」

マサト「ごめん……今は一人で考えたい事があるんだ……。」

じゃあ、行ってきます。」

と、マサトはその場を離れて、基地の外へと出て行った。

美香「マサト君……。」

沖原「桑田君の一件で、思うところがあるのだろう…。」

今は、そつとしておいてやれ…。」

美香「はい…。」

「基地の外」

マサト「進之介君はこの前の戦いで、『次元の王』が表に出てきたつて

聞いたけど… 僕もこのまま戦い続けていたら、いずれ
そうなってしまうのかな…？」

「シュン!!」「シュン!!」

マサト「!!!誰だ!？」

リ・アイン「阿久津マサトだな？」

リ・マイン「我々と来てもらおうか…。」

「ドボオツ!!」

マサト「ゲボオツ…。」

と、リ・マインはそう言いながら、マサトの腹を殴り、気絶させ
た…。」

リ・アイン「他愛もない… 『天滅槍（ゼロライド）』が無ければ、
こんなものか…。」

リ・マイン「とても、ヴァンスターを倒したとは思えない…。」

行きましょう、お姉様…。」

リ・アイン「ええ… マイン…。」

と、リ・マインが気絶させたマサトを担ぎ上げて、

その場から立ち去ろうとした時…。」

?①「待て!!」

?②「あなた達… その子~~を~~どうするつもりなの!？」

リ・アイン&リ・マイン「!!!」

と、そこへ背中に剣を携えた青色の髪 of 青年と、将校風の服装をし
た

黒い長髪の女性が現れた。

リ・マイン「何者だ!？」

リ・アイン「何者でも構わないわ。この場を見られたからには

生きて返すわけにはいかない……

ハアーーーーーッ!!!」

「バキィーーーーーッ!!!」

?①「……………」

リ・アイン「何!?!」

リ・マイン「お姉様の蹴撃を……いとも簡単に受け止めた……?」
?②「これでも喰らいなさい!!」

「バン!!バン!!バン!!」

リ・アイン「くっ……」

リ・アインは、青い髪の青年に攻撃を仕掛けるも、
難なく受け止められて、黒髪の女性が、すかさず
持っていた銃で反撃した。

リ・アイン「マイン……この者、かなりの手練れだぞ……」

だが、相手をしている時間はない。

あれを使いなさい!!」

リ・マイン「はい、お姉様!!」

「ブオーーーーーッ!!!」

?①「くっ……」

?②「きやあ!!」

と、リ・マインは自身たちの周りに猛吹雪を発生させると、
その場から姿を消した。

?①「くそっ!逃げられたか……」

?②「あの子……さらわれちゃったわね……」

ひよつとして、この先にある基地みたいな

建物の子かしら……?」

?①「とりあえず、あの建物に行ってみるか……。んっ!」

?②「どうしたの?」

?①「何かが来る……。それも多数……」

く ラスト・ウォーリア基地 く

「ファン!!ファン!!ファン!!ファン!!」

沖原「警報!?何事だ!!」

職員「レグルス帝国軍…多数出現!!」

刻「またかよ!?!」

遊騎「結構な数やな。」

泪「だが…どうやらザコだけじゃないようだな!!」

鬼太郎「あれは!?!」

ナツメ「親衛隊（ホワイトナイツ）だ!!しかも2人!!」

零「いよいよラー・カインも本気でこの基地を潰しに来たか…。」

光「でも…絶対に負けられない!!行こう、海ちゃん!風ちゃん!」

海「ええ!!」

風「はい!!」

沖原「美香!!マサトを呼び戻すんだ!!」

美香「それが…さつきからマサト君と連絡が取れないんです。」

沖原「何だと!?!」

ラピス「マサトの奴…どこをウロウロしてるんだよ!?!」

アンズ「文句を言っても始まらないわ。」

リータ「わたし達も行きましょう!!」

沖原「美香!!マサトの捜索に向かってくれ。」

まさかとは思うが…。」

美香「わかりました!!」

鬼太郎「行こう、みんな!!」

ねこ娘「ええ!!」

さくら「はい!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーは再びレグルス帝国軍を
迎え撃つ為に出撃して行った。

???
? ? ?

?「煉獄に来た感想はどうだ?今回は派手にやられたな、メリオダ
スよ…。」

メリオダス「のぞき見とは、あんたも面白い趣味だな!!」

?「何!?!我が忠実な目が、全てを見せてくれただけの事よ…。」

メリオダス「あっそう!!」

?「しかし…あのバリオスとやらもやるではないか…」

貴様を一撃で、死地に追い込むとはな……。」「
メリオダス「けど、俺はあんたに受けた呪いのおかげで、何度でも蘇る。」

皮肉な話だな!!ニツシツシツシツ……。」「

?「強がりはやせ。恐怖か怒りか。貴様の震えが手に取るように

伝わってくるぞ……。」「

メリオダス「さてさてさーて!!何のことやら……。」「

?「まだ嘘ぶくか!!貴様は、己が生に終止符を打てぬだけにあらず……」

かつて、最強の魔神の名をほしいままにした貴様が……

あの女のせいで役立たずの骨抜きにされて、早3000年……

それが今、その状態にまで戻れたのは誰のおかげだ……?」

メリオダス「……。」「

?「ここへ来る度に、我が貴様に目生えし感情を喰らってやった

からに他ならない……。さあ!!此度も私の飢えと渴きを

満たすが良いぞ!!」

メリオダス「くっ……。」「

?「私は感情を養分に失われし力を蓄え……。貴様は最強の魔神に

再び近づく事ができる……。喜ばしかろう……。我が息子よ!!」

メリオダス「やれるもんなら……。やってみろー……」
!!」

と、メリオダスは謎の存在に攻撃を仕掛けていった。

く 基地の外 く

?「ホー……ホーツホツホツ!!ここですか……」

レジスタンス軍の新たな拠点とやらは……。」「

デューク「ええ……。しかし親衛隊（ホワイトナイツ）である

我々を2人も派遣するとは……。ラー・カイン様も

本格的にレジスタンス軍を葬る気かもしれませんね……。」「

鬼太郎「あれは!?!」

ナツメ「デュークだ!!」

アキノリ「あいつ… また来たのかよ!!」

トウマ「それと… もう一人は誰だろう?」

?「ホー… ホーツホツホツ!! はじめまして、

レジスタンス軍のみなさん… 私の名はフリージン。

親衛隊（ホワイトナイツ）の一人です。」

刻「フリージン… ?」

平家「おや? 私はてつきり、あの悪（クズ）の帝王… 『フリーザ』
かと

思いましたが…。」

泪「ああ… あの悪（クズ）中の悪（クズ）野郎か…。」

遊騎「そういや、聞いたことあるな…。」

零「俺が最も燃え散らしたい悪（クズ）ナンバー1か…。」

フリージン「ああ… 彼と私は容姿も声も瓜二つらしいですから、

よく言われますが… しかし、心外ですねえ…。」

あの宇宙のゴミと高潔なるこの私を一緒にされて

は…。」

お礼と言つては何ですが、これをプレゼントして

差し上げましょう!!」

「ブウ…。」

と、フリージンはそう言いながら指先に気を集中させると、

巨大なエネルギー弾を形成した。

フリージン「あなた達… 死にたくなければ、そこをどきなさい!!」

レグルス兵の集団「ひ… ひい…。」

キング「な!？」

ディアンヌ「何よ、あれは!!」

ゴウセル「この力… 十戒と同等… いや、それ以上かも

しれないな…。」

バン「まずいぜ!! 団長がいないのによ!!」

マーリン「エスカノールもこの前の戦いのダメージが

まだ癒えぬままだ…。」

フリージン「ホ… ホーツホツホツ!! 死になさい!!」

「ゴォー……」

と、フリージンは、グラン・ゲインズのメンバーめがけて、エネルギー弾を放ったその時……。

?①「バーニングアタック!!」

「ドォー……ッ!!」「ドカー……ーン!!」

フリージン「何!？」

鬼太郎「何だ!？」

さくら「あ……あの人……」

と、そこへ青い髪の青年が姿を現し、『バーニングアタック』と呼ばれる

エネルギー波でフリージンのエネルギー弾を相殺した。

そして、あの黒髪の女性も姿を見せた。

?①「……………」

?②「みなさん!!大丈夫ですか!？」

キング「う……うん。」

バン「誰だ?お前らは……」

?①「俺の名は『トランクス』といいます。」

?②「私の名は『マイ』です!!」

マーリン『『トランクス』に『マイ』か……』

お前たち……何故こんなところに?」

トランクス「事情は後でお話します。今は、あいつらを

倒すのが先です!!」

ねこ娘「あんた達……手を貸してくれるの?」

マイ「はい!!こちらもこの辺の状況が知りたいですし……」

マーリン「いいだろう……ならば行くとしようか!!」

フリージン「おやおや……とんだ珍客ですねえ……」

あなた、『サイヤ人』ですか?」

トランクス「貴様は……フリーザか!?何故、こんなところにいるんだ!!」

刻「何だあいつ……フリーザを知っているみたいだな。」

泪「知ってるどころか……まるで戦った事があるみたいな口ぶりだ

な。」

平家「なるほど…もしかしたらあの2人、『D・B次元』の人間で
すか…。」

フリージン「くっ…あなたもこの高潔なる私とあの宇宙のゴミを
一緒にする気ですか?!いいでしょう…お礼にここで

レジスタンス軍もろとも消して差し上げますよ!!」

トランクス「消えるのは貴様だ…ハアーーーーーッ
!!」

「ブオワーーーーーッ!!!」

と、トランクスはそう言いながら、気を最大限に高めると、
髪が逆立って金髪になり、稲妻状の火花を帯びた黄金のオーラを
纏って、変身した。

「シンシンシンシンシンシン…。」「バリバリ!!バリバリ!!」

トランクス（超サイヤ人2）「くたばれ!!」

さくら「ほえーーーーーッ!!!」

鬼太郎「な!?!」

目玉おやじ「何じゃ!姿は?!」

光「す…すごい…。」

平家「なるほど…あれが『超サイヤ人』ですか…素晴らしい!!」
フリージン「くたばるのは…そちらですよ!!」

「ドドドドドドドドドド!!」「ドゴーーーーーッ!!!」

と、フリージンは指先からビームを連続してトランクスに向けて放
つが…。

トランクス（超サイヤ人2）「……………」

バン「マジかよ!?!」

キング「ほとんど無傷だ……………」

フリージン「バ…バカな……………」

と、トランクスには全く通じておらず、ほぼ無傷の状態で
爆発の煙から姿を現した。

トランクス「今度はこちらから行くぞ…ハアーーーーーッ!!」
「バキーーーーーッ!!」

フリージン「ぐわーーーーーっ!!」

と、トランクスはフリージンを空中に蹴り上げると、そのまま両手を頭上に掲げて、巨大な光弾を形成する。

トランクス（超サイヤ人2）「これでとどめだフリーザ：『フィニッシュ・バスター』!!」

「ゴオーーーーーっ!!」

フリージン「だから私はフリーザではない：うぎやーーーーーっ!!」

「ドドドドドドドドドドドドッカーーーーーーっ!!」

と、フィニッシュバスターの直撃を受けたフリージンは

最期までフリーザと勘違いされたまま大爆発し、消滅するのであった……。

ラピス「す……すげえ……」

アンズ「親衛隊（ホワイトナイツ）をあかも簡単に……」

リータ「これは……」

デューク「やれやれ…… 親衛隊（ホワイトナイツ）に昇格したばかりだというのに、

調子に乗りすぎですよ……。今日は、この辺にしておきましょう。」

「シューーーーーーっ……」

と、フリージンが消滅した後、デュークはレグルス兵の集団と共に、その場から撤退していった……。

トランクス（超サイヤ人2）「待て!!」

マイ「トランクス!!もういいわ。戻ってきて!!」

トランクス（超サイヤ人2）「わかった……」

「シューーーーーーっ……」

と、トランクスは超サイヤ人2の状態から、元の姿に戻った。

トランクス「ふう……。マイ、怪我はないか？」

マイ「私は大丈夫よ!!」

マーリン「2人共、よくやってくれた。礼を言わせてもらおうぞ……。トランクス「いえ…… お礼なんて不要です。」

マイ「それよりも… あなた達は、あそこの基地みたいな

建物の関係者ですか？」

鬼太郎「ああ!! 僕達の拠点だよ。」

さくら「わたし達… 『グラン・ゲインズ』なんです!!」

トランクス「グラン… ゲインズ?」

マイ「あの… もし良かったら、話を聞かせてくれませんか?」

マーリン「いいだろう。それはこちらも同じ事だしな…。」

我々についてきてくれ!!」

ラピス「そういや… 結局、マサトの奴… どこに行ったんだよ?」

アンズ「今、美香さんが懸命に搜索しているわ。見つければ

いいんだけど…。」

リータ「心配ですね…。」

トランクス「マサト… ? ひよつとして!!」

マイ「さっきの男の子ね!!」

ナツメ「あの… マサト君を見かけたんですか!？」

アキノリ「どこにいるんだよ!？」

マイ「… ごめんなさい。妙な女2人組にさらわれてしまった

の…。」

トランクス「俺達も阻止しようとしたんだが… 逃げられてしまっ

たんだ。」

鬼太郎「さらわれた!? 一体、誰が… ?」

目玉おやじ「もしかしたら… 『鉄血龍（オル・ドラゴン）』とかい

う

連中かもしれないの…。」

トランクス「鉄血龍（オル・ドラゴン）… ?」

マイ「だったら… 尚更、あの子を助けなきゃ!!」

行きましょう、トランクス!!」

トランクス「ああ!! それじゃ、皆さん… よろしくお願いします!!」

と、トランクスとマイはグラン・ゲインズのメンバーと共に、

ラスト・ウォーリアの基地へと向かっていった。一方、その頃…。

く ? く

ユラ「阿久津マサト… 起きよ!!」

マサト「… うっ…。」

と、マサトは、リ・アインとリ・マインの2人により、拉致された後、どこかの廃墟へと連れてこられた。

そして、目が覚めるとそこには、鉄血龍（オル・ドラゴン）の首領である

ユラが目の前に立っていた。

マサト「あなたは…?」

ユラ「我が名はユラ… 鉄血龍（オル・ドラゴン）の首領である。」
「バキッ!!ドスッ!!ガスッ!!ベキッ!!グシャ!!」

マサト「グワッ!!ウゲッ!!ギャア!!ウグッ!!ゴエッ!!」

と、ユラはマサトに名を名乗ると、突如、マサトを拳でボコボコに殴り始めた…。

マサト「ゲホッ：ゴホッ… い… いきなり何するんだ…?」

ユラ「憎つくき阿久津マサトよ… あなたは、ヴァンスターを殺しましたね…。」

マサト「ヴァンスター…?あの人か!!でもあれは!!」

ユラ「問答無用!!今、ここで私がお前に引導を渡してくれる!!」

あの忌々しい『木羅マサキ』の亡霊… 阿久津マサトよ!!」

と、ユラはそう言いながら、小太刀の様なものを手に取った。

マサト「木羅… マサキ?誰だよそれは!!」

ユラ「どうやら… ラスト・ウォーリアの者達からは

何も聞かされていないようだな…」

愚かな… 我らが地下で屈辱にまみれている間に

お前は何も知らずにぬくぬくと暮らしていたというのか…。

ならば… このまま死ね!!阿久津マサト!!」

マサト「う… うわ…」

と、ユラはそう言いながらマサトにめがけて、持っていた小太刀を突き刺そうとしていた…。

と、鉄血龍（オル・ドラゴン）に拉致されたマサトは今まさに、

命の危機に直面していた。果たして、ユラが言い放った『木羅マサキ』の亡霊という言葉の意味とは……。

そして、トランクスとマイが第5世界へと姿を現すと、親衛隊（ホワイトナイツ）の一人であるフリージンを打ち倒し、グラン・ゲインズと合流した。

果たして、彼らは何故、この世界に現れたのか……。

又、グラン・ゲインズはマサトを無事に救出することができるのだろうか……？

マサトの運命やいかに!?

第31話 　　H O P E (きぼう) を求めて…… 　　(完)

第32話 怒りと愛と

く アルテミス医務室 く

メリオダス「……………」

エリザベス「… メリオダス様？」

ホーク「どうした？エリザベスちゃん。」

エリザベス「今、微かに手が動いたような…。」

ホーク「えっ!?!メリオダス目覚めたのか？」

エリザベス「今はまだだけど、でも…。」

ホーク「でも？」

エリザベス「私、夢を見たの…。。小さい頃の夢なんだけど…。。」

メリオダス(夢)「エリザベス、心配するなって!!例えいなくなっても、

俺は必ずお前の所に帰ってくるからよ!!」

エリザベス(夢)「本当に…?」

メリオダス(夢)「ああ… 本当だ!!」

エリザベス「……………」

ホーク「へえ… そんな夢を見たのか…。」

エリザベス「だから私、信じているの…。。あなたが必ず

私の所に帰ってきてくれるって… メリオダス!!」

と、涙を流しながらメリオダスに抱き着くエリザベス。

エスカノール「大丈夫ですよ、エリザベス様…。。 団長は必ず

僕たちの所に戻ってきてくれますよ。」

と、隣で寝ていたエスカノールがエリザベスに声をかける。

ディアンヌ「エスカノールの言う通りだよ!!」

キング「オイラ達も団長を信じるよ!!」

バン「団長がこれしきの事でくたばるかよ!!」

ゴウセル「その通りだ。」

と、医務室にバン達もやってきて、エリザベスに声をかけた。

リ・マイン「どうなさいましたか!?!」

ユラ「この者達を逃がすな…殺せ!!」

リ・アイン&リ・マイン「はっ!!」

美香「七龍星（セブン・シユテルン）…。仕方ないわね。

変身よ、マサト君!!天滅槍（ゼロライド）、解放!!」

「ピカーーーーーーッーン!!」

マサト「ちよ…ここで!?!しようがないな…変身!!」

「バアーーーーーッッ!!」

「ブオーーーーーーッッ!!」

と、マサトと美香はゼロライザーへと変身し、外へと脱出した。

ユラ「うわ!!」

リ・アイン「ユラ様!!」

リ・マイン「おのれ…逃がすか!!」

リ・アイン「待ちなさい、マイン!!ユラ様の安全確保が先だ!!」

リ・マイン「うるさい!!ゼロライザーは私が仕留める…邪魔をするな!!」

リ・アイン「何ですって…!?!」

リ・マイン「……………」

「バアーーーーーッッ!!」

と、リ・マインはそう言いながら、ゼロライザーの後を追っていた。

リ・アイン「マイン……………」

ユラ「リ・アインよ…私にかまうな。ゼロライザーの…

阿久津マサトの首を取ってまいれ!!」

リ・アイン「ユラ様…了解いたしました!!」

と、リ・アインもリ・マインの後を追っていった。

ユラ「阿久津マサト…お前の存在だけは、許さんぞ…。」
と、その一方…。

く ラスト・ウォーリア基地 く

沖原「では、君達はそのタイムマシンとやらで移動中に

時空の歪みに巻き込まれた…ということなのか?」

トランクス「はい……。」

マイ「そして、一週間程前にこの世界に流れ着いたんです……。」
さくら「一週間前って……もしかして!？」

鬼太郎「ああ……シンがヴオルクルスとかいう奴に、次元の狭間に封印されてしまった日か……。」

ケロベロス「確か、『次元衝撃陣(ディメイション・インパクト)』とか言うたな……。」

小狼「ああ……とんでもない魔法だったからな……。」

マーリン「どうやらお前達は、その魔法の影響で発生した

時空の歪みに巻き込まれてしまった可能性が高そうだな……。」

マイ「そんなことがあったんですか……。」

トランクス「けど、一人の人間を次元の狭間に封印するって……

どうなっているんだ？」

平家「ところで、あなた達……これからどうするつもりですか？」

トランクス「まずは、あのマサト君を救い出そうと思います。」

それから先のことは、まだ考えていませんけど……。」

マイ「ねえ、トランクス……帰る方法が見つかるまで、

ここでお世話になったほうが良いんじゃないかしら……?」

トランクス「えっ!?でも、迷惑にならないかな……。」

ぬらりひょん「我々は今、この世界を牛耳っているレグルス帝国軍……」

ラー・カインと戦う同志を集めている。

君達も加わってくれたら、心強いのだが……。」

マイ「レグルス帝国軍……さつき、トランクスが倒した敵の仲間ですか?」

トランクス「えっ!?あいつ、もしかしてフリーザじゃなかったのか……?」

刻「おいおい……今頃気付いたのか?」

零「まあ……奴もフリーザに負けず劣らずの悪(クズ)

だった様だから丁度よかったけどな。」

マイ「さっきの敵がこの世界を牛耳っている組織の仲間だったとしたら・・・」

尚更、私達も無関係と言う訳にはいかないわね。」

トランクス「そうだな・・・あの、俺達でよければここでお世話になっても」

良いでしょうか・・・？」

エンマ大王「ああ!! 歓迎するぜ。トランクス! マイ!

もちろん、帰る方法が見つかるまでで構わないぜ!!」

トランクス「はい!!」

マイ「ありがとうございます!!」

「ファン!! ファン!! ファン!! ファン!!」(警報音)

沖原「どうした!?!」

職員「東京に魔神族が多数、出現しました!! それと・・・魔導士らしき人物が

2人存在しています!!」

ねこ娘「魔神族・・・また現れたのね!!」

泪「もしかして・・・十戒とかいう奴らか!?!」

光「違う・・・あれは!?!」

海「あの2人は・・・まさか!?!」

風「・・・・・・。」

アンズ「ここからなら・・・アルテミスで行くしかないわね。」

リータ「でも・・・姉姉さまは今・・・。」

ラピス「・・・・・・ ちよつと行ってくる!!」

「ダダダダダダ・・・・・・。」

と、ラピスはそう言いながら、一目散に走っていた。

アンズ「ちよ・・・ ちよつとラピス!?!」

リータ「まさか・・・・・・。」

沖原「みんな・・・ とりあえず出撃準備をしてくれ。」

マーリン「了解した・・・・・・。」

く アルテミスのとある部屋 く

「シューシューーン。」

ラピス「姉姉さま!!お前ら!!いつまでそうしてる気だよ!!

敵が来てるんだぞ!!はやく準備してくれよ!!」

アクア「……………」

マナ「……………」

なぎさ「……………」

真琴「……………」

亜久里「……………」

レジーナ「……………」

と、そこには進之介が居なくなったショックで虚ろになっていた
アクアやマナ達がいた……

六花「ラピスちゃん……」

あります「ですけど……今、マナちゃん達は……」

ほのか「ずっとこの状態なの……さすがに放ってはおけない
わ……」

ラピス「くっ!?!……」

と、ラピスは険しい表情でアクアの傍へと近づいていく。

アクア「……………」

ラピス「情けねえ……何だよその面は!!」

と、ラピスはアクアの虚ろな表情に激高し、胸ぐらを掴んだ。

アンズ「ラピス!?!」

リータ「何してるんですか!?!」

と、そこへアンズとリータも部屋の中へと入っていった。

ラピス「お前らは黙ってる!!姉姉さま……いや、アクア!!

いつからアンタはそんな腑抜けになっちまったんだ!!

たかが男一人居なくなっただぐらいだよ!!」

「ドボォー……………」

アクア「ぐふ……………」

と、ラピスはそう怒鳴りながらアクアの腹を殴った。

六花「ラピスちゃん!?!」

ひかり「何を!?!」

アクア「げほっ……ごほっ……」

ラピス「どうした… やり返さねえのかよ… だったら!!」
と、ラピスはアクアに向けて更に殴りかかろうとするが…。

「ガシツ!!」

マナ「……………」

と、そこへマナが立ち上がり、ラピスに抱き着くような形で制止した。

マナ「たかが男一人ですって… あなたに何がわかるのよ!!」

アクアさんやわたし達にとって、シンは希望そのものなのよ!!

それを!!」

ラピス「それなら、尚更じゃねえか!!もし、シンが今のお前らを見たら

どう思うんだよ!!」

アクア「知った風な口を利かないで…。」

「バキィ——————ッ!!」

ラピス「ぐわっ!」

と、アクアは立ち上がると、そう言いながら、ラピスの顔面を殴り飛ばした。

アンズ「姉姉さま!」

リータ「ラピス!!」

アクア「ラピス… さっきの言葉、訂正しなさい…。さもなければ…。」

ラピス「へっ… 上等じゃねえか!!こうなりや、お前が目を覚ますまで、

トコトンぶん殴ってやるぜ!!」

「ドガッ!!バキツ!!ドボツ!!ベキツ!!ガスツ!!」

と、ラピスはそう言うのと、アクアをボコボコに殴り始めた。

アクア「あ…ぐ…が…。」

六花「きやあ!!」

ありす「ラピスちゃん… やめて!!」

ラピス「おらおら!!どうしたんだよ!!何がさもなくばだ!!

腑抜けなお姫様!!もういいぜ… てめえは

エンマ大王「話は終わったみたいだな!!」

ぬらりひよん「立ち直った早々すまないが… 出撃準備をしてもらえないか?」

一同「はい!!」

マナ「よーし… 行つくわよー…」

「バチコー…」

と、マナは自分の両頬を力いっぱいビンタをして、
気合を入れなおした。だが…。

マナ「痛ったー…」グスツ… (泣)」

六花「マナ… 叩きすぎだつて…」

真琴「思いつきり腫れちやてるじゃない…」

ラピス「言ってくれりやあ、あたしが思いつきし

ブン殴つてやったのによ…」

なぎさ「いや… それじゃ、マナ死んじゃうつて…」

く 東京 く

?①「ふうん… ここが異世界か… でも、ずいぶんボロボロじゃないか。」

?②「この前、ここででかい規模の戦闘があつたらしいからな…」

その時の被害だろう…」

?①「でもちようどよかつたよ。どうせこれからまたボロボロになるんだしき!!」

?②「油断するなよアスコット… この世界には、あの魔法騎士(マジックナイト)

って奴らがいるらしいからな。」

アスコット「でも… 魔神(マシン)はアルシオーネを倒した一体でしょ?」

僕とフェリオが2人でかかれば…」

フェリオ「まあ… 今回の俺たちの役目は、『エメロード姫』をこの地に

迎える準備をすることだ。魔神(マシン)の事は後からでもいい。」

アスコット「それじゃあ…。まずはこのペット達を遊ばせようかな!!」

魔神族の群れ「ブウウー……」

フェリオ「ん？」

アスコット「どうしたの？フェリオ…。」

フェリオ「何か来る…。」

「シユン!!」

ゼロライザー（マサト）「くそ…。しつこいな!!」

リ・アイン「バカめ…。」

リ・マイン「そう簡単に逃げられると思ったか!？」

と、東京に現れたアスコットとフェリオの前に、

ゼロライザーとリ・アイン&リ・マインが姿を現した。

アスコット「…誰？あの人たち…。」

フェリオ「さあな…。でも、俺達の邪魔をするなら…。」

美香の声「マサト君…。応戦しましょう!!」

ゼロライザー（マサト）「駄目だ…。戦えない…。」

美香の声「どうして!？」

ゼロライザー（マサト）「僕はまた…。人を殺してしまうかもしれない…。」

ましてや、人間の女だ…。」

美香の声「あの人たちは敵なのよ!!戦わなきゃこちらがやられるわ!!」

ゼロライザー（マサト）「それに…。ここにはまだ避難していない人達が

大勢いる…。できないよ!!」

美香の声「マサト君!!」

リ・マイン「猛吹雪（メガ・ブリザード）!!」

「ブオウー……」

ゼロライザー（マサト）「ぐわあ……」

と、リ・マインは猛吹雪（メガ・ブリザード）で攻撃を仕掛けた。

しかし、ゼロライザー（マサト）は、戦いに対する迷いからか避けようともせず、直撃を受けてしまった。

アスコット「…あれ？」

フェリオ「何やってるんだ？あいつ…。」

リ・アイン「だが…さすがは『次元の王候補（ディオケイター）』…。」

これぐらいでは倒せんか…。マイン!!

『氷炎獄砲（フレイ・ザード）』でなければ

仕留められないわ!!」

リ・マイン「私一人でも…倒せます!!」

リ・アイン「マイン!!確実に仕留める必要があるわ…。ユラ様も

見ていらつしやるのよ!!」

リ・マイン「くっ…わかりました…。氷殺波（ブリザード・ランチャー）!!」

「ゴォーーーーーッ!!」

と、リ・マインは氷殺波（ブリザード・ランチャー）を放ち、ゼロライザーの動きを止める。そして…

リ・マイン「炎殺波（フレイム・ランチャー）!!」

「ブォーーーーーッ!!」

と、続いてリ・アインが炎殺波（フレイム・ランチャー）を

放って、ゼロライザーに命中すると、

そこから凄まじい炎と氷の嵐が巻き起こり、

ゼロライザーがダメージを受けていった。

ゼロライザー（マサト）「ぐわあーーーーーッ!!」

美香の声「マサト君!!」

リ・マイン「氷炎獄砲（フレイ・ザード）は私の氷殺波（ブリザード・ランチャー）で

動きを止めてお姉様の炎殺波（フレイム・ランチャー）で仕留める技…。」

私はいつもそう…こうやって、お姉様のサポートをし

てばかり…。」

リ・アイン「これで終わりよ… 『氷炎獄砲（フレイ・ガード）!!』
「ブオワーーーーーッ!!!」

「キーーーーーッ…。」
ゼロライザー（マサト?）「フン…。」

「ドドドドドドドドドドドッカーーーーーーッ…。」
!!!!

と、『氷炎獄砲（フレイ・ガード）』の直撃を受けたゼロライザーは、
大爆発を起こしてしまった。

アスコット「… くっ!？」

フェリオ「けっこうな威力だな、これは…。」

リ・アイン「やったわ… ユラ様!! ついにゼロライザーを…。」

リ・マイン「!? 待って… お姉様、あそこ!!」

ゼロライザー（マサト?）「くっくっくっ… その程度の攻撃でや
れる

俺だと思ったか？」

と、ゼロライザーは大爆発する瞬間に、瞬時に転移して、

リ・アインとリ・マインの背後へと姿を現した。

アスコット「へえ…。」

フェリオ「いつの間に…?」

ゼロライザー（マサト?）「来い… 天滅槍（ゼロライド）!!」
「シューーーーーーッ…。」

と、ゼロライザー（マサト?）がそう言うと、

上空から天滅槍（ゼロライド）が出現し、右手に収まった。その
時…。

「ゴオーーーーーッ…。」

と、そこにアルテミスが現れて、各メンバーが出撃していった。

アスコット「おや?」

フェリオ「どうやら、本命のご登場の様だな。」

リータ「マサトさん!!」

アンス「良かった… 無事だったのね!!」

トランクス「あれが…マサト君なのか？」

マイ「そうみたいね…ずいぶん、格好が違うけど…。」

ラピス「へへっ!!待ってるよマサト!!今、加勢にいくからな!!」

ゼロライザー(マサト?)「その必要は…無い!!死にたくなければ

そっちの獣共の相手でもしているがい

い…。」

バン「ああ!」

ディアンヌ「マサト…どうしちゃったの!」

マーリン「まさか…あの時の状態か!」

光「海ちゃん!風ちゃん!あれを見て!!」

風「やっぱり…フェリオ!」

海「アスコットも…」

アスコット「ふうん…君達が魔法騎士(マジックナイト)?」

フェリオ「まさか…こんな子供だったなんてな…。」

光「そう言うって事は…あの2人も…。」

クレフ「ああ…もう一つのセフィーロのフェリオとアスコットだ

な…。」

海「そしたら…私達が知っているあの2人は…?」

クレフ「それはわからない…だが、あそこに2人がいるという事

は

もしかしたら…。」

風「そ…そんな…フェリオ…。」

と、フェリオの方を見ながら、涙を流して膝をつく風。

光「風ちゃん…。」

リ・アイン「くっ…こうなればもう一度だ…。マイン!!」

リ・マイン「…ゼロライザーは私が倒す!!私は…一人でいい!!」

「ゴォー……」

と、リ・マインは、リ・アインの呼びかけを無視して、

ゼロライザーへと突撃していくが…。」

リ・アイン「マイン!!」

ゼロライザー(マサト?)「天滅弾丸(ゼロ・マグナム)!!」

「キューーーーーーン……」 「バキューーーーーーン!!」
リ・マイン 「ぐわーーーーーっ!!!」

「ドツカーーーーーン!!!」

と、ゼロライザー（マサト?）は天滅槍（ゼロライド）の先端から強力なエネルギー弾を発射すると、リ・マインに命中し、避難している人々を巻き込んで、大爆発を起こした。

リ・アイン 「な……何だ今のは!？」

刻 「おいおい!!」

平家 「これは……いけませんね……」

遊騎 「非難しとる人達まで巻き込みおった……」

泪 「何やってるんだ、あいつは!!」

零 「……」

リ・マイン 「あ……あ……あ……」

と、天滅弾丸（ゼロ・マグナム）の直撃を受けたり・マインは即死は免れたものの、その場で倒れこみ、虫の息となっていた……

ゼロライザー（マサト?） 「フン……まだ息があるか……」

美香の声 「マサト君!! やめて!! 町の人たちがまだ……」

ゼロライザー! （マサト?） 「あれは敵なんだろう? 人形!!」

美香の声 「!!!」

ゼロライザー!! （マサト?） 「天滅弾丸（ゼロ・マグナム）!!」

「キューーーーーーン……」 「バキューーーーーーン!!」

リ・アイン 「マイン!!」

「ドツカーーーーーン!!!」

リ・アイン 「あああああああああ!!!」

と、ゼロライザー（マサト?） はリ・マインに向けて

再度、天滅弾丸（ゼロ・マグナム）を放った。

だが、リ・アインがリ・マインの盾になり、代わりに

致命傷ともいえる大ダメージを受けてしまった。

リ・マイン 「ア……アイン……ど……どうして……?」

リ・アイン 「あ……あなたを……見殺しにできるわけないじゃない……」

い……

私達は…… たった二人の姉妹でしょ……。」

リ・マイン「そ…… そんな……。」

ゼロライザー（マサト？）「茶番は…… 終わりだ!!」

「ドオー……」

と、ゼロライザーは、天滅槍（ゼロライド）を強大なオーラに変化させると、両手に纏った。胸部にある光球に両手を重ねると、凄まじいエネルギーが発生する。

鬼太郎「あれは!？」

ねこ娘「あの時のヤバイ技だわ!!」

さくら「ほえ……」

ケロベロス「みんな!! 逃げるんや!!」

ゼロライザー（マサト？）『王』の力の前に…… 消え去るがいい!!

天滅波動撃（ゼロスレイブ）!!

「ブオー……」

リ・アイン「マイン……。」

リ・マイン「お姉様……。」

「ドドドドドドドドドドドッカー……」

「!!!!!!」

と、リ・アインとリ・マインは最期に姉妹の絆を取り戻しながら、大爆発を起こし、消滅していった……。

そして、この攻撃で町や人々は、その殆どが消滅し、

グラン・ゲインズのメンバーも危うく巻き込まれる事態となつてしまった……。

ゼロライザー（マサト？）「くつくつくつ…… ア……ッハッハッハッハッ!!!」

美香の声「マ…… マサト…… 君……?」

バン「わ…… 笑ってやがるぜ、あいつ……。」

ディアンヌ「マサト…… どうしちやったの…… おかしいよ……。」

「ピーピーピー!!!」

沖原「マサト…… これはどういう事だ……」

お前、自分が何をしたのかわかっているのか!？」

と、ゼロライザーに沖原から通信が入った。
ゼロライザー（マサト？）「言っておくぞ沖原…俺に命令するな…。」

俺を操ろうなどと思うな…

俺はやりたいようにやらせてもらおう…。」

沖原「何だって…？」

「プチン!!」

と、ゼロライザー（マサト？）は沖原にそう言い残し、通信を切った。

アスコット「今のは…かなり危なかったね…。」

フェリオ「ああ…だが、良かったじゃないか。こちらが手を出す手間が省けた。」

光「良かっただって…あんた達、何言ってるんだ!!」

海「私たちが知っているフェリオは…そんなことは絶対に言わないわ!!」

フェリオ「知ったことじゃねーよ、そんなの…。さてと…」

魔法騎士（マジックナイト）とやらの力を見せてもらとするか!!

俺達の使命…いや、試練を果たす為にな!!」

クレフ「試練…だど？」

アスコット「そうさ…僕等が『本物』になる為のね!!」

光「良いわよ…あんた達なんか、私たちの世界を好きにはさせない!!」

海「勝負よ!!アスコット!フェリオ!!」

風「…。。フェリオ…。」

と、ラピスの尽力（？）により、ようやく立ち直ったアクアやマナ達。

そして、七龍星（セブン・シュテルン）であるリ・アインとり・マインを

撃破したゼロライザーだったが、その人格は明らかに豹変し、
残忍で冷酷と化していた。果たして、このマサトの人格の正体
は・・・？

更に、これからもう一つのセフィーロからやってきたアスコットと
フェリオとの

戦いが始まろうとしていた。光達に勝機はあるのか・・・？
そして、フェリオに思いを寄せていた風は今の彼に対して
どのような選択をするのか・・・

この戦いはどのような結末を迎えるのであろうか!?

第32話 　　怒りと愛と 　　（完）

アスコット「へえ…やるじゃない!!」

フェリオ「そうこなくちや、面白くないぜ!!」

光「くっ…フェリオ!炎の…矢……………!!」

海「水の…龍……………!!」

「ブオー……………ツ!!」

アスコット「甘いね!!」

「ブクブクブク…。」「シュー……………ン…。」

と、アスコットは、魔法で大量の泡を発生させると、

炎の矢と水の龍を相殺した。

光「えっ!？」

海「うそ!？」

フェリオ「驚いてる場合じゃねーぜ!!」

「ドカツ!!」「バキツ!!」

光「うわあ……………!!」

海「きや……………!!」

と、その後にすかさずフェリオが瞬時に光と海の懐に入り、蹴り飛ばした。

クレフ「光!!海!!」

フェリオ「さてと…クレフ、これで終わりだ!!」

「ブウ……………ン…。」

と、フェリオはそう言いながら、魔法で大量の蟲を発生させる。

風「フェリオ…やめて!!私です!風です!!」

クレフ「風!!」

フェリオ「何だ?お前…随分と気安いな。お前なんか知らねえつて

言ってるだろ!!」

「ババババババババババババ!!」

風「キャ……………ツ!!」

と、風はクレフの前に立ち、フェリオの説得を試みるも、

フェリオは聞く耳を持たず、発生させた蟲をそのまま放ち、

風にダメージを与えていった。

光「風ちゃん!!」

海「風!!」

風「ううう……。」

フェリオ「おいおい……。もう終わりか？これが魔法騎士（マジックナイト）って

奴の実力なのかよ……。拍子抜けもいいところだぜ。

まあいい……。お前を倒したら、あの2人も後を追わせてやるからよ!!」

アスコット「いや、その前に僕が倒しちゃおうかな!!」

「ブクブクブクブクブク……。」

光「あああー……っ!!!」

海「な……。何よこれ!」

と、アスコットは先程よりも早い速度で大量の泡を発生させると、光と海を飲み込んでいく……。

さくら「光さん!!海さん!!」

小狼「まずいぞ……。火神招来!!」

「シュー……ン……。」

ケロベロス「あかん!!このままじゃ……。」

と、小狼が炎の魔法を放つが、魔力で勝るアスコットの泡をどうにもすることができなかった。

フェリオ「あーあ……。こりや、呆気なく終わりそうだな!!」

さてと、そろそろ覚悟はいいか？」

風「……。そんな事は……。させません……。」

フェリオ「ああ?」

風「フェリオ……。私の知っているあなたとこの私は、

確かに恋仲でした……。でも、私の親友達を

傷つけるというのなら……。あなた達と戦います!!

碧の……。疾風……っ!!!」

「ブオ……ッ!!!」

フェリオ「ぐわ……っ!!!」

アスコット「フェリオ!!」

と、光と海の危機に風はついに吹っ切れて、フェリオに向けて『碧の疾風』を放ち、吹き飛ばした。と同時にその様子に気を取られたアスコットの泡の速度が弱まった。

光「今だ！炎の… 矢—————っ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

アスコット「うわ—————っ!!!」

と、光はすかさず『炎の矢』を放ち、アスコットを攻撃した。そして同時に大量の泡も消えていった。

海「風!!」

光「風ちゃん、助かったよ… ありがとう!!」

風「私… もう迷いません!! 例えあなたがフェリオだろうと、私の親友達… そして、この世界を傷つけるというのなら…

あなた達と戦います!!」

さくら「風さん…。」

ケロベロス「あいつ… 吹っ切れおつたな!!」

小狼「よし… 反撃開始だ!!」

フェリオ「へえ… やればできるじゃねーか!!」

アスコット「フェリオ… こうなったら…。」

フェリオ「ああ… 行くぞアスコット!!」

アスコット・フェリオ「我と契約せし精獣よ… 真の姿を現せ! 真の姿となって

汝を纏いし者、我を招き入れよ!!」

「ブワ—————ッ!!」

光「うわっ!」

海「こ… これは…。」

風「まさか!」

と、フェリオとアスコットはそう言いながら、自身の背後にそれぞれの『魔神(マシン)』を出現させ、一体となった。

さくら「ほえ—————っ!!」

小狼「あれは!？」

クレフ「やはり…あの2人も魔神（マシン）を所持していたか…。」

光「望むところだ…行こう！レイアース!!」

「ブオーーーーーーッ!!」

と、対する光も『炎神レイアース』を出現させて、乗り込んだ。

海「光!!」

風「光さん!!」

クレフ「頼んだぞ、光…。」

レイアース（光）「フェリオ…アスコット…勝負だ!!」

魔神アスコット「たった1体で僕達の相手をするのかな？」

魔神フェリオ「来いよ…返り討ちにしてやるぜ!!」

と、こうしてレイアースと魔神アスコット及びフェリオとの

戦いが始まろうとしていた。一方、その頃…。

レグルス帝国軍基地『ラー・パレス』

ラー・カイン「我々の傘下に入りたいだど？」

？「はい。その代わりに我々の『姫』が、この世界に

降り立つ事を許していただきたいのです。」

と、ラー・カインと白髪で白装束を身に纏った男性が

交渉を行っていた。

ラー・カイン「目的を聞かせてもらおうか。」

？「我々の世界…いわゆる『もう一つのセフィーロ』と呼ばれる
いる

世界は、精神エネルギーの枯渇により、このままだと、

いずれは滅びゆく運命になります…。そこで、

我々の『姫』の願いを叶えるべく、数ある勢力の中でも

一、二を争うほどの力と情報網があるレグルス帝国軍の

助力を賜り、この地に新たなるセフィーロを構築させたいので
す。」

ラー・カイン「なるほど…良からう。貴公らの上陸を許可する。」

？「ありがとうございます。」

ラー・カイン「では早速だが… 貴公らの持つ魔神（マシン）を生み出す技術を

提供してもらおうか。おそらく近い内に、反乱分子どもが

動き出すだろう。魔神（マシン）があれば、大きな戦力増強となる。」

？「反乱分子… あの魔法騎士（マジックナイト）がいるレジスタンス軍…」

そして、グラン・ゲインズという軍勢ですね…。

わかりました。我々の『城』が到着次第、手配致します。」

ラー・カイン「では、交渉成立だ。今後、良い働きを期待しているぞ、

『イーグル』…。」

イーグル「お任せください。これで『姫』もお喜びになることでしょう。

では、私は準備がありますので、これで失礼致します…。」

「シューーーーーー…。」

と、『イーグル』と名乗る白装束の男性は、素晴らしいながらその場から姿を消していった…。

ラー・カイン「……………」

ザマス「ラー・カイン、何を考えている…？」

ゴクウブラック「あの人間達の始末なら、今の俺達だけでも充分だろう…？」

ラー・カイン「今のグラン・ゲインズの戦力ならばな。だが、余が望むのは…

より大きな『力』だ…。」

ザマス「力だと…？」

ゴクウブラック「まさかお前の目的は… 奴らの殲滅ではなく…。」

ラー・カイン「話はここまでにしておこうか…。ザマス、ブラックよ…。」

今からお前達に任務を与える。」

ザマス「任務……だと？」

ゴクウブラック「フン……あの人間達の相手なら喜んで引き受けるがな……。」

ラー・カイン「先程、ポイントX18999に正体不明の反応が4体現れたとの

報告があった。調査に行って参れ。」

ザマス「何だ?!?なぜ私達がその様な事を! 貴様の部下に行かせれば良からう!」

ゴクウブラック「4体……だと?まさか……行くぞザマス……。」

ザマス「何!?もうひとり私の私よ……こんなくだらん事に何故我らが!」

ゴクウブラック「もしかしたら……『奴ら』かもしれん……。」

ザマス「『奴ら』だと……まさか?」

ゴクウブラック「ああ……そのまさかだ。俺の肩につかまれ。

瞬間移動で飛ぶぞ!!」

「シュン!!」

と、ゴクウブラックとザマスはそう言いながら、瞬間移動でその場から姿を消した。

ラー・カイン「これで役者は揃いつつあるな……。さて……歴史はどう動くかな?」

と、ラー・カインは不敵な笑みを浮かべながら、そう語るのであった。

く 東京 く

レイアース(光)「紅い……稲妻……つ!!」

「ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ!!!」

フェリオ「当たらなければ……どうという事はねえ!!」

「シューシューシューシュー……。」

と、レイアースが放った『紅い稲妻』を、魔神フェリオは素早い動きでかわす。

レイアース(光)「は……速い!!」

魔神フェリオ「今度はこっちの番だな!!」

「シユシユシユシユシユシユシユ!!」

「ズバババババババババ!!」

レイアース（光）「うわあーーーーーっ!!」

「ドゴーーーーーん!!!」

魔神アスコット「僕からもプレゼントだよ!!」

「ブクブクブクブク……」

「バリバリバリバリ!!!」

レイアース（光）「ぐうーーーーーっ!!」

と、魔神フェリオは背中の中からの超音波を発生させて

レイアース（光）を攻撃し、吹き飛ばすと、

すかさず、魔神アスコットが大量の泡を発生させて、

レイアース（光）を包み込んでいく……

さくら「光さん!!」

ケロベロス「あかん……このままやったら!!」

ディアンヌ「だったら僕が……うおおーーーーーっ!!」

と、ディアンヌは戦槌ギデオンを振りかぶって、

魔神フェリオに攻撃を仕掛けるが……

魔神フェリオ「お前はお呼びじゃないんだよ!!」

「シユシユシユシユシユシユシユ!!!」

「ズバババババババババ!!!」

ディアンヌ「あああーーーーーっ!!!」

キング「ディアンヌ!!」

だが、魔神フェリオはディアンヌの攻撃をあつさりと

かわすと、そこから超音波攻撃を繰り出し、

ディアンヌにダメージを与えた。

ディアンヌ「ううう……」

魔神アスコット「アハハ！馬鹿な奴だね。ただデカいだけで、

魔神（マシン）に對抗できると思ったのかな？

君も一緒に消えなよ!!」

「ブクブクブクブク……」

ディアンヌ「うわあーーーーーっ!!!」

と、魔神アスコットはそう言いながら、
ディアンヌの周辺にも大量の泡を発生させて、包み込み始めた。
キング「ディアンヌ!!こうなったら...。」
マーリン「待て、キング!!下手をしたらディアンヌにまで...。」
キング「じゃあ、どうしろっていうんだよ!!」
レイアース(光)「ううう...。」
ディアンヌ「だ...誰か...助けて...」
海「このままじゃ!!お願い...セレス!」
風「お願い...ウインダム...私達に...」
海・風「力を貸して!!」
「ピカー...」

と、海と風が両手を組みながら、祈りを捧げると、
2人が謎の光に包まれた。

魔神アスコット「えっ!」

魔神フェリオ「な...何だと!」

さくら「あの光は...」

レイアース(光)「まさか...。」

く? く

海「こ...ここは?」

風「どこでしょうか...?」

?①「海...。」

?②「風?...。」

海・風「!!!」

と、海と風が謎の光に包まれると、そこには青い龍と
緑色の鳳凰が現れていた。

海「あ...あ...セレス!!」

風「ウインダム...来てくれたのですね!!」

ウインダム「海...そして風よ...。」

セレス「汝らの『相手を思う優しき心』『戦い抜く意思の強さ』...。」
ウインダム「そして、『困難を乗り越える知恵』を再び見せてもらっ
た...。」

海「セレス……。」

風「ウインダム……それでは……？」

セレス「ああ……喜んで我らの翼……。」

ウインダム「再び、その身に纏うがいい!!」

「パーーーーーーッ!!」

そして、セレスとウインダムはそう言いながら光と化した。そして……。

〜 東京 〜

「ブワーーーーーーッ!!」

「シュン!!」「シュン!!」

海神セレス（海）「……………」

空神ウインダム（風）「……………」

さくら「ほえーーーーッ!!!」

鬼太郎「あ……あれは……。」

ねこ娘「光と同じロボット……？」

マーリン「フフフ……あれが海と風の魔神（マシン）か……」

魔神アスコット「へえ……。」

魔神フェリオ「ようやくお出ましか。」

セレス（海）「それじゃ、行くわよ!!蒼い……竜巻……ッ!!」

「ブバーーーーーーッ!!!」

「シューーーーーーッ……。」

と、セレス（海）は『蒼い竜巻』を放ち、レイアース（光）と
ディアンヌを包み込んでいた大量の泡を吹き飛ばした。

刻「す……すげえ……。」

零「ふっ……。」

平家「素晴らしい……この力!!」

ディアンヌ「た……助かったよ……。」

レイアース（光）「ありがとう海ちゃん!!そして、セレス!!」
と、レイアース（光）はそう言いながら立ち上がると、

セレス（海）とウインダム（風）に合流し、並び立った!!

レイアース（光）「……………」

セレス(海)「……………」

ウインダム(風)「……………」

クレフ「レイアース…セレス…ウインダム…」

3体の伝説の魔神(マシン)が再び集うとは…」

砂かけ婆「すごい光景じゃわい!!」

アキノリ「ああ!!」

ナツメ「これで形勢逆転ね!!行っけーーーーーっ!!」

魔神フェリオ「アスコット!!」

魔神アスコット「わかつてるよ!!ありつただけの僕のペット…出て

来い!!」

「シュン!!」「シュン!!」「シュン!!」

巨獣アルビオン①「ブオーーーーーッ!!」

巨獣アルビオン②「ブオーーーーーッ!!」

巨獣アルビオン③「ブオーーーーーッ!!」

魔神族の群れ「ブフウウーーーーーッ!!」

と、魔神アスコットは巨獣アルビオンを3体と、

ありつただけの魔神族の群れを召喚した。

バン「何だと!」

零「あの怪物…この間の奴か…。」

アデル「くっ!?!面倒な奴を…。」

魔神アスコット「アハハ!!これだけの数ならまだこちらが有利だね

!!

行け!!ペット達!!」

?「それはどうかしら!!」

魔神アスコット「何!?!」

魔神フェリオ「あれは!?!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!ラブリンク!!」

亜久里「プリキュア!ドレスアップ!!」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

ひかり「ルミナス・シャイニング・ストーリーム!!」

「ピカーーーーーッ!!」

魔神族の群れ「ブヒーーーーー！！」

が キュアハート「愛をなくした悲しい魔神族さん！このキュアハート

あなたのドキドキ取り戻して見せる！！

ハート・ダイナマイト！！」

キュアダイヤモンド「フフ… ハートったら、完全復活ね！！

プリキュア・ダイヤモンドシャワー！！」

キュアロゼッタ「それでこそです！！プリキュア・ロゼッタ・リフレ
クシヨン！！」

キュアソード「あたしも… もう下を向かない！！ソードハリケーン
！！」

キュアエース「シン様が必ず帰ってくる事を信じて… わたくし達
は

前へ進みます！エースショット！ばつきゅくん！！」

レジーナ「そーよそーよ！ミラクル・ドラゴン・グレイブ！！

行っけーーーーーっ！！」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！」

「ババババババババババババ！！！！！！」

魔神族の群れ「プギャー！！！！！！」

と、キュアハート達は圧倒的な強さで、魔神族の群れを
瞬く間に全滅させた。

マイ「トランクス…。」

トランクス「ああ。俺達の出る幕は無さそうだな！！」

魔神フェリオ「おいおい… 何なんだよあいつらは！！」

魔神アスコット「でもまだ… アルビオンが残っている！！」

巨獣アルビオン①「ブオーーーーーッ！！」

巨獣アルビオン②「ブオーーーーーッ！！」

巨獣アルビオン③「ブオーーーーーッ！！」

キュアブラック「あの時の怪物ね！！」

キュアハート「だったら… プリキュア！ラブリバース！！」

「ピカーーーーーッ！！」

と、キュアハート・リバーシアは新必殺技『リバーシア・ファイナ
リー・ハート』

を放つと、アルビオンの破壊光線を瞬時に相殺し、アルビオン3体
を瞬く間に

包み込んだ。

巨獣アルビオン①②③「ブオーーーーーーッ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーッ!!」

!!!!

と、リバーシア・ファイナリー・ハートの直撃を受けた
アルビオン3体は大爆発を起こし、消滅した。

魔神フェリオ「うわっ!?!」

魔神アスコット「何だよこの力は!!」

レイアース(光)「これが思いの力…心の力なんだ!!」

セレス(海)「今度はわたし達が!!」

ウインダム(風)「その力を見せる番です!!」

「パアーーーーーッ!!」

と、レイアース(光)とセレス(海)とウインダム(風)の3体が
眩い光を放ちながら、それぞれ魔法の発射態勢をとった。

魔神フェリオ「な…!?」

魔神アスコット「さつきまでのあいっらじゃない…」

この魔力は…。

クレフ「そう…この心の力こそ、彼女達の強さだ…。

それがわからないお前達は…

この3人には勝てない!!」

レイアース(光)「アスコット…フェリオ…行くぞ!!」

紅い…稲妻ーーーーーッ!!」

セレス(海)「氷の…刃ーーーーーッ!!」

ウインダム(風)「碧の…烈風ーーーーーッ!!」

「ゴオーーーーーッ!!」

魔神アスコット「こ…こんなの…僕は認めないぞ…

うわーーーーーッ!!」

トウマ「今の彼……本当に『阿久津マサト』なのかな……？」
アキノリ「トウマ……そりやどどういう意味だよ？」

トウマ「何といえれば良いかわからないけど……。」

アヤメ「心配ですね……。」

と、グラン・ゲインズのメンバーが悲しき勝利を収めた一方、人格が豹変したゼロライザー（マサト？）がいつの間にか戦場から姿を消していた。そして、同じ頃……

とあるポイント地点　　

「シューーーーーー……。」

レイス「やつと来てくれた様だね……。」

アルト「やつとは何だ……僕達もヒマじゃないんだぞ。」

バイエルン「話は大体聞いた……しかし、もうヴオルクルスが

動き出したとはな……。」

レイス「おかげで私もいらぬ仕事が増えてしまったよ。

ところで、例の物は手に入ったのかい？」

バイエルン「ああ……これだ。」

と、バイエルンはレイスに黒い懐中時計の様なものを手渡した。

アルト「感謝しろよ……それを手に入れるのに、それなりに命懸けだったんだからな。」

バイエルン「まあそういうな……我々として、彼をあのままにする訳には

いかないからな。それがあれば、次元の狭間に風穴ぐら

いは

開けられるだろう……。」

？②「あらあらみなさん……先程から聞いていれば、随分と物騒な話をされていますね。」

？①「次元の狭間を壊すなど……そんなことは『破壊神』の僕でも許されないんだぞ!!」

？③「なあ……さつきから何の話してるんだ？オラさっぱりわかんねーんだけどよ……。」

？④「貴様！さつきの話を聞いていなかったのか!？」

オレ達がここに来た目的を!!」

レイス「バイエルン君…彼らが『D・B次元』の者達か…

しかも、『破壊神』と『天使』のオマケ付きとはね…。」

?①「おい!!破壊神の僕をオマケ呼ばわりするな!!」

?②「ホホホ…いいじゃありませんか。これからは『ギガデウス一派』と

戦うための同志になるのですからね。」

?①「大神官様の命令じゃなければ、こんな事には関わらんぞ!!」
レイス「それはすまなかつたね…。では、私は早速、我が主を

迎えに行くでしょう。後の事は頼んだよ君達!!」

「シューーーーーー…。」

と、レイスはそう言いながらその場から姿を消した。

?④「おい!俺達はこれからどうすれば良いんだ?」

バイエルン「まずはこの世界の現状を見てくれたまえ…。」

そして、頃合いを見てグラン・ゲインズと

接触してもらいたい。」

?③「えーっ!?!そんなことするよりも、オラは早くそのラー・カイ
ンって奴と

戦ってみてえんだよ!!」

?②「まあ…彼らについてはまだまだわからない事が多いですか
らね…。」

今はまだ派手な行動は慎むとしましょう。」

?①「わかったか!」

?③「わ…わかったよ!!」

?④「貴様の事だ…多分わかっていないな。」

アルト「どうでもいいが…僕らはもう行くぞ。」

バイエルン「では諸君、武運を祈るぞ…。」

「シューーーーーー…。」

と、レイスに続いて、アルトとバイエルンもその場から消えていっ
た。

?④「ちっ…胡散臭い奴らだ…。」

- ? ① 「ホホホ… そうと決まれば、まずは食事にしましょうか！」
? ③ 「そーいやオラ、腹減ったな〜!!」
? ① 「早くしろ！僕も腹ペコなんだぞ!!」
? ④ 「はいはい… では!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーが悲しき勝利を収めたころ、
とあるポイント地点ではレイスとバイエルン・アルト…

そして、『D・B次元』から謎の4人組が第5世界へとやってきた。
果たして、彼らは何者なのか…。

また、その彼らに、早速ラー・カインの魔の手が
迫ろうとしていた。

そして、豹変したマサトの今後は…。

これから先の展開は一体、どうなってしまうのであろうか!?

第33話   復活と悲しみの勝利   (完)

第34話 完全覚醒

く ラストウォーリア基地内 く

沖原「マーキュリー大佐、ご苦労様でした。」

アキラ「沖原さん… 今までご心配かけてすみませんでした。」

ラピス「へへっ!! あたしが気合入れてやったからもう大丈夫だぜ!!

なあ、姉姉さま!!」

アンズ「ラピスったら…。」

リータ「また調子に乗って…。」

アキラ「いいのよ2人共、たまにはこうしてケンカするのも

良いものだわ!!」

ラピス「本当か!? よーし、それじゃまたやろうぜ、姉姉さま!!」

アキラ「フツッ、望むところよラピス!!」

トランクス「あの… 沖原さん、マサト君はまだ戻っていないんですか?」

マイ「いつの間にかいなくなっていたんですけど…。」

沖原「いや、まだ戻ってきていないが…。」

バン「そんなことより長官さんよ… さっきのあのヤロウは何なんだ!?!」

キング「オイラ達、危うく巻き込まれる所だったんだよ!!」

ナツメ「沖原さん、マサト君に何が起きたんですか?」

沖原「私にもわからない… だが、彼をゼロライザーにする為に、

殺意と戦意を高める処置を施したのが効きすぎた可能性も

否定できない。」

鬼太郎「殺意と戦意を高める…?」

ねこ娘「あんた… どんな事をマサトにしたわけ!?!」

エンマ大王「そんなに沖原を攻めるなよ!!」

ぬらりひょん「彼をゼロライザーにする為には止むを得ない

事だったのだ。」

マナ「どういうことですか? それ…。」

亜久里「前から怪しいとは思っていましたが…。」

真琴「一体、何を隠しているの!？」

と、そこへマナ達が現れて、エンマ大王とぬらりひよんを問い詰める。

エンマ大王「悪いが、これ以上の事は言えねえ…。」

ぬらりひよん「そういう事だ…。」

マサト(?)「くっくっくっ… そうだろうな、エンマ… ぬらりひよん

そして、沖原… お前達にとっては知られたくない事

!!? だろうからな…。」

沖原「!!!マサト…。」

と、そまへマサト(?)が戻ってきて、そう言った。

リータ「マサトさん…。」

ラピス「おいマサト!! てめえ… どの面下げて戻ってきたんだよ!？」

「ギロツ!!」

マサト(?)「こういう面だが… それがどうかしたか？」

と、マサト(?)は鋭い眼光でラピスを睨みつけた。

そして、それに驚いたラピスは膝から崩れ落ちた。

ラピス「マ… マサト… ?」

アンズ「どうしちやったの!？」

沖原「マサト… お前は…。」

マサト(?)「どうした? まるで亡霊でも見ているかの様な

顔だな… だが!!」

「グイッ!!」

と、マサト(?)はそう言いながら、沖原の胸ぐらを掴んだ。

マサト(?)「さっきも言ったが、俺は俺のやりたい様に

やらせてもらう… 邪魔はさせんぞ。」

沖原「くっ!？」

ナツメ「マサト君、やめて!!」

アキノリ「お前らしくないじゃねえか!!」

マサト(?)「… フン!!」

と、マサトは沖原の胸ぐらを掴んでいた手を離して、その場から立ち去ろうとする。

ディアンヌ「待ってよマサト!!美香はどうしたの!」

マーリン「一緒ではなかったのか?」

マサト(?)「フン… 人形の分際でメソメソと泣きながら出て行っただぞ。」

後は、俺の知ったことではない…。」

ゴウセル「人形…?」

六花「どういう事かしら…?」

レジーナ「何よ、エラそうに!!」

沖原「あの目…あの口調…まさか…まさか!」

ぬらりひよん「大王様…。」

エンマ大王「ああ…あいつ、もしかしたら…。」

アクア「…。」

と、何かを知っているような沖原やエンマ大王達をアクアはじつと見つめていた…。

く 基地の外 く

マサト(?) (回想) 「お前は人形だ… 人形らしくただ俺に従ってればいい!!」

美香「ひどい…ひどいわマサト君… どうして…?」

と、美香はマサト(?) から浴びせられた言葉にショックを受けて、涙を流しながら悲しみに暮れていた。するとそこへ…

ガロン「少女よ…ゼロライザー… 阿久津マサトのパートナーだな…?」

美香「!!!あなたは… 七龍星(セブン・シユテルン)!!」
ガロン「!!!フン!!」

「ブウーーーーー…。」

と、そこへ七龍星(セブン・シユテルン)の一人

『黒龍のガロン』が現れた。そして右手をかざし、

美香を黒い球体に閉じ込めてその場から消し去った。

な…?」

く 青木ヶ原樹海 く

「ピカーーーーーー」

と、青木ヶ原樹海にゼロライザー（マサト?）が出現した。

ゼロライザー（マサト?）「やはりパワーが落ちているな… フン、

だが問題はあるまい…。」

エグザイム「待っていた… 私はこの時だけをずっと待ち望んでいたぞ…」

ゼロライザー… お前を倒すことだけを!!」

と、ゼロライザー（マサト?）の前に、七龍星（セブン・シユテルン）の一人

『白龍のエグザイム』が姿を現した。

エグザイム「では行くぞ!! 白き鉤爪（ホワイト・クロー）!!」

「ドドドドドドドドドド!!」

ゼロライザー（マサト?）「フン… そんなもので!!」

「ブウーーーーーン…。」

「ガガガガガガガガ!!」

ゼロライザー（マサト?）「ぐああ!!」

と、エグザイムは白き鉤爪（ホワイト・クロー）と呼ばれる光弾で攻撃を仕掛ける。対するゼロライザー（マサト）もバリアを張り、防ごうとするが、パワーが急激に下がっている今の状態では

充分な出力は発揮できず、バリアを貫通して、

白き鉤爪（ホワイト・クロー）が次々と直撃し、ダメージを受けた。すると、人格が元のマサトに戻っていた。

ゼロライザー（マサト）「ううう… ここは…?」

ゼロライザー!? 何で今、僕は

変身しているんだ!?!」

「ピーピーピー!!」

沖原「マサト… マサト応答しろ!!」

ゼロライザー（マサト）「沖原さん!? 今、状況はどうなっているんですか!?!」

と、そこへ沖原から通信が入った。

く ラストウォーリア基地内 く

ナツメ「マサト君!!」

トウマ「元に戻ったのか。。。」

沖原「マサト。。。落ち着いて聞くんた。美香が拉致された。」

ゼロライザー（マサト）（通信）「何だって!!」

沖原「だが、君は目の前の敵と戦わなければならない。美香は

元々はサポート役にすぎん。私がここからサポートを行う。

それで事足りるはずだ。できるな?」

ゼロライザー（マサト）（通信）「そんな。。。敵の力もわからないの
に。。。」

沖原「信じるんだ!!ゼロライザーの力を。。。自分の力を!!」

ラピス「おい、おっさん!!何言っつてんだよ!!」

ディアンヌ「いつもよりパワーが下がっているのは

明らかじゃない!!」

ねこ娘「あんた。。。マサトを見殺しにする気なの!?!」

光「そんなことできない!!海ちゃん、風ちゃん、行こう!!」

海「ええ!!」

風「はい!!」

エンマ大王「待て!!」

ぬらりひよん「すまないが、行かせるわけにはいかない。」

と、出撃しようとした光・海・風の前に、

エンマ大王とぬらりひよんが立ち塞がった。

海「エンマ大王。。。」

風「ぬらりひよんさん。。。」

光「ちよつと、そこどいてよ!!」

エンマ大王「行きたきや、力づくで通ってみろ!!」

ぬらりひよん「そういう事だ!!」

アキノリ「おいおい!!」

ナツメ「エンマ様。。。どうしてですか!?!」

ラピス「上等だぜ。。。」

光「だったら!!」

アキラ「ラピス、止めなさい!!」

クレフ「光も剣を収めるんだ!!ここで争っても何もならない!!」

と、戦闘態勢をとっていたラピスと光に、アキラとクレフが止めに入った。

ラピス「姉姉さま!!何でだよ!!」

光「納得できない!!」

クレフ「頼む...ここはアキラ殿に免じて下がってくれ...」

ラピス「...わかったよ。」

光「仕方ないな...」

と、ラピスと光は少々戦闘態勢を解き、引き下がっていった。

アキラ「これでよろしかったかしら?」

ぬらりひよん「アキラ殿...すまない。」

アキラ「ですが...この戦いが終わったら、

ちゃんと説明してもらえますよね?」

エンマ大王「ああ...わかった。」

く 青木ヶ原樹海 く

「ドゴ~~~~~ン!!」

ゼロライザー（マサト）「ぐわ~~~~~っ!!」

エグザイム「この程度なのか...?次元の王候補（ディオケイター）の

力は何者をも凌ぐはずだ...」

ゼロライザー（マサト）「僕はさっきまでどうして...

もしかしたら... またもう一人の僕が...

残忍で冷酷で狡猾なもう一人の...

違う!!あれは僕じゃない!!僕じゃ...」

エグザイム「ならば... 白龍の技を見るがいい!!」 「newpage」

く 鉄血龍（オル・ドラゴン）要塞 く

ユラ「バルキリス!!」

バルキリス「はっ!!」

「ドカッ!!バキッ!!ドスッ!!ベキッ!!ガスッ!!」

美香「あん!!ぐふっ!!うげっ!!」

と、ガロンにより拉致された美香は鉄血龍（オル・ドラゴン）の要塞へと

連れてこられ磔にされると、ユラの命令により、

『雷龍のバルキリス』にボコボコに殴られて、拷問を受けていた。

美香「ううう……」

ユラ「小室美香よ……我が問いに答えよ……。木羅マサキが

15年前に奪った天滅槍（ゼロライド）の事を……。

あれは本来、単体で解放を行うものだ。

だが、ゼロライザーは阿久津マサトとお前の2人で

解放を行っていた。どういう事だ!?

その答えはお前が知っていよう……。」

美香「……」

と、ユラは美香にそう問いかけるが、

美香は鋭い目でユラを睨んだ。

ユラ「いやな目だ……木羅マサキの目に……あの邪眼に……。

バルキリス、続けよ!!」

バルキリス「はっ!!」

「バリバリバリバリ!!」

美香「キャア……」

と、バルキリスは右手から電撃を放ち、美香に苦痛を与えていった。

く 青木ヶ原樹海 く

エグザイム「阿久津マサトよ……恨むなら……己の血を受け継がせた

木羅マサキを恨め!!白き牙（ホワイト・フアング）!!」

「ドオ……」

ゼロライザー（マサト）「この人も……木羅マサキを……?」

ぐわ……っ!!」

と、エグザイムは右手にエネルギーを集中させると、

巨大な白い剣状のビームを発生させて、

ゼロライザーに攻撃し、直撃させた。

ゼロライザー（マサト）「ビームを… 剣のように使うなんて…。」
エグザイム「今のを受けてこの程度か… さすがと言っておこうか。」

ならば、これでどうだ!!」

「バババ!!」

と、エグザイムはそう言いながら、空間から衛星のような物体を出現させて、上空へと打ち上げた。そして…。

エグザイム「チャージ!!」

「ブウーーーーーッーン…。」

ゼロライザー（マサト）「な… 何だ!？」

エグザイム「我が奥義… 受けるがよい!! 白き逆鱗（ホワイト・カイザー）!!」

「ドオーーーーーッーン… ツ!!!」

ゼロライザー（マサト）「う… うわーーーーーッーン… ツ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーーーーーーッーン!!!」

と、エグザイムは打ち上げた衛星からエネルギーの供給を受けて、必殺技の白き逆鱗（ホワイト・カイザー）を放つと、ゼロライザーに

直撃して、大爆発を起こした。そして、大ダメージを受けた

ゼロライザー（マサト）は変身を強制解除されて、

元の姿に戻った。

「シューーーーーーッーン…。」

マサト「ううう…。」

エグザイム「あまりに脆い… これが私が憎んだゼロライザーだといふのか?」

だが私は滅ぼす… 木羅マサキを!!」

く ラストウォーリア基地内 く

ラピス「マサト!!」

なぎさ「このままじゃ…。」

沖原「マサト!!立て!!もう一度ゼロライザーへと変身するんだ!!」
ねこ娘「ちよつとあんた!!まだそんな事言ってるの!?!」

鬼太郎「本気で彼を殺すつもりなのか!?!」

マナ「それに美香ちゃんも居ないんじゃない!?!」

沖原「美香はただのサポートにすぎない。彼女が欠けただけで

こうもパワーに差が出るものか!!」

バン「駄々目だぜ、こりや...」

キング「この石頭!!」

沖原「そうだ...ただ天滅槍(ゼロライド)の力を制御するだけの
存在だと、マサキ... 貴様はそう言っていたな...」

だが、やはりお前は... 美香... どこにいる...?」

く 鉄血龍(オル・ドラゴン) 要塞内研究室 く

美香「.....」

アガサー「こ...これは... そうかマサキ... そういう事だったの
か...」

と、鉄血龍(オル・ドラゴン)の科学者であるアガサーが
美香を調べていたところ、何かを発見した様子であった。

ユラ「まだ意識は戻らぬのか?」

アガサー「は...はい... どうぞ、お部屋でお待ちください。」

ユラ「ここでよい... 続けよ。」

アガサー「は...はい!!」

く 青木ヶ原樹海 く

エグザイム「さて... とどめと行くか。」

マサト「ううう... お... 教えてくれ...」

エグザイム「んっ?」

マサト「なぜ、木羅マサキを憎む... 裏切り者だからか...?」

エグザイム「そんなことではない... 奴は俺を... 俺の命そのもの
を

弄んだ...それが許せないのだ!!」

と、エグザイムはそう言いながら、マスクを外した。

そして、男でありながら女の顔をした素顔が露わとなった。

マサト「えっ!?!:~:~:~」

エグザイム「阿久津マサトよ… お前にはわかるまい。俺はこの女の顔と共に

俺が

と

思い、

を

生きてきた。武人として生まれ、戦う為に成長してきた
与えられた顔は女そのものだった!!人は最も憎いもの
共生せねばならない時がある… その身を切るような
お前にわかるか!?!そして俺はある時知ってしまった…
俺を作ったのは木羅マサキだという事を!!この俺の顔
このように創造したのは奴だ!!」

マサト「作った!?!」

エグザイム「そうだ…:~:~:~ 七龍星（セブン・シユテルン）とは皆、

木羅マサキによって作られた人造生命体なのだ!!」

マサト「人造生命体…:~:~:~」

エグザイム「そして俺はデータを見つけた…:~:~:~ 木羅マサキが

俺達に仕込んだプログラムデータを…:

奴は俺達が成長した時にあるトラウマを抱え、

自ら滅ぼしあうような因子を遺伝子に封じていたのだ。

ヴァンスターには『報われぬ恋心』を…:

アインとマインには『憎みあう姉妹愛』を…:

そして俺には『女の顔』をな…:~:~:~

軟弱と笑うか?マサト…:~:~:~ だが、この苦しみは

誰にもわかつたりはしない…:~:~:~。そして、

俺は誓った!!決して木羅マサキの思い通りにはならぬ

と!!

そして俺は造物主マサキを憎みぬく事で…:

ついに勝利を得る!!話は終わりだ…:~:~:~ お前の中にある

マサキの血共々、ここで滅ぶがいい!!」

「キーーーーー.....」

マサト(?) 「マサキの血だと... ?笑わせる!!」

エグザイム 「何!?!」

マサト(?) 「この俺を誰だと思っているのだ? エグザイム...」

貴様に勝利などあるものか!!」

エグザイム 「くっ... 貴様、今度こそ滅ぶがいい... チャージ!!」

「ブウーーーーー.....」

マサト(?) 「フン... 無駄なあがきを...」

エグザイム 「貴様... この状況が理解できないのか?

今、貴様は小室美香が居ない影響で

ゼロライザーの力を存分に発揮できないではないか!!」

マサト(?) 「くっくっく... ハーツハツハツハツ!!無知とは

哀れなものだなエグザイム!!居なくなったら

呼び戻せばいいだけの話だ...」

エグザイム 「何!?!」

マサト(?) 「天滅槍(ゼロライド)!!パーツを呼び戻せ!!

お前の『次元クロス・システム』をな!!」

「ピカーーーーー.....!!」

と、マサト(?) はそう言いながら天滅槍(ゼロライド)を解放させる。

すると... 「new page」

く 鉄血龍(オル・ドラゴン) 要塞内研究室 く

「ピカーーーーー.....!!」

アガサー 「こ... これは!?!」

ユラ 「何事か!?!」

美香 「!!!」

「シュー.....!!」

と、研究室に閉じ込められていた美香が突如、

光の玉へと姿を変えて、研究室から姿を消した。

そして、青木ヶ原樹海へと一瞬でワープし、

天滅槍(ゼロライド)と一体になった。

く 青木ヶ原樹海 く

美香の声「マサト君… マサト君… マサト… 君…。」

マサト(?)「フン… 戻ったか人形… 変身!!」

「ブワー… ツ!!」

エグザイム「滅びよ!!白き逆鱗(ホワイト・カイザー)!!」

「ドオ… ツ!!」

「ドドドドドドドドドドドドツカ… ツ!!」

と、エグザイムは打ち上げた衛星から再びエネルギーの供給を受けて、

必殺技の白き逆鱗(ホワイト・カイザー)を放ち、大爆発を起こした。

エグザイム「フフフ… やったぞ!!」

ゼロライザー(マサト?)「フン… どこを見ている?」

と、大爆発の瞬間、ゼロライザーとなったマサト(?)は、その場から一瞬でワープして回避し、上空へと姿を現した。

エグザイム「バ… バカな… こうなれば…。」

ゼロライザー(マサト?)「フン… チャージなどさせるものか…。」

天滅光(ゼロ・フラツシュ)!!」

「バア… ツ!!」

と、ゼロライザー(マサト?)は、天滅光(ゼロ・フラツシュ)を発生させると、上空に残されていたもう一つの衛星を破壊した。

エグザイム「くっ…。」

ゼロライザー(マサト?)「楽に死ぬると思うなエグザイム… 行くぞ美香!!」

ぞ美香!!」

美香の声「はい…。」

ゼロライザー(マサト?)「天滅弾丸(ゼロ・マグナム)!!」

「ブウ… ツ!!」

「ドツカ… ツ!!」

エグザイム「ぐわ… ツ!!!」

と、ゼロライザー(マサト?)は、天滅弾丸(ゼロ・マグナム)でエグザイムを攻撃した。そして、直撃を受けたエグザイムは

その場で倒れこんでしまった。

エグザイム「マ……マサトではないのか……？」

ゼロライザー（マサト？）「フン……。」

「パァー……」

と、ゼロライザー（マサト？）は残忍な笑みを浮かべながら、

天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）の発射態勢に入った。

エグザイム「ま……まさか……あなたは……。」

ゼロライザー（マサト？）『『王』の力の前に消え去るがいい……』

天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）!!」

「ブオワ……」

エグザイム「父上……。」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドツツカー……」

と、エグザイムはマサト（？）の事を父上と呼びながら、

大爆発を起こし、跡形もなく消滅した。

ゼロライザー（マサキ）「俺は『木羅マサキ』!!父などではない……。」

くつくつくつ……ハ……ハツハツハツ

!!」

く ラストウオーリア基地内 く

マナ「木羅……マサキ……？」

ラピス「あのマサト……そういう奴だったのかよ……。」

ほのか「七龍星（セブン・シユテルン）全員があの人に

作られた人造生命体……。」

さくら「そして、美香さんは……。」

アクア「どうやら……これまでの謎が明らかになりつつあるようです

すね、

沖原さん……そしてエンマ大王……。」

沖原「その様ですね……ですが、あのマサトや美香の事は、

私もたつた今、知ったところだ。」

エンマ大王「木羅マサキ……ついに復活したか。

どうやら、全てを話す時が来たみたいだな。」

ぬらりひよん「大王様……。」

バン「ヘッ!! やつと観念してしゃべる気になったかよ?」
マーリン「楽しみだな... どの様な事が語られるのか...」
ナツメ「エンマ様...」

く 鉄血龍（オル・ドラゴン）要塞内 く

ユラ「なぜだアガサー... なぜ小室美香が人間でないと知りながら
黙っておったのだ!？」

アガサー「申し訳ございません!!」

ユラ「もうよい... その顔、見たくない...」

そして... これ以上ゼロライザーと関わる必要もない!!」

アガサー「えっ!？」

ユラ「我は... ラストウォーリアとの最終決戦をここに宣言する
!!」

ドーカベン「おお...」

バルキリス「いよいよか...」

「シューーーーーーン...」

ガロン「ついに私の出番が来たようだな...」

と、そこへ七龍星（セブン・シユテルン）最強の

黒龍のガロンも姿を現した。

ユラ「おお... ガロンよ... そなたの力... 期待しておるぞ!!」

ガロン「御意...」

く ラストウォーリア基地内 く

マサキ「...」

沖原「木羅マサキだな...」

マサキ「あの時もお前はそう言ったな、沖原...」

美香「マサト君はどこなんですか!？」

マサキ「人形に説明してもわからんだろうが、

俺がマサトでマサキだ。

いや... もうマサトなど何処にもいない!!」

ラピス「どういことだよそれ!!」

マサキ「馬鹿にいくら説明してもわからんことだ。」

ラピス「何だとてもええ!」

さくら「ラピスちゃん、落ち着いて!!」

マサキ「俺は自らが『王』となる為にこのゼロライザーを

生み出した。だが、志半ばにして命を奪われるだろう事は

予見していた。」

マナ「えーーーーっ!」

なぎさ「予見していたって……。」

ナツメ「預言者なの?この人……。」

マサキ「そこで俺は、自分のクローン受精卵を作り、天滅槍（ゼロライド）に

組み込んだ。そしてクローンが成長し、ゼロライザーとなった時、

木羅マサキとしての全人格がよみがえる様、プログラムしたのだ……。」

バン「何だそりや……?」

キング「オイラ……頭がついていかないよ……。」

ゴウセル「とても真似できない芸当だな。」

マーリン「この男……とんでもない頭脳の持ち主だな。」

ディアンヌ「あはは……。」

エンマ大王「やれやれ……何て奴だ……。」

ぬらりひよん「だが、君ならやりそうな事だな。」

マサキ「俺を誰だと思っている?俺は……木羅マサキだ!!」

く とあるポイント地点 く

ザマス「ここか……ラー・カインが言っていた場所は……。」

ゴクウブラック「だが……『奴ら』はいないようだな……。んっ?あれは……。」

女の子①「ここ……どこだろう?わたし達、何で急に飛ばされてきたのかな?」

女の子②「それはわからないルン……。」

女の子③「考えても仕方ないよ。『ユニ』と『プルンス』は

襲われていた。彼女達の運命はどうなってしまうのでしょうか!?

第34話 完全覚醒 (完)

第35話 　　明かされる因縁！そして…

女の子①「ひよえーーーーっ!?」

謎の生物「危ないフワ!!」

「ピカーーーーーーッーン!!」

と、ザマスが放ったエネルギー弾が女の子4人組に直撃しそうになつた

その時、謎の生物が体から光を放つて、自身と女の子4人組を別の場所へワープし、回避した。

ザマス「何!？」

フワ「ひかる…みんな…大丈夫フワ?」

ひかる「うん!!ありがとうフワ。ララは?」

ララ「大丈夫ルン。でも、危なかったルン…。えれなとまどかも大丈夫ルン?」

えれな「大丈夫、だけど…おじさん、いきなり何するのよ!!」

まどか「わたくし達が何をしたというのですか!？」

ゴクウブラック「フン…何をしたかだ?」

ザマス「汚らわしい人間の小娘共…我々神にとって、お前達の存在そのものが罪なのだ!!」

ひかる「な…何?この人達…」

ララ「ノットレイダーじゃないみたいけどルン…」

えれな「誰かは知らないけど…」

まどか「何もしないわけにはいきませんわ!!」

ひかる「みんな、変身しよう!!」

ララ・えれな・まどか「うん!!」

ザマス「何?」

ゴクウブラック「変身だど?」

ひかる・ララ・えれな・まどか「スターカラーペンダント!!カラーチャージ!!」

と、ひかる達4人は『スターカラーペンダント』と呼ばれるアイテムを

それぞれ取り出し、歌いながら変身を始めた。

「キラキラキラキラキラ☆シ」

ひかる・ララ・えれな・まどか

「き〜ら〜め〜く〜♪星の力で〜♪憧〜れの〜♪わたし描くよ〜♪
トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク
ルプリキュア♪

スタートウインクル〜スタートウインクルプリキュア〜!!アア
〜!!」

キュアスター「宇宙(そら)に輝く〜キラキラ星!!キュアスター!!」
キュアミルキー「天にあまねく〜ミルキーウエイ!!キュアミルキー
!!」

キュアソレイユ「宇宙を照らす!灼熱のきらめき!キュアソレイユ
!!」
キュアセレーネ「夜空に輝く!神秘の月あかり!キュアセレーネ
!!」

4人「スタートウインクル...プリキュア!!」
「ピカーーーーー!!」

ザマス「プリキュアだと...?」

ゴクウブラック「次元の王候補(デイオケイター)・ラグナと一緒に
いた

あの小娘共と同じか...?」

キュアスター「わたしとミルキーはあの黒い人を...

ソレイユとセレーネはあの緑色の人をお願い!!」

ミルキー「わかったルン!!」

キュアソレイユ「了解!!行くよ、セレーネ!!」

キュアセレーネ「はい!!」

「バーーーーーッ!!」

そして、プリキュアに変身した4人はゴクウブラックとザマスに
戦いを挑んでいった。一方、その頃...

〜ラストウォーリア基地内〜

マサキ「ところでエンマ...どうするのだ?この連中に

全てを話すと云ったそうだが？」

光「あつ… そうだよ!!」

鬼太郎「ぜひ聞かせてもらいたいなエンマ大王…。」

マーリン「フフツ… 楽しみだな。」

エンマ大王「ああ… わかった。」

ぬらりひよん「大王様… よろしいのですか？」

エンマ大王「かまわねえよ。木羅マサキが復活しちまった今、

もう隠せねえだろうしな。」

沖原「エンマ大王…。」

エンマ大王「あれは15年前の事だ… ある日、時空が大きく乱れて、

『妖魔界』とこの現世が一つになろうとしていた事があつた…。

そして俺とぬらりは、その時空の乱れの原因を探る為に調査に出た。」

零「時空の乱れ…？」

平家「それは、まさか…。」

ぬらりひよん「ああ… 『天滅槍（ゼロライド）』の出現によるものだった。」

そして、妖魔界と現世のバランスが大きく崩れ、

この前話した『フレイムヘイズ』と『紅世の徒（ともがら）』の

戦いを激化させた要因にもなった。」

エンマ大王「そして、出現した『天滅槍（ゼロライド）』を回収したのが、

『鉄血龍（オル・ドラゴン）』だ。」

沖原「そこで当時、政府の公安局にいた私は、別の罪状で拘留中だった

木羅マサキを潜入させて、天滅槍（ゼロライド）の解析を依頼した。」

アクア「なるほど… その解析で木羅マサキは『次元の王』の存在

を知り、

その力を自分のものにする為の研究を始めた… という事
ね。」

マサキ「その通りだ。この俺が『王』になる為のな…。」

そして解析を終え、天滅槍（ゼロライド）を奪った俺は、

鉄血龍（オル・ドラゴン）の要塞を破壊し、逃走した。

そして俺は… 新設されたばかりのラストウォーリアの基
地にいた

エンマや沖原の所に向かい、天滅槍（ゼロライド）とその契
約者に

登録したこの体… 俺のクローンとそこの人形を引き渡し
た。」

美香「……………」

ほのか「人形って……………」

なぎさ「そんな言い方ないでしょ!？」

ひかり「あんまりです!!」

エンマ大王「そして俺はその後… 木羅マサキを… 殺した。」

沖原「本来それは、私の役目だったのだがな……………」

ナツメ「えっ!？」

トウマ「殺した? エンマ様が……………」

アキノリ「どういう事だよ!？」

ぬらりひよん「木羅マサキが天滅槍（ゼロライド）を解析し、契約
者を

登録してくれたおかげで、時空のゆがみは安定し、

最悪の事態は免れた。だが… 先ほど本人が話した

通り、

その男は『王』になるという野望を抱いていた。

それを危惧した大王様と沖原殿はあえて汚名を被る

選択をなされたのだ。」

ねこ娘「なるほどね… これであんた達が中々話そうとしなかった
理由がわかったわ。」

目玉おやじ「じゃが… エンマ大王が直接人間に手をくださな
ど…」

許される事ではないぞい。」

鬼太郎「そうですね、父さん…。」

エンマ大王「ああ… お前達の言う通りだ。」

マサキ「フン… さつきも言ったが、

あのまま鉄血龍（オル・ドラゴン）に残っていようが、

エンマや沖原達につこうが、いずれ殺されるだろうとは

予想していた事だ。そこで俺は、鉄血龍（オル・ドラゴン）側

にも

!!?!? ちら側にも幾つかの布石を打っておいた。」

美香「!!!」

と、マサキはそう言いながら美香に近づくと、強引にキスをしながら、
!!

胸元部分の服を破いて、素肌をさらけ出した。

美香「や… やめてください!!」

マサキ「フン… 成長記憶シリコンとはとても思えんな…」

それにその芝居も推論型AIにしてはよくやっている。

だが、所詮は人形だ!!」

美香「それを作ったのは… あなたでしょう!!」

マサキ「そうだ。成長するガラクタ… お前もその一人だ!!」

美香「やめて!!」

「バチ——————ン!!」

美香「ああっ?!?ううう…。」

と、美香はマサキにビンタをされると、その場で倒れこみ、
泣き崩れた。

ラピス「マサト、てめえ!!」

亜久里「レディーに何て事をするのですか!?!」

マサキ「フン… 俺が作った人形をどう扱おうが、俺の自由だ。」

アニエス「何ですって!?!」

アデル「バックベアードか、貴様は!!」

エンマ大王「俺からの話は以上だ。お前達に

わかってくれとは言わねえ…だがな、」

ぬらりひよん「この世界を安定させる為には、天滅槍（ゼロライド）を

誰か一人だけの物にする訳にはどうしてもいかな

かった。

それだけは理解してほしい。」

ケロベロス「せやけど…何かスツキリせんな…。」

ナツメ「でも私、エンマ様を信じます!!エンマ様があえてそうしたのも、

世界の事を考えての事なんだから。」

エンマ大王「ナツメ…お前…。」

トウマ「そうだね、ナツメの言う通りだよ。」

アキノリ「ああ!!」

バン「まあ、ようやく白状しやがったしな!!」

キング「オイラ達も協力しよう!!」

ディアンヌ「うん!!」

ゴウセル「俺も異論はない。」

マーリン「それで良いかな?皆…。」

さくら「はい!!」

光「うん!!」

と、エンマ大王の告白を聞いたグラン・ゲインズのメンバー達は、また一段と結束を深めるのであった。

エンマ大王「ところでマサキ…お前はこれからどうするつもりだ?」

マサキ「俺の目的は自らが『王』になる事だ。その障害となる

『鉄血龍（オル・ドラゴン）』そして、『ラー・カイン』…

そいつらを滅ぼすまでは、お前達を利用してやっても良い。

それで良いな? 沖原…そして人形!!」

沖原「…いいだろう。」

美香「はい…。」

マナ「でもその前に!!」

亜久里「美香さんにひどい事をしたのは謝ってください!!」

レジーナ「そーよそーよ!!」

マサキ「… フン!!」

と、マサキはマナ達の言葉を鼻で笑いながら、その場から立ち去って行った。

ねこ娘「何よあの態度!ムカつくわね!!」

真琴「まったくくだわ!!」

エンマ大王「さてと… 問題はこれからどう動くかだな。」

アクア「現状、我々の敵は『鉄血龍（オル・ドラゴン）』『ラー・カイン』

そして、『もう一つのセファイロ』の名乗る組織ですね…。」

光「もう一つのセファイロか… そういえば、

あれから姿を見せてはいないけど…。」

海「そうね…。」

風「もしかしたら、こちらの世界に攻め込む用意でもしているのでしょうか…?」

クレフ「その可能性が高そうだな… だが、こちらから打って出ることは

不可能だ。相手からの動きを待つしかない。」

沖原「エンマ大王… 一つ提案があるのですが。」

エンマ大王「どうした? 沖原。」

沖原『『妖魔界』へ行かれたらどうでしょう? 鉄血龍（オル・ドラゴン）は、

ゼロライザーによって、七龍星（セブン・シユテルン）のほとんどが

撃破されています。おそらく、次の戦いが総力戦となるはずで

す。ですが、動き出すにはまだ時間が必要でしょう。その間に…。」

ぬらりひよん「妖魔界だと? しかしあそこは今…。」

エンマ大王「レグルス帝国軍に乗っ取られている状況だからな…。」

いや、今なら奪還する事ができるかも知れねえ。」

トランクス「妖魔界…？」

マイ「そこもレグルス帝国軍に…。」

エンマ大王「それにうまくいけば、ナツメ…『朱夏』の力を

取り戻す事ができるかもしれないぜ!!」

ナツメ「朱夏の…？」

鬼太郎「バックベアードと戦った時の力か…。」

ねこ娘「すごい力だったもんね、あれ!!」

トウマ「それに妖魔界にはほとんどの妖怪が封印されてしまってるからね。」

アキノリ「助け出すにはいいチャンスだぜ!!」

エンマ大王「ああ…それでいいか？アクア」

アクア「わかりました。それでは我々の次の任務は『妖魔界の奪還』とします!!」

と、グラン・ゲインズの次の任務は、『妖魔界の奪還』に決定するのであった。

そして…。

キュアスター・キュアミルキー「ハアーーーーッ!!!」

「バババババババツ!!」

ゴクウブラック「ククク…遅い!!」

「ドカーーーーーッ!!!」

キュアスター・キュアミルキー「キャーーーーッ!!!」

ザマス「消える…人間!!」

「ドドドドドド!!!」

キュアソレイユ・キュアセレーネ「アアアーーーーッ!!!」

と、キュアスター達はゴクウブラックとザマスに挑んでいくが、力で圧倒的に勝る2人に苦戦を強いられていた。

キュアスター「ううう…」

キュアミルキー「つ…強いルン…。」

キュアソレイユ「カツパードやテンジヨウ達よりもずっと…。」

キュアセレーネ「この方たちは一体…?」

ゴクウブラック「フン、つまらん… さっきの威勢はどこに行っ
た?

これなら前に戦ったプリキュアの方がよっぽど

歯応えがあつたぞ。」

ザマス「もう一人の私よ… とどめを刺せ。」

ゴクウブラック「ああ… そうだな。」

「ブウーーーーー…」

と、ゴクウブラックはそう言いながら、かめはめ波の発射態勢をと
る。

キュアソレイユ「くっ!?!」

キュアセレーネ「こ…このままでは…。」

キュアミルキー「や… やられちゃうルン…。」

キュアスター「みんな… あきらめちやダメ!!」

こんなところでやられるわけには行かないよ!!」

と、キュアスターは皆を鼓舞しながら、何とか立ち上がる。

キュアミルキー「スターの言う通りルン!!」

キュアソレイユ「わたし達にはまだ… やらなきゃならない事がた
くさんある!!」

キュアセレーネ「ですから… 倒れるわけに参りません!!」

4人「宇宙(そら)に輝け! イマジネーションの力! トウインクル
ステツキ!!」

と、ミルキー達も続いて立ち上がると、4人でそう言いながら、

『トウインクルステツキ』と呼ばれるアイテムを召還した。

キュアスター「スタートウインクル!!」

キュアミルキー「ミルキートウインクル!!」

キュアソレイユ「ソレイユトウインクル!!」

キュアセレーネ「セレーネトウインクル!!」

4人「4つの輝きを今、一つに!!」

キュアスター達はそう叫びながら、スターが上、ミルキーが下、
ソレイユが左、セレーネが右と南十字座の様な陣形を組み、

そして、ゴクウブラックとザマスは押し返されたかめはめ波と、サザンクロス・シヨットの直撃を受けて大爆発を起こした。

キュアソレイユ「や…やったの…?」

キュアセレーネ「わたくし達…勝ったのですか?」

キュアミルキー「わ…わからないルン…」

キュアスター「でも…まともに受けたから…」

「ブオオオオ!!」

4人「!!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「くつくつくつ…褒めてやるぞ…!!」

俺をロゼにさせた事はな…」

ザマス「だが、残念だったな。私は不死身なのだよ…」

と、爆発で起きた砂埃の中から、超サイヤ人ロゼになった

ゴクウブラックと、不死身の力で回復したザマスが姿を現した。

キュアミルキー「う…うそルン…」

キュアソレイユ「まだ、こんな力が…」

キュアセレーネ「そ…そんな…」

キュアスター「キラやばくつ☆じゃなくて…ゲキやばくつだ

よ…」

ゴクウブラック（ロゼ）「今度こそ…死ね!!」

「ドオーーーーッ!!!」

キュアミルキー「ルーーーーッ!!!」

キュアソレイユ「くっ!」

キュアセレーネ「お…お父様…」

キュアスター「あ…あ…あ…」

と、超サイヤ人ロゼになったゴクウブラックは再度、

キュアスター達に向けて、強力なエネルギー波を放った。

そして、4人が絶体絶命のピンチに陥ったその時…

「シュン!!」「バシューーン!!!」「ドオーーーーッ!!!」

と、絶望的だったキュアスター達の前に突如、オレンジの道着を着

た

男性が姿を現し、ゴクウブラック（ロゼ）のエネルギー波を

受け止めて、弾き飛ばした。

ザマス「何!？」

ゴクウブラック（ロゼ）「あれは…。」

？「おめえら、でえ丈夫か？」

キュアミルキー「は…はイルン…。」

キュアソレイユ「あ…あの人は？」

キュアセレーネ「ま…まさか…？」

キュアスター「キラやばくくくくく☆

ザマス「貴様…。」

!!!!!!!

ゴクウブラック（ロゼ）「フン、ようやく会えたな…。」

孫悟空「オツス!!オラ『孫悟空』!!

おめえら良く頑張ったな。後は任せろ!!」

と、ついに明かされた木羅マサキとエンマ大王そして沖原との因縁。

そして、それを聞いたグラン・ゲインズのメンバー達は

更に結束を深めて、次なる任務を『妖魔界』の奪還とするのであった。

一方その頃、とあるポイントでは

新しいプリキュア『スター☆トゥインクルプリキュア』が突如、

第5世界に現れ、ゴクウブラックとザマスとの戦闘に入ったが、

絶体絶命のピンチに!そして、ついに『孫悟空』が姿を現し、

彼女達の危機を救うのであった。

いよいよ遭遇した孫悟空とゴクウブラック達…

これからの展開はどうなっていくのであろうか!?

第35話

く 明かされる因縁!そして…

く

(完)

第36話 限界突破!! 『神の極意』再び…。

悟空「おめえら良く頑張ったな。後は、オラに任せろ!!」

キュアスター「やっぱり『孫悟空』さんだ!!キラやばくっ☆」

キュアセレーネ「スター、あの方をご存じなのですか？」

キュアソレイユ「あのブラックとかいう人とそっくりだけど…。」

キュアスター「うん! 『UMA(ユーマ) 大百科』に載ってたんだ

!

まさか、本物に出会えるなんて!!」

キュアミルキー「あつ、思い出したルン!!あの人、『サイヤ人』ルン

!!」

悟空「何かよくわかんねえねど…ま、いつか!!」

ザマス「孫悟空…。」

ゴクウブラック(ロゼ)「ようやく会えたな。この時を待ちわびたぞ
!」

悟空「ザマスにブラック…ほんとにおめえ達なんだな…

いってえどうして…。」

「シユン!!」
「シユン!!」

ザマス「!!!」

ゴクウブラック(ロゼ)「フン、やはり貴様らもいたか…。」

『ベジータ』、『破壊神ビルス』、

『天使ウイス』…。」

ベジータ「おい、カカロット!!貴様…何1人だけ抜け駆けしよう
としている!？」

ビルス「というか、悟空!!派手な行動は慎めと言っただろうが!!」

ウイス「オホホホ…でもまあ、相手が相手ですからね。」

と、悟空に続いて、ベジータ、ビルス、ウイスが姿を現した。

キュアソレイユ「また違う人達が来ちゃった…。」

キュアセレーネ「あの方たち…お仲間みたいですね。」

キュアミルキー「そうみたいルン!!」

キュアスター「キラやばキラやばキラやばくっ☆
!!!!!!」

フワ「フ〜ワ〜!!」

ベジータ「しかしこいつら…なぜこんなところにいやがるんだ!?」

ビルス「未来で『全王』様に宇宙ごと消滅させられたはずだがな…。」

ウイス「おそらく…今、我々がいるこの『時間軸』とは別の…。」

ザマス「察しの通りだ。」

ゴクウブラック（ロゼ）「俺達はこの世界とは別の『時間軸』から、ラー・カインに

よって連れてこられた。」

ビルス「何…?」

ベジータ「別の『時間軸』からだ?!」

ザマス「そうだ。確かに、この時間軸での私達は消滅したのだから…。」

ゴクウブラック（ロゼ）「俺達のいた時間軸では、戦いの最中に突然、『ラー・カイン』が現れて、

孫悟空、ベジータ、そしてトランクスを倒し、

その後に艦隊を出現させて、あの世界を

瞬く間に滅ぼした。そして、俺達と同盟を結

び、

今に至る…という訳だ。」

ベジータ「何だと!」

悟空「オラ達…そのラー・カインって奴にやられっちゃったんか!?」

ザマス「フッフ…その通りだ。お前達にも見せてやりたかったぞ。」

ゴクウブラック（ロゼ）「俺達の時間軸の貴様らがラー・カインに無様にやられたところをな…。」

ベジータ「くっ!?!…。」

ビルス「しかし、そのラー・カインとかいう奴…やはりタダものではないな…。」

ウイス「ええ… あえて言うなら、『破壊神』… その域に達した存在…。」

もしかしたら、更にその上に立っているかもしれないね。」
ビルス「……………」

悟空「へえ… そりやますますラー・カインと戦うのが

楽しみになったな。オラ、ワクワクしてきたぞ!!」

ザマス「フフフ… ほぎけ。」

ゴクウブラック（ロゼ）「貴様らではラー・カインには絶対に勝てん…。」

でなければ、神である俺達が人間などと

同盟は結ばんからな…。」

ここで貴様らの息の根を止めてやる!!」

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

と、ゴクウブラック（ロゼ）はそう言いながら、更にパワーを上げた。

キュアソレイユ「きやーっ!!」

キュアセレーネ「ううう…。」

キュアミルキー「す… すごいパワールン…。」

キュアスター「悟空さん!!」

悟空「心配えるな!!」

ベジータ「お前達は下がっている!!」

悟空・ベジータ「うおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、悟空とベジータはパワーを上げると、髪やオーラの色が水色になり、

『超サイヤ人ブルー』へと変身を果たした。

悟空（ブルー）「……………」

ベジータ（ブルー）「……………」

キュアソレイユ「なっ!?!」

キュアセレーネ「あ… あのお姿は…。」

キュアミルキー「す… すごいルン!!」

キュアスター「キラやば〜っ☆」

ウイス「さあさあ、あなた達…下がついていきましょうか。」

ビルス「怪我をしたくなければな…。」

キュアソレイユ「は…はい!!」

キュアセレーネ「ありがとうございます!!」

キュアミルキー「ルン!!」

キュアスター「ウサギさん、ありがとう!!」

ビルス「誰がウサギさんだ!!僕は神様だぞ!!」

キュアスター「だ〜つて、このお耳!!ウサギさんそつくりだもん!!

うりうり〜!!」

と、キュアスターは素晴らしいながらビルスの耳をこねくり回した。

ビルス「だ〜っ!やめろ!!破壊するぞお前!!」

ウイス「オホホホ…変わった子ですな〜!!」

悟空（ブルー）「さてと…始めっか!!」

ベジータ（ブルー）「行くぞ…ブラック、ザマス!!」

ザマス「来い…。」

ゴクウブラック（ロゼ）「返り討ちにしてやる!!」

「ドオオオオオ〜!!!!!!」

と、悟空・ベジータとゴクウブラック・ザマスは

そう言いながら激突し、戦いを始めた。

〜 レグルス帝国軍基地『ラー・パレス』〜

ラー・カイン「孫悟空達とブラック達が戦闘を始めたか…。」

デューク「さて…どうなります事やら。私も向かいますようか

？」

ラー・カイン「いや、不要だ。それよりもお前にはこれから

『妖魔界』に行ってもらいたい。」

デューク「妖魔界…ですか？」

ラー・カイン「グラン・ゲインズが妖魔界に向かうとの情報があつ

たのだ。

『シユラウド』がいるから心配は不要だとは思うが、

念の為にな…。」

デューク「『シユラウド』ですか…。私はどうもあの者とは

ウマが合わないのですが…。ラー・カイン様の命ならば
仕方ありませんね…。」

ラー・カイン「フツ…。では頼んだぞデューク。」
デューク「了解致しました。」

「シユーーーーーッ……。」

ち、デュークはそう言いながらその場から姿を消し、
妖魔界へと向かっていった。

ラー・カイン「さて…。舞台は整いつつあるな…。後は…。」
ベジータ（ブルー）「でやーーーーーッ!!!」

「バキーーーーーッ!!!」

「ドゴーーーーーッ!!!」

ザマス「ぐわーーーーーッ!!!」

悟空（ブルー）「うおりやーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック（ロゼ）「ハアーーーーーッ!!!」

「ドドドドドドドドドドドド!!!」

と、悟空・ベジータとゴクウブラック・ザマスは
それぞれ戦闘を開始し、ベジータはザマス相手に優勢、
悟空とゴクウブラックは互角の戦いを繰り広げていた。

キュアソレイユ「な…。何て戦いの?」

キュアセレーネ「動きが…。目で追えません…。」

キュアミルキー「次元が違うルン…。」

キュアスター「悟空さん、ベジータさん、頑張つて!!」

フワ「フ〜ワ〜!!」

ウイス「うくん、2人共、今のところはいい感じですね!!」

ビルス「あいつらは『力の大会』を経て、更に腕を上げたからな…。」

まあ、僕にはまだまだ及ばないけどね。」

キュアスター「そしたら、ウサギさんも一緒に戦ってくれれば

いいのに!!」

ビルス「だから僕はウサギじゃない!!破壊神だ!!

いい加減にしないと本当に破壊するぞ!!」

界王拳を発動させると、『界王拳ロゼ』へと変身を果たした。
「シュンシュンシュンシュン……。」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「くっくっくっ……。」

悟空（界王拳ブルー）「何!?おめえも界王拳を使えるんか!？」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「当然だ…… お前にできて、

俺にできない事はない!!

だが、驚くのはまだ早いぞ……。」

ザマス「見せてやろう…… 私が新たに手に入れた力を!!」

「ピカーーーーーーシューーン!!」

「シューーーーーーシューーン……。」

と、ザマスはそう言いながら緑色の懐中時計を取り出し、
発動させると、ザマスがもう一体出現した。

ザマス②「フフフツ……。」

悟空（界王拳ブルー）「ザマスがもう一人出てきたぞ……。」

ベジータ（進化ブルー）「フン!!それが新しい力か?」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「そう慌てるな……。」

ウイス「まさか……。」

ビルス「あいつら!？」

ザマス「そのまさかだ!!」

ザマス②「ポタラ発動!!」

「ブワーーーーーシューーン!!!」

と、ザマスとザマス②はそれぞれ耳につけている『ポタラ』を発動
させると、

二人が引き寄せられて、すさまじい光を放ちながら合体を果たし
た。

悟空（界王拳ブルー）「そう来たか!!」

ベジータ（進化ブルー）「くそつたれが!!」

合体ザマス・改「この姿こそ『正義』…… この姿こそ『世界』……

崇めよ…… 称えよ…… この究極の神…… 『ザマス』を

!!」

と、ザマスとザマス②はポタラで合体し、『合体ザマス・改』へと

変化した。

キュアソレイユ「な……何あれ……。」

キュアセレーネ「そ……そんな……。」

キュアミルキー「合体したルン……。」

キュアスター「究極の神……ザマス……?」

ウイス「これは……少々、面倒な事になりましたね。」

ビルス「ああ……もしかしてあいつは……。」

合体ザマス・改「フン!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドツカー……ン!!!」

悟空（界王拳ブルー）「うわ……ン!!!」

ベジータ（進化ブルー）「ぐわ……ン!!!」

と、合体ザマス・改は悟空とベジータに向けて右手をかざすと、大爆発を起こし、二人を吹き飛ばした。

キュアスター「悟空さん!!ベジータさん!!」

合体ザマス・改「良い力だ……癩だが、ラー・カインに

感謝せねばなるまいな。」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「おいおいザマス……俺の分もとっておけよ。」

合体ザマス・改「そうしてやりたい所だが……なにせ、力が余り過ぎてな。」

悟空（界王拳ブルー）「く……くそ……行くぞベジータ!!」

ベジータ（進化ブルー）「俺に命令するな!!」

「バァ……ン!!!」

と、悟空とベジータは何か立ち上がると、ザマスとゴクウブラックに向かっていった。

ベジータ（進化ブルー）「でりや……ン!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「お前に用はない、前座!!」

「ドォ……ン!!!」

と、ベジータとゴクウブラックの拳がぶつかり合うと、周囲から爆風と衝撃が起こった。

悟空（界王拳ブルー）「だりやあ……ン!!!」

合体ザマス・改「無駄だ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

悟空（界王拳ブルー）「うわあああああーーーーーっ!!!」
「ドゴーーーーーっ!!!」

と、悟空は合体ザマス・改へと向かっていくが、
あっさり返り討ちにあい、地面へと叩きつけられた。

ベジータ（進化ブルー）「カカロット!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「人の心配をしてる場合か？」

「バキーーーーーっ!!!」

ベジータ（進化ブルー）「ぐわーーーーーっ!!!」

「ドゴーーーーーっ!!!」

と、悟空に続いてベジータもゴクウブラックの強烈な一撃を受けて
しまい、

地面に叩きつけられた。そして2人共、変身が強制解除されて、
元の姿に戻ってしまった。

悟空「く……う……う……」

ベジータ「く……くそつたれが……」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「フン……つまらんな。」

合体ザマス・改「当然の結果だ。人間ごときが神に盾突こうなど、
おこがましい……」

ウイス「どうやら……あのザマスはゴクウブラックと

合体した時とは違い、もう一体のザマスと

合体している様ですね。」

ビルス「なるほど……そのおかげで奴は不死身のまま安定した
力を発揮している……という事か。」

合体ザマス・改「その通りだ。弱点を克服した私はまさに

『不死身の究極神』となったのだ!!」

この2人を始末したら、次はお前の番だ

破壊神ビルス……」

ビルス「お前、調子に乗るなよ……」

「ブウーーーーーっ……」

と、ザマスの言葉に憤ったビルスは睨みつけながら
パワーを上げていく。すると……。

悟空「まだだ……まだ終わんねえぞ……。」

と、悟空はボロボロの状態ながらも何とか
立ち上がりながらそう言った。

ビルス「悟空……。」

ウイス「あらまあ……。」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「フン……死にぞこないめ。

とどめは俺が刺してやる!!」

「バァー……ッ!!!」

と、ゴクウブラックは右手に気を纏わせて手刀と化し、
とどめを刺すべく悟空に向かっていく。

キュアソレイユ「ああ!？」

キュアセレーネ「いけません!!」

キュアミルキー「危ないルン!!」

キュアスター「悟空さん!!」

ベジータ「カカロット……ッ!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「さらばだ……孫悟空!!」

悟空「!!!」

と、ゴクウブラックの刃が悟空を貫こうとしたその時……。

「シュー!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「何!？」

悟空「……。」

と、悟空は瞬時にその場から消えて手刀を回避すると、

ゴクウブラックの背後に現れた。

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「何だ、今の動きは……おのれ!!」

悟空「……。」

「ヒュンヒュンヒュンヒュン!!!」

と、ゴクウブラックはその後も悟空に怒涛の攻撃を仕掛けていく
が、

ことごとく回避されていった。そして……。

「ドボオーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「うおおおーーーーッ!!!」

あ……が……が……。」

悟空「……………」

と、悟空は攻撃を回避した後、ゴクウブラックの腹に強烈な一撃を喰らわせた。そして、ゴクウブラックはその場で悶絶する。

合体ザマス・改「お……おのれーーーーッ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

悟空「……………」

「ババババババババ!!!」

「ドカンドカンドカンドカーーーーーッ!!!」

と、続いてザマスが悟空に向けて強力なエネルギー弾を連続で発射するが、悟空は素早い反応を見せて

全てのエネルギー弾を弾き飛ばした。

合体ザマス・改「な……何だと!」

キュアソレイユ「す……すごい……。」

キュアセレーネ「あの身のこなしは……?」

キュアミルキー「今までとはまったく違うルン……。」

悟空「……………」

「ブーーーーッ……。」「ドシューーーーーッ!!!」

悟空（?）「……………」

そして悟空の瞳が銀色に輝き、白いオーラを纏わせて、超サイヤ人とは別の変身を遂げた。

キュアミルキー「あ……あの姿……何ルン!?」

キュアスター「キラやばキラやばキラやばーーーー☆!!!!」

ウイス「まさかこんなところで見る事になるとは

思いもしませんでしたよ。オホホホホ!!!」

ビルス「見せてもらおうじゃないか……『身勝手の極意』!!」

悟空（身勝手の極意）「……………」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「身勝手の……極意だと……?」

合体ザマス・改「馬鹿な……あれは神でも到達ままならぬ

領域のはずだ… 何故、人間が!?

悟空（身勝手の極意）「おめえらはもう… オラには勝てねえ…。」
ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「ぶざけるな…!?!?!」
と、ゴクウブラックはそう言いながら悟空へと攻撃を仕掛けていくが…。

悟空「……………」

「シュン!!」「ドドドドドドドドドドド!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「うおおお……!?!?!」

「ドゴンドゴンドゴ……!?!?!」

と、悟空は攻撃をあつさり回避しながらゴクウブラックの背後へ回り込むと、パンチの嵐を次々と浴びせて吹き飛ばした。

合体ザマス・改「おのれ… 『裁きの刃』!?!?!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

悟空（身勝手の極意）「!?!?!」

ビルス「ウイス!!」

!!!!

ウイス「はい!!」

「パァァァァァァァァァァッ!!」

と、合体ザマス・改は『裁きの刃』と呼ばれる強力なエネルギーの刃を

大量に発生させて、悟空を攻撃する。そして、危険を察知した

ビルスの命令を受けたウイスは球体のバリアを発生させて

自身たちと一緒にベジータやプリキュアのメンバーを包み込んだ。

ザマスの攻撃は周囲を破壊し、火の海と化していく…。

そして、悟空はその攻撃を何とか防いでいるが…。

悟空（身勝手の極意）「……………」

ベジータ「くっ… カカロット…。」

キュアスター「悟空さん!!」

キュアミルク「このままじゃやられちゃうルン!!」

キュアソレイユ「どうにか… どうかしなきゃ!!」

キュアセレーネ「何か打つ手は無いのでしょうか…?」

ビルス「お前達…」

キュアミルキー「ルン？」

ビルス「黙って見ていろ……。」

キュアセレーネ「ビルス様……。」

キュアスター「黙ってなんていられないよ!!」

ウイス「悟空さんを信じましょう、みなさん。」

キュアソレイユ「ウイスさん……。」

フワ「フワ……。」

合体ザマス・改「ハハハハハッ!!! どうだ人間!! 神の真似事をするのは

結構だが所詮は人間!! 本物の神には足元にも及ば

ぬ!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「くつくつく……。」

倒れるのも時間の問題の様だな。」

悟空（身勝手の極意）「!!!!!!?」

「ピカーーーーーーッーン!!」ドドドドドドドドドド!!!

合体ザマス・改「ぐわあああーーーーーッーン!!!」っ!!!

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「バ……バカな!!」

と、裁きの刃を防ぎ続けていた悟空は、反撃に転ずると、
すさまじい威力の拳圧を放ち、合体ザマス・改に

ダメージを与えた。そして悟空の体が白くて眩い光に包まれた。

悟空（身勝手の極意）「……。」

合体ザマス・改「お……おのれーーーーっ!!!」

と、合体ザマス・改は、すさまじい勢いで悟空に攻撃を仕掛けてい
くが、

瞬時に無数の攻撃を叩き込まれて、振り返ちにあった。

「ドドドドドドドドドド!!!」

合体ザマス・改「うおおおおおーーーーっ!!!」

「ドゴンドゴンドゴーーーーッーン!!!」

悟空（身勝手の極意）「……。」

「パリパリパリパリ……。」

その後、悟空を纏っていた光が消えていくと、髪が銀色に変色し、更に眩いオーラを纏った姿へと変化した。キュアソレイユ「あ……あの姿……。」キュアセレーネ「なんて神々しい……。」キュアミルキー「きれイルン……。」キュアスター「キラやばキラやばキラやば……っ☆!!!」ビルス「ウイス……悟空は再び、たどり着いたんだな……。」ウイス「はい……。」ベジータ「まったく……何てヤロウだ……。」ビルス「あの姿……あの輝き……あれが……あれこそが……」

『完全なる身勝手の極意』!!」

悟空（身勝手の極意・完全）「……………」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「完全なる……身勝手の極意だと……」

合体ザマス・改「おのれ……人間風情が!!」

悟空（身勝手の極意・完全）「行くぞ!!」

「シユン!!」「ドドドドドドドドド!!」

ゴクウブラック（界王拳ロゼ）「ぐわあああーっ!!!」

合体ザマス・改「うおおおおーっ!!!」

「ドゴンドゴンドゴー……ッ!!!」

と、悟空はすさまじいスピードでザマスとゴクウブラックに向かっていくと、瞬時に連続攻撃を叩き込んで吹き飛ばした。そして、ゴクウブラックの変身が強制解除された。

「シユ……………」

ゴクウブラック「あ……が……」

合体ザマス・改「もう一人の私!!おのれ、こうなれば!!」

と、合体ザマス・改は何か立ち上がり、反撃に出ようとするが、ザマスの合体も強制解除されて、懐中時計で召喚されたもう一体のザマスが消滅した。

ザマス②「……………」

「シユ……………」

ザマス「な……何だと……?」

悟空（身勝手の極意・完全）「どうやら時間切れみてえだな…残念
だけだよ!!」

「ブウーーーーーッーン!!」

と、悟空はそう言いながら、かめはめ波の発射態勢をとる。

悟空（身勝手の極意・完全）「かーめーはーはーめーはーめー…。」

ウイス「どうやら決着が着きそうですね、ビルス様。」

ビルス「ああ。さすが悟空だ!!」

キュアスター「悟空さん…行っけーーーーーッ!!!」

悟空（身勝手の極意・完全）「波ーーーーーッ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーッ!!!」

ゴクウブラック「くっ!?!」

ザマス「お…おのれーーーーーッ!!!」

と、悟空は、全力でかめはめ波を放ち、攻撃した。

そして、ゴクウブラックとザマスに直撃しようとしたその時…。

「ピシーーーーーッーン!!!」

悟空（身勝手の極意・完全）「……………」

ベジータ「……………」

キュアスター「……………」

キュアミルキー「……………」

キュアソレイユ「……………」

キュアセレーネ「……………」

フワ「……………」

ビルス「……………。（ウイス…これは…）」

ウイス「……………。（何者かが時間を停止させた様ですね…。）」

と、周囲の時間がゴクウブラックとザマスを除いて

突如停止した。すると…。

「シューーーーーーッーン…。」

? 「残念だが…今回はここまでの様だな。」

ゴクウブラック「お…お前は?!」

ザマス「『ツァイト』…余計な手出しを…。」

ツァイト「ラー・カイン様からの命令でな…お前達には

まだ、消えてもらっては困るらしい。

ここは一旦退くぞ。」

と、そこに親衛隊（ホワイト・ナイト）の一人である『ツァイト』が姿を現した。そして、ゴクウブラックとザマスに撤退を指示する。

ゴクウブラック「くっ…仕方あるまい…。」

ザマス「おのれ…覚えている人間共。

次こそは貴様らを葬ってやる…。」

ツァイト「では撤収するぞ。」

「シュー……………ン…。」

「ピシュー……………ン!!!」

そして、ゴクウブラックとザマスはツァイトと共に、その場から姿を消して、撤収していった。その後、停止していた時間が解除された。

ベジータ「い…今、何が起きたんだ？」

キュアスター「あの2人がいないよ!!」

キュアミルキー「まさか逃げたルン？」

キュアソレイユ「でも…いつの間に？」

キュアセレーネ「わかりません…。」

フワ「フワ？」

ビルス「やれやれ…また面倒な奴が出てきたな。」

ウイス「どうやら、敵側にも時間を操る能力を持つ者が

いる様ですね。それも強力な…。」

悟空（身勝手の極意・完全）「うわ……………っ!!!」

「バリバリバリバリバリ!!!」

と、悟空の体から突如、ドズ黒いオーラが噴出し、

悟空の体にダメージを与えていく。

そして、悟空の姿が元に戻っていった。

「シュー……………ン…。」

悟空「く…う…う…。」

キュアスター「悟空さん!!」

キュアミルキー「何が起きたルン!？」

ウイス「限界を超えた神の力…やはり、今の悟空さんでも

負担が大きすぎましたか…。」

ビルス「その様だな…だが、よくやったぞ悟空!!」

ベジータ「フン!!あいかわらずム力つく野郎だな…。」

また、俺の先を行きやがって!!」

悟空「へへへ…悪いなベジータ。」

キュアソレイユ「悪いことなんて無いよ!!ありがとう悟空さん!!」

キュアセレーネ「おかげでわたくし達は助かったんですから!!」

キュアスター「これで一件落着だね!!」

キュアミルキー「ルン!!」

ウイス「ところであなた達…これからどうするのですか？」

ビルス「確か突然、この世界に飛ばされたと言っていた様だが…。」

キュアソレイユ「その時に『ユニ』や『プルンス』と

はぐれちやったんです。」

キュアセレーネ「その2人を探そうと思っています。」

ウイス「それでしたら…わたくし達とご一緒しませんか？」

そのお2人を探すのを手伝いますよ。」

キュアミルキー「えっ?良いルン?」

ビルス「おい、ウイス!!余計な事を…。」

悟空「いいじゃねえかビルス様…またブラック達が襲ってくるか

も

知れねえしよ…。」

ベジータ「まあ…貴様の言うことも一理あるな。」

俺達とした方が安全だろう。」

ウイス「ビルス様…いかがでしようか？」

ビルス「まあ…良いだろう。」

キュアスター「やったー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!!!」

ありがとう、ウサギさん!!」

「ガバツ!!」

と、感激したキュアスターはビルスに抱き着きながらそう言った。

マイ「なんだか緊張するわね!!」

トランクス「だけど、俺達はこんな所で立ち止まる訳のはいかない。

必ず勝って戻るんだ!!でない、父さんに

合わせる顔が無いからね。」

マイ「そうね。必ず勝って戻りましょう、トランクス!!」

トランクス「ああ!!」

ナツメ「わたし達も頑張りましょう、みんな!!」

トウマ「うん!!」

アキノリ「おう!!」

ケースケ「ウイスパーやミッチー達... 大丈夫かな?」

アヤメ「きつと大丈夫よケースケ君!!」

沖原「いいチームだ... 我々も見習わなければならないな。」

美香「はい!!」

マサキ「フン、くだらん... 戦いに余計な馴れ合いなどいらん。」

エンマ大王「それじゃ、ぬらり!頼むぜ!!」

ぬらりひよん「はい。」

と、ぬらりひよんはエンマ大王の支持で、妖魔界へと繋がる

ゲートを開いた。

犬山まな「システムオールグリーン!!異常ありません!!」

アクア「ではこれより本館は妖魔界へと向かいます。」

アルテミス... 発進!!」

と、アクアの号令でアルテミスはゲートに進入し、

妖魔界へと出発していった。そして...

妖魔界

デューク「... という訳ですので、私があなただのサポートに

就くことになりました。」

シユラウド「フン!!ラー・カイン様も余計な事を...」

貴様の助けなどなくとも、グラン・ゲインズなど、

俺一人で充分だ。」

デューク「本当は私も願いたい下げ何ですがねえ... ラー・カイン様の

命令は

と、見事にスター☆トウインクルプリキュアのメンバーを守り切り、ザマスとゴクウブラックを退けた悟空達。

はぐれてしまった『ユニ』という名の女の子と、

『ブルンス』という生物を探す為、プリキュアと悟空達は

今後、チームを組んで、行動を共にすることになった。

一方その頃、グラン・ゲインズはゲートを開き、

アルテミスで妖魔界へと出発していった。

そして、妖魔界では親衛隊（ホワイト・ナイツ）の一人である

シユラウドの手により、捕えられていた猫耳の女の子が

洗脳されていた。果たして、彼女とプルプルした生物は

一体、何者なのか…。今、まさに妖魔界の運命をかけた

激闘の火蓋が切っておろされようとしているのであった!!

第36話 〳 限界突破!! 『神の極意』再び…。 〳 (完)

第37話 　　開始（スタート）！妖魔界奪還才ペ
レーション！！　　

　　妖魔界　　

「シューーーーーーシューーン……。」

アクア「着いたわよ!!」

ナツメ「ついに来た……。」

なぎさ「ここが妖魔界……。」

零「想像していたのとは違うな。」

刻「ああ……。もっと地獄みたいな所を想像していたけどな。」

光「大昔の都みたいだね!!」

鬼太郎「ですが…… 妙ですね、父さん。」

目玉おやじ「うむ……。やけに静かすぎるのう……。」

ねこ娘「何か……。嵐の前の静けさって感じ……。」

「ファン!!ファン!!ファン!!ファン!!」

沖原「どうした!?!」

犬山まな「アルテミス前方に敵影多数、出現!!…… これは!?!」

「シンシンシンシンシン!!」

ザケンナーの集団「……。」

レグルス兵の集団「……。」

燐子の集団「……。」

ほのか「あれは!?!」

なぎさ「ザケンナー!!」

ひかり「何でこんなところに……?」

キング「レグルス兵もいるよ!!」

バン「後は…… 何だありや?」

ゴウセル「魔神族でも妖怪でもなさそうだな。」

トウマ「あれは……。燐子（りんね）だ!!」

アキノリ「何であいつらがここに……?」

ねこ娘「燐子って?」

エンマ大王「紅世の徒の下僕達さ。」
鬼太郎「ああ……この前ぬらりひよんが言っていた連中か。」
ぬらりひよん「どうやら、先の戦いでフレイムヘイズに倒された輩
の様だな。」

あのザケンナーやレグルス兵も同様の様だ。」

ナツメ「一度倒した奴らが妖魔界で復活したって事……？」

エンマ大王「こりやあ多分、シユラウドの仕業だな。」

海「シユラウド……？」

風「もしかして、親衛隊（ホワイトナイツ）でしょうか？」

ぬらりひよん「ああ。『親衛隊（ホワイトナイツ）シユラウド』……。

現在、この妖魔界を牛耳っている者だ。

奴は死者の魂を具現化して己の使役にできる能力がある。」

砂かけ婆「死者の魂を具現化じゃと？」

子泣き爺「まるで妖怪みたいな事をする奴じゃのう。」

エンマ大王「そりやあ、シユラウドの正体は……。」

マーリン「話の途中ですまないが……出撃しなくて良いのか？」

ぬらりひよん「あ、ああ。そうだったな……アクア殿、出撃命令を
!!」

アクア「わかりました。総員、出撃してください!!」

「シユンシユンシユンシユン!!」

平家「さてと……亡霊退治でも始めましょうか!!」

アデル「ああ!!」

ディアンヌ「どつからでもかかってきなさい!!」

キング「待って、ディアンヌ!!」

トランクス「まだ何か来るぞ!!」

「シユン!!シユン!!」

酒呑童子（洗脳）「グラン・ゲインズ……。」

蛇王カイラ（洗脳）「倒す……!!」

とそこに、酒呑童子と蛇王カイラがグラン・ゲインズの前に
姿を現した。だが彼らからは禍々しくて強大な妖気が溢れ出てい

た。

アキノリ「あ… あれって!？」

ナツメ「酒呑君!カイヤ様!!」

ケースケ「えーっ?!?どうしてあの二人が!？」

キュアブラック「待つて!!まだだれか来るよ!!」

キュアホワイト「あれは!？」

シャイニールミナス「まさか…。」「new page」

猫耳の女の子(洗脳)「スターカラーペンダント!!カラーチャージ

!!」

と、猫耳の女の子は『スターカラーペンダント』と呼ばれる

アイテムを取り出し、歌いながら変身を始めた。

「キラキラキラキラキラ☆」

猫耳の女の子(洗脳)

「ぎゅらぎゅらめくくくく♪星の力でく♪憧れのく♪わたし描くよく♪
トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク
ルプリキュア♪

スタートウインクルくスタートウインクルプリキュアくく!!アア

くくく!!」

キュアコスモ(洗脳)「銀河に光る!虹色のスペクトル!キュアコス
モ!!」

キュアハート「あっ!!キュアコスモだ!!」

キュアダイヤモンド「でも、何だか…?」

キュアロゼッタ「様子が変ですよ…?」

キュアソード「まさか…。」

キュアエース「誰かに操られているのでしょうか?」

レジーナ「そうみたい…でも向かってくるなら!!」

蛇王カイラ(洗脳)「かかれ…!!」

レグルス兵の集団「ははっ!!」

ザケンナーの集団「ザケンナー!!!」

燐子の集団「いただきま〜す!!」

「バアーーーーーッ!!」

く アルテミスブリッジ く

犬山まな「レグルス兵、ザケンナー、燐子の集団、撃破しました!!」
ホーク「もうかよ!!」

知世「みなさん、お強いですわ!!」

ねずみ男「あいつら…何か急に腕上げてねえか?」

アクア「多分…この前、戦った『あの組織』との戦闘のおかげね…

()」

エリザベス「ええ…凄い方々でしたから…()」

沖原「マサキ…お前は何故、出撃しなかったのだ?」

マサキ「あの程度の連中など俺が出るまでもない。

それに…さつきから妙な気配も感じるしな…。」

美香「妙な気配…それは何ですか?」

マサキ「人形に話す必要はない…。」

ホーク「おい、てめえ!!そんな言い方ねえだろ!!

ロース・ハム・アタック!!」

マサキ「フン…。豚が調子に乗るな!!」

「ガシッ!!」

と、マサキは突撃してくるホークの頭を鷲掴みにしながらそう言い放った。

ホーク「プギーーーーーーッ!!?」

エリザベス「ホークちゃん!!」

アクア「マサト君!!その手を放しなさい!!」

マサキ「俺は木羅マサキだ!いい加減に覚えろ…ん?」

と、マサキはホークの目から只ならぬ気配を感じ取った。

沖原「マサキ?」

美香「どうしたのですか…?」

マサキ「フン…そういう事か…面白い…。」

「ポイ!!」

ホーク「プギーーーーーーッ!!」

と、マサキはそのままホークを放り投げた。

知世「ホークちゃん!!」

ねずみ男「……（ププツ!!いい気味だぜ……。）」

マサキ「おい…… その女!!」

エリザベス「わ…… わたくしでしょうか……？」

マサキ「一つ良いことを教えてやる…… 『奴』が

もうすぐ目覚めそうだぞ……？」

アクア「奴…… まさか!？」

エリザベス「メリオダス様が…… 本当ですか!？」

マサキ「後は自分の目で確かめてみるんだな。」

アクア「エリザベス…… ここは良いから行ってちょうだい!!」

エリザベス「はい!ありがとうございます!!」

と、エリザベスは喜びの表情を浮かべながらブリッジから

医務室へと向かっていった。

美香「メリオダスさんが…… 良かったですね、沖原さん!!」

沖原「ああ…… しかしマサキ…… 何故、お前にそんな事がわかるんだ?」

マサキ「さあな…… そこでのびている豚にでも聞いてみるがいい。」

ホーク「……。」「チーン……。」

アクア「……（ホークちゃん…… 何か秘密があるのかしら……？）」

「new page」

バン「さてと…… 残るはあの3人か……。」

エンマ大王「カイラは俺とぬらりが引き受ける。

お前たちは残りの二人を頼むぞ!!

行くぞ、ぬらり!!」

ぬらりひよん「はい、大王様!!」

鬼太郎「わかった!!」

ナツメ「酒呑君…… 今、助けるからね!!」

召喚!!私の友達…… 出てこいジバニャン!!」

ジバニャン「ツシャー……ツ!!」

トウマ「憑依!!剣武魔神、不動明王!!我に力を!!」

「パァ……ツ!!」

不動明王・界「不動明王・界…… 参る!!」

アキノリ「妖怪ウオッチアニマス… 来い、幻獣朱雀!!」
朱雀「朱雀… 参上!!」

酒吞童子（洗脳）「グガアーーーーーッ!!!」
「ドゴーーーーーッ!!!」

鬼太郎「うわーーーーーッ!!!」

ねこ娘「キヤアーーーーーッ!!!」

ジバニヤン「ニャーーーーーッ!!!」

と、酒吞童子は妖気を極限までに上げると、
グラン・ゲインズのメンバーに襲い掛かり、
そのまま吹き飛ばした。

ナツメ「鬼太郎さん!みんな!!」

目玉おやじ「あの者たち… 操られておるだけではないぞい…
妖気も桁違いにあがっておるぞ!!」

不動明王・界「参る!!雷・剛・電・撃!!雷鳴… 鉄槌斬り!!」

「ズバーーーーーッ!!!」

アキノリ「やったぜ!!」

アヤメ「これなら…。」

と、不動明王・界の雷鳴鉄槌斬りが酒吞童子に直撃する… だ
が…。

酒吞童子（洗脳）「くつくつくつ…。」

砂かけ婆「き… 効いとらんぞい…。」

子泣き爺「な… なんて奴じやぞい…。」

不動明王・界「くつ…!?!」

酒吞童子（洗脳）「グガアーーーーーッ!!!」
「ドオオオーーーーーッ!!!」

光「うわーーーーーッ!!!」

海「きやあーーーーーッ!!!」

さくら「ほえーーーーーッ!!!」

と、酒吞童子は右手から強力な妖気のエネルギー波を放つと、
グラン・ゲインズのメンバーを吹き飛ばし、ダメージを与えた。「n

ewpage」

風「あ…あ…あ…あ…」

小狼「ううう…」

ケロベロス「あ…あかん…あいつ、メツチャ強いで…」

エンマ大王「お前ら!!」

ぬらりひよん「いかん!!」

蛇王カイラ（洗脳）「グオオオオオ……ッ!!!」

「バア……ッ!!!」

エンマ大王「ぐわ……ッ!!!」

ぬらりひよん「うお……ッ!!!」

と、エンマ大王とぬらりひよんが吹き飛ばされたメンバーに一瞬、気を取られたその時、蛇王カイラが持っていた刀に妖力と纏わせて

一閃し、

エンマ大王とぬらりひよんに直撃させて、ダメージを負わせた。

エンマ大王「ううう…カ…カイラ…目を覚ませ…」

ぬらりひよん「カ…カイラ様…」

蛇王カイラ（洗脳）「とどめだ…」

「ドオオ……ッ!!!」

と、蛇王カイラは刀を両手で持ち、上空へと掲げると、妖力を極限までに高めて、巨大な妖気の剣へと変貌させた。

ナツメ「エンマ様!!ぬらりひよんさん!!」

酒吞童子（洗脳）「ぐおお……ッ!!!」

「ガシ……ッ!!!」

ナツメ「がはっ!?!」

と、酒吞童子はナツメに襲い掛かると、そのまま首根つこを掴み、苦痛へと追い込んでいた。

「ギリギリギリギリ…」

ナツメ「あ…あ…あ…が…が…が…さ…さ…さ…か…か…か…み…み…み…く…く…く…」

ケースケ「この野郎!!姉ちゃんを放せ……ッ!!!」

「バキッ!!」

ケースケ「痛った……ッ!!!」

と、ケースケはナツメを助けようと酒？童子を蹴飛ばすが、奮闘むなしく、逆に蹴った足がダメージを負ってしまった。

鬼太郎「ナ… ナツメ…。」

ねこ娘「ど… どうすれば…。」

酒呑童子（洗脳）「ぐふふふ…。」

ナツメ「あ… （く… 苦しい… 私… ここで死んじやうのかな…。）」

？「（安心しろ…。）」

ナツメ「（えっ…？）」「new page」

く ナツメの思考の中 く

？「（死なせはしない…。お前はわらわを長年に渡る

怨念から解き放ってくれた…。）」

ナツメ「あなたはもしかして… 『朱夏』!!」

朱夏「ああ… 今度はわらわがお前に… いや、お前達に力を貸す番だ!!」

と、ナツメの思考の中に朱夏が現れて、
そういいながら、ナツメに近づいていった。

ナツメ「朱夏… また一緒に戦ってくれるの…？」

朱夏「もちろんだ… この世界を守りたいのはわらわも同じだからな。

これからは常にお前と共にある… よろしくな、ナツメ…。」

ナツメ「ありがとう… 朱夏!!」

「パァー… ツ!!!」

そういいながら、ナツメと朱夏が互いに抱き合うと、
そこから眩い光が放たれた。そして… 「new page」

「バァアァー… ツ!!!」

酒呑童子（洗脳）「!!!」

キング「な… 何!!!」

マーリン「あの光は…。」

鬼太郎「それにこの妖力… まさか!？」

朱夏「…。」

「ゴオオオオ………ツ!!」

エンマ大王「くっ……。」

ぬらりひよん「だ……大王様……。」

と、カイラは巨大な妖力の剣を振り下ろし、

エンマ大王とぬらりひよんに直撃しそうになったその時……。

? 「フン!!」

「ガキ………ン!!」

と、そこへ突如、灼熱の髪と瞳をした少女が現れて、

カイラの放った斬撃を難なく受け止めて、弾き飛ばした。

蛇王カイラ（洗脳）「!!!」

マイ「えっ……!?」

トランクス「か……彼女は……?」

アキノリ「お……おい、まさか!!」

? 「久しぶりだな、エンマ大王……ぬらりひよん……

しばらく見えない間に、腕が鈍ったんじゃないのか?」

エンマ大王「お前は……。」

ぬらりひよん「戻って……来たのか……。」

朱夏「フレイムヘイズ……『灼眼のシャナ』!!」

シャナ「さてと……行こうか、アラストール!!」

アラストール「ああ……良いだろう!!」

と、ついに妖魔界に突入したグラン・ゲインズ。

そこには死者の集団やシユラウドに洗脳されて強化された酒呑童子、蛇王カイラ、キュアコスモが待ち構えていた。

彼らに苦戦を強いられていたメンバー達であったが、

ナツメが『朱夏』として復活を果たし、その圧倒的な力で

酒呑童子を一蹴し、元の『酒? ハルヤ』へと戻した。

そして、蛇王カイラにとどめを刺されそうになった

エンマ大王とぬらりひよんだったが、

彼らの前には『無何有鏡(ザナドウ)』へと旅立っていったはずの
フレイムヘイズ『灼眼のシヤナ』が姿を現し、窮地を救うのであつ
た。

早くも役者が集い、始まった大激闘……これからの戦いの行方は
どうなっていくのであろうか!?

第37話 　　開始(スタート)！妖魔界奪還オペレーション!!
　　(完)

第38話 見参!!灼眼の討ち手と怒りの女神

「シャナ「……………」」

ぬらりひよん「灼眼の… シャナ!!」

エンマ大王「へっ… 戻ってきた早々、言ってくれるじゃねえか!!」

朱夏「フツ… だが、頼もしい者が帰ってきたな!!」

シャナ「!!お前… ナツメか!? その姿… 朱夏の力を…」

朱夏「ああ… 今の私は、ナツメであり、朱夏でもある。」

再会を喜びたい所だが… それどころではないようだな。」

蛇王カイラ（洗脳）「ぐおおおおお…」

アラストール「来るぞ!!」

シャナ「うん。肩慣らしには丁度いい!!」

「ガキ…」

カイラはシャナに襲い掛かるが、シャナはその攻撃を難なく受け止めると、

そこから凄まじい妖気と炎がぶつかり合う。

さくら「ほえ…」

鬼太郎「くっ!!」

零「この炎は…?」

平家「この前、見た炎とはまた違うようですね…」

エンマ大王「シャナ、気を付けろ!!」

ぬらりひよん「今のカイラ様は…」

アラストール「フツ… 随分と心配されているな。」

シャナ「問題ない。すぐ終わらせる!! ハア…」

「ズバー…」

蛇王カイラ（洗脳）「ぐお…」

「ドゴ…」

と、シャナは炎の威力を更に上げると、そのままカイラに一閃し、吹き飛ばした。

ねこ娘「す…すごい!!」

アキノリ「エンマ様とぬらりひよんさんの2人がかりでも苦戦してたのに…。」

クレフ「彼女…この前見た時よりも明らかに力をつけているようだが…。」

光「どこかで修業でもしたのかな…？」

蛇王カイラ（洗脳）「ぐおーーーーーっ!!!」

「ドオーーーーーッ!!!」

と、吹き飛ばされていたカイラは何とか立ち上がると、妖気を極限までに高め始めた。すると、妖魔界全体が揺れ始めて、建物が次々と崩壊し始める。

「ピーーーーーン!!」

鬼太郎「と…父さん、このすさまじい妖気は!?!」

目玉おやじ「う…うむ…これはまずいかもしれんぞい!!」

朱夏「シヤナ!!」

シヤナ「アラストール…修行の成果、少しだけ見せるよ!!」

アラストール「いいだろう…だがやりすぎるなよ。」

シヤナ「大丈夫。うまく制御して見せる!!ハアーーーーーッ!!!」

「ブオワーーーーーッ!!!」

と、シヤナはそういうと、自身の体から凄まじい妖気に似たものを放出し始めた。そして、持っていた刀を前方へとむけて、何かを発動させる構えをとった。

トランクス「こ…この凄まじい気は…!?!」

海「一体…何が始まるの!?!」

エンマ大王「あの気…あの構え…まさか!?!」

シヤナ「行くよアラストール!!」

アラストール「ああ!!」

シヤナ・アラストール「卍解（ばんかい）!!」

「ブゴオワーーーーーッ!!!」

と、シヤナとアラストールは『卍解』と呼ばれるものを発動させる

と、

凄まじい炎がシャナを纏っていく。そして、その炎が徐々に凝縮されていき、

髪や瞳の色が更に濃い紅蓮色となり、背中の炎の翼も更に激しく燃え上がるような感じになった。

そして、持っていた刀『贄殿遮那（にえとののしやな）』もこれまでの大太刀からマチェットの様な大きさへと変化し、刀の色も真っ赤に染まって、解放を果たした。「new page」
シャナ（卍解）「これが私の新しい力…」

『贄殿遮那・零式（にえとののしやな・ぜろしき）』よ!!」
さくら「ほえー！ー！ー！ー！っ!!!」

ねこ娘「な…何よあれは!?!」

アキノリ「す…すげえ!!」

朱夏「やはり…『卍解』だったか!!」

トウマ「卍…解?」

アデル「聞いたことないぞ…。」

鬼太郎「何だ?この感じ…父さん、これは霊力でしょうか?」

目玉おやじ「多分のう…じゃが、ワシも卍解などというものは

聞いたことないぞい。」

エンマ大王「あれは『戸魂界（ソウル・ソサエティ）』の死神の力さ。

けど、何でシャナがそんなものを…?」

小狼「『戸魂界（ソウル・ソサエティ）』…?」

ケロベロス「何やそれ?」

ぬらりひよん「こことは別の世界にあるいわば霊界で、

そこを守護する者達が『死神』と呼ばれる存在だ。

その彼らを使う『斬魄刀（ざんぱくとう）』の能力を

極限までに解放するのが『卍解』なのだ。」

アニエス「死神…斬魄刀…。」

ラピス「何かわからねーけど、とにかくスゲえもんって事だろ!!」

トウマ「けど、シャナの刀は斬魄刀じゃないよね…。」

ケースケ「それなのに何で、その卍解ってのが使えたの?」

あーっ！！！！

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッカー！！！！」

そして、炎に包まれたカイラは断末魔の叫びをあげながら大爆発を起し、

黒焦げになって、その場で倒れた。

「ドサツ!!」「ブスブスブスブスブス……。」

「シュー……ン……。」

カイラ「……。」

エンマ大王「カイラ!!」

ぬらりひよん「カイラ様……大丈夫ですか!」

ねこ娘「ちよ……ちよつと……やりすぎじゃないの?」

鬼太郎「そ……そうだね……。」

目玉おやじ「まあ……死んではおらんようじゃが……。」

マーリン「とりあえず……アルテミスに收容し、治療でもしてもらおうか。」

「パチン!!」「シュン!!」

と、マーリンは指を鳴らすと、黒焦げとなったカイラを

アルテミスに瞬間移動させた。

シャナ「ごめん、エンマ大王……ちよつとやりすぎちゃった。」

エンマ大王「いや、かまわねえよ。よくカイラを止めてくれたな。

礼を言うぜ!!」

アラストール「これでもだいぶ制御したつもりだったのだがな。」

ぬらりひよん「この威力で制御していたのか……」

やはり卍解の力は恐ろしいものだな。」

朱夏「これで残るは……。」

「ドオオオオオオオオオオ……ン……ン!!」

バン「何だ!?!」

キング「み……みんな、あれ見て!!」

ディアンヌ「プリキュアのみんなが……。」「new page」

キュアブラック「ううう……。」

キュアホワイト「つ……強い……。」

キュアコスモ（洗脳）「ほらほら、どうしたニヤン？もう終わりかニヤン？」

と、キュアハート達プリキュア組は洗脳されたキュアコスモに戦いを挑んでいたが、

シユラウドの力により大幅に強化されたキュアコスモに手も足も出せずにいた。

キュアダイヤモンド「何いつてるのよ……。」

キュアロゼッタ「まだ戦えます!!」

キュアソード「あたし達……もう絶対に負けないって決めたから!!」

キュアエース「たとえ相手と同じプリキュアであってもです!!」

レジーナ「そーよそーよ!!」

キュアコスモ（洗脳）「強がりには止すニヤン。もうフラフラなくせに!!」

キュアハート「それでも……あたし達は！行くよみんな!!」

一同「うん!!」

「バァー………ツ!!!」

そして、キュアハートの号令とともに、プリキュア達は再びキュアコスモへと立ち向かっていった。

さくら「キュアハートさん!!」

小狼「戦況はよくないみたいだな。」

ケロベロス「よっしゃー……っ!!加勢にいくでー……っ!!!」

マイ「ケロちゃん、待って!!」

トランクス「また何か来るぞ!!」

「シユンシユンシユンシユンシユン!!!」

魔神族の大群「ぐうううう……!!」

燐子の大群「フフフフフフ……。」

虚（ホロウ）の大群「ぶお………っ!!!」

ねこ娘「また出てきたわね!!」

シャナ「あれは……燐子か!!」

ゴウセル「今度は魔神族までいるのか……。」
アンス「あと……見た事がない化け物までいますよ?」
ぬらりひよん「あれは『虚(ホロウ)』……」

先ほど話した『戸魂界(ソウル・ソサエティ)』の死神
と

敵対しているいわば悪しき霊体だ。

魔神族同様、色々な種類が存在しているが、

あれは最も一般的な『巨大虚(ヒュージ・ホロウ)』の
様だな。」

エンマ大王「まあ……大虚(メノス)じゃないだけまだいいか。」

鬼太郎「とにかく……早くこいつらを倒して、プリキユア達の加勢
に行こう!!」

ねこ娘「ええ!!」

バン「退屈しねーなキ〜ング♪」

キング「喜んでる場合じゃないよバン!!」

マーリン「では皆……第2ラウンドとこのうか!!」

一同「了解!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーは大量に現れた敵の増援に挑んで
いった。「new page」

↳ 閻魔宮殿 ↳

シユラウド「フン……あの拾った小娘……中々良い働きをするじや
ないか。」

デューク「まあ……ほとんどあなたのドーピングの力でしようが
ね。」

しかし……『フレイムヘイズ』の小娘が出てきたのは

予想外だったのではないですか?

しかも、『卍解』まで会得しているとは……。」

シユラウド「この前、ヴォルクルスが使った魔法の影響だろうな。

まあ……こうでなくては面白くない。」

デューク「それに……あの『虚』は一体、どこで入手したのですか
?

我々のデータの中にはありませんでしたが……。」

シユラウド「貴様を知る必要はない。お前は黙って己(うぬ)に従って
いれればいい。」

デューク「何ですって……？一つ言っておきますが、私はラー・カ
イン様の命に

従ってるのであって、あなたに従っているわけではありません。
せん。

勘違いなさらぬよう……。それに、私の思い過ごしなら良
いのですが……

あなた、まさか……？」

シユラウド「余計な詮索はしない方が身の為だぞ。」

それとも……グラン・ゲインズより先に潰されたいか
？」

「ドオオオオオ………ッ!!!」

と、シユラウドは素晴らしいながら凄まじい殺気と闘圧を放ち、
デュークをけん制した。

デューク「どうやら……まったくの思い過ごしというわけでは
なさそうですね……ですが、今こんな冗談をしている

場合ではないでしょう？」

シユラウド「……フン!!腰抜けめ……まあいい。」

そろそろ『奴』を準備させておくか。

「シユ………ン……。」

？「私を蘇らせたのはお前か……？」

シユラウド「その通りだ。お前にはこれからたつぷりと働いてもら
うぞ。」

？「いいだろう……私とて、人間共に昔の借りを返すいい機会だ。」
「シユ………ン」

と、シユラウドによって呼ばれて現れた『？』は
素晴らしいながらその場から姿を消した。

デューク「今のはまさか……ですが、朱夏達が戦ったものとは
またタイプが違うようですね。」

キュアコスモ（洗脳）「遅いニャン!!」

「ドボオーオーオーツ!!バキオーオーオーツ!!ガスオーオーオーツ!!」

キュアブラック「げぼオーオーツ!!」

キュアホワイト「ぐはオーオーツ!!」

シャイニールミナス「くああオーオー...!!」

「ドゴゴゴオーオー...!!」

続いてキュアブラック達が挑んでいったが、

キュアコスモは一瞬の間に、

キュアブラックを強烈な左ボディアツパーで、

キュアホワイトを強烈な右ボディフックで、

シャイニー・ルミナスをこれまた強烈な延髄斬りを

それぞれ放ち、瞬く間にノックアウトしたのであった。

キュアコスモ（洗脳）「残るはお前だけニャン...」

さてと、どう料理してやろうかニャン」

と、キュアコスモは不気味な微笑みで舌舐めずりをしながら、ボクサーの様な戦闘態勢をとった。

キュアハート「そう簡単にやられないもん!!」

こうなったら...こつちも本気で行くわよ!!」

と、キュアハートは素晴らしいながら、

『リバーシア・ウォッチ』を出そうとするが...。[new page]

キュアハート「えっ!? な...無い!!リバーシア・ウォッチが無い!!」

キュアコスモ（洗脳）「探し物はこれかニャン?」

と、リバーシア・ウォッチが見つからず、慌てふためくキュアハートに

キュアコスモはいつの間にか盗んだリバーシア・ウォッチを見せびらかした。

キュアハート「嘘...いつの間に!」

キュアコスモ（洗脳）「忘れたニャン?」

私は『宇宙怪盗ブルーキャット』ニャンよ?

お前みたいな単純なポケポケ女から

物を盗むなんて訳ないニヤン」

キュアハート「何ですって〜〜〜!!誰が単純なポケポケ女よ!!?

リバーシア・ウオツチを…返しな

さ〜〜〜い!!!」

「ドドドドドドドドドドドド!!!」

キュアコスモ（洗脳）「お前!…やっぱり馬鹿ニヤン」

「シユンシユンシユンシユン!!!」

と、キュアコスモの挑発的な言葉に憤慨したキュアハートは

頭から湯気をシューシュー出しながら、パンチの嵐を繰り出して

くが、

キュアコスモは、凄まじいスピードと機敏さで難なく交わしてい

く。

キュアハート「くっ…このオオオオオ〜〜〜!!!」

キュアコスモ（洗脳）「そろそろブチのめして良いかニヤン!

プリキュア!コスモガトリング!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

キュアハート「がはあああ!!あああああああああ

あ〜〜〜っ!!!」

「ドゴンドゴンドゴ〜〜〜〜〜!!!!」

と、キュアハートのパンチの嵐を難なく交わしていた

キュアコスモは反撃に転じ、『プリキュア・コスモガトリング』と

呼称しながら、凄まじい威力とスピードを兼ね備えたパンチの嵐を

次々とキュアハートに直撃させボコボコにしていき、

大ダメージを与えて吹き飛ばした。

キュアハート「あ…あ…あ…。」

キュアダイヤモンド「ハ…ハート…。」

キュアソード「マ…マナ…。」

キュアコスモ（洗脳）「それじゃ…とどめニヤン

プリンセススターカラーペン!おとめ座!!

くるくるチャージ!!」

「ピロピロピロピロ!!!」

!!

キュアダイヤモンド「ハート…?」

キュアロゼッタ「マナ…ちゃん?」

キュアソード「あの姿は…?」

キュアエース「ネメシス…モード?」

レジーナ「マナ…」

キュアコスモ(洗脳)「ケケケケケケ!!そんなコケ脅しが通用するか!

死ねニヤン!!」

「バアーーーーーッ!!!」

「ドゴーーーーーッ!!!」

と、キュアコスモは素晴らしい放ちながら、強烈なパンチで攻撃を仕掛けるが、キュアハート・リバーシア(ネメシスモード)はそのパンチを難なく受け止めた。そして、その受け止めた拳をギリギリと握り潰していく。

キュアコスモ(洗脳)「くあああああ!!こ…このクズが!!

さつきと離しやがれニヤン!!」

キュアハート・リバーシア(ネメシスモード)「救いようのない愚かな者め…」

「バキーーーーーッ!!!」

キュアコスモ(洗脳)「ぐわあああああああっ!!!」

ク…クズのくせに調子に乗るなニヤン!!

プリキュア!コスモシャイニング!!」

「バアーーーーーッ!!!」

キュアハート・リバーシア(ネメシスモード)「Aファンネル…」

「ババババババババババ!!!」

キュアコスモ(洗脳)「ギャアアアアアアアアアアア!!!」

と、キュアコスモはコスモシャイニングを放ち応戦するが、

キュアハート・リバーシア(ネメシスモード)は、Aファンネルを無数に放って、

コスモシャイニングを相殺した後、そのままキュアコスモに次々と

鬼太郎「大丈夫か!？」

ねこ娘「では…… なきそうみたいね……。」

と、そこへ敵の増援を撃破してきたメンバー達が合流してきた。

バン「こりやあ、随分と派手にやらかしたな♪」

キング「その青い髪の子は確か……。」

ディアンヌ「ユニちゃんだったっけ…… ボロボロじゃない!!」

急いで治さないと!!」

マーリン「そうだな…… この少女となぎさ達もアルテミスへと戻そう。

そして…… マナ!!お前もだ!!少し頭を冷やしてこい!!」

と、敵と味方の区別がつかず、なぎさ達を攻撃したマナに対して、

マーリンは憤慨しながらそう言い放った。

マナ「は…… はい…… すみませんでした……。」

マーリン「…… フン!!」

「パチン!!」「シュン!!」

と、マーリンはマナに対して怒りの目線を浴びせながら、

アルテミスへと瞬間移動させた。

さくら「マーリンさん……。」

バン「珍しいじゃねえか。お前があんなにキレるなんてよ♪」

マーリン「…… 戦いはまだまだ続くのだ。マナには自分がこの隊の

中心だという

自覚を持ってもらわねば困るからな。ただそれだけの話だ。」

ディアンヌ「そんな事言うなんて…… マーリン……」

グラン・ゲインズに入って何か変わったね!!」

ゴウセル「右に同じ。」

マーリン「フツ…… もしかしたらお前の影響かな?さくら……。」

さくら「ほえっ?」

ケロベロス「まあ…… 無きにしもあらずやな!!」

小狼「ケロベロス…… そこは同意する所だぞ。」

光「とりあえず、敵の第1波は倒したみたいだし……」

後は、シユラウド達だ!!」

海「このまま一気にいきましよう!!」

風「はい!!」

零「プリキュア達がリタイヤしてしまったが…何とかなるだろう。」

平家「待つてくださいい大神君…何か嫌な気配がしますよ?」

「ピーーーーーッーン!!!」

鬼太郎「と…父さん!!この気配は!？」

目玉おやじ「どうしたのじゃ?鬼太郎!!」

「シユーーーーッーン…。」

?「ハハハハハハハハハ!!!」

ねこ娘「な…何よあいつ!!」

トウマ「ま…まさか!!」

アキノリ「あ…あいつは!？」

アヤメ「そ…そんな!!」

ぬらりひよん「大王様…。」

エンマ大王「あの野郎は…!!」

朱夏「空亡!!だけど…何かが違う…。」

空亡（フォーエバーフレンズver.）「ついにこの時が来た…」

私が妖怪の頂点に立つ日がな…!!」

と、シユラウドに洗脳されていた蛇王カイラ・キュアコスモを何とか退けたグラン・ゲインズのメンバー達。

だがその代償は決して安くはなく、

キュアハート・リバーシアが暴走した影響もあり、プリキュア達がここで早々とリタイヤしてしまうというアクシデントに見舞われた。

そして、メンバー達の前には大昔に倒されたはずの

空亡（フォーエバーフレンズver.）が

シユラウドの力で復活し、姿を現した。
果たしてグラン・ゲインズのメンバーは空亡を見事に撃破し、
シユラウドとの決戦に挑めるのであろうか!?

第38話 〽 見参!!灼眼の討ち手と怒りの女神 〽 (完)

[new page]

・今回登場のオリジナル形態の詳細

【キュアハート・リバーシア(ネメシスモード)】

キュアハート・リバーシアの強化形態。リバーシア・ウオッチが
キュアハートの怒りに呼応して更に進化し、強制変身させたもの。
髪の色がこれまでのマゼンタ色からエメラルド色へと変化し、
瞳の黄色の虹彩がさらに濃くなり、
眩い緑色のオーラを放っているのが特徴。

身体能力も通常のリバーシアやパルテノンモードを遥かに凌駕し
ており、

破壊神ビルスや孫悟空(身勝手の極意)とも互角以上に渡り合える
程の

パワーを持つが、現時点ではその力に意識を飲み込まれて
制御できない状態にあり、敵味方の区別がつけられず、
見境なく攻撃してしまうのがマイナスである。

尚、Aファンネルを召喚できる数も通常のリバーシアとは
比較にならないほどに増えているため、

更に多種多様な攻撃や防御が可能となった。

又、このモードは、敵を倒す事に主眼が置かれている為、
通常のプリキュアのような浄化技は持ち合わせていない。

『必殺技』

【リバーシア・ネメシス・ブレイズ】

無数のAファンネルで相手の周りを高速で動きながら包み込み、
凄まじい威力の緑の炎を発生させて最後に大爆発を起こして、

相手を撃退する技。

【シヤナ（卍解）】

シヤナが無何有鏡（ザナドゥ）に偶然迷い込んできた『戸魂界（ソウル・ソサエティ）』のある隊長格から修業を受けて、会得した『卍解』を使用した姿。

髪や瞳の色が更に濃い紅蓮色となり、背中の炎の翼も更に激しく燃え上がるような感じになった。

最大の特徴は『贄殿遮那（にえとののしやな）』に新たに会得した『霊圧』やアラストールの炎を極限までに凝縮させて進化させた

『贄殿遮那・零式（にえとののしやな・ぜろしき）』である。

これまでの大太刀からマチェットの様な大ききへと変化し、刀の色も真っ赤に染まっているのが特徴である。

又、シヤナ自身も通常よりも身体能力が大幅に向上し、死神の技である『瞬歩』をも会得しており、新たな必殺技も使用可能となった。

『必殺技』

【一の太刀・紅蓮薙（ぐれんなぎ）】

『贄殿遮那・零式（にえとののしやな・ぜろしき）』を横一文字に薙ぎ払い、斬撃した相手を凄まじい威力の紅蓮色の炎で焼き尽くす技。

【二の太刀・天照（あまてらす）】

『贄殿遮那・零式（にえとののしやな・ぜろしき）』を振り下ろし、斬撃した相手を眩い光と爆炎で包み込み、邪悪な者を滅する技。又、邪気に取りつかれた者を浄化する事もできるが、洗脳などの精神操作を受けた者には効果が無い。

又、力加減を間違えれば相手を消滅させてしまう為、

敵を倒す以外には使いどころが限られてしまう。

第39話 逆襲の亡者たち（前編）

朱夏「空亡!!」

エンマ大王「あの野郎……」

鬼太郎「あれが空亡……」

目玉おやじ「何と禍々しい……」

アニエス「まるでバックベアードみたい……」

アデル「そうだな……」

空亡「私がしばらくいない間に妖魔界も人間界も更につまらぬ輩が繁殖してしまったようだな。」

特にエンマ大王……いや、あの時は『イツキ』とかいう名だったか。

元は人間だった者が妖魔界の王になるとはな……。愚かな事よ。」

ぬらりひよん「貴様!!」

アキノリ「えっ!? あいつ、今なんて……」

ケースケ「イツキ……?」

アヤメ「エンマ様が……元は人間だった?」

エンマ大王「ああ、奴の言う通りだ。俺は元々、『イツキ』という名の

人間だった。」

ぬらりひよん「そして、先代閻魔大王の当時のご子息であった『紫炎』様と

あの空亡との戦闘がきっかけで二人は一つとなり、生まれたのがこの『エンマ大王』様なのだ。」

朱夏「そうだったのか……」

ハルヤ「ああ……あの時、『閻魔一武道会』に

参加していた人間と紫炎様が……フツ……」

エンマ大王「多分、奴もシユラウドの力で蘇ったんだろう。」

バン「まつ、おしゃべりはここまですてさつさと片付けよーぜ♪」
シヤナ「そうね。相手は一匹だけだし。」

メリオダス「よっ！エリザベス!!今まで心配かけたな!!」

エリザベス「ううん... 絶対に戻ってきてくれるって信じてた...

メリオダス!!」

と、エリザベスは感激のあまり、メリオダスに思いきり抱き着いた。

メリオダス「フムフム... しばらく見ない間に、

更に発育が良くなりましたなー!!」

「サワサワサワサワ...」

と、対するメリオダスも抱き着きながらエリザベスの体を

あちこちと触りまくっていた。

エリザベス「も... もう... メリオダスったら...」

アクア「あらあら... 寝起き早々、なぐにしているのかしら? 団く

ちよ♪」

メリオダス「ア... アハハ... 居たのかよミリカ...」

アクア「あーら、居ては悪かったかしら?

これでも心配して様子を見に来てあげただけど?」

エリザベス「アクアさん... ありがとうございます!!」

メリオダス「さてさてさーて... そんじや俺行くわ!!みんな戦って

るんだろ?」

今まで寝てた分、仕事させてもらうぜ!!」

アクア「え... ええ... そうね。お願いできるかしら?」

メリオダス「おう!!任せとけて!!じやあなエリザベス!

帰ったらまた続きやろうぜ!!」

エリザベス「はい!!気を付けてね!!」

メリオダス「...。(さてと... どいつをどう料理してやろうか

な...」

楽しみだぜ... クツクツクツ...!!」

と、メリオダスはその場から立ち去ると同時に

残忍な笑みを浮かべながら心の中でそう呟いた。

アクア「.....」

エリザベス「アクアさん... どうなさったのですか?」

アクア「う... ううん、何でもないわよ!!(メリオダス... あなた

まさか……。)」

と、アクアは立ち去っていくメリオダスに疑いの目線を向けながら
そう思った。

そして……。『new page』

バン「バニシング・キル!!」

キング「霊槍シヤステイフォル第4形態『光華(サンフラワー)!!』

ディアンヌ「双拳(ダブルハンマー)!!」

ゴウセル「大停電の矢(ブラックアウトアロー)!!」

マーリン「殲滅の光(エクスターミネイトレイ)!!」

「ドドドドドドドドドドド!!」

オーガスト「フン!!! 効かん!! ハア!!」

「ドオオオオオオオオオオオ!!!」

バン「ぐわーーーーーっ!!」

キング「うわあーーーーっ!!」

ディアンヌ「きゃあーーーーっ!!」

ゴウセル「キュピーン☆!!」

と、バン達はオーガストに向けて一斉に攻撃を開始するが、

魔力で圧倒的に勝るオーガストにはほとんど通用せず、

逆に反撃を受けて、吹き飛ばされた。

さくら「みなさん!!」

小狼「何て魔力だ……」

ケロベロス「やばいで……これは!!」

マーリン「スプリガン12最強は伊達ではないといったところ

か……」

皆……心してかかれ!!」

キング「でも……ナツ達はあいつを倒したんだよね?」

ディアンヌ「そうだよ!フェアリーテイルのみんなに負けてられな

いよ!!」

バン「また、あいつらと会った時の土産話にしてーしな……行くぜ

!!」

オーガスト「愚かな……お前達ごときの魔力で

この私は始めから倒れてなどいませんよ。
只……蚊に刺されて寝ていただけです。」

バン「あん？蚊に刺されただけだあ？寝起き早々、寝言いうなっ
つーの♪」

ゴウセル「体調は問題ないみたいだな。」

マーリン「ではエスカノール……早速で悪いが、あれを何とかして
もらおうか？」

エスカノール「ハツハツハツ!!朝飯前ですよ!!この私が来たからに
は

勝利は約束されたようなものですからね!!」

ケロベロス「ハハハ……キング・オブ・傲慢の復活やな。」

さくら「何か行ける気がするよ!!」

小狼「反撃開始だな!!」

オーガスト「良かろう。傲慢なる者よ……お主の力……見せてもら
おう!!」

エスカノール「ハツハツハツ!!おこがなしい!!」

ですが……私の魔力で死ぬる事を光栄に思いなさい。

あつ、失礼……もう死んでいるのでしたね。ハツハツ

ハツ!!」

と、こうしてエスカノールとオーガストの戦闘が始まろうとしてい
た。

その頃……。「new page」

光（レイアース）「紅い……稲妻……」

海（セレス）「蒼い……竜巻……」

風（ウインダム）「碧の……烈風……」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

バラガン「無駄だ……」

「シュー……」

と、光・海・風の3人は魔神を召喚し、バラガンへと攻撃を仕掛け
るが、

バラガンの特殊能力『老い』により魔法は朽ち果てていった。

クレフ「何!?!」

光（レイアース）「今…何が起こった!?!」

海（セレス）「魔法が…」

風（ウインダム）「朽ちた…?」

シャナ「アラストール…あいつの能力…」

アラストール「厄介だな…おそらく奴に触れば

一瞬で朽ち果ててしまうのであろう。

シャナよ…奴に接近戦で挑むのは危険だ。

距離をとるぞ!!」

シャナ「うん。わかった!!」

鬼太郎「もう一度だ…『指鉄砲』!!」

アニエス「ダイナバ・ミ・トーチ!!」

アデル「ハアーーーーーッ!!」

零「煉獄の炎（サタン・ブレイズ）!!」

刻「ガウス・キャノン!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!」

と、鬼太郎達は再度、バラガンへと一斉に攻撃を仕掛けた。だが…。

バラガン「無駄だと言っておる…」

泪「無傷かよ…」

平家「さて…どうしたものか…」

バラガン「もうお終いか?ならばこちらから行くぞ!!」

「バアーーーーーッ!!」

と、バラガンはそう言いながら鬼太郎達へと襲い掛かっていった。

クレフ「まずい!!」

鬼太郎「みんな、逃げろ!!」

ねこ娘「うん!!きやあ!?!」

と、鬼太郎の号令でバラガンの急襲を回避しようとした時、

ねこ娘が足を躓かせて転倒した。するとそこへバラガンが迫ってきた。

バラガン「朽ちろ…」

ねこ娘「嫌……来ないで!!」

鬼太郎「ねこ娘!!」

「バツ!!」

と、そこへ鬼太郎がねこ娘を間一髪のところまで救い出した。だが……。

鬼太郎「ぐあああああああああああああ!!!」
目玉おやじ「鬼太郎!!」

鬼太郎の右腕がバラガンの体にかすかに触れていた為、鬼太郎の右腕が急速に朽ち果てていく。

ねこ娘「うにゃーーーーーっ!!」

「ズバーーーーーーッ!!」

鬼太郎「ぐう!?!」

「シューーーーーーッ……」

と、ねこ娘が鋭い爪を伸ばすと、鬼太郎の右腕を切り落とした。そして、切り落とされた右腕は跡形もなく朽ち果てていった……。

ねこ娘「鬼太郎……ごめんなさい……私のせいで……」

鬼太郎「いいんだ。ねこ娘……君が無事で良かった。」

ねこ娘「鬼太郎……うん……」

と、鬼太郎の言葉に涙を流しながら頷くねこ娘。

目玉おやじ「また来るぞ!!」

バラガン「フハハハハハハ!!」

鬼太郎「くっ!?!」

ねこ娘「しっこいわね!!」

一反木綿「とりあえず全力で逃げるばーい!!」

シヤナ「このおーーーーーっ!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、そこへシヤナが刀に炎を纏わせてバラガンへと攻撃を仕掛ける。

アラストール「シヤナ!! 寄せ!!」

バラガン「フハハハハハ!! 愚かなことよ。

朽ち果てるがいい!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
「シャナ「ああああああああああああ!!!」
「アラストール「ぐああああああああああ!!!」
「シューーーーーー」

だが、逆にバラガンの老いの力をまともに受けてしまい、
シャナとアラストールは瞬時に朽ち果ててしまった……。

光（レイアース）「そ…そんな…」

海（セレス）「シャナさん!!」

風（ウインダム）「う…嘘ですよね…嫌ーーーーーっ!!」

バラガン「フハハハハハハ!! まずは2匹…安心するがいい。

お前達もすぐに後を追わせてやるぞ…」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

零「くっ!?!」

刻「くそっーーーーっ!!」

泪「た…助けて…」

遊騎「2番! 何とかできんのか!?!」

平家「無駄ですよ…あの力から逃れる術はありません…」

バラガン「フハハハハハハ!! 観念したか…死ねーーーーー
い!!」

と、バラガンがコードブレイカーの5人に標的を定めて

襲い掛かってきたその時…「new page」

? 「砕ける!?!」 『鏡花水月（きょうかすいげつ）!!」

「バリーーーーーー!!!」

バラガン「!!!」

と、その瞬間、バラガンの視界が砕け散り、

朽ち果てたはずのシャナとアラストールの前に

一人の少年が姿を現していた。

? 「お待たせ… シャナ!!」

シャナ「もう…遅いわよ!!」

アラストール「フツ…来たか坂井裕二!!」

裕二「何とか間に合ったみたいだね。」

鬼太郎「彼は確か……」

ねこ娘「シヤナの恋人ね!!」

一反木綿「た……助かったばーい!!」

目玉おやじ「しかしあのバラガンとかいう者……」

途中からおかしな動きをしておったのう……」

泪「確かにな……まるで何かに操られていたような感じだった。」

平家「フフフ……ひよつとしたら裕二君の力でしようかね?」

裕二「少し違うかな……。僕の手じゃなくて……」

裕二(?)「『私』の力だ……」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

バラガン「!!!」

砂かけ婆「は……何じゃー……」

子泣き爺「ごの強大な力は!!」

と、突如、裕二がそういうと周辺から強大な『霊圧』が放出されていく。

それと同時に、裕二の人格も変貌し、目つきも変化した。

裕二(?)「……」

シヤナ「裕……二?」

アラストール「違うぞシヤナよ……この者は『坂井裕二』ではない!!」

シヤナ「えっ……!?!」

バラガン「こ……この霊圧……さっきの現象……ま……まさか!!」

裕二(?)「久しいなバラガンよ……元氣そうでなによりだ。だが……」

バラガン「き……貴様……」

『藍染惣右介(あいぜんそうすけ)か……』

!!!

裕二(藍染)「すぐ私に葬り去られる事になるとはな。」

シヤナ「藍……染……?」

アラストール「惣右介だと……?」

と、人格が変貌した裕二は『藍染惣右介』と名乗り、

「バババババババババ!!!」

そしてジャネンバはトランクスにとどめを刺すべく、
ガラスの雨のような光線を次々と発生させる。

マイ「させない……トランクスは私が守る!!」「バツ!!」

トランクス「マ……マイ……よせ……」

そしてマイがトランクスをかばうべく両手を広げて立ち上がる。

ジャネンバ「グフフフフフ……!!ギガ……ツ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ジャネンバは叫ぶ声をあげながら

発生させたガラスの雨のような光線を

トランクスとマイに向けて放った。

マイ「くっ!?!……」

トランクス「マ……マイ……（くそ……俺はまた守れないのか……

母さんに続いてまた俺は大切な人を失ってしまうの

か……。）」

? 「貴様……!!おイヤ人の誇りを忘れたのか!?!」

トランクス「!!!」「new page」

トランクスはの思考

ベジータ「……!!」

トランクス「と……父さん……」

ベジータ「フン!!あの時、俺やカカロットに追いつくといった

あの威勢はどこへ行った?

それに……貴様は一人で戦っているつもりか!!

少し頭を冷やしやがれ!!」

トランクス「!!!」（そ……そうだ……何を焦っていたんだ俺は……

俺はもう一人じゃない……今の俺には共に戦う仲間が

いる!!

そして……これからは仲間と共に

大切な世界……そして人々を守り抜いていく……

そう誓ったはずだ!!」

ベジータ「フン!!いい面になったじゃないか。もう大丈夫だな?」

トランクス「はい…俺はもう希望は捨てません!!

これから例えばどんな強敵が現れても…

仲間と共に打ち勝っていきます!!

そして…いつか必ず父さんや悟空さんに

追いついて見せます!!」

ベジータ「それでこそだ…ならばもう一度言うぞ。

サイヤ人の誇りを忘れるな!!行ってこい!!」

トランクス「はい!!ありがとうございます!!」

と、トランクスは思考の中でベジータと会話を果たした末、

再び希望を取り戻した。そして…「n q w p a g e」

トランクス「ハアアアアアアアアアア!!」

「ドシューー…?」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

ジャネンバ「!!!」

と、トランクスは再度立ち上がりパワーを最大限に高めた。

すると、これまででの金色の光と同時に『超サイヤ人ブルー』のよう

な

青色のスパークを放ったこれまでにない特殊な超サイヤ人へと変

化した。

その直後、ジャネンバの放った攻撃を相殺していった。

「シユンシユンシユンシユンシユン…。」

トランクス（超サイヤ人『?』）「覚悟はいいな…化け物!!」

マイ「ト…トランクス…その姿…。」

トランクス（超サイヤ人『?』）「マイ…心配かけてすまない。

だけでももう大丈夫だ!!」

マイ「うん!!」

ジャネンバ「ギガガガガガガガガガ!!!」

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ジャネンバはトランクスの変化を察知すると、

自らもパワーを最大限にまで高めた。

そして、トランクスへと襲い掛かってきた。

トランクス「お…おいマイ…」

そして勝利に感激したマイはすかさずトランクスに抱きついた。

マイ「~~~~」

トランクス「ありがとうマイ…。実はさつき父さんが俺の思考の中に出てきて…」

俺に大切なことを気づかせてくれたんだ。」

マイ「ベジータさんが?どういうこと?」

トランクス「それはわからないけど…。ただ一つだけ言えることは、

希望さえ捨てなければ何とかなるって事さ!!」

マイ「ウフフ…。そうよね!!そしたらトランクス…」

さつきの変身の名前、『超サイヤ人ホープ』ってどうかしら?

これからのトランクス…。うん、私達にピッタリかなって思うんだけど。」

トランクス「『超サイヤ人ホープ』か…。いい名前だな!!」

ありがとうマイ…。ありがたく使わせてもらおうよ!!」

マイ「うん!!」

トランクス「(見ていてください父さん…。俺はこの『超サイヤ人ホープ』で

グラン・ゲインズの仲間達と共に最後まで戦い抜いて見せます!!)」と、先程、ジャンンバを撃破した金色の光と青色のスパークが混ざった

特殊な超サイヤ人の名称は『超サイヤ人ホープ』となり、

トランクスとマイは更に絆を深めて決意を新たにするのであった。

そして、別の場所でも…。「new page」

オーガスト「無慈悲な太陽(クルーエル・サン)!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!」

エスカノール「くっ!?この私の魔力をコピーするとは…。おこがましい!!」

バン「マジかよ!?!」

キング「あいつ…。エスカノールの魔法を!!」

と、オーガストを撃破したエスカノール達はつかの間の休息をとるのであった。

そして……。[new page]

裕二(藍染)「どうした？来ないのかバラガンよ……。遠慮はいらないぞ。」

バラガン「くっ?!藍染め……。」

鬼太郎「父さん……。あの化け物……。急に動きが止まりましたね。」

目玉おやじ「そうじゃのう……。多分、先程のあやつのおかしな動きと

何か関係があるかもしれないのう。」

ねこ娘「さつき彼がつぶやいてた『鏡花水月』っていうののせいかな?」

クレフ「私の推測だが……。おそらくは相手の五感を支配する能力かもしれないな。」

光(レイアース)「相手の五感を……。?」

海(セレス)「そんなことが……。?」

風(ウインダム)「だとしたら、さすがのあの化け物も迂闊には動けませんね。」

バラガン「おのれ……。憎つくき藍染惣右介……」

こうなれば儂の帰刃(レスレクシオン)で息の根を止めてやるわ!!

朽ちろ……。髑髏大帝(アロガンテ)!!

「バァー……!!!」

と、バラガンはそう叫びながら帰化(レスレクシン)と呼ばれる能力を解放すると、

斧に埋め込まれている赤い宝玉状の目玉から発せられた黒い炎に包まれて

頭には金色の王冠、手にはブレスレットを着け、ボロボロのコートを纏った

西洋の死神を思わせる骸骨の姿となった。

バラガン(帰刃)「フッフッフ……。」

零「な…何だ!？」

刻「何か…ヤベエ姿になりやがったな…。」

平家「おおお… 実に私の趣味と合致した素晴らしい姿ですね…。」

泪「おいおい… どんな趣味だよ」

バラガン（帰刃）「どうだ？ 藍染よ… この姿になったからには

いくら五感を支配しようとも私に触れれば朽ち果てるぞ!!」

裕二（藍染）「フツ… 笑わせる。君ごとき、私が刃を振るう価値もない。」

バラガン（帰刃）「何だと!? ならば死ね!!」死の息吹（レスピラ）「!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

裕二（藍染）「縛道の八十一 断空（だんくう）!!」

「バァー…!!」

バラガン（帰刃）「何!？」

と、バラガンは死の息吹（レスピラ）と呼ばれる技で攻撃を仕掛けるが、

対する裕二（藍染）は「縛道の八十一 断空（だんくう）」と呼ばれる防壁で

朽ち果てることなく、完璧に防いだ。

砂かけ婆「す… すごいもう…。」

子泣き爺「まったくくじやわい…。」

裕二（藍染）「フツ… 君ごときの能力など… 私の霊圧の前では無力だ。」

バラガン（帰刃）「貴様…!!」

と、憤慨したバラガンは藍染へと襲い掛かるが…。

裕二（藍染）「破道の九十 … 黒棺（くろひつぎ）!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオ!!」

と、裕二（藍染）は向かってくるバラガンに対して

「破道の九十 黒棺（くろひつぎ）」と呼ばれる技を放った。

するとバラガンは黒い直方体状の重力の奔流に囲まれ、圧碎され

る。

そしてあまりの威力にあふれ出した

自らの古いの力によりバラガンの体が朽ち果てていく。

バラガン（帰刃）「お……おのれ……！！！！」

藍染「……！！！！」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッカー……！！！！」

そしてバラガンは藍染に向けて最期に恨み節を吐き捨てながら

呆気なく消滅していった。

裕二（藍染）「かつての部下に敬意を表してこの言葉を贈ろう……

虚圏（ウエコムンド）の王よ、安らかに眠りたまえ。」「n

ewpage」

鬼太郎「……………」

ねこ娘「な……何なのあいつ……。」

目玉おやじ「わからん……ひとまずは味方のようじやが、

あの者……要注意かもしれんもの……。」

「シュー……………」

裕二「フウ……。」

シャナ「裕二？裕二なの!？」

裕二「そうだよ、シャ……。」

シャナ「この馬鹿……………っ！！！！」

「バキ……………ッ!!」

裕二「ほげえっ!？」

と、シャナはそう言いながら裕二に一撃を食らわせた。

そしてそのまま裕二へと抱き着いた。

裕二「シャナ……ごめん。だけど僕は……。」

シャナ「うるさいうるさいうるさ……………い!!!!」

私から離れないでっであれほど言っただのに

何ですぐ約束破るのよ!!私がどれだけ……ううう……。」

ねこ娘「い……一体、何がどうなってるわけ……?」

鬼太郎「さ……さあ……。」

アラストール「あの二人の事はこの戦いが終わってから

ゆつくりと話すでしょう。

そして、坂井裕二の先程の力の事もな……。

良いか？」

裕二「ああ、わかった。」

シヤナ「裕二……後でたつぷりと聞かせてもらおうからね!!」

裕二「うん。わかった!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

鬼太郎「な……何だ!？」

ねこ娘「き……鬼太郎!あれ!!」

エンマ大王「くう……。」

ぬらりひよん「ぐっ……。」

朱夏「あ……う……。」

と、そこへエンマ大王・ぬらりひよん・そして朱夏の3人がバラガンを退けたばかりの鬼太郎達の元へ吹き飛ばされてきた。

鬼太郎「エンマ大王!!」

シヤナ「ナツメ!!」

「シューーーーーー……。」

裕二「あれは……空亡!? けどあの時に倒したはずじゃ……。」

シヤナ「ううん、あれは私達が戦った時とは別の空亡みたい。」

空亡「ハハハハハハハ!! 我がしもべ達を退けた事は誉めてやろう。

だが……つまらぬ輩の奇跡もここまでだ……覚悟せよ!!」

と、空亡が召喚したバラガン・ジャネンバ・オーガストの3体を

見事に退けたグラン・ゲインズのメンバーであったが、

空亡に戦いを挑んでいた朱夏達は大苦戦を強いられている様子であった。

果たして、空亡の強さとは……

グラン・ゲインズのメンバーはこの空亡やシユクラウド達を打倒し、

妖魔界を奪還する事ができるのであろうか!?

第39話　　〽　逆襲の亡者たち　（前編）　〽　（完）

※空亡の表記はフォーエバーフレンズverを省略しています。

「new page」

・オリジナル設定

「超サイヤ人ホープ　トランクス」

トランクスの強化形態。ドラゴンボール超本編でのゴクウブラツクや

ザマスとの戦闘で発現した超サイヤ人の金色のオーラと

超サイヤ人ブルーの青色のスパークが融合した特殊な超サイヤ人。

ジャネンバとの戦闘で敗北寸前になった事により、

絶望感に打ちひしがれていたトランクスが自身の思考の中に

現れたベジータの幻に叱咤激励された事で、希望を取り戻し、

己を限界を超えてこの形態となりジャネンバを打ち破った。

この形態での正式名称が無かった為、

希望を取り戻し発現した事から、マイの提案により

『超サイヤ人ホープ』と名乗る事となった。

又、強さとしては、超サイヤ人ブルー状態の

悟空やベジータと同等のレベルとなっているが、

今後、ゴクウブラツクやザマスと戦闘になった時に

対等に戦えるかどうかはまだ未知数である。

「坂井裕二（藍染惣右介憑依ver）」

坂井裕二が尸魂界（ソウルソサエティ）に幽閉されていた

元6番隊隊長『藍染惣右介』の元に何らかの原因で

転移させられた後、裕二の中から何かを感じ取った藍染が、

自身の能力の半分を裕二が所持している

宝具『零時迷子（れいじまいご）』に宿した事により、誕生した姿。この状態になれば、幽閉されている藍染本人の人格が表に現れて、目つきや声、口調が藍染そのものとなり、裕二本人とも意識を共有できるようになる。

更に、斬魄刀『鏡花水月』の能力や

「破道の九十 黒棺（くろひつぎ）」等の

藍染の強力な能力の数々がそのまま使用でき、

強さのレベルとしても『宝玉』と融合する前の

藍染とほぼ同等である。

ただし、現時点では憑依できる時間は限られている模様で、

空亡に召喚されたバラガンを倒した後は、元の裕二へと戻っている。

尚、藍染が裕二に自身の能力を分け与えた理由は明らかにされていない。

と、エンマ大王と空亡の斬撃がぶつかり合うと、そこから強力な妖気の波動が発生する。

さくら「ほえー………つ!!!」

ケロベロス「な……なんて力や!!」

シヤナ「負けないで……エンマ大王!!」

アラストール「行け!!」

空亡「ハハハハハハハハハ!!」

エンマ大王「くうう……でりゃあああああ!!!」

「バキイイイイイイ………」

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

空亡「何だど!?ぐおおおおお!!!」

と、エンマ大王のアメノムラクモが空亡の阿修羅を打ち砕き、そのまま空亡を斬り裂いた。

ラピス「よっしや………つ!!!」

アンズ「でもあいつ………」

リータ「また復活するんじゃ………」

空亡「ハハハハハハハ!!その通りだ。

お前達の攻撃で私が倒される事など………」

エンマ大王「それはどうかな?」

シン「全ての妖怪の力は俺が集めさせてもらったよ!!」

空亡「な……何!?再生が追い付かない!」

と、空亡はすかさず再生しようとするが、

全ての妖怪の力をシンに集められた為、

再生速度が格段に弱まっていた。

エンマ大王「今だ!トウマ!!」

不動明王「承知した!!覚悟せよ……雷……轟……電……撃!!」

雷鳴……鉄槌十字斬り………

「ズバアアアアアアアアアア………ツ!!!」

空亡「ぐわあああああああ!!!」

と、アメノムラクモの斬撃の上から不動明王が

雷鳴鉄槌斬りを重ねるようにして放ち、

もしかしたら大王様が彼に会いたいと強く願ったからかもしれないな……」

エンマ大王「すまないシン……俺の為に……」

シン「そんな事ないよイツキ!!おかげで俺は一番の友達……」

そして君の仲間達を助ける事ができたんだから!!

こんな嬉しいことはないよ!!」

エンマ大王「やっぱりお前はすげえ奴だ……」

だから俺はお前の友達として

恥ずかしくないようにこれからもこの世界……

そして人々を守って見せるぜ!!」

シン「うん!!イツキ……会えて嬉しかったよ。」

また会おうね!!例え離れていても俺達は……」

エンマ大王「ああ……」

シン・エンマ大王「永遠に友達だ!!」

「ピカーーーーーッ!!!」

「シューーーーーッ!!!」

と、シンはエンマ大王と再び固い絆で結ばれながら消滅していくのであった……

エンマ大王「あの時とは逆になっちまったな……」

ありがとう……シン……」

ぬらりひよん「大王様……」

ラピス「ううう……」

キング「オイラ……感動しちゃったよ……」

ディアンヌ「う……うん……」

ケロベロス「メツチャ良い奴やんかイツ……」

と、その光景にメンバー達も次々ともらい泣きをしていった。「n

ewpage」

平家「みなさん……感動するのはよろしいのですが……」

零「まだ戦いは続いているんだぞ。」

ぬらりひよん「あ……ああ……そうだったな。」

朱夏「これで残るはシユクラウド達だけだ。」

ぬらりひよん「マーリン殿……あれは一体……？」

マーリン「竜王……アクノロギアだ!!」

アクノロギア「我は再び蘇った……更なる『王』となる為にな……!!」

と、空間の中から『アクノロギア』と呼ばれる

巨大な漆黒の竜が出現し、グラン・ゲインズのメンバーは

一斉に驚愕の表情をするのであった。「new page」

く 閻魔宮殿 く

デューク「アクノロギアですか……」

空亡……面倒な置き土産をしていきましたね……。」

シユラウド「フン……丁度いい。己の戦いの前の良き前座となろう。」

それに……『奴』も蘇ったことだしな。」

デューク「奴？ああ……メリオダスですか。」

ですが今の彼にアクノロギアを

どうにかできるとは……。」

シユラウド「フン!!お前の目は節穴か？」

奴とてただ蘇っただけではないぞ？」

デューク「それはどういう意味でしょうか？」

シユラウド「見てればわかる……」

さて、少しは己を楽しませてくれよう？

グラン・ゲインズ……。「new page」

鬼太郎「アクノ……ロギア!?!」

ケロベロス「あの時、ナツが言うと思った奴か!!」

目玉おやし「な……何という威圧感じゃ……。」

ねこ娘「あ……あんな化け物が出てくるなんて……。」

さくら「ほええええ……。」

光（レイアース）「でも……怯んでなんていられない!!」

海ちゃん!風ちゃん!行こう!!」

海（セレス）「ええ!!」

風（ウインダム）「はい!!」

クレフ「待つんだ3人共!!敵の力は未知数だ!!

「ここは慎重に…。」

アクノロギア「ハハハハハハハハ!!

「愚かな人間どもよ…滅するがいい!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

光（レイアース）「うわああああああああああ!!!」

海（セレス）「きゃああああああああああ!!!」

風（ウインダム）「くうううううううううう!!!」

と、アクノロギアはそう言いながら口から

強大な魔力のエネルギー波を放ち、

グラン・ゲインズのメンバーを吹き飛ばした。

「シューーーーーーシューーーーーーシューーン…。」

光「あ…あ…。」

海「ううう…。」

風「あ…が…。」

鬼太郎「ぐっ…。」

朱夏「な…なんて力だ…。」

ぬらりひよん「まさか…これほどとは…。」

トランクス（超サイヤ人2）「だが…負けるわけにはいかない!!

フィンツシュ…バスターーーーーーッ

!!!

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、トランクスはパワーを最大限に高めて、

フィンツシュバスターをアクノロギアに向けて放つが…。

アクノロギア「ハハハハハハハハ!!!旨そうだな!!」

「バクッ!!」「シューーーーーーシューーン…。」

と、アクノロギアはそう言いながら大口を開けて、

何とフィンツシュバスターを一飲みし、消滅させた。

トランクス（超サイヤ人2）「なっ!?ファイ…フィンツシュバスター

を…。」

マイ「た…食べたですってーーーーー!?」

ラピス「メリオダス!!」

アンス「良かった...」

リータ「目が覚めたんですね!!」

アクノロギア「ぐ... ぐう... な... 何だキサマは...」

我を誰だと思っておる...」

メリオダス「どうだ？蘇った早々、

また地獄に叩き落されそうになる気分は？

今のお前のツラ... スツゲー... 良い感じだ...」

と、メリオダスは残忍な笑みを浮かべながら

魔神族の力を発動させて、紋章を顔に浮かび上がらせた。

キング「だ... 団長？」

ディアンヌ「な... 何か様子がおかしいよ...？」

エスカノール「おやおや...」

バン「... らしくねーな団ちよ...」

ゴウセル「団長の気配が... 明らかに変わった。」

マーリン「やはり... ああなってしまったか...」

さくら「マーリンさん...？」

ねこ娘「ねえ... あれって...」

ケロベロス「ホ... ホンマに...」

鬼太郎「メリオダス... なのか...？」

メリオダス「くつくつくつ... 『ドラゴン狩り』の始まりだ...」

これからじっくりと料理してやるぜ... アクノロギ

ア...!!」

アクノロギア「お... おのれ... 魔神族風情が... 滅ぼしてくれる

わ!!」

と、『FOREVER FRIENDS』の主人公『下町シン』の尽
力もあり、

空亡を撃破することに成功したグラン・ゲインズのメンバー達。

このままシユラウド戦に突入かと思われたが、空亡が最期の妖力で召喚した竜王『アクノロギア』が出現し、メンバーや妖魔界に危機が訪れた状況で、復活したメリオダスが戦場に姿を現し、メンバーのピンチを救ったが、何故かメリオダスは残忍な笑みを浮かべながら豹変するのであった。

そして、これからメリオダスVSアクノロギアの激闘が始まろうとしていた。

果たして、この勝負の行方はどうなるのであろうか…

今後のメリオダス…そしてグラン・ゲインズの運命は一体、どうなってしまうのであろうか!?

第40話 〽 逆襲の亡者たち (後編) 〽 (完) 「ne
w page」

・今回の特別ゲスト及び敵キャラ

【下町シン】

『映画妖怪ウォッチ FOREVER FRIENDS』の主人公だった少年。

『次元大戦』本編開始時点では既に故人となっていたが、

何らかの原因で魂の一部がエンマ大王の中に密かに

残留思念として残っていた。妖魔界での空亡との戦いで

エンマ大王に危機が訪れたのをきっかけに

残留思念が具現化されて一時的に当時の姿で復活を果たす。

そして、『妖怪ウォッチエルダ』を使い、

スーさんこと『軍神スサノオ』を召喚した後、

妖魔界と人間界にいる全ての妖怪と鬼太郎や朱夏達の

妖力をウォッチに結集させて、かつて空亡を倒した

神の剣『アメノムラクモ』に変化させた。

そして空亡を倒した後、エンマ大王と更なる深い絆で

結ばれて、『永遠の友達』を誓い合いながら消滅していった。

ちなみに全ての妖怪の妖力をウォッチに結集させた事で、

空亡の超絶的な再生能力を無力化しており、空亡を打倒した大きな立役者となった。

「神の剣アメノムラクモ」

シンが妖怪ウオツチエルダで結集させた全ての妖怪の力で軍神スサノオを変化させた姿。

妖魔界や人間界の全ての妖怪の他に、鬼太郎や朱夏等からも

妖力を集めた為、FOREVER FRIENDSに登場したのも
よりも

更に強大な力を秘めたものとなった。

そして、エンマ大王自身の妖力や技能の相乗効果により、シユラウドの力で強大となった空亡を見事に撃破した。

「空亡」(FOREVER FRIENDSバージョン)

かつての昔に下町シンやエンマ大王の前身である『夜叉エンマ』に倒された邪悪の結晶体。シユラウドの力で復活した事により、当時とは比較にならない程の『ケタ外れ』な妖力を持つようになった。

バラガン・オーガスト・ジャネンバといった妖怪以外の

強力な力を持つ者をも召喚できる能力や

妖魔界の全ての妖怪の力を利用した超絶的な再生能力で

エンマ大王や朱夏、そしてグラン・ゲインズのメンバーを大苦戦させた。

しかし、下町シンが登場して妖怪ウオツチエルダで全ての妖怪の妖力を結集させられ、再生能力が無力化された事で形勢が逆転し、最期はエンマ大王と不動明王の合体技『雷鳴鉄槌十字斬り』により致命傷を負った後、自身の全ての妖力を解き放ちながら消滅した。その後、『フェアリーテイル』のラスボスである

『竜王アクノロギア』を出現させている。

第41話 最凶の大罪、凱旋す!!

く アルテミスブリッジ く

犬山まな「メ……メリオダスさん……一体、どうしちゃったの!?」
知世「様子がおかしいですわ……」

ねずみ男「まさかとは思うがよ……感情なくしちゃって

以前のワルだった頃に戻ってる……何てことはねーよ
な……?」

「シューーーーーーーン」

アクア「……どうやら、そのまさかみたいね。」

エリザベス「……………」

と、アクアとエリザベスがブリッジに入ってきた。

犬山まな「アクアさん!!」

知世「どうということなのでしょうか……?」

アクア「おそらく……『魔神王』に生き返らせる事と

引き換えに感情を奪われて昔の……『十戒の統率者』だった

頃の

メリオダスに戻りつつあるのだと思う……」

沖原「何……?」

美香「十戒の……統率者!」

マサキ「フン……やはりな……」

犬山まな「あの……アクアさん……もしそうだとしたら……

メリオダスさん……どうなっちゃうんですか?」

アクア「もしメリオダスが完全に十戒の統率者だった頃に

戻ってしまえば……私達に牙を向けてくる可能性が高くな

るわね……」

知世「そ……そんな!!」

ねずみ男「おいおい冗談じゃねえぞ!!昔の奴は

とんでもねえ化け物だったんだろ!」

もしそうなっちゃったら

鬼太郎達じゃ止められねえだろ!!」

エリザベス「メリオダス：！！！！」

アクア「エリザベス、待って！！」「ガシッ！！」

と、メリオダスを止めに出ていこうとするエリザベスを
アクアが腕を掴んで制止した。

エリザベス「・・・ミリカ！！離して！！」

アクア「今出ていくのは危険よ！！アクノロギアだっているし・・・」

ここはもう少し様子を見ましょう・・・ね？」

エリザベス「・・・わかったわミリカ・・・」

マサキ「・・・おい、人形！！」

美香「は・・・はい・・・何でしょうか・・・」

マサキ「そろそろ準備をしろ・・・ゼロライザーで出るぞ！！」

沖原「マサキ・・・メリオダス氏の加勢にいくのか？」

マサキ「その必要は・・・ない！！アクノロギアごときなど

奴だけで充分だろう。問題はその後だ。

さて・・・これからどう転ぶか楽しみだな・・・

くつくつくつくつ！！！！」

エリザベス「あなた！！」

ホーク「てめえ！！何、面白がってんだよ！！」

アクア「二人共！！ケンカしている場合じゃないわ・・・」

マサト君、お願いできるかしら？」

マサキ「貴様・・・何度言えばわかる？俺は木羅マサキ！！

阿久津マサトではない・・・」

アクア「あーら・・・本当にそうかしら？魔神族と違って

人の本質というものはそう簡単には

変えられるものじゃないわよ？マ・サ・ト君」

と、不敵な笑みを浮かべてマサキの鼻を

ツンツンしながらそう語るアクア。

マサキ「貴・・・貴様・・・フン！！おい人形！！

さっさと出るぞ・・・グズグズするな！！」

美香「は・・・はい！！」

アクア「行ってらしゃーい」

マサキ「くっ…!!? (あの女狐…いつか消してやる!!)」
と、マサキはアクアを睨みながら美香と共に

ブリッジを出ていくのであった。

犬山まな「アクアさん…かっこいい!!」

ホーク「あ…あんにやろうを簡単に手玉に取るなんてよ…。」

知世「あこがれちゃいますわ…!!」

沖原「… (あ…あの若さで…お…恐ろしい人だ…)」

エリザベス「アクアさん…すみませんでした。」

アクア「あら? エリザベス…」

さつき私の事、ミリカって呼んでなかった?

エリザベス「あ…え? そ…そうでしたか…? ごめんなさい

!!

アクア「ううん!! 全然いいわよ!! 好きなほうで呼んでちょうだい

!!

エリザベス「す…すみません…ありがとうございます!!」

アクア「… (エリザベスも…『昔の記憶』を

取り戻しつつあるみたいね…でも…記憶を

完全に取り戻してしまったらエリザベスは…。)」

と、アクアは心の中でそう考えながらエリザベスを

心配そうに見つめるのであった。「new page」

メリオダス「くっくっくっ…じっくりと料理してやるぜ

アクノロギア!!」

アクノロギア「おのれ…魔神族風情が…!!」

キング「だ…団長…。」

バン「おいおい…どうなってんだありや?」

シャナ「アラストール…今のアイツは…。」

アラストール「うむ…凄まじい邪悪な気配が

あの者の周りを渦巻いている…。」

悠二「何か…とんでもなく嫌な予感がする…。」

ラピス「メリオダス…どうしちまつたんだよ…。」

さくら「マーリンさん…何かわかりますか?」

トランクス「メリオダスさん!!」

マイ「そ…そんな…。」

ねこ娘「あんた…何をしたのよ!？」

アクノロギア「フン…『時の狭間』に送り込んでくれたわ…」

お前達はもう2度と奴には会えん。永遠にな…

ハハハハハハハハハハ!!」

クレフ「と…時の狭間だと!？」

海「そんな…。」

アクノロギア「さて…今度はお前達の番だ…」

じわじわと消して行ってやろう。

ハハハハハハハハハハ!!!!」

零「くっ!?!?…。」

刻「おいおい…俺達でどうにかできんのかよ!?!」

遊騎「やるだけやるしかないやろ。」

泪「こうなったら腹くるしかないぜ。」

平家「フツ…ではみなさん行きましようか!!」

一同「了解!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーは一斉に

アクノロギアへと立ち向かっていった。一方、その頃…。「new

page」

く 第5世界のとあるポイント く

孫悟空「あー食った食った!!この世界の飯も中々イケたな。」

ベジータ「何言ってやがる!!それは俺達の世界から持ち込んだ物

だ。」

ビルス「どうでもいいよ、うまけりや。」

おいウイス!!デザートだデザート!!」

ウイス「はいはい!!ではこちらの『ペコリンドーナツ』を

お召し上がりくださいー!!」

と、ウイスはそう言いながら『キラキラ☆プリキュアアラモード』に

登場した妖精ペコリンの形を模したドーナツを出した。

ビルス「何だこの形?どっかの宇宙人か?うまいんだろうな…。」

ひかる「うわあ……このドーナツ、ペコリンそっくり!!」
ララ「ほんとルン!!」

えれな「そういえばいちか達……元気にしてるかな……?」
まどか「またお会いしたいですわね……。」

孫悟空「おおっ!!こりやうめえな!!」

おいベジータ、食ってみろよ!!」

ベジータ「貴様!!何抜け駆けしてやがる!?!」

ビルス「おい悟空!!ボクより先に食うんじゃない!!」

フワ「フワも食べたいフワ!!」

ひかる「そうだった!ごめんねフワ……ちょっと待ってて!!」

と、ひかるは『トウインクルブック』と呼ばれるアイテムを取り出し、

スターカラーペンでペコリンドーナツの絵を書き、具現化させた。

孫悟空「いいっ!?!絵が本物になっちゃったぞ!!」

ベジータ「どうなってやがる!?!」

ひかる「どーぞフワ!!」

フワ「ありがとうフワ!!」

ララ「それじゃいただきますルン!!」

一同「モグモグモグ……。」

ひかる「んー……おーーいしーーー!!」

ビルス「ほう……こりやうまいぞウイス!!」

ウイス「んくく!!この絶妙なしつとり感と甘み……たまりませんね。」

えれな「スタードーナツに負けないくらいおいしいね!!」

まどか「ええ!!ユニやプルンスにも食べさせてあげたいですわね……。」

ビルス「ん!?!スタードーナツだと!?!ひよつとして

お前達の宇宙の食べ物か!?!今度食わせてみる!!」

ウイス「おほほほ!!ビルス様の食い意地に火をつけちゃいましたね。」

そう言えば、ひかるさん達……『12星座のスタープリンセ

鬼太郎「うわああああああああ!!!」
アニス「きやああああああ!!!」
さくら「ほええええええええ!!!」
小狼「くうううううううう!!!」
零「くそおーーーーー!!!」
「ドゴオオオオオオオオオ!!!」
ケロベロス「あかん…全然効いとらんわ…。」
刻「くっ…!?!」

バン「今度は俺達が行くぜ!バニシング・キル!!」
キング「霊槍シャスティフォル第4形態『光華(サンフラワー)!!』」
ディアンヌ「双拳(ダブルハンマー)!!」
ゴウセル「大停電の矢(ブラックアウトアロー)!!」
「ドガガガガガガガガガ!!!」
アクノロギア「ハツハツハツ!!!無駄だと言っておろう!!」

我に魔法は効かぬ!!」

「シュン!!」
「バキーーーーーッ!!!」「ドボーーーーーッ!!!」
バン「ぐわああああああ!!!」
ディアンヌ「げぼおおおお!!!」
「バーーーーーッ!!!」「ゴオオオオオオ!!!」
キング「うわああああああ!!!」
ゴウセル「くうううううう!!!」
「ドゴオオオオオオオオオ!!!」
と、メリオダスが時の狭間に閉じ込められた後、
グラン・ゲインズのメンバーはアクノロギアに総攻撃を開始した
が、

あまりの力量差にメンバーの攻撃がことごとく通用せず、
次々と返り討ちにあつていった…。
平家「予想はしていましたが…やはり圧倒的ですね。」
マーリン「ああ…伊達に竜王と名乗ってはいないという事か…。
さて…どうするか…。」

エンマ大王「空亡の野郎…厄介な奴を残していきやがって…。」
ラピス「おい、おっさん!!何で攻撃しねえ…。」

エスカノール(普通)「あはは…ど…どうも…。」
と、エスカノールは魔力のピークを過ぎて、

最強の状態から普通のおっさんに戻ってしまっていた。

アンズ「あらく…。」

リータ「元に戻っちゃいましたね…。」

マイ「という事は…もう夜が近いってことか…。」

そんなに長く戦っていたのね。」

トランクス(超サイヤ人2)「マイはエスカノールさんを頼む!!

行くぞアクノロギア!!!」

シヤナ「アラストール!悠二!私達も行こう!!!」

アラストール「ああ!!」

悠二「うん!!」

「バアアアアアアアアアアアア!!!」

アクノロギア「クハハハハハハハ!!!」

「シュン!!」「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」

トランクス(超サイヤ人2)「ぐわああああああ!!!」

シヤナ「きやああああああ!!!」

悠二「うわああああああ!!!」

マイ「トランクス!!」

アラストール「シヤナ!!坂井悠二!!」

と、続いてトランクスやシヤナ達もアクノロギアに

剣で攻撃したが、一瞬で返り討ちにあった。

トランクス(超サイヤ人2)「つ…強い…。なんて力だ…。」

シヤナ「せ…せめて…卍解さえ…使えれば…。」

悠二「ぼ…僕も藍染に代わる事ができない…。」

アクノロギア「つまらぬな…だがもうよい。」

これで滅せよ…人間!!!

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、アクノロギアはそう言いながら魔力を極限までに高めて、

右手にエネルギーを集中し始める。

そして、アルテミスに狙いを定めた。

光「あいつ…まさかアルテミスを!？」

海「いけない!!」

風「何とかしなくては!!」

エンマ大王「一か八かやってみるか…いくぞぬらり!!」

ぬらりひよん「はい!大王様!!」

と、エンマ大王とぬらりひよんがアクノロギアの攻撃を防ぐべく、

アルテミスの前方に立ちはだかった。

朱夏「エンマ大王!!」

アキノリ「いくらなんでも消耗した状態で…。」

ハルヤ「奴の攻撃を受けるなど…。」

アクノロギア「クハハハハ!!無駄な事を…消滅せよ!!」

と、アクノロギアがアルテミスに向けて、

強大な魔力のエネルギー波を放とうとしたその時…。「new p

age」

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…」

アクノロギア「ん?」

光「な…何?この揺れ…。」

泪「く…空間が震えてる…?」

クレフ「そ…それにこの凄まじい魔力は!？」

海「ま…まさか!？」

風「…来ますよ!!」

「バリバリバリバリバリバリバリバリ…」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、突如、空間が大きく揺れ始めて、

何者かがどす黒い強大な魔力を発生させながら、

空間を破壊し、姿を現した。

?「くつくつくつ…。」

鬼太郎「あ…あれは!？」

ラピス「メ…メリオダス…なのか?」

ケロベロス「せ……せやけど……思いつきし豹変しとるし……
い……今までとは比べもんにならない程の強大な魔力
や……。」

バン「おいおい……マジかよ……。」

キング「あ……あれが団長なの……!？」

さくら「マ……マーリンさん……」

あのメリオダスさん……一体なんですか……?」

マーリン「恐れていた事が起きてしまったな……。」

あれは『殲滅状態（アサルトモード）』……。

魔神族の魔力が完全に解放された状態であり、

メリオダスが『十戒の統率者』だった頃の姿だ……。

そのあまりの凶悪にして強大さからかつて同胞であった
十戒からも畏れられていた……。」

朱夏「『殲滅状態（アサルトモード）』……。」

アキノリ「何かヤバすぎだぜあれ……。」

ケースケ「あ……あははは……ふ……震えが止まらないよ……」

「ガタガタガタ……。」

アヤメ「でもどうしてあんな状態に……。」

マーリン「時の狭間を破る為に魔神族の魔力を

最大限にまで解放したのだから……」

感情を奪われた状態ですべきではなかったな……。

愚か者め……。」

メリオダス（殲滅状態）「くつくつくつ……この俺をこの程度で

封じたつもりになつてたとはな……」

おめでたい奴だぜ……。」

アクノロギア「魔神族めが……よかろうこの我が直々に……」

「シユン!!」「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

メリオダス（殲滅状態）「ああ?何か言ったか?……竜王!!」

アクノロギア「ぐおおおおおおおおお!!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴ……ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、メリオダスはアクノロギアに瞬時に近づいて顔面を殴り飛ばす!!!」

と、

あまりの威力にアクノロギアがピンポン玉が跳ねるようにあちこち激突しながら最後は地面に激しく叩きつけられた。ねこ娘「ひいっつっ!!」

砂かけ婆「な……なんじやあ!?今のは!?!」

アデル「ア……アクノロギアが……あんな吹き飛び方を……」
アニエス「お……お姉さま……」

アクノロギア「バ……バカな……この我が……」
「ザッ……ザッ……ザッ……」

メリオダス（殲滅状態）「竜王つてのも案外大したことねーな……
じわじわと殺すのは骨が折れそうだぜ……」

と、メリオダスは残忍な笑みを浮かべ、そう言いながら
アクノロギアへと近づいていく。

ディアンヌ「う……嘘……あれが……団長なの……?」

エスカノール（普通）「ひ……ひえええええ……」

ゴウセル「最早、完全に魔神族化してしまったようだな。」
バン「違う!!あいつは七つの大罪団長……」

憤怒の罪（ドラゴン・シン）メリオダスだ!!

十戒の統率者なんかじゃねえ!!

マーリン「バン……気持ちわかるが……」

アクノロギア「お……おのれえ……小癩な!!」

「ブウウウウウウウー……」

と、アクノロギアはそう言いながら何とか立ち上がると
右手に魔力を再び高めていった。

エンマ大王「野郎……」

ぬらりひよん「まだあんな力が……」

メリオダス（殲滅状態）「へっ……最期の悪あがきって奴か?

いいねえ……その意気に免じて

少しは楽に死なせてやるよ……くっくっ

くっ!!!」

アクロノギア「ほぎけええええ!!!滅せよ……魔神族!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、アクノロギアは最大限に高めた魔力のエネルギー波を

メリオダスに向けて放った。だが…「new page」

メリオダス（殲滅状態）「神千斬り…!!」

「ズバババババババババババ!!!」

アクノロギア「な…何?!!ぐおおおおおおお!!!」

と、メリオダスは即座に神千斬りを発動させて

エネルギー波を相殺すると、そのままアクノロギアに

無数の斬撃を直撃させた。そしてアクノロギアの体が

獄炎に包まれる…。

アクノロギア「ば…馬鹿な…我に魔法は効かないはずだ…

何故だ…。」

メリオダス（殲滅状態）「効かねえのは所詮、テメエより弱え人間の

魔力だろうが…。仮にも次期魔神王と

呼ばれているこの俺と一緒にするんじゃないやね

えよ…。

じゃあな…竜王さんよ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

アクノロギア「くそがああああああああああああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、メリオダスはそう言いながら燃えさかるアクノロギアに!

とどめの一撃を加えた。そして、吹き飛ばされたアクノロギアは

断末魔の叫びをあげながら大爆発を起こし、爆散したのであった。

「new page」

メリオダス（殲滅状態）「フン…感謝しろよ竜王さんよ。

これだけ派手に散らせてやったんだから

な…

くつくつくつ!!」

鬼太郎「メリオダス…。」

ねこ娘「もう…私たちが知るアイツじゃないの…?」

バン「そんな訳あるかよ!! 団長…目エ覚ましやが

マイ「まさかこんな事になるなんて……」
ディアンヌ「でも……今のマサト大丈夫かな……」

何か団長を殺しかねないよ……。」

マーリン「だが、エスカノールが元に戻ってしまった以上、今のメリオダスを止められるのは奴しかいない。」

エンマ大王「そうだな……ここはアイツに賭けるしかねえ……。」
ゼロライザー（マサキ）「まずは小手調べと行くか。」

天滅弾丸（ゼロマグナム）!!」

「バキューーーーーーッッッッッッッ!!」

メリオダス（殲滅状態）「全反撃（フルカウンター）……!!」
「バリバリバリバリ!!」 「バシューーーーーーッッッッッッッ……。」

メリオダス（殲滅状態）「チィ……!!」

と、メリオダスは天滅弾丸（ゼロマグナム）を

全反撃（フルカウンター）で跳ね返そうとするが、

発動せずに直撃寸前で間一髪回避した。

小狼「全反撃（フルカウンター）が……。」

ケロベロス「発動せえへんかったやと!」

マーリン「どうやらバリオス・ヴィダールの時と同様、

ゼロライザーの攻撃も魔力を無効化するかもしれない
な。」

ゼロライザー（マサキ）「そんなものがこのゼロライザーの攻撃に
通用すると思ったか? くつくつくつ……!!」

メリオダス（殲滅状態）「ならこれならどうだ?」

「シュン!!」 「バキューーーーーッッ!!」 「ドカーーーーーッッ!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ゼロライザー（マサキ）「何!? ぐうむうう……!!!!」

と、メリオダスは瞬時にゼロライザーの懐に飛び込むと、
アッパーで吹き飛ばした後、強烈な追撃を加えて、
地面に叩きつけ、ダメージを負わせた。

ゼロライザー（マサキ）「おのれ……こうなれば

塵一つ残さず消滅させてやる……。」

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キング「あれはまさか!？」

ゴウセル「天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）か。」

メリオダス（殲滅状態）「嘘えよ… 神千斬り!!」

「ズバババババババババババ!!!」

ゼロライザー（マサキ）「欸!!! おおおおおおおお!!!」

と、ゼロライザーが天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）を!!!

発動させようとした瞬間、メリオダスがさかさず神千斬りを

放ち、ゼロライザーに大ダメージを負わせた。

そして、ゼロライザーはその場で膝まづいた。「new page」

ゼロライザー（マサキ）「ぐううう…!!!」

メリオダス（殲滅状態）「次元の王の力といつても

所詮は人間かよ…。つまりねえな!!」

ラピス「マサト!!」

ねこ娘「アイツでも… 勝てないの?」

美香の声「マ… マサト君… こ… このままじゃ…。」

ゼロライザー（マサキ）「くっくっくっ…」

ハーーーーーッハッハッハッ!!!」

と、絶体絶命の状況でゼロライザーは何故か高笑いをしながら

その場から立ち上がった。

アデル「な… 何だ…?」

アニエス「一体どうしたのよ…?」

美香の声「マ… マサト君…?」

ゼロライザー（マサキ）「所詮は人間だと? 笑わせる…」

この俺を誰だと思っっているのだ魔神族…。

貴様に勝利などあるものか…!!」

メリオダス（殲滅状態）「何だと…?」

ゼロライザー（マサキ）「良いものを見せてやる…」

『次元クロスシステム』!!! 解除!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ゼロライザーはそう言いながら、次元クロスシステムの!!!

リミッターを解除した。すると、ゼロライザーの体が激しく輝きだし、

これまでの白銀色のオーラから金色のオーラに変色し、
眼光もより禍々しく真つ赤な色となった。「new page」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユン……。」

ゼロライザー（マサキ）「これが『ゼロライザー・KD（クロスドライブ）』だ!!」

さくら「ほええええええええええー!!!」

ぬらりひよん「ゼロライザーにあんな切り札が……。」

エンマ大王「マサキの奴……もう完全に

ゼロライザーを自分のものにしやがったな……。」

メリオダス（殲滅状態）「まだ奥の手を隠してやがったか……」

ゼロライザー（マサキ）「くくく……来い!!」

メリオダス（殲滅状態）「なら死ねよ……神千斬り!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

光「ああつ!?!」

刻「まずいぞあれは!!」

と、メリオダスはゼロライザーの挑発に乗り、

神千斬りを発動させて、攻撃を仕掛けていった。だが……

「シユイイイイイイイイイイイイイン!!!」

ゼロライザー（マサキKD）「くどく……それがどうした?

天滅跳速撃（ゼロ・ドライバー）!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

メリオダス（殲滅状態）「ぐあああああああああああああああ!!!!」

「ドゴンドゴンドゴ……ン……ン……ン……ン……ン!!!」

キング「い……今……何が起きたの!?!」

ディアンヌ「わ……わからないよ……。」

マーリン「まさか……あんな芸当ができるとはな……。」

バン「あ?…どういこうったよ!?!」

マーリン「奴は……メリオダスの攻撃を異次元ともいえる速さで

回避したのと同時に神千斬りを一瞬の間に全て……

いや・・・倍以上の攻撃数で跳ね返したのだ。

おそらく余程の者でない限りはただ立っているようにし

か

見えないだろう。」

メリオダス（殲滅状態）「キ・・・キサマアアアーーーーっ!!ガ
フツ・・・」

「ドサツ・・・。」

と、メリオダスは天滅跳速撃（ゼロ・ドライバー）の発動により
回避された神千斬りを倍以上の攻撃数にされて、

一瞬の間に直撃を受けて、大ダメージを負い、

その場で血反吐を吐きながら倒れた。「new page」

鬼太郎「……………」

ねこ娘「終わった・・・の？」

目玉おやじ「そのようじゃのう・・・。」

砂かけ婆「訳が分からんまま終わってしまったのう・・・。」

ゼロライザー（マサキKD）「どうだ？見下していた人間様に

やられた気分は・・・。今、楽にしてや

る・・・。」

「シュン!!」

アクア「ストーーーーーッップ!!そこまでよマサト君。」

と、メリオダスにとどめを刺そうとするゼロライザーの前に

アクアが瞬間移動で現れた。

ラピス「姉さま!!」

ゼロライザー（マサキKD）「貴様・・・何のつもりだ？」

邪魔をするなら・・・。」

アクア「あのね・・・そんな状態で強がらないの!!」

あなたももう限界じゃない!!」

ゼロライザー（マサキKD）「何だと・・・ぐっ!？」

「ビシビシビシビシ・・・」「シューーーーーーン・・・。」

「ドサツ・・・。」

マサキ「ぐっ・・・。」

美香「あ…あ…あ…。」

と、クロスドライブ状態が限界を迎えたゼロライザーは変身が強制解除されて元の姿に戻った後、その場で倒れこんだ。アクア「ほーら見なさい!!それじゃ今度はあなたよメリオダス。

まったく、世話を焼かせるんだから…。」

「シューーーーーー!!!ン!!!」

メリオダス(殲滅状態)「!!!」

と、アクアはそう言いながらメリオダスに右手をかざすと、メリオダスの漆黒の魔力を吸収し始めた。

すると、吸い取った魔力が漆黒のウオツチへと変化した。「new

Page」

「シューーーーーー!!!ン!!!」

キング「団長の魔力がウオツチになった…。」

ディアンヌ「すっごーい!!」

マーリン「なるほど…殲滅状態の魔力を

ウオツチにして封じたか。さすがだな…。」

アクア「これでよしと!!気分はどう?メリオダス!!」

メリオダス「うっ…ミ…ミリカ…それにみんな…

すまねえ、面倒かけっちまったみたいだな。」

さくら「メリオダスさん!!」

ラピス「この野郎!!心配させやがって!!」

光「でも…よかった!!」

メリオダス「けどこんなにボロボロだぜ…みつともねーな。」

バン「こっちはズタズタだっつーの!誰かさんのせいだよ♪」

エスカノール(普通)「まあまあバンさん。そう言わずに…

おかえりなさい、団長!!」

キング「お帰り、団長!!」

ディアンヌ「おっ帰りーっ!!」

アクア「メリオダス…このウオツチは危ないから

私が預かるわよ。良いわね?」

メリオダス「ああ…そのほうが助かるぜ。」

いよいよ妖魔界でのラストバトルの幕が上がる。
一体、どのような結末を迎えるのであろうか!?

第41話　　〽　最凶の大罪、凱旋す!!　　〽　（完）「newpa
ge」

・オリジナル要素

【ゼロライザー・KD（クロスドライブ）】

ゼロライザーが『次元クロスシステム』のリミッターを解除し、
真の力を発揮した状態。

オーラの色がこれまでの白銀色から金色へと変化し、
眼光も禍々しい真つ赤な光を放っている。

この状態になれば、格ステータスが3倍以上に上昇した上、
これまでの技に加えて新たに、相手の攻撃を異次元の速さで
瞬時に回避した上で、更に攻撃数を倍以上にして相手に跳ね返す

『天滅跳速撃（ゼロ・ドライバー）』が使用可能となった。

又、必殺技である『天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）』が、
これまでチャージすることではしか発動できなかったが、
エネルギー波を放つようにして発動する事が可能となり、
汎用性が高まった。

だが、この状態はマサキや美香の体に多大な負担をかける為、
長くこの状態を保つ事ができず、限界を迎えたら
変身が強制解除されて、マサキと美香の体は
多大なダメージを負う事となる。

【メリオダス（殲滅状態）（アサルトモード）】

メリオダスが魔神族の最大限に解放された状態。

容姿や技・能力は原作通りだが、

実力は、界王拳ブルー悟空や進化ブルー状態のベジータを上回り、

原作以上ともいえる力になっている。
アクノロギアにより閉じ込められた時の狭間を破るべく
この姿となり、発動した後はアクノロギアを圧倒した後、
抹殺した。そして、ゼロライザー（マサキ）との戦闘となり、
最初は優勢であったが、KD（クロスドライブ）を発動させた
ゼロライザーの能力により重傷を負い、倒れた。
その後、アクアの手により殲滅状態の力は
ウオツチに封印されて、元のメリオダスに戻った。

第42話 全身全霊!! グラン・ゲインズ VS シュラウド!!

く アルテミスブリッジ く

エリザベス「メリオダス様……良かった!!」

知世「一時はどうなるか事かと思いましたが……」

ホーク「しかし、マサキのあんちくしょう!!

やっぱりメリオダスを殺そうとしやがったな!!

アクアがいなかったらまた大変な事になってたぜ!! (怒)」

と、そう言いながら頭から湯気を出し、憤慨するホーク。

犬山まな「まあまあホークちゃん、落ち着いてよ!!

マサト君だつてああ言つてるだけでホントは……」

ねずみ男「ケツ!!俺あくまだアイツらを信用してるわけじゃねえけどな。」

エリザベス「ねずみ男様……」

ホーク「おい!ねずみ野郎!!お前、仲間が信用できねえつてのかよ!?!」

ねずみ男「そりやあそうだろうが!!

あんなトンデモねえモン見せられちゃったら

信用しろつて言うのがムリがあるぜ!ねえ、沖原のダンナ!!」

沖原「……確かに先程のメリオダス氏とマサキの力は危険だ。

だが、これは信用するしないの問題ではない。

これからの戦い……その危険な力をも使いこなさなくては

生き残ることはできない。それはエンマ大王やアクア殿が

一番よく理解しておられる事だ。」

知世「それにその力が危険かどうかは使う人次第と言いますしね。

でも、わたくしは心配していませんわ。

メリオダスさんにはエリザベス様やホークちゃん、

そして七つの大罪の皆さんが……

マサトさんには美香さんや沖原さんが…

そして何よりگران・ゲインズの皆さんがついてますもの。」

エリザベス「知世ちゃん…。」

ホーク「おめえ…良い事言ってくれるじゃねえか!!」

ねずみ男「ケツ!!どうなっても俺あ、知らねえからな!!」

沖原「それよりも…シユラウドがついに出てきたか。」

犬山まな「何か…すつごく強そうだよあの人…。」

ホーク「心配すんなって!!万が一、あいつ等が負けちまってもよ、

このホーク様がケチョンケチョンにしてやるからよ!!」

エリザベス「まあ…ホークちゃん、頼もしいわね!!」

ねずみ男「なくに寝言言ってやがる!!」

お前なんざ、あつという間に

チャーシューにされちまうのがオチだぜ。

まあ、そうなつちまったら俺がおいしく食べてやるから

安心していつて来いよ♪」

ホーク「何だとダメ再!!スパー・ロース・イリユージョン!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

ねずみ男「ガベベベベベベベベ!!」

「ドゴーーーーー!!!!」

と、ホークはねずみ男にスパー・ロース・イリユージョンを

直撃させて吹き飛ばした。

沖原「冗談はこれぐらいにして…戦いが始まるようだぞ。」

犬山まな「鬼太郎…ねこ姉さん…みんな…。」

知世「さくらちゃん…ケロちゃん…李君…ご武運を…。」

エリザベス「メリオダス様…皆様…。」

ホーク「ブタ野郎共!気合い入れて行けよ!!」

ねずみ男「…。」「チーーーーーン…。」「new page」

エンマ大王「ついに出てきやがったか…シユラウド!!」

シユラウド「ああ!!待ちくたびれたぞエンマよ。

だが…よくぞここまで己を楽しませてくれたな。

褒めてやるぞ?ハーーーーーッハッハッハッ!!」

チン・ゲンサイ「何じゃと!? かーっ… これだから最近の若いモンは!!」

もう少し、年長者を立てんかい!!」

ピエラート「やなことたであーる!! ベロベロベローーッ!!」
キャロル「あらあら… ラー・カイン様の御前ですわよ？」

醜い喧嘩はお止めなさい、二人とも。」

ゴクウブラック「… (親衛隊(ホワイトナイツ)の中でも

最強格の『四聖士(パラディーン)』が

一堂に会するとはな…」

ラー・カインめ… 何をするつもりだ…?」

ザマス「そんな事よりシユラウドが造反だと? 事実なのか?」

ツアイト「ああ。奴は妖魔界を占領した後、密かに戦力増強を

行っていたからな。大方、グラン・ゲインズとの戦闘を

我々との決戦の予行演習代わりにでもしているのだろ

う。」

ゴクウブラック「そこまでわかっていながら奴を放置しておくとは…。」

随分と寛大な事だな。」

ザマス「それなら何故わざわざ最強格である

この3人をここへ呼んだのだ? ラー・カインよ…。」

ラー・カイン「時が満ちたからだ。」

ゴクウブラック「時が満ちただと… どういう事だ?」

キャロル「まあ… それではラー・カイン様…。」

ピエラート「いよいよであるか!」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ!! これはメデタイ!!」

ザマス「もったいぶらずに早く言え!!」

ラー・カイン「妖魔界での戦闘が終結次第…」

余はこの第5世界で

『聖なる最終戦争(ラー・アルマゲドン)』の

開戦を全次元に宣言する!!」

ゴクウブラック「何!」

小狼「雷帝招来!!」

「ババババババババババババ!!!」

シユラウド「グヌウー!!!」

シヤナ「私達も行こう!裕二!ナツメ!!」

裕二「うん!!」

朱夏「ああ!!」

不動明王「参る!!」

「ズガガガガガガガガガガ!!!」

シユラウド「ちい...小癩な!!」

エンマ大王「俺達も行くぜ、ぬらり!!」

ぬらりひよん「はい!大王様!!裁きの...超波動!!」

エンマ大王「霸王...閻魔玉!!」

「ドオオオオオオオオオオオ!!!」

シユラウド「おのれえええええ!!!」

と、アクアの魔法でパワーアップしたグラン・ゲインズのメンバー

達は

シユラウドに次々と猛攻を仕掛けてダメージを与えていき、

優勢に立っていた。「new page」

ケロベロス「よっしゃ!!押しとるで!!」

アキノリ「行ける...行けるぞ!!」

ケースケ「そのまま行っちゃえー!!!」

アクア「みんな!このまま一気に行くわよ!!」

トランクス(超サイヤ人2)「はい!フィニッシュ...バスター!!」

キング「真・霊槍シヤステイフォル第一形態...シヤステイフォル

!!」

マーリン「殲滅の光(エクスターミネート・レイ)!!」

リータ「サテライトバスター...フルファイヤ!!」

鬼太郎「指...鉄砲...!!!」

「ドオオオオオオオオオ!!!」

と、支持を受けたトランクス達はそれぞれの必殺技をアクアに向けて放った。

シユラウド「何…どこを狙っておる…？」

アクア「そう慌てないの!!時空魔法(ドライブ・アタック)!!

次元銀幕(ディメイション・カーテン)!!

「シユーーーーー…」

と、アクアは

『時空魔法(ドライブ・アタック)』

次元銀幕(ディメイション・カーテン)』を発動させると、

銀色の魔力で構成されたカーテンが出現し、

トランクス達の必殺技が飲み込まれた。

そしてその後、カーテンが再びシユラウドの目前に

出現して、飲み込んだ必殺技が一つとなり、

凄まじい威力のエネルギー弾となって

シユラウドに向かっていく。

シユラウド「フン!こんなもの!!打ち砕いてくれる!!」

「ブウウウウーーーーー」

アクア「メリオダス!今よ!!」

メリオダス「おう!待ってたぜ!!」

「バアアアーーーーー」

と、シユラウドがエネルギー弾を迎撃しようとした瞬間、

アクアの号令でメリオダスがシユラウドの近くに飛び出した。「n

ewpage」

メリオダス「行くぜシユラウド…全反撃(フルカウンター)!!」

シユラウド「そういう事か…面白い…受けて立とうではない

か。

ヌオオオオオオオオオオオオ

「ドオオオオオオオオオオオオ」

「ゴオオオオオオオオオオオオ」

と、メリオダスはエネルギー弾に向けて全反撃(フルカウンター)を

発動させると、対するシユラウドも強烈なパンチを放ち、

力と力のぶつかり合いが始まった。

「バリバリバリバリバリ!!!」

!!!

メリオダス「うおおおおおおおおお
シユラウド「ヌオオオオオオオオオ
バン「团长!!」
!!!!!!

ラピス「メリオダス!!」

鬼太郎「そのまま決めてくれ!!」

メリオダス「うおおおおおおお
シユラウド「……ヌウン!!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

メリオダス「ぐううううううううう
!!!!!!」

と、シユラウドはパワーを上げると、エネルギー弾が

メリオダスの方に押され始める。

キング「ああ!?!」

ゴウセル「まずいな……」

マーリン「团长殿!!」

さくら「メリオダスさん! 頑張つて!!」

メリオダス「み……みんな……(俺はもう失いたくねえ……こんな

俺を

今まで支えてくれた仲間との絆を……自分自身を……そして……)」

エリザベス(回想)「メリオダス!!」

メリオダス「……エリザベスを!! 俺は今度こそ……」

この呪われた旅を終わらせる!! だから……

こんな所で立ち止まるわけにはいかねえんだよ!!

うおおおおおおお!!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

シユラウド「何だと!?!」

と、押されていたメリオダスは仲間との絆……

そしてエリザベスへの思いで奮起すると、エネルギー弾を

シユラウドの方へ押し返し始めた。そして……

メリオダス「喰らいやがれシユラウド!! これが俺達の結束の力……

『全員反撃(グラランド・フルカウンター)』だ……」

!!!!」

シユクラウド「ククク… 死ね!!!」

「メキメキメキメキメキメキメキ!!!」

アクア「あ… があああああ!!! ああああああ!!!」
と、シユクラウドがパワーをチャージした拳で

アクアの腹を突き破ろうとしたその時…。 「new page」

「ピカー…!!!」

シユクラウド「ヌウ!？」

アニエス「な… 何!？」

アデル「こ… この光は!？」

「シュー…!!!」

フワ「フ… ワ… ワ… ワ… !!!」

ひかる「ひよえ… !!!」

ララ「ル… ル… ル… !!!」

えれな「きやあ!!」

まどか「あんつ!!」

孫悟空「おわっ!？」

ベジータ「くそつたれが!!」

ビルス「何だ!？」

ウイス「おほほほ!!」

と、妖魔界上空に眩い光が発生すると、
悟空達とひかる達が姿を現した。

キング「えっ!？」

海「あの人たち… まさか!？」

トランクス「と… 父さん！悟空さん!!」

孫悟空「よっ!!」

ベジータ「ト… トランクス!？」

さくら「後… ひかるちゃん達だよ!!」

ひかる「さくらちゃん!!」

ララ「さくら… また会えたルン!!」

ビルス「コラー… ツ!!」

お前ら、ボクを忘れるなー！っ！！

ウイス「おー！おー！っほっほっほっ！！

お久しぶりですねえ… グラン・ゲインズのみなさん！！

何やら、お取込み中のようなのですが…？」

ベジータ「おいトランクス！！それに貴様ら… 一体、何だそのザマは!？」

孫悟空「ベジータ!! どうやらアイツの仕業みてえだな…。」

と、悟空はベジータにそう語りながら、シユラウドの方に目線を向ける。

シユラウド「来たか孫悟空… そしてベジータ…

思った通りだな。 フン!!」

「ブウン!!」 「ドゴー！ー！ー！ー！ー！！」

と、シユラウドは悟空とベジータにそう言いながら

アクアを払いのけ、地面へと叩きつけた。

そしてアクアは胃液を吐きながら体をピクピクと痙攣させていた。

アクア「あ… が… ゴボオオオオ…。」

ラピス「ひ… 姉さま…。」

アンズ「だ… 大丈夫… ですか…？」

リータ「し… しっかり… して… ください…。」

ベジータ「おいカカロット!! あの女は!？」

孫悟空「アクアじゃねえか!! よし… 待ってる!!」

「ピシユン!!」

と、悟空は倒れているアクアの所に瞬間移動した。「new page」

アクア「あ… おえっ…。」

孫悟空「おいアクア!! 仙豆だ、食べ！」

アクア「あ…。」 「パリポリパリポリ…。」

と、悟空はそう言いながらアクアに仙豆を食べさせ、ダメージを全快させた。

アクア「!!! ご… 悟空さん!?! どうして…。」

孫悟空「よっ!! 久しぶりだなく!!」

しかし、随分こつぴどくやられたな、おめえ……。
アクア「……悪かったわね!!」「プウ……。」
と、悟空の言葉に頬を膨らませながらそう答えるアクア。
えれな「アクアさん……元気になった!!」
まどか「良かったですわ!!」
フワ「フワフワフ……。ワ!!」
ビルス「おいウイス!!そんな事よりここは何処なんだ!」
ぬらりひよん「ここは妖魔界です……破壊神ビルス様。」
エンマ大王「ようビルス!!そういや、ここへ来るのは
初めてだったか……」

ウイス「これはこれはエンマ大王様にぬらりひよんさん。

代わりのご説明、痛み入ります……」。

ビルス「おい、エンマ!!僕を呼ぶときはちやんと

『様』をつける!!破壊するぞ……」。

エンマ大王「ああ!?何、エラそうにしてやがる!!

食う事と寝る事しか頭に無えくせに

神様気取ってんじやね!よ!!」

ビルス「何だと……!!」

エンマ大王「やんのかコラ!」

エンマ大王・ビルス「ぐぬぬぬぬぬ……!!!!」

と、エンマ大王とビルスは互いにメンチを切りながら

顔を突き合せた。「new page」

ウイス「はあ……すみませんねえ、ぬらりひよんさん……」

ぬらりひよん「いえ……こちらこそ、とんだご無礼を……」

ひかる「ちよつとウサギさん!!喧嘩してる場合じゃないよ!!」

ララ「そうルン!!早くユニとプルンスを探すルン!!」

マーリン「そうかお前達……やはりあの二人を探しに来たのか。」

えれな「ユニとプルンスの居場所を知っているんですか?」

まどか「それなら話が早いですわ!!」

マーリン「実は……」

シユラウド「ユニだと……?ああ、己が洗脳してやったあの小娘か

!!

奴ならそこにいるグラン・ゲインズとの
潰しあいで倒されたぞ。中々、面白い見世物だった
ぞ…

ハツハツハツハツハツハツ
!!!!!!

ひかる「えっ…？」

ララ「それって…どういう事ルン!?」

ゴウセル「言葉通りの意味だ。シユラウドに洗脳された

ユニは俺達に戦いを挑んできた。そして俺達は、
敵となった彼女を迎撃した…ただそれだけの話だ。」

シユラウド「フン… 解説ご苦労!!」

色欲の罪（ゴート・シン）ゴウセル…。」

ディアンヌ「ちよ… ちよつとゴウセル!!」

えれな「ただそれだけの話って…!?」

まどか「そんな言い方… あんまりですわ!!」

ゴウセル「事実を述べたまでだ。何か問題があるのか？」

ひかる「大ありだよ!!でも今は… ユニを洗脳したっていう

あの人だけは絶対に許せない!!」

ララ「そうルン!!」

えれな「うん!!」

まどか「はい!!」

ひかる・ララ・えれな・まどか「スターカラーペンダント!!カラー
チャージ!!」

と、ひかる達4人は『スターカラーペンダント』と呼ばれるアイテ
ムを

それぞれ取り出し、歌いながら変身を始めた。「new page」

「キラキラキラキラキラ☆シ」

ひかる・ララ・えれな・まどか

「ぎゅら〜め〜く〜く〜♪星の力で〜♪憧〜れの〜♪わたし描くよ〜♪
トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク
ルプリキュア♪

スタートトゥインクル〜スタートトゥインクルプリキュア〜!!アア
〜!!」

キュアスター「宇宙(そら)に輝く〜キラキラ星!!キュアスター!!」
キュアミルキー「天にあまねく〜ミルキーウェイ!!キュアミルキー
!!」

キュアソレイユ「宇宙を照らす!灼熱のきらめき!キュアソレイユ
!!」

キュアセレーネ「夜空に輝く!神秘の月あかり!キュアセレーネ
!!」

4人「スタートトゥインクル...プリキュア!!」
「ピカー...」

さくら「あつ... ひかるちゃん達、プリキュアになったよ!!」

ケロベロス「相変わらず、歌いながら変身するんやな...」

光「あはは... そうだね...」

キュアスター「悟空さん!ベジータさん!わたし達に戦わせてくだ
さい!!」

キュアミルキー「ユニの仇をとりたいルン!!」

孫悟空「おめえら...」

ベジータ「いいだろう... やってみせろ!!」

キュアソレイユ「はい!!」

キュアセレーネ「ありがとうございます!!」

シユラウド「ファン!!つまらん... 今度は小娘共のお守りとはな。」

「new page」
「シユ...」

デューク「それでしたら... この少女達は、私がお相手しましよ
う。」

アキノリ「デユ... デューク!」

アヤメ「あの人... 妖魔界に来ていたの!」

と、まさかのデュークの出現に驚きの表情を見せる

グラン・ゲインズのメンバー達。

シユラウド「貴様... 何しにきた?」

デューク「単なるヒマつぶしですよ。

それに・・・あの少女達の持つ力に

いささかの興味がありませんねえ・・・フッフ。」

シユラウド「フン!!好きにするがいい・・・」

デューク「それでは早速・・・。」

「ピキーーーーーッーン!!!」

キュアスター「ひよえーーーーーッ!!」

キュアミルキー「ルーーーーーッーン!!」

キュアソレイユ「な・・・何なの!？」

キュアセレーネ「キャアーーーーッ!!!」

デューク「あなた達は特別に・・・私のプライベートルームへと

ご招待いたしましたしょう。」

「シユーーーーーッーン・・・。」

と、デュークは空間に鏡のようなものを出現させると、

キュアスター達を鏡の中に引き込み、

自身もその中へと消えていった。「new page」

孫悟空「おめえ達ーーーーッ!!!」

ベジータ「な・・・何が起きたというのだ!？」

ビルス「おいウイス・・・今のは!？」

ウイス「どうやら・・・あのデュークなる者が作り出した

世界に閉じ込められたようですな。

ウーン・・・どうしたものか・・・。」

シユラウド「デュークめ・・・何を考えている・・・？」

だが、これで邪魔者はいなくなつたぞ。

さあ、孫悟空にベジータよ・・・

パーティータイムと行こうじゃないか!!

ハハハハハハハハ!!!」

ベジータ「チツ・・・ふぎけた野郎だ!!」

孫悟空「だけどよベジータ・・・アイツは確かにとんでもねえパワー

だぞ。

まるでジレンみてえだな・・・。」

ベジータ「フン!!おいカカロット…。」

『身勝手の極意』は使えるのか?」

孫悟空「いや…それがまだできねえんだよ!!これまで使えたのも偶然みてえなものだよ…。」

ベジータ「聞くだけ無駄だったようだな。仕方ない…。」

ならば、あれを使うか?」

孫悟空「ん?ああ、あれか!!珍しいじゃねえか、

おめえから言ってくるなんてよ。」

ベジータ「いいからさっさとやるぞ!!」

孫悟空「へへ…行くぞベジータ!!」

「ドシューーーーーー!!」

と、悟空とベジータはパワーを上げながら横に並んだ。「new p
age」

ねこ娘「鬼太郎…まさかあれって…。」

鬼太郎「うん…あのとんでもないものを

使いみたいだね。」

孫悟空・ベジータ「フューーーーーー…ジョン!!ハアツ!!」

「ピカーーーーーー!!」 「ドオオオオオオオオオ!!」

と、悟空とベジータは『フュージョン』と叫ぶと、

変なポーズから人差し指を左右同時に合わせた。

すると、周辺から眩い光が発生し、凄まじいパワーを放ちながら

悟空とベジータが合体を果たした。

「シユンシユンシユンシユンシユン…。」

ゴジータ（超サイヤ人）「…。」

さくら「ほえええええええええ!!」

小狼「ま…またあれを見られるなんて…。」

アキラ「フツ…相変わらず頼もしい人達ね!!」

ゴジータ（超サイヤ人）「俺は悟空でもベジータでも無い…。」

俺は貴様を倒す者だ!!」

シユラウド「己を倒す者だと?面白い…返り討ちにしてくれるわ
!!」

と、ついに始まったシユラウドとのラストバトル!!
だが、奮闘及ばず大ピンチになったところに
突如、悟空達が現れて、窮地を脱した。
だがその後、デユークが出現しキュアスター達を
自身が作り出した世界に閉じ込めた。
果たしてデユークの狙いとは…。
そして悟空とベジータはフュージョンを使用し、
『ゴジータ』となって、シユラウドとの戦いに挑むのであった。
いよいよクライマックスを迎える妖魔界での激闘…
最後に笑うのはシユラウドか?
それともグラン・ゲインズであろうか!?

第42話 〽 全身全霊!! グラン・ゲインズVSシユラウド!! 〽

(完) 「new page」

・オリジナル設定

【 全員反撃 (グランド・フルカウンター) 】

グラン・ゲインズのメンバーの各必殺技をアクアの

『時空魔法(ドライブアタック)次元銀幕(ディメーション・カーテン)』
で

一つにまとめて相手の近くに転移させた後、メリオダスが

『全反撃(フルカウンター)』を零距离で発動させる合体技。

・オリジナルキャラ『四聖士(パラディーン)』

【 シユラウド 】

親衛隊(ホワイトナイツ)の中でも特に強大な力を持つ

『四聖士(パラディーン)』の一人。戦闘力はその中でも最強を誇り、
ラー・カインに次ぐ程の強者である。

(目安としてはドラゴンボール超のジレンと同等。)

身長は3メートルを超える長身で、筋肉バキバキの屈強な肉体を誇る。

容姿のイメージは

『魔入りました！人間君』の『サブノック・サブロ』である。

一人称は『己（うぬ）』

妖魔界を占領後は力が劣る妖怪をすべて封印し、自らが妖魔界を牛耳るようになる。

能力としては、死者の魂を具現化したり、

妖怪を強化して復活させる能力、相手を洗脳する能力、強大な闘圧・妖力をも使用できる。

グラン・ゲインズとの戦いでは、蛇王カイラや酒呑童子、

偶然妖魔界に転移してきたユニを捕らえて洗脳し戦わせたり、空亡を復活させて強化し、

自らが戦場に出現し、アクアの魔法で強化されたメンバー達と激闘を繰り広げた。

親衛隊（ホワイトナイツ）ではあるが、ラー・カインへの忠誠心はほぼ皆無であり、造反を目論む為、妖魔界で着々と戦力を準備してきた。

グラン・ゲインズとの戦いはその為の予行演習と位置付けているようである。

ちなみに、シユラウドの現在の姿は仮の姿であり、真の正体が存在するのだが……詳細は次回にて。

【チン・ゲンサイ】

親衛隊（ホワイトナイツ）の中でも特に強大な力を持つ

『四聖士（パラディーン）』の一人。

白いあごひげを生やした老人風の男性。

その実力や能力については現時点では不明。

ラー・カインによりピエラートやキャロルと共に、ラー・パレスに召集された。

一人称は『ワシ』笑い声は『フェツフェツ』

【ピエラート】

親衛隊（ホワイトナイツ）の中でも特に強大な力を持つ『四聖士（パラディーン）』の一人。

白いピエロの様な姿をした青年である。

その実力や能力については現時点では不明。

ラー・カインによりチン・ゲンサイやキャロルと共に、

ラー・パレスに召集された。

一人称は『ポク』語尾に『である』をつける。

【キャロル】

親衛隊（ホワイトナイツ）の中でも特に強大な力を持つ

『四聖士（パラディーン）』の一人。

金髪の色白で、ピチピチの白いワンピースをまとった

抜群のプロポーションを誇る美女。

ラー・カインに絶大な信頼を寄せており、心酔している。

その実力や能力については現時点では不明。

ラー・カインによりチン・ゲンサイやピエラートと共に、

ラー・パレスに召集された。

一人称は『わたくし』

第43話 奇跡の決着!! 大いなる地獄と煌めく
イマジネーションの力!!

ゴジータ（超サイヤ人）「俺は悟空でもベジータでもない。

俺は貴様を倒す者だ!!」

シユラウド「己を倒す者だと?面白い... 返り討ちにしてくれるわ
!!」

キング「あれって、あの時の...」

ゴウセル「確か『フュージョン』といったか。」

ディアンヌ「でも、人間同士が合体するなんていつ見ても不思議だ
よね

どういう仕組みなんだろう...?」

バン「まあ、仕組みなんざどうでもいいぜ♪

あの野郎をぶっ倒しさえしてくれりゃあよ!!」

ビルス「珍しいじゃないの...いきなりあの二人が。」

ウイス「一対一にこだわってる場合ではない相手だと

サイヤ人の本能で感じ取ったのでしょうか。」

その判断は正解かもしれませんね...」

おそらくあの者はジレンさんと同様に

破壊神よりも上の域に立っていると思われますし。」

エンマ大王「シユラウドだけじゃねえ...」

『親衛隊（ホワイトナイツ）』にはアイツの他にも

破壊神クラスの实力がある奴が少なくとも

後、数人はいるはずだぜ。」

ビルス「全くどうなっているんだ最近の世界は...」

次元の王候補（ディオケイター）とかいうのが

現れ始めてから、そんな厄介な連中が次々と...

おかげで昼寝もロクにできやしないじゃないか!!」

エンマ大王「ああ?どの口が言ってるんだ?

何もなくても寝てバツカじゃねえかよお前は!!」

ビルス「何だと!?もう一度言ってみろ!!」

エンマ大王「ああ良いぜ!何度でも言ってやるよ!!」

「ブウウウウウー……」

と、エンマ大王とビルスは睨みあいながら互いにオーラを放出し始める。

そして周辺がビシビシと震え始めた。

鬼太郎「くっ……!?!」

目玉おやじ「お主等……やめんか!!」

朱夏「そつちまで争ってどうするのだ!!」

ウイス・ぬらりひよん「そこまで!!」

と、ウイスとぬらりひよんは一触即発になっている

エンマ大王とビルスの間に割って入り、この状況を止めた。

ウイス「ビルス様……こんな事をしている場合じゃありませんよ?」

ぬらりひよん「大王様もです!!」

ビルス「チツ……わかったよ!!」

エンマ大王「まあ……この二人に免じて

この辺でカンベンしてやるさ。」

ビルス「何だと!?!」

アクア「二人共……いい加減にしなさい……!!」

そんな元気があるなら

あなた達がシユラウドを何とかしなさいよ!!」

「ビクッ!!」

ビルス「は……はい……」

エンマ大王「す……すみませんでした……。」

と、この状況で尚も喧嘩を続けるエンマ大王とビルスに対し、アクアは激高して二人を一喝しそしてエンマ大王とビルスはそのあまりの迫力に驚愕し、目を丸くしながら騒ぎを収めた。

トランクス「す……すごい……。」

マイ「さすがアクアさん……エンマ大王とビルス様ですら一喝して……。」

ラピス「そりやあ姉姉さまだからな!!」

ウイス「ありがとうございます、アクアさん!!」

ぬらりひよん「さすがだな。私からも礼を言わせてもらう。」

アクア「いいえ、どういたしまして!!それより。始まるみたいよ。」

メリオダス「さてさてさーて。頼んだぜ!悟空、ベジータ!!」

ゴジータ(超サイヤ人)「なら行くぜ!!」

シユラウド「来い!!」

「シユン!!。」「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ゴジータとシユラウドは互いにその場から消えると、

拳と拳をぶつけ合った。そのあまりの威力にそこから爆発が起き、爆風と衝撃を放ちながら凄まじい打撃の応酬が始まった。「new

page」

ゴジータ(超サイヤ人)「うおおおおおおおおおおおお!!!」

シユラウド「ぬおおおおおおおおおおおお!!!」

「ドドドドドドドドドド!!!」「ドカンドカンドカーンカーンカーン!!!」

さくら「ほええええええええええ!!!」

小狼「何て凄まじい攻防だ。。」

アキノリ「妖魔界を壊す気かよ、あの2人!!」

と、2人が打撃の応酬を始めると妖魔界の建物が

次々と破壊されていき、グラン・ゲインズのメンバー達は

より一層、緊張感と警戒心を持ちながら戦いを見守る。

ゴジータ(超サイヤ人)「やるじゃねえか。これならどうだ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」「ドゴオオオオオオオオオオ!!!」

シユラウド「ぬうううううううううう!!!」

と、ゴジータはそう言いながら強力なエネルギー波を

無数に放つと、次々とシユラウドに直撃していき

ダメージを与えていき、最後は地面へと叩きつけた。

光「あのシユラウドを押ししてる!!」

海「すごいパワーね。。」

風「行けますわ!!」

「ドゴーーーーーッーン!!!」 「ドオオオオオオオオオオ!!!」
シユラウド「まだだああああああああ!!!」

と、シユラウドはそう言いながら瓦礫を吹き飛ばし、
立ち上がると鬨圧を更に高め始めた。

ゴジータ（超サイヤ人）「へへッ… そう来なくっちゃな!!」

ならこつちも全力でいくぜ!!!

ハアアアアアアアアアア!!!」

「ドオオオオオオオオオオーーーーーッ!!!」

と、シユラウドが鬨圧を高め始めたのと同時に

ゴジータもパワーを上げて、更なる進化を開始する。「new pa
ge」

「バアアアアアアアアアアーーーーーッ!!!」

ゴジータブルー「これが俺の全力… ゴジータブルーだーーーーッ
!!!」

バン「す… すごい…」

キング「もう… 人間の範囲を超えてるよ…」

マリーリン「ああ… 最早、十戒ですら敵わん域だな。」

ゴウセル「この戦い… タダでは済みそうにないな…」

と、凄まじい気を放ちながら進化したゴジータブルーを見た

グラン・ゲインズのメンバー達は一斉に驚愕の表情を見せた。

ゴジータブルー「行くぞーーーーーッ!!!」

シユラウド「来い… !!」

「シユン!!」 「バキイイイイイイイイイイッ!!!」

シユラウド「グオオオオオオオオオ!!!」

と、ゴジータブルーはシユラウドの懐に瞬時に入り込むと、

強烈な右ストレートを顔面にヒットさせた。

そしてそこからゴジータブルーは怒涛のラツシユを

シユラウドに次々と直撃させる。

ゴジータブルー「だりやああああああああああ!!!」

「ズズズズズズズズズズズズズズズ!!!」

シユラウド「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!」

!!!!!!!

デューク「おや……ご存じないでも？そんなはずはありませんが
ねえ……」

まあ、いいでしょう。ではこの者達を相手に
その力……見せていただきましょうか!!」

「パチン!!」「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

? ⊠ 「……………」

? ⊠ 「……………」

? ⊠ 「……………」

? ⊠ 「……………」

と、デュークが指を鳴らすと、スター☆トウインクルプリキュアの
4人と

同じ容姿だが、装飾類が反対の位置に装着された

暗い雰囲気を漂わせたプリキュアが出現した。

キュアスター「ひよえ？」

キュアミルキー「あ……あれって……？」

キュアソレイユ「あ……あたし達……？」

キュアセレーネ「そ……そうみたいですけど……？」

キュアスター・ダスト「宇宙（そら）に消えゆく星の屑……」

キュアスター・ダスト……!!」

キュアミルキー・デブリ「天に散らばるデブリウェイ……」

キュアミルキー・デブリ……!!」

キュアソレイユ・ダークネス「宇宙を飲み込む暗黒の暗闇……」

キュアソレイユ・ダークネス……!!」

キュアセレーネ・スキア「夜空に消えゆく怪奇の月影……」

キュアセレーネ……スキア!!」

ダスト・デブリ・ダークネス・スキア

「『スター★ヴァニシング……プリキュア』……!!」

と、その出現したプリキュア4人はそれぞれ名乗った後、
最後に『スター★ヴァニシングプリキュア』と呼称し、
そびえ立つのであった。

キュアスター「ス……スター★ヴァニシング……プリキュア……」

と、修羅撃怒はそう言いながらゴジータブルーに強烈なパンチの嵐を

次々と繰り出しフルボッコにしていく…。

ビルス「おいウイス…なぜ、あいつらの攻撃が効かんのだ!？」

ウイス「ん…おそろくは…。」

マーリン「おそろく効かないのではなく…魔力や闘圧…

更にはサイヤ人のパワーといった妖気以外の力が

奴にはほとんど作用しない…といった所だろうな。」

ぬらりひよん「その通りだ…奴を倒そうと思うのならば、

奴を上回る妖力…又はそれに準ずる力…

もしくは『次元力』の様な神々を超える力が

必要不可欠となる…。だが、『次元力』を使用できる

ゼロライザーは戦闘不能…その上、修羅撃怒をも

上回る妖気を持つものは現在この場には存在しな

い…。

ビルス「多分、僕の『破壊』でも奴には通じないかもね。癩な話だが…。」

光「そ…そんな…。」

海「もう…どうしようもないの…?」

風「でも…わたくし達の魔法ではあまりにも…。」

修羅撃怒「ぬうん!!」

「バキイイイイイイイイ…!!!」

ゴジータブルー「うわああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオン!!!」「シュー…。」

悟空「あ…が…。」

ベジータ「く…くそつたれが…。」

と、修羅撃怒が攻撃の最後でゴジータブルーを前蹴りで吹き飛ばすと、

あまりのダメージで合体が強制解除されて、悟空とベジータの姿へと

戻ってしまった…。

悟空「ち…ちくしょう…。」
ベジータ「こ…この俺様がこんなところで…。」

と、修羅撃怒が放った『無限地獄大烈波』が、

悟空とベジータに直撃しそうになったその時…。「new page」
「e」

「シユン!!」

鬼太郎「霊毛ちゃんちゃんこ!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

修羅撃怒「何…?」

と、悟空とベジータの手前にアクアの瞬間移動で鬼太郎が現れる
と、

霊毛ちゃんちゃんこを展開し、『無限地獄大烈波』を防ごうとする。

鬼太郎「くっ…!!?」

朱夏「鬼太郎!!」

さくら「鬼太郎さん!!」

メリオダス「あいつ…無茶しやがって!!」

悟空「お…おめえ…。」

ベジータ「な…何してやがる…お前の妖力では無理だ…」

さつさと逃げやがれ…。」

鬼太郎「お断りだ…。僕はせつかくできた人間の仲間が妖怪に

殺されるなんてところ…。見たくないからね。」

悟空「鬼太郎…。す…すまねえ…。」

修羅撃怒「血迷ったか鬼太郎…」

ならば、人間と共に滅ぶがいい…。ヌウン!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

鬼太郎「うわああああああああ!!!」

と、修羅撃怒は更に妖力を高めると、獄炎の勢いが増大し、

鬼太郎を包み込もうとする。

ねこ娘「鬼太郎…!!!」

目玉おやし「逃げるんじや…!!!」

鬼太郎「ぼ…僕はあきらめない…。いつの日か

と、鬼太郎は胸に押し込んだ『地獄の鍵』を回すと、鬼太郎の体が業火に包まれて妖魔界全体へと広がると、髪の毛が数10cm伸びて、身長も180cm程となり、凄まじい獄炎の妖気を纏った姿へと変化した!!

鬼太郎(地獄形態)「これが… 僕の地獄の力だ!!」

さくら「ほえええええええええええええええええ!!!!」

キング「じ… 地獄の力!」

ディアンヌ「すっごーいーい!!」

マージン「ほう… これは中々のものだな。」

ねこ娘「……………」

砂かけ婆「ん? どうしたんじやねこ娘…。」

ねこ娘「鬼太郎… か… かつこい!!!!」

と、ねこ娘は地獄形態となった鬼太郎を

目の形を にさせながら見とれていた。

ケースケ「あはは…。」

トウマ「これなら行ける気がする!!」

修羅撃怒「小癩な… 地獄の力を得たところで、

己に勝てると思うのか!」

鬼太郎(地獄形態)「ああ!!こんな所で負けるわけにはいかないからな!!」

行くぞ、修羅撃怒!!」

修羅撃怒「ぬかせ… 小僧が!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

と、鬼太郎と修羅撃怒はそう言いながら拳と拳を激突させて、

戦闘を開始するのであった。そして…。「new page」

く デュークが作り出した鏡の中の世界 く

キュアスター「プリキュア! おひつじ座スターパンチ!!」

キュアミルキー「プリキュア! ふたご座ミルキーショット!!」

キュアソレイユ「プリキュア! さそり座! ソレイユシュート!!」

キュアセレーネ「プリキュア! いて座セレーネアロー!!」

「……………」

!!!

キュアスター・ダスト「無駄よ... 『スターダスト流星拳...!!』
キュアミルキー・デブリ「死ねリン... 『デブリサンダーアタック...!!』

キュアソレイユ・ダークネス「消えてよね... ダークフェニックス
シュート...!!」

キュアセレーネ・スキア「散りなさい... スキアストリームア
ロー...!!」

「ガガガガガガガガガガガガガガ!!!」

キュアスター「きゃああああああああ!!!」

キュアミルキー「ルーーーーー!!!!!」

キュアソレイユ「ぐうううううううう!!!」

キュアセレーネ「ああああああああ!!!」

と、キュアスター達がそれぞれ必殺技を放ち応戦するが、
対するキュアスター・ダスト達も必殺技を放つと、

パワーで勝るスター★ヴァニシングプリキュアの必殺技が

キュアスター達の技を打ち砕き、そのまま直撃してダメージを与え

た。「new page」

キュアスター「ううう...」

キュアミルキー「つ... 強いルン...」

キュアソレイユ「あ... あたし達と同じはずなのに...」

キュアセレーネ「ど... どうして...」

キュアスター・ダスト「同じだって...?」

キュアミルキー・デブリ「寝言は寝て言えリン...」

キュアソレイユ・ダークネス「ここはご主人様の世界...」

キュアセレーネ・スキア「つまり、わたくしのパワーは

お前達のパワーを凌駕するという事です...」

デュークの声「その通りですよ... 今のあなたの方の力では

歯が立たないようにパワーを調整させて

いただいていますからねえ...」

さあ、私のかわいいしもべ達... 更におもてなしをし

て

ヴァニシング・クロス・ショットを打ち破ると、
そのままキュアスター・ダスト達に直撃して、

眩い光に包み込んだ。そして…。「new page」
キュアスター・ダスト「クソやばああああああああああ
キュアミルキー・デブリ「リーーーーーー
キュアソレイユ・ダークネス「何が笑顔だああああああ
キュアセレーネ・スキア「わ…わ…わたくしの
!!!!!!

美しい姿がああああああ

「ドドドドドドドドドドドドドドドドツカーーーーー
と、キュアスター・ダスト達は断末魔の叫びをあげながら、
浄化されて、完全消滅した。!!!!!!

デュークの声「ああ…そうです…これぞ私が求めていた…。」

「パリパリパリパリ…。」「パリーーーーーー
!!!!!!

キュアスター「ひよえ!？」

キュアミルキー「ルン!？」

キュアソレイユ「今度は何なの!？」

キュアセレーネ「鏡の世界が…壊れていく…?」

と、スター★ヴァニシングプリキュアを消滅させた後、

デュークが作り出した鏡の中の世界が次々とひび割れていき、

崩壊していった。そして…。「new page」

「シューーーーーー
」

「パリーーーーーー
!!!!!!

ラピス「うわっ!？」

光「あれは!？」

さくら「ひかるちゃん!! ララちゃん!! みなさん!!」

ひかる「さくらちゃん!! みんな!!」

ララ「わたし達…戻って来られたルン!!」

ビルス「お前達…。」

ウイス「ご無事で何よりです。」

エンマ大王「デュークはどうした? 倒したのか?」

「ズババババババババババ!!!」

修羅撃怒「ぐああああああ!!!」

と、鬼太郎は武頼針で召喚した剣や髪の毛で修羅撃怒を連続攻撃を仕掛けて、ダメージを与えていった。

アキノリ「効いてる…効いてるぞ!!」

ケースケ「いいぞー!!鬼太郎さん!!」

ビルス「大したものじゃないか…ゴジータブルーの攻撃ですら

ほとんど効かなかったのにな。

ウイス「まあ…地獄の力には地獄の力…といったところでしょうかね。」

オーーーーーッホッホッホ!!!

修羅撃怒「お…おのれ…^{ハレ!}ハレならどうだあああああ!!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

と、修羅撃怒は何か立ち上^{ハレ!}ると、そのまま妖力を極限までにチャージしはじめる。そして妖魔界全体が激しく揺れて、

灼熱の獄炎が修羅撃怒の周辺へと結集し始めた。「new page」

シヤナ「うわっ!」

アラストール「何という事だ…私や紅世の王達ですら

ここまでの炎は…」

悠二「こちらまで燃やし尽くされそうな勢いだ…」

ハルヤ「さすがは地獄王といったところか…」

朱夏「鬼太郎!!」

「シューーーーーン…」

鬼太郎（地獄形態）「僕は負けない…いつの日か妖怪と

人間が手を取り合える日が来るまでは!!」

「キイイイイーーーーン!!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、鬼太郎は武頼針を解除してそう言いながら

『指鉄砲』の発射態勢をとると、

自らが発している獄炎の妖気を指先に集中し始めた。

すると、鬼太郎の前方に巨大な火の玉のような妖気の塊が出現した。

悟空「す…すげえ…。」

ベジータ「これが…地獄の力だというのか…。」

砂かけ婆「鬼太郎!!ワシらの思いも一緒に…。」

子泣き爺「そいつにぶつけてくれ!!」

一反木綿「ばーーーーーい!!」

ぬりかべ「ぬりかべーーーーーっ!!」

さくら「鬼太郎さん!!」

小狼「頼む!!」

ケロベロス「ぶちかましたれええええええええ!!!!」

修羅撃怒「燃え散れい!!最終奥義…『無限地獄…爆剛烈波』!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

鬼太郎（地獄形態）「喰らえ修羅撃怒…」

指…鉄砲ーーーーーっ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、修羅撃怒が最終奥義である『無限地獄爆剛烈波』を放つと、

対する鬼太郎も地獄の獄炎で威力が大幅に増大した

『指鉄砲』を修羅撃怒に向けて放った。「new page」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

修羅撃怒「ぬおおおおおおお!!!」

鬼太郎（地獄形態）「は!!!」

「バリバリバリバリ!!!」

修羅撃怒「人間と妖怪が手を取り合うだと…?」

くだらぬ!!人間など…ただ己のエゴで

世の中を荒らすだけの下等な俗物に過ぎぬ!!

そのようなくだらぬ幻想など…

全て燃やし尽くしてくれるわ!!」

鬼太郎（地獄形態）「だまれ!!確かに人間にも妖怪にも

どうしようもない奴はいる!!

だからといって、お前のような違う

修羅撃怒「うがああああああああ!!!」

鬼太郎（地獄形態）「地獄奥義…『竜巻獄炎脚』!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオツ!!!」

修羅撃怒「ぐはああああああああああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドツカーン!!!」

と、鬼太郎はそう叫びながら左足を振るい、『竜巻獄炎脚』を

炸裂させると、修羅撃怒が吹き飛ばされ、竜巻と獄炎が

入り混じって修羅撃怒を飲み込むと、そのまま大爆発を起こした。

そして、修羅撃怒はついに力尽きて

元のシュラウドの姿になると、大の字に倒れた。

その後、鬼太郎も地獄の鍵の力が消えて、

元の鬼太郎へと戻っていった。「new page」

「シューーーーーーん。。。」

シュラウド「……………」

鬼太郎「はあ…はあ…はあ…」

エンマ大王「どうやら…決着が着いたみたいだな!!」

ぬらりひよん「ええ…!!」

マサキ「フン…」

アキノリ「て事は…」

メリオダス「俺達の…」

朱夏「我等の…」

アクア「…勝利ですね!!」

一同「やったああああああああ!!!」

と、鬼太郎が修羅撃怒との決戦に終止符を打つと、

妖魔界での激闘に決着が着き、

アクアが勝利宣言をすると、グラン・ゲインズのメンバーは

一斉に歓喜の声を上げるのであった。「new page」

キング「よ…良かった…何とか勝てたねディアンヌ!!」

ディアンヌ「うん!!みんな凄かったね!!」

バン「まっ…エスカノールも団長も戻ってきたしよ!!」

エスカノール（普通）「あはは…最後は足手まといに

なつてしまいました。が……。」

メリオダス「俺も迷惑かけちまったしな……。まあでも、

終わりよければ全て良し!! って事でカンベンな!!」

トランクス「父さん……。悟空さん……。ありがとうございます!!」
マイ「あたし達のために駆けつけてくださって……。。」

ビルス「別に駆けつけたわけじゃないんだけどね……。。」

ウイス「まあまあビルス様……。そう言わずに!!」

悟空「へへっ!! 良いって良いって!!」

ベジータ「フン!! だがこの程度の奴らで俺達に頼るようでは

お前もまだまだだな……。これからは俺がみっちり鍛えてやる!!」

覚悟しておけ!!」

トランクス「えっ!?! ということはまさか……。。」

マイ「グラン・ゲインズに入ってくれますか!？」

悟空「おう!! これからよろしくな、おめえら!!」

ベジータ「貴様らの無様な戦いをこれ以上は見るに堪えないからな……。。」

ビルス「まあ……。僕はおいしいものでも

食べさせてくれりゃあそれでもいいよ。」

さくら「ということとは……。ひかるちゃん達も……。?」

ひかる「……。まだわからない……。。」

ララ「そうしたい気もあるルンけど……。。」

えれな「わたし達……。突然飛ばされてきたから……。。」

まどか「これからの事は……。ひとまずユニとプルンスに

会ってからですわね……。。」

アクア「わかったわ。彼女は今、アルテミスの中にいるから

会ってあげてちょうだい。」

ひかる「アクアさん……。はい!!」

ララ「ありがとうルン!!」 「new page」

鬼太郎「ふう……。。」

目玉おやじ「鬼太郎よ……。よくやったぞい!!」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

ラー・カイン「フッフ… 久しいな…」

グラン・ゲインズの虫ケラ達よ…。」

と、妖魔界全体が強大な闘圧に包まれると、上空から何とラー・カインが突如出現した。

アクア「ラー… カイン!!!」

ベジータ「何だと!?!」

悟空「あいつがブラックとザマスが言ってた…。」

ビルス「くっ…!?!」

ウイス「これは… ちょっと予想外の展開ですねえ…。」

エンマ大王「ラー・カイン… テメエ何しにきやがった!?!」

ラー・カイン「フツ…。」

と、死闘の末、修羅撃怒を撃破し、妖魔界での戦いに勝利を収めたグラン・ゲインズ。だが… 勝利の喜びの束の間、何とラー・カインが突如姿を現すのであった。

果たしてラー・カインの目的とは…

もしこのまま激突したら全滅必至の危機が訪れた

グラン・ゲインズのメンバー達…

彼らの運命は一体、どうなってしまうのであろうか!?!

第43話 奇跡の決着!! 大いなる地獄と

煌めくイマジネーションの力!! (完) 「new p

age」

・オリジナル設定

「鬼太郎（地獄形態）」

鬼太郎の強化形態。地獄の鍵を体内に取り込み

発動させることで強大な地獄の力を使用することが可能となる。

5期の鬼太郎でも使用していたが、この時は【地獄奥義】を使用できるのみであったが、今回は髪の毛が伸びたり身長が180cm程までに高くなる等、容姿が変化し、強大な獄炎の妖気を纏うようになった。この力で地獄王・修羅撃怒を圧倒すると、最後は新たな地獄奥義【竜巻獄炎脚】を炸裂させて、激闘に終止符を打った。その後、地獄の鍵の効果は消滅し、再び鬼太郎の体内へと封印されていた。

【地獄王・修羅撃怒】

シユラウドの正体。色白で筋骨隆々、身長が3メートル程ある。かつて無間地獄を統治していた最強の鬼である。ラー・カインが第5世界に侵攻してきたときに対峙したが瞬く間に敗北し、以後はラー・カインの配下となって親衛隊（ホワイト・ナイツ）・シユラウドとして妖魔界を統治する事となった。戦闘力はシユラウドの時よりも更に膨れ上がり、攻撃力はさることながら防御面に至っては、闘圧・魔力・サイヤ人の力などの妖力以外の力ではまったく作用せず、ほとんど通用しないという能力がある。この能力でゴジータブルーをも圧倒し追い詰めるが、最後は地獄の鍵を発動させた鬼太郎に敗北した。尚、容姿のイメージは『地獄先生ぬ〜べ〜』に登場する【覇鬼】を色白にしたような感じである。

【スター★ヴァニシング・プリキュア】

デュークが作り出した鏡の中の世界で生み出されたスタートウインクルプリキュアの複製達。

彼女達とはほぼ正反対の特性を持ち、メンバーは

『キュアスター・ダスト』『キュアスター・デブリ』

『キュアソレイユ・ダークネス』『キュアセレーネ・スキア』の4人である。戦闘力は鏡の中の世界にいるためか、通常のスタートウインクルプリキュアのメンバーよりも高いが、突如、謎の力（後のトウインクルイマジネーション）を発動させたキュアスター達に圧倒されて、最後はパワーアップした『サザンクロス・シヨット』の直撃を受けて、断末魔の叫びをあげながら消滅した。尚、キュアセレーネ・スキアのスキアとはギリシャ語で『影』という意味である。

第44話 〵 声明 〵

〵 妖魔界での戦いから3日後のラスト・ウォーリア基地 〵

アクア「……………」

メリオダス「……………」

鬼太郎「……………」

さくら「……………」

ホーク「どうしちまつたんだ？ブタ野郎共……………」

まだ黙り込んでるのかよ……………」

犬山まな「鬼太郎……………みんな……………」

ねずみ男「まあ……………勝つには勝ったかもしれないねえけどよ……………」

しかしあのラー・カインって野郎……………」

ウイス「うーん……………やはりタダ者ではありませんでしたね……………」

マイ「はい……………」

トランクス「まさか……………あれ程とは……………」

ベジータ「くそつたれが……………」

悟空「ブラックやザマス達が言った通りだったなく……………」

こりやめえつたぞ……………」

ビルス「……………」

ぬらりひよん「それにあの男……………」

エンマ大王「一体、何考えてやがる……………」

ナツメ「エンマ大王……………ビルス様……………」

？「ヌワーツメすわ……………うーん……………」

と、ある妖怪がナツメの名を叫びながら飛びかかろうとしていた。

ハルヤ「黙っている……………ミツマタノオロチ……………」

「ガシ……………ツ……………」

ミツチー「おわっ!?お……………おのれ酒呑童子!!またしても……………」

と、ハルヤはナツメに飛びかかろうとするミツチーを

妖力を使い、拘束した。

ウイスパー「やれやれ……………あなたも懲りてませんねえ、

封印から解放されて早々に……………」

ジュニア「キンニク…キモ過ぎ…。」

とミツチーに続き、封印から解放された

ウイスパーとジュニアもやってきた。

ケースケ「ウイスパーもジュニアも…そして妖魔界に封印されていた

ど…。」
トモダチ妖怪のみんなも封印が解けたのは良かったけど…。」

アキノリ「これからどうすんだよ俺達…。」

トウマ「ラー・カインが言ったことが現実になれば今の僕達では…。」

光「そうだね…。」

零「あの悪（クス）が…。」

美香「沖原さん…。」

沖原「激戦続きで皆、疲れているだろう。」

ひとまずは回復が優先だ。これからの事は

ラー・カインの出方次第で決めるしかない。」

マサキ「さて… 奴が事を起こして鉄血龍（オル・ドラゴン）共が

どう動くのか楽しみだな…クツクツクツ!!」

と、時は3日前に遡る…。「new page」

3日前 シュラウド戦直後の妖魔界

ラー・カイン「フツ…。」

エンマ大王「ラー・カイン… テメエ何しに来やがった!」

キング「ま… まさかここでオイラ達と…。」

バン「決着でもつけようってのかよ!」

ラー・カイン「決着? フフフ… 思いあがるな虫ケラ共よ…

ここでお前達を潰して余に何の得がある?」

ラピス「んだと!」

光「じゃあ、何の用だ!!」

ラー・カイン「虫ケラに答える義理はない…。」

「ブウウウ…。」

と、ラー・カインはそう言いながら右手を倒れている

シユクラウドの方へとかざすと、エネルギーを溜め始める。
トランクス「あ… あいつまさか!？」

マイ「シユクラウドを始末するつもりなの!？」

エンマ大王「ラー・カイン… 待ちやがれ!! そいつにはまだ…。」

ビルス「どけエンマ…!!」

「ブオオオオオオオオオオ!!!」 「ビシビシビシ…。」

と、ビルスはエンマ大王に! 言うのと、鬼の形相で

ラー・カインを睨みつけながら破壊の力を放出していく。

ベジータ「なっ!？」

悟空「おいおいビルス様!! どうしたんだよ!!」

ひかる「ウサギさん…。」

ララ「何だか怖いルン…。」

エンマ大王「ビルス… お前…。」

ビルス「下がっている… コイツは僕が破壊する!!」

面倒な事を起こされる前にな…。」

「ブウウウウウウウー…。」

と、ビルスはそう言いながら左手から破壊のエネルギーを

発生させて、ラー・カインへと照準を定める。

ラー・カイン「フツ… 破壊神如きが…」

余をどうにかできると思っているのか?

ウイス「うくん… 試してみましようか? ビルス様。」

ビルス「言われるまでもない… 『破壊』!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ビルスは左手に発生させた破壊のエネルギーを! 放つと、

禍々しい紫色の球体がラー・カインを包み込んだ。だが… 「ne

W p a g e

ラー・カイン「フツ… それがどうしたというのだ?

だが… 丁度良いな…。」

ビルス「な… 何だと!？」

ベジータ「な!?! あ… あの野郎… ビルスの『破壊』を受けて

平然としてやがる!!」

おかげで裏切り者如きは無駄な力を使わずに済んだ。
感謝するぞ？フッフ。。。」

ビルス「くっ。。。!?」

ウイス「これは想像以上でしたね。。。さてどうしたものか。。。」

鬼太郎「ラー・カイン。。。お前、なぜシユラウドを!？」

あいつはお前の仲間なんじゃないのか!？」

アニエス「そうよ!!」

アデル「どういう事だ!？」

ラー・カイン「仲間だと？余にそんなものは存在せん。。。」

あるのはいかに余の為に己の身を捧げることが
できるかという忠実な駒のみ。。。

シユラウドは最早、その駒としての価値はない。
だから処分したまでの事だ。」

メリオダス「駒。。。だと!？」

さくら「ひ。。。ひどいよ!!」

ナツメ「私は別に驚かないわよ。。。」

こういう奴だつて事はわかつてたから!!」

ラー・カイン「さて、処分は終わった。。。」

ではさらばだ、グラン・ゲインズよ。。。」

エンマ大王「待ちやがれラー・カイン!!妖魔界はどうする気だ!？」

ラー・カイン「この戦いはお前達の勝利だ。褒美として

この妖魔界。。。そして光の園も返してやろう。

既に親衛隊（ホワイトナイツ）も撤収させた。

後は好きにするが良い。。。」

エンマ大王「何だと。。。？」

ぬらりひよん「妖魔界だけでなく。。。光の園までだと?」

アクア「どういう風の吹きまわしかしら?」

マーリン「ぜひ聞かせてもらいたいものだな。。。」

その気前の良さの真意を。。。」

ラー・カイン「フツ。。。よかろう。余はこれから全次元に対し。。。」

『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』の

!!!!!!? 開戦を宣言する。。。」「new page」

アクア「!!!!!!」

エンマ大佐「。。。何だと。。。!?」

ぬらりひよん「『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』だと!?」

ビルス「貴様。。。!!!」

ウイス「やはり。。。!?!?そういう事ですか。」

ケロベロス「何の事や?」

小狼「説明してくれ!!」

ウイス「つまりラー・カインさんは。。。」

この世界を滅ぼすつもりなのですよ。」

ナツメ「えっ!?!」

零「この世界を。。。滅ぼすだと!?!」

光「何で。。。どうして!?!」

ぬらりひよん「おそらく。。。篩（ふる）いにかけてる為だろう。」

海「ふ。。。篩い!?!」

アンズ「どういう事ですか!?!」

平家「なるほど。。。大規模な戦争を起こして世界を滅ぼし、

人々を篩いにかけてた上で自分に都合が良い駒を選別する。。。

という事ですか。」

ビルス「。。。そんな生易しいものじゃない。。。コイツの真の目的

は。。。」

ウイス「『神々の殲滅』。。。ですからね。」

メリオダス「!!!!!!」

悟空「いいっ!!!!!!」

ベジータ「か!!!!!! 神々の殲滅だと!?!」

ラー・カイン「フツ。。。そこまで搦んでいたか、天使ウイス。。。

いや、正確には『大神官』と言ったところか。。。」

ウイス「はい。ですので、我々は大神官様の命で

あなたを倒す為にこの世界にやってきたのですよ。

ですが、先程の力を見る限りでは

一筋縄にはいきそうにありませんねえ。。。」

メリオダス「話は読めたぜ…。つまりお前は神々に喧嘩を売る為に
全次元をこのバカげた戦争に巻き込もうつてんだな!」

ラー・カイン「その通りだ…。そして、もうすぐサイは投げられる。

余の声明を持ってな…。」「new page」

まどか「そんな事はさせません!!」

えれな「人々の笑顔をあんたなんかには奪わせはしない!!」

ララ「私も…。みんなと一緒に全ての宇宙や世界を!!」

ひかる「絶対に守って見せる!!行くよ、みんな!!」

ひかる・ララ・えれな・まどか「スターカラーペンダント!!カラー
チャージ!!」

と、ひかる達4人は『スターカラーペンダント』と呼ばれるアイテムを

それぞれ取り出し、歌いながら変身を始めた。

「キラキラキラキラキラ☆ミ」

ひかる・ララ・えれな・まどか

「き〜ら〜め〜く〜♪星の力で♪憧〜れの♪わたし描くよ〜♪
トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク
ルプリキュア♪

スタートウインクル〜スタートウインクルプリキュア〜!!アア
〜!!」

キュアスター「宇宙(そら)に輝く〜キラキラ星!!キュアスター!!」

キュアミルキー「天にあまねく〜ミルキーウェイ!!キュアミルキー

!!」

キュアソレイユ「宇宙を照らす!灼熱のきらめき!キュアソレイユ

!!」

キュアセレーネ「夜空に輝く!神秘の月あかり!キュアセレーネ

!!」

4人「スタートウインクル…。プリキュア!!」

「ピカ〜〜〜!!」

スター・ミルキー・ソレイユ・セレーネ「はあああああ!!!」

さくら「ひかるちゃん!!」

「シューーーーーーシューーン……。」

と、ラー・カインは最後にそう言い残しながらその場から姿を消した。

ビルス「く……くそが……。」

ウイス「困りましたねえ……これはかなり

厄介な事になりそうですよ……。」

エンマ大王「ラー・カイン……!!」

と、妖魔界での戦いはグラン・ゲインズの勝利で一応の幕を閉じた。だが、ラー・カインの介入により、グラン・ゲインズのメンバーは今後の戦いに不安を募らせる事となってしまった。そして……

「new page」

く 現在 く

エンマ大王「その後に、シユクラウドが消えたせいとか、結界が消滅して

妖魔界に封じられていた妖怪達が開放された……。」

ぬらりひよん「そして、妖魔界の復興と統治をカイラ様に引き継い

で

いただいたのだが……。」

アキノリ「でもラー・カインが言ったような大戦争が

起きちまったらまた妖魔界は……。」

ナツメ「そうだよね……。」

キング「ところで……プリキュアのみんなは

今、どうしてるんだい？」

ディアヌ「医務室にいるよ。ユニちゃんがまだ目を覚まさないから

みんなで見病してるみたい。」

さくら「わたし……行ってこようかな。」

小狼「そうだな……その方がみんなも喜ぶと思うぞ。」

ケロベロス「せやな!!」

さくら「ありがとう小狼君、ケロちゃん、行ってくるね!!」

と、さくらはプリキュアの面々がいる医務室へと向かっていった。

一方その頃……。「new page」

↳ 医務室 ↳

ユニ「……………」

ひかる「ユニ……………」

ララ「まだ目を覚まさないルン……………」

マナ「ごめんね……………あたしのせいで……………」

と、ユニはネメシスモードとなったマナに倒された影響からか、

回復具合が予想以上に遅く、未だに目を覚まさない状況であった。

えれな「事情はプルンスから大体聞いたよ。」

まどか「ですから、気を落とさないでください。」

プルンス「それでプルンス!!」

フワ「そうフワ!!」

六花「そう言ってくれると助かるわ。」

ありす「シユラウドに洗脳されていたとはいえ……………」

こんな風になってしまったのはわたくし達も

シヨックでしたから……………」

マナ「それに……………リバーシア・ウオッチがまだ……………」
「スツ……………」

と、マナはリバーシア・ウオッチが未だにネメシスモードの時と同

じ

緑色の光を発している事を気にしていた。

なぎさ「まだ緑色に光ってるわね……………」

ほのか「ひよっとして……………ユニが目を覚まさないのは

その光のせいなのかしら……………?」

マーリン「その可能性はあるな……………マナ、ウオッチを貸してみろ。」

マナ「は……………はい。」

と、マナはマーリンにリバーシア・ウオッチを手渡した。

マーリン「絶対強制解除（アブソリユート・キャンセル）!!」

「パアアアアア……………」
「バリバリバリバリ!!」

ユニ「!!!」

ひかる!!!ユニ!!」

ララ「どうしたルン!?!」

マナとさくらがその場から姿を消した。

六花「マナ!!」

ひかる「さくらちゃん!!」

ララ「何が起こったルン!？」

マーリン「おそらく、マナとさくらは…」

ウオツチに呼ばれたのかもしれない。」

真琴「えっ…?」

亜久里「どういう事ですか…?」

知世「マナさんならわかりますけど、どうしてさくらちゃんが…?」

マーリン「それはわからないがな…」

(『この前の戦い』での突然変異といい…)

やはり、さくらには何かがありそうだな…。フフツ…)(

[new page]

とある空間

「シューーーーーーーン…。」

さくら「ほえ…?」

マナ「ここは…どこ?」

?「お待ちしていました…。」

と、リバーシア・ウオツチの光により、さくらは

とある空間に連れてこられると、そこには背中に翼が生えて

緑色の魔力を放ち、容姿はさくらの母親である

『木之本撫子』に似た天使の様な人物が目の前に現れた。

さくら「お…お母さん…じゃ…ないよね…。」

聖魔天使ネメシス「私は『聖魔天使ネメシス』…」

はじめまして、相田マナ、木之本桜…。」

さくら「聖魔天使…ネメシス…?」

マナ「それって…パトリシアさんと同じ人だよね…」

でもどうしてこんなところに…?」

聖魔天使ネメシス「私は3000年前の次元大戦の時…」

パトリシアと共に戦い…そして肉体を失いま

した。

が、

い、

その後私の魂と力をパトリシアに託しました

彼女は…私の力を制御できずに暴走してしま

『次元の王』に殺されてしまいました…

ですが、パトリシアは私の魂を取り込んだ影響で

浄化されず…3000年もの間、虚無の時を

彷徨っていたのです…。

その中でパトリシアの魂は相田マナ…

あなたと出会い、力を与えました。」

マナ「うん…それがリバーシア・ウオッチです。」

パトリシアさんには感謝しています!!」

聖魔天使ネメシス「ですが、そのウオッチには私の力も

混入されていた為、あなたが『憤怒』の感情を

抱いた時に私の力が発現し、

暴走してしまいました…。」

マナ「はい…そのせいであたしは…。」

さくら「マナさん…。」

聖魔天使ネメシス「ですが…それももうすぐ終わります…。」

新たな宿主を見つけましたから…。」

マナ「新たな宿主…?」

さくら「それって…もしかして?」

聖魔天使ネメシス「あなたです…木之本桜…いえ、我が主

よ…。」

マナ「えっ?」

さくら「ほええええええええええ!!わ…私が…どうして…

?」

聖魔天使ネメシス「直感…でしょうか?それとも…

私の容姿があなたの母に似ているからなのか…

いずれにせよ、私の力を宿せることができるのは

なぎさ「良かったね。。。」

ほのか「うん。。。」

ひかり「これで一件落着。。。ですね!!」

マーリン「やはり思った通りだったな。。。さくら、そのカードが。。。」

さくら「はい!!ネメシスさんの力です!!」

と、さくらはエメラルド色をした名も無きカードを

マーリンに見せた。

小狼「けど。。。何の魔力も感じないな。」

ケロベロス「使えるんか?そのカード。。。」

マーリン「今はただのカードの様だが。。。」

いずれ必要になる時が来るだろう。

大事に持っている。。。」

さくら「はい!!」

真琴「ところでマナ。。。リバーシア・ウオッチは?」

亜久里「そう言えば。。。見当たりませんね。」

マナ「パトリシアさんとネメシスさん。。。」

天国に行っちゃったから。。。」

ウオッチも消えちゃったかも。。。」

ありす「そうなんですか。。。」

レジーナ「でも、ウオッチが無かったら。。。」

マナ「仕方ないよ。でもおかげで。。。熱っ!!」

「キイイイイイイイイイイイイイイイイイーン!!!」

と、懐から異常な熱さを感じたマナは慌てて手を入れると、眩い光を放ちながら白銀色のウオッチが精製されていた。

六花「マナ。。。これって。。。」

真琴「もしかして。。。」

マナ「新しい。。。リバーシア・ウオッチだ!!」

（ありがとう。。。パトリシアさん!!あたしはこの力でみんなと。。。）

そしてあの人と共に、この次元の為に戦い抜いてみせます!!」

マーリン「フツ：：良い顔になったなマナ：：」

「これからもよろしく頼むぞ!!」

マナ「マーリンさん：：はい!!よろしくお願いします!!」
と、ユニが目を覚まし、マナやさくらが戻ってきて

医務室が賑やかになった所へ：：。

ラピス「おい、お前ら!!今すぐ指令室に集合だ!!」

さくら「ラピスちゃん：：?」

ケロベロス「どないしたんや?そんなに血相変えて。」

ラピス「どうもこうもねえよ!!ラー・カインの野郎が

声明を出しやがったんだ!!」

なぎさ「何ですって!？」

ほのか「ラー・カインが：：?」

マーリン「ついに動いたか：：。」

ひかる「わたし達も行こう!!」

ララ「ルン!!」

えれな「ユニ：：もう大丈夫なの?」

ユニ「もう平気よ!!呑気に寝ている場合じゃないニヤン!!」

プルンス「その意気でプルンス!!」

まどか「でも：：無理はしないでくださいね!!」

フワ「そうフワ!!」

マナ「それじゃみんな、戻ろう!!」

一同「了解!!」

と、医務室にいたマナやさくら達は呼びに来たラピスと共に
司令部へと向かっていった。そして：：。「new page」

レグルス帝国軍基地 ラー・パレス

ラー・カイン「全次元の愚民達に告ぐ：：。」

余は、レグルス帝国軍第3戦闘艦隊司令：：

『ラー・カイン』である。これから諸君らにとって

極めて重大な声明を発信する。それは：：。」

く 魔導士ギルド FAIRY TAIL く

ルーシィ「そ… そんな!!」

グレイ「何、ぬかしてやがんだ!」

ウエンディ「ほ… 本気なんですか!」

エルザ「こ… この男は…!?!」

ハッピー「ナツウ… オイラ、怖いよ…」

ナツ「上等じゃねえか… 燃えてきたぞ!!」

ルーシィ「ちよつとナツ!!そこ燃えるところじゃなーい!!」

く スペースナイツ基地 く

ノアル「おいおい… とんでもない事になりそうだな。」

アキ「ラダムだけでも大変なのにこれ以上は… ねえ、Dボウイ。」

Dボウイ「相手がラダムだろうとレグルスだろうと

俺の使命は変わらない。ただ、戦うのみだ!!」

ミリィ「Dボウイさん…」

く D・B次元第7宇宙 く

クリリン「参ったぜこりゃ…」

ピッコロ「悟空やベジータも確かあの世界にいるんだったな…」

悟飯「はい… もしあいつらが攻め込んできたら…」

天津飯「悟空やベジータの分まで、この地球を守らないとな。」

18号「何の得があるっていうのさ、こんな事して…」

ブルマ「ある意味、フリーザよりもタチが悪いわね、コイツ…」

トランクス(小)「何か面白くなりそうだな、悟天!!」

悟天「うん!!トランクス君!!」

く リオネス王国 く

ハウザー「ったく… 頭どうかしてんじゃねえのか、コイツは!!」

グリアモール「大それたことを…」

ギルサンダー「俺達は俺達にできることをやるしかない。

例えこの命に代えても… 王国は必ず守ってみせる

ぞ!!」

ギーラ「ええ… もちろんです!!」

エレイン「バン… お兄様…。」

ジェリコ「心配するなよエレイン!!バンが… 七つの大罪のみんなが

そう簡単に負けるかよ!!あんなイカれた奴ら…

すぐにぶっ倒してくれるさ!!」

エレイン「ジェリコ… はい、そうですね!!」

く ???
く

デリエリ「ケツから言つてコイツむかつく…。」

モンスピート「で?これからどうするのかなゼルドリス…。」

ゼルドリス「あそこまで言われて黙っている訳には

いけないところだが…。俺達にはやるべきことがある。

今、奴らにかまっている時ではない。」

エスタロツサ「そんじゃ… 高みの見物といったところかい?」

フラウドリン「それも悪くないな。人間同士の潰しあいを

楽しみに見ているとしよう。」

グレイロード「フフフフフ…。」

メラスキュラ「ところで… グロキシニアとドロールの姿が

見えないんだけど?」

バリオス「その2人なら、グラン・ゲインズの所に行ったみたいだよ。」

ゼルドリス「何… それは本当か?バリオス。」

バリオス「もちろん!!その2人を送ったのはこの私だしね。」

フラウドリン「何?」

エスタロツサ「おいおい!!メリオダス達を始末するなら、

あいつらだけ抜け駆けさせるなよ… 俺も連れて

けて!!」

バリオス「それはすまなかつたね。」

(まあ…あの2人は戦いに行った訳ではないのだが…)」
ヴォルクルス「放っておけ…今はギガデウス様の復活が

最優先だと言ったはずだ。

レグルスの始末はそれからでも遅くはない。」

と、そこへヴォルクルスが、謎の魔神族2体を引き連れて姿を現した。

謎の魔神族☒「何やら…面白い事になっているじゃないか、

おしゃぶりの…。」

謎の魔神族☒「まったくじゃ。人間の分際で生意気言いよるわい。

なあ、うたたねの…。」

バリオス「これはヴォルクルス様。それに…。」

ゼルドリス「お…お前達は!」「[new page]

ㄱ 全王宮 ㄱ

大神官「やはり、私の予想した通り…ラー・カインの目的は

我々神々の殲滅…でしたか。」

シャンパ「正気なのかコイツ？」

ヘレス「何と美しくない…。」

ベルモツド「我々はどう致しましょうか?大神官様。」

大神官「今、我々が動くわけには行きません。」

ギガデウス一派の本格的な活動に備えなければ

ならないですからね。」

全王「あのラー・カインって奴、何かムカつくね…。」

未来全王「宇宙ごと消しちゃおうか？」

大神官「全王様…あの宇宙には今、悟空さん達がおられます。

それはマズいかと…。」

全王「えっ?悟空がいるの?」

未来全王「じゃあ…何にもしない!!」

大神官「ありがとうございます、全王様。」

(それに…彼らは当然、全王様の存在は知っているはず…)

今、ラー・カインに仕掛けるのはリスクが大きすぎますし
ね…。

頼みましたよ悟空さん……。そして、グラン・ゲインズのみなさん)」

↳ ラストウォーリア基地司令部 ↳

ラー・カイン（モニター映像）「…… 以上で

『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』

の

開戦宣言を終了する。では全次元の

愚民達よ、

武運を祈る。フフフフ……。」

と、ラー・カインはグラン・ゲインズに宣言した通りの内容の声明を

全次元に発信し終えたのであった。

アクア「……………」

エンマ大王「ついに始めやがったか……。」

ぬらりひよん「これでこの世界を始め、全次元が戦場に……。」

ナツメ「こんな事…… 早く終わらせなきゃ!!」

シヤナ「そうだね。」

キング「でも…… 今のオイラ達でこの戦いを……。」

「シユン!!」「シユン!!」

グロキシニア「何スか何スか？戦う前からもう諦めてるんスか？

情けないっスねえ……。」

ドロール「まったくですね。」

ディアンヌ「ド…… ドロールさん!!」

メリオダス「それにグロキシニア…… 何しに来た？」

バン「俺達と決着でもつけに来たのかよ!!」

グロキシニア「そう睨まないでくださいっスよ……」

あっしらはその2人に用があつて来たんスから。」

ドロール「ハーレクイン…… そしてディアンヌよ。」

キング「オイラ達に……？」

ディアンヌ「何の用ですか？」

グロキシニア「単刀直入に言うっス。

あつしらの試練を受けてみる気はあるツスカ？」

ドロール「ただし…命の保証はできませんがね。」

キング「試練…ですか？」

ディアンヌ「それって…。」

ラピス「おい、お前ら!!キングとディアンヌを

罠にはめようってのかよ!？」

光「そうだ!!それにあんた達…十戒なんじゃないの!？」

グロキシニア「その通りっスよ。ですけど…。」

ドロール「我らは魔神族にあらず…。」

零「何…?」

平家「つまり…十戒ではあるが、魔神族じゃないから信用しろ…と?」

泪「今さらそんな事を!!」

グロキシニア「君達の見解なんて聞いてないっスよ。

さあ、どうするっスか?君達…。」

ドロール「どのみちこのままレグルスに挑んでも、

死あるのみ…ですがね。」

キング「…わかった!!オイラ…その提案に乗るよ!!」

ディアンヌ「…僕も!!」

エリザベス「キング様…ディアンヌ…。」

ホーク「おいおい2人共、本気か!？」

メリオダス「わかった。行ってこいキング、ディアンヌ!!」

マナ「あたしもメリオダスさんの意見に賛成だよ!!」

さくら「この人達は…嘘は言っていないと思います!!」

ケロベロス「ここはワイらに任せて、行ってきいや!!」

キング「ありがとう団長…そしてみんな!!」

ディアンヌ「行ってくるね!!」

ドロール「話は終わったみたいですね。」

グロキシニア「では行くとするツスカね!!」

メリオダス「グロキシニア、ドロール…2人を頼んだぜ!!」

ドロール「そちらこそ…。」

グロキシニア「まだ死んでは駄目ツスよ、メリオダス…」

そしてグラン・ゲインズ!!」

「シュン!!」「シュン!!」

と、グロキシニアとドロールはキングとディアンヌを

連れて、その場から姿を消した。

悟空「試練かあ… オラもちよつと修行したくなってきたぞ!!」

ベジータ「貴様… そんな暇があるか!!もうすぐ戦いが始まるんだ

ぞ!!」

ウイス「そうですね。ですが… やっぱり戦力不足は否めませんねえ…。」

アルトさんとバイエルンさんは無事に

『あの次元』に着いたでしようか?」

ビルス「『その次元』の僕に頼んでおいたからな。

もし『あいつら』が来れば戦力は確実に増すだろう。」

マイ「その次元?」

トランクス「あの、ビルス様… 『あいつら』とは一体…?」

ビルス「まあ… 来てからのお楽しみだな。」

トランクス「は… はあ…。」

マイ「何か… はぐらかされちゃったわね。」

アクア「…。」

沖原「マーキュリー大佐?」

マーリン「アクア殿… どうしたのだ?何か考え事か?」

アクア「… ラー・カインのこれまでの行動がちよつと気になつて…。」

ほのか「ラー・カインの行動… ですか?」

なぎさ「一体… 何が?」

アクア「もし世界を滅ぼすのが目的なら…」

何で今まで私達を見逃してきたのかなと思って…

倒そうと思えばいつでも倒せたはずなのに…。」

メリオダス「そういや、そうだな。」

マーリン「それにこのタイミングでの声明も

気になるな… まさか!？」

アクア「ええ… 多分、私もマーリンと同じことを考えてたわ。」

マナ「どういう事ですか？」

マーリン「ラー・カインは今まであえて、

小出しに我々に戦闘を仕掛け、

戦力が集うのを待っていた… という事だ。」

鬼太郎「えっ?」

ねこ娘「何の為によ?」

目玉おやじ「まさか… そういう事かろう?」

マーリン「察しの通りだ、おやじ殿…。」

我々に早々と消えてもらっては

奴のとっても都合が悪い。なぜなら…。」

アクア「ラー・カインの狙いは最初からただ一つ… シンだからよ

!!」

真琴「えっ?」

亜久里「でも… シン様は…。」

と、ラー・カインが『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』の

開戦声明を終えると、各次元や世界は、様々な反応をしていくので

あつた。

そして… 先程、ビルスやウイスが語っていた『あの次元』でも…。

「new page」

〜 とある並行次元に存在する地球

「ブルースカイ王国大使館」

龍斗「ブルーの奴、どうしたんだよ?

いきなり俺達を呼びつけるなんて…。」

ゴウガ「さあな。」

ガルダ「どうせ幻影帝国の事じゃないのか?」

めぐみ「だとしたら… いよいよ地球に総攻撃でも

仕掛けてくる気なのかな…?」

ひめ「えー…?」

「カチャ!!」

ブルー「やあ、みんな待たせたね。集まってくれて感謝する。」
と、部屋のドアが開くと、そこへブルーが龍斗達の前に姿を見せた。
ゆうこ「神さま!!」

いおな「一体、どうしたのですか?」

まりあ「急に呼び出したりなんかして。」

誠司「何かあったんですか?」

ブルー「早速ですまないが、まずはこれを見てくれ。」

と、ブルーはラー・カインの『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』

開戦声明の模様を龍斗達に見せた。そして…。

龍斗「な…何だよコイツは!」

めぐみ「レグルス帝国軍…。」

ゴウガ「ラー・カイン…だと?」

ひめ「げ…幻影帝国よりヤバそうじゃない?これって…。」

誠司「神さま…俺達を呼んだのつてもしかして…。」

ブルー「察しの通りだ。君達にはあの平行次元へと向かい…

『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』を

終結させてもらいたい。」

ゆうこ「えー…!」

いおな「でもこれって…私達の世界とは別の次元の出来事なんですよ?」

まりあ「どうして私達が…。」

ガルダ「あのラー・カインとかいう奴が言っていた

『神々の殲滅』…それに関係しているみたいだな。」

龍斗「ああ…そういやそんな事言ってたな…」

随分、派手な事を考える奴だぜ。」

ブルー「その通りだ。だとしたら、我々のいるこの世界もその戦争に

巻き込まれる恐れがある…。もし幻影帝国や

フリーザ軍辺りと手を組まれでもしたら、

それこそこの世界の破滅に繋がりがかねない。
それにこれはビルス様からの依頼でもある。」

龍斗「ビルス様から？それじゃあ断れねえよな。」

めぐみ「そうだね…。行こう!!」

ひめ「オッケー!!」

ガルダ「それにあのラー・カインとかいう奴…

明らかにタダ者じゃなさそうだしな。」

誠司「でも…。どうやってその次元に行くんですか？」

ゴウガ「平行世界なら行ったことはあるが、

並行次元となれば話は別だぞ。」

ブルー「それについては問題ない…。入ってきてくれ!!」

「シューーーーーーーン…。」

バイエルン「はじめまして、ブルー様…。」

アルト「こいつらか？お前が集めた面子とは…。」

と、ブルーが呼ぶと、そこにバイエルンとアルトが姿を現した。

いおな「神さま…。この人たちは？」

まりあ「明らかに怪しいけど…。」

ブルー「紹介しよう。これから向かう平行次元にいる者達で、

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』のバイエルンとアルトだ。」

龍斗「『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』？」

めぐみ「バイエルン…。アルト…？」

と、現れたバイエルンとアルトの只ならぬ雰囲気困惑する龍斗

達。

ブルー「早速で申し訳ないが、2人共…。彼らをお願いできるかな？」

バイエルン「それは構いませんが…。よろしいのですか？」

この世界の戦力が下がってしまうのではないかと…。」

アルト「フン…。案外、大して変わらなかったりしてな。」

龍斗「何だと!？」

ひめ「何よこの人、メツチャ失礼!!」

バイエルン「やめろアルト…。では君達…。我々についてきたま

え。」

ゴウガ「いいだろう。」

まりあ「よろしくお願いします。」

めぐみ「でも大丈夫かな…。わたし達がいなくなっても…。」

誠司「心配ねえさ!! 悟飯さんやトランクスさん、

ピッコロさんだっているしよ!!」

ブルー「その通りだめぐみ…。頼んだぞ!!」

めぐみ「ブルー…。わかった、行ってくる!!」

バイエルン「では行くぞ…。ん?」

ガルダ「何だ? オレの顔に何かついてるか?」

バイエルン「…。君の名は何だね?」

ガルダ「鳳凰ガルダだ。」

アルト「鳳凰ガルダか…。なるほど。」

バイエルン「君には期待させてもらおう。彼らの…」

『グラン・ゲインズ』の力になってくれたまえ。」

龍斗「グラン・ゲインズ…。?」

ゴウガ「俺達の名は聞かないのか?」

バイエルン「我々の次元に到着したら詳細を話すとしよう。

自己紹介はその時で構わない。」

ガルダ「そうだな。」

龍斗・ゴウガ「おい!! ガルダ、お前!!」

アルト「どうでもいいが、さっさと行くぞ。」

バイエルン「ではブルー様…。この者達をお預かりします。」

「シューーーーーー…。」

と、龍斗達はバイエルンとアルトに連れられて、

その場から姿を消し、第5世界へと向かっていった。

ブルー「頼んだぞみんな…。そして、グラン・ゲインズ!!」

と、とある並行次元に存在する世界の地球で活躍中の

『龍斗』『ゴウガ』『ガルダ』そして、彼らの仲間達である

『ハピネスチャージプリキュア』の主要メンバー達は

『この世界』の破壊神ビルスからの依頼を受けた

初の邂逅を果たすのであった。

果たして今後のグラン・ゲインズ…そして進之介の運命はどうなっていくのであろうか!？」

第44話　　〽　声明　　〽　(完)「new page」

・オリジナル設定

【聖魔天使ネメシス】

3000年前の次元大戦を戦った聖魔天使でパトリシアの戦友。

その中でもトップクラスの実力を持ち、戦果を次々と上げていったが、志半ばで無念の戦死を遂げてしまう。

その後、パトリシアがネメシスの魂と魔力を吸収したが、次元の王との最終決戦でネメシスの魔力を使用した際に、副作用である『憤怒』の力を制御できずに暴走した後、

次元の王に殺された為、パトリシアの魂と共に、3000年もの間、虚無の時を彷徨っていた。

後に、マナがりバーシア・ウオッチを手に入れて、戦闘を重ねていく度に、ネメシスの魔力も徐々に復活していき、妖魔界でキュアハートが

シクラウドに洗脳されていたキュアコスモに対し、怒りを爆発させたのを機に、ネメシスの『憤怒』の魔力が発動し、『ネメシス・モード』となって

洗脳されたキュアコスモだけでなく、味方のプリキュア達にまで見境なく攻撃を仕掛けてしまう。その後、正解したシャナの手により元に戻るが、

ユニの体内にはネメシスの魔力が残っており、目を覚まさずにいた為、マナとさくらをリバーシア・ウオッチの中に呼び込み、

さくらを新しい自身の主にふさわしいと直感で見定めて、虚無の時から解放してほしいと懇願した後、自身の魔力をカードに封印させた。

その後は、魂だけの存在となり、パトリシアと共に天へと召されていくのであった。

その際にさくらの事を『終わり始まりを司る者』と呼称しているが、その真意は現時点では不明である。

尚、容姿はさくらの母親である『木之本撫子』に酷似している。

【名もなきカード】

さくらがネメシスの力を『固着（セキユア）』した際に誕生したクリアカード。

通常のクリアカードとは違い、エメラルド色をしている。

この時点では何の魔力も発してなく、発動もできないが、

後に、このカードがさくらにとつてもない変化をもたらす事になるが、

それはまだ先のお話である。

【新しいリバーシア・ウオッチ】

聖魔天使パトリシアがネメシスと共に天に召される際、

自身の全魔力を凝縮して誕生した新たなリバーシア・ウオッチ。

これまでのマゼンタ色から眩い白銀色へと変化しており、

次章の『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』編で、

『新たなキュアハート・リバーシア』が爆誕する事となる。

第45話 ぐ すれ違う意思 ぐ

ラー・カインによる『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』開戦声明から一週間が過ぎ、各世界がレグルス帝国軍による大規模な軍事介入で次々と甚大なる被害を受けていった。そして例外なく彼らの攻撃にさらされた

『鉄血龍（オル・ドラゴン）』も皇帝ユラの命のもとにレグルス帝国軍との全面対決を開始した。

一方、グラン・ゲインズは今後の作戦として

まずはレグルス帝国軍との最終決戦に集中すべく、

『鉄血龍（オル・ドラゴン）』との決着を方針とするのであったが……。『new page』

ぐ ラストウオーリア基地内 ぐ

バン「ああ!?! そりやどいう事だテメエ!!」

ラピス「説明しろよマサト!!」

マサキ「聞こえなかったか？俺達が鉄血龍（オル・ドラゴン）と

決着などつける必要などないと言ったのだ。

結局は無駄な争いに終わるのだからな!!」

光「無駄って事は無いよ!!」

零「今は互いに潰しあっているが、万が一、

手を組まれてもしたら俺達に勝機は無い。」

ウイス「確かにですねぐ。ラー・カインはもちろんです、

その『鉄血龍（オル・ドラゴン）』とやらの

親玉の実力も未知数ですからねぐ。」

エンマ大王「マサキ……お前まさか、この期に及んで

また何か企んでいるのか？」

ビルス「返答によつてはお前をこの場で破壊するぞ!!」

沖原「エンマ大王、ビルス様、お待ちください。」

マサキ……お前は以前、『鉄血龍（オル・ドラゴン）』側にも

お前のクローンが存在するといったな。

まさかとは思うが、それは……」

マサキ「ククク… そうだ。『鉄血龍（オル・ドラゴン）』にいる俺のもう一人のクローンとは… 奴らの皇帝である『ユラ』だ!!」

ナツメ「えっ!!!?」

なぎさ「マジッ!!!?」

鬼太郎「『鉄血龍!（オル・ドラゴン）』の皇帝が…。」

ぬらりひょん「マサキのもう一人のクローン…。」

美香「どういう事ですか!? 説明してください!!」

マサキ「フン!! まあいいだろう… 以前、この俺が『王』となる為に

幾つかの布石を打ったという話はしたな?」

海「え… ええ…。」

マサキ「エンマ… 沖原… 貴様等は知らんだろうが、

この俺は15年前からレグルス帝国軍の襲来をも予見して

いたのだ。」?

沖原「何!!!?」

エンマ大工「どういう事だ!!!?」

マサキ「俺がまだ『鉄血龍（オル・ドラゴン）』に居た頃、たまたまレグルス兵が

奴らの要塞に偵察に来た時があつてな… そこで俺は奴らに近づき、

レグルスの情報をあらかじめ聞き出した後で兵共を抹殺し、

天滅槍（ゼロライド）とこの世界の情報をリークしたのだ!!」

アキノリ「な… 何だつて!!!?」

トウマ「じゃ… じゃあ、ラー・カインがこの世界にやってきたのっ

て…。」

平家「あなたが原因… という訳ですか。」

ねこ娘「あんた… 何考えてんのよ!!!」

ビルス「お前… 覚悟はできてるな…?」

「ビシビシビシ…!!!」

と、ビルスは血相を変えながら紫色の気を放出する。「newpa

ge」

ひかる「ウ…ウサギさん!!」

ララ「落ち着くルン!!!」

ウイス「まあまあビルス様…彼の話最後まで聞こうじゃありませんか。」

ビルス「チツ…!!!」

エンマ大王「マサキ…話を続けろ。」

マサキ「フン…そして俺の目論見通り奴らはこの世界へと来訪して

光の園や妖魔界を瞬く間に叩き潰し、俺の計画の障害となるものを

排除してくれた。そのタイミングで鉄血龍（オルドラゴン）が

本格的に指導し、この俺も完全復活した。後はレグルスが

鉄血龍（オルドラゴン）を倒そうが逆に奴らがレグルスを倒そうが

どちらにしろ『この俺』のどちらかが生き残り、

『王』になる…という事だ。わかったか!?俺達がわざわざ

鉄血龍（オルドラゴン）と戦う事は無いと言った理由が!!!」

ほのか「そんな!!!」

ケースケ「無茶苦茶だよそんなの!!!」

美香「でも…あなたがマサト君を生み出したのは、

いつか鉄血龍（オルドラゴン）やレグルスが

このような暴挙に出た時に

対抗する為だったんじゃないんですか!？」

マサト「ハツ!!!この俺がそんな善人に見えるか!?こいつらのように

正義だの愛だの守る為だのといった御託を並べて命をも

投げ出すような愚か者共と同じようにか!!!」

レジーナ「何ですって…!!!」

亜久里「今の言葉…聞き捨てなりませんわ!!!」

エンマ大王「お前等…もういいぜ。」

せいぜいラー・カインとの戦いに備えておくんだな。
行くぞ人形!!!!」

美香「は……はい!!!沖原さん……皆さん……行ってきます!!!!」

「シューーーーーー!!!!!!シューーン……」

と、マサキと美香はそう言いながらその場から姿を消した。「ne
w page」

沖原「マサキ……美香……」

バン「どうなってるんだこりゃ?」

マーリン「おそろくだが……奴の中にまだ『マサト』の意識が
わずかながら残っているのかもしれない。」

小狼「そうだとしても……これから俺達はどうすればいいんだ?」

ウイス「どうします?アクアさん。」

アクア「……いつレグルスが攻めてくるかわからないこの状況で
さすがに全員で追いかけるという訳にはいかないわ……」

ラピス「姉姉さま!!そりゃわかってるけどよ、私は行くぜ!!」

あいつは仲間なんだからよ!!!」

アンズ「そうね……ほつとくわけにはいかないわ。」

リータ「姉姉さま……出撃の許可をください!!!」

光「だったら、私達も行く!!!」

海「もちろんよ!!!」

風「それでしたら私も!!!」

アクア「あなた達……わかったわ。したら基地に待機する組と
マサト君を追いかけれるメンバーを決めましょう!!」

悟空さん達とメリオダス達は残ってもらうとして……
マナちゃん……人選は任せるからマサト君をお願いして良

いかしら?」

マナ「はい!!わかりました!!!」

六花「そしたら……あたし達は自動的にマナと一緒にね。」
あります「そうですね!!!」

亜久里「まあ……あのマサトさんは気に入りませんが、仕方あり
ませんわ!!!」

ガロン「阿久津マサト… 何しに来た？」

まさか、我々の加勢に来た訳ではあるまい？」

ゼロライザー（マサキ）「ザコ共に用はない… 奴はどこだ？」

ドーカベン「貴様あああああ!!! またしてもザコ呼ばわりを!!!」

バルキルス「知っていたとしても、我々がすんなりとここを通すと

思うのか？」

ガロン「ここで貴様の首をもらおうぞ… ゼロライザー!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ドーカベン達はそう言いながら闘圧を高めて戦闘態勢をとつた。

ゼロライザー（マサキ）「ククク… ザコが何匹来ようが… くらうっ

!？」

美香の声「マサト君!？」

と、マサキは再び、頭痛を起こしその場でうずくまる。

ドーカベン「うぬ? どうしたというのだ奴は…。」

バルキリス「よくわからんが… これは好機だ!!」

ガロン「ならば一気に終わらせてやる…」

『黒龍波動（ブラック・キャノン）』!!!

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

美香の声「マサト君!!!」

ゼロライザー（マサキ）「チイ…!!!」

と、ガロンが放った黒龍波動（ブラック・キャノン）が

マサキに直撃しようとしたその時… 「new page」

光「紅い… 稲妻…!!!」

リータ「サテライトバスター… フルファイヤ!!!」

キュアエース「エースショット!!! ばつきゅん!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

ガロン「何!？」

と、そこへ光たちがマサキの前に現れてそれぞれ必殺技を放ち、

ガロンの黒龍波動（ブラック・キャノン）を相殺した。

ラピス「マサト!!!」

キュアロゼツタ「大丈夫ですか!!？」

美香の声「みんな!!!」

ゼロライザー（マサキ）「貴様等… 何しに来た!？」

キュアブラツク「そんな言い方ないでしょう!？」

レジーナ「アンタを助けに来てあげたのよ!!!」

キュアハート「ほらほら!!!そんなこと言わないで

みんなで一緒に戦おうよ!!!」

ドーカベン「グラン・ゲインズか!？」

バルキリス「まあいい。ゼロライザーと共にまとめて消し去ってくれる!!」

ガロン「… 待て。」

と、ドーカベンとバルキリスが仕掛けようとするが、ガロンが制止した。

ドーカベン「ガロン!？」

バルキリス「どうしたのだ!？」

ガロン「グラン・ゲインズ… そして阿久津マサトよ、取引がしたい。」

海「えっ!？」

トウマ「取引だって?」

ゼロライザー（マサキ）「何… だと?」

ガロン「お前達も知つての通り、今、この世界は危機に瀕している。

このままでは我々やお前達もラー・カインの手で

葬られることになるやもしれん。」

ゼロライザー（マサキ）「だ… から?」

ガロン「単刀直入に言おう。お前達と私とで手を組みたい。

そして、この世界に革命を起こそうではないか!!!」

キュアソード「な… 何ですって!？」

アキノリ「そんな話… 信用できつかよ!!!」

アヤメ「しかも、あなたただけって…。」

ナツメ「まさか…。」

ガロン「察しの通りだ。信用してもらおう証に

そこにいるあの2人とユラの首をお前達に差し出そう。
この俺は七龍星（セブン・シユテルン）最強を誇り
なおかつ、ゼロライザーに対抗できる唯一の存在だ。
お前達とっても悪い話では無かろう？」

バルキリス「えっ!？」

ドーカベン「ガ… ガロン… 貴様ああああああああああ

この私達とユラ様を売るつもりか!!!!!!」

ラピス「何だよそりや!!!」

キュアダイヤモンド「自分が助かりたいからつて平気で仲間を裏切るなんて!!」

ハルヤ「下衆が…。」

キュアブラック「て言うか、首なんていらぬし!!!!!!」

ガロン「フフフ… ならば試しに私の力をここで見せてやるとしよう。

そうすれば考えも変わるだろう… ドーカベン、バルキリス、

悪いが俺の野望の為に消えてもらうぞ!!!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

と、ガロンはそう言いながら闘圧を高めると、

ドーカベンとバルキリスに向けて右手をかざし、攻撃態勢をとる。

ドーカベン「ガロン… よかろう。貴様がその気ならこの俺も

貴様の野望と心中する事もいとわぬぞ!!!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

と、対するドーカベンも闘圧を高めて臨戦態勢をとるが… 「n e
w p a g e」

バルキリス「やめなさいドーカベン!!ガロンを倒すつもりなら

先に私から倒しなさい!!!!!!」

と、バルキリスはそう言いながら両手を広げてドーカベンに立ちは
だかった。

ガロン「フツ… よくぞ言った。バルキリスよ…。」

ドーカベン「な… 何!?バルキリス… お前まさか… 奴の事を

!？」

バルキリス「そう… 私は彼を… ガロンを愛しているの!!」

だから、あなたに彼の邪魔はさせない!!!」

ラピス「おいおい… どうなってるんだこりや？」

キュアソード「せ… 戦闘中に痴話喧嘩だなんて…。」

キュアエース「何を考えているのですか？この人達は…（（）

ドーカベン「あ… そ… んな… 馬鹿な…。」

ガロン「フフフ… そうだバルキリスよ… 愛しているぞ…

この俺にはお前こそが必要なのだ…。」

気の済むまで何度でも言っていってやる。

愛している… 愛してるぞバルキリス!!」

バルキリス「ああ、ガロン… その言葉さえ聞ければ私は…。」

ゼロライザー（マサキ）「やめろおおおおおおおおお!!!」

やめろ… やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

ろ

おおおおお!!!」

ガロン・バルキリス・ドーカベン「」

ナツメ「えっ!？」

キュアハート「マサト君… ?」

ゼロちイザー（マサキ）「愛… だと？ふざけるな七龍共がああああ

あああ!!!」

ガロ!「何!!!?」

ゼロライザー!（マサキ）「貴様等は… 俺が作り上げた一組のクロ-

ンだ…」

同じ受精卵に手を加えた!!いわば貴様等は

兄弟どころか同一人物!!そしてこの俺は

貴様等の造物主にして… 『王』なのだ!!!」

ドーカベン「な… 何だとおおおおおお!!!」

ガロン「貴様が… 俺達を？」

キュアロゼッタ「確かそれは…。」

シャイニールミナス「この前話した事… ですよね？」

age]

「シューーーーーーシューーン。。。」

マサキ「……………」

美香「ううう……………」

ラピス「マサトーーーーーシューッ！！！！」

ナツメ「美香さん！！！！」

光「あんた……いきなり何するんだ！！！！」

謎の女性「悪い悪い……これでも手加減したつもりだったんだ
けどよ。」

オレの事よりさつさとそいつを連れて帰りな!!

ミリカならちやんと治してくれるからよ。」

キュアソード「えっ……？」

キュアハート「ミリカさんを知ってるんですか！！！！？」

メリム「まあな。オレの名は『メリム・サマンドラ』……」

ミリカにはそう言えばわかると思うからよ。

そんなじゃ、そのマサトって子は探している奴じゃなかった
し、

オレは行くぜ。じゃあな……また会おうぜ！！！！！！！！！！

「ドシューウウウウウウウウウウウウウウウウウウーーーーー！！！！！！！！！！」

と、『メリム・サマンドラ』と名乗る女性は最後にそう言い残して

猛スピードでその場から飛び立っていった。

アンズ「……………」

海「……………」

レジーナ「……………」

ナツメ「な……何だったの？あの人は……」

風「あの方……ものすごい魔力でしたわ！！！！」

キュアホワイト「あのゼロライザーを簡単に吹き飛ばしちゃうなん
て……」

光「うん!!何だかいい人そうだし、また会えるといいな!!!!」

トウマ「それに……どこかナツさんに似ているね。」

キュアハート「でも良かった。それじゃみんな、一度基地に戻ろう

!!!
「一同「了解!!!!!!」」

レイス「という訳で、七龍星（セブン・シユテルン）の残り3人を謎の頭痛に苦しみながらも全て撃破した木羅マサキであったが、

その直後に突如出現した『メリム・サマンドラ』と名乗る女性に

打ちのめされて、変身を強制解除させられたのであった。

そしてマナ君達はそんなマサキ君と共にラスト・ウォーリア基地へと

帰還し、今後の方向性を決める事となった。

そして、ついに鉄血龍（オル・ドラゴン）でただ一人となり、

追い詰められた皇帝ユラは、最後にどのような戦いを

仕掛けてくるのであろうか？

ちなみにあのメリム・サマンドラという女性の事だが、

ミリカ君の古い知り合いというのはもちろんの事、

この私とも浅からぬ因縁があるのだが……

それは先の話で語られることになるだろう。

今回はついに鉄血龍（オル・ドラゴン）と全ての決着がつき、物語は新展開を迎える事となる。

コラボ特別編で中々の好評だった為、

これからの本編のナレーションも引き続きこの私、

レイスが務めさせていただく事になりました。

それではまた次回も……刮目せよ!!!!!!

第45話 く すれ違う意思 く （完） 「new page」

・オリジナル設定

【地龍のドーカベン】

七龍星（セブン・シユテルン）の一人である大柄な男性。

ディアンヌやドロールといった巨人族と同じような大地を操る攻撃を得意とする。

ユラには強い忠誠心を持ち、バルキリスには密かに思いを寄せているが、

バルキリスがガロンを愛していると聞いた際にはひどく動揺していた。

そして最期はゼロライザーの天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）の直撃を受けて

跡形もなく消滅していった。

ちなみにこのドーカベンを含めて七龍星（セブン・シユテルン）全員が

木羅マサキの手により同じ受精卵から生み出されたクローンである為、

事実上の同一人物であるが、その事をマサキの口から聞くまで全く知らなかった。

「雷龍のバルキリス」

七龍星（セブン・シユテルン）の一人である金髪のショートヘアーが

特徴のスレンダーな女性。雷龍の異名の通り、

強力な雷撃を駆使した攻撃を得意とする。

七龍星（セブン・シユテルン）の一員となった時に

黒龍のガロンと出会い、戦士としての彼の背中を追いかけるうちにいつしか愛するようになっていったが、

同じ七龍星（セブン・シユテルン）としての立場がある為、

それを言い出せずにいた。そして、ガロンが造反を目論んだ時に

ドーカベンの攻撃から彼を庇おうとした際について胸の内を打ち明けたが、

その気持ちは造物主であるマサキが組み込んだプログラムだった事を

マサキ本人から語られたが、彼女はその言葉を受け止めたうえで

最期は否定しながらゼロライザーに特攻を仕掛けていったが、逆に返り討ちに会い、敢え無くその命を散らしていった。

ちなみに彼女もドーカベン同様、七龍星（セブン・シユテルン）全員が

木羅マサキの手により同じ受精卵から生み出されたクローンで、事実上の同一人物である事をマサキの口から聞くまで全く知らなかった。

「黒龍のガロン」

七龍星（セブン・シユテルン）の一人であり、最強の男。細目で肩まで伸ばした黒髪ロングヘアが特徴である。

黒龍の異名通り、黒い闘圧を使用した攻撃を得意とする。

表向きはユラに従っているが、実際はいずれ鉄血龍（オル・ドラゴン）を

手中に収め、それを皮切りに第5世界の支配をも目論む野心を秘めている。

ゼロライザーとの最後の戦いの際には彼にユラ達の首を差し出す代わりに

自分と手を組むよう取引を持ち掛けるが、バルキリスがドーカベンの攻撃から

庇おうとした際にマサキの口から真実が語られると、彼に対し憎しみを募らせて

逆上し、ドーカベンと共に攻撃を仕掛けるが、

最期はゼロライザーの天滅波動撃（ゼロ・スレイブ）の直撃を受けて

自身の野望ごと跡形もなく消滅していった。

ちなみに彼もまた、ドーカベンやバルキリス同様、

七龍星（セブン・シユテルン）全員が

木羅マサキの手により同じ受精卵から生み出されたクローンで、

事実上の同一人物である事をマサキの口から聞くまで全く知らなかった。

尚、本来ならば劇中で彼が語った通り、ゼロライザーと互角に渡り合える程の

力量をもつが、最期はあっけなく倒されたことに関しては、それはマサキの口から真実が語られたことに逆上し、冷静さを欠いていたからではないかと推測される。

【メリム・サマンドラ】（mega様提供オリキャラ）

3000年前の次元大戦で、親友であるミリカやシンと共に戦った『次元の秩序を守る』竜人族の一人で、

『灼熱の竜戦士』の異名を持つ女性。

朱色のポニーテールをしているのが特徴で、

正義感が強く、面倒見が良い性格で、誰とでも気さくに話し掛ける。どこかなツに雰囲気似ており、男勝りなしゃべり方をする。

一人称は『オレ』。

現在は『ある人物』を捜す為、様々な次元を飛び回っている。

戦闘力は3000年前のミリカに肉薄するほど高く、

剣術や体術、強大な魔力を使用した灼熱魔法を得意とし、

自身の魔力で生み出した『プロミネンスソード』による

攻撃も非常に強力である。

第5世界に訪れた際に、たまたまゼロライザーの気配を感知し、

突如、マサキの前に出現すると、向かってくる彼を瞬く間に一蹴した。

そして、マサキを『捜している人物』とは違うとわかると、キュアハート達にその場を任せて、再び飛び立っていった。

ちなみに、レイスとも浅からぬ因縁があるようで

その事は先の話で語られる事となるであろう。

又、人間の姿と本来の姿を使い分けることができ、フルパワーで戦闘する時は本来の灼熱の竜人の姿となる。

尚、若く見えるが、実年齢は8800歳。

竜人族はかなりの長寿なため、これでも若い方。

第46話　　宿命の終わり…　そして運命の始まり

　　第5世界のとあるポイント

「シューーーーーー…。」

と、第5世界のとあるポイントでは突如、上空にゲートが出現し、その中から戦艦のようなものが登場していた。

？「良かった!!無事に辿り着いたみたいね!!」

？「ここか?『グラン・ゲインズ』がいる次元は。」

？「ああ!!いいみんな、もう一度確認するが、俺達の任務は

そのグラン・ゲインズの元で戦い、この次元を救う事だ。」

？「人数が少ないからな。俺も『ダブルオーアマテラス』を使って戦うか。」

？「俺も『ガオフアイガー』で戦うぜ!!」

？「気合入ってるわね、アンタ達…。」

？「そうデスネ。ん?」

？「どうした?」

？「すぐ近くで戦闘反応ありデス!!どうしますか?」

？「戦闘反応?もしかしてグラン・ゲインズか?」

？「その可能性が高そうだな。『ソニック』!!『凱』!!」

早速だが俺と出撃してくれ。もし、グラン・ゲインズだったら

接触してみる。」

ソニック「ああ!!」

凱「了解だ、デイド!!!」

デイド「行くぞ!!この次元での俺達『B・D・S』の初出撃だ!!!」

と、『デイド』と呼ばれる男性の指示で、ソニック・ザ・ヘッジホッグと

獅子王凱は乗っていた戦艦から飛び出し、戦闘反応があったポイントへと

空を飛びながら向かい出すのであった。「new page」

く ラスト・ウォーリア基地内 く
マサト「……………」

メリオダス「さてさてきーて…。」

マーリン「今のお前は、どっちのマサトなのだ？」

マサト「今の俺は『阿久津マサト』であり『木羅マサキ』でもある。

だが俺は…『王』にはならない。俺は『阿久津マサト』として

生きることに決めたんだ。」

エンマ大王「マサキ… お前。」

ウイス「どうやら見つけたようですね。自分自身というものを
!!」

アクア「フッフ!!ほーら、私が言った通りでしょ？」

人の本質は簡単には変わらないって!!」

マサト「だからと言って、これまで俺が犯してきた罪は

決して許されるものではない。だからエンマ大王…

俺をこの場で裁いてくれ。」

ラピス「な… 何でだよマサト!!」

光「そうだよ!!せっかく本当の自分になれたのに!!!」

エンマ大王「… 木羅マサキ… いや、阿久津マサト。その事は

この世界をラー・カインの手から取り返した後で決めさせてもらう。」

沖原「エンマ大王…。」

ぬらりひよん「大王様のおっしゃる通りだ。そこまでの覚悟がある
のなら…

これからの戦いで証明して見せるがいい!!」

ナツメ「エンマ様!!!」

鬼太郎「ぬらりひよん!!」

マサト「エンマ大王、ぬらりひよん、感謝する。これからの戦い…

俺の全てを賭けて挑ませてもらおう!!」

美香「マサト君!!!」

マナ「これで一安心だね!!!」

六花「それはいいんだけど…彼の口調が。」

ありす「これまでのマサト君とは随分違いますわね…。」

真琴「人格が一つになったのが影響しているのかな？」

バン「そんな細けえ事良いじゃねえかよ♪」

ひかる「そうだよ!!!」

シャナ「男らしくてなっていいじゃない!!」

平家「もしかしたらあれが本来の彼の人格かもしれませぬね。」

沖原「そうですね…。」

職員「沖原本部長!!鉄血龍（オル・ドラゴン）の

皇帝ユラから通信が入っています!!」

アクア「何ですって!!!」

マーリン「ほう…皇帝自らがか。」

なぎさ「て言うか、鉄血龍（オル・ドラゴン）には、

もうその人しかいないのよね…。」

沖原「わかった。繋いでくれ!!!」

職員「了解!!通信繋がります!!」

「ピッ!!!」

ユラ（通信）「ラスト・ウォーリア並びにグラン・ゲインズよ…。」

我は鉄血龍（オル・ドラゴン）の皇帝…ユラである!!」

と、通信を繋ぐと、モニターにユラの姿が映し出された。「new p

age」

えれな「あの人が？」

ユニ「鉄血龍（オル・ドラゴン）の親玉ニヤン？」

ベジータ「どうやらそうみたいだな。」

マサト「ユラ…。」

ユラ（通信）「阿久津マサト…その様子だと、どうやらお前も

全てを知ったようだな。」

マサト「ああ…俺とお前が木羅マサキのクローンであることも

な。」

美香「マサト君…。」

ユラ（通信）「ならば、話が早い。私とお前で木羅マサキの怨念…」

そして互いの宿命に決着をつけようぞ!!」

さくら「ほえ？」

ケロベロス「つまり… 最後はマサトとアイツで勝負するっちゅうことか？」

ユラ(通信)「その通りだ… 場所は我らにとって全ての始まりであり、

最も因縁深き場所… 鉄血龍(オル・ドラゴン) 要塞だ

!!」

零「奴の本拠地だと？」

刻「思いつきし畏臭えんだけどな。」

泪「まあ、そうも言ってられないかもしれないけどな。」

マサト「ユラ… 鉄血龍(オル・ドラゴン)はもうお前一人だけ…

仮に俺を倒したとしてもその先に待つのは破滅だけだ。

降伏して俺達と共に来る気はないか? 悪いようにはしな

い。」

ほのか「マサト君…。」

ララ「良い事言うルン!!!!!!」

ユラ(通信)「今更、そのような戯言を受け入れると思っているのか?」

最早、お前と我に残されたものは…

どちらかが滅びるまで戦う宿命のみだ!!

お前が我との決着を拒否するというのならば…

『超磁力兵器』を発動させる!!!」

マサト「!!!」

沖原「超磁力兵器だと!!!!!!」

バン「あん?」

メリオダス「なんだそりゃ?」

刻「おい… それって!?!」

平家「ええ… 核兵器以上の威力を持ち、半世紀前の戦争で使用されて

この世界に『大変動』を引き起こしたものですね。

確か、その際に全て消滅したはずですが…

まさか鉄血龍（オル・ドラゴン）が所持していたとは。」

ユラ（通信）「その通りだ。15年前に唯一残っていたものを我らが回収し…。」

マサト「俺…いや、木羅マサキが改良して要塞の地下に封印していたんだ。」

そして、その超磁力兵器のトリガーは今、お前が持っているという事か。」

ユラ（通信）「ああ。阿久津マサトよ…これは脅しではない。」

発動を阻止したければ、我と戦え!!」

美香「マサト君…。」

マサト「わかった…望み通り決着をつけよう。今からそちらに向かう。」

ユラ（通信）「よかろう…待っているぞ阿久津マサト。」

無論、来てよいのはお前と小室美香の2人だけだ。

他の輩が共に来た場合でも即刻、発動させる。

では戦場で会おう!!」

「ブチッ!!」

と、ユラは最後にそう言い残すと、一方的に通信を切った。「new page」

マサト「という訳でみんな…俺は行くよ。」

ラピス「マサト…。」

マーリン「仕方あるまいな。」

エンマ大王「マサト…これで全てを終わらせて来い!!!」

マサト「はい。美香…来てくれるかい?」

美香「当たり前でしょ!!私がいなくちゃ、ゼロライザーは力を発揮できないでしょ?それに…。」

マサト「それに…何だい?」

美香「フフ…この続きはこの戦いが終わってからね!!」

さくら「ほえええ…。」

ケロベロス「何やそら。」

光「でもマサト君、続きを聞くためにも絶対勝たなきゃね!!」

沖原「マサト…美香…俺にできる事は無いか？」

美香「沖原さん。」

マサト「その気持ちだけで充分です。必ず帰ってきます!!」

悟空「へへっ!!!」

メリオダス「イツシツシツ!!!いい顔になったじゃねーか。」

美香「鉄血龍（オル・ドラゴン）要塞の場所は先程から近い場所です!!」

マサト「アクアさん…お願いできますか？」

アクア「OK!!それじゃ…マサト君、美香ちゃん、行ってらっしゃい!!」

「パチン!!」「シュン!!」

と、アクアがそう言いながら指を鳴らすと、

マサトと美香を瞬間移動で

鉄血龍（オル・ドラゴン）要塞へと転移させた。

ビルス「……………」

ウイス「ビルス様、ご不満でしょうか？」

エンマ大王「今のアイツは自分の道をようやく見つけたんだ。

それを見守るのも神様の仕事じゃねーのか？」

ビルス「僕とてそこまで鬼じゃない。見せてもらおうじゃないの…」

奴の生きざまという奴をな。」

ひかる「もう…ウサギさんったら素直じゃな!!!んだから!!!」

ウイス「まゝつたくですよね、オホホホホ!!!」

と、マサキに対して懸念を抱いていたビルスも冷!のマサトの様子を見て、考えを改めた様子だった。そして…「newpage」

レグルス帝国軍基地 ラー・パレス

ラー・カイン「イーグルよ…もうすぐ到着しそうなのか？」

イーグル（通信）「はい。我々がここまでたどり着けたのもラー・カイン様…」

あなた様の御助力の賜物でございます。…」

ラー・カイン「援軍をだいぶ引き連れてきたようだな。こちらに到着した後は

余のもとへと来るがいい。後に迎えの者を派遣する。」

イーグル（通信）「ありがとうございます、ラー・カイン様。

我らの姫もさぞ、お喜びとなる事でしょう…

では、また後程お目にかかれるのを楽しみにしております。

それでは…。」

と、イーグルはそう言い残し、通信を終えた。

ラー・カイン「ピエラートよ。聞いての通りだ…イーグルと姫君を

出迎えに行つて参れ。」

ピエラート「かしこまりましたのであーる!!」

チン・ゲンサイ「フェ？ワシでは無いんかのう？」

キャロル「あなただといつまでたつても目的地にたどり着けないですわよ？」

どのお口が言ってるのか理解できませんわ。」

チン・ゲンサイ「うるさいワイ!!!」

ザマス「ところでラー・カインよ…ツアイトとデュークの姿が

見えないようだが？」

ラー・カイン「ツアイトは今、別命で『ある平行次元』へと向かっている。

デュークはあれから姿を見ませんが、じきに戻ってくるだろう。

案ずることはない。ではピエラートよ…頼んだぞ。」

ピエラート「では、行って参りますのであーる!!」

「シューーーーーー…。」

と、ピエラートは空間を歪ませて、その場から姿を消した。

ゴクウブラック「フン… ツアイトの奴は『四聖士(パラディーン)』
に

昇格後の初任務という訳か。(だが、デュークの奴
め…

何を考えているのだ？それにラー・カインもラー・
カインだ。

なぜデュークをあそこまで好きにさせている…
？

あの2人はどういう関係だというのだ？」

と、ゴクウブラックはラー・カインとデュークの関係性に
疑念を抱くのであった。そして…。「new page」

鉄血龍(オル・ドラゴン) 要塞付近

「シュン!!!」

ゼロライザー「……………」

ユラ「阿久津マサト… いや、

次元の王候補(ディオケイター)・ゼロライザーよ… 待ってい
たぞ。」

美香の声「ユラ…。」

と、鉄血龍(オル・ドラゴン) 要塞付近で

ついに対峙するゼロライザーとユラであった。

ゼロライザー「約束通りに来たぞ。だが、お前はそのまま戦うつ
もりなのか？」

ユラ「そう急ぐな。見せてやる… 我ら鉄血龍(オル・ドラゴン)の
底力をな!!!」

「スツ…。」

と、ユラはそう言いながら、懐から解放前の

天滅槍(ゼロライド)に似たものをとりだした。そして…

ユラ「変… 身!!!」

「ブオワアアアアアアアアアアア!!!」

美香の声「きゃあああああ!!!」

ゼロライザー「くっ…!!!?」

「オールドラゴン」驚くのは早いぞ!! 『白き逆鱗（ホワイト・カイザー）』!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

と、オールドラゴンは更に『白龍のエグザイム』の最強技である

『白き逆鱗（ホワイト・カイザー）』を放ち、

『氷炎獄砲（フレイ・ザード）』と融合させた。

ゼロライザー「何!!!」

美香の声「そんな!!!」

オールドラゴン「消えよ… 阿久津マサト!!」

『三龍逆鱗波（トリプル・カイザーウェイブ）!!!」

「ブゴオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ゼロライザー「うわああああああああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、『三龍逆鱗波（トリプル・カイザーウェイブ）』の直撃を受けた

ゼロライザーは大爆発を起こし、大ダメージを受けて

その場で倒れてしまった。「new page」

美香の声「くっ… こ… これほど… だなんて…。」

ゼロライザー「だ… だが… こんなところで…。」

オールドラゴン「とどめだ… 行くぞドーカベン! バルキリス! ガロ

ン!!」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、オールドラゴンはそう言いながら

ドーカベンの『大地の逆鱗（アース・タイタニック）』

バルキリスの『最大雷撃（マックス・ライトニング）』

ガロンの『黒龍殲滅波（ブラック・デスウェーブ）』を

同時に発動させて、融合させた。

美香の声「ううう…。」

マサト「美香… こうなれば… あれを使うぞ!!」

美香の声「あれってまさか… 『クロスドライブ』?」

マサト「いや、違う… クロスドライブのその先へだ…」

今の俺達なら… やれる!!」

オルドラゴン「せめてもの情けだ…一思いに消してやろう。

木羅マサキの怨念と共に滅びよゼロライザー!!!

『大黒雷滅龍撃（アークドラゴン・ゲイザー）』!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

美香の声「マサト君!!」

ゼロライザー「ああ、行くぞ美香!!」

2人『ファイナル・クロストドライブ』!!!!

「ブオワアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「シューーーーーー!!!?」

オルドラゴン「何!!!」

と、2人がそう叫ぶと、ゼロライザーが凄まじい光と闘圧を放ちながら

『大黒雷滅龍撃（アークドラゴン・ゲイザー）』をかき消すと、

体が銀色から眩い黄金の光へと変化した上に

青白いオーラを纏った姿に変貌を遂げた。「new page」

オルドラゴン「な…何だ?その姿は…。」

ゼロライザー(FKD)「これが…ゼロライザーFKD(ファイナ

ル・クロストドライブ)だ!!」

オルドラゴン「まだそのような切り札があったとはな。いいだろ

う…来るが…」

「シュン!!」

ゼロライザー(FKD)「悪いが、この姿はあまり持たないんでな。

速攻でケリをつけさせてもらう!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

オルドラゴン「ぐわああああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ゼロライザーはそう言いながら瞬時にオルドラゴンの懐へ飛び

込むと、

そのまま超高速で次々と攻撃し、吹き飛ばした。

オルドラゴン「ぐおお…おのれ…こうなれば!!!」

「ドオウアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、オルドラゴンは何か立ち上がると、闘圧を極限までに高めて、フルパワー状態となった。

「シユンシユンシユンシユンシユンシユン……。」

オルドラゴン（フルパワー）「コオオオオオオオオオオオオ!!!」

美香の声「マサト君……。」

ゼロライザー（FKD）「ああ…… 奴も全てを懸けてくるようだな。ならば!!」

オルドラゴン（フルパワー）「これで最後だ…… ゼロライザー!!!!」

七龍星（セブン・シュテルン）の力の全

てをここに!!!」

「ブオウアアアアアアアアアアア!!!!」

とオルドラゴンはそう言いながら、闘圧を最大限に高めると、七龍星（セブン・シュテルン）の力の全てを結集し、

超巨大な漆黒のエネルギー弾を形成した。「new page」

ゼロライザー（FKD）「美香…… 行くぞ!!!!」

美香の声「はい!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

と、対するゼロライザーも闘圧を最大限に高めて

天滅槍（ゼロライド）をオーラに変換して両手に纏うと、

天滅波動撃（ゼロ・スレイヴ）の発動態勢をとった。

そして、その影響で周辺から凄まじい爆風と衝撃が巻き起こる。

オルドラゴン「阿久津マサト…… 今こそ我らの宿命に……。」

ゼロライザー（FKD）「決着をつけよう。行こう、美香!!!!」

美香の声「はい!!!!」

オルドラゴン「砕け散るがいい……」

『鉄血龍・全闘撃（オルドラゴン・フルアタッカー）!!』

ゼロライザー（FKD）「真・天滅波動撃（ファイナル・ゼロスレイヴ）!!」

「ドオウワアアアアアアアアアアア!!!!!!」

と、オルドラゴンが七龍星（セブン・シュテルン）全ての力を

結集させた最終奥義『鉄血龍・全闘撃（オルドラゴン・フルアタツ

と、アクアはそう言いながら指を鳴らして、先程の攻撃メンバーをマサト達が戦った場所へと瞬間移動させた。クレフ「……………」。

平家「おや？導師クレフ、どうされましたか？」

ビルス「食いすぎて腹でも壊したのか？」

ひかる「もう、ウサギさんじゃないんだから!!」

クレフ「いや…先程から妙な胸騒ぎがするんだ。」

ケロベロス「胸騒ぎやて？」

小狼「それってまさか…………」

クレフ「ああ…もうじき現れるかもしれない…………」

『もう一つのセフィーロ』がな。」

と、クレフは『もう一つのセフィーロ』がもうすぐ現れるのではないかと

考えていた。そしてその予感はずぐに的中することとなる。そし

て…………『new page』

く 鉄血龍要塞 へ

ソニック「ここか…………さつき大爆発が起きた場所は。」

凱「ひどい有様だな…………これ程の規模の破壊は久しぶりに見たぜ。」

デイド「ああ…………これでは生存者がいるかどうか…………ん？あれは…………」

美香「……………」。

と、デイド達は、先程の爆発が起きた場所へと到着し、

周辺を搜索していると、そこには瀕死の重傷を負った

美香が仰向けで倒れていた。

ソニック「女の子だ!!」

凱「酷い怪我だ…………デイド、もしかしたらこの子は…………」。

デイド「グラン・ゲインズかもしれないな。しかし、このままにはしておけない。

ひとまず、『キャットスルドラン』で治療を…………」

ソニック「デイド!!何者かがここに近づいてくるぞ!!」

凱「ひとまず隠れようぜ!!」

デイド「ああ、わかった。この子をこれ以上、

危険な目に合わせるわけにはいかないからな!!」

と、ソニックと凱に促されたデイドは、美香をお姫様抱っこをして、

その場から離れ、残骸へと隠れた。すると・・・「new page」

「シンシユンシンシユン!!!」

ピエラート「ここであるか？姫君が降臨なされる場所とは・・・。」

レグルス兵「へい!!ピエラート様、ちようど廃墟となっているよう
ですぜ!!」

と、そこへ『もう一つのセフィーロ』を出迎えに来た

親衛隊（ホワイト・ナイツ）ピエラートがレグルス兵を

数人引き連れて姿を現した。

ソニック「な・・・なんだ？あいつらは・・・」

凱「（どうみてもグラン・ゲインズではなさそうだな。）」

デイド「（確かに・・・俺達の次元にはいない連中みたいだな。ん
?）」

「シンシユンシンシユン!!!」

キュアハート「着いた!!」

ラピス「待ってるよマサト!!」

ナツメ「つて・・・あれは!!!」

キュアブラック「レグルス帝国軍!!!」

ピエラート「おやおや・・・誰かと思えば、グラン・ゲインズのみな

さんであるか!!

何しにきたのである?」

キュアソード「決まってるわ!!マサト君達を捜しに来たのよ!!」

キュアロゼッタ「そういうそちらこそ、どうしてここにいるのです
か!?!」

ピエラート「マサト?ああ・・・ゼロライザーの事であるか!!」

どうりでこの状況は・・・まあ、いいのである。

ポクの名は親衛隊（ホワイト・ナイツ）四聖士（パラ
デイーン）が一人・・・

『ピエラート』である!!そして、ポク達は姫君達の

お出迎えに来たのである!!」

キュアダイヤモンド「ピエラート…?」

トウマ「親衛隊(ホワイト・ナイツ)四聖士(パラディーン)って…。」

ハルヤ「あのシユラウドと同じ立場の奴か!!」

光「それに、姫君って誰の事よ!!」

風「光さん…その人はもしかしたら…。」

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!」

と、風が何かを言いかけた瞬間、突如空間が激しく揺れ動き始めた。

「new page」

ソニック「お…おい、何だよこの揺れは!」

凱「(何者かが転移してくるのか!?)」

デイド「(どうやらそうみたいだな…来るぞ!!)」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

キュアホワイト「きゃあああああああああ!!」

キュアエース「くうううううううううう!!」

と、その後に眩い光が発生するとともに、

鉄血龍(オル・ドラゴン)要塞があつた場所に、

巨大な古城が姿を現した。

「シユ…」

巨大な古城「…。」

アキノリ「何だあれは!」

シャイニールミナス「お城…でしょうか?」

ピエラート「どうやら、到着したようであるな!!」

「シユン!!」

?「はい…ピエラート殿、四聖士(パラディーン)

自らのお出迎え…感謝いたします…」

風「えっ!!!?」

海「あれ!てまさか!!!?」

光「『ザガートの魔神』!!!それにこの声…」

あんたはまさか…『イーグル』!!!」

ラン「私も!!ピカチュウに決めた!!」

ピカチュウ(ラン)『はい!!』

コナン「よし!!いくぞルカリオ!!」

ルカリオ『おう!!』

レグルス兵⊠「あん?何だあのネズミ共は?」

レグルス兵⊠「そんなもんで我らが栄光ある『レグルス帝国軍』の

相手ができると思ってるのかガキ共!!!」

レグルス兵⊠「返り討ちにしてやるぜ...ぐひやひやひやひやひや

!!!!」

コナン「レグルス...帝国軍?」

レイス「という訳で、ついに自らの運命に決着をつけた

阿久津マサトであつたが、その代償はあまりに

大きいものとなつてしまった。

果たして彼は本当に死んでしまったのか...?

そして、新たに平行次元から『B・D・S』といわれる

謎の特殊組織のメンバーが登場し、重症となつていた

小室美香を保護したのも束の間、

今度は『もう一つのセフィロ』が、鉄血龍要塞跡に

古城を出現させて、第5世界へと本格的に降臨を果たすので

あつた。

一方その頃、『サトシ兄妹の世界』と呼ばれる

とある平行次元の世界では突如、レグルス帝国軍が

出現し、侵攻を開始するのであつた。

果たして、彼らの目的は...

そして、その世界の戦士達は見事に彼らを撃退し、

窮地をのり切ることができるのであろうか...

鉄血龍(オル・ドラゴン)との決着がつき、新たなステージ

を迎える

この『聖なる最終戦争(ラー・アルマゲドン)』編...

一体、どのような展開がグラン・ゲインズを待ち受けているのか…

それではまた次回も… 刮目せよ!!!
!!!」

第46話　～ 宿命の終わり… そして運命の始まり　～ (完

) 「new page」

・オリジナル設定

【阿久津マサト (人格統合ver)】

阿久津マサトと木羅マサキの人格が統合されたもの。

以前のマサトの大人しさとマサキの残忍さを足して

2で割ったような感じとなった。

口調も自身に満ち溢れて、『男らしさ』も増しており、

一人称も『俺』となっている。

人格が統合されたことで、ゼロライザーの次元クロスシステムを

限界以上に引き出せるようになり、クロスドライブを更に凌ぐ

『ファイナル・クロスドライブ』を発動できるようにまでなった。

人格統合後、メンバーに対して、『王』となる野望を完全に捨て、

『木羅マサキ』としてではなく、『阿久津マサト』として生きること

を明言し、

自らの運命に決着をつける為、グラン・ゲインズのメンバーに

快く送り出されて、美香と共にもう一人の木羅マサキのクローンで

ある

ユラとの最後の戦いへ赴いていった。

【ゼロライザーFKD (ファイナル・クロスドライブ)】

マサキとの人格統合を果たしたマサトが、

次元クロスシステムの限界を超えて、

クロスドライブの更にその先へ進化した姿。

クロスドライブ時の黄金の体から、青白いオーラが

上乘せされているのが特徴。

全ての性能が格段に上昇しており、通常のゼロライザーを圧倒した

オールドドラゴンと直角以上に渡り合った。

最後は天滅波動撃（ゼロ・スレイヴ）をも凌ぐ威力の

『真・天滅波動撃（ファイナル・ゼロスレイヴ）』を放ち、

ユラと共に自らの宿命に決着をつけたのであった。

「オールドドラゴン」

ユラがかつて木羅マサキが残した天滅槍（ゼロライド）と七龍星（セブンシユテルン）の研究データを基に創造した切り札ともいえるべき存在。

全ての性能がゼロライザーを遥かにしのいでおり、七龍星（セブンシユテルン）全ての力を使えるため、その力でゼロライザーを追い詰めたが、ゼロライザーが「FKD（ファイナル・クロスドライブ）」を発動させてからは激闘を繰り広げて、

最後は七龍星（セブンシユテルン）全ての力を込めた

最終奥義『鉄血龍・全鬪撃（オールドドラゴン・フルアタッカー）』と

『真・天滅波動撃（ファイナル・ゼロスレイヴ）』の激突の末、

マサトと共に、自らの運命に決着をつけた

達成感に浸りながら消滅していくのであった…。

尚、このオールドドラゴンは、容姿こそゼロライザーを

黒くしたものであるが、次元クロスシステムは搭載しておらず、『次元力』も使用はできない。

第47話 　　狙われた『英雄の力』 　　

　　『サトシ兄妹の世界』 　　
「シューーーーーーーン……。」

バイエルン「……………」

龍斗「おい、おっさん!!ここがあんた達の世界なのかよ?」
めぐみ「あたし達の世界とは随分雰囲気が違うわね!!」

アルト「いや、違うな。バイエルン、いきなりどうしたんだ?

　　寄り道とは珍しいじゃないか。」

バイエルン「少し、妙な気配を感じてな…」

　　この力、もしかしたら……。」

ガルダ「それに向こうの方から気をいくつか感じるぜ…」

　　誰かが戦闘しているようだがな。」

アルト「この感じは…　どうやらレグルスの奴らみたいだな。」

ひめ「レグルスって、あのラー・カインって人の部下?」

誠司「行ってみるか?」

バイエルン「無論だ。この目で確かめてみる必要があるからな……。」

龍斗「そんじゃ、行ってみようぜ!!」

「シンシンシンシンシンシン!!!」

と、龍斗達はそう言いながらその場から飛び立っていった。そして……。
「new page」

サトシ「ピカチュウ!10万ボルト!!」

ピカチュウ『10万ボルト』

ラン「ピカチュウ!アイアンテールよ!!」

ピカチュウ（ラン）『はい!アイアンテール!!』

コナン「ルカリオ!はどうだん!!」

ルカリオ『はどうだん!!』

「!!!!!!!!!!!!!!」

レグルス兵☒「ガベベベベベベベベベベ!!!!!!」

レグルス兵☒「ぴやああああああああ!!!!!!」

レグルス兵☒「ぶぎよおおおおお!!!」
「チュドーーーーー!!!」

と、サトシたちはそれぞれの手持ちポケモンを召還すると、襲い掛かるレグルス兵を次々と撃退していく。

サトシ「こいつら、大した強さじゃないな!!」

ラン「うん!!このまま押し切ろう!!」

レグルス兵☒「ガキどもが・・・調子に乗りやがってええええ!!」

レグルス兵☒「マジで捻りつぶしてやるぜえええええ!!!」

レグルス兵の集団「トランザム!!!」

「バアアアアアアアアアアア!!!」

レグルス兵の集団(トランザム)「ぐひゃひゃひゃひゃ!!行くぜ行くぜ行くぜ」

ええええええええええ!!!!!!

「ババババババババババババババババ!!!」

ピカチュウ『ぐあああああ!!?』

ピカチュウ(ラン)『きやあああああ!!!?』

ルカリオ『くううううううう!!!?』

サトシ・ラン「ピカチュウ!!!」

コナン「ルカリオ!!!」

と、レグルス兵の集団はトランザムを発動させると、

超高速でピカチュウやルカリオにダメージを与えていった。「ne

page」

レグルス兵☒(トランザム)「みたかネズミ共が!!少し本気を出せば

ザッとこんなもんよ!!!」

レグルス兵☒(トランザム)「あん?あんなところに電車があるぜい

?」

バトルプリンセスライナー「……………」

と、レグルス兵の一人がバトルプリンセスライナーと呼ばれる

電車のようなものを発見した。

サトシ「あいつら・・・まさか!!!?」

ラン「バトルプリンセスライナーを!!!?」

セレナ「そのあなた!!! 珍獣じゃなくて、

『ポケモン』よ、ポ・ケ・モ・ン!!!」

カイト「まあ……見たことない奴からしたら珍しいかもな……」
ハグタン「はぐー」

と、アルトに気配を感じられたサトシの恋人であるセレナ達は
そう言いながら!! 姿を現した。「new page」

サトシ「セレナ!!!」

アキラ（デビルオンバーン）「それに、何だ奴らは!?!」

ラン「あ……あの人達……」

原初ピカチュウ『ええ…… 凄い波動を感じます!!』

コナン「おじさん達、誰なの!?!」

と、コナン達が龍斗達に気づいて警戒態勢を取ったその時……
めぐみ「うわあー！ー！ー！ー！っ!!! カワイイ!!!」

ひめ「ねーねー!! この子、なんていうの?」

ゆうこ「そう言えばさつき、ポケモンっていつてたわね……」
覚醒ピカチュウ「うわっ!?! 何だ!!!」

ブレイルカリオ「で……でも何か照れるぜ。」

ジン「お前達こそ、この辺では見ない顔だな。」

セレナ「待って!! ひよっとしてあの人達……」

コナン「別の次元からやってきた人達かもしれないね。」

龍斗「かもしれねえじゃなくて、その通りだよ!!!」
ゴウガ「とりあえず、俺達は怪しいもんじゃねえし、

さつきお前らが戦った連中とも関係ねえぜ!!!」

ガルダ「まあ、この二人は見るからに怪しいけどな……」

安心してくれ。」

アルト「フン……よく言われるがな。」

バイエルン「……………」

「スッ……」

コナン「えっ!!!!!!?」

と、バイエルンはその言いながらコナンの頭に右手をかざし、
何かを感じ始める。そして、コナンはまるで催眠術に

かかったかのような状態になり、動かなくなった。「new page」

「キーーーーーん……。」

コナン「……………」

サトシ「おい、お前!!!」

ラン「コナンに何するのよ!!!」

ブレイブルカリオ「この野郎!!!ギガスラッシュユ……。」

「ピシーーーーーん……。」

ブレイブルカリオ「!!!」

バイエルン「邪魔だ!!!」

と、ブレイブルカリオがバイエルンに襲い掛かろうとしたとき、

バイエルンはすかさず時間を止めた。

ラン「ルカリオが!?!」

カイト「んな!!!」

セレナ「まさか……時間を止めたの!?!」

アルト「まあ、ケガしたくなければ大人しくしている。」

ジン「何!!!」

バイエルン「成程……『英雄の力』。気配の正体はこれだったのか。

(もしかしたら、レグルスもこの力を狙って)」

と、バイエルンはコナンの記憶を読み取ると、

先程から感じていた妙な気配の正体がコナンの持つ

『英雄の力』である事が判明した様子だった。

そして、バイエルンがコナンの頭から手を遠ざけると、

コナンの催眠が解けて、元に戻った。「new page」

「シューーーーーーん……。」

カイト「名探偵!!!」

メイミ「大丈夫!!!」

セイラ「しっかりして!!」

コナン「あれ……?俺は一体……。」

めぐみ「ちよっとおじさん!!」

誠司「いきなり何てことすんだよ!!」

れおな「これじゃ余計に警戒されちゃうじゃない!!」

バイエルン「・・・少年よ、名は？」

コナン「・・・ベイカタウンのコナン、探偵だ。」

龍斗「たんてい？」

ゴウガ「あんなガキンチョがか？」

ガルダ「人を見かけで判断するな。」

あの少年、確かにタダものではなさそうだぞ。」

アルト「それにバイエルンの奴・・・自分から名前を聞くとは珍しいな。」

あの小僧に興味でも湧いてきたのか？」

バイエルン「コナンか。さて・・・まずは状況を整理して互いに

自己紹介をする必要があると思うが・・・いかがかな？」

龍斗「そうだな。俺は構わないぜ!!!」

めぐみ「あなた達もそれでいいかしら？」

ラン「うん!!!」

メイミ「わかったわ!!」

ジン「とりあえず話は聞いてやる。」「new page」

龍斗「そんじやまずは自己紹介からだな。俺は「白雪龍斗」!!」

ゴウガ「俺は「氷川ゴウガ」だ!!!」

ガルダ「俺の名は「鳳凰ガルダ」。」

めぐみ「あたしは愛野めぐみ! キュアラブリーよ!!!」

ひめ「あたしは白雪ひめ! キュアプリンセスだよ!!!」

ゆうこ「私は大森ゆうこ! キュアハニーです!!!」

いおな「私は氷川いおな! キュアフォーチュンよ!!!」

まりあ「わたしはいおなの姉の氷川まりあ! キュアテンダーです!!!」

!!!

誠司「俺は相良誠二!!」

こよみ「私は愛野こよみ・・・キュアハピネスルーク。」

まりな「あたしは氷川まりな! キュアテンダーXよ!!!」

ジン「お前達・・・」

セレナ「プリキュアなの？」

めぐみ「うん!!あたし達、『ハピネスチャージプリキュア』っていうの!!」

ラン『『ハピネスチャージプリキュア』かあ〜!!!』

ハグタン「はぐ〜プリキュア」

こよみ「でも、あたしはかつては『アンラブリー』って呼ばれてたけど。」

まりな「あたしは幻影帝国によって、そこにいるまりあ…

キュアテンダーのデータから作られたプリキュアだけだね。」

カイト「それじゃ、元は敵同士だったのか。」

龍斗「そこんところは話せば長くなるからよ。今度説明してやるぜ!!」

ゴウガ「次はそっちの番だぜ!!」「new page」

サトシ「ああ!!俺はマサラタウンのサトシ!!」

ラン「あたしは妹のランです!!」

セレナ「私はセレナ!!そして、この子がハグタン!!」

ハグタン「はぐ〜」

カイト「俺の名はカイトだ。よろしくな!!」

メイミ「私はメイミ!!」

セイラ「あたしはセイラ。」

ジン「ジンだ…。」

アキラ「俺の名はアキラ。」

サトシ「そんでもって、こいつが俺の相棒のピカチュウ!!」

ピカチュウ『よろしく!!』

ラン「この子があたしのパートナーの女の子のピカチュウ!!」

ピカチュウ（ラン）『よ……よろしくお願ひします!!』

コナン「そして、俺の相棒のルカリオ…え?」

ブレイブルカリオ「…:…:…:…:…」

メイミ「ちよつとおじさん!!ルカリオがまだ止まりっぱなしじゃない!!」

セレナ「早く元に戻しなさいよ!!!!!!」

バイエルン「これは失礼をした。では…。」

「ピシーーーーーーーン!!」

ブレイブルカリオ『あれ…?』

と、バイエルンはセレナ達に促されて時間を止めていた

ブレイブルカリオを元に戻した。

コナン「ルカリオ、大丈夫か?」

ブレイブルカリオ『ああ…けど時間を止められたなんて初めてだったな。』

バイエルン「そして私の名はバイエルン。こちらが相棒のアルトだ。」

アルト「フン…別によろしくしなくても構わないがな。」

カイト「(おいおい…何だこのアルトって奴はよ…)(」

メイミ「(感じ悪っ!!!)」

めぐみ「ええつと…次にこれまでの状況だけど…」

バイエルン「それは私とコナンとで擦り合わせよう…良いかな?」

コナン「わかった。それじゃ、まずは僕らの世界について話そうかな。」

と、コナンとバイエルンはこれまでの状況や

互いの世界の事について、話し始めた。「new page」

バイエルン「成程…。」

コナン「だいたいこんな所かな。」

サトシ「話を整理すると、その『次元大戦の世界』という次元でさっきのレグルス帝国軍という組織の親玉が

『聖なる最終戦争(ラー・アルマゲドン)』っていう

大戦争を引き起こして、他の次元をも攻めてきている…」

セレナ「そして、その次元の破壊神ビルス様の依頼で

龍斗君達が今、その次元に向かう途中で

そこのバイエルンって人がコナンの『英雄の力』を

感じ取ってこの世界に来た…。」

ラン「そして、さっきの兵隊さん達もコナンの『英雄の力』を狙っ

てる…。」

メイミ「という訳ね!!」

ゴウガ「ああ、そんなところだ!!!」

龍斗「しかし驚いたぜ… この次元にもビルス様が存在しているなんてよ!!」

カイト「おいおい… あんなとんでもねえ神様が

他の次元に何人もいんのかよ…。」

めぐみ「あたし達もこの次元にいるのよね…。」

ひめ「何か変な感じね…。」

セイラ「正確にはことは別の平行世界にだけどね。」

ジン「龍斗達がサイヤ人だったのも驚いたがな。」

龍斗「へへっ… まあな!!!」

ゴウガ「俺もそのポケモン!つてのにも驚いたぜ。

俺達の世界にはいないからな!!」

アキラ「俺達がこうして出会ったのも何かの運命かもしれないな。ガルダ「さてと、バイエルンさんよ。話がついたところで

これからどうするつもりだ?」

バイエルン「単刀直入に言おう。少年… いや、コナンよ…

我々と共に来る気はないかね?」「new page」

コナン「えっ!!!」

ラン「コナンが…?」

龍斗「おいおい、おっさん… いくら何でもそこまで巻き込む気か?」

ゴウガ「俺達だけじゃ、役不足だって言いたいのかよ!」

アルト「馬鹿共が… 話を最後まで聞け。いいか?

こいつらはもうレグルスに手を出しているうえに、

このガキが持つ『英雄の力』とかいう奴を

狙っているかもしれないんだぞ?」

ジン「まあ、わからん話ではないがな。だが…。」

アキラ「またコナンを狙ってくるというのなら、

返り討ちにしてやるまでだ。」

は…。」

カイト「『例の力』?」

メイミ「『英雄の力』の事ね!!」

アキラ「やはりこいつ等… コナンを狙っていたのか!!」

サトシ「だったら、俺達が相手してやる!!」

めぐみ「あたし達も手伝うよ!!!」

誠司「どのみちレグルスとはこれから戦うことになるしな!!」

ジン「それに相手は一人だけだ。」

龍斗「速攻で片付けてやる!!いくぜ、ゴウガ、ガルダ!!」

ゴウガ「おう!!」

ガルダ「いいだろう!!」

ハグタン「はぐー」

バイエルン「フツ… それには及ばない。」

「ピシーーーーー」

龍斗「……………」

めぐみ「……………」

ガルダ「……………」

と、バイエルンはそう言いながらサトシ達に

加勢しようとした龍斗達の時間を停止させた。「new page」

ツアイト「むっ… !? 奴等は確か、『次元の監視者(ダイダロス・ア

イ)』か。」

セレナ「ちよつとあなた!!!!」

サトシ「どういうつもりだ!?!」

アルト「おいおい… 返り討ちにしてやるんだろ? 『お前達だけ』で

な。

だったら、こいつらの助けなど必要ないよな?

無論、僕とバイエルンも加勢する気など微塵も無い。」

ジン「何だと…?」

バイエルン「そう言う事だ。少年よ、私に見せてみる… お前の力

を。」

コナン「… わかった。行こう、サトシ兄ちゃん!みんな!!」

サトシ「ああ!!行くぞピカチュウ!!!」
覚醒ピカチュウ『うん!!』

ラン「あたし達も行くよ!!」
原初ピカチュウ『はい!!』

カイト「そんじや俺も!!ゾロアーク!!」

ゾロアーク「うん!!」

セレナ「フローラ!!!」

フローラ「はい!!!」

ジン「ライチュウ!!!」

ライチュウ「おう!!!」

メイミ「メタちゃん!!!」

メタモン「はい!!!」

と、サトシ達はそれぞれの手持ちポケモンを召喚し、

戦闘態勢をとった。そして・・・「new page」

コナン「よし・・・『ネオ・ブレイブブレスレット』!!」

コナンはネオ・ブレイブブレスレットを腕につける。その後、

「ピッ!!」

電子音『マジンガーZ』

コナン「いくぞルカリオ!!マジン!!」

ルカリオ『ゴー!!』

コナンはマジンガーZのマークを押す。

すると近くの池が2つに割れると中から

『マジンガーZアーマー』が出てくると、

ルカリオ『パイルダー・オン!!』

そしてマジンガーZアーマーを装着して『マジンルカリオ』になる

のだった!!

コナン「いくぞ!!」

マジンルカリオ『ああ!!』

アルト「ほう・・・あれが。」

バイエルン「あれが『英雄の力』か。素晴らしい・・・お手並み拝見
と行こう。」

ツアイト「成程……確かに大したものだな。さて、あの力が
ラー・カイン様の献上品に相応しいものかどうか、
試してみるか。フン!!」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーン!!!」

ドフラミンゴ「フッフッフツツ……。」

戸愚呂(弟)「……………」

志々雄「……………」

ウルキオラ「……………」

悪魔將軍「……………」

と、ツアイトはそう言いながら、『オーロラカーテン』を発生させて、
ドフラミンゴ・戸愚呂(弟)・志々雄真実・
ウルキオラシファア・悪魔將軍を召還した。

アルト「おい……バイエルン、あれは……。」

バイエルン「ああ……『門矢士』と同じ能力か。」

セレナ「な……何なの!!!?」

カイト「おいおい……『ジャンプの敵キャラ』を召還しやがったの
か……」

サトシ「誰が相手でも俺達負けねえ!!」

ラン「うん!!!」

コナン「行こう、みんな!!!!」

レイス「という訳で、『サトシ兄妹の世界』へと訪れたバイエルン君
達。

そして、同じく別の並行次元の存在である龍斗君達と

『英雄の力』を持つコナン君やサトシ君達が

運命の出会いを果たすのであった。

その直後、コナン君が持つ『英雄の力』を狙って、

新たに『四聖士(パラディーン)』の一人となった

親衛隊(ホワイト・ナイツ)ツアイトも来訪し、

戦闘に入っていくのであった。そのツアイトの実力とは……

果たして、彼らは見事にツアイトを撃退し、

『英雄の力』を守り切ることができるのであるのか…

それでは次回も…

ジュナイパー「刮目せよ!!!」

レイス「…君は何者かな？」

第47話　　狙われた『英雄の力』　　（完）

悪魔將軍・戸愚呂(弟)「ぐおおおおおおおおおおお!!!」
「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、幽助に変身したメタモンはすかさず『ショットガン』を放ち、
悪魔將軍と戸愚呂を吹き飛ばした。

メイミ「どう?あたしのメタちゃんは!!」

悪魔將軍「くっ!?油断したわ...」

戸愚呂(80%)「暗黒武術会で戦った時より、遥かに強い... だが
!!」

「シューーーーーー...」

戸愚呂(100%)「100%中の100%!!!」

と、戸愚呂は更に筋肉を膨張させて100%の状態となった。

幽助(メタモン)「そんじゃ、第2ラウンドだ!!!」

戸愚呂(100%)「行くぞ浦飯... うおおお!!!」
「ゴオオオオオオオオ!!!」

と、戸愚呂は素晴らしいながら幽助(メタモン)を攻撃するが...

幽助(メタモン)「遅いぜ... オラアアアアアアアアアア!!!」
「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

戸愚呂(100%)「こおおおおおおお!!!」
と、幽助(メタモン)はすかさずカウンターで
!!!?」

パンチの嵐を叩きこみ吹き飛ばすと...

幽助(メタモン)「喰らいやがれ... 『靈丸(レイガン)』」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアア!!!」

戸愚呂(100%)「う... 浦飯イイイイイイイイ!!!」
「ドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、靈丸の直撃を受けた戸愚呂は大爆発を起こし、消滅したので
あった。「new page」

カイト「相変わらずのチートだな...」
ゾロアークトリニティ「俺達... 出番あるのかな...」

メイミ「メタちゃん!!次行くわよ!!」

幽助(メタモン)「おう!!!へんしん!!!」

「シューーーーーー...」

覚醒ピカチュウ『うん!!アイアンテール』

リザードン『わかった!!エアスラッシュ』

ジユカイン『おう!!『三刀流千八煩惱鳳!!』』

「ガキガキガキガキガキガキガキ!!!」

と、ピカチュウたちと志々雄はそう言いながら

凄まじい斬撃の応酬を繰り返して行く。

志々雄「遅えよ... 壺の秘剣(いちのひけん) 焰霊(ほむらだま)!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ピカチュウ・リザードン・ジユカイン『うわあああああああああ

あ!!!』

と、志々雄は『壺の秘剣(いちのひけん) 焰霊(ほむらだま)』を

発動させると、ピカチュウたちに直撃して吹き飛ばした。

志々雄「どうしたあ?そんなもんかよ...」

サトシ「あの包帯男... 強いな。」

ラン「次はあたしよ!!ピカチュウ!!バシャーモ!!お願い!!」

原初ピカチュウ『はい!!アイアンテール!!』

バシャーモ「任せろ、ランちゃん!!」

『肩ロース(バース・コート)!!腰肉(ロンジユ)!!

後バラ肉(タンドロン)!!『腹肉(フランシエ)!!

上部もも肉(カジ)!!尾肉(クー)!!

もも肉(キュイソー)!!すね肉(ジャレ)!!』

『仔牛肉(ヴォー) ショット!!!』

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、原初ピカチュウはアイアンテールで攻撃し、

バシャーモは志々雄の各部位に素早く強烈な蹴りを叩き込むが...

志々雄「効かねえな!! 壺の秘剣(いちのひけん) 紅蓮腕(ぐれんかい

な)!!」

「ドカアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

原初ピカチュウ「きゃあああああああ!!!」

バシャーモ「ぐおおおおおおおおお!!!?」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、2体の攻撃は志々雄には、ほとんど効いておらず
逆に志々雄に手でつかまされると、志々雄の

『式の秘剣 (へのひけん) 紅蓮腕 (ぐれんかいな)』で

ダメージを負い、吹き飛ばされた。「new page」

志々雄「ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

ラン「ピカチュウ!! バシャーモ!!」

サトシ「よし... こうなれば!! みんな... 全力で行くぞ!!!」

「シューーーーーーシューーン...」

覚醒ピカチュウΩ『わかった!!』

ドラゴニツクリザードン『おう!!』

ジユカイン『俺はこのままだが任せろ!!』

と、ピカチュウは『覚醒ピカチュウΩ』に、

リザードンは『ドラゴニツクリザードン』に進化した。

バシャーモ『ランちゃん! 俺も一気に決めるぞ!』

ラン「わかったわ!」

ランはマックスZリングのキーストーンに手をふれる。

ラン「輝く未来を抱きしめて! バシャーモ! メガシンカ」

ランがキーストーンにふれるとバシャーモのメガストーンが反応するのだった。

メガバシャーモ『ウオオオオオオオオ!!! ランちゃんの為なら

俺は鬼でも悪魔にせもなるぜええええええ!!!』

ラン「次はピカチュウ!! 絆変化よ!!!」

原初ピカチュウ『はい!!』

「パアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ランは光に包まれると服が変化する。!!!」

さらにピカチュウの周りには白い桜吹雪が舞う。

ランの服装はアンジュがヴィルキスに乗っている時のパイロット
スーツに変わり、

ピカチュウの体の色は白色になり、さらにギザギザ模様と

背中の様子は青色になって、さらに頭には女神像のティアラをかぶ
るのだった。

そして最後にピカチュウ背中に天使の羽が現れて
二人の後ろにアンジュとヴィルキスの幻影が現れる。

ヴィルキスピカチュウ『白きパラメイル?ヴィルキスピカチュウ
!!』

と、原初ピカチュウは絆変化で『ヴィルキスピカチュウ』に
バシャーモは『メガバシャーモ』にメガシンカするのだった。「ne
w page」

ラン「バシャーモ!マサラ修練場の特訓を思い出して!!!!」

メガバシャーモ『マサラ修練場……』

メガバシャーモはマサラ修練場での地獄の特訓に及ぶ壮絶な日々
を思い返す。

メガバシャーモ『何でおれが あんな目にイイくく!!!』

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、その怒りで全身に炎を纏い

メガバシャーモ『焼け焦げろ あんな思い出!!!』

『地獄の思い出(ヘル・メモリーズ)』

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

志々雄「ぐううううううううううう!!!」

と、メガバシャーモの怒りのブレイズキックが

志々雄の懐に決まり、大ダメージを与える。そして…

ラン「まだまだ行くよバシャーモ!!!!」

メガバシャーモ『おう!』

ラン「バシャーモ!けたぐり!!」

メガバシャーモ『肩ロース(バース・コート)!! 腰肉(ロンジユ)

!!

後バラ肉(タンドロン)!!」

志々雄「こおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ラン「にどげり。さらにもう一度けたぐり」

メガバシャーモ『腹肉(フランシエ)!!上部もも肉(カジ)!!

尾肉(クー)!!もも肉(キュイソー)!!すね肉(ジャ

レ)!!』

大爆発を起こし、消滅していった。

ラン「やったー！ー！ー！ー！！！！」

サトシ「ふう……何とかなったな！！！！」

セレナ「サトシ、お疲れ様！！！！」

ジン「さすがは俺の最大のライバル……援護は必要なかったな。」

カイト「さてと……名探偵はどうなってるかなと。」「new page」

コナン「ルカリオ!! ブレストファイヤー!!!」

マジネルカリオ『ブレストファイヤー!!!!』

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ツアイト「ぬうん!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドカー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!!!」

と、マジネルカリオのブレストファイヤーと

ツアイトのエネルギー波がぶつかり合うと、

その場で爆発が起き、両者が吹き飛ばされる。

コナン「ルカリオ! 大丈夫か!？」

マジネルカリオ『ああ。けどアイツ……とんでもなく強いぜ。』

ただの気功波でブレストファイヤーをあっさりと

相殺しやがった!!』

コナン「でも、他の敵はみんな倒したみたいだし、残るはアイツだけだ!!」

このまま一気に押し切ってやる!! いくぞルカリオ!!」

マジネルカリオ『ああ!!』

コナン「マジン!!」

マジネルカリオ『ゴー!!』

コナンとマジネルカリオはシンクロすると周りに波動の渦が巻き起こる。

「シュー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー……。」

マジネルカリオカイザー『………』

そしてマジネルカリオカイザーに絆変化するのだった。

サトシ「良し!!!!!!」

ラン「魔神皇薙、キターーーーーー!!!!!!!!!!」
ハグタン「はぐー」

アルト「ほう?あれがあの小僧の本気か...悪くはないな。」
バイエルン「ここまででは順調のようだな。だが...問題はここからだ。」

ツアイト「フツ...成程。確かに大した力だ...

これならばラー・カイン様も一目置かれる事だろう。
ならば俺も...良いものを見せてやる!!」

「シューーーーーー.....」。「カチーーーーー.....!!!!!!」

ドフラミンゴ「.....」。

ウルキオラ「.....」。

戸愚呂(弟)「.....」。

悪魔將軍「.....」。

志々雄「.....」。

と、ツアイトは時間を戻して、倒されたはずのドフラミンゴ達を蘇らせた。「new page」

デビルオンバーン「何だ!!!!!!」

メイミ「そ...そんな!!!!!!」

カイト「おいおい...どんなマジックを使ったんだ?あいつ」

ジン「まさか...時間を戻したというのか!?!」

サトシ「何度蘇っても同じだ!!また倒してやる!!」

ツアイト「そうか?ならば...これを見ても同じセリフが言えるかな?」

うおおおおおおおおおおお!!!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!!!!」

セレナ「きゃああああああああ!!!!!!」

セイラ「な...何よこれ!!!!!!」

と、ツアイトはそう言いながらパワーを高めると、
周辺が揺れ動きながら次々と大地や建物が崩壊していく。

そして、ツアイトは禍々しい紫色のオーラを纏った状態で姿を現した。

「シューーーーーー?!?」

ツアイト(?!?)「フッフ……。」

サトシ「なっ!!!」

カイト「お……!!!おい……何だありや……?」

ヴィルキスピカチュウ『あ……あの波動は……?』

覚醒ピカチュウΩ『ま……まさか!!!』

マジナルカリオカイザー『う……嘘だろおい!?』

コナン『『破壊神』の……力!!!』

アルト「ご名答だ、探偵小傭人!」

バイエルン「奴はかつて『破壊神候補』だった男だ。

いや、あれ程の力は最早、候補とは呼べんな。

『破壊神ツアイト』と呼称しても差し支えなからう。」

ツアイト(破壊神)「解説ご苦労、次元の監視者(ダイダロス・アイ)よ。」

だが……これで驚くのはまだ早いぞ? フン!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ドフラミンゴ(破壊)「フッフッフッフッフッフッフ!!!」

ウルキオラ(破壊)「フン……。」

戸愚呂(破壊)「うおおおおおおおおお!!!」

悪魔将軍(破壊)「ハハハハハハハハハハハ!!!」

志々雄(破壊)「ククククククククククク!!!」

と、ツアイトが右手を前方にかざすと、!!!

復活させたドフラミンゴ達までもが同じ禍々しい紫色の

破壊エネルギーを纏ったのであった。「new page」

カイト「嘘だろおとおおとおおとおおお!!!」

メイミ「えええええええええええええええええ!!!」

ジン「ど……どうなってやがる!!!」

デビルオンバーン「あれではまるで、破壊神が6人いるようなものだな。」

ラン「でも…戦わなきゃ、この世界は守れないもん!!」
サトシ「ランの言う通りだ!!例え破壊神が

相手だろうと引くわけにはいかない!!」

コナン「うん!!行こうみんな!!」

マジンルカリオカイザー「原子ひとつ残らず燃え尽きろ!!」

ファイヤー!!!ブラスタアアアアアツ!!」

覚醒ピカチュウΩ『10万ボルトΩ!!!』

ドラゴニックリザードン『エターナルフレイム』

ジユカイン『三刀流千八十煩惱鳳!!』

ヤンチャム『スーパーストカミガゼアタック!!』

覚醒ライチュウ『破壊光線!!』

キン肉マン（メタモン）『キン肉ビーム!!!』

ゾロアークトリニティ『ナイトバースト!!!』

デビルオンバーン「りゅうのはどう（デビルビーム）!!」

ラン「いくよ!!これが私達のゼクリヨク!!」

ヴィルキスピカチュウU『デイスコード・フェイザー!!』

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドドドドドドドドドドドッカーーーーーー!!!」

ジン「やったか!!!」

セレナ「そうだといいけど…。」

と、ピカチュウ達はそれぞれの必殺技を放った後、

ヴィルキスピカチュウも『ウリエルモード』へと変化し、

Z技の『デイスコード・フェイザー』を発動させて、

ツアイトやドフラミンゴ達に直撃させた。だが…「new pag

e」

ドフラミンゴ（破壊）「……………」

ウルキオラ（破壊）「……………」

戸愚呂（破壊）「……………」

悪魔將軍（破壊）「……………」

志々雄（破壊）「……………」

ツアイト（破壊神）「残念だったな。」

と、爆発で起きた砂ぼこりからほぼ無傷でツアイト達が姿を現した。

ラン「そ…そんな!!!」

サトシ「俺達の力が…通用しない!!!?」

コナン「まさか…あの纏っている破壊の力で

俺達の攻撃を『破壊』したのかよ!」

アルト「ご名答だ探偵小僧。まあ…あの力を破るには単純に

破壊神と互角…あるいはそれ以上の力が必要になるがな。」

バイエルン「今の君達にそれだけの力が備わっているかな?

では我々は楽しみに見物させてもらおう…健闘を祈る。

行くぞ、アルト!!」

アルト「了解!!!」

「シユンシユン!!!」

と、アルトとバイエルンはそう言いながらその場から姿を消した。

「new page」

ラン「は…破壊神と同じくらい力なんて…。」

サトシ「あるわけねえだろ…そんなもん。」

コナン「くそつ…くそおおおおお!!!」

ツアイト（破壊神）「フン…先程までの威勢はどうした?

俺が手を下すまでもないな。行けえ!!!」

ウルキオラ（破壊）「終わりだ…黒虚閃（セロ・オスキュラス）!!」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ウルキオラは破壊の力でこれまでとは比較対象にならない程の威力となった

黒虚閃（セロ・オスキュラス）をコナン達に向けて放った。

セイラ「あ…ああ…。」

カイト「や…やべえ…。」

ラン「い…嫌だよ?。」

サトシ「くつ…。」

!!!!!!」

コナン「こ…ここまでなのかよ!!!」

と、絶望するコナン達に黒虚閃（ゼロ・オスキュラス）が直撃しそうになったその時…「new page」

「シユン!!!」

龍斗「どおりやああああああああ!!!」

「バシユーーーーー!!!!!!」

ウルキオラ（破壊）「!!!」

と、そこへ突如、時間を止められていたはずの龍斗が

コナン達の前に登場し、黒虚閃（ゼロ・オスキュラス）を弾き飛ばした。

ジン「お…お前!!!!!!」

セレナ「龍斗君!!!!!!」

サトシ「助かったぜ!!!!!!」

コナン「ありがとう!! 龍斗兄ちゃん!!!」

「シユンシユン!!」

ゴウガ「俺達も忘れてもらっちゃ困るぜ!!!」

ガルダ「そうだな。」

龍斗「へへっ… そんじや動けるようになったところでは、

ひと暴れしてやるか!!! ハアアアアアアアア!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「まずはこっからだな!!!」

ゴウガ（超サイヤ人ブルー）「そうだな!!!」

ガルダ（超サイヤ人ブルー）「いいだろう!!!」

と、龍斗達3人はそう言いながら超サイヤ人ブルーに変身した。

メイミ「す…… 凄い!!!」

デビルオンバーン「あれが超サイヤ人ブルーか!!!」

コナン「でも、龍斗兄ちゃん… 気を付けて!!!」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「おう! 任せろコナン!!!」

相手にとって不足はねえぜ!!!」

ツアイト（破壊神）「成程… あれが破壊神ビルスが呼んだ

サイヤ人達の力か。面白い… 来い!!!」

ジュナイパー「この本によれば、ついにレグルス帝国軍との本格的な戦闘に巻き込まれてしまった『サトシ兄妹の世界』」

始めは順調だったものの、ツアイトや他の敵達がまさかの破壊神化を果たし、一気に大ピンチとなったコナン達を龍斗達が救い、反撃に転じようとするのであつた。

果たして、この戦いの行方は…
そして、当初はバイエルンの誘いを拒否したコナン達であつたが、

この戦闘がきっかけで芽生えた『ある思い』により、龍斗達と共に『次元大戦の世界』へと旅立ち、
グラン・ゲインズへ加入する事となる…
おつと!!ついしやべりすぎてしまいました。
レイス殿が主である桑田進之介を次元の狭間から救いに行った為、急遽代役でこの私、ジュナイパーがナレーシヨンを務めさせていただきました。
それでは次回も…刮目せよ!!!!

第48話　　く　新たな戦いの幕開け!!そして…　　く　(完)

第49話

旅立ち

龍斗（超サイヤ人ブルー）「さてと、行くか!!!」

ゴウガ（超サイヤ人ブルー）「おう!!」

ガルダ（超サイヤ人ブルー）「いいだろう!!」

「シユンシユン!!」

めぐみ「ちよつと龍斗!!」

ひめ「あたし達も忘れないですよ!!」

ゴウガ（超サイヤ人ブルー）「何だよ、お前等も動けんのか。」

ゆうこ「そうみたい。」

いおな「あの人が時間停止を解除していったみたいだけど。」

ガルダ（超サイヤ人ブルー）「後はどうした?」

いおな「姉さん達はサトシ君達の護衛に回ってるわ。」

「だから安心して思う存分戦えるわよ!!」

めぐみ「みんな、変身よ!!」

一同「かわるんるん!」

「ニ」プリキュア!くるりんミラーチェンジ!「ニ」

キュアラブリー「世界に広がるビッグな愛!キュアラブリー!!」

キュアプリンセス「天空に舞う青き風!キュアプリンセス!!」

キュアハニー「大地に実る命の光!キュアハニー!!」

キュアフォーチュン「夜空に煌めく希望の星!キュアフォーチュン

!!」

一同「ハピネス注入!幸せチャージ!ハピネスチャージプリキュア

!!」

と、めぐみ達はそれぞれ変身を果たした。

ラン「プリキュアだー!ー!ー!ー!っ!!!」

ハグタン「はぐー」

誠司「驚くのはまだ早いぜ。」

セレナ「えっ!?!」

ラブリー・プリンセス・ハニー・フォーチュン

「プリキュア!くるりんミラーチェンジ!!」

「ハピネスチャージプリキュア！イリセントフォーム!!」

「パアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

キュアラブリーIF 「……………!!!」

キュアプリンセスIF 「……………」

キュアハニーIF 「……………」

キュアフォーチュンIF 「……………」

と、キュアラブリー達は『イノセントフォーム』となった。

メイミ「姿が変わったわ!!」

カイト「ポケモンでいうところのメガシンカだな。」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「行くくぜえええええええええええええええええ!!!」

一同「おう!!（うん!!）」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、龍斗とキュアラブリー達は変身を終わると、

ツアイト達に再度、向かっていった。「new page」

く 上空 く

アルト「結局、あいつ等にも戦わせるのか。」

バイエルン「ああ。ここら辺が限界と違ってな。

だがまあ、おかげで良いものを見ることができた。

後は鳳凰ガルダ達が何とかするだろう。」

アルト「見ものだな。あいつ等がどういった戦い方をするのか。

そういえばバイエルン、一つ聞きたいんだが、

あの探偵小僧にこだわった理由は何だ？

確かに戦力にはなるだろうが、

まだ孫悟空やメリオダスの方が上だろう?」

バイエルン「あの少年が秘めている大きな可能性を開花させたく

なった…」

というだけでは不服か?」

アルト「: いや、それさえ聞ければ充分さ。(やはり: 何かを隠しているな。

あの時、『奴』が言っていたバイエルンの『野心』と

何か関係があるのか?」

吹き飛ばされた。その一方…「new page」
ラブリーIF・ハニーIF・フォーチュンIF「きやあああああ
あああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
悪魔將軍（破壊）「ハハハハハハ!!!この程度か？」
ウルキオラ（破壊）「ゴミが…。」

と、キュアラブリー達も破壊の力を得た悪魔將軍やウルキオラと
戦っていたが、押され気味の展開となっていた。

キュアフォーチュンIF「や…や…やっぱり強いわね…。」
キュアハニーIF「破壊の力を持つているから、
ただの攻撃も格段に威力があがってるわ!!」

キュアラブリーIF「でも…負けられない!!ラブリー・パンチン
グパンチ!!!」

キュアハニーIF「ハニー・スタンプ!!!」
キュアフォーチュンIF「フォーチュン・シェイキングスター!!!」
「ドドドドドドドドドドドドド!!!」

悪魔將軍（破壊）「甘いわ!!!『地獄のメリー・ゴーラウンド』
ウルキオラ（破壊）『ラティーゴ』」

「ドガガガガガガガガガガガガガガガ!!!」
キュアハニーIF「くううううううううう!!!?」
キュアフォーチュンIF「こ…このままじゃ…!」
キュアラブリーIF「諦めたらダメ!!例え破壊の力だろうと、

超えていかなきゃ世界は守れないよ!!」
と、攻撃をどうにか踏ん張っているキュアラブリー達であつた
が…

ドフラミンゴ（破壊）「弾糸（タマイト）!!」
「ドドドドドドドドドドドドドドド!!!」
ラブリーIF・ハニーIF・フォーチュンIF「がああああああ
あああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」
と、別の方向からドフラミンゴが弾糸（タマイト）と呼ばれる

糸の弾丸を放ち、キュアラブリー達に直撃させて吹き飛ばした。
ウルキオラ（破壊）「余計な手出しを…。」

ドフラミンゴ（破壊）「フツフツフツ… そう言うな。」

「楽しそうだから俺も混ぜろよおい…。」

悪魔將軍（破壊）「フン!!好きにするが良い。」

キュアハニーIF「くっ!?このままじゃあ…。」

キュアラブリーIF「それでも!!!」

キュアフォーチュンIF「龍斗とガルダは…?」「new page」

志々雄（破壊）「壱の秘剣（いちのひけん）焔霊（ほむらだま）!!!」

ガルダ（超サイヤ人ブルー）「蒼剣炎波（ブルーブレイムバーン）!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドカー…!!!」

と、志々雄とガルダの戦いも始まり、激しい斬撃の応酬を繰り広げていた。

志々雄（破壊）「お前も炎か… やるじゃねえか。」

ガルダ（超サイヤ人ブルー）「あんたもな。破壊の力があるとはいえ、

ここまでやるなんてな。けど、他の奴等

が

ヤバいみたいだからケリをつけさせて

もらうぜ。

「ハアアアアアアアアアア!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ガルダはそう言いながら気を高めると、!!!」

超サイヤ人ブルーから『超サイヤ人4』になり、

更にブルーを合わせ『超サイヤ人4ブルー』に進化した。

「シユンシユンシユンシユンシユン…。」

ガルダ（超サイヤ人4ブルー）「行くぜ!!!」

ジン「おいおい…。」

サトシ「もう、どうなってるんだよあれ…。」

セレナ「この世界を滅ぼすつもりなのかしら、あの人……」
ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「心配すんな!! そうならねえように努力するからよ。」

お守りは任せたぜ4人共!!」

キュアテンダー「ええ!!!」

キュアテンダーX「任せて!!」

キュアハピネスルーク「思いきりやっちゃいなさい!!」

誠司「ほどほどにやれよガルダ!!」

志々雄(破壊)「面白え……『終の秘剣(ついのひけん)火産霊神(カグツチ)』」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、志々雄はそう言いながら最強技である

『終の秘剣(ついのひけん)火産霊神(カグツチ)』を

発動させてガルダを攻撃するが……

ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「これで終わりだ!!」

『不死鳥天皇大砲(フェニックスカイザーキャ

ノン)!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、対するガルダも『不死鳥天皇大砲(フェニックスカイザーキャ

ノン)』と

呼ばれる特大の気攻波を至近距離で放った。そして……

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

志々雄(破壊)「ぐわああああああ!!!ば……馬鹿な……。」

「ドドドドドドドドドドツカー……」

と、『終の秘剣(ついのひけん)火産霊神(カグツチ)』を一瞬で粉

砕された

志々雄はそのまま『不死鳥天皇大砲(フェニックスカイザーキャノン)』の

直撃を受けて大爆発を起こし、燃え尽きていった。

キュアテンダー「よし!!!ほうちゃん偉い!!!」

キュアテンダーX「さすがね。」

ツアイト（破壊神）「ほう…？どうやらただのサルではないようだな。」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「ったりめえだ!!破壊神代行を舐めんじやねえ!!!」

今度はこっちから行くぜ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、龍斗は素晴らしいながらパワーを高めると、必殺技の発射態勢をとる。

ツアイト（破壊神）「フン…無駄なあがきを。」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「余裕ぶっこいてられるのも今のうちだぜ!!」

喰らえ!!ブルーファイナルブラスター!!!」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、龍斗は最強技の一つであるブルーファイナルブラスターを

ツアイトに向けて放った。だが…「new page」

ラン「これで決まって!!!」

コナン「!!!ま…まさか!!!龍斗兄ちゃん!!!駄目だ!!!」

ツアイト（破壊神）「もう遅い…ヌウン!!!」

「シューーーーーーーーシューーン…。」

と、ツアイトは自身の前方にオーロラカーテンを展開し、

ブルーファイナルブラスターを転移させると…

「シューーーーーーーーシューーン…。」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「な…何?ぐわああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ツアイトはその後、龍斗の背後にオーロラカーテンを展開させて、

中から転移させたブルーファイナルブラスターを発射させると、

そのまま龍斗に直撃させた。

ジン「龍斗!!!」

セイラ「しづかりして!!!!」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「ううう……。」

ツアイト（破壊神）「フフフフフフフ……。」

「ブウウウウウウウウ……！！！！」

と、その後ツアイトは右手にエネルギーを溜めて、

破壊エネルギー弾を形成した。

ラン「ああ！！！！」

サトシ「逃げろ、龍斗！！！！」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「や……やべえかなこりや……。」

ツアイト（破壊神）「死ね……でやああああああああ！！！！」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

と、ツアイトはそう言いながら破壊エネルギー弾を

龍斗に向けて放ち、直撃しそうになったその時……「new page

e」

「バリバリバリバリバリ！！！！！！」

龍斗（超サイヤ人ブルー）「……えっ!?」

マジンルカリオカイザー「くううううううう……。」

コナン「ううううううう……。」

ラン「コナン！！！！?」

カイト「名探偵！！！！」

メイミ「いくら何でも無茶すぎるわよ……逃げて！！！！」

マジンルカリオカイザー「へへ……助けられっぱなしなのも申し訳

ないからな。」

コナン「ああ……だから今度は俺達が龍斗兄ちゃんを助ける番だ

！！

ツアイト（破壊神）「ほう……見上げた心構えだな小僧……だが！！」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

コナン・マジンルカリオカイザー「うわああああああああああ

！！！！

と、ツアイトは更にパワーを上げると、破壊エネルギー弾が

コナンとマジンカイザールカリオを飲み込もうとしていた。

サトシ「ああああああああ！！！！」

ラン「コナー………」

龍斗(超サイヤ人ブルー)「逃げろ………!! お前の力じゃ

そいつは!!!」

マジンルカリオカイザー『ま……負けてたまるか……!!!!!!』

コナン「お……俺は……ベイカタウンのコナン……

探偵だああああああああああ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「シュー………」

ツアイト(破壊神)「何!!!」

と、追いつめられたコナンとマジンカイザールカリオは

そう叫ぶと、2人の体から突如、眩い光が発生し、

ツアイトの破壊エネルギー弾をかき消すと、

白銀色のオーラに包まれた姿に変貌した。「new page」

コナン(?)「……………」

マジンルカリオカイザー(?)「……………」

ラン「コ……コナン……?」

サトシ「あの姿は……まさか!?」

龍斗(超サイヤ人ブルー)「み……身勝手の極意じゃねえか!?」

コナン(身勝手の極意)「またこの姿になるなんて、思ってもみな

かったよ。」

マジンルカリオカイザー(身勝手の極意)「ああ……だがこれなら

!!!!!!」

ツアイト(破壊神)「まさか、お前がその力を発動させるとはな……

だが!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!」

コナン(身勝手の極意)「ルカリオ!!!!!!」

マジンルカリオカイザー(身勝手の極意)「ああ!!!!!!」

「ババババババババババババババババ!!!!!!」

「ドゴンドゴンドゴンドゴンドゴ………!!!!!!」

と、ツアイトはそう言いながら向けて破壊エネルギー弾を連射する

が、

マジンカイザールカリオは鋭い動きで全て弾き飛ばした。
ツアイト（破壊神）「何だと!!!」

コナン（身勝手の極意）「今度はこっちの番だ、ルカリオ!!!」
マジンルカリオカイザー（身勝手の極意）『カイザーブレード!!!』
「シューーーーーー!!!!」

「ガキイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!」

ツアイト（破壊神）「くっ!!!!この動きは……。」

と、マジンルカリオカイザー!は両肩から2本のカイザーブレードを出すと、

鋭い動きでツアイトの背後に移動し、そのまま切りつけた。

龍斗（超サイヤ人ブルー）「コナン……へへっ、だったら俺も負けてられねえな。」

ハアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、龍斗はそう言いながら立ち上がると、気を高めて身勝手の極意を発動させた。

龍斗（身勝手の極意）「行くぜ!!!!」

「シュン!!」「ドドドドドドドドドドドド!!!!」

ツアイト（破壊神）「チイ……!!!!」

と、龍斗は素早くツアイトの懐に近づき、超高速でパンチの嵐を繰り出し、吹き飛ばした。

コナン（身勝手の極意）「龍斗兄ちゃんも身勝手の極意を!?!」

龍斗（身勝手の極意）「まあな!!ありがとよコナン!!!これで形勢逆転だな。」

ツアイト（破壊神）「貴様等……いいだろう。身勝手の極意が

どれほどのものか試してやる!!」

龍斗（身勝手の極意）「おもしれえ!!試せるもんなら試してみやがれ!!!」

コナン（身勝手の極意）「行こう、龍斗兄ちゃん!!!ルカリオ!!」

マジンルカリオカイザー（身勝手の極意）『ああ!!!』

と、龍斗とコナンはそう言いながらツアイトに向かっていた。そ

e w p a g e]

ゴウガ(身勝手の極意)「しやらくせえ!!インフェルノノヴァマシンガン!!」

キュアプリンセスIF(身勝手の極意)「プリンセス・爆弾マグナム」
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

ドフラミンゴ(破壊)「ぐああああ!!
戸愚呂(破壊)「ぐおおおおおおおとおお!!」

と、すかさずゴウガとプリンセスは反撃すると、指弾と羽撃糸(フラップスレッド)を押し返し、そのまま直撃させて
ダメージを与えた。

キュアフォーチュンIF(身勝手の極意)「ハアアアアアアアアアアア
!!!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

悪魔将軍(破壊)「おのれ...!! 調子に乗るな!!とりやあ!!!!
と、悪魔将軍はキュアフォーチュンの攻撃の一瞬のスキを突いて
上空に投げ飛ばすと...

キュアフォーチュンIF(身勝手の極意)「しまった!!!?
悪魔将軍(破壊)「地獄の急所封じ...『地獄の断頭台』!!!!
「ゴオオオオオオオオオオオ!!!」

キュアフォーチュンIF(身勝手の極意)「きやあああああああ
!!!!」

悪魔将軍(破壊)「死ねええええええええええええ!!!!
と、悪魔将軍は破壊の力を膝に纏わせて『地獄の断頭台』を放ち、
キュアフォーチュンにとどめを刺そうとしたその時:「new p
age」

ガルダ(身勝手の極意)「不死鳥衝撃拳(フェニックスインパクトガ
ン)!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?!」
悪魔将軍(破壊)「ぐわあああああああ!!!!!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

と、キュアラブリー達はすかさず『プリキュア・ハピネスビッグバーン』と

呼ばれる合体技を放った。そして…

ゴウガ(身勝手の極意)「こいつはオマケだ!!ライオバーニングブラスター!!!」

ガルダ(身勝手の極意)「これも持っていけ!!フェニックスブラスタァー!!!」

「ドオウワァァァァァァァァァァ?」
「ドフラミンゴ(破壊)「何!!!」

と、続いてゴウガとガルダも追撃でそれぞれ必殺技を放つと、ドフラミンゴ達が放った技を一瞬でかき消した。そして…

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
ドフラミンゴ(破壊)「クソがあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」
ウルキオラ(破壊)「ゴミがあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」
戸愚呂(破壊)「人間があああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーン!!!」
と、直撃を受けたドフラミンゴ達は大爆発し、消滅していった。

ラン「やったー!!!」
「!!!!」

セレナ「みんな凄い!!!」

ジン「ああ、恐れいづたぜ。」

アキラ「これ程とはな。」

ガルダ「片付いたな。」

キュアラブリー「龍斗とコナン君は?」

ゴウガ「あそこだ!!!」「newpage」

龍斗(身勝手の極意)「星屑流星!!!」

ツアイト(破壊神)「喰らうがいい!…嵐蹴撃(ストーム・バレット)!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

龍斗(身勝手の極意)「ぐああああああああああああ!!!」

コナン(身勝手の極意)「龍斗兄ちゃん!!!」

マジナルカリオカイザー(身勝手の極意)「ターボスマッシュャーパン!!!」

チ!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

ツアイト（破壊神）「遅い…! アクセルアップ!!!!」

「シユン!!」 「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

マジナルカリオカイザー（身勝手の極意）『ぐおおおおおおおお!!!』

コナン（身勝手の極意）「ああああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、身勝手の極意を発動させたコナンと龍斗は

ツアイトに挑んでいったが、苦戦を強いられていた。

龍斗（身勝手の極意）「くそっ、強いなあ野郎…」

まるでビルス様みたいだぜ!!」

コナン（身勝手の極意）「そ… そうだね… うぐうっ!!!」

マジナルカリオカイザー（身勝手の極意）『ぐううう…!!!』

と、コナンとマジナルカリオカイザーは身勝手の極意を

発動させた負担からか、体中から痛みが走りだした様子だった。

ラン「コナン!! ルカリオ!!!」

ジン「まずいな…。」

サトシ「早く決着つけないと…。」

キュアラブリ!! 「今、助けに行くわ!! 行こう、みんな!!」

ゴウガ「おう!!!」

ガルダ「待て!!!」

キュアフォーチュン「どうしたのガルダ?」

ガルダ「ここはあの2人に任せよう。あいつ等ならきつとやるさ。」

キュアハニー「ガルダ君…。」

龍斗（身勝手の極意）「だがこのままじゃコナンが持たねえ。

こうなりや、イチかバチか試してみるか!!

ゴッドバーニングアタック!!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

と、龍斗はそう言いながらゴッドバーニングアタックを

ツアイトに向けて放つ。

ツアイト（破壊神）「馬鹿め… さっきの事を忘れたのか？ヌウン
!!」

「シューーーーーーッーン…。」

と、ツアイトは先程と同じようにオーロラカーテンを展開し、
ゴッドバーニングアタックを龍斗の背後に転移させた。すると…

「new page」

龍斗（身勝手の極意）「これ待ってたぜ!!メガブラスター
!!!!!!」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

「シューーーーーーッーン…。」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ツアイト（破壊神）「何だど!?ぐうううううう!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、龍斗はメガブラスターを放つと、ゴッドバーニングアタックを
オーロラカーテンへと押し返し、ツアイトに直撃させた。

カイト「うまい!!!」

セレナ「ナイスよ龍斗君!!!」

キュアプリンセス「やるじゃん龍斗!!!」

ガルダ「あいつにしては頭使ったじゃないか。」

龍斗（身勝手の極意）「コナン、これで決めるぞ!!」

コナン（身勝手の極意）「うん!!行くぞルカリオ!!もうひと踏ん張り
だ!!」

マジナルカリオカイザー（身勝手の極意）『ああ!!!』

「ドオオオオオオオオオオ!!!」

と、龍斗とコナンはそう言いながらパワーを最大限にまで高めて
必殺技の発射態勢をとる。

ツアイト（破壊神）「無駄な事を… 今、楽にしてやる!!破壊!!」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ツアイトはそう言いながら破壊エネルギー弾を放った。そし
て…「new page」

龍斗（身勝手の極意）「喰らえ!!ファイナルドラゴンブラスター!!!」

コナン（身勝手の極意）「行くぞZ技!!カイザーノヴァ
!!!!!!」

マジナルカリオカイザー(身勝手の極意)『いや… ちょっとヤバイかもしれない』

ツアイト「フン… お互いに今日の所はここまでのようだな。

小僧… 次に戦うときは今度こそお前のその力をもらうぞ。

また会おう…。」

「シューーーーーー…。」

と、ツアイトはそう言いながらオーロラカーテンを展開し、その場から消えていった。

メイミ「消えた…。」

カイト「何とかなかったみたいだな。」

ジン「ああ。だが、とんでもない敵だったな。」

「シューーーーーー…。」

龍斗「おいコナン!!大丈夫か!？」

コナン「な… 何とか… で… でも…。」

「ドサツ!!!」

と、元に戻ったコナンは力を使い果たすと、このまま倒れてしまった。「new page」

ラン「コナン!!!しっかりして!!!」

まりあ「大丈夫よ。気絶しているだけみたいね。」

ゴウガ「そうだな。とりあえず休んで… っておい!？」

と、ゴウガがふと目をやると、ほとんど廃墟と化した町の光景が飛び込んできた。

めぐみ「ま… 町が… 滅茶苦茶になっちゃってる…。」

サトシ「バ… バトルプリンセスライナーまで…。」

メイミ「まあ… 破壊神クラスの化け物が

暴れたらこうなるわよね…。」

ひめ「どうするのよこれ…。」

と、めぐみやサトシ達が呆然としていると…

「シューーーーーー…。」「カチーーーーー…!!!」

と、時間が突如巻き戻り、廃墟と化した町や

プリンセスライナーも元に戻った。

セレナ「町が…元に戻った!!!」

サトシ「バトルプリンセスライナーも!!」

ラン「良かったー!ー!ー!ー!っ!!!」

ジン「この力…あのバイエルンとかいう男の仕業か。」

ゴウガ「多分な。便利な能力だぜ!!」

龍斗「それよりコナンを早く連れてかねーと!!」

サトシ「ああ。みんな、ひとまず研究所に戻ろう!!」

全員「ああ!!(うん!!)」

と、サトシや龍斗達はそう言いながら研究所へと戻っていった。

「new page」

く 上空 く

アルト「フン…何とか追い払えたようだな。」

バイエルン「ああ…私の目に狂いはなかったようだな。」

あの少年はやはり大いなる可能性を秘めているようだ。

さてと…心置きなく彼らが旅立てるようにしておくか

なくてはな。」

アルト「あいつ等が敵対している『ダークネス帝国』とかいう連中か。

そいつらをどうする気だ?消すというなら別に構わないぞ。」

バイエルン「それには及ばん。それはあの少年達の仕事だ。

ただ…彼らがこの世界に戻ってくるまで

『大人しく』してもらえればそれでいい。」

アルト「おいおい…いくら何でもどこぞの馬の骨かわからん

僕等の言う事をそいつらが効くと思うのか?」

バイエルン「フツ…私に考えがある。では早速行こうかアルトよ。

明日にはここを発つからな。」

アルト「了解!!」

「シンシンシン!!」

と、アルトとバイエルンはそう言いながらその場から姿を消した。
そして…「new page」

く オーキド研究所の中 く

コナン「うっ…:…。」

サトシ「コナン!!!」

セレナ「良かった!!気が付いたのね!!!」

ラン「コナー…:…:…:…!!!」

「ガバツ!!」

と、ランは気が付いたコナンに抱き着いた。

コナン「お…:… おい!!ラン!!…:… 悪い、心配かけたな。」

ラン「うんうん…:…!!!」

めぐみ「フフフ…:… 仲が良いわね!!」

ひめ「羨ましいなあ〜」「チラツ…:…。」

と、ひめはそう言いながら龍斗の方向を見つめた。

龍斗「ん?俺の顔に何かついてんのか?」

ひめ「な…:… 何でもないわよ!!(もう…:… ホントに鈍感ね、この修

行バカは!!)」

ゴウガ「ところでよ…:… バイエルンとアルトはどこに行ったんだ
?」

いおな「知らないわよ。」

誠司「未だに何考えてるか、さっぱりわからねえ所があるから
な…:…。」

ジン「だが…:… あの2人が言った通り、レグルス帝国軍は

とんでもない奴らだったな。」

サトシ「すまなかつたな。大口叩いておきながら、結局お前達に助
けられた。」

セレナ「あなた達がいなかったら、カントー地方はおろか、

この世界そのものが滅んでいたかもしれないわ。」

龍斗「良いって事よ!!」

ゴウガ「『次元大戦の世界』に行く前にレグルス帝国軍と

戦えたのは収穫だったしな!!」

ガルダ「それは良いんだが… お前達、これからどうする気だ？
もうこの世界… そしてコナンは奴らに目をつけられてい
る。

おそらくまたこの世界を襲って来る可能性はあるだろう。」
まりあ「そうよね… 私達はもう『次元大戦の世界』に行っちゃう
し、

一緒に戦う事は出来なくなるから…。」

アキラ「そうだな…。」

ハグタン「はぐ…。」「new page」

コナン「その事なんだけど… やっぱり俺も『次元大戦の世界』に
連れて行ってくれないかな？ いや、連れて行ってほしい!!」

ジン「何…?」

カイト「名探偵…。」

ラン「コナン…。」

サトシ「そう言うと思っただぜ。確かに龍斗達といった方が安全だし
な。」

メイミ「確かに、そうした方があの人達もこの世界に来る

理由はなくなるかもしれないけど…。」

セイラ「それに、『ダークネス帝国』もいるし…。」

ゆうこ「『ダークネス帝国』…。」

ひめ「さっき言ってたあなた達が戦っている悪の組織ね!!」

コナン「うん。確かに、『ダークネス帝国』は気になるけど、

今回のバトルでわかったんだ。

どのみち今の俺の力では、この世界やハグタン…

そして大切な人達を守りきる事はできないってね。

だから俺は龍斗兄ちゃん達と一緒に戦って

もつともつと強くなりたい!!

その為に俺は『次元大戦の世界』に行きたいんだ!!」

龍斗「コナン、お前…。」

ゴウガ「強くなりたいか… そう言う事なら喜んで歓迎するぜ!!」

ガルダ「ああ。俺達が全力でサポートしてやる!!」

めぐみ「一緒に行こう、コナン君!!」

コナン「ありがとう龍斗兄ちゃん、めぐみ姉ちゃん…みんな!!」
サトシ「へへっ…コナンが行くなら俺も行くぜ!!!」

俺達も、もつともつと強くならなきゃな!!」

ラン「うん!!あたしも行く!!!」

セレナ「サトシやコナンが行く所なら例え違う

次元だろうとついていく!!!」

カイト「しやあねえな、俺も行くぜ!!これも腐れ縁って事で。」

メイミ「そうね!!」

セイラ「フフツ!!」

ジン「サトシが行くなら、最大のライバルであるこの俺が

行かないわけにはいかないだろう?」

アキラ「俺も…ハグタンを守る為にもつと強くなりたい!!」

ハグタン「はぐぐ アキラく」

龍斗「そんじやコナン…そしてサトシ達、これからよろしく頼む
ぜ!!!」

サトシ「ああ!!」

コナン「よろしく、龍斗兄ちゃん!!」

と、『ダークネス帝国』に対する不安を残しながらも、より強くなる
為に、

『次元大戦の世界』に旅立つ決意を表明したコナン達であった。一方
その頃…『new page』

く クライス要塞 く

アルト「…と言う事さ。」

バイエルン「いかがでしょうか?ジャーク將軍殿。」

カレハーン「ふざけた事をほざくな!!」

あしゆら『『勇者探偵隊』が戻るまで大人しくしているのだ?!』

ツエツエ「そんな戯言に我々が耳を貸すとも思っているのか!!」

ヤバイバ「貴様等…無礼だぞ!!」

ミズ・シタターレ「機械獣達!!やっておしほいなさい!!」

機械獣の軍団「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!」

と、バイエルンとアルトの言葉に憤慨したあしゆら達は機械獣の大群を出現させた。

アルト「やれやれ……こいつらも『あの組織』の連中と同じ

野蛮で単細胞な連中ばかりのようだな。」

バイエルン「仕方あるまい……アルト!!」

アルト「了解!! 『光滅球(ライデイン・スフィア)』!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

機械獣の軍団「グギャアアアアアアアアア!!」

「シュワアアアアアアアアアアアア!!」

と、アルトが右手をかざし、『光滅球(ライデイン・スフィア)』を発動させると、機械獣の大群が光の玉に包まれて一瞬で消滅したのだった。

カレハーン「な……何だとおおおおとおおおお!!」

あしゆら「あ……あれだけの機械獣達を一瞬で……」

ミズ・シタターレ「な……何が起きたというのだ!」

ツエツエ「くっ!? こうなれば我々が!!」

ジャーク将軍「待て!!」

と、ツエツエ達がアルトとバイエルンに向かって行こうとした時、

ジャーク将軍が制止した。「new page」

あしゆら「ジャ……ジャーク将軍……」

ジャーク将軍「今の力を見た限り、あの2人はお前達の

手に負える相手ではない。それに儂の大事な部下を

無駄に犠牲にするわけにはいかんからな。

先程の話……聞いてやるのでしょうか!!」

アルト「ほう? どうやらお前はこいつらと違って少しは賢いようだな。」

バイエルン「では、我々の提案を受け入れてくださるという事ですね?」

ジャーク将軍。」

ジャーク将軍「ただし、条件がある!!」

アルト「何?」

バイエルン「条件とは？」

ジャーク將軍「お前達… 儂等『ダークネス帝国』の配下となれ!!

そうすれば『勇者探偵隊』が戻ってくるまで

この世界の侵略を一時、止めてやろう。

お前達程の力… そして度量ならば今すぐにでも

幹部クラスになる事も夢ではない。

悪い話ではないと思うが？」

アルト「フン… 確かに悪い話ではないな。だが残念だな…。」

バイエルン「申し訳ありませんが… 我々2人は

『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』であると同時に

『ある組織』の『一応の傘下』でしてな。

これ以上、肩書を増やすのは我々としても

動きにくくなりますが故… その条件は到底、承服しか

ねます。」

あしゆら「な… 何だと!？」

カレハーン「貴様等… 調子に乗りおつて!!」

ミズ・シタターレ「どこの馬の骨かわからんお前達に

ジャーク將軍自らが素晴らしい条件を

提示してくださたというのに!？」

ジャーク將軍「儂の条件が飲めないというのなら交渉決裂だ。

実に惜しいが… さっさと立ち去るがいい!!」

アルト「やれやれ… 物わかりの悪い奴らだな。

やっぱり、こいつ等消すか？バイエルン。」

バイエルン「まあ待て。ジャーク將軍、我々としても騒ぎを起こし

ては

後々面倒ですので、穏便に済ませたいのですよ。

本当はこんな手を使いたくなかったのですが、

仕方ありませんね。」

ジャーク將軍「何だと…?」[new page]

バイエルン「『闇黒神キングダーク』…」

ジャーク將軍「!!!」

!!!!!!!

アルト「そいつにお前達の存在を知らせてやる。」

バイエルン「あなた程の地位の方ならばこの名前に大なり小なり

聞き覚えがあるでしょう？」

ジャーク将軍「な……なぜ……お前達がその名を……

ま……まさか……お前達が傘下に

なっている組織というのは!？」

アルト「そのままかさ、將軍様……だが少し違うぞ。『一応の傘下』だ。」

バイエルン「さて……残念ながら交渉が決裂した事だし、

我々は戻るとしよう。行くぞアルト!!」

ジャーク将軍「ま……待て!!いい……いや……

待つてくださああああああああい
!!!!!!」

あしゆら「なぬ!？」

!!!!!!

カレハーン「ジャ……ジャーク將軍!？」

と、交渉が決裂し、撤退しようとしたアルトとバイエルンを

ジャーク將軍は懇願するように引き留めたのであった。

アルト「おいおい……まだ何か用か？」

バイエルン「そんなに狼狽えまして……大事な部下の前で

見苦しいですよ將軍?」

ジャーク將軍「あ……う……わ……わかった!!

お前達の提案を全面的に受け入れようではないか!!」

ツエツエ「ジャ……ジャーク將軍!!!」

ヤバイバ「どうなされたというのだ?いきなり……。」

あしゆら「その『キングダーク』とやらがどうかしたのか?」

アルト「フン……どうやら、お前の大事な部下共は何も知らないよ
うだな。」

バイエルン「フツ……では交渉成立ですな。」

賢明なご判断、感謝致しますジャーク將軍。

後程、気が向けば『キングダーク』の事を

あなたの大事な部下達に教えて差し上げるとよいで
しょう。」

ジャーク将軍「だ…だが、くれぐれも我々の存在を

『キングダーク』に知らせるのだけは

止めてくれ!!頼む!!」

バイエルン「もちろんですともジャーク将軍。それは我らの名に懸けて

誓いましょう。では我々はこれで…

おっと、その前に…アルト!!」

アルト「了解!!」

「パアアアアアアアアア!!」「シューーーーーー…」

アルト(分身体)「……………」

と、アルトは自身の分身体を出現させた。「new page」

あしゆら「な?」

ミズ・シタターレ「何だあれは?」

ツエツエ「『影分身の術』なのか?」

ジャーク将軍「あ…あの…これは何だね?」

アルト「僕の分身体さ。一応、お前達の動きを監視させてもらう。」

バイエルン「疑うわけではありませんが、念の為にと思ひまして。

もちろんタダで置いていくとは言いません。」

アルト「戦闘力は0に等しくしてあるから安心しろ。

必要ならお前等の召使いにでも何でも好きにするがいいさ。

但し…もし、お前達が約束を破ったり

その分身体を破壊した時は…わかっているな?」

ジャーク将軍「も…もちろんだ!!改めて『勇者探偵隊』が

この世界に戻ってくるまで侵略を止める事を誓おう

!!」

バイエルン「ありがとうございます、ジャーク将軍…

では、用はこれで済んだ。行くぞアルト!!」

アルト「フツ…了解!!」

「シュンシュン!!」

と、アルトとバイエルンはそう言いながらその場から姿を消していった。「new page」

ジャーク將軍「……………」

カレハーン「あ…あの、ジャーク將軍？」

ツエツエ「こ…これでよろしかったのですか？」

あしゆら「そ…それに『闇黒神キングダーク』とは一体…？」

ジャーク將軍「お前達…その名前は聞かなかったことにしろ。」

『勇者探偵隊』がこの世界に戻るまで

我々が大人しくしていれば何も起こらない。

あの2人の要求通りに我々はこの世界の侵略を

一時休止とする。良いな!!!」

ミズ・シタターレ「は…はい!!!」

ヤバイバ「わ…わかりました!!!」

ジャーク將軍「わかればよい…!!!」さすがは儂の部下達だ!!

(じよ…冗談ではない!!もし我々の存在が

『バイキンシヨッカー』に知られたら

この世界を侵略するどころではなくなる!!

『勇者探偵隊』が戻ってくるまで大人しくしているだけで

済むのなら安いものだ!!だが、この事は後で、

『ダークネス皇帝』のお耳には入れておかねば!!

でなければ、この恐怖には到底、耐えられぬ…!!!

『ガタガタガタガタガタ!!!』

と、ジャーク將軍は部下達に毅然とした態度で侵略の一時休止を命
令したが、

内心は恐怖で震えながらそう心の中でつぶやくのであった。そし

て…『new page』

↳ 翌日 オーキド研究所の外 ↳

サトシ「そんじゃ、しばらくの間

留守にするけど、みんな元気だな!!」

ハナコ「ええ!!」

レッド「しっかりやって来い!!」

ラン「お爺ちゃんもお婆ちゃんも元気だね!!」

綱手「ああ。お前達…必ず戻ってくるんだぞ!!」

自来也「じゃが…聞いた話ではその世界にはとんでもない連中が

ゴロゴロいるようじゃからのう。心配にはなるわい。」

ゴウガ「大丈夫だ。サトシやコナン達は俺達が

ちゃんと面倒見るからよ!!」

龍斗「心配するなつて、エロ仙人!!!」

めぐみ「龍斗…エロ仙人は失礼でしょ…」

セレナ「パパも体に気を付けてね!!」

サカズキ「ああ。ホントは僕もついていきたいところじゃが、

海軍元帥として、この世界を守る使命があるからのう。

くれぐれもよろしく頼んだぞ、お前達!!」

ひめ「はい!!」

ゆうこ「任せてください!!」

アキラ「お…俺も頑張ります!!」

ゴウガ「つていうか、この世界のサカズキがセレナの父親だったのは驚いたぜ。

それにサトシとランの爺ちゃん婆ちゃんがエロ仙人と5代

目火影…

そして、そのサトシとセレナの子供がハグタンつて、

一体、どういう家系なんだよ…」

ハグタン「はぐぐ サカズキお爺ちゃん」

サカズキ「おおぐ ハグタン しばらく会えないけど

元気にしていてくだちやいねぐ (／／／▽／／／)

ハグタン「はぐぐ」

龍斗「おいおい…何だありや…」

ゴウガ「俺が知ってるサカズキからは想像つかねえ顔だな…」

ガルダ「まあ…鬼の海軍元帥も人の子という訳か…」

と、龍斗達はサカズキの顔がハグタンを見るとコワモテ顔から
デレ顔に変わり、さらに赤ちゃん言葉を使う様子にドン引きしてい
た。「new page」

タケシ「お前達が留守の間、こっちの事は任せておけ!!」

カスミ「その代わり、たくましくなって帰ってきてよね!!」

シンジ「て言うか、何でサトシの最大のライバルである

俺が一緒にいけないんだよ!？」

ジン「何を言っている『自称ライバル』。これから行く世界は

これまでの敵とは比べ物にならない程の連中がゴロゴロいるんだぞ。

お前ではすぐにやられるのかオチだ。」

シンジ「何だと!!!そりやどういう意味だ!？」

ジン「言葉通りの意味だ。悪いことは言わんからここで大人しくしている。」

サトシ「シンジ…俺達がない間、この世界を頼んだぞ。頼りにしてるぜ!!」

シンジ「そ…そうか?最大のライバルにそこまで言われたなら仕方ないな。」

俺が倒すまでやられるんじゃないやねえぞ!!」

サトシ「ああ!!行ってくるぜ!!」

「シユンシユン!!!」

アルト「準備はできたようだな。」

バイエルン「遅くなつてすまなかつたな諸君。」

と、そこへアルトとバイエルンが姿を現した。「new page」

いおな「ちよつと、ホントに遅いわよ!!」

まりあ「どこで何やってたのよ!？」

アルト「フン…お前らが知る必要はない。」

ひめ「何ですってー!ー!ー!ー!っ!？」

コナン「おじさん…。」

バイエルン「フツ…コナンよ。我々の誘いを受けてくれた事は礼を言おう。」

ぜひとも君の可能性を我々に見せてくれたまえ。」

コナン「うん。何とか期待に応えられるように頑張るよ。」

おじさん達が何を考えているかは知らないけどね。

どうせ始めからこうなる事はわかっていたんでしょ?」

バイエルン「そこは君の想像に任せるとしよう名探偵君。」

では、これで失礼する。」

と、バイエルンはコナンと話し終えるとその場から去っていった。
コナン「……………」

ラン「コナン、どうしたの？」

カイト「やっぱお前も気になるか名探偵？」

メイミ「何か私達…あの人達の手のひらの上で

動かされているような感じがするんだけど。」

コナン「いいさ。俺達はもう決心したんだ。例えあの2人が

何を考えていようと、俺達が強くなる為に

やれる事をやるだけさ!!」

ラン「コナン!!」

サトシ「その意気だぜ!!そんなじゃそろそろ時間だ。

バトルプリンセスライナーに乗り込もうぜ!!

みんな、元気だな!!」

ハナコ「気を付けてねサトシ!!」

レッド「戻ってきたらお前とバトルをするのが楽しみだ!!」

綱手「必ず帰ってくるんだぞ!!」

自来也「頑張ってきて来い!!」

タケシ「じゃあなーーーーっ!!!」

シンジ「こっちの心配はするな!!」

カスミ「私達に任せといて!!」

サカズキ「ハグタくん おつきくなって帰ってくるんでちゅよく

お爺ちゃんも頑張りまちゅからねく（／／／▽／／／）」

ハグタン「はぐく」

龍斗「おい」

ゴウガ「だから引きまくるって」

ガルダ「さすがに、何度も見れる光景ではないな」

セレナ「ごめんなさい龍斗君達…パパは孫バカだから」

アルト「どうでもいいが、さっさと行くぞ。」

バイエルン「では、次元回廊を開くぞ。」

「シューーーーーーッ……。」

と、バイエルンはそう言いながら『次元大戦の世界』へと繋がる次元回廊を展開させた。

サトシ「あれが『次元大戦の世界』への入り口か……。』」

龍斗「いよいよか……。ワクワクしてきたぜ!!」

コナン「それじゃ、行こうみんな!!頼んだぜラン!!」

ラン「うん!!それじゃ、出発進行!!」

そして、一同はバトルプリンセスライナーへと搭乗して次元回廊を潜り、

『サトシ兄妹の世界』にしばしの別れを告げた。「new page」

タケシ「行っちゃまったな。」

カスミ「うん……。』」

シンジ「あいつらが留守の間に俺達がしつかりしないと!!」

ハナコ「では行きましようか、あなた。」

レッド「ああ。(お前がどれだけ大きくなって帰ってくるか……)

楽しみにしているぞサトシ!!)」

綱手「自来也……。龍斗達はともかく、あのいかにも怪しい2人組の事だが……」

信用できると思うか?」

自来也「いいや、明らかに信頼に値する連中じゃなからう。」

かといって、儂等でどうにかできる相手ではない……。』」

心配じゃが、任せる他はなからう。」

サカズキ「ワシも同感じゃ。あの2人は、ワシ等がこれまでに

戦ってきた奴らとは全く違う。」

癪じゃが、セレナやハグタン達の無事を祈るしかあるま

い。」

と、自来也やサカズキ達は快くコナン達を送り出したものの、アルトとバイエルンの異質すぎる雰囲気

不安な表情を見せるのであった。そして……。『new page」

く 第5世界 へ

「シューーーーーー……。』」

龍斗「よっしや、着いたぜ!!!」

サトシ「ここが『次元大戦の世界』…。」

めぐみ「でも何か… とんでもない事になってるわね。」

セレナ「うん… 町も滅茶苦茶になってるし…。」

ゴウガ「何か、『頂上戦争』を思い出すな。」

コナン「おじさん… これからその『グラン・ゲインズ』って

軍隊と合流するの？」

バイエルン「そう考えていたのだが、彼らは今、

新たにラー・カインの傘下となった組織と交戦中の様
だ。

合流するのはその戦いが終わった後からでも遅くない。

君達はこれから… ん？」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン!!!」

セファイロ兵の軍勢「……………」

魔神族の群れ「グウウウウウウウウ…。」

レグルス兵の軍勢「ぐひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!!!」

と、龍斗やコナン達が第5世界に到着して早々、

レグルス兵とセファイロ兵の軍勢、そして魔神族の群れが出現し
た。

誠司「早速、出やがったな!!」

ひめ「何!?!この人達!?!」

メイミ「レグルス帝国軍の兵隊はわかるんだけど、

何?あの気持ち悪い怪物達は…。」

カイト「後、あのドクロみたいな奴ら…。」

ジン「確かに、これまで見た事が無い連中だな。」

龍斗「何でもいいぜ!!おかげで退屈せずに済みそうだ!!」

ゴウガ「おい龍斗!!抜け駆けは許さねえぞ。」

ガルダ「右に同じだ!!」

サトシ「コナン… 行けるか?」

コナン「もちろん!!この世界で初めてのバトルだ!!みんな行くぞ

!!」

一同「おう!!」

と、龍斗やコナン達はそう言いながらバトルプリンセスライナーから

出撃して行き、『次元大戦の世界』での初戦闘を繰り広げていくのであった。

ジュナイパー「という訳で、大苦戦しながらも龍斗達の手を借りて

どうにかレグルス帝国軍を退けたコナン達。

そして、今回の戦闘を機により一層強くなる

決意をした彼らは『次元大戦の世界』へと

旅立って行くのであった。

果たして、今後の彼らの運命は…？

打倒ラー・カインに向けて役者が揃いつつある

グラン・ゲインズ…

見事に『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』を

終結させる事ができるであろうか？

それでは次回も…

レイス「刮目せよ!!!」

ジュナイパー「あぢ…お帰りなさい、レイス殿」

第49話 く 旅立ち く (完) 「new page」

・オリジナル設定

【ツアイト】

親衛隊（ホワイト・ナイツ）の一人である長身の男。

シユラウドの死亡に伴い、最強格である『四聖士（パラディーン）』へと昇格した。

かつての『破壊神候補』であったが、ラー・カインに瞬く間に敗北した後、その強さと風格に惚れ込み、彼の配下となった。

『四聖士（パラディーン）』に昇格した後、コナンの持つ『英雄の力』を狙って、『サトシ兄妹の世界』へと襲来し、たまたま来訪していた龍斗達と交戦。

『破壊神』となつて一時は追い詰めたものの、龍斗の機転により形勢が逆転し、最後は身勝手の極意を発動させた龍斗とコナン（マジンカイザールカリオ）の合体技で負傷し、撤退していった。

容姿のイメージは仮面ライダージオウのスウォルツ。

・技及び能力

【時間操作能力】

・時間を止める、時間を巻き戻す等。

【オーロラカーテン】

基本は、門矢士と同じ能力。様々な敵キャラを召還し、使役にすることができ、召還できる敵のレベルはある程度、制限がある模様。

【アクセルアップ】

レグルス帝国軍特有の高速移動術。

「仮面ライダーカブト」に登場する「クロックアップ」と

同じような感じだが、『四聖士（パラディーン）』クラスともなれば、少なくとも、「ハイパークロックアップ」の数万倍の速さで移動できる。

ちなみに一番速いのは同じ『四聖士（パラディーン）』のキャラルで、

「ハイパークロックアップ」の1000万倍であり、

ラグナエクス『次元速』に肉薄する。

【嵐蹴撃（ストーム・バレット）】

レグルス帝国軍特有の体術「シックス・コマンド」の技の一つ。

「ONE PIECE」に登場する「CP9」が使う『嵐脚』を強化したものだ。

【破壊】

破壊神特有の禍々しい紫色をした破壊エネルギー。
エネルギー波やエネルギー弾にして放つのはもちろんの事、
ツアイトの場合は「オーロラカーテン」で召還した敵キャラに
破壊エネルギーを分け与える事も可能である。
威力としては破壊神ビルスとほぼ同等。

【ドフラミンゴ・戸愚呂（弟）・悪魔將軍・

ウルキオラ・志々雄真実（破壊ver）】

ツアイトに破壊の力を分け与えられたドフラミンゴ達。

紫色のオーラを纏っており、パワーや技の威力も

破壊神となったツアイトには及ばないものの、

オリジナルとは比較対象にならない程に強大となった。

しかし最期は、身勝手の極意を発動させたガルダ達に全員倒され
た。

キュアホワイト「何…この歌声!？」

シャイニールミナス「歌というより…まるで『祈り』ですよ。」
と、イーグルがそう言った瞬間、古城から清んだ歌声が周辺に響き渡ると、

城の中から波打つ長い金髪が特徴の女性が姿を現した。「new page」

「シューーーーーーシューーーーーン…。」

女性「……………」

海「や…やっぱり…。」

風「あなただったのですね…。」

光『『エメロード姫』!!!』

エメロード姫「……………」

キュアダイヤモンド「エメロード姫?」

キュアソード「光達の知り合いみたいだけど…。」

キュアエース「あの方が『もう一つのセフィーロ』の支配者でしょうか…?」

ピエラート「おおお…噂通りの絶世の美女である!!」

わざわざ出迎えに来たかいたがあつたである!!

ところでイーグル殿…これからどうするのである

?

グラン・ゲインズの者達を葬るのであれば

助太刀するのである!!」

イーグル（魔神ザガート）「それには及びませんピエラート殿…」

名刺代わりに我らの力…とくとご覧く

ださい…。」

「シューンシューンシューンシューンシューンシューン!!!」

セフィーロ兵の大群「……………」

新型FTO5体「……………」

と、イーグルはそう言いながらドクロのような姿をした

『セフィーロ兵』の大群と新型FTO5体を出現させた。「new page」

ラピス「出やがったな!!」

アキノリ「それと何だ？あのロボットみたいなのは？」

海「あれは『FTO』じゃない!?私達が知ってる

イーグルが乗っていたメカよ!!」

風「どうしてこんなところに……。」

光「私達が知ってるセファイロを襲った時に

データを手に入れたのね!!」

ナツメ「後、あのロボットの背中についてる

あのエンジンみたいなものはまさか……。」

ピエラート「ご名答である!!ポク達レグルス帝国軍が提供した

『GNドライブ』である!!早速、役に立って何よりなので

あーる!!」

イーグル(魔神ザガート)「ええ……おかげで素晴らしい仕上がりと
なりました。

感謝いたします、ピエラート殿。

さあ……魔法騎士(マジックナイト)達

よ……

早く魔神(マシン)を召喚するがいい。」

光「言われなくても!!海ちゃん風ちゃん、行こう!!」

海・風「うん!!」

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、光達はそう言いながら魔神(マシン)を召喚し、搭乗した。

光(レイアース)「……………」

海(セレス)「……………」

風(ウインダム)「……………」

ケースケ「魔神(マシン)だ!!」

ナツメ「よし……私の友達……出てこい『朱夏』!!」

「パアアアアアアアアアアア!!」

「シュー………!!」

朱夏「行くぞ!!」

と、ナツメは朱夏のアークを妖怪ウオッチにかざすと、

朱夏へと変身した。

アキノリ「そ…そんな仕組みなのかよ」

トウマ「憑依!! 剣武魔神白虎!! 我に力を!!」

「シューーーーーーシューーン…。」

白虎「白虎…参る!!」

キュアハート「あたし達も行くこう!!」

ドキプリメンバー「うん!!!」

イーグル（魔神ザガート）「では、始めよう…。」

? 「待て、イーグル。」

イーグル（魔神ザガート）「どうしたのです?」

? 「ここはお前の手を煩わせる事ではない。

伝説の魔法騎士（マジックナイト）とやらの相手…

この俺が務めよう。」

イーグル（魔神ザガート）「…わかりました。ではお任せします。」

? 「感謝する、イーグル。」

「シュン!!」

黒いFTO「……………」

と、イーグルとの話を終えた人物はそう言いながら

『黒いFTO』に搭乗し、姿を現した。「new page」

光（レイアース）「く…黒いFTO!?!」

海（セレス）「あれも新型かしら?」

風（ウインダム）「でも…他の期待とは明らかに雰囲気違います

!!」

黒いFTO「さあ…この俺に見せてみる…伝説の魔神（マシン）

の力を!!」

ラピス「なっ!!!?」

アンズ「こ…!!この声は…。」

リータ「まさか…。」

光（レイアース）「ラ…ランティスなの!?!」

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「お前…なぜ俺の名を知っている

?

そうか…。もう一人の俺と面識があるんだったな。」

海（セレス）「面識があるなんてものじゃないわよ!!」

風（ウインダム）「光さんはあなたの事を…。」

光（レイアース）「良いよ海ちゃん風ちゃん。」

海（セレス）「光…。」

風（ウインダム）「光さん…。」

光（レイアース）「風ちゃんだって、フェリオの事を吹っ切って戦ったんだ。」

例え、あの人がランティスだろうと、

この世界をどうにかしようというなら…。私は戦

う!!」

と、光はそう決意を表明しながら戦闘態勢を取った。

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「その意気や良し…。だが、俺達が

『本物』になる為に、

お前達には消えてもらおうぞ。3人纏めてく

るがいい!!」

海（セレス）「良いわ…。望むところよ!!」

風（ウインダム）「ここでもう一つのセフィーロとの決着をつけます!!」

キュアハート「後のロボットはあたし達に任せて!!」

キュアブラック「思いきりやっちゃって!!」

光（レイアース）「ありがとう…。海ちゃん風ちゃん、行こう!!」

海・風「うん!!」

と、光達はキュアハート達に他の敵を任せて、

もう一人のランティスが駆る黒いFTOに挑んでいった。

そして、その様子を岩陰から見ていたデイド達は…。

ソニック「おいおい…。どうやら戦闘が始まったみたいだぜ。」

凱「どうするデイド？俺達も加勢するか？」

デイド「そうしたいのは山々だが、まずはこの子の安全を確保するのが先だ。」

凱、ソニック、ここは任せていいか？俺はこの場を離脱し、
キャッスルドラムンへと戻る。もし、彼らがピンチになった
時は頼む!!」

ソニック「ああ!!」

凱「了解だ!!」

と、保護した美香の安全を確保するのが最優先と判断したティード
は

その場を離脱して、母艦であるキャッスルドラムンへと戻っていつ
た。そして… 「new page」

キュアブラック「ダダダダダダダダダダ!!!」

キュアホワイト「はああああああああ!!!」

新型FTO「……………」

「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」

と、まずはキュアブラックとホワイトが

新型FTOの1体と戦闘を開始して、激しい応酬を繰り広げてい
た。

シャイニールミナス「ルミナス！ハーティエルアंकション!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

新型FTO「!!!」

キュアホワイト「ブラック！今よ!!」

キュアブラック「うん!!」

と、シャイニールミナスはハーティエルアंकションを発動させ
て、

FTOの動きを封じ、ブラックとホワイトが攻撃を仕掛けるが…

「バリーイイイイイイイイイ!!!」

「ズバババババババババババ!!!」

ブラック・ホワイト・ルミナス「きやああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」

と、FTOはGNドライブの出力を上げてハーティエルアंकシヨ
ンを

打ち破った後、キュアブラック達をビームソードで攻撃し、吹き飛

ばした。「new page」

朱夏「ブラック!! ホワイト!! ルミナス!!

おのれ... ハアアアアアアア!!!」

白虎「ビヤッコ大霊槍!!」

ジバニヤン「百猫烈弾!!」

ミツチー「ミツチービーム!!」

酒呑童子「鬼時雨!!」

ラピス「あたし等も行くぜ!! ラピス! プリティーキャノン!!」

アンズ「ハットリ流忍術... 風魔手裏剣!!」

リータ「サテライトバスター!!... フルファイヤ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、今度は朱夏達がFTO2体に一斉に攻撃を仕掛けていくが...

FTO2体「... (GNフアング)」

「バババババババババ!!」 「ドドドドドドドドド!!!」

朱夏達「うわああああああああ!!!?」

と、FTO2体はすかさずGNフアングで反撃し、

朱夏達を吹き飛ばした。

「シューーーーーー...」

ナツメ「ううう...」

トウマ「くうう...」

ラピス「く... くそっ...」

アキノリ「ナツメ達が!？」

アヤメ「あんなにあっさり...」

ケースケ「そ... そんな... 何なのあれ...」

と、FTO2体の驚異の性能の前に成す術なく倒れてしまったナツ

メ達。そして... 「new page」

キュアハート「ハートダイナマイト!!!」

キュアダイヤモンド「プリキュア・ダイヤモンドブリザード!!!」

キュアソード「プリキュア・スパークルソード!!!」

キュアエース「ときめきなさい! エースショット! ばきゅん

!!」

レジーナ「ミラクルドラゴングレイブ!!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!」

「シューイーーーーーー!!!!」

新型FTO2台「……………」

と、キュアダイヤモンド達が攻撃を仕掛けたが、

FTO2台はすかさず『GNフィールド』を展開し、無力化した。

キュアハート「え!?!」

キュアソード「そ…そんな!?!」

キュアエース『GNフィールド』ですか!?!」

キュアダイヤモンド「厄介ね…。」

レジーナ「何なのよもう!!!」

新型FTO2体「……………(GNメガランチャー)」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

と、新型FTO2体はすかさず『GNメガランチャー』を

キュアダイヤモンド達に向けて放つ。

キュアロゼッタ「プリキュア・ロゼッタリフレクション!!」

「バリバリバリバリ!!!!」

「ピキピキピキピキ…。」

「ドカーーーーーー!!!!」

キュアハート達「きゃああああああああああ!!!!?」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

と、キュアロゼッタはそう言いながらロゼッタリフレクションを展開させるが、

一瞬で粉碎されると、そのまま直撃を受けて吹き飛ばされた。「n

ewpage」

キュアダイヤモンド「あ…ああ…。」

キュアソード「ううう…。」

キュアロゼッタ「あ…あのロボット…。」

キュアエース「つ…強いですわ…。」

レジーナ「も…もう…こんなのばかり…!!!」

キュアハート「こうなったら…。」

「スツ…。」

と、キュアハートはそう言いながら白銀色に輝いた『新しいリバーシアウオッチ』懐から取出すが…。

キュアダイヤモンド「ハ…ハート…それは…。」

キュアソード「アクアさんやマーリンさんから

まだ使わなくなって言われてるんでしょ…?」

キュアハート「そ…そうだけど…このままじゃ…。」

新型FTO2体「……………」

「ブウウウウウウウウウウウ…。」

レジーナ「ね…ねえ…また来るわよ…。」

キュアエース「くっ!?!」

キュアハート「ど…どうしたら…。」

と、キュアハートが迷っている間に新型FTO2体は

再びGNメガランチャーをチャージし始めて、放とうとしていた。

そして…「new page」

光（レイアース）「炎の…矢……………つ!!!」

海（セレス）「水の…龍……………つ!!!」

風（ウインダム）「碧の…疾風……………つ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、光達もランティス・ゼノが駆る黒いFTOとの戦闘を開始して、

3人一斉に魔法を発動させるが…

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「そんなもの…ぬうん!!!」

「ズバアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

光（レイアース）「そ…そんな…!!!」

海（セレス）「私達の魔法が!?!」

風（ウインダム）「ただの斬撃で!?!」

と、ランティス・ゼノは『大型GNバスターソード改』を一閃する

と、

光達の魔法をあつかりと相殺した。

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「その程度か?ならば今度はこちら

「シュンシュン!!」

ノヴァ (レガリア) 「光! みんな!!」

ランティス (魔神) 「大丈夫か?」

と、光達の前に、ランティスとノヴァが現れると、

2人は魔法を放ち、斬撃を相殺した。

光 (レイアース) 「ラ……ランティス……ノヴァ……」

海 (セレス) 「あ……ありがとう……」

風 (ウインダム) 「た……助かりました……」

ノヴァ (レガリア) 「安心するのはまだ早いよ!!」

ランティス (魔神) 「そうだな。まさか、もう一人の自分と

戦うことになるうとはな……

だが……俺の大事な仲間を傷つけた事は見過ご

せない。

ノヴァ、光達を頼む!!」

ノヴァ (レガリア) 「うん……気を付けて!!!」

ランティス・ゼノ (黒いFTO) 「良いだろう……来るがいい!!」

と、ランティスVSランティスの戦いがこれから始まるうとしてい

た。そして……「new page」

新型FTO2体 「……(GNクロー)」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ケースケ 「う……うわああああああ!!!」

アキノリ 「く……くそおおおおお!!!」

ナツメ 「ううう……」

ラピス 「ち……ちきしょう……」

と、FTO2体が、GNクローを出現させて、ナツメ達にとどめを

刺そうとしたその時……

? 「GNソードビット!!」

「ズバババババババババババババババババババババババ!!!」

新型FTO2体 「!!!」

と、突如、ナツメ達の前に謎のMSらしきものが登場し、

「GNソードビット」で新型FTO2体を攻撃し、ダメージを与えた。

トウマ「… え？」

ジバニヤン「な… 何が起きたニヤン？」

アンズ「あ… あれは… 『ガンダム』!？」

ラピス「だ… だれだよお前!？」

ソニック「俺は『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』そしてこれは

俺のIS… 『ダブルオーアマテラス』だ!!」

と、ソニックはナツメ達の危機を救った後、

自らと『ダブルオーアマテラス』の自己紹介をするのであった。そ

して… 『new page』

新型FTO2体「… (GNメガランチャー)」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

レジーナ「い… 嫌ああああああああ!!」

キュアソード「あ… ああ…」

キュアハート「くうう…」

と、もう一方の新型FTO2体がGNメガランチャーのチャージを

終えて

キュアハート達に発射したその時…

? 「プロテクトウォール!!」

「バシューーーーーー!!!」

と、キュアハート達の前に突如、謎の黒いロボットが現れて

『プロテクトウォール』と呼ばれるバリアのようなものを展開させて

GNメガランチャーをかき消した。

? 「君達がグラン・ゲインズか？」

キュアソード「そ… そうだけど…」

キュアハート「あ… あなた達は？」

キュアエース「どなたか存じませんが、助かりました!!」

凱「それは良かった。俺の名は『獅子王凱』… そしてこいつは

俺の『ファイティング・メカノイド』『ガオファイガー』だ!!」

と、キュアハート達の危機を救った凱はそう自己紹介をしたのだっ

た。その一方… 『new page』

新型FTO「… (GNミサイル)」

よ!!」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン!!!」

セフィーロ兵の大群「……………」

!!!

と、イーグルはそう言いながらセフィーロ兵の大群を出現させた。
ソニック「へっ……ぞろぞろ出てきたな!!」

凱「君達……まだやれるか？」

トウマ「は……はい!!!」

ラピス「つたりめえだろ!!」

キュアエース「当然ですわ!!」

キュアソード「やられっぱなしじゃいられないわよ!!」

キュアブラック「そう言う事!!」

と、そう言いながら立ち上がるグラン・ゲインズのメンバー達。

デイド「良し!その意気だ!!」

キュアハート「行こう……みんな!!」

一同「了解!!」

と、そう言いながら再びもう一つのセフィーロに挑もうとする
メンバー達であった。一方その頃……「new page」

く 青木ヶ原樹海 く

「シユ……………」

士「着いたぞ。」

? 「士さん……ここが『次元大戦の世界』何ですか?」

士「ああ。まさかまた、この次元に来ることになるとはな……。」

と、青木ヶ原樹海付近では特別編で共に戦った

仮面ライダーディケイドこと『門矢士』と

仮面ライダーディエンドこと『海東大樹』が、謎の少女達を引き連

れて、

オーロラカーテンから姿を現した。

海東「だが……ジエネシスが言ってた通り、こんな風になるなんて
ね……。」

けど…… 良いお宝が手に入りそうじゃないか!!」

? 「もう!海東さんったら……。」

? 「あたし達は『グラン・ゲインズ』に加勢に来たんでしょ？」
海東「良いじゃないか。それくらい楽しみがあっても。」

さてと… 早速、彼らに合流しようじゃないか。」

? 「どんな人達がいるのかな？」

? 「楽しみね!!」

士「海東… お前はそいつらを連れて先に行ってる。」

海東「それは構わないけど… どうしたんだい？」

士「野暮用ができた。それじゃ任せたぞ!!」

「シューーーーーーシューーーーーー。」

と、士は海東に後を任せて、オーロラカーテンでその場から消えていった。

? 「何よいきなり!？」

? 「相変わらずですね… あの方は。」

海東「それが士だからね… まあ、仕方ない。それじゃ行こうか

『安』!!」

安「はい!!」

レイス「という訳で、ついにもう一つのセファイロとの戦闘に突入した

グラン・ゲインズのメンバー達であったが、

彼らが有する新型機に苦戦し、危機に陥っていた彼らの前に

別の並行次元からやってきた

『特殊組織B. D. S (ブラウ・ドラツヘ・シュルツァー)』の

メンバーである『デイド・ブラウ・ヴィゼイレー』・

『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』・『獅子王凱』の3人が

登場し、危機を救うのであった。果たして彼らの実力と

は…

そして同じ頃、特別編で登場した『門矢士』と『海東大樹』が謎の少女達を引き連れて第5世界へと再び来訪するのであった。

敵味方共に新たな力が続々と集結しつつある第5世界…
今後の行く末はどうなっていくのだろうか？
それでは次回も…刮目せよ!!!
!!!」

第50話 〽 降臨!!『もう一つのセフィロ』 〽 (完)「n
e w p a g e」

・設定

「もう一つのセフィロ」

OVA版レイアースに登場したセフィロを基に
オリジナルの要素も加えた光達の敵対勢力。

光達がデボネアを倒した後、『第2次次元大戦(今回の物語)』が始
まる前に

時空の歪みの影響で歴史の表舞台に登場した。

だが、彼らは本来の歴史には存在しない為、

いずれは消えゆく運命となっていたが、

正規(アニメ版)のセフィロ及び光達魔法騎士(マジックナイト)
を滅ぼせば

自分達が『本物』となり、生き残る事ができるという

エメロード姫(正確にはイーグル)の思想のもとに、

魔神族と手を組んでセフィロを襲撃したが、

クレフが自らの全魔力と引き換えにセフィロを封印し、

干渉ができなくなった為、今度は標的を光達魔法騎士に切り替えて

第5世界へとアルシオーネやフェリオと言った刺客を次々と送り
込む。

そして、第5世界での基盤を確実なものとする為に、ラー・カイン
達

『レグルス帝国軍第3戦闘艦隊』の傘下となって

全ての準備を整えた後、鉄血龍(オル・ドラゴン)要塞跡に

自身達の拠点である古城をエメロード姫や実質的支配者である

イーグルと共に降臨したのであった。

「イーグル」

もう一つのセフィローにおけるエメロード姫の『弟』であり、実質的の支配者。

正規のセフィローでのイーグルと同様、指揮官としてはもちろん、パイロットとしての腕も一流を誇り、戦闘力も高い。

かつてザガートが使用していた『魔神ザガート』を手に入れる為に彼を謀殺し、改修して自らの駆る乗機とした。

主な目的や起こした行動は上記の通りだが、何故、正規のセフィローを滅ぼせば

自分達が生き残れるといった思想にたどり着いたかは不明である。

「エメロード姫」

『もう一つのセフィロー』の象徴ともいうべき存在。

容姿は正規のセフィロー（アニメ版）とほぼ同じだが、

こちらのエメロード姫はOVA版と同様に『精霊』であり、死ぬ事は無く、魔神も所持していない。

だが、彼女が祈り時に歌う声は、敵の戦意を喪失させて力を抑制してしまう効果がある為、

仮に戦場で歌われたら、ほとんど無力化されてしまう。
(この先、グラン・ゲインズがこの歌声に苦しめられる事になるのだが…。)

一応、表向きの支配者ではあるが、実質的な権力は

『弟』であるイーグルが握っている為、自らが命令を下す事は無い。

普段は既に死亡してしまった『ザガート』の亡骸の傍にずっと付き添っている。

「ランティス・ゼノ」

その名の通り、もう一つのセフィローにおけるランティスである。

OVA版を基にしているが、正規のランティスが存在しているのと、

彼自身がエメロード姫に心酔しており、彼女やイーグルに対しても

絶対的な忠誠を誓っている為、今作では、完全な敵として光達魔法騎士（マジックナイト）の前に立ち塞がる事となる。戦闘力はもう一つのセファイロでも一、二を争うほど高いが、乗機である『黒い新型FTO』に乗れば、更にその能力は上昇する。又、『阿頼耶識システムTypeE』を使いこなす為の手術も施されている。

尚、正規のランティスと区別する為、オリジナル設定でゼノ表記としている。

【セファイロ兵】

もう一つのセファイロの一般兵。

魔神族から提供された方法で死者の魂を具現化し、骸骨の姿に鎧を装着させたもの。主に剣や槍を武器としている。戦闘力はさほど高くないが、もともと死んでいる為か、かなりの生命力（？）としぶとさを誇り、大群で襲ってきたら、かなり厄介な存在である。

【ザガート】

正規のセファイロ同様、ランティス・ゼノの兄で、かつてエメロード姫の思い人である神官であったが、もう一つのセファイロの実権と『魔神ザガート』を手に入れようとしたイーグルに謀殺された。

だが、その亡骸は古城の中にある特殊な場所で保管されており、エメロード姫が絶えず付き添っている。

【魔神ザガート】

かつてザガートが使用していたもう一つのセファイロにおいては最強を誇る魔神（マシン）。イーグルがザガートを謀殺した後、改修されて彼の乗機となる。見た目や武器・能力はオリジナルとほぼ同じだが、ラー・カインからの技術提供もあって、大幅な強化が施されており、

かつて光達が正規のセファイロで倒したものよりも、遥かに高性能である。

【 新型FTO 】

かつて正規のセファイロでイーグル（アニメ版）が使用していたオートザムのFTOのデータを基に、ラー・カインから提供された『GNドライブ（T）』を動力源として完成した新型FTOである。

見た目はオリジナルとほとんど変わらず、ボディーカラーも白を基調としているが、オリジナルのFTOと比較しても遥かに高性能かつ小型化されており、

基本的にはパイロットはならず、自立型AIで戦闘を行う。

又、『ゼロシステム』も搭載しており、発動させれば更に戦闘力が上昇する。

パイロットが自立型AIの為、ゼロシステム使用に伴うリスクはほぼ皆無である。

『 主な武装及び機能 』

- ・ GNビームサーベル
- ・ GNクロー
- ・ GNミサイル
- ・ GNメガランチャー
- ・ GNファング×10
- ・ GNフィールド
- ・ ゼロシステム

【 黒い新型FTO（ランティス・ゼノ専用機） 】

イーグルがランティス・ゼノ専用機に特別に改修した新型FTO。量産機と違い、ボディーカラーは黒を基調としているほか、黒いマントを纏っているのが特徴である。

ランティス・ゼノの技量や魔力を最大限に生かす為、ゼロシステムではなく『阿頼耶識システムType E』を搭載して

いる。

又、武装も大型のGNバスターソードにランティス・ゼノの魔力をダイレクトに纏わせることができるよう改良した

『大型GNバスターソード改』のみである。

『主な武装及び機能』

・大型GNバスターソード改

・阿頼耶識システムType E

第51話 集合!!未知なる新戦力!!

く キャツスルドラン艦内 く

美香「あれ?ここは……」

と、美香が目覚ますと、そこは白いベッドの上だった。すると美香の顔を少女が覗き込む。

?「良かった。無事に起きたみたいね。」

?「目を覚ましたわね。」

すると多くの女性達が美香の元に駆け寄る。

?「さてと……これでもう大丈夫と思いますが、体の具合はいかがですか?」

美香「ありがとうございます!!もうすっかりよくなりました。」

あの……助けていただいて失礼ですけど、あなた方は?」

エミリア「ああ、驚かせてごめんなさい!!」

私はエミリア。異世界から来た仲間よ。」

テントモン「ワイはテントモンと言いますねん。」

アクア(このすば)「私はアクア!女神よ。」

ゴマモン「オイラはゴマモン!」

ねね「私はねね。よろしくね。」

パルモン「パルモンよ。」

元姫「王元姫よ。」

ピヨモン「ピヨモンよ。」

ラフタリア「ラフタリアです!」

テイルモン「テイルモンだよ。」

ナミ「私はナミ。」

メイクーモン「メイクーモン。」

アグモン「アグモン!」

ガブモン「ガブモンだ。」

コレット「私はコレット。コレット・ブルーネルだよ。」

パタモン「僕はパタモン!」

萌香「私は萌香。赤夜萌香よ。」

ギルモン「僕はギルモンだよ！」

命「私は卯都木命。宜しくね。」

レナモン「レナモンだ。宜しく頼む。」

スワン「スワン・ホワイトデース。」

テリアモン「僕はテリアモンだよ！」

と、美香に自己紹介をするB・D・Sのメンバー達。

美香「ありがとうございます!!私の名は『小室美香』」

ラスト・ウォーリア及びグラン・ゲインズの隊員です!!」

ねね「やつぱりあなた、グラン・ゲインズだったのね!!」

萌香「デイドの予想通りだったわね。それなら話が早いわ!!」

エミリア「あの…もしよろしければこの次元の事をお聞かせ願えませんか？」

私達も先程ここへ来たばかりですので…。」

美香「ええ、もちろんです!!ですけど、私が知ってることなんて

わずかな事ですけど、それでもよかったですら!!」

と、美香はB・D・Sのメンバーにこの次元の事や

これまでの事を一通り話し始めた。

元姫「そんなことがあったのね。」

スワン「それは大変だったデースね!!」

アクア（このすば）「でもデイドの話じゃ、

そのマサトって男の子はいなかったみたいよ。

その場にいたのはあなた一人だけだったって。」

美香「そう…ですか…。マサト君…」

どうして… どうして私を置いて…。」

と、マサトがああ場になかった事を聞かされた美香は

大粒の涙を流しながらそう言った。

エミリア「美香さん…。」

命「美香さん…こんな言い方は無責任になるかもしれないけど、

彼はきつと生きてると思うわ。だから…そんなに悲しまないで。

きつとマサト君もあなたの悲しみ顔は見たくないと思うか

ら…。」

と、命は素晴らしいながら美香をそつと抱きしめた。

美香「命さん… そんな事ないです。ありがとうございます…。」
ねね「美香さん…。」

ナミ「今はいっぱい泣いたらいいわよ!!さてと… 今、聞いた話だと

確かにこの次元も問題だらけみたいね。これからどうする?」

萌香「今、デイドから連絡が来たわ。一度、撤退して

ラスト・ウォーリアって基地にいるから来てくれだそうよ。」

美香「ラスト・ウォーリアに…?」

命「あなたの基地ね。ちようどよかったじゃない!!」

元姫「だけど、撤退した?デイドが?」

アクア(このすば)「珍しいわね。敵は必ず倒す信条のアイツが…。」

エミリア「何かアクシデントでもあったのでしょうか…?」

萌香「どうやらその敵も厄介な物を持ってみたいね。

まあ良いわ。とりあえず私達もデイド達と合流しましょう

!!」

一同「了解!!」

と、キャツスルドランはラスト・ウォーリアへと向かっていった。

そして…「new page」

く その少し前 く

デイド「さーてと… さっさとこいつ等を蹴散らすぜ!!」

ソニック(ダブルオーアマテラス)「おう!!」

凱(ガオファイガー)「ああ!!」

イーグル「いいでしょう… 行きなさい!!」

新型FTO4体「… (GNファンク)」

「ババババババババババババババババ!!」

キュアソード「ちよつと!」

キュアエース「またあれなのですか!」

と、新型FTO4台は一齐にGNファンクを射出し、

デイド達を攻撃するが…

ソニック（ダブルオーアマテラス）「遅いぜ!!!」

「ズバババババババババババババババ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、ソニックはそう言いながら約40機ものGNフアングを凄まじい加速で全て叩き落した。

イーグル「何…?」

キュアホワイト「は…速い!」

アンス「あれだけのGNフアングをあんな一瞬で!」

キュアロゼッタ「何てスピードなのですか!」

イーグル「くっ…ならばこれはどうですか?」

新型FTO4体「…（ゼロシステム）」

「キーーーーー…!!!」

と、新型FTO4体は『ゼロシステム』を発動させて、デイド達に攻撃を仕掛けていった。

凱（ガオフアイガー）「動きが変わった!」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「まさか、『ゼロシステム』とは

な!!」

デイド「そんなの関係ないぜ!!行くぞ凱!!ソニック!!」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「天叢雲剣!!!」

凱（ガオフアイガー）「ブロウクンファントム!!!」

新型FTO3体「!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、ソニックと凱はゼロシステムで強化されたはずの新型FTO3体を

瞬く間に振り返り討ちしたのであった。そして最後は…「newpa

ge」

新型FTO「!!!」（GNクロー）」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、最後の一体となった新型FTOはデイドに攻撃を仕掛けるが…

吹き飛ばした。そして大ダメージを受けたランティスは
仰向けで倒れてしまった。「new page」

ランティス（魔神）「あ……が……あ……」

ナツメ「ラ……ランティスさんが!？」

キュアホワイト「そ……そんな!？」

キュアエース「あの黒い機体……急に動きが変わりましたわ!!」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「お……おいデイド、あれはまさか……」

デイド「ああ、間違いない……『阿頼耶識システム』か!!」

ケースケ「『阿頼耶識システム』?」

レジーナ「何よそれ?」

た 凱（ガオファイガー）「機体の性能を限界まで引き出す目的で作られた

有機デバイスシステムの事だ。

ばれる パイロット脊髄に埋め込まれた「ピアス」と呼

インプラント機器と操縦席側の端子を接続し、

ナノマシンを介してパイロットの脳神経と

機体のコンピュータを直結させることで、

パイロットが機体の一部になったような

感覚となるんだ。」

トウマ「そうか……だから、あのランティスの技量がよりダイレク
トに

反映されてあれだけの力になっているんだ!!」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「ああ。その通りさ!!」

キュアソード「つて、呑気に解説してる場合じゃないわよ!!」

デイド「おっと、そうだった!!俺が行くぜ!!みんなは他のザコを
頼む!!」

シャイニー・ルミナス「は……はい!!」

キュアロゼッタ「わかりましたわ!!」

と、デイドはそう言いながらランティスの所に向かっていき、

他のメンバーはまだうじゃうじゃいるセフィーロ兵の相手に向かった。

ランティス（魔神）「ぐうう……。」

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「どうした…。もう終わりか？ならば!!」

「ジャキツ!!」

と、ランティス・ゼノはそう言いながら魔神ランティスに剣を突き付ける。

海（セレス）「い…。行けない!!」

風（ウインダム）「に…。逃げてください!!」

ランティス（魔神）「くっ…。!?」

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「さらばだ…。もう一人の私よ!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ノヴァ（レガリア）「い…。嫌……………っ!!!!!!」

光（レイアース）「ランティス……………っ!!!!!!」

デイド「待てええええええええええ!!」

と、ランティス・ゼノにとどめを刺されそうになった

ランティスをデイドが助けようとしたその時…。「new pag

e

」
「……………!!!!!!」

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「何!!!!!!」

? 「悪いが、そいつをやらせるわけにはいかないんでな!!」

と、そこへ迷彩服を着た『あの男』がランティス・ゼノに向けて機関銃を発射し、動きを止めた。

ピエラート「ん…。?」

デイド「んなつ…。アイツは!」

キュアエース「あ…。あの方は!」

士「よう!!生きてたか?お前達。」

キュアブラック「つ…。士さん!!!!」

キュアホワイト「ど…。どうしてこんなところに!」

士「まっ…。その話は後だ。しかし、まさか『B・D・S』の

連中までこの次元に来ていたとはな…。」

ソニック(ダブルオーアマテラス)「悪いかよ!」

凱(ガオファイガー)「そういうお前こそ、何が目的だ?」

士「フン…。」

イーグル(魔神ザガート)「おやおや… また賑やかになってきましたね。」

ランティス・ゼノ(黒いFTO)「貴様… 何者だ!」

士「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ!!」

「スツ…」

士「変身!!」

電子音「KAMENRIDE! DECEDÉ!!」「シユシユシユシユ
シユ!!!」

と、突如、メンバー達の前に登場した門矢士は取り出したカードを装着していた『ネオディケイドライバー』と

呼ばれるベルトに通すと、『仮面ライダーディケイド』に変身を果たした。「new page」

ディケイド「さてと… 行くか!!」

ケースケ「ディケイド来たーーーーーっ!!!!!!」

ハルヤ「相変わらずだなあの男は…。」

ナツメ「でも、何か行ける気がする!!」

光(レイアース)「土さん…。」

ディケイド「お前はそいつを連れて下がっている。

おい、『ディード・ブラウ・ヴィゼイレー』。

お前も手伝え!!」

ディード「俺に指図するなディケイド!!俺は俺でやらせてもらうぜ!!」

ディケイド「フン… まあいいだろう。行くぞ!!」

「チャキン!!」

電子音「KAMENRIDE! KABUTO!!」

「シューーーーーーン…。」

ディケイドカブト「……………」

と、デイクイドは再びカードをネオデイクイドライダーに通すと『仮面ライダーカブト』に姿を変えた!!

海(セレス)「姿が変わった!!」

風(ウインダム)「この前見たライダーとは違うみたいですね。」

ノヴァ(レガリア)「何か、カブトムシみたい。」

ソニック(ダブルオーアマテラス)「凱、俺達はどうする?」

凱(ガオファイガー)「ここはあの2人に任せるしかなさそうだな。」

俺達はセフィーロ兵を蹴散らすぞ!!君達も良

いか?」

キュアダイヤモンド「はい!!」

キュアソード「もちろんよ!!」

キュアハート「みんな、行こう!!」

と、ランティス・ゼノの相手をデイドとデイクイドに任せたソニック達は、

キュアハート達と共にセフィーロ兵達の討伐に向かった。そして…「new page」

デイクイドカブト「まずはこいつだ!!」

電子音「ATTKRIDE!LOCKUP!!」

「シュン!!」ドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

ランティス・ゼノ(黒いFTO)「チィ…!! ちょこまかと!!」

と、デイクイドカブトは「クロックアップ」を発動させると、

ランティス・ゼノに高速で連続攻撃を仕掛けた。

デイド「あ… あいつ!!俺も行くぜ!!キバット!準備はいいか!?!」

キバット「よっし!キバって行くぜ!ガブツ!」

キバットがデイドに噛み付いた途端、彼の身体に模様が浮かび、ベルトが装着される。

デイド「変身!」

デイドはベルトにキバットを装着した途端、仮面ライダーキバとなった。

デイド(キバ)「……………」

「キーーーーー……」

「ディケイド響鬼……………」

と、ディケイドカブトはそう言いながら今度は

『仮面ライダー響鬼』へと姿を変えた。

ケースケ「また姿が変わった!!」

アキノリ「もう何でもありかよ!」

ハルヤ「あの姿は…まさか鬼族か!」

ディード(キバ)「いや違う。あれもれっきとした仮面ライダーだ!!

それなら俺も!!!ウエイクアップ!!」

「ピーヒョロピーヒョロ」 「バアアアアアアアアアア!!!」

と、キバも負けじとウエイクアップフェッスルを鳴らすと、

周囲が闇夜に包み込まれていく。その直後…

ランティス・ゼノ(黒いFTO)「喰らうがいい!! 『闇爆斬撃(ダー

クセイバー)!!」

「ズバアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ランティス・ゼノはそう言いながら最強技の一つである

『闇爆斬撃(ダークセイバー)』を発動させた。そして… 「new pa

ge」

ディケイド響鬼「こいつで決める!!」

電子音 「FINAL ATTACK RIDE HHHHHH

BIKI!!」

ディケイド響鬼「音撃刃 鬼神覚声!!!」

ディード(キバ)「ダークネスムーンブレイク!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ブオワアアアアアアアアアアア!!!」

ランティス・ゼノ(黒いFTO)「な…何だと!?ぐわあああああ

ああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドッカーーーーー……!!!」

と、ディケイド響鬼とキバはすかさず必殺技を放ち、

『闇爆斬撃(ダークセイバー)』を一瞬で粉碎すると

そのままランティス・ゼノに直撃して大爆発を起こした。

そしてその後、デイドとデイケイドは元の姿へと戻った。
ランティス・ゼノ（黒いFTO）「あ… あぐ…。」

「シューーーーーーッーン…。」

デイケイド「まあ、こんなものか… 案外、あっけなかったな。」
デイド「何、言ってるやがる!? それは俺のセリフだ!!」

イーグル「… (デイドにデイケイドと言いましたか。

あのランティスをあっさりと追い詰めるとは、

少々面倒な事になりましたね。仕方ありません…

『アレ』を使うとしましょうか…。』

と、ランティス・ゼノをあっさりと追い詰めたデイドと

デイケイドに対して、イーグルは警戒した表情を浮かべながら

そう心の中で呟いた。そして… 『new page』

キュアブラック・ホワイト「プリキュア・マールスクリュー・マツクス!!」

キュアハート達「ロイヤルラブリーストレートフゥッッシュュ!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

セフィーロ兵の大群「おおおおおおお…!!」

「シューウウウウウウウウウウ…。」

!!!!!!

と、プリキュア達が必殺技を放つと、セフィーロ兵の大群は

断末魔の叫びをあげながら浄化されていった。

ソニック（ダブルオーアマテラス）「よし、ザコは片付いたぜ!!」

凱（ガオファイガー）「デイド達の方もどうやらケリがつきそうだな!!」

アキノリ「すげえな、あいつ等…。」

トウマ「うん。あつという間に形勢が逆転したね!!」

ナツメ「これならみんなが来る前にもう一つのセフィーロを倒せちゃうかも!!」

ハルヤ「… だといいがな。」

アヤメ「え?」

ハルヤ「… (あのイーグルとかいう男… まだ何かを隠しているな。)」

ランティス・ゼノ「ぐうう……。」

デイケイド「残念だったな。」

デイード「どうやら俺達の勝ちみたいだな。降参するなら今の内だぜ？」

そのこのピエロみたいな恰好した奴もな!!」

ピエラート「……と、ああ言ってるのであるがイーグル殿……」

どうするのであるか?降参するであるか?」

イーグル「フツ……御冗談を。勝負はまだこれからです……」

ではエメロード姫……お願いいたします……」。「new p

age」

「シューーーーーー……。」

エメロード姫「~~~~~!!?~~~~~……。……」

シャイニールミナス「えっ!!!」

キュアホワイト「な……何!!!これ……?」

キュアブラック「か……体の力が……抜けていく……」

「ドサドサツ!!」

と、突如、古城の中からエメロード姫の歌声が響き渡ると、メンバー達は体の力を奪われて、次々と倒れていく。

ソニック（ダブルオーアマテラス）「こ……これは!!」

凱（ガオフアイガー）「まずいな……あの歌声のせいなのか!」

デイケイド「まさか、こんな奥の手があるとはな……」

デイード「ああ……少しあいつらを甘く見ていたか。」

イーグル（魔神ザガート）「フフ……エメロード姫のご加護がある限り、

我々に敗北はありません……」

か……さて、まずはあなた方から消えていただきましょう

伝説の魔法騎士（マジックナイト）達よ!!」

「ブウウウウウウウウ……」。「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオ!!!」

「ドドドドドドドドドドドツカーーーーーー!!!」

光?海・風・ランティス・ノヴァ「うわあああああああああああ
ああ!!!」

と!!イーグルはそう言いながら、魔神ザガートの胸部から
強大なエネルギー波を光達に向けて発射し、
吹き飛ばして大ダメージを与えた。そして、光達はそれぞれ
元の姿へと戻っていた。「new page」

「シューーーーーーシューーン。。。」

光「あ。。。あ。。。あ。。。」

海「くうう。。。」

風「ううう。。。」

ランティス「ひ。。。光。。。」

ノヴァ「あ。。。う。。。」

キュアソード「ひ。。。光達が。。。」

キュアエース「で。。。ですがわたくし達も。。。」

イーグル（魔神ザガート）「フッフ。。。ではとどめと行きましよう
か。」

「ブウウウウウウウウン。。。」

と、イーグルはそう言いながら再び魔神ザガートの胸部に
魔力をチャージし始めていく。

デイド「く。。。くそつ。。。このままじゃあ。。。」

ディケイド「仕方ない。。。ここは一旦引くぞ!!」

「シューーーーーーシューーン。。。」

と、ディケイドはそう言いながらオーロラカーテンを展開すると、
メンバー全員をその場から撤退させた。

ピエラート「おや?逃げられたようである!!」

イーグル（魔神ザガート）「構いません。次に相まみえる時が

彼女達の最期となりましょう。。。

ではピエラート殿。。。準備ができ次第、

ラー・パレスへと参りましょう。」

ピエラート「わかったのである!!」

と、グラン・ゲインズやB・D・Sのメンバー達を追い払った

イーグルはそう言いながら準備を整えて、ラー・パレスへと赴いていくのであった。そして…「new page」

く ラスト・ウォーリア基地 く

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー…。」

士「邪魔するぞ。」

アクア「待つてたわ士さん。お久しぶりね!!それにみんなも…お疲れ様!!」

マナ「アクアさん!!光さん達を早く治して!!」

光「ううう…。」

さくら「光さん!？」

クレフ「海!!風!!」

小狼「ランティスさんにノヴァも!!」

ケロベロス「酷い怪我やな!!」

アクア「白魔法（ホワイトアタック）・治癒（ホイル）!!」

「パアアアアアアアアアア!!」

と、アクアは白魔法（ホワイトアタック）・治癒（ホイル）を発動させて、

重傷を負っていた光達を回復させた。

クレフ「みんな…大丈夫か!？」

海「クレフ…。」

風「ご心配をおかけしました。」

光「ごめん… 私達、負けちゃった。」

零「謝る必要などない。」

メリオダス「そう悲観すんなって!!」

悟空「おめえ等、よく頑張ったじゃねえか!!」

なぎさ「でも、士さんやデイドさん達がいなかったら

どうなっていたか…。」

アクア「ええ。私達も見えていたわ。皆さん、ありがとうございます。

グラン・ゲインズの隊長としてお礼を言わせていただきます

ね!!」

ソニック「良いって良いって!!」

凱「それが俺達の任務だ。気にしないでくれ!!」

デイド「そんじや改めて自己紹介させてもらうぜ。」

俺は特殊組織B・D・S(ブラウ・ドラツヘ・シユルツ
ア)所属で

リーダーの『デイド・ブラウ・ヴィゼイレ』だ。よろ
しくな!!」

アクア「私は地球連邦軍『次元管理局』所属、

独立外部部隊『グラン・ゲインズ』隊長の

アクア・マークユリー大佐です。こちらこそよろしくお願
い
します!!

それにしても… B・D・Sですか?初めて聞いたんです
けど…

もしかしてあなた達は…?」

デイド「そしたら… まずはそこから話すか!!」

と、デイドはB・D・Sの事、そして自分達の世界の事を

グラン・ゲインズのメンバー達に説明を一通り行った。「new p
age」

メリオダス『クロスフロンティア』か…。」

マーリン「そのような異世界があったとは驚きだな。実に興味深
い…。」

平家「そしてあなた方B・D・Sはその世界の治安を守るための組
織…

という解釈でよろしいのですかね?」

ソニック「まあ、そんなところだな。」

凱「さすがに色んな垣根を越えた人や種族が集まっている世界だか
らな。

当然ながら、悪い心や考えをもった連中もたくさんいる。」

デイド「そんな悪しき連中から『クロスフロンティア』の

平和を守るのが俺達の役目という訳だ!!」

ひかる「キラやば☆!!」

ララ「何か、かつこいいルン!!」

ビルス「まあ、ご立派な考えだね。僕にはどうでもいい事だけど。

ところで君達……なぜわざわざそんな異世界から

この世界に来た訳？ そんなに治安が悪い世界なら、

こんなところにいる場合じゃないと思うんだけど？

しかも、リーダー自らが。」

ソニック「その辺は心配いらさないぜ、ウサギの神様!!」

凱「B. S. Dには俺達が少々抜けても問題ないくらい規模が大き
いからな。

それに、『クロスフロンティア』には俺達の他にも

たくさんの特異組織が存在しているからな。」

ビルス「成程……っておい!!誰がウサギだ!!破壊するぞこのネズミ
!!」

ひかる「いいじゃんウサギさん。ホントの事なんだから!!」

鬼太郎「良かったなねずみ男。仲間が増えて。」

ねこ娘「ありがたく思いなさいよ。」

ねずみ男「う……うるせえ!!あんなハリネズミより

俺の方がイカしてるだろうが!!」

アデル「どこがだ?」

アニエス「ソニックの方がずっとイカしてる気がするけど?」

ソニック「だろ?」

犬山まな「うんうん。」

ねずみ男「お……お前等、この裏切り者……!!!」

バン「まあ……んな事はどうでもいいぜ。おい、次はお前の番だぜ
♪」

マーリン「門矢士……お前がまたこの世界に来た理由は何だ?」

リータ「士さん達がこの次元にまた来たって事は……」

アンズ「まさか!?!」

ラピス「またバイキンショッカーの奴らが

攻めてくるって言うんじゃないやねえだろうな!?!」

メリオダス「けどよ……あの時、キングダークの言った通り

バイキンショッカーはこの次元には攻めてこないんだ

よな?」

士「確かにそうだ。バイキンシヨツカー自体が

この次元に攻めて来る事はない。ないんだが…」

真琴「ないんだが…何よ?」

レジーナ「勿体ぶらずに言いなさいよ!!」[new page]

士「ジェネシスからの情報だが、どうやらキングダークは

桑田進之介以外が『次元の王』になる事は認めないって

言ってるやがるみたいだ。」

マナ「シン以外は認めない…?」

目玉おやじ「…それが如何したと言うんじゃ?」

鬼太郎「何か困る事でもあるのか?」

士「分からないのか? 桑田進之介以外が次元の王になる事は認めない。

つまりだ… 桑田進之介が他の誰かに完全に敗北して

次元の王になれなかったとしたら奴は如何すると思う?」

アクア「それって…士さんまさか!」

士「ああ… 奴は桑田進之介が次元の王になれなかった場合は

この次元を見限るつもりだ。」

デイド「見限るって…如何言う事だ?」

士「つまり桑田進之介が完全に敗北し、次元の王になれなかった場合、

奴はこの次元に興味をなくす。つまり他の奴を次元の王にする

くらいなら

奴は次元の王の力を自分の物にするつもりだ。」

ナツメ「つまりそれって…」

アキノリ「バイキンシヨツカーがまたこの次元に

攻め込んで来るかも知れないって事かよ!」

なぎさ「ええっ!」

と、士の話聞いたメンバー達は進之介が敗北し、次元の王になれなかった場合、

バイキンシヨツカーが再びこの次元に攻め込んで来ると思い慌て

たが・・・「new page」

アクア「いえ・・・恐らくもつと悪いかも知れない。」

真琴「え？」

亜久里「如何言う事ですか？」

士「女隊長の言う通りだ。奴は次元の王の力を自分の物にする為に

この次元事自分に取り込むつもりだ。」

バン「はあ!？」

キングダークが『次元大戦の世界』を自身に取り込むと聞かされて
グラン・ゲインズのメンバーは驚愕する。

凱「この次元を・・・取り込むだ!？」

ソニック「そんな事出来るのかよ!？」

士「奴には元々存在の概念なんてない完全なる無その物だ。」

だから次元を丸事取り込む何て簡単な事だ」

マーリン「つまりこう言う事か。キングダークは我々がもし

ラー・カインに敗北すればこの次元を丸ごと飲み込んで

次元の王の力も何もかも自分の物にするつもりだと言う

事か？」

士「そう言う事だな。だから俺達はそうさせない為に

再びジェネシスからの依頼を受けて

お前達に手を貸すよう、この次元にやってきた・・・という訳だ。

まあ、俺自身も桑田進之介がこれからどういった未来にたどり着

くのか

興味が湧いてきたのもあるがな。これからよろしく頼む。」「ne

w page」

デイド「成程な・・・確かにバイキンシヨッカーとキングダークの

事は

俺も少しは聞いたことがある。話は分かったぜ!! 面白い

う事なら

俺達もぜひグラン・ゲインズに協力させてくれ!!」

アクア「それはこちらからお願いしたいくらいですが・・・良いのですか？」

ソニック「ああ!!もちろんだぜ!!」

凱「これからよろしく頼む!!」

メリオダス「イツシツシツ!!こちらこそな!!」

凱「ところで、一つ聞きたいことがあるんだが…。」

ひかり「どうしたのですか?」

デイド「その『次元の王』って誰だ?」

ソニック「後、その桑田進之介って奴…。」

ウイス「オホホホホ!!!まあそうですね。あなた達は先程

この世界に来たばかりと言われてましたし!!」

亜久里「おほほほ!!その事でしたら、後程わたくし達が

じっくりくりと教えて差し上げますわ!!」

凱「ああ!!」「new page」

マーリン「ところで門矢士…先程『俺達』と言っていたが、

見た所ここにいるのは、お前一人だけのようだが?」

士「そう言えばまだ来ていないようだな…あいつ等、どこで油

売ってやがる?」

シヤナ「一体、誰が来るの?」

悠二「多分、あの海東って人は来るんだろうけど…。」

アラストール「あの『エクストリームプリキユア』という者達か?」

悟空「おお!!確かにあいつ等が来たら頼りになるなあ〜!!」

士「残念ながら、ゆな達は今、ジエネシスの下でみっちり修行中だ。

それに、桑田進之介がいる限り、この次元にはしばらく

バイキンショットカーが攻めてくることはないが、

他の次元はそうは行かないからな。修行を終えたらバイキン

ショットカーに

攻め込められてる次元に派遣されることになるだろう。」

ひかる「そっか…。」

ララ「残念ルン…。」

士「その代わりと言っては何だが…ジエネシスが『ある世界にいる知り合い』に

頼んで、その世界のプリキュアを援軍としてよこしてくれてな。それも3組もだ。そいつらも中々の連中だぞ。」

マナ「プリキュアをですか!?!」
なぎさ「マジっ!?!」

ひかる「早く会いたくない!!」

光「でも…いくら援軍が来ても、エメロード姫のあの歌声がある限りは…。」

海「そ…そうよね…。」

風「まともに戦う事すらできなくなりますから…。」
メリオダス「まっ、俺もモニターで見てただけどよ、

まるで『慈愛』の戒言みたいだったからな。」

マーリン「確か、もう一つのセフィローは魔神族とも関係を持つていたな。」

もしかしたら、何かしらの方法を得て、その姫君の歌声に戒言の力を持たせたのかもしれない…。」

バン「おいおい…そいつは厄介だぜ♪」「new page」

デイード「心配すんなって!!方法ならこつちにもあるぜ!!」

ランティス「何…?」

ナツメ「本当!?!」

土「ほう…?どうするんだ?」

デイード「ずばり!!目には目を… 歯には歯を…『歌には歌を』だ!!」

零「…は?」

刻「なくんか、どつかで聞いたセリフだな大神君?」

泪「だけど、歌って言われてもな…。」

職員「沖原本部長!!」

沖原「どうした?」

職員「あの…上空に竜のような姿をした戦艦…というか、要塞みたいなものがこちらに着艦許可を求めていますか?」

と、職員はそういいながらモニターにその戦艦を映し出した。

ケロベロス「な…何やあれは!!!?

さくら「ほえええええええええええええええええええええええ!!!」

小狼「まさか…あの『ルウエス』達か!」

デイド「いやいや、違うぜ。あれは俺達の母艦『キャツスルドラ
ン』だ!!」

いいタイミングで来てくれたぜ!!」

ソニック「これで何とかかなりそうだな。」

凱「ちなみに、君達の仲間の小室美香という子もあの場で見つけて
あそこに保護している。エミリア達が治してくれていると思う
から

後で、会いに行くと良い。」

ラピス「マ…マジかよ!!」

アンズ「美香さんが!」

リータ「良かった!!でも…マサトさんは?」

凱「すまないが…彼はあの場にはいなかった。」

アヤメ「そ…そんな…。」

エンマ大王「そうか…だがありがとな、お前達!!」

美香だけでも助けてくれてよ!!」

アクア「そうね。沖原本部長、キャツスルドランに着艦許可を出し
てください!!」

沖原「ああ。了解した!!」

と、アクアがキャツスルドランに着艦許可を出したのと同時に…

「new page」

「シューーーーーー…。」

海東「やあ士。もう来ていたのか。それに久しぶりだね、

グラン・ゲインズ…。また会えて嬉しいよ!!」

えれな「確かあの人…。」

まどか「海東大樹さんでしたわね!!」

ユニ「ああ…あの泥棒ライダーニヤンね。」

ひかる「あっ!!ひよつとして後ろにいる子達…」

さつき士さんが言ってたプリキュア達かな?」

士「ああそうだ。ところでお前等、遅かったな。何やってたんだ？」
？「あーっ！っ！！士さんひどい！！」

？「私達はあの後早速、レグルス兵とかいう連中と闘ってたのよ。」
？「まあ、良いじゃないですか…。無事に合流できたんだし。」

海東「それじゃ、君達…。自己紹介でもしてもらおうか？」

安「はい！！あたしは神童安です！！」

比奈「私は剛力比奈だよ！！」

麗祢「私は愛沢麗祢なのです。」

藍子栖「僕は音波藍子栖さ！！」

沙淡「私は鬼龍院沙淡よ 宜しく」

鈴音「私は狩谷鈴音です」

蓮華「私は狩谷蓮華だよ…。」

李酔「僕は飾李酔…zzzzzz。」

魔門「あたしは桐生魔門だ、宜しくな！」

明日奈「私は星蘭明日奈ですわ☆」

溜司亜「私は天上溜司亜よ。宜しく！！」

ちひろ「初めまして！土岐ちひろです」

ゆづき「私は南雲ゆづきよ！」

あまね「僕は義家あまねだよ！」

みお「あたしは轟みおだぜ！」

さら「私は天宮さらですわ」

と、海東に続いてオーロラカーテンから

総勢15名の少女達が登場し、それぞれ自己紹介をしたのであつた。「new page」

ほのか「こ…この子達…。」

なぎさ「みんなプリキュアなの!？」

マナ「すつごーい!!こんなにいっぱいいるんだ!!」

真琴「でも…ちよつと多すぎじゃない？」

ありす「寝ていらっしやる方もいますし…。」

士「まあ…こいつらの世界の事もあるから本当はもう少し

人数を少なくしようとジェネシスも考えていたみたいだったが、

この次元の話をしたら全員行きたいと言いついてな。
どうにも收拾がつかなくなつて結局はみんな連れてきたという
訳だ。

とりあえず仲良くしてやってくれ。」

ひかる「もちろんだよ!!」

ララ「よろしくルン!!」

安「こちらこそ!!」

沙淡「お手やわらかに。」

ちひろ「お会いできて光栄です!!」

と、安達15名の少女達はそれぞれグラン・ゲインズのメンバーに
挨拶を済ませて、親交を深めていくのであった。

そして、彼女達のプリキュア形態とその実力はもう一つのセフィー
ロとの

最後の戦いで明らかになる事になる。そして…「new page」

レグルス帝国軍基地 ラー・パレス

ラー・カイン「よく来た、イーグルよ。歓迎するぞ。」

イーグル「ありがとうございますラー・カイン様…」

この私イーグルそして… 我らがエメロード姫も

この世界に降臨できたことを心より喜ばしいかぎりでご
ざいます。」

ラー・カイン「ピエラートよ… お前もご苦労であった。

お前の情報にあつたB・D・Sという平行次元の者
達、

そして門矢士…。

『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』を

更に彩る虫ケラ共が増えたのは良い事だ。フフ
フ…。

ピエラート「ありがとうございますですである!!所でラー・カイン様、
これからどうするのである?」

ラー・カイン「これからイーグル達はグラン・ゲインズとの決戦に

赴くこととなる。

ささやかではあるが、こちらからも援軍を出すとしてよ
う。

キャロルよ…。」

キャロル「はい、お呼びでしょうか？ラー・カイン様…。」

ラー・カイン「『例の新型魔神』と『ダンプ・ジョー』を

イーグルに提供してやるがいい…

どちらとも『テスト』をするにはちょうど良かろ

う…。」

キャロル「承知いたしました。」

イーグル「これはラー・カイン様…ありがとうございます。

まさか貴重な新型魔神を提供していただけたとは…。」

ラー・カイン「良い。元々はそちらの技術で開発したものだ。

お前達にも使う権利はある。」

チン・ゲンサイ「フェツフェツ…

それにしてもダンプ・ジョーですとは。」

ザマス「奴は確か、貴様等の本部に強制送還されて

投獄されていたのではなかったのか？」

ラー・カイン「そうだ。だが、『皇帝陛下』がダンプ・ジョーに

ご慈悲を与えてくださり、更なる強化を施して

送ってくださったのだ。早速試してみようと思っ

な。」

ゴクウブラック「…（『皇帝陛下』だと？そのような奴がいたのか
？）」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ…『皇帝陛下』ですか…

もう数十年お目にかかれてないのう…

じゃが、ご健勝なら何よりじゃ!!」

イーグル「ではラー・カイン様…私はこれで失礼いたします。

勝利の暁にはまたご挨拶に伺います。それでは…。」

「シューーーーーー…。」

と、イーグルはそう言いながらその場から姿を消していった。「n

ewpage]

ザマス「… フン!! 相変わらず何を考えているのか

わからんなあの人間は!!」

ゴクウブラック「ラー・カインよ… まずあり得んだろうが、

もし、イーグル達がグラン・ゲインズを倒す事が

あつたら

その後はどうするつもりだ？」

ピエラート「今は大人しくしててであるが、いずれはラー・カイン様に

牙をむく可能性も無くはないである!!」

ラー・カイン「知れた事… その時は『聖なる巨光(ラー・バルス)』
で

イーグル共を一掃してやるまでだ。

もし次の戦いでグラン・ゲインズが勝とうが

イーグル共が勝とうが… 我らの勝利に揺るぎはな

い。」

キャロル「まあ… さすがはラーカイン様。」

ピエラート「その通りである!!」

チン・ゲンサイ「フェツフェツ… じゃが儂としてはぜひと
も

グラン・ゲインズと手合わせ願いたいもんじやのう

!!」

ラー・カイン「… (だが、不確定要素があるとすればツアイトを
敗走させたという『サイヤ人』共か… そしてもう一

つ…)」

と、そう心の中で呟くラー・カインの背後で『ある人物』が

気配を完璧に消した状態で誰にも悟られることなくそびえ立って
いた。「newpage」

? 「フフフ… 『ラー・カイン』よ… そんな先の心配を

あなたがする必要はありません。

なぜなら… いずれあなたは『この私』の偉大なる

リーダーのデイドを始めとした隊員数名を『次元大戦の世界』の危機を救う為に派遣した。

「デイド・ブラウ・ヴィゼイレ」

特殊組織「B・D・S」の若きリーダーである

『クロスフロンティア Dragon Soul』の主人公で年齢は17歳。

容姿は青い龍人で背中に翼、尻尾が生えているのが特徴である。

面倒見がとてよく、仲間を大切にすること

全員が生きて帰る信条を持っている。

さらに女性にはよくモテる為、現在多くの彼女がいる。

戦闘スタイルは青龍拳法と我流格闘術。

武器はダブルブレード（ブルードラゴンブレード）。

また、瞬間装甲装着システム「BDシステム」の装着と

仮面ライダーキバに変身する事が可能。

『BDシステム』

特務機関B・D・Dが産み出した瞬間装甲装着システム。

通常は目に見えない程の微粒子レベルにまで分解された武装内蔵型装甲が

装着者のまわりに浮遊し、起動音声認識コード『ブレイズ・アップ』により

僅か0.005秒で瞬間装着される

同時にパワーアシスト機能によりキャストの

二倍のパワーと三倍の機動性を弾きだす。

運用時間は連続で50日間（ボルテツカを八発使用した際は20日間）

傷を負ってもナノマシンによる処置により

瞬時に修復が可能で酸素も同様に保つ

しかし量産性を度外視したのとデイド専用チューンが施された結果、

実質的にデイド専用スーツとなっている

外観は龍をモチーフとした意匠造形で青地に金の装飾が施されている。

・技

『青龍螺旋拳』

青龍拳法第一奥義。片手の拳を握りしめ、

螺旋のエネルギーを拳に纏わせる。その威力は絶大。

『青龍波動砲』

青龍拳法第二奥義。リュウの真空波動拳を元にした技で、

山を貫く威力を持つ。

『氷竜蹴』

青龍拳法第三奥義。氷のオーラを足に纏わせて強烈な蹴りを繰り出す。

『青龍地獄落とし』

青龍拳法第四奥義。相手を掴んで上空に飛び、急降下しながら

地面に強烈に叩き付ける。しかもクレーターの跡ができてしまう

事も……

『雷龍連撃』

青龍拳法第五奥義。両拳に雷のオーラを纏わせ、神速のパンチを連続する。

『紅蓮昇龍拳』

青龍拳法第六奥義。リュウの昇竜拳を元にしており、「拳に炎のオーラを纏っている。」

『神殺』

青龍拳法第七奥義。神を殺す拳と言われており、その一撃を喰らった邪悪な者は消滅してしまう。

『ブレードスロー』

ダブルブレードをブーメランの様に投げ飛ばして敵を斬り裂く。『ブレードハリケーン』

ダブルブレードを頭上に回転させて強烈な竜巻を起こして
敵を巻き込んでダメージを与える。但し味方まで巻き込む事も

……

『ボルテツカ』

BDシステムの装甲から銃口を出して光を貯め、青き龍の粒子光を
発射する。

「ダブルオーアマテラス」

容姿：ダブルオークアンタのホワイトカラーVerで

背中のバックパックがウイングガンダムゼロ(EW)の白い羽。

搭乗者：ソニツク・ザ・ヘッジホッグ

『武装』

GNソードV

(GNバスターソード)

(GNバスターライフル)

GNソードビット×6

GNシールド(GNビームガン)

GNソードIVフルセイバー(GNガンブレイド×3)

天叢雲剣

八咫鏡

八尺瓊勾玉

雪片式型

零落白夜

雪羅

ダブルオークアンタと白式が融合した最強クラスのISでソニツク専用機。

さらに八尺瓊勾玉を光らせる事によって三種の神器の力が覚醒する事で、

零落白夜と雪羅の能力も発動可能となっている。

さらに零落白夜と雪羅のデメリットも出ない為、完全無敵のISと称されている。

【 B. D. Sの参加メンバー 】

- 赤夜萌香（ロザリオとバンパイア）
アグモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
ソニック・ザ・ヘッジホッグ（ソニックシリーズ）
ガブモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
王元姫（真・三國無双シリーズ）
ピヨモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
エミリア（Re：ゼロから始める異世界生活）
テントモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
ねね（戦国無双シリーズ）
パルモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
アクア（この素晴らしい世界に祝福を！）
ゴマモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
コレット・ブルーネル（テイルズシリーズ）
パタモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
ラフタリア（盾の勇者の成り上がり）
テイルモン（デジモンアドベンチャーシリーズ）
ナミ（ONE PIECE）
メイクーモン（デジモンアドベンチャーTri）
獅子王凱（勇者王ガオガイガーシリーズ）
ギルモン（デジモンテイマーズ）
卯都木命（勇者王ガオガイガーシリーズ）
レナモン（デジモンテイマーズ）
スワン・ホワイト（勇者王ガオガイガーシリーズ）
テリアモン（デジモンテイマーズ）

マナ「よーし、あたし達も!!」

なぎさ・ほのか・ひかり「うん!!」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ「うん!!」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

ひかり「ルミナス・シャイニング・ストリーム!!」

「ピカアアアアアアアアアアアアアアア!!」

キュアブラック「光の使者…キュアブラック!!」

キュアホワイト「光の使者…キュアホワイト!!」

ブラック・ホワイト「ふたりはプリキュア!!」

キュアホワイト「闇の力のしもべたちよ!!」

キュアブラック「とつととお家に帰りなさい!!」

シャイニー・ルミナス「輝く命…シャイニー・ルミナス!

光の心と光の意志、総てをひとつにするため

に!」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ

「スターカラーペンダント!!カラーチャージ!!」

「キラキラキラキラキラ☆」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ

「きらくめくくく♪星の力で♪憧れの♪わたし描くよ♪
トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク
ルプリキュア♪

スタートウインクル♪スタートウインクルプリキュア♪!!アア
くく!!」

キュアスター「宇宙(そら)に輝く♪キラキラ星!!キュアスター!!」

キュアミルキー「天にあまねく♪ミルキーウェイ!!キュアミルキー

!!」

キュアソレイユ「宇宙を照らす!灼熱のきらめき!キュアソレイユ

!!」

キュアセレーネ「夜空に輝く!神秘の月あかり!キュアセレーネ

!!」

キュアコスモ「銀河に光る!虹色のスペクトル!キュアコスモ!!」

5人「スタートウインクル…プリキュア!!」

「ピカーーーーーーン!!」

マナ・六花・ありす・真琴「プリキュア!ラブリンク!
亜久里「プリキュア!ドレスアップ!」

「パアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

キュアハート「みなぎる愛!キュアハート!」

キュアダイヤモンド「英知の光!キュアダイヤモンド!」

キュアロゼッタ「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

キュアソード「勇気の刃!キュアソード!」

キュアエース「愛の切り札!キュアエース!」

5人「響け!愛の鼓動!『ドキドキ!プリキュア!』」

キュアハート「愛を無くした悲しい怪物さん達、

このキュアハートがあなただのドキドキ取り戻してみ

せる!」[new page]

士・海東「変身!!」

電子音「KAMENRIDE!DECEDEE!!」

「KAMENRIDE!DIEND!!」

「シュシュシュシュ!!!」

「デイケイド…!!!」

「デイエンド…」

ナツメ「私の友達…出てこい、朱夏!!」

トウマ「剣武魔神不動明王!!我に力を!!」

アキノリ「出てこい…幻獣朱雀!!」

ハルヤ「行くぞ!!」

「シューーーーーーン…」

朱夏「……………」

不動明王「……………」

朱雀「……………」

酒吞童子「……………」

シャナ「行くよ、アラストール!!」

アラストール「うむ。」

シヤナ・アラストール「卍解!!」

悠二「藍染!!」

「シューーーーーーッーン。。。」

シヤナ（卍解）「……………」

悠二（藍染）「フツ。。。」

光「私たちも行こう… レイアース!!」

海「出てきて… セレス!!」

風「ウインダム… お願い!!」

ノヴァ「レガリア!!」

ランティス「いでよ… 我が半身!!」

「ブオオオオオオーーーーーッ!!!」

レイアース（光）「……………」

セレス（海）「……………」

ウインダム（風）「……………」

ノヴァ（レガリア）「……………」

魔神ランティス「……………」

と、グラン・ゲインズのメンバー達は、

それぞれ変身を果たしていった。そして… 「new page」

安「あたし達も変身しましょう!!」

沙淡「望むところよ!!」

ちひろ「うん!!」

安・比奈・麗祢・藍子栖『プリキュア・ライドオン!!!』

電子音『R I D E O N』

と、まずは安・比奈・麗祢・藍子栖の4人がスマイルパクトに酷似した

アイテム機械のハート「ライドオンハート」を発動させると、

安達は臍だしでリボンやら何やらがついたヒラヒラした服を着ており、

胸の中央につけられたライドオンハートにもリボンがついている衣装となり、

他の3人もそれぞれ衣装が変化して口上を名乗り始める。

キュアアーンヴァル 『『青空駆ける純情天使』キュアアーンヴァル
!!』

キュアストラーフ 『『黒き孤高の戦う悪魔』キュアストラーフ!!』
キュアレーネ 『『全ての人に愛のご奉仕』キュアレーネ!!』

キュアアイネス 『『煌めく勇気はインビンシブル』キュアアイネス
!!』

4人 『『乙女の魂ここにあり!シンキプリキュア!!』
沙淡・鈴音・蓮華・酔夢・

!! 魔門・明日奈・瑠司亜 『プリキュア・アンブレイカブルダークネス』

と、続いて沙淡・鈴音・蓮華・酔夢・魔門・明日奈・瑠司亜の
7人が『ダークエンジェルパクト』と呼ばれるアイテムを発動させ
ると、

それぞれ変身を果たして口上を名乗り始める。

キュアサタン 「憤怒の天使…キュアサタン!!」

キュアベルゼブブ 「暴食の天使…キュアベルゼブブ!!」

キュアレヴィアタン 「嫉妬の天使…キュアレヴィアタン!!」

キュアベルフェゴール 「怠惰に天使…キュアベルフェゴール!!」

キュアマモン 「強欲の天使…キュアマモン!!」

キュアアスモデウス 「色欲の天使…キュアアスモデウス!!」

キュアルシファー 「傲慢の天使…キュアルシファー!!」

7人 「世界を制する7つの大罪!ウルティモプリキュア!!」

ちひろ・ゆづき・あまね・みお・さら 『プリキュア!オープン・メ
モリアル!!』

と、最後にちひろ達に変身を行い、口上を名乗り始めた。

キュアエターナル 「時の流れを護る者!キュアエターナル!」

キュアフリーダム 「自由を愛する者!キュアフリーダム!」

キュアジャステイス 「正義を執行する者!キュアジャステイス!」

キュアデイスティニー 「運命を変える者!キュアデイスティニー
!』

キュアレジエンド 「伝説を紡ぐ者!キュアレジエンド!」

さてランティス・・・『Type E』の調子はいかがですか？」

ランティス・ゼノ「問題ない。俺との相性も良いようだ。

今度こそ魔法騎士（マジックナイト）達を・・・

もう一人の俺自身を葬り去ってくれようぞ・・・

我がが姫の為に!!ではイーグル、

奴らがここへ向かってくるようだ。

俺はそろそろ行くぞ。」

と、ランティス・ゼノはそう言いながらその場から立ち去り、
出撃して行った。

イーグル「ええ・・・期待していますよランティス・・・。

では・・・そろそろ姫にご登場願いまししょうか。」

～ 戦場 ～

エメロード姫の歌声「~~~~~」

ねこ娘「くうう!!!」

朱夏「ま・・・またこの歌か!!!」

泪「ち・・・力が抜けていく・・・。」

「ドサドサドサドサドサ・・・。」

と、再び戦場にエメロード姫の歌声が響き渡ると、

これまで戦いを優勢に進めていたグラン・ゲインズは

次々と力が抜けていき、倒れていった。

悟空（超サイヤ人）「ち・・・力が入んねえ・・・。」

ベジータ（超サイヤ人）「ど・・・どうなつてやがる!!!」

マーリン「成程・・・これが例の歌声か・・・。」

イーグル「フフフ・・・いかがでしょうか？我がが姫の歌声は・・・

エメロード姫様の御加護がある限り、我々に敗北などあり

えません・・・。」

デイケイド「そうか？」

メリオダス「さてさてさーて・・・これは確かに厄介だけどよ!!」

アクア「こつちにも切り札があるのよ!!デイード・・・お願いね!!」

デイード「ああ!!任せてくれ!!頼んだぞ元姫!!」

元姫 『『ソングパワー』発動!!』

夢色チエイサー 「~~~~~!!!!!!」

「パアアアアアアアアアア!!!」

!!!!!!

キュアハート 「力が戻っていく…」

鬼太郎 「す… 凄い…」

悟空 「こりゃあ、おつたまげたぞ!!」

と、デIIDがそう合図すると、元姫のソングパワーである

『夢色チエイサー』がキャツスルドランから鳴り響き、

エメロード姫の歌声を打ち消すと、

グラン・ゲインズのメンバー達に力が戻っていき次々と立ち上がっ

ていく。「new page」

イーグル 「な… 何?」

メリオダス 「イツシツシツ!! 残念だったなイーグル!!」

零 「フツ… そう言う事か。」

キュアスター 「これなら戦えるよ!!」

デIID 「大したもんだろ? 『ソングパワー』は… ん?」

アグモン 「おいデIID!! みんな!!」

するとアグモン達が駆け付けてきた。

凱 「来たか、お前等!」

ギルモン 「凱兄ちゃん! 僕等も戦う!」

デIID 「よし! 進化用意!」

デIIDの合図と同時にデジモン達は進化し始める。

アグモン 「アグモン進化! グレイモン!」

ガブモン 「ガブモン進化! ガルルモン!」

ピヨモン 「ピヨモン進化! バードラモン!」

テントモン 「テントモン進化! カブテリモン!」

パルモン 「パルモン進化! トゲモン!」

ゴマモン 「ゴマモン進化! イツカクモン!」

パタモン 「パタモン進化! エンジェモン!」

テイルモン 「テイルモン、超進化! エンジェウーモン!」

メイクラーモン 「メイクラーモン、超進化! メイクラックモン!」

キュアアーンヴァル「プリキュア・ライジングインパクト!!」
「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

シヨツカーの皆さん「イイイイイイイイイイイイ!!」
セフィーロ兵の集団「おおおおおおおおお!!」
魔神族の集団「ブヒイイイイイイイイイイ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドッカーン!!」
と、キュアアーンヴァル達も負けじと敵の集団に

次々と必殺技を浴びせて撃退した。その一方…。「new page」

光（レイアース）・ノヴァ（レガリア）「炎の… 矢…」
!!!

海（セレス）「海の… 龍…」
風（ウインダム）「碧の… 疾風…」
!!!

ランティス（魔神）「稲妻招来（サンダス）!!」
さくら「火焰（ブレイズ）!!」

小狼「雷帝招来!!」
「ブオワアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ザクの兵団「馬鹿なあああああああ!!」
新型FTOの軍勢「…（こんなザコ共にいいいいいいいい）」
!!!!

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドッカーン…」
!!!!

と、セフィーロ城へと向かっていった光達も、
襲い掛かる敵を次々と撃破しながら突き進んでいく。

ケロベロス「よっしゃー!!この調子で…。」
? 「黒稲妻招来（ブラックサンダス）!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

風（ウインダム）「きゃああああああ!!」
海（セレス）「くううううううううう!!」

光（レイアース）「うわああああああ!!」
と、突如、ランティス・ゼノが光達の前に立ちふさがり、攻撃を仕掛けた。

ランティス（魔神）「貴様!!」

ランティス・ゼノ（黒いFTO）「ここから先は通さんぞ…ここで
お前達を始末する!!」

今度はこの前の様にはいかんぞ…

ハアアアアアアアアアア!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ランティス・ゼノはそう言いながら『阿頼耶識システムType
eE』を

発動させると、機体から禍々しい漆黒の魔力と両目からは
深紅の光が放たれていた。

ランティス・ゼノ（TypeE）「フッフ… どうだ？この力ならば

お前達如きに後れを取ることはない!!」

さくら「ほええええええええええええええええええ!!」

ケロベロス「何やこの桁違いな魔力は!」

海（セレス）「この前のものより明らかに違うわ!!」

ランティス（魔神）「… お前達、ここは俺に任せてセフィーロ城に
迎え!!」

ノヴァ（レガリア）「ランティス!」

風（ウインダム）「そんな!!お一人であの機体を相手にするのは!」

光（レイアース）「… わかった!!」

さくら「光さん!」

ケロベロス「ええんか?」

光（レイアース）「ランティスにはランティスの使命があるように

私達には私達の使命がある…

だから、ここで立ち止まるわけには行かない!!」

海（セレス）「光…。」

風（ウインダム）「そうですね!!」

小狼「わかった。その代わりランティスさん…

俺との約束を忘れないください!!」

ランティス（魔神）「フツ… もちろんだ。弟子に取ろうという者の
前で

バン「これで終わりみたいだぜ団ちよ♪」

メリオダス「ああ!!しかしまあ、あれだけいた敵が

意外と早く片付きましたなあ!!」

ベジータ（超サイヤ人）「フン!!どれだけ数がいようがザコはザコだ。

良い肩慣らしになったぜ!!」

キュアブラック「何かあたし達、強くなったね!!」

キュアホワイト「うん!それにあなた達も凄かったわね!!」

キュアスター「そうだね!!みんなキラやばく☆だったよ!!」

キュアエターナル「えへへ」

キュアサタン「それはどうも。でもまだこんなものじゃないわよ!!」

キュアアーンヴァル「ありがとうございます!!」

キュアハート「よし!!それじゃあたし達も光ちゃんの後を...」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

トランクス（超サイヤ人）「な... 何だ!!!!」

悟空（超サイヤ人）「す... 凄えパワーだ!!!!」

と、ザコ集団を撃破した後、突如、強大な闘圧が辺り一帯を

覆うと、コラボ特別編で登場した『あの大男』が姿を現した。「ne

w a g e」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー...」

ダンプ・ジョー「ククク... 久しぶりだな弱者共よ!!!!!!」

朱夏「な... 何だと!!!!」

シャナ（卍解）「アラストール... あいつは!!」

アラストール「ああ... 確か、ダンプ・ジョーとかいったな!!」

悠二（藍染）「ほう?親衛隊（ホワイト・ナイツ）が直々にお出まし

とは...」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「ダンプ・ジョー?」

凱（ガオファイガー）「奴もレグルス帝国軍か...」

デイド「それに弱者とは随分、言ってくれんな!!」

キュアソード「でも、なんであいつが?」

ねこ娘「ゆな達にボコボコにされた後は、どうなったたか知らないけど。」

デイケイド「ジエネシスからの情報だと奴はその後、

レグルス帝国軍本部に強制送還されて投獄されたらし

いがな。」

デイエンド「まさか、こんな所に出てくるなんてね。」

アキノリ「って言うか、そのジエネシスって奴……。」

アヤメ「何でも知ってるんですね」

ベジータ(超サイヤ人)「フン!! だったら今度は俺達が返り討ちに
してやる!!」

メリオダス「まっ!! 例え数を増やしても俺達だって

あれから強くなってるし、戦力も増えたからな!!」

レジーナ「そーよそーよ!!!」

ダンプ・ジョー「ククク!!! まさに弱者の発想だな。

強くなったのが自分達だけだと思ったのか? 愚か

者共よ!!」

零「何?」

泪「それはどういう意味だ!」

ダンプ・ジョー「ククク…… 貴様等弱者共にはもつたいないが、

特別に見せてやろう…… 某が『皇帝陛下』より賜つ

た力を!!

ぬおおおおおおおおお!!!

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!」

と、ダンプ・ジョーはそう言いながら闘庄を極限まで高めていくと、

周辺が激しく揺れ動き、全身の筋肉が以前とは比べ物にならない程
膨張して、

禍々しい金色と赤紫が交じり合ったオーラを纏った姿へと驚異の
変貌を果たした!! 「new page」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン……。」

Sダンプ・ジョー「ククク……。これが某の新しい力

・FIRST様提供オリキュアの設定

「シンキプリキュア」

変身前と後ではそれ程容姿に変化はない

それぞれの衣装がスマイルベースになっている

変身アイテム：スマイルパクトに酷似した

アイテム機械のハート「ライドオンハート」

変身の掛け声：『プリキュア・ライドオン!!!』『RIDE ON』↑

機械音

衣装：臍だしでリボンやら何やらがついたヒラヒラした服を着ており、

胸の中央につけられたライドオンハートにもリボンがついている

・神童安／キュアアーンヴァル

シンキプリキュアのリーダー。

誰に対しても心穏やかだがキレると怖い。

他のプリキュアの事を変身前の名前で呼ぶ。

炎熱・冷気・雷電・光の4つの能力を操る。

名乗りは『青空駆ける純情天使』。

パーソナルカラーはホワイト。

能力 炎熱 冷気 雷電 光 4つの力を操る

攻撃・防御・補助共に優れている

武器 銃と剣が一体化した「ガンブレード」

・技

プリキュア・プラズマサーベル

斬りつけたものを炭素化させる。

プリキュア・ライジングインパクト

拳に雷光の力を込めて殴りつける。防御付加

プリキュア・コールドブレス

絶対零度の冷凍光線を放つ。

プリキュア・ブリザードスラッシュ

斬りつけたものを瞬時に凍結させる。

プリキュア・フレアカノン

あらゆるものを焼き尽くす巨大な火球を放つ。(最高火力は1兆度)

プリキュア・バーニングソウル

それを纏つての突進技。

プリキュア・フォトンリング

対象を拘束・分解する光の輪を放つ。追尾性能あり

プリキュア・ヒーリングリング

自身や善の心を持つもののパワーやダメージを回復させたり、
邪悪な心を浄化出来る

プリキュア・フォトンマシンガン

光の弾丸を無数に放つ

プリキュア・フォトンバースト

あらゆるものを原子レベルで分解させる破壊光線。

チャージ可能でより威力が上がる

プリキュア・マテリアルフォースバースト

全属性を込めたレーザーを放つアーンヴアルの最強技
ブラックホール級を一撃で消滅できるが消耗が大きい

・剛力比奈／キュアストラーフ

シンキプリキュアの1人。

頭脳明晰で武人肌。

重力・引力・斥力を操る能力を持ち、

様々な金属や鉱石を生み出す事が出来る。

名乗りは『黒き孤高の戦う悪魔』。

パーソナルカラーはインディゴ

能力 重力・引力・斥力を操る 様々な金属や鉱石を生み出す
武器 大剣「ゼクスブレード」

・技

プリキュア・ロックスプラッシュ

プリキュア・グラビティホールド

プリキュア・グラビディシールド
プリキュア・レプリュージョンリフレクター
プリキュア・グラビディハンド
プリキュア・グラビドンスラッシュ

・愛沢麗祢／キュアレーネ

シンキプリキュアの1人。

天然な性格でチームのムードメーカー。

女性の胸を揉みたがる癖がある。

名乗りは『全ての人に愛のご奉仕』。

パーソナルカラーは基本的にブルー。

能力 身体を液体・固体・気体に変化でき、それらの類を操れる（まだ進化の余地あり）

武器 ジークリンデ

・技

プリキュア・リキッドアロー

プリキュア・リキッドボム

プリキュア・リキッドカノン

プリキュア・ハイドロビースト

プリキュア・エアスラッシュ

プリキュア・エアインパクト

プリキュア・エアロブラスト

・音波藍子栖／キュアアイネス

シンキプリキュアの1人。

ボーイッシュな性格で甘いものとカワイイものが好き。

名乗りは『煌めく勇氣はインビンシブル』。

パーソナルカラーはパープル。

能力 音・音波・振動を操る

武器 ノインタータ

・技

プリキュア・サウンドバズーカ
プリキュア・ボイスストラッシュ
プリキュア・ノイズブレイカー
プリキュア・ボイスバースト
プリキュア・ビートインパクト「new page」
「ウルティモプリキュア」

「世界の支配者」の直属のプリキュア

変身前と後ではそれ程変化が無い

衣装はクレッシェンドメロディをベースとしている

白の部分が黒く染まっっていてそれぞれのイメージカラーのラインが入っている

胸には二つの羽が交差する紋章

臍出し 下半身はスパッツ ロングブーツ

変身アイテムは「ダークエンジェルパクト」

変身の掛け声は「プリキュア・アンブレイカブルダークネス」

・ 鬼龍院沙淡／キュアサタン CV：沼倉愛美

「憤怒」を司るプリキュア イメージカラーは赤

普段は真面目だが怒り出すと止まらない どうでもいいことでキレやすい

怒ることで強くなれる能力 その身から繰り出す攻撃はあらゆるものを粉碎する

また空間を殴ることが出来、衝撃波を起こせる

さらに天変地異を自在に操る

武器は憤怒棍サタントンファー

・ 技

プリキュア・アングァインパクト

オーラを纏った拳で殴りつけたものを粉碎する

プリキュア・アングァーブラスト

手から発する波動でダメージを与えたり粉々にする

プリキュア・アングァークエイカー

地震と衝撃波で攻撃する

・狩谷鈴音／キュアベルゼブ CV：内田真礼

「暴食」を司るプリキュア イメージカラーは紺色

ウルティモプリキュアの中では副官で大食い

本人は食べないことも出来るというが

ルシファアのフォロー役でレヴィアタンの姉である

食べれば食べるほど強くなる能力 紋章魔術を得意とする

暗黒空間を操ることも出来る

様々な生物を召喚出来、自身と融合できる

相手の技を食べ飲み込むことでその技を覚えたり

吐き出して相手に数倍以上のダメージを与えるなどの技を持つ

武器は暴食槍ベルゼブランス

・技

プリキュア・エンブレムブラスト

紋章から波動を放つ技

プリキュア・エンブレムビルド

紋章の力で自身を強化する技

プリキュア・ゲシユタルトグラインド

自分を闇のオーラで包み自分以外のあらゆるものを飲み込み消滅

させる攻防一体技

・狩谷蓮華／キュアレヴィアタン CV：大坪由佳

「嫉妬」を司るプリキュア イメージカラーは紫

他人から恨まれたりすることが嫌なためあまり戦闘したがらない

能力値は高いがそれを隠している本人曰く友達に欲しいけど

妬まれたらどうしようかと葛藤している

但し、仲間や姉であるベルゼブの為なら頑張れるらしい

あらゆる病気やウイルスを生成する能力

武器は嫉妬刀レヴィアタンタガー

・技

プリキュア・バイラスブレス

様々なウイルスや病原菌を含んだ吐息を放つ技

プリキュア・ペインリフレクト

自分が受けた傷やダメージを相手に返す技

・飾李酔夢／キュアベルフェゴール CV：内田愛美

「怠惰」を司るプリキュア イメージカラーは白

何をするにもやる気が無く…というより一日の多くは睡眠が7割という怠けぶり（汗）

しかしやる時はやる子だったりする

意欲をなくしたり眠らせたりする能力

驚異的な回復力や再生力 さらに分裂したりする

基本的には本人は怠け者だが眠っているときに荒っぽく起こされるとき…

武器は怠惰鎌ベルフェゴールシツクル

・技

プリキュア・ベルフェゴールフィールド

相手の闘争心を無くしてだらけさせ相手の戦闘力や体力を奪う

フィールドを展開し、奪った力を自身に還元できる

プリキュア・ベルフェゴールソング

歌を歌って相手を眠らせる

プリキュア・ベルフェゴールナイトメア

眠らせた相手に悪夢を見せて生命力を吸い取る

プリキュア・ベルフェゴールイーター

眠らせた相手の夢を食べて自身の戦闘力に還元しつつ相手にダメージを与える

ダメージを与える

プリキュア・ベルフェゴールカウンター

眠ってる時に受けたダメージを全て相手に返す

プリキュア・エターナルドラウジネス

神だろうと死人だろうと相手を永遠の眠りに誘う極悪技

・ 桐生魔門／キュアマモン CV：内村史子

「強欲」を司るプリキュア イメージカラーは茶色

欲しいものには妥協しない 本人が言うには我慢したら負けとか

：

様々な武器や兵器を自在に生み出せる能力

武器は強欲腕輪マモンブレスレット

・ 技

プリキュア・マモンハンド

相手から能力や技を奪い一時的に使えなくする

自分は相手から奪った技や能力が使える

また「魂」をも奪うことが出来る

・ 星蘭明日奈／キュアアスモデウス CV：浅倉杏美

「色欲」を司るプリキュア イメージカラーはピンク

女王様気質があり自身の美しさに絶対の自信を持っている

時折NGワードを発しては他のメンバーにどつかれたりすること

もしばしば

レーネとは気が合う

邪心を持つ相手を操ったり 物質・物体を石化することが出来る能

力

武器は色欲鞭アスモデウスウィップ

・ 技

プリキュア・ラブピストル

投げキスで作ったハートマークを弾丸のように飛ばす 当たると

石化させる

プリキュア・スレイブアロー

投げキスで作った巨大なハートマークを弓のようにして破裂させ、

広範囲に石化効果を持つ矢を放つ。

プリキュア・セパレートウィップ

アスモデウスウィップを拡散させ広範囲に行き渡る

プリキュア・ゴルゴディオブレイク

巻きつけたものを石化・粉碎させる技

アスモデウスウィップ

一見するとただの鞭だが自身の力を込めることでその鞭の強度を上げたり破壊されても再生できる

有形無形関係無く引き裂いたり巻きつけて粉碎することが出来る華麗なる鞭捌きは次元や空間といったものをも引き裂けるため彼女からすれば距離や場所は意味を持たない

・天上瑠司亜／キュアルシファー CV：荒川美穂

「傲慢」を司るプリキュア イメージカラーは金

ウルティモプリキュアのリーダーでメンバーの中で

最も常識ある人で最も強い

心優しい性格だが人々や世界に害を及ぼすものには容赦ない

「世界の支配者」曰く怒らせてはいけないんだとか…

ありとあらゆる理や法則を自在に操る能力

武器はルシファータクト

プリキュア・マテリアルバレット

自身の周囲に一つ一つが属性を持っているエネルギー弾を出現させそれを飛ばす

属性は自在に変えられる

武器は傲慢杖ルシファータクト

・技

プリキュア・ビッグバンエナジーボール

指先にエネルギーを集め巨大化させてから落とす

プリキュア・デイメンジョンエンドブレイク

手に剣状のエネルギーを纏わせ対象を空間・次元諸共防御無視で切り裂く

プリキュア・ジエノサイドエクスプロージョン

様々な属性を融合させ光球にして放つ

威力・範囲共に優れている

プリキュア・パレードックスエンドバースト

両手と頭上に光球を出現させそれを融合させ極太のレーザーにして放つ

理「次元」を操ることで威力を無限に上げることが出来る「new page」

【レコードプリキュア】

思い出の国ドルドランドに保管されているあらゆる世界の記憶を記録する全知の書『メモリアル』を守護するプリキュアたち。

・土岐ちひろ／キュアエターナル CV：佐倉綾音
年齢：16歳

刻ヶ峰高校（ときがみね）高校に通う高校1年生。

ドルドランドのメモリアルを守るプリキュアのリーダー。

メモリアルの強大な力を狙って現れる多くの悪党を倒してきた歴戦の勇士。

性格は、かなりのんびりした鷹揚な性格をしており、また時間にルーズなところがある。

人を自然に惹きつける魅力があり、友達が多い。

人の悩みや苦しみ、痛みを共有してしまうことが多く、それを当事者と一緒に解決することが多い。

彼女の悩みは、目下成長しまくる胸で、

大つきいことにコンプレックスを抱いている。

こころの花・竜胆（りんどう）花言葉は、『あなたの悲しみに寄りそ
う』

・キュアエターナル

『時間』を司るプリキュア。時間を止めたり、

進めたり、戻したりすることができる。

同じ時間の中で動けるのは、エターナルだけであるが

実力が上位のものには効果が薄い

・技

未来予知：近い将来に起こる未来を視ることが出来るが、生身でも

使える

プリキュア・タイムコントロール

スロー：時を遅くすることが出来る 与えたダメージを蓄積させることも出来る

ストップ：時を止める事が出来る また自分の時を止める

(自分の身体の原子の動きを止める⇨原子が分離しないようにすることによって、

いかなる攻撃をも弾き返す、絶対防御を実現出来る

リワインド：時を戻すことが出来る 用途が多く万能型

リプレイ：時を操って弾幕の数を増やしたり攻撃を再現したり等が出来る

過去にいるものや死んだものを呼び出すことも

出来るが体力の消耗が大きい

クイック：時を早くすることが出来る 技の威力を上げたりやろうと思えば

相手の時を加速させて寿命を迎えさせたり宇宙を一巡させることも出来る

スキップ：時を飛ばすことが出来る 不要な時間を吹き飛ばす事で

未来を変換できる為やりようによっては無敵

プリキュア・エターナルブレス：技を受けた相手の刻を奪って

消滅させることも出来る

・南雲ゆづき／キュアフリーダム CV：大野柚布子

年齢：16歳

刻ヶ峰高校に通う高校1年生。ちひろと同じく

ドルドランドのメモリアルを守る戦士。

のんびりとした、ちひろと違い、せっかちで忙しく、

常に動き回っている活動的な女の子。女子サッカー部の1年生レギュラー。

性格は、正反対だが、お互いにそれを補完し合っている中で、幼稚園からの親友。

何かにつけて、ちひろのおっぱい目的でいいよる男をノシているなど

喧嘩は男より強く、空手部員の男子生徒を3人返り討ちにしたこともある。

基本的に気が強いが、涙もろく、ヒューマンドラマに弱い。女子生徒にモテる。

こころの花：ハウセンカ 花言葉は、『快活』

・キュアフリーダム

『空間』を司るプリキュア。空間を操作することで距離を無くし、遠距離攻撃や多方向からの攻撃、瞬間移動などトリッキーな戦い方ができる。

・技

フリーダム・ゲート：自分の目の前にワームホールを出現させて

別のところに飛ばす、攻撃を返すことも出来る
プリキュア・ワームホールパンチ：ワームホールを介して遠距離の相手を殴り飛ばす

プリキュア・ワームホールスラッシャー：空間の連続性を断ち切ることで、

この世の物体で切れぬものはない
不可視の刃をも生成でき

る

プリキュア・マーベラスルーム：敵を時間も物質も無い空間に

引きずり込んで全てを分解し消滅させる

プリキュア・フリーダムスペース：自分だけの空間を創ることが出来る、

やりようによっては無敵になる

ケン・イシカワ作品おなじみのア

レです

・義家あまね／キュアジャステイス CV：鈴木愛奈
年齢：13歳

刻ヶ峰高校付属中学に通う少女。ちひろとは家が近所で、
実の姉のように慕っている。

身長から何までがミニマムサイズの豆タンク少女。

元気がひたすら空回りすることも多い。

近所の中国人のおばさんに、太極拳（健康と護身のため）を
教えてもらっているため、見かけよりも強い。

正義感が強く真つ直ぐな性格のため、いらぬトラブルを背負い込む
事が多い。

体は頑丈だが、頭が壊滅的に悪く、授業中によく居眠りをしている。

こころの花：ホタルブクロ 花言葉は、『正義』

・キュアジャステイス

『正義』のプリキュア。能力は、『強化』。自身の身体能力が5分間10
倍

増しになる『テンフォールドパワー』筋力だけでなく、その他五感
も10倍

になるため、視覚（動体視力込み）、聴覚、嗅覚、治癒力も10倍に
なる。

また『絶対正義』と呼ばれる限定空間を作り出し、

決められたルールを守らない限り、敵も味方もダメージを与えられ
ず、

ペナルティによるダメージを負うという能力を持つ。

・技

ジャステイス・シールド：結界を出現させて攻撃を防ぐ

ジャステイス・ビルド：正義の心で自身の全能力を強化する

ジャステイス・フレーム：正義の炎をぶつける

ジャステイス・フリーズ：正義の冷気をぶつける

ジャステイス・サンダー：正義の雷をぶつける

ジャステイス・ウインド：正義の風をぶつける

ジャステイス・ロック：正義の岩をぶつける

ジャスティス・アイアン：正義の鋼をぶつける
プリキュア・ジャスティスマッシュ：正義の心を込めた鉄拳をぶつける

・轟みお／キュアデステイニー CV：愛美

年齢：13歳

刻ヶ峰高校付属中学に通う少女。父親がギャンブル好きであるため、

本人もギャンブルが好きで、トリックやイカサマなどを得意とする。

真面目なあまねとは、性格的に水と油であり、仲は良くないが、良くない分、お互いをよく知っている仲ではある。

彼女がプリキュアになった理由は、

『ギャンブルにもルールはあり、その中で知恵と技巧、運を賭けるもの』という

考えがあり、強引にルールや人の運命をねじ曲げる存在が許せなかったからである。

いい加減にみえて、結構、正義感に熱い性格である。

普段は、不良生徒として学校では目を付けられている。

こころの花：ハクサイ 『固い約束』

・キュアデステイニー

『運命』を司るプリキュア。『事象の結果』を改変することができる。

例えば、コップを落として割れたという事象を改変し、

割れなかったとすることができると、任意に改変できるわけではなく、

予期せぬ方向に改変されることもある。

コップの例で言えば、コップを落として割ってケガをしたという具合に、

良くも悪くもなるかなり、運次第の能力。

・技

デステイニー・コントロール：所謂運命操作だが前述のとおり

任意に改変できるわけでは無い為、
ルーラーやキュアディステイニー等
には劣っている

用はダイスロールの出目次第

ディステイニー・ドレイン：相手から運を吸い取ることが出来るが
滅多に使わない

プリキュア・デステイニー：出目次第で相手に

「死の運命」を与えることができる

・天宮さら／キュアレジェンド CV：Lynn
年齢：16歳

刻ヶ峰高校に通う生徒で、大人しく知的な美人であり、お金持ちの
一人娘である。

考古学に興味があり、考古学部を立ち上げた。様々な伝承や伝説に
詳しく、

古い歴史や文化にも造詣が深い。

ラテン語が読めるため、古い文献のコピーをそのまま、読んでいる
こともある。

もちろん、古文や漢文などにも強いため、うっかり原文の発音で読
むため、

授業中はカオスとなることが多い。

考古学のことになると周囲の音が聞こえなくなってしまう性格で、
一度、用務員さんに注意されるまで、考古学部に引きこもっていた
こともある。

柔らかな美人であるため、人気がある。

ちなみに着やせするタイプでスタイルはちひろに並ぶかそれ以上
という噂も。

こころの花：ツククサ 花言葉は、『尊敬』

・キュアレジェンド

『伝説』を司るプリキュア。神話や伝説に登場する

英雄や怪物を生み出し、操る能力を持つ。

生み出す存在の力が強大であるほど、召喚に時間が掛かりエネルギーの消耗も大きくなる。

・技

レジエンド・サモン：神話や伝説に関するものであれば何でも再現したり召喚できる

神話や伝説上の武具を召喚したりも出来る為、

戦闘力は高い

レジエンド・スピリチュア：召喚したものを自身と一体化させ、自身の力を底上げする

また召喚した者の技等を使うこともで

きるが

力が大きいもの程体力の消耗も大きく

なる

(慣れれば克服できる) 成長次第で強力な

英霊や

怪物や神を纏うことも出来る

レジエンド・オブ・バビロン：神話や伝説の武器を大量に召喚して

一斉に攻撃を仕掛ける

プリキユア・レジエンドストライク：神話や伝説の英雄達から力を分けて貰い

超強力なエネルギー弾をぶつ

ける

キュアエース（パルテノンモード）「……………」

レジーナ（パルテノンモード）「……………」

キュアアンヴァル「凄い!!」

キュアサタン「ふうん…」

キュアエターナル「みなさん、スペシャルフォームになりましたね

!!」[new page]

デイド「それじゃ俺も…キバット!準備はいいか!？」

キバット「よっし!キバって行くぜ!ガブツ!」

キバットがデイドに噛み付いた途端、彼の身体に

模様が浮かび、ベルトが装着される。

デイド「変身!」

デイドはベルトにキバットを装着した途端、仮面ライダーキバと
なった。

デイド（キバ）「さあ…悪夢の始まりだ!!」

ねね「ちよつと!!」

元姫「みんなばっかりずるい!!」

ラフタリア「では私達も!!」

コレット「変身!!」

「シュー……………」

ねね（響鬼）「……………」

元姫（電王）「……………」

ラフタリア（鎧武）「……………」

コレット（ジオウ）「……………」

と、ねね達がキャツスルドランから飛び出してきてそう言うのと、
それぞれ仮面ライダーに変身したのであった。

デイケイド「ほう…?」

デイエンド「君達も仮面ライダーになれるのかい?」

ラフタリア（鎧武）「そうですよ!!」

ねね（響鬼）「私達の世界では他にも多くの仮面ライダーがいるから
ね。」

デイド（キバ）「悪い悪い!!さてと…行こうぜみんな!!」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「おう!!」

凱（ガオファイガー）「いつでもOKだ!!」

S・ダンプジョー「来い…弱者共よ!!!」

と、こうして本気モードとなったメンバー達と

Sダンプ・ジョーの戦いの火ぶたが切って降ろされたのであった。

そして…「new page」

ランティス（魔神）「うおおおおおおお!!!」

ランティス・ゼノ（Type E）「ぬうううううん!!!」

「ドガガガガガガガガガガガガガ!!!」

と、別の場所ではランティスとランティス・ゼノが激闘を

繰り広げており、両者一步も譲らない展開となっていた。

「ガキーーーーー!!!」

ランティス・ゼノ（Type E）「良い気迫だな…先程の言葉は訂

正しよう。

前の戦いとはまるで別人だ…

何がお前をそこまで駆り立てている？」

ランティス（魔神）「お前が俺ならそのくらいのはわかるんじゃないのか？」

ランティス・ゼノ（Type E）「フツ…

成程な。互いに譲れない

ものの為か。」

ランティス（魔神）「それとも一つ…信じる者の為にだ!!雷衝撃

射（クロノス）!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ランティス・ゼノ（Type E）「だがそれだけでは俺には勝てん!!

黒雷衝撃射（ダーククロノス）!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「バリバリバリバリバリバリバリバリ!!!」

と、ランティスとランティス・ゼノは互いに魔法を放ち、激突させ

るが…」

ランティス・ゼノ（Type E）「これで終わりだ!!『闇爆斬撃（ダー

クセイバー）!!」

ランティス（魔神）「フツ… わかった。行くぞ！！！！」
「ピカーーーーーー！！！！」

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と、ランティスは謎のウオッチを発動させると、

『フル・サイコフレーム』の力が魔神ランティスに宿り、
体中から禍々しい深紅の光が放たれて

『ユニコーンガンダム』と同じ『NT-Dシステム』が発動した！！

魔神ランティス（NT-D）「……………」？

ランティス・ゼノ（Type）「な… 何だと」

モコナ「ふうーーーーー！！！！」

「シューーーーーー！！！！」

と、『NT-Dシステム』の発動を見届けたモコナは
その場から姿を消したのであった。

魔神ランティス（NT-D）「礼を言うぞモコナ… さあ、仕切り直
しだ！！」

ランティス・ゼノ（Type）「フン… まやかしが！！『闇爆斬撃
（ダークセイバー）』！！」

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

魔神ランティス（NT-D）「遅い！！」

「ブウーーーーー！！！！」 「ズバババババババババババ！！！！」

ランティス・ゼノ（Type）「何！？ぐわああああああああ！！！！
ああ！！！！」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

と、ランティスは、剣に魔力を纏わせて、

NT-Dシステムの高速移動でランティス・ゼノが放った

『闇爆斬撃（ダークセイバー）』を瞬時に相殺すると、

そのまま斬りつけて吹き飛ばし、ダメージを与えた。「new pa
ge」

ランティス・ゼノ（Type）「ぐうう… ば… 馬鹿な… この
力は一体！！」

魔神ランティス（NT-D）「フツ… 俺とお前の決定的な違いがま

だあつたようだな。

それは…『思い』だ!!」

ランティス・ゼノ (Type E) 「お…『思い』だ?! そんなものが何だというのだ!?!」

魔神ランティス (NT-D) 「お前は昔の俺と同じでこれまで孤高に生きてきたのだろう。

だが、今の俺にはかけがえのない友や仲間がいる。

その者達の為に何かを成し遂げたいという

『思い』があるからこそ、このような奇跡をも起こしているのだ!!」

ランティス・ゼノ (Type E) 「そんなもの…俺は信じない!! 戯言はここまでだ… 決着をつけるぞ

!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

と、ランティス・ゼノはそう言いながら魔力を最大限に高めて、最強技の発射態勢をとる。

魔神ランティス (NT-D) 「良いだろう。ならばお前に見せてやる、

『思いの力』というものをな!!!!」

「バアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、対するランティスもそう言いながら必殺技の発射態勢をとる。そして…

ランティス・ゼノ (Type E) 「これで終わりだ!!

『闇殺斬衝撃 (ダークネス・ブレイク)』!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

魔神ランティス (NT-D) 「受けるがいい…『大雷斬衝撃 (サンダス・ブレイク)』!!」

「ブオワアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、魔神ランティス (NT-D) は剣に『雷衝撃射 (クロノス)』を限界以上に纏わせて

さしづめ、『破壊闘圧・極（きわみ）』といったところか。
こいつは厄介だぜ……。」

トランクス「なっ!？」

メリオダス「マジか!？」

鬼太郎「は……破壊闘圧・極……。」

マーリン「成程……その力で我々の攻撃をことごとく

『破壊』していたという事か。しかも、破壊神である

ビルス殿よりも遥かに強力なものだな。」

アクア「レグルスも恐ろしいものを生み出してくれたわね……。」

デイド「だが、奴を倒さない限り前に進めないぜ!!ん……?」

「キーーーーー……」

と、デイドはそう言った直後、セフィーロ城から邪悪な気配を感じた。

凱「どうした、デイド?」

デイド「イーグルの奴……何かを仕出かそうとしている!

すぐに向かわないと大変な事になるぞ!」

マナ「本当なの!？」

デイド「俺は戦闘状況を把握できるからな。時間がねえ……こうなったら!!」

『B・Dシステム』発動!!」

起動音声認識コード『ブレイズ・アップ!!』

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、デイドは『B・Dシステム』と呼ばれる龍をモチーフとした
意匠造形で

青地に金の装飾が施されている特殊な武装内蔵型装甲を

僅か000・5秒で瞬間装着し、パワーアップを遂げた!!「new
page」

デイド（B・Dシステム）「行くぜ!!」

ひかる「キラやば☆!!!」

マーリン「ほう?これは興味深いな……あれは何だ?」

ソニック「あれは『B・Dシステム』、特務機関B・D・Dが産みだ

魔門「くっ…!?何て力だ!!!!?

さら「今にも吹き飛ばされそうです!!!!!!」

と、Sダンプ・ジョーはデイドの言葉に憤慨すると、

破壊闘圧・極を極限までに高めて周囲を破壊しながら必殺技の発射態勢をとる。「new page」

Sダンプ・ジョー「もはや貴様だけは生かしては置かぬ!!!!!!!」

某の…強者の誇りに賭けて必ずや薙り去って
!!!

うううううううううううううううううううううううう

!!!!

メリオダス「あーあ…言っちゃったなアイツ…。」

アクア「これで敗北フラグが立っちゃったわね…。」

マナ「あはは…。」

デイド(B・Dシステム)「そんじや俺も強者のお前に敬意を表して

こいつでぶっ飛ばしてやるぜ!!

ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

と、対するデイドもそう言いながら極限までに !!!

気を高めると、正拳突き of 構えをとる。 !!!?

トランクス「な…何だこの凄まじい気は!!!!!!」

ちひろ「あ…あの人…」

ララ「何をやる気ルン?」

ナミ「まつ、よく見ときなさい!!」

アクア(このすば)「あれがデイドの究極奥義の…。」

Sダンプ・ジョー「滅びよ…弱者!!!」

『真・極大地獄砲(ネオ・ヘル・バスター!!!!キヤノン!フルパワー)』!!!!!!

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

と、Sダンプジョーが最強技である !!!!!!

『真・極大地獄砲(ネオ・ヘル・バスター・キャノン・フルパワー)』を放つが…「new page」

デイド (B・Dシステム) 「青龍拳法第七奥義… 『神殺』」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、対するデイドも青龍拳法第七奥義『神殺』を發動させると、

『真・極大地獄砲 (ネオ・ヘル・バスター・キャノン・フルパワー)』を

一瞬でかき消してSダンプ・ジョーに直撃させると!!!

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

Sダンプ・ジョー 「ぐおおおおおおおおおおお!!!」

ああああああああああ!!!

こ… これで終わりだと思ふなよ弱者共よ…

例え某が死んでもその魂と誇りは我が同志や

ラー・カイン様に受け継がれ…

必ずや貴様等を地獄へと叩き落すことだろ

う…。

レ… レグルス帝国軍… 皇帝陛下…

バンザアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、Sダンプ・ジョーは最期にそう叫びながら爆散し、消滅していつ

た。「new page」

デイド (B・Dシステム) 「あばよ… 『強者』ダンプ・ジョー!!!」

バン 「おいおい… 結局あいつが一人で倒しちまったぜ。」

海東 「中々やるじゃないか、彼…。」

ベジータ 「な… 何者なんだ奴は!？」

ゆづき 「ちよつと… あの強さ、チートすぎない!？」

ソニック 「やったなデイド!!」

凱 「さすがだな!!」

メリオダス 「恐れ入ったぜ… なあ、悟空さん?」

悟空 「ああ!! おめえ、やっぱ凄えなあ!!!」

デイド (B・Dシステム) 「そんなに褒めても何も出ないぜ。

よし!! そんなに急いでセフィーロ城に…

うっ!？」

「バリバリバリバリ!!!」 「シューーーーーー」

姿を現したのであった。一体、セフィーロ城で何があったのか……？

ついに、最終局面を迎えるもう一つのセフィーロとの戦い……

果たして、どのような結末を迎えるのか……

それでは次回も……刮目せよ!!!」

第53話 　　不退転 　　「new page」

・オリジナル設定

「スーパードンプ・ジョー」

コラボ特別編に登場し、『エクストリームプリキュア』の5人にボコボコに叩きのめされたダンプ・ジョーが、

その後にレグルス帝国軍本部に強制送還されて投獄された後、

レグルス皇帝（仮称）により、『破壊神の力』『身勝手の極意』『闘圧』を

一つにした『破壊闘圧・極』を実験的に注入されて強化された姿。

グラン・ゲインズともう一つのセフィーロとの戦いで

テスト的に実践投入されて、その類まれな力を持って

グラン・ゲインズを圧倒したが、

最期は『B・Dシステム』を発動させたデイドにより、分身体共々倒された。

ちなみに戦闘力は破壊神ビルスをも軽く圧倒でき、

チン・ゲンサイを始めとする四聖士（パラディーン）に肩を並べるほどまでなっている。

・技

「破壊闘圧・極」

レグルス皇帝（仮称）が実験的に開発した

『破壊神の力』『身勝手の極意』『闘圧』を一つにまとめた力。

破壊神の力よりもさらなる強化が施されているため、物理的な攻撃やもちろん、状態変化やありとあらゆる効果を持つ攻撃をも『破壊』することができる。

更に、完全なる身勝手の極意以上の守備力や攻撃力をも兼ね備える。

しかしながら、神の力を無効化にできる

B・Dシステムを発動させたデイドには通用しなかった。

【増殖】

強化された自身の類まれなる闘圧を応用して、増殖体を最大でこれまでの4体から10体に増やすことが可能となり、パワーを一切落とすことなく、生み出すことができる。この能力で、グラン・ゲインズを大苦戦に陥れた。

【極大地獄砲（ネオ・ヘル・バスター・キャノン）】

これまでの大地獄砲（ヘル・バスター・キャノン）よりも3倍の威力を持つ強化版。

【五連極大地獄砲（ネオ・ヘル・バスター・キャノン・ファイズ）】

自身と増殖体4体の計5体のパワーを極限までに高めて結集し放つ強大な威力を持ったダンプ・ジョー最強技の一つ。

その威力は惑星の二つや三つ、軽く消し飛ばせるほどの威力だが、

B・Dシステムを発動させたデイドのボルテツカにより、あっさりと破られた。

【真・極大地獄砲（ネオ・ヘル・バスター・キャノン・フルパワー）】

破壊闘圧・極を最大限までに高めて放つ

極大地獄砲（ネオ・ヘル・バスター・キャノン）の強化版でスーパードンプ・ジョーの最強奥義。

巨大惑星10個を纏めて軽く破壊できる威力を持つが、

B・Dシステムを発動させたデイドの究極奥義『神殺』により、あつかりと破られてしまった。

【魔神ランティス（NT-D）】

突如出現したモコナによりもたらされた謎のウオッチにより

『ユニコーンガンダム』の能力である

『NT-D（ニュータイプ・デストロイヤー）』の

力を纏った魔神ランティス。

外見はユニコーンガンダム同様、全身から禍々しい

フル・サイコフレームの赤い光が露出した姿となり、

機体性能が大幅に向上する。

この形態で『阿頼耶識システムTypeE』を発動させた

ランティス・ゼノが駆る黒いFTOとの死闘に決着をつけた。

尚、武器についても、ユニコーンガンダムと同じ

『ビームマグナム』や『シールドビット』が使用でき、

『サイコ・フィールド』も展開する事も可能である。[new page]

・デイドの追加設定

【デイド（B・Dシステム）】

デイドが『B・Dシステム』を装着した形態で

現時点での切り札。パワーやスピード、技の威力が

ノーマルや仮面ライダーキバ変身時より大幅に上回るうえ、

『破壊神の力』『身勝手の極意』といった強大な神の力を

無効化する特殊スキルが備わっている。

（ギガデウスやヴォルクルスといった最強クラスや

『全王の力』ともなれば話は別だが…）

その為、グラン・ゲインズのメンバーが大苦戦した

『破壊闘圧・極』を常時発動させている

スーパーダンプ・ジョーをも軽く一蹴したが、

『B・Dシステム』が『次元大戦の世界』にまだ馴染んでいないせいから、

発動させてから、わずか3分で強制解除となってしまった。

ちなみにこの形態での戦闘力は既にセカンドシーズンレベルに

到達していると考えられ、仮に破壊神ビルスや魔神王と戦えば、軽く瞬殺できる程の強さを持ち合わせている。

・技

【ボルテツカ】

装甲から銃口を出して光を貯め、青き龍の粒子光を発射する。威力は言うまでもなく一撃必殺である。

【B・Dシステム】

特務機関B・Dが産み出した瞬間装甲装着システム。

通常は目に見えない程の微粒子レベルにまで分解された

武装内蔵型装甲が装着者のまわりに浮遊し、

起動音声認識コード『ブレイズ・アップ』により

僅か000・5秒で瞬間装着される。同時にパワーアシスト機能により

通常の数倍以上のスペックを弾きだし、

運用時間は連続で50日間（ボルテツカを八発使用した際は20日間）、

傷を負ってもナノマシンによる処置により

瞬時に修復が可能で酸素も同様に保つ。

しかし、システム自体が『次元大戦の世界』にまだ馴染んでいないせいか、

現時点では発動させてから、わずか3分で強制解除となってしまう。

外観は龍をモチーフとした意匠造形で青地に金の装飾が施されている

尚、量産性を度外視したのとデイド専用にチューンが施された結果、

実質的にデイド専用スーツとなっている。

第54話 　　ゆずれない願いを抱きしめて 　　

　　レグルス帝国軍基地　ラー・パレス　　
　　ピエラート「うーん……ダンプ・ジョーがやられてしまったのであーる!!」

　　キャロル「皇帝陛下に力を賜っておきながら
　　たった一人にやられてしまうなんて、

　　ちよつと情けないですわね。」

　　ラー・カイン「良いではないか。おかげでその異世界から

　　来た者の力量も知ることができた。

　　後、お前を追い詰めたそのサイヤ人達も

　　中々の実力の持ち主だったようで

　　喜ばしいではないか、ツアイトよ?」

　　ツアイト「申し訳ありません……。四聖士(パラディーン)としての
　　初陣だったのですが、無様な所をお見せしてしまいました。
　　た。

　　ですが次こそは必ずや奴らを!!」

　　チン・ゲンサイ「フェツフェツ!!まあ、そう固くなるでない。

　　せつかくの戦じゃ。もつと気軽に楽しめば良い!!

　　儂はその者達との手合わせが今から楽しみでなら

　　んぞい!!」

　　ツアイト「ありがとうございます、導師。」

　　ピエラート「それに、セフィーロ城で動きがあつたようであーるな
　　!!」

　　キャロル「確か、デボネアと言いましたか?ようやく出てきたので
　　すね。」

　　ラー・カイン「どうやら、余が与えた新型魔神『レグルス・ギア』と
　　同化したようだな。お手並み拝見といくとしよう。

　　フフフ……。」「new page」

　　　少し前　セフィーロ城内　　

　　エメロード姫「……………」

ザガート(亡骸)「……………?。」

海(セレス)「こ…これは!!!」

風(ウインダム)「どうなつて!いるのですか!!!?」

ケロベロス「何や、ごっつい邪悪な魔力に包まれとるで!!」

イーグル「フフフ…よくここまでたどり着きました。

歓迎しますよ、魔法騎士達。」

光(レイアース)「イーグル!!!」

さくら「この人がもう一つのセフィーロの…。」

小狼「黒幕か!!!」

イーグル「おや!…?誰かと思えばクロウ・リードの使い魔と

その力を受け継ぎしものですか。あなた方も歓迎しますよ。」

さくら「ほえ?」

ケロベロス「お前、クロウを知つとるんか!」

海(セレス)「それよりもあなた!!」

風(ウインダム)「あのお二人をどうするおつもりなのですか!」

光(レイアース)「エメロード姫はお前達の主君じゃないのか!」

イーグル「ええ、確かに『この体のイーグル』はそう思っているでしょうね。」

さくら「『この体』…?」

ケロベロス「どういうこつちや?」

ノヴァ(レガリア)「光!みんな!!」

魔神ランティス(NT-D)「イーグルから離れるんだ!!」

と、そこへランティスと途中で逸れたノヴァが合流してきた。

光(レイアース)「ノヴァ…それにランティス!!!」

小狼「ランティスさん、勝ったんですか!!!」

魔神ランティス(NT-D)「ああ!言っただろう?弟子に取ろうとする者の前で

無様な戦いは見せられないとな。」

イーグル「ほう…?こちらのランティスを倒しましたか。

それに、それは『NT-D』の力ですか。まあいいでしょ

う。

今頃来ててももう遅い… もうすぐ『私』は完全復活するのだから!!」

海（セレス）「『私』…？」

光（レイアース）「どういう事だ!!!?」

ノヴァ（レガリア）「…まさかまたあなたと会う事になるなんて。」

魔神ランティス（NT-D）「イーグル… いや、『デボネア』」

風（ウインダム）「!!!」

海（セレス）「デ…!!! デボネアですって!!!」 「new page」

「シューーーーーー…」

イーグル（デボネア）「ハハハハハハ!!! 久しぶりだな、

忌々しい魔法騎士… そして人間よ!!!」

さくら「ほえええええええええええええええええええええ!!!?」

小狼「顔が… 変わった!?!」

光（レイアース）「何で… どうして!!!? お前はあの時、私達が!!!」

イーグル（デボネア）「そうだ… セフィーロの民の『生きる願い』

などという

くだらぬ幻想のせいだな… だが、私もついて

いた。

完全に消滅していたかに思われた私の『欠片』

が

突如、誕生した『もう一つのセフィーロ』に流

れ着いてな…

そこで私はこのイーグルの体に移り、

完全復活の機会を伺った。」

光（レイアース）「何… ですって…？」

魔神ランティス（NT-D）「成程… そういう事か。そしてお前

は、

そこにいるザガートを謀殺して、

あえて亡骸をそのままにして

エメロード姫共々幽閉し、『もう一つのセ

ファイロ』の

支配権を奪い取った。その後、人々に
我々のセファイロを滅ぼさないと世界が消
滅する…

という戯言を流し、恐怖と不安を増長させた

!!

海（セレス）「それで『もう一つのセファイロ』と

私達の知るセファイロの争いが起こった…。」

風（ウインダム）「そしてその争いの中で両方の世界の人々から

混乱と恐怖といった負の感情を更に増長させて、

それを復活への糧としていったのですね…。」

さくら「そ…そんな事って!!!」

小狼「卑劣な!!!」

ケロベロス「こ!っだけはホンマ許せんぞ!!!」

ノヴァ（レガリア）「お母様… どうしてそこまで…。」

イーグル（デボネア）「黙れ!!この役立たずが!!獅堂光と一つになっ
たはずのお前が

誰のおかげで今、存在していると思っっているの

だ!?!」

ノヴァ（レガリア）「!!!」

光（レイアース）「そ!れ!は!ど!う!い!う!事!だ!?!」

魔神ランティス（NTID）「… 光、落ち着いて聞くん。そこに
いるノヴァは、

デボネアが万が一の時の為にあらかじめ用
意していた

複写体… いわゆるクローンだ。」「new p

age」

ノヴァ（レガリア）「!!!?」

海（セレス）「えっ!!!」

風（ウインダム）「は!れ!っ!て!…!」

光（レイアース）「本!当!な!の!?ノヴァ…。」

ノヴァ（レガリア）「うん…。」

ケロベロス「どういう事か説明してくれへんか？」

魔神ランティス（NT-D）「俺がセフィーロで『もう一つのセフィーロ』と

戦っていた時に突如、イーグルと共にノヴァが現れた。

だが、ノヴァは俺や光達の事も忘れて…

いや、始めから知らなかったのだろう。

無論、ノヴァは躊躇なく俺に襲い掛かて来た

が、

俺は彼女に向けて剣を振るう事は出来な

かった。

そして、追い詰められた俺は彼女にとどめを

刺されようとした時に、モコナが現れて彼女

に

セフィーロにいた頃の記憶を植え付け…

いや、呼び起こしてくれた後、

俺達をその場から逃がしてくれた。」

ノヴァ（レガリア）「そして光達の事を理解した私はランティスと一緒に、

『もう一つのセフィーロ』の動向を探っていたの。」

魔神ランティス（NT-D）「その調査の過程でノヴァがクローンである事と

イーグルがデボネアではないかという仮説

に

辿り着いたが、確証は無かった。

だが、これでようやく仮説が確信に変わった

!!

小狼「そうだったのか…。」

さくら「光さん…ノヴァさん…。」

ノヴァ（レガリア）「今まで黙っててごめん光…でも、これだけは

信じて!!

私は決してみんなの敵じゃない!!」

光（レイアース）「当たり前じゃん!!例えクローンでも

ノヴァはもう一人の私...そして親友だよ!!」

海（セレス）「そうよ!!」

風（ウインダム）「わたくし達も...あなたの親友です!!」

ノヴァ（レガリア）「みんな...」

ケロベロス「チツチツチツ!!ワイらも忘れてもらっちゃ困るで!!」

小狼「ああ...俺達も、お前の友だ!!」

さくら「これからも一緒にがんばろうね、ノヴァちゃん!!」

ノヴァ（レガリア）「さくら...小狼...ケロベロス...ありがとう

う...!!」

と、ノヴァは感激のあまり、涙を流しながらそう語った。「new p

age」

海（セレス）「ようし...みんなが一つになった所で!!」

風（ウインダム）「後はデボネアを倒すだけです!!」

光（レイアース）「ノヴァ...一緒に戦おう!!この世界の...

みんなの未来を守る為に!!」

ノヴァ（レガリア）「うん!!確かに、私を生み出してくれたお母様に

は感謝しています...

でも、あなたがみんなの未来を脅かすというのな

ら...

私はあなたと戦うわ...デボネア!!!!

私は光達の親友そして...グラン・ゲインズだか

ら!!!」

さくら「ノヴァちゃん!!!!」

ケロベロス「よっしゃー!!その意気やで!!」

魔神ランティス（NT-D）「フツ...吹っ切れたようだな。」

イーグル（デボネア）「ハハハハ!!私が直々に生み出してやっても、

やはり役立たずは役立たずだったようだな!!

だがもう遅い...これで私は完全復活を果た

俺達のセフィーロやもう一つのセフィー

ロ…

そしてこの世界の人々の思いを背負つての
戦いなのだ!!」

さくら「ランティスさん!!」

ケロベロス「せやせや!!あんなもんに世界を好きにさせてたまるか
いな!!」

光（レイアース）「うん!!海ちゃん!風ちゃん!合体だ!!」

海（セレス）「ええ!!」

風（ウインダム）「はい!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、続いて光が号令をかけると、レイアース・セレス・ウインダム
が

眩い光を放ちながら『合体レイアース』となった!!「new page」

光（合体レイアース）「行くぞ、?デボネア!!!!!!」

キュアアーンヴァル「合体した!!!!!!」

キュアエターナル「凄い!!!!!!」

デイケイド「久々に見たな。」

アクア「それでは総員…攻撃開始!!!!!!」

ベジータ（ブルー進化）「これでも喰らえ!!ビッグバンアタック!!」

トランクス（超サイヤ人ホープ）「ギャリック砲!!」

鬼太郎「指鉄砲!!!!!!」

アニエス「ダイナバ・ミ・トーチ!!」

零「煉獄の業火（サタンブレイズ）!!!!!!」

エスカノール「この私を前にして究極の姿などと、おこがましい!!」

無慈悲な太陽（クルーエル・サン）!!」

キュアブラック・ホワイト「エキストリーム!!」

シャイニー・ルミナス「ルミナリオ!!!!!!」

キュアスター「プリキュア!スターパンチ!!」

キュアミルキー「プリキュア!ミルキーシヨック!!」

ノヴァ (レガリア) 「あ…あ…あ…あ…」

魔神ランティス (NT-D 共振) 「ば…馬鹿な…。」

さくら 「そ…そんな…」

キュアハート 「ひ…光さ…? ……ん!!!」

キュアブラック 「な…何で!!!」

キュアスター 「レイアースの攻撃は決まっていたのに!?」

デボネギア 「愚か者共が…今の私はこれまでとは比較にならない程の

恐怖と絶望をこの身に宿しておるのだ!!

そのような爪の垢程度の希望だの想いだので

この私を葬れると思っていたのか?

デスパイアウエーブ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

メンバー一同 「うわああああああ!!!」

と、デボネギアはそう言いながらデスパイアウエーブと

呼ばれる衝撃波を放ち、グラン・ゲインズのメンバーを吹き飛ばした。

メリオダス 「くっ…?!」

バン 「クソが!!!」

マーリン 「さて…これはこれはどうしたものか…。」

アクア 「それだけじゃないわ…レグルス・ギアと同化しているせいで、

デボネア自身の力も更に増幅されているみたい…。」

デボネギア 「その通りよ!!ラー・カインには感謝せねばな。

さて、役立たずのゴミ…ノヴァよ!!」

ノヴァ (レガリア) 「…えっ?」

デボネギア 「まずはお前から消し去ってくれるわ!!

死ね…デスパイアハイメガキャン!!」

「ブウウウウウウウウウウ…。」

「ドオウアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

魔神ランティス (NT-D 共振) 「何!?!」

age」

デボネギア「ハハハハハハハハハハ!!!無駄なあがきだ!!

もうすぐこの世界は滅ぶ!!

そして私の手で暗黒の世界へと生まれ変わるのだ!!

お前達もすぐに獅堂光の後を追わせてやろう…」

「ドオオオオオオオオオオ!!!」「ブウウウウウウウウウウウウ
!!!」

と、デボネギアはそう言いながら魔力を最大限までに高めると、
必殺技の発射態勢をとる。

ベジータ（ブルー進化）「な…何だこの凄まじいパワーは!!!?」

悟空（界王拳ブルー）「す…凄え…。」

メリオダス「感心してる場合じゃないぜ悟空!!」

鬼太郎「そうだ!あきらめたらそこで終わりだぞ!!」

朱夏「鬼太郎の言う通りだ!!世界の運命は妾達の手にかかっている
んだぞ!!」

デボネギア「ハハハハハハハハハハ!!!死ね!!デスパイアダークブラスター

!!!」
「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キュアホワイト「あ…あんなの…。」

!!!!!!!

キュアセレーネ「一体、どうしたら…。」

キュアエース「わ…わたくし達…」

レジーナ「ここまでなの…?」

魔神ランティス（NT-D共振）「くっ!?!…光…。」

さくら「光さん…!!」

海・風・ノヴァ「光うううううううううううう!!!」

と、デボネギアが放った最強技の一つ『デスパイアダークブラ

スター』が

メンバーに直撃しそうになったその時…」new page」

「パアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「シューーーーーー!!!?」

!!!!!!!

デボネギア「何!!!」

!!!!!!!

キュアミルキー「オヨ!!!」

キュアコスモ「今…何が起きたニヤン!!!」

キュアソード「み…みんな!!あれ見て!!!」

キュアブラック「あ…ああ!!!」

キュアスター「よかった…!!!」

キュアハート「光さん!!!」

光（レイアース）「…みんな、心配かけてごめん!!でももう大丈夫だから!!」

と、突如、レイアースの体から眩い光が放たれると、

『デスパイアダークブラスター』を相殺し、

光がそう言いながら立ち上がるのだった。

風（ウインダム）「光さん…。」

海（セレス）「もう…本当に心配したんだから!!」

ノヴァ（レガリア）「おかえりなさい…光!!!」

デボネギア「ば…馬鹿な…お前は確かに死んだはずだ!!なぜ生きているのだ!?!」

それにその輝きは…まさか!!!?」

光（レイアース）「この子のおかげよ!!!」

モコナ「ふう!!!」

さくら「モコナちゃん!!!」

ケロベロス「えろう久しぶりやな!!」

フワ「フ〜ワ〜!!!」

光（レイアース）「モコナが私の中にわずかに残っていた『柱』の力を

呼び起こしてくれた。それで私は再び

立ち上がることができたんだ!!

デボネア…いや、デボネギア!!お前を倒す為に

!!!!」

シャナ（正解）「アラストール…やっぱり奇跡って起きるものなん

だね!!」

アラストール「奇跡…とは少し違いかもしれんな。」

悠二(藍染)「これはあの娘が引き寄せたもの… いわば必然というものだ。」

邪気の塊でしかないあの者には永遠に理解できないものだろう。」

デボネギア「ハハハハハハハハ!!!そんなちっぽけな『柱』の力で

私をどうにかできると思っておるのか!?

再びお前を葬り去ってくれるわ!!!」

光(レイアース)「それはどうかな?モコナ!…力を貸して!!!」

モコナ「ぶうううううううううううううううううううううううう!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、光がそう言うと、モコナの体から眩い光が放たれると、

レイアース・セレス・ウインダム・レガリア・魔神ランティスの

5体が『柱』の力でそれぞれ『超魔神』へと進化を遂げた!!「ne

w p a g e」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー!!!」

光(レクサス)「超炎神レクサス!!」

海(超セレス)「超海神セレス!!」

風(超ウインダム)「超空神ウインダム!!」

ノヴァ(超レガリア)「超魔神レガリア!!」

超魔神ランティス「超魔神ランティス…ここに参!!!」

デボネギア「ま…魔神が進化しただとおおおおおおおおお!!!?」

「!!!!」

さくら「光さん!みんな!!!」

小狼「す…凄い魔力だ!!!」

ケロベロス「こりゃとんでもない光景やな!!」

アクア「ええ!!これなら行ける気がする!!」

マーリン「アクア殿、気がするではなく確定事項の様だ。ほら、我々

も…。」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

メリオダス「おお!!!」

鬼太郎「こ…これは…。」

悟空（界王拳ブルー）「力が凄え湧いてくっぞ!!!!!!」
キュアブラック「これが『柱』の力……」!!!!!!
キュアハート「ブラック、違うよ。これは光ちゃんの『思いの力』だよ!!」

と、続いてグラン・ゲインズのメンバー達も光が放った『柱』の力で

力が漲ってきたのであった。

ベジータ（ブルー進化）「フン！残念だったな。」

エスカノール「ハツハツハツ!!今度はあなたに絶望を味わわせてあげましょう!!」

トランクス（超サイヤ人ホープ）「覚悟しろ!!!」

キュアホワイト「あたし達の世界を、あなたの思い通りになんてさせない!!!」

デボネギア「ほぎけええええええええええ!!!お前達ゴミ共が

いくら力をつけた所で、私の暗黒の力には足元にも及ばぬ!!

この世界諸共消し去ってくれるわ!!!

海（超セレス）「望む所よ!!」

風（超ウインダム）「今こそセファイロやもう一つのセファイロの人々の無念を晴らします!!」

ノヴァ（超レガリア）「今日ここで、お前との因縁を断ち切る!!」

超魔神ランティス「消えるのは貴様だ……デボネギア!!!」

光（レクサス）「海ちゃん、風ちゃん、みんな……行こう!!!」
一同「了解!!」

と、光の号令でグラン・ゲインズのメンバーはデボネギアへと一斉攻撃を仕掛けていった。一方その頃……。「new page」

町民女性「きゃああああああああ!!!」

町民男性「うわああああああああ!!!」

サトシ「ピカチュウ!10万ボルト!!」

ピカチュウ「『10万ボルト!!』」

龍斗「超神速拳!!」

エスカノール「無慈悲な太陽（クルーエル・サン）!!」
鬼太郎「指鉄砲!!」

零「煉獄の業火（サタンブレイズ）!!」

キュアブラック・ホワイト「プリキュア！マーブルスクリューマツクス!!」

キュアスター・ミルキー・ソレイユ・セレーネ

「プリキュア！サザンクロスショット!!」

キュアコスモ「プリキュア！レインボースプラッシュ!!」

キュアハート・ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース

「プリキュア！ロイヤルラブリーストレリ！トフラッシュユ!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

デボネギア「うおおおおおおおおお!!!!?」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!」

と、今度はメンバー達がそれぞれ必殺技を放ち、

デボネギアに大ダメージを与えて吹き飛ばした。そして…「ne
w page」

光（レクサス）「海ちゃん！風ちゃん！これで決めるよ!!」

海（超セレス）「ええ!!!」

風（超ウインダム）「はい!!!」

「パアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、光達はそう言いながら3機を合体させて、

『合体超レイアース』となった!!

光（超レイアース）「これで最後だ… デボネギア!!」

デボネギア「最後なのはお前達だ!! 『デスパイアダークブラスター』
!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

光・海・風「閃光の… 螺旋!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、デボネギアがデスパイアダークブラスターを放つと、

対する光達も閃光の螺旋を放ち、激突する。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

e w p a g e]

? 「千の礫(ラツシユ・ロツク)」

? 「砕破 (ギガ・クラツシユ)」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドツカーーーーーー!!!」

と、光達の前方に突如、無数の岩石が出現し、衝撃波を相殺した。

バン「おい……団長、今は……」

メリオダス「イツシツシツ……帰ってきたな!!」

「シユンシユンシユンシユン!!!」

ディアンヌ「みんな、ただいま!!」

キング「間に合ってよかった!!」

ドロール「まあ、危なかったですがね。」

グロキシニア「ヒーローは遅れて登場するもんすよ、ドロール君。」

と、そこに修行に出ていたディアンヌ・キング・ドロール・グロキ

シニアの

4人が登場し、光達の危機を救った。

キュアハート「キングさん!!ディアンヌさん!!」

アクア「ドロールにグロキシニアまで……どういうつもりなの?」

メリオダス「まさか、手を貸してくれんのかお前等?」

ドロール「メリオダス、ミリカ・ド・グランバニア、その話は後に

しましょう。」

グロキシニア「そうっすね。少なくともあつしらは君達の敵ではな

いっすから。」

マーリン「にわかには信じられんがな。だが、この場は

一人でも味方が多い方がいい。」

エスカノール「まあ、足手まといにならないければ構いませんよ。」

ドロール「では、行きましようか。」

グロキシニア「君達、早速修行の成果を見せるっすよ!!」

キング「はい!グロキシニア様!!」

真・霊槍シヤステイフォル第一形態「飛び回る蜂(バンブル
ビー)!!」

海「ええ!!」

風「はい!!」

ノヴァ「わかった!!」

ランティス「ああ!!」

「シューーーーーー……」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

と、対する光達もレイアースデザイナーの魔力を最大限まで高めると、

レクサス・セレス・ウインダム・レガリア・ランティスの計5本の剣を

出現させると前方に浮遊させて重ね、魔法陣を形成し、必殺技の発射態勢をとる。

朱夏「光!みんな!!」

鬼太郎「僕達の!!」

シャナ(正解)「私達の想いを!!」

キュアブラック「全部持ってて!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、メンバー達もそう言いながら『柱』の力を放出し、光達へと集めていった。

海「みんな!!」

風「ありがとうございます!!」

光「みんなの想い……無駄にはしない!!これで終わりだ……デボネギア!!」

光・海・風・ノヴァ・ランティス「『デザイナー・スパイラル』!!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、光はそう言いながら最強技の『デザイナー・スパイラル』を放つた。そして……「new page」

「バリバリバリバリバリバリバリ!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

デボネギア(最終形態)「ぐぐおわああああああああああああああ

ああああああああああああああああ

泪「あの女は!？」

キュアセレーネ「エメロード姫!？」

ねこ娘「あんた…まだやる気なの!!!!？」

マーリン「待て。もう彼女に敵意は感じられない。」

アクア「どうやらそうみたいね。どういったご用件かしら?」

光「エメロード姫…。」

エメロード姫「ごめんなさい、伝説の魔法騎士達、

そしてグラン・ゲインズの皆様…

今回は私の心が弱かったばかりに

このような事態を招いてしまいました。

ですが…せめて最期に、その償いをさせてください。

い。」

海「償い…?」

風「それってまさか…。」

エメロード姫「はい…私の残された力を使い、セフィーロを元の姿へと戻します。」

それが私にできる唯一の償いです。」

ランティス「エメロード姫…。」

クレフ「ですが、良いのですか?それができるのならば、

もう一つのセフィーロの方を戻す事だつて…。」

エメロード姫「良いのです。本来ならば私達のセフィーロは

歴史に存在するはずではなかったものです。

あるべき姿に戻るといだけの話ですよ。

さあ…もう時間がありません。さようなら…

そしてありがとう魔法騎士達…。」

「パアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー!!」

と、エメロード姫はそう言いながら眩い光を放つと、

クレフに封印されていたセフィーロが元の姿へと戻り、

普段の光景が戻っていた。そしてエメロード姫は

輝かしい光と化していき、消滅していった。「new page」

海「エメロード姫……」

風「これで本当に終わったのですね……」

光「ありがとうエメロード姫…… 今度こそザガートと幸せになつてね。」

ランティス「導師クレフ…… 本当にセフィーロは元に戻ったのですか？」

クレフ「ああ！これを見てくれ!!」

「パアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と、クレフが杖を上に掲げると、元の姿にもどったセフィーロの光景が

映し出だされていた。

さくら「これがセフィーロ……」

ケロベロス「ええ所やないか!!」

小狼「ああ!!」

光「風ちゃん！あれ、フェリオじゃない!？」

風「あ…… ああ…… フェリオ!!!」

と、フェリオの元気な姿を見たら風は涙を流しながら喜んでいた。

ディアンヌ「良かったね…… 風!!」

キング「オイラもちよつと泣けてきちやうな!!」

グロキシニア「これでセフィーロ襲撃に加担したあつしらも

少しは借りを返せましたかねえ、ドロール君？」

ドロール「…… ひとまずはですね。ですがまだこれからですよ。

私達の贖罪は……」

海「ていうかクレフ…… 魔力が戻ったの!？」

クレフ「そのようだな。セフィーロが元に戻ったおかげかもしれない。いい。」

これでようやく君達の役に立つことができるな。

まあ…… その必要はあまりないだろうがな。」

さくら「そんなことはありません、クレフさん!!」

光「これからもよろしくね!!」

クレフ「ああ…… そう言ってもらえると助かる。」

ランティス「導師だけではない。俺達も一緒だ!!」

ノヴァ「うん!これからもよろしくね光、みんな!!」

マナ「もちろんだよ!!」

アクア「歓迎するわ!!」

メリオダス「さてさてさーて… そういや、デイド達の方はどうなったかな?」「new page」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

士「呼んだか?」

安「ただいま戻りました!!」

ちひろ「でも、かなりヘビーな戦いでした…」

デイド「まあ、みんな無事で何よりだぜ!!」

と、そこへオーロラカーテンから士やデイド達が姿を現し、合流した。

マナ「士さん!デイドさん!!」

なぎさ「安ちゃんにちひろちゃん達も!!」

マーリン「ん?土殿…後ろにいる者達は何だ?」

士「ああ、こいつらはたまたま一緒に戦った連中で、

どうやらグラン・ゲインズに用があるらしい。」

ベジータ「!!!おい、まさか貴様等…サイヤ人か!!!?」

悟空「おめえら…凄え気だな!!!」

龍斗「ああ…こっちのベジータさんや悟空さんは初めましてだっけ。」

俺の名は白雪龍斗!!」

ゴウガ「俺は氷川ゴウガ!!」

ガルダ「鳳凰ガルダだ。」

亜久里「ハピネスチャージプリキュアの皆様もいますわ!!」

真琴「でも…知らない子達もいるわね?」

めぐみ「ああ…この次元のドキプリメンバーは初めましてだよね。」

まりあ「私は氷川まりあ…いおなの姉よ!!」

こよみ「あたしは愛野こよみ!!」

まりな「私は氷川まりな… よろしく!!」

マナ「こちらこそ!!」

なぎさ「よろしく!!」

キング「それで… 後の人達は？」

サトシ「俺はマサラタウンのサトシ!!」

ラン「あたしは妹のランです!!」

セレナ「私はセレナ!!そして、この子がハグタン!!」

ハグタン「はぐー」

カイト「俺の名はカイトだ。よろしくな!!」

メイミ「私はメイミ!!」

セイラ「あたしはセイラ。」

ジン「ジンだ…。」

アキラ「俺の名はアキラ。」

コナン「俺はベイカタウンのコナン!!」

そして俺達は… 『勇者探偵隊』さ!!」

ナツメ「勇者探偵隊… ?」

アクア「これはまた個性的な子達が集まったわね…。」

「シユンシユンシユンシユン!!!」

ビルス「よく来たな、お前達。待っていたぞ!!」

ウイス「皆さん… この次元によろしく!!」

エンマ大王「おい、ビルスにウイス!!そう言う前にまずはみんなを
労えよ!!」

ぬらりひよん「まあまあ大王様、そうおっしやらずに。」

と、そこへビルスやエンマ大王達が姿を現した。

龍斗「あれがこの次元のビルス様とウイスさんか!!」

ゴウガ「俺達の世界のビルス様とあんまし変わんねーな。」

コナン「… (まあ、別世界のランの父親でもあるんだけどな…」

でも、その事は黙ってねーと」

サトシ「この次元ではビルス様とエンマ大王は対等な関係なんだな」

「セレナ「そうみたいね…。」

アクア「ビルス様、エンマ大王… おかげさまで

もう一つのセフィーロの脅威は去りました。残るは…。」

エンマ大王「ああ。戦力も集まってきたしな!!この勢いで

奴らの本拠地… 『ラー・パレス』に総攻撃をかけるぜ

!!

メリオダス「イツシツシツ… 望むところだぜ!!」

鬼太郎「いよいよか…。」

悟空「オラ、ワクワクしてきたぞ!!」

龍斗「ラー・カインだろうが何だろうがかかって来やがれ!!」

光「…」（エメロッド姫… もう一つのセフィーロのみんな…

必ず私達はラー・カインを倒し、この世界に真の平和を取り戻し

て見せる!!）」

と、エンマ大王の口からラー・パレスへの総攻撃が宣言されると、
ボルテージが上がるメンバー達であった。そして… 「new page」

レグルス帝国軍基地 ラー・パレス

ラー・カイン「デボネアが敗れたか…。」

ゴクウブラック「まあ、順当な結果か… あんなものにグラン・ゲ

インズが

敗れるわけがなからう。」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ… そう来なくては面白くな

いのう!!」

ツアイト「となれば次は…。」

キャロル「ええ。このラー・パレスに意気揚々と攻めてくるに違い

ありませんね。」

ザマス「愚かな人間共め… 今度こそ奴らを神の名の下に葬り去つ

てくれる!!」

ピエラート「しかし… 十戒のグロキシニアとドロールが

グラン・ゲインズに寝返ったのは驚きであるな!!」

ラー・カイン「元々、あの2人は魔神族ではないからな…

寝返ってもおかしくはなからう。」

それより、キャロルよ… 派遣部隊の戦況はどうなつておる？」

キャロル「はい。第3・第5以外のA・D次元は、ほぼ完全に我が軍の制圧下に治めました。

ですが、『D・B次元』と『ブリタニア』は

一進一退の攻防が続いており、

侵攻は思いの他、進んでいないようですわ。」

ザマス「ほう？『D・B次元』と『ブリタニア』はともかく、

第3世界の間人共も中々粘っているようだな。」

ゴクウブラック「あそこは『バイキンシヨツカー』が侵攻してきて以降、

かなり戦力を増強したらしいからな。おまけに、

『次元管理局』の連中も第3世界の防衛に力を入れている…

そうやすやすとはいかんだらうな。」

ラー・カイン「ならばキャロルよ… 派遣部隊の全戦力を

このラー・パレスに集結させよ。」

キャロル「全戦力を… でしょうか？」

ラー・カイン「うむ… 今のグラン・ゲインズは平行次元の戦士達も多数集結し、

単なる虫ケラ共の集団ではなくなってきた。

聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）の最終幕に

相応しい舞台を用意してやろうと思つてな…。」

キャロル「かしこまりました… ではそのように手配いたします。」

「シユン!!」

と、キャロルはそう言いながらその場から姿を消した。

ラー・カイン「四聖士（パラディーン）の諸君、そしてザマスにブラックよ…

もうグラン・ゲインズに手加減は不要だ。

思う存分、戦うが良い…!!」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ!!血が騒ぎ始めましたわい!!」

兵士「国王様！ここは危険です!!直ちに避難して下さい!!」

バルトラ「何という事だ…魔神族やギガデウス一派の脅威から

逃れたと思いきや、今度はこれか…。」

と、リオネス王国に突如、謎の巨大な怪物が数体出現し、

町や人々を蹂躪していくのであった。

デューク「フフフ… 順調ですねえ!!後は『獲物』がかかのを待つだけ…」

さあ… 思う存分叩き潰すのです!!頼みましたよ… 『怪

獣王ゴジラ』!!」

ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

レイス「という訳で、ついにデボネアを撃破し『もう一つのセフィロ』との

決着をつけたグラン・ゲインズ。そして、龍斗君やコナン君達も合流して

戦力が整ってきた彼らはいよいよレグルス帝国軍基地

『ラー・パレス』に

総攻撃をかける事となり、ラー・カインとの最終決戦へと挑む事となった。

一方その頃、ブリタニアから異世界に転移したりリオネス王国では

怪獣王ゴジラやその他数体の怪獣達が出現し、

絶体絶命の危機へと追い詰められていくのであった。

果たして、その場にいたデュークの狙いとは…

そして彼が言う『獲物』とは何なのか…？

リオネス王国の運命は一体、どうなってしまうのか？

さて、今回で第2部『新たなる来訪者編』が終わり、

次回から始まる第3部『リオネス王国壊滅の危機編』も…

刮目せよ!!

・オリジナル設定

【超炎神レクサス】

光が発動させた『柱』の力により、進化を遂げたレイアース。魔力がこれまでとは比較にならない程に上昇し、容姿もOVA版のようなより生物的になっている。同じくセレスやウインダムと合体し、『合体超魔神レイアース』となる事も可能である。尚、使用できる魔法はこれまでと同じ。

【超海神セレス】

光が発動させた『柱』の力により、進化を遂げたセレス。レクサスと同じく魔力がこれまでとは比較にならない程に上昇し、容姿もOVA版のようなより生物的になっている。同じくレクサスやウインダムと合体し、『合体超魔神レイアース』となる事も可能である。尚、使用できる魔法はこれまでと同じ。

【超空神ウインダム】

光が発動させた『柱』の力により、進化を遂げたウインダム。レクサスやセレスと同じく魔力がこれまでとは比較にならない程に上昇し、

容姿もOVA版のようなより生物的になっている。

同じくレクサスやセレスと合体し、『合体超魔神レイアース』となる事も可能である。尚、使用できる魔法はこれまでと同じ。

【超魔神レガリア】

光が発動させた『柱』の力により、進化を遂げたレガリア。魔力がこれまでとは比較にならない程に上昇している。レクサスのような合体機能がない代わりに、ランティスと同じく『NT-Dシステム』を発動できる。

その際に発する光はバンシイと同じく金色である。

【超魔神ランティス】

光が発動させた『柱』の力により、進化を遂げたレガリア。魔力がこれまでとは比較にならない程に上昇している。

レクサスのような合体機能がない代わりに、ウオッチを発動させなくてもほぼ自在に『NT-Dシステム』を発動できる。

【レイアースデザイン】

光が『柱』の力を極限までに解放した際にモコナが姿を変えた

『デザインアウオッチ』を発動させて、

レクサス・セレス・ウインダム・レガリア・ランティスの5機が奇跡の合体を果たし、究極の魔神となった姿。

レクサスを基に他の4機の各パーツがバランスよく組み立てられており、

機動性や魔力の方もこれまでの合体レイアースとは比較対象にもならない程に

上昇した。デボネギアとの最終決戦でこの形態を発動させて

『もう一つのセフィーロ』との戦いに終止符を打った。

その後は『柱』の力が尽きたせい、しばらくの間、発動できなくなった。

尚、魔法は各魔神のものを使用できるほか、

『閃光の螺旋』や『閃光の剣』などのこれまでの強力な合体技もある。

最強技はデボネギアを倒した時に発動した『デザイン・スパイラル』である。

【デザイン・スパイラル】

5体の魔神のそれぞれの剣を召還した後、前方に浮遊させて重ね、魔法陣を形成し発動するレイアースデザインの最強技。

『閃光の螺旋』と『閃光の剣』を足して2で割ったような形をしている。

その威力は絶大で、地球の数倍の大きさがある

デボネギアの最強技『デスパイアジェノサイドスファイア』を一瞬で粉碎したほど。「new page」

【暗黒絶亡魔神デボネギア】

デボネアがラー・カインから与えられた

新型魔神『レグルス・ギア』と同化して

突然変異を果たした姿。魔力はデボネアのころとは

比較対象にならない程に上昇しており、

強力な技や魔法が発動できるほか、

ビルスの破壊をも上回る『暗黒エネルギー』、

スーパードーナマシンによる『超速再生』、

セフィロー兵やバグなどを『無量大数召還』できるなどの

ある意味、ラー・カインよりもヤバイ特殊スキルを会得している。

グラン・ゲインズとの最後の戦いでこの形態となり、

挙句の果てには暗黒の力を極限までに放出し、

自身では制御がうまくできない程までに巨大化して『最終形態』へ

と

変貌したが、最期はレイアースデザインアの最強技

『デザインア・スパイラル』の直撃を受けて完全消滅した。

尚、容姿のイメージは通常形態はガンダムAGEの『ヴェイガンギ

ア・シド』に

デボネアの顔を装着させたもの。

最終形態はガオガイガーに登場した『Zマスター』。

・技

【デスパイアロッド】

空間から無数の触手を繰り出して相手を串刺しにする技。

【デスパイアビット】

空間から無数のビットを出現させて相手を攻撃する技。

劇中では50000基だったが、その気になればいくつもの次元に

出現させることも可能である。

【デスパイアブラスト】
暗黒の弾丸を体中から連射する。

【デスパイアウエーブ】
全身から暗黒エネルギーの衝撃波を発射する。
最終形態時は巨大化した右手から通常形態よりも数倍の威力を誇る
衝撃波を放つ。

【デスパイアハイメガキャノン】
デボネアの顔部分から発動させる強力な暗黒エネルギービーム。

【デスパイアダークブラスタースター】
暗黒エネルギーを結集させて放つデボネアの最強技の一つ。
イメージとしてはブラスタースターボルテツカと超かめはめ波を
足して2で割り、漆黒にしたもの。
命中すれば、宇宙を一瞬で消し飛ばせる程の威力であるが、
光が発動させた『柱』の力で相殺された。

【デスパイアシャード発生器】
ネオ・ジオングの『サイコシャード』と同じく、
デボネギアの神髄とも言える大型サイコミユ兵器。
展開時には暗黒の結晶体「デスパイアシャード」を発生させ、
デボネギアの巨体を囲んでしまうほどの巨大なリングを形成する。
サイコフレームが共振した際に発生するサイコ・フィールドに限り
なく

近い現象を意図的に再現することが可能。

サイコシャードによるサイコ・フィールド展開時には、デボネギア
が望む

イメージや想念を実現・具現化できてしまうという、敵対する者にとっては恐るべき空間となるが、具現化した後に再びフィールドを展開させる際に発生するわずかなタイムラグを突かれて発生器が破壊され、以降は展開できなくなつた。

【デスパイアジェノサイドスフィア】

最終形態時で発動させたデボネギアの最強技。持てる暗黒の力全てを結集し、地球の数倍の大きさがあるエネルギー弾を発生させて、相手を消滅させる。

命中すれば、宇宙の一つや二つを軽く消し去る消し飛ばせる威力だが、

レイアースデイザアの最強技『デイザア・スパイラル』であつさりと破られた。

【魔神レグルス・ギア】

レグルス帝国軍が開発した新型魔神。

機動性、攻撃力共に優秀で、『ツインドライブ』を搭載しており、トランザムも発動可能であるため、

合体レイアースよりも遥かに高性能である。

試作1号機が『もう一つのセフィロ』に与えられたが、デボネアが同化してデボネギアとなつた為、

本来の性能はまだお披露目されていない。

尚、容姿のイメージはガンダムAGEの『ヴェイガンギア』。

・武器

大型GNビームサーベル×2

GNファング×10

GNブラスタ×1

GNフィールド

ライザーソード（トランザム発動時）

と、すかさずモスラとラドンが空中から衝撃波を起こし、
リオネス国民と共にマーガレットたちを吹き飛ばした。
キングギドラ「ぐおおおおおおおおおおお!!!」
ゴジラ「がおおおおおお!!!」

聖騎士「国王様!!ここは危険です!!避難してください!!」
バルトラ「くっ…何という事だ!?十戒やギガデウス一派の脅威か
ら

逃れられたかと思いきや今度かこれか!?

七つの大罪がいらない今、もう我々に打つ手は…。」

?「あきらめてはいけません!!」

?「後は俺達に任せてください!!」

バルトラ「き…君達は!?!」

モロボシ・ダン「よし…いくぞみんな!!」

ダイゴ・アスカ・ミライ「はい!!」

リク「ジーツとしてても、ドーにもならねえ!!」

ハルキ「押忍!!」

モロボシ・ダン「ジユワツ!!!」

ダイゴ「テイガ!!」

アスカ「ダイナ!!」

ミライ「メビウー…ス!!!」

リク「ライブ!ユナイト!アップ!ウルトラマンギンガ、ウルトラ
マンエックス、

ウルトラマンオーブ。集うぜ!キラ星!!

ジュー…ド!!!」

ハルキ「宇宙拳法、秘伝の神業!ゼロ師匠!セブン師匠!レオ師匠
!」

謎の声「ご唱和ください、我の名を!!ウルトラマンZ!!」

ハルキ「ウルトラマンゼ…ツ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、突如バルトラの前に姿を現した『モロボシ・ダン』を
始めとする6人の男性達が、それぞれ変身を果たし、

『ウルトラマン』と呼ばれる巨人へと変身を果たした!!」

ウルトラセブン「……………」

ウルトラマンティガ「……………」

ウルトラマンダイナ「……………」

ウルトラマンメビウス「……………」

ウルトラマンジード（ギヤラクシーライジング）「……………」

ウルトラマンゼットン（アルファエッジ）「……………」

ギルサンダー「何!!!」

ハウザー「何だありやあああああああああ!!!」

グリアモール「光の…巨人!」

バルトラ「あ…あれは「千里眼（ビジョン）」でみた『ウルトラマン』!!!」

おおお…これは奇跡か!!!」

バルタン星人「フオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフ!!!」

キングジョー「カラカラカラカラカラカラ（電子音）」

ゼットン「ゼットー………ン!!!」

モスラ「キイイイイイイイイイ!!!」

ラドン「キシヤアアアアアアア!!!」

キングギドラ「グオオオオオオオオオ!!!」

ゴジラ「ギヤオオオオオオオオオ!!!」

ティガ「やはりこの世界に現れたか… 怪獣達!!!」

ダイナ「しかし…まさかあの『ゴジラ』までいようとは。」

メビウス「そもそもゴジラは俺達の宇宙には存在しないはずなのに…」

一体、どういう事だ…?」

ジード（ギヤラクシーライジング）「あれ?そういえば『ゼロ』は?」

ゼット（アルファエッジ）「あつ!?ほんとだ!!ゼロ師匠がいない!!」

セブン「まったく…どこに行ったのだあのバカ息子は!」

仕方ない…我々でカタをつけるぞ!!」

一同「了解!!」

と、セブンの指示でウルトラマン達は一斉に攻撃を仕掛けていっ

た。

デューク「やっとできてきましたかウルトラマンの皆さん…

ですが私の狙いはあなた方ではありません。

さあ、早く出てきなさい…『ウルトラマンゼロ!!』「n

ewpage」

モスラ「キイイイイイイイ!!! (オホホホホホ!!! 何がウルトラマンよ!!)」

ラドン「キシヤアアアア!!! (これでも喰らうがいい!!)」

「バアアアアアアアア!!!」

ジード・ゼット「うわああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオ!!!」

と、モスラとラドンは衝撃波を発生させてジードとゼットを吹き飛ばした。

ジード(ギヤラクシーライジング)「くそっ…こいつら!!」

ゼット(アルファエッジ)「ジード先輩!! 一気に勝負を懸けましょう

!!

ゼットランスアロー!!」

ジード(ギヤラクシーライジング)「ギヤラクシーカッティング!!」

「バアアアアアアアアア!!!」

モスラ「キイイイイイイイ!!! (ああああああ!!!)」

ラドン「キシヤアアアア!!! (何だこれはー!!!?)」

「ドゴオオオオオオオオオ!!!」

と、モスラとラドンはジードとゼットの攻撃を受けると、

ダメージを受けて地上に墜落していった。そして…

ジード(ギヤラクシーライジング)「行くぞゼット!! レッキングフェ

ニックス!!」

ゼット(アルファエッジ)「ゼステイウム光線!!!」

「ドオワアアアアアアア!!!」

モスラ「キイイイイイイイ!!!」

(…このわたくしが…うぎやああああ!!!?)」

ラドン「キシヤアアアア!!!」

ダイナ「どこに消えた!？」

「シューーーーーーーン……。」

ゼットン「ゼットーーーーーーン!! (死ねえええええええええ!!!)」

と、ゼットンはティガとダイナの背後に現れると、攻撃を仕掛けようとするが……

メビウス「お前の動きは見切ってるぞゼットン!!」

『ライトニングカウンター・ゼロ』!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゼットン「ゼットーーーーーーン!!? (何故だああああああああああ!!!)」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、メビウスに動きを見切られていたゼットンはすかさずライトニングカウンター・ゼロの直撃を受けて爆散した。

バルタン星人「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!? (おのれえええええええええええええええええええええ!!!)」

「ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

メビウス「先輩!! 後はお願ひします!!」

ティガ「任せろ!! ゼペリオン光線!!」

ダイナ「ソルジェント光線!!」

「バリバリバリバリバリバリバリバリ……。」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

バルタン星人「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!? (ぎゃああああああああああああああ!!!)」

と、バルタン星人はハサミから破壊光線を発射するが、すかさずティガとダイナは必殺技を放って反撃し、バルタン星人を粉碎した。

ティガ「良し!!」

ダイナ「さすがに手強かったが何とかなっただぜ!! メビウス、お前のおかげだ!!」

メビウス「いえ…歴代の怪獣達との戦闘経験がたまたま生きただけです!!」

さあ、次に行きましょう!!」「new page」

キングジョー「カラカラカラカラカラカラ（電子音）」

セブン「キングジョーか…まさかまたお前と戦うことになるうとはな。

だが、すぐに終わらせてやる!ワイドショット!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、まずはセブンがキングジョーへと挑み、『ワイドショット』で攻撃するが…

キングジョー「カラカラカラカラカラカラ（電子音）（ソナモノガキクカボケ）」

セブン「何!?ワイドショットが通じないだど!?!」

キングジョー「カラカラカラカラ（電子音）」

（ムダダウルトラセブンイマノオレニハソンナモノツウジナイシネヤ）」

「ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッカーン!!!」

セブン「ぐわああああああああああ!!!」

と、キングジョーは目のような部分から破壊光線を放ち、

セブンに直撃させて吹き飛ばしダメージを与えた。

キングジョー「カラカラカラカラ（電子音）（ソノテイドカツマランナ）」

セブン「ま…まだだ!!うおおおおお!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、セブンはどうにか立ち上がると、キングジョーに向けて怒涛のラッシュを仕掛けていくが…

キングジョー「カラカラカラカラ（電子音）」

（ナンダソレハソレデコウゲキノツモリカヘナチヨ

コ）」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

メビウス「あ…ぐ…」

ゼット(アルファエツジ)「に… 兄さんたちまで…」

ジード(ギヤラクシーライジング)「こ…これが怪獣王の力…」

グリアモール「ウ…ウルトラマン達が…」

ハウザー「お…おい、ヤベエぞこれは!？」

キングギドラ「グオオオオオオオオオオ!!! (フン…調子に乗り

おって!!)」

ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオ!!! (キングジヨールよ…早くしろ!!)」

キングジヨール「カラカラカラカラ (電子音)

(ウルサイボケオレニサシズスルナシネヤセブン)

「ガシツ!!」「バキバキバキバキバキバキ!!!」

セブン「ぐわああああああああ!!!?」

と、キングジヨールはセブンにとどめを刺すべく

強烈なベアハッグでじわじわと大ダメージを与えていく。

ティガ「セ…セブン兄さん…」

ダイナ「く…くそ…」

メビウス「ここまでなのか…!？」

と、最早、セブンを見殺しにするしかないのかと思われたその時…

「new page」

? 「ウルトラゼロキック!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!?」

キングジヨール「カラカラカラカラアアアアアア!!! (電子音)

(クソガアアアアアアアアアア!!!)」

「ドドドドドドドドドドッカー…!!!」

と、突如、何者かの攻撃を受けたキングジヨールは、吹き飛ばされて爆散した。

ゴジラ・キングギドラ「!!!」

ハウザー「な…何だあ!!!」

ギルサンダー「今のは!!!」

? 「おいおい、主役の登場盛り上げすぎだろ!!!」

ティガ「あ… あいつは!？」

ダイナ「遅いんだよ!!」

ゼット(アルファエッジ)「ゼロ師匠おおおおお!!!!」

ウルトラマンゼロ「まったく… お前を弟子に取った覚えはねえぜ

ゼット!!」

と、そこへウルトラマンゼロが遅れて登場したのであった。

セブン「こ… このバカ息子め! 今までどこへ行ってた!？」

ゼロ「うるせえクソ親父!! ちよつと道に迷っただけだ!!」

けどまあ、ちよつと良かったじゃねえか。

やられかけてたみたいだったしよ!!」

セブン「だ… 黙れ! 余計なことはいいから、遅れた分働け」

ゼロ「言われるまでもねえ!! この宇宙にはこの俺…」

ウルトラマンゼロが必要だからな!!」

メビウス「相変わらずスゲエ自信… (▽?;)」

ダイナ「自信と云うか傲慢と云うか… (▽?;)」

ジード(ギヤラクシーライジング)「それがゼロですからね… (?

▽?;)」

ゴジラ「ギャオオオオオオ!!!」

(ウルトラマンゼロだと? 面白い… この俺が相手をしてや

る!!)」

ゼロ「おっ? お前が噂の怪獣王ゴジラか!! 俺とやろうってのか?

いいぜ、かかって来いよ!!」

キングギドラ「ガオオオオオオ!!!」

(貴様! この俺は無視かああああああああああ

!!!)」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ゼロとゴジラが一触即発になった時、キングギドラが

ゼロに向けて引力光線を発射するが… 「new page」

ゼロ「ウルトラ!! デイフェンサー!!」

「バキイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

キングギドラ「!!! (何だと!?)」

!!!!!!!!!!!!

デューク「ええ、その通りです。ああ…申し遅れました。

私はレグルス帝国軍第3戦闘艦隊所属

親衛隊（ホワイトナイツ）デュークと申します。」

ティガ「レグルス帝国軍だと!」

ダイナ「あの聖なる『最終戦争（ラー・アルマゲドン）』とかいう

ふざけた戦争を引き起こした連中か!!」

メビウス「何の罪もない人々を戦火に巻き込むとは…

お前は一体、何が目的なんだ!」

デューク「この世界に怪獣達を解き放つたのはあなた方をおびき寄せる為…

そしてあなたの力をいただく為ですよ…ウルトラマン

ゼロ!!」

「ピキイイイイイイイイイイイイイイイイン!!!」

ゼロ「な…何だよこれはああああああああああ!!!」

ティガ「なっ…?!?!」

ダイナ「か…鏡だと!!!」

と、デュークはそう言いながら巨大な鏡を出現させると、

ゼロを閉じ込めた。そして…「new page」

ゼロ「マジかよおおおおおおおおお!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「シューーーーーー!!!」

デューク「フフフ…こんなにあっさり」と

罠にはまるとは…ちよろいものですねえ!!」

ゼット（アルファエッジ）「し…師匠ーーーーー!!!」

ジード「ゼローーーーーー!!!」

セブン「お前…ゼロに何をした!!!」

デューク「何って…ゼロの力をいただくといつたでしょう?

そのため彼には私の『プライベートルーム』に

招待したのですよ。フフフ…。」

ティガ「ふざけるな!!」

ダイナ「ゼロを返しやがれ!!ソルジェント光線!!」

レインボーモスラ「キイイイイイイ!!!」

(新人の分際で：：スパークリング・パイルロード・レイン

ボー!!!)」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ゼット(ベータスマッシュ)「うおおあああああああああ
!!!!?」

と、ラドンとモスラはすかさず飛び立つと、

それぞれ必殺技を放ち、ゼットに大ダメージを与えた。

ゼット(ベータスマッシュ)「ううう。。。」

ティガ「ゼット!!!」

ダイナ「このままじゃやべえぞ!!」

セブン「ゼット!!あれを使うんだ!!」

ゼット(ベータスマッシュ)「あれ。。。?そうか!!ハルキ!!新しいウ
ルトラメダルを!!」

先輩達の変幻自在の神秘の光をお借り

するんだ!!」

ハルキの声「ん。。。これの事っすか?押忍!!変幻自在。。。神秘の光

!!

ティガ先輩!ダイナ先輩!ガイア先輩!!

ウルトラマン。。。ゼーーーーーッット!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ハルキはウルトラゼットライザーに!ティガ・ダイナ・ガイアの
メダルをゼットし、発動させると、

新形態『ガンマフューチャー』へと変化を果たした!!

ゼット(ガンマフューチャー)「ウルトラマンゼット。。。ガンマ
フューチャー!!」

ダークバルタン「フオウ!!! (姿が変わった!?)」

キングジョーブラック「カラカラカラカラカラ (電子音)

(アノヤロウコンドハナンド)」

メビウス「よし!!」

ダイナ「ゼット!!俺達の力を無駄にするんじゃないぞ!!」

では健闘を祈りますよ。」

ゼロダークネス「デスシウムショット!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゼロ「ぐわああああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ゼロダークネスはすかさずデスシウムショットを放ちゼロを吹き飛ばした。

デュークの声「ヒヤハハハハハハハハハハ!!! さすがはあなた自身ですねえ!!」

これは面白いものが見れそうですよ!!

さあ... もっと私を楽しませてください!!」

ゼロ「舐めんじゃねえぞ... テメエを楽しませるヒマなんざ

これっぽつちもねえ!! 行くぜ... これが俺達の光だ!!

『ギンガ!!』『オーブ!!』『ビクトリー!!』『エックス!!』

電子音「ネオ・フュージョンライズ!!」

ゼロ「俺に限界はねえ!!」

「バアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ゼロはそう言いながらジードライザー!! にウルトラゼロアイNE Oを装着し、

ニュージェネレーションカプセル α & β を読み込ませると、

強化形態『ウルトラマンゼロビヨンド』へと変化を果たした!! 「n

ew page」

「シューーーーーー.....」

ゼロビヨンド「俺はゼロ... ウルトラマンゼロビヨンドだ!!」

ゼロダークネス「何?」

デュークの声「素晴らしい... この時を待っていましたよ!!

さあ行きなさい、ゼロダークネス!!」

ゼロダークネス「ダークゼロツインシュート!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ゼロビヨンド『クワトロスチャッガー!!』

「ズバババババババババババ!!!」

(クソツタレガアアアアアアアアアアアアア)「
ハイパーゼットン」「ゼットン………ン!!!」

(ぐあああああああああああああ!!!)」

デスギドラ「ギャオオオオオオオオオオ!!!」?

(……この俺様があああああああ!!!)」

「ドドドドドドドドドドツカ………ン!!!」

と、強化形態となったティガ達の必殺技が直撃した怪獣達は
一斉に大爆発を起こし、消滅していった。

セブン「よし……よくやった!!」

ゼット(ガンマフューチャー)「さすがです!先輩方!!」

ダイナストロングタイプ「そりや、後輩ばかりに良い恰好させられ
ないからな!!」

メビウスフェニックスブレイブ「これで残るはゴジラか!!」

ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

(よくもやってくれたな。お前等……覚悟はできてるんだろうなあ!!
うおおおおおおおおおおおおおおお!!!)」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ゴジラは怒り狂った咆哮を上げながら体中を輝かせると、

ゴジラから『シン・ゴジラ』へと進化を遂げた!!「new page」

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

グリッターティガ「何だと!!!」

ジードウルティメイトファイナル「ゴジラも進化した!!!?」

ゼット(ガンマフューチャー)「ウ……ウルトラやばすぎでしょあ
れ……」

セブン「怪獣王もいよいよ本気になったという事か……」

総員……攻撃開始だ!!ワイドショット!!!」

グリッターティガ「行くぞみんな!!グリッターゼペリオン光線!!!」

ダイナストロングタイプ「ガルネイトボンバー!!!」

メビウスフェニックスブレイブ「メビュームフェニックス!!!」

ジードウルティメイトファイナル「クレセントファイナルジード
!!!」

ジード「あ… ああ!!!」

セブン「遅かったな。」!!!

ゼット「ゼロ師匠………!!!」

ゼロビヨンド「だから、主役の登場盛り上げすぎなんだよお前等!!」

と、そこへ鏡の中から脱出したゼロビヨンドが登場した。

ティガ「ゼロ… 助かったぞ!!」

ダイナ「けどお前… 大丈夫なのか?」

ゼロビヨンド「俺の心配なんざ2万年早いぜ先輩!!」

さてと… 後は俺に任せな!

ゼット「ゼロ師匠!!俺もお供します!!」

ジード「俺もだ!!」

ゼロビヨンド「お前等は引っ込んでろ!!これからは俺とアイツの喧嘩だ。」

なあ、怪獣王?」

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオ!!! (面白い… 来い!!)」

セブン「ゼロ!!油断するなよ!!」

ゼロビヨンド「誰に言ってるんだ親父?んじゃ行くぜゴジラ!!」

バルキーコーラス!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオ!!!」

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオ!!!」

(うおおおおおおお!!!)」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!」

ゼロビヨンド「何iiiiiiiiiiiiii?」

と、ゼロビヨンドはまずバルキーコーラスと呼ばれる

必殺光線を放つが、シン・ゴジラはものともせず突進してくる

と…

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオ!!!」

(喰らえ… 『ゴジラツシュ』!!!)」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴガガガガガガガガガ!!!」

ゼロビヨンド「ぐあああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオ!!!」

!!!」

と、ゴジラはゼロビヨンドに対して、

『パンチ』『キック』『頭突き』『噛みつき』『ハンマーフック』等を

連発した後、最後は『ジャイアントスイング』で投げ飛ばす

通称『ゴジラツシュ』と呼ばれる格闘の連続技を直撃させて吹き飛

ばした。

ティガ「何!!!?」

ダイナ「ゼロの技が通じないだ!!!!?」

メビウス「何て奴だ... あいつは!?!」

セブン「言ったそばからあいつは...」

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

(どうした? 大口叩いておきながらその程度か!?!)

ゼロビヨンド「うるせえ!! これでも喰らいやがれ!! ワイドビヨンド

ショット!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、ゼロビヨンドはすかさず必殺技の『ワイドビヨンドショット』を

放つが... 『new page』

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

(それがどうした!?! 『バーンスパイラル熱線』!!!!!!)

「ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!」

ゼロビヨンド「ぐわああああああああああああ!!!!!!」

と、対するシン・ゴジラは平成ゴジラ最強クラスの熱線である

『バーンスパイラル熱線』を放つと、『ワイドビヨンドショット』を

一瞬で粉碎し、そのままゼロビヨンドに直撃させて大爆発を起こし

た。

そして、大ダメージを受けたゼロビヨンドは元の形態に戻ってし

まった。

「シューーーーーーシューーーーーーシュー...」

ゼロ「あ... ぐ...」

シン・ゴジラ「ギャオオオオオオオオオオオオ!!!!!! (ファン、終わったな...)」

ゼット「あ… あれを見てください!!」

「シューーーーーーシューーン…。」

ゼロ「……………」

ゴジラ「……………」

「ドサドサツ!!!」

と、力を使い果たしたゼロとゴジラは元の姿に戻り

お互いにその場で倒れてしまった。

ティガ「あ… 相打ちか…。」

ジード「ゼロ!!!」

ゼット「師匠!!!」

と、ゼット達は急いで駆けつけて倒れていたゼロを起こして支えた。

ダイナ「ゼロ… やったな!!」

メビウス「冷や冷やしたぜ!!」

ゴジラ「グウウウウウウウ…。」

ダイナ「ゴジラはまだ息があるみたいだな。」

ジード「よし… とどめは俺達か!!」

セブン「待て!!」

と、ジードが倒れているゴジラにとどめを刺そうとしたときに

これをセブンが制止した。「new page」

メビウス「セブン兄さん、どうしてですか!？」

ジード「ここで仕留めなければまた暴れだしますよ!？」

セブン「… これで良いのしろゼロ?」

ゼロ「ああ、済まねえな親父。みんな… ゴジラは俺に預けてもら

えねえか?」

俺はこいつを… 『光の国』に連れて帰りてえ!!」

ティガ「何!!!」

ダイナ「お前、正気か!!!?」

メビウス「何でまた?」

ゼロ「へっ… 戦ってるうちによ、何か他人とは思えなくなっとな。

俺とこいつは似た者同士かもしれねえ… だから俺はゴジラ

だが、デュークが最後に語った言葉の意味は何なのか……
そしてこのことが後にグラン・ゲインズにとって
最大の危機を迎える事をこの時はまだ知る由も無かった。
今回で第3部が終了し、次回からいよいよ始まる
第4部『聖なる最終戦争(ラー・アルマゲドン)終結編』も……
刮目せよ!!!」

第57話 告げられる驚愕の真実…進之介V
S次元の王

「アルテミスブリッジ」

アクア「それじゃ、あなた達はバイエルンとアルトに連れられて

この次元に来たの？」

龍斗「まあ、そうだな。」

ゴウガ「ここに来た早々、とんでもねえ事になったけど、

良い肩慣らしにはなったぜ!!」

セレナ「あの状況で肩慣らしなんて言えるアンタ達って一体、何なの」

カイト「まったくください…よく誰も死ななかつたよなホント」

メイミ「そもそも、あの二人が敵前逃亡なんてしなきゃ、

こんな苦勞しなくて済んだのに」

メリオダス「敵前逃亡? どういうことだよ?」

ひめ「あの二人、急用ができたとかいつて途中からいなくなったのよ」

ゆうこ「まだ町中が大きな被害を受け続けていたのに」

デイード「まあ、そう言うなって!! その二人なりの事情つてもんが

あつたんだろうさ。それに、これから決戦なんだ。

気を引き締めていこうぜ!!」

安「はい!!」

沙淡「望むところよ!!」

ちひろ「緊張するなあ…。」

なぎさ「ついに…この日が来たんだね。」

ナツメ「レグルスに…ラー・カインに襲撃されて平和だった日常が壊された!!」

光「絶対にラー・カインを倒して失われた日々を取り戻すんだ!!」

ケロベロス「よっしゃ!! その意気やで!!」

さくら「わたしも頑張るから!!」

ラピス「しかし、こうやって見たら、よくこれだけの面子が集まったよな。」

ねこ娘「最初にこの世界に来たときはあのラー・カインに挑むなんてとても考えられなかったけどね!!」

鬼太郎「そうだな。。。」

アリエス「ここまできたら、もうトコトンやるだけだわ!!」

亜久里「後は、シン様がいてくれたら完璧なのですけど。。。」

「そうも言っていられせんわね。」

レジーナ「そうよね。。。」

ガルダ「シン様?」

まりあ「さっき言ってた『桑田進之介』って人の事?」

めぐみ「でもその人。。。次元の狭間に閉じ込められちゃったんだよね。」

真琴「そうよ!!誰かさん達のせいだ!!」

ドロール「。。。返す言葉もないな。」

グロキシニア「。。。その節は悪かったっす。

「まあ、あの少年のように

いかないかも知れないっすけど、

あつしらもできる限りの協力はしますんで。」

ディアンヌ「大丈夫だよ2人共!!」

キング「オイラ達だって強くしてもらえたんだし、

お二人に力を貸してもらえるのなら!!」

マナ「そうだよ!!シンは絶対に帰ってくるから気にしないで!!」

グロキシニア「そう言ってもらえると助かるっす。」

メリオダス「まあ、お前等とは色々あったけどよ、

これからよろしく頼むぜ!!」

ドロール「はい。。。その言葉、感謝しますメリオダス。」

ビルス「そういや、レイスの奴。。。うまくやったんだろうな?」

ウイス「まあ、あの方の事ですから心配いらなんでしょう。」

「多分、バイエルンさんとアルトさんも何か動きがあったのを感知して次元の狭間に向かったのかもしれないね。」

ただ…一つ問題があるとすれば…。」

アクア「…『次元の王』ね。」

メリオダス「ああ…次元の王もシンと同じ次元の狭間に封印されているからな。」

バイキンシヨツカーと戦った時は手を貸してくれたみてえだが、

奴は基本的に最低最悪な極悪野郎だからな。

下手したらシンを使って復活を目論んでいる可能性だってある。」

マーリン「もしそうならば、ラー・カインを

相手にしているどころではなくなるという訳か…。」

ビルス「もし、次元の王が復活すれば、ギガデウス一派の連中も

当然、黙っちゃいないだろうからな。

そうになったら全王様や大神官様にも手に負えなくなるぞ…。」

龍斗「へえ…全王様や大神官様でも手に負えねえくらい強いのかよ

その次元の王って奴!!そしたら…。」

ウイス「まさか…戦ってみたいなんて言うつもりではないでしょうね?」

ゴウガ「ま…まあ、ちよつと興味はあるけどな。」

ガルダ「俺もだ。」

悟空「ハハッ!!やつぱおめえらはサイヤ人だなあ。そういうところはよ!!」

ベジータ「気持ちはわかるが、ソイツだけはやめておけ。」

ビルス「いくらお前達でも奴の手にかかれば一瞬で

次元ごと吹っ飛ばされて終わりだ。

でなきや、破壊神の僕がここまで頭を悩ませるか!!」

ウイス「という事ですので…今、我々が成すべきことは

打倒ラー・カインです。次元の王の事は

進之介さんやあの3人に任せるしかないでしょう。」

サトシ「り：：龍斗達ですら一瞬で次元ごと吹っ飛ばされて終わ
りって」

セレナ「どんな超怪物なのよ、その次元の王って」

アキラ「そうだな：：まるで想像が出来ん」

カイト「俺達：：とんでもねえ世界に来ちまったんじやねえのか
」

コナン「でも：：怯んでなんていられないよ!!俺は強くなって

みんなを守るようになる為にこの世界にやってきたんだ

!!

ラン「コナンの言う通りだよ!!例えどんな敵が来ても

みんなで力を合わせれば絶対に勝てる!!」

ハグタン「はぐー」

龍斗「ま：：まあ、ウイスさんの言う通り、

次元の王って奴の事は今は置いとくか!!」

ゴウガ「何だお前：：今の話を聞いてビビッたのかよ?」

龍斗「ああ!?そういうお前こそどうなんだよ!?

足震えてんじやねえのか!!!」

ゴウガ「ふ：：震えてねえよ!!!」

ガルダ「どっちもどっちだろ。」

犬山まな「アクアさん!!あと少しでラー・パレスに到着します!!」

アクア「わっ!」では総員、出撃準備をお願い!!」

一同「了解!!!」

ホーク「気咎い入れていけよブタ野郎共!!」

エリザベス「皆さま：：お気をつけて!!」

ねずみ男「お前等の戦いはちゃんと見届けてやるからよ!!」

アクア「いよいよね。頑張りましょうマナちゃん!!(シン：：待っ

てるからね!!)」

マナ「はい!!(あたし達：：頑張るから!!)」

と、ラー・カインとの決戦にむけて決意を新たにするメンバー達で
あった。

一方その頃：：「new page」

く 次元の狭間 く

ラグナ「シ… シン・ザ・バーネットって… どういうこと？」

彼はあなたと戦ったはずじゃ…。」

シン（超闘圧）「その通りだ。我はいわゆる『次元大戦の世界』と呼ばれている

この世界が創造される以前の歴史を歩んできた者だ。

いい機会だ… お前に話してやる。」

ラグナ「……………」

シン（超闘圧）「我はかつて… とある国の国王だった。

だがある日… 『ある者』が突如として現れ、

平穏だった日々は一瞬にして消え去ってしまった。」

ラグナ「『ある者』ってまさか…。」

シン（超闘圧）「そう… 『神王ギガデウス』だ。奴は我の国を瞬く間に滅ぼした後、

そこに自らの神の国を創造した。それが『グランバニ

ア王国』だ…？」

ラグナ「!!!グ… グランバニア王国!?!」

シン（超闘圧）「そうだ… そしてグランバニア王国は数々の次元の人々を抹殺して

支配していき、ついには最後まで抵抗を続けていた

かつての我も一度は殺された。だが… その時に

我の魂は次元力の結集体である『オリジン・シン』と

出会った。」

ラグナ「次元力の結集体『オリジン・シン』…!?!」

それじゃ、あなたはそれで…。」

シン（超闘圧）「そうだ。そしてその次元力と『契約』し

『次元の王』と呼ばれる存在となって現世に帰還した

我はまず、ギガデウスによって滅ぼされた次元を修復
すべく

いわゆる『次元大戦の世界』を創造した後、

数多の次元の神々やギガデウスの部下共を配下に加

え、

『神々の集団（カタストロフィー）』を組織した。

そして、数多の次元を支配して行った後、

かつてのお前やミリカ・ド・グランバニアとの戦いを

起こした。」

ラグナ「それが3000年前の『次元大戦』…でもちよつと待つて
!!じゃあ、

僕のオリジナルのシン・ザ・バーネットは一体、何なの!？」
ewpage」

シン（超闘圧）「…それは我が『次元の王』となつた際に生まれた
我の分身…

すなわち、もう一人の我だ。だが…それに気づいた
のは

我が実際にグランバニア王国と対峙したときだった。

その時はもう既に、もう一人の我は

グランバニア王国の手先となっていたがな。」

ラグナ「…ミリカと一緒にあなた達と戦っていたからね。

それともう一つ教えてよ。グランバニア王国って何なの？」

シン（超闘圧）「…グランバニア王国はギガデウスが創造した神の
国…

そして、その王族は全て…

ギガデウスの遺伝子を持った愚か者共だ!!」

ラグナ「…なつ!!!!じゃ…じゃあ、まさかミリカも!？」

シン（超闘圧）「~~え~~うだ。あの小娘は特に奴の遺伝子を

濃く受け継いでいる危険な存在だった。

だから我は小娘やギガデウスの遺伝子を持つ王族共
を抹殺すべく、

『神々の集団（カタストロフィー）』を率いて

グランバニア王国を壊滅させた。だが…後はお前

も知つての通り

小娘は遊撃隊を組織し我やギガデウス共に戦いを挑

んできました。」

ラグナ「当然だよ。あなた達のした事は絶対に許される事じゃない。」

それに何であなたは、多くの次元を力と恐怖なんかで

支配してきたんだ!? それだけの力があれば僕なら…!!」

シン（超闘圧）『守る為に使う』とでも言うつもりか? 愚か者!!!」

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ラグナ「うわああああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、シンはそう言いながら斬撃を繰り出すとラグナを吹き飛ばした。

そして、変身が強制解除されて、元の進之介の姿へと戻った。「ne
w page」

「シューーーーーーシューーン…。」

進之介「ううう…。」

シン（超闘圧）「甘い… そんなことではこの次元はあつという間に

ギガデウス一派の者となってしまうぞ。

そうさせん為にも、お前には我の後継者となってもら

う。

だがその為にはまず… その腑抜けた考えを

叩き直さなくてはならん!!

我がこれまで力と恐怖で支配してきたからこそ、

3000年もの間、次元を揺るがせる程の大きな争い

は起きず

各平行世界の均衡が保たれてきたのだ!!」

進之介「そんなのは詭弁だ!! どんな理屈を並べても、

僕はあなたの後継者なんかになるつもりはない!!

僕は… いや、僕達はあなたと違うやり方でこの次元を守つ

て見せる!!」

シン（超闘圧）「そうか… お前が考えを改めぬというのならもうよい…。」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ラグナエクス（超闘圧）「融合魔法剣（ダブルアタックヴァイト）!!」

爆炎突破（エクス・ライザー）!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

次元の王「… ヌウン!!!」

「ガキイイイイイイイイイイイイイイイイ…」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ラグナエクスは『超闘圧』を発動させて

融合魔法剣（ダブルアタックヴァイト）爆炎突破（エクス・ライザー）を

放つと、次元の王はその攻撃を片手で受け止めた。そして…

次元の王「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ラグナエクス（超闘圧）「うわああああああああ!!!」

次元の王「フン…」

と、次元の王は周辺に強大なエネルギー体を形成して

ラグナエクスを包み込むと、そのまま吹き飛ばした。だが…「new page」

ラグナエクス（超闘圧）「まだまだああああああ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ラグナエクスは足元に巨大な魔法陣を発生させて、

『ラグナロクⅡ』を強大な魔力に変換して身に纏うと、

そのまま右足に結集させて剣状の魔力を形成し、飛び蹴りの態勢をとる。

次元の王「面白い… ならば!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、対する次元の王も強大な黄金の魔力を放ちながら

巨大な魔法陣を形成すると、その場から跳躍して、

右足にラグナエクスを遥かに凌ぐ剣状の魔力を形成した。

ラグナエクス（超闘圧）「殲滅魔法剣（オメガ・アタックヴァイト）

と、次元の王はそう言いながら進之介に向けて
魔力を放ち直撃させた。

最早、命運尽きたかと思われたその時……。[new page]

「キイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

ラグナロク(?)「……………!!!」

進之介「……………えっ?」

と、進之介に魔力が直撃した瞬間、ラグナロクの首飾りが
これまでとは違う金色のものへと変化した。そして……

「シューーーーーーシューーン……………」

シン「……………」

進之介「この力は……もしかしてあなたの『次元力』!?……どうし
て?」

シン「……試してやる。お前がどこまでその戯言……

いや、信念を貫き通せるかをな。だが、それには力が必要だ。

それはわかってるな?」

進之介「……うん。あなたはあなたなりの考えでこの次元を
守ってきたのは今、戦ってみてハッキリと分かった。

だから僕は……次元の王の後継者になる。

あなたの名を汚さないように!!

でも、僕の考えはこれからも変わらないし、変えるつもりも
ないよ!!」

シン「どうかな?お前は我だ……楽しみに見させてもらうぞ。

お前がこれからあのグランバニアの小娘とどう向き合い、

そしてギガデウス共をどう葬るかをな。」

進之介「ねえ……ちなみにミリカは自分がギガデウスの血を

引いている事を知ってるの?」

シン「おそろく知らぬだろう……真実を話すかどうかはお前の好き
にするがいい。

だが、それなりの覚悟が必要になるだろうがな。」

進之介「わかった。ありがとう次元の王!!」

シン「フン……迎えが来たようだぞ。」「new page」

「シユンシユンシユン!!!」

バイエルン「話は済んだようだな。」

アルト「おい失敗作、迎えに来てやったぞ!!」

レイス「感動の再開、実に喜ばしいね我が主。」

と、そこへレイス達が姿を現した。

進之介「レイス！それにバイエルンにアルトも!!」

シン「さすがはレイス…。そして次元の監視者（ダイダロス・アイ）…」

思ったより早かったな。『闇黒神』の力があつたとはいえ、

この次元の狭間の最深部に到達するには時間がかかると思ったがな。」

レイス「恐れ入ります…。」

バイエルン「お褒めの言葉、非常に光栄でございます…次元の王よ。」

アルト「まあ、それが僕らの専売特許だからな。」

シン「ならば行くがいい…。もう一人の我よ。」

まずはあのラー・カイン如きをどうにかして見せろ。

ギガデウス一派の事はそれからだ。」

進之介「うん！ありがとう!!」

バイエルン「では行くぞ、桑田進之介よ。」

アルト「グズグズするな!!」

レイス「では王よ…。我々はこれで失礼致します。」

シン「うむ…。後の事はお前に任せるとしよう。」

進之介「あつ…。そう言えば…。ねえ、『次元の王』の本当の名前つてあるの?」

バイエルン「何?」

アルト「そんなものどうでもいいだろう!?!」

レイス「それはもちろんだよ…。ですよね?王よ。」「new page」

シン「我の名は次元の王…。『シン・ラグナ』だ。」

次はお前がこの名を継ぐ事を期待しているぞ…

ベジータ「フン… カカロット、お前はそいつらとザコ共の相手をしている!!」

ラー・カインの首は俺がもらう!!」

ガルダ「却下だ。それはズルだぞ、ベジータさん。」

セレナ「あの人達… こんな状況でも楽しそうね」

カイト「やっぱりおかしいぜあいつ等…」

ジン「まあ… 俺達は俺達にできる事をやるぞ。ライチュウ!!」
覚醒ライチュウ『おう!!』

サトシ「そうだな!! 用意は良いかピカチュウ？」

ラン「あたしのピカチュウもいい？」

覚醒ピカチュウ『うん!!』

原初ピカチュウ『はい!!』

コナン「ルカリオ… 行くぞ!!」

ブレイブルカリオ『ああ!!』

アクア（このすば）「デジモン達も行くわよ!! 進化用意!!」

アグモン「アグモン進化! グレイモン!」

ガブモン「ガブモン進化! ガルルモン!」

ピヨモン「ピヨモン進化! バードラモン!」

テントモン「テントモン進化! カブテリモン!」

パルモン「パルモン進化! トゲモン!」

ゴマモン「ゴマモン進化! イツカクモン!」

パタモン「パタモン進化! エンジェモン!」

テイルモン「テイルモン、超進化! エンジェウーモン!」

メイクーモン「メイクーモン、超進化! メイクラックモン!」

ギルモン「ギルモン進化! グラウモン!」

テリアモン「テリアモン進化! ガルゴモン!」

レナモン「レナモン進化! キュウビモン!」 「new page」

士・海東「変身!!」

電子音「KAMENRIDE! DECEDE!!」

「KAMENRIDE! DIEND!!」

「シユシユシユシユシユ!!!」

デイケイド「……………」
デイエンド「……………」
ナツメ「私の友達… 出てこい、朱夏!!」
トウマ「剣武魔神不動明王!! 我に力を!!」
アキノリ「出てこい… 幻獣朱雀!!」
ハルヤ「行くぞ!!」
「シュー……………」
朱夏「……………」
不動明王「……………」
朱雀「……………」
酒吞童子「……………」
シャナ「行くよ、アラストール!!」
アラストール「うむ。」
シャナ・アラストール「卍解!!」
悠二「藍染!!」
「シュー……………」
シャナ(卍解)「……………」
悠二(藍染)「フツ…。」
光「私たちも行こう… レイアース!!」
海「出てきて… セレス!!」
風「ウインダム… お願い!!」
ノヴァ「レガリア!!」
ランティス「いでよ… 我が半身!!」
「ブオオオオオ……………」
レイアース(光)「……………」
セレス(海)「……………」
ウインダム(風)「……………」
ノヴァ(レガリア)「……………」
魔神ランティス「……………」
「[new page]」
マナ「よし、あたし達も変身だよ!!」
なぎさ・ほのか・ひかり「うん!!」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ「うん!!」
なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

ひかり「ルミナス・シャイニング・ストリーム!!」

「ピカアアアアアアアアアアアアアアア!!」

キュアブラック「光の使者…キュアブラック!!」

キュアホワイト「光の使者…キュアホワイト!!」

ブラック・ホワイト「ふたりはプリキュア!!」

キュアホワイト「闇の力のしもべたちよ!!」

キュアブラック「とつととお家に帰りなさい!!」

シャイニー・ルミナス「輝く命…シャイニー・ルミナス!

光の心と光の意志、総てをひとつにするため

に!」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ

「スターカラーペンダント!!カラーチャージ!!」

「キラキラキラキラキラ☆」

ひかる・ララ・えれな・まどか・ユニ

「きくらめくくく♪星の力で♪憧れの♪わたし描くよ♪

トウインクルトウインクルプリキュア♪トウインクルトウインク

ルプリキュア♪

スタートウインクルスタートウインクルプリキュアくく!!アア

くく!!」

キュアスター「宇宙(そら)に輝くキラキラ星!!キュアスター!!」

キュアミルキー「天にあまねくミルキーウェイ!!キュアミルキー

!!」

キュアソレイユ「宇宙を照らす!灼熱のきらめき!キュアソレイユ

!!」

キュアセレーネ「夜空に輝く!神秘の月あかり!キュアセレーネ

!!」

キュアコスモ「銀河に光る!虹色のスペクトル!キュアコスモ!!」

5人「スタートウインクル…プリキュア!!」

「ピカーーーーー!!」

ありつただけの『次元力』を託されたのであった。

そして、『次元の王の後継者』となった桑田進之介は
迎えに来た私や『次元の監視者（ダイダロス・アイ）』と共に
第5世界へと帰還しようとしていた。

一方、その第5世界ではついにグラン・ゲインズが
ラー・カインの本拠地『ラー・パレス』へと到着し、
最終決戦を開始したのであった。

果たして、彼らの今後の運命は……？

そして、『四聖士（パラディーン）』や『ラー・カイン』は
いつ、どう動いてくるのか……？

それでは次回も……刮目せよ!!

第57話　　↳ 告げられる驚愕の真実…… 進之介VS次元の王

↳ (完)

ン…』

「ピシーーーーー！！！！」

レグルス兵100億(身勝手トランザム兆)「ぐひやひやひやひやあ
あああああ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、攻撃しようとした瞬間、突如レグルス兵100億人の時間停止
が解除されて、

一斉にメンバーへと襲い掛かってきた。

キュアエターナル「えっ!!!何で!?どうして!!!」

キュアサタン「驚いている場合じゃないわ!!!プリキュア・アンガー
インパクト!!」

キュアアイネス「プリキュア・ボイスバースト!!」

キュアジャステイス「ジャステイス・サンダー!!!」

キュアセレーネ「プリキュア!セレーネアロー!!!」

キュアソード「ソードハリケーン!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

レグルス兵100億(身勝手トランザム兆)「遅えええええええええ
え!!!」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン!!!」

「ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!!」

メンバー一同「うわああああああああああ!!!」

と、メンバー達は襲い掛かってきたレグルス兵に攻撃を仕掛けてい
くが、

難なく交わされていくと、逆に攻撃を喰らい続けていくのであつ
た。「new page」

ピエラート「ツアイト… チミの出番はまだ早いのであーるよ?」

ツアイト「俺の前で時間能力を使われるのは癪だったからな。」

キャロル「まあ、良いではないですか。あのくらいで

倒されるような者達であればそこまでという事ですよ。」

と、先程キュアエターナルの時間停止を解除したのはツアイトのよ
うである。

チン・ゲンサイ「フエツフエツフエツ…身勝手の極意か。懐かしいのう!!」

何千年前に極めたかのう?」

ザマス「何千年前だと?お前…一体、いくつなのだ!?」
チン・ゲンサイ「はて?いくつじやったかのう?」

長生きしすぎて忘れてしまったわい!!」

キャロル「5000歳ですわよ導師。」

ザマス「何!!!人間がそんなに長生きできるわけがなからう!!」

不老体!死にでもならない限りは!!」

ピエラート「まあ、導師は特別であるから!!」

ツアイト「人間の物差しで測らん事だな。」

ザマス「フン!!まあいい…もう一人の私よ。そろそろ我らも戦闘準備だ!!」

ゴクウブラック「ああ。孫悟空…そしてグラン・ゲインズ、

俺達が葬るまでやられるなよ?

クククククククククククククククククククククククク!!!」「new page」

ディアンヌ「ううう…。」

キング「レグルス兵が…こんな力を…。」

キュアコスモ「あ…あり得ないニヤン…。」

レグルス兵⑥(身勝手トランザム兆)

「カツカツカツ!!言ったらうが、今までとは違うとなああああああああ!!!」

レグルス兵⑦(身勝手トランザム兆)「俺等を舐めてかかったことを…。」

レグルス兵の集団(身勝手トランザム兆)「死んで後悔しろやああああああああ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、レグルス兵の集団はそう言いながら一斉に

『ライザーソード』の発動態勢をとる。

さくら「ほええええええええええええええええええええええええ!!!?」

魔神ランティス「あれは…ライザーソードか!?!」

キュアプリンセス「そうよ!!」

キュアハニー「わたし達：第7宇宙で修行したからZ戦士達の技も使えるんです!!」

悟空(超サイヤ人)「そうなんか!? そういや、おめえも界王拳使ってるな。」

誠司(界王拳)「へへっ! 俺も修行したからな!! ちなみにかめはめ波も打てるんだ。」

けど、驚くのはまだ早いぜ!!」

キュアソード「あつちの相楽君：： 凄いわね」

キュアロゼッタ「あたし達の知る相楽君は普通の男の子ですけど」

「
デイケイド「そんなことは良いから、早く片付けるぞ!!」

「
デイエンド「とはいえ、簡単には行かないだろうけどね。」

ガルダ(超1)「そうか?」

ゴウガ(超1)「そんじゃ一気に：：。」

龍斗(超1)「行くぜええええええええええ!!!!」

キュアラブリー「うん!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

龍斗(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

ゴウガ(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

ガルダ(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアラブリー(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアプリンセス(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアハニー(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアフォーチュン(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアテンダー(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアハピネスルーク(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

キュアテンダーX(身勝手の極意)「：：：：：：：：：：。」

と、龍斗達はそう言いながら一斉に身勝手の極意を発動させた。

[new page]

悟空(超サイヤ人)「いいつ!!!!!?」

ベジータ（超サイヤ人）「な……何だとおおおおおおお？」
!!!!!!!!?

トランクス（超サイヤ人）「み……身勝手の極意!!!」

キュアダイヤモンド「ラ……ラブリー達まで」!!!

キュアブラツク「あ……ありえない」

ガルダ（身勝手の極意）「そう言えば、こっちの悟空さんや

プリキュア達は知らなかったな。」

ゴウガ（身勝手の極意）「身勝手の極意には身勝手の極意だな!!!」

龍斗（身勝手の極意）「そんじやお前等……派手に行くぜ!!!」

キュアラブリー（身勝手の極意）

「うん!!愛よ天に帰れ!プリキュアピンクイラブシュート!!!!」

キュアプリンセス（身勝手の極意）

「勇気よ天に帰れ!プリキュアブルーハッピーシュート!!!!」

キュアハニー（身勝手の極意）

「命よ天に帰れ!プリキュアスパークリングバトンアタック!!!!」

キュアフォーチュン（身勝手の極意）

「星よ天に帰れ!プリキュアスターダストシュート!!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

レグルス兵の集団（身勝手トランザム（兆））「くそがああああああ

あああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!」

と、まずはキュアラブリー達が一斉に必殺技を放って、

20億のレグルス兵を浄化した。「new page」

レグルス兵の集団（身勝手トランザム（兆）②「調子こいてんじや

ねえぞコラア!!!」

「ババババババババババババババババババババババ!!!」

GNホルスタービット「……………」

GNピストルビット「……………」

GNライフルビット「……………」

GNファンング「……………」

と、レグルス兵の集団はそう言いながら無数のビット類を召還する
と…

龍斗（身勝手の極意）「それも悪くないけどよ、

俺が一番気になるのは、あの爺さんだな。」

ガルダ（身勝手の極意）「俺も同感だ。あの4人の中でも

飛びぬけたパワーを感じるぜ。」

ツアイト「まあ、我々だけではないがな。フン!!」「new page」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

ヴァンデモン「……………」

アポカリモン「……………」

ピノツキモン「……………」

ムゲンドラモン「……………」

ピエモン「……………」

と、ツアイトはそう言いながらデジモン軍団を召還した。

さくら「ほえ?」

ケロベロス「何やこいつら?」

ノヴァ（レガリア）「デイド達が増えてたデジモンとかいうのに似ているけど……。」

キャロル「あらあら……『クロスフロンティア』のデジモン達ですか?」

ピエラート「あんなものどこからもってきたのであーるか?」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ!!面白くなってきたのう!!」

キュアレーネ「デジモンだかクマモンだか知らないけど!!」

キュアデイスティニー「さっさと片付けちまおうぜ!!!」

キュアルシファー「たったの5匹ですものね。」

ツアイト「そうか?なら試してみるがいい……行けえ!!!」

ムゲンドラモン「ムゲンキャノン」

「ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……。」

海（セレス）「えっ!!!」

風（ウインダム）「ヒ……この反応は!!!?」

マーリン「い……いかん!!アクア殿!!!」

アクア「総員、退避!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

!?

アキラ(このすば)「でも…何であいつらがここに現れた訳!!!?」
デイード「詮索は後だ…先を急ぐぞ!!本当に奴らが来たのなら

とんでもない事になる!!」

サトシ「だから、奴らつて誰だよ!?!」

デイード「多分、俺達が対立しているデジモン達だ!!」

詳しい話は後だ。みんな、先を急ぐぞ!!」

コナン「わかった!!」

一同「了解!!」

と、デイードやコナン達はそう言いながら

ラー・パレスへと駆け出していった。そして…「new page」

「シューーーーーー…」

「バリーイイイイイイイイイイイン!!!」

ツアイト「ほう? 凄いだけか。」

ピエラート「お見事であるな?!」

キュアレーネ「な…何よ今の!!!」

キュアデイスティニー「ちよ…!! ちよつとヤバかったな…。」

トランクス(超サイヤ人)「アキラさんとマーリンさんが咄嗟にバリアを

展開させてくれなかったらこの程度では

済まなかった。」

マーリン「まさか、『完全なる立方体(パーフェクト・キューブ)』と

次元壁(ディメーション・ウォール)が

こうもあっさりと破られるとはな。」

バン「おいおい…何なんだよあれは!?!」

アキラ「多分あれは…デイードが言っていた

『クロスフロンティア』のデジモン達ね。

メリオダス「デジモン?」

悟空(超サイヤ人)「確かにあいつら、すげえ気配感じっぞ!!」

ベジータ(超サイヤ人)「フン!!それなら四聖士(パラディーン)の前

デイド「さて、お前等はどうしてこんなところにいる？」
ピエモン「ラー・カインに誘われた。そこにはお前達がいるからな。。。」

ムゲンドラモン「だが、我々は奴等に興味がない。ここでお前達を倒すのみだ！」

ソニック(ダブルオーアマテラス)「言ってくれるじゃねえか。。。」

ピノツキモン「さあ、準備はいいかな？」

ヴァンデモン「ここがお前達の墓場となるぞ？」

デイド「その言葉はそっくり返させてもらう！」

アクア!!このデジモン達は俺達が相手をする!!ここは任せたぞ!!」

アクア「わかったわ!!気を付けてね!!」

アポカリモン「いいだろう。。。来い！」

「シユンシユン!!」

と、デイド達とアポカリモン達は一斉に別の場所へワープした。

「new page」

バン「あいつら、行っちゃったぜ♪」

マーリン「あのデジモンとやら。。。かなりの強敵のようだな。」

アクア「ええ。あのまま戦い続けていたらどうなっていたかわからないわね。」

ゴウガ(身勝手の極意)「俺が知ってるデジモンとは明らかにレベルが違うしな。」

キュアブラック「でもおかげで四聖士(パラディーン)との戦いに集中できる!!」

メリオダス「ああ。。。」

アクア「それじゃみんな。。。行くわよ!!」

キュアハート「はい!!」

アクアの宣言にメンバー達は頷いたが、ベジータが異変に気付く。

ベジータ「おい!カカロットがいないぞ!」

メリオダス「まさか、今のワープに巻き込まれたのか!」

ゴクウブラック「フン。。。孫悟空まで消えたのか。」

すかさずゴツドルカリオが爆熱ゴツドフィンガーを発動させて
激突させるが、力及ばず吹き飛ばされた。

そして、その影響で普通のルカリオへと戻ってしまった。「new
Page」

「シューーーーーーシューーン……」

ルカリオ『くっ……。』

ラン「ルカリオ!!」

サトシ「あいつは!?!」

ジン「確かツアイトだったか!?!」

コナン「ルカリオ……大丈夫か!?!」

ルカリオ『あ……。ああ。けどどやっぱり化け物だなアイツは』

ツアイト「小僧……。今日こそ、その力をもらうぞ。」

「ザッザッザッ……。」

と、ツアイトはそう言いながらコナンとルカリオの方へ歩を進める。

キュアレーネ「ちよつとアンタ!!」

キュアベルフェゴール「子供に対して何て事するのよ!!」

キュアルシファー「背後から襲うなんて卑怯ですわ!!」

キュアジャステイス「そんな奴には正義の鉄槌を下してやる!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

ツアイト「邪魔だ!!」

「ピシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイン!!!」

キュアレーネ「……………」

キュアベルフェゴール「……………」

キュアルシファー「……………」

キュアジャステイス「……………」

キュアアーンヴァル「えっ!!!!?!」

キュアサタン「時間が止まった!?!」

キュアエターナル「じゃあ、さっきあたしの『ストップ』を解除し

たのって!?!」

ツアイト「『破壊』」

!!!!!!

「シューーーーーー……」

安「お……お……え……あ……ああ……」

キュアストラーフ「あ……安……っ……!!!」

キュアジャステイス「そ……そんな……」

キュアベルゼブ「あ……あああ……」

ツアイト「フン……手こずらせおつて……さて、待たせたな小僧。」

コナン「……お前なんか、英雄の力は渡さない！」

渡してたまるかあああああああ!!!」

ルカリオ『うおおおおおおお!!!』

「バアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、コナンとルカリオはキュアアンヴァルがやられた事に

怒りを爆発させて、再び『身勝手の極意(兆)』を発動させた。

コナン(身勝手の極意兆)「……」

ルカリオ(身勝手の極意兆)『……』

ベジータ(超サイヤ人)「な……何だと!!!あのガキも身勝手の極意を

!?!」

トランクス(超サイヤ人)「凄い……」

コナン(身勝手の極意兆)「行くぞルカリオ!!!」

ルカリオ(身勝手の極意兆)『ああ!!!』

「ピッ!!」「ゲッターロボ」

と、コナンはネオブレイブブレスレットに刻まれている

『ゲッターロボ』のスイッチを押した。

そして、ルカリオは『ゲッタールカリオ』へと変化した。

「シューーーーーー……」

ゲッタールカリオ(身勝手の極意兆)『……』

キュアダイヤモンド「な……何あれ!!!」

キュアミルキー「姿が変わったルン!!!」

キュアスター「キラやば☆」

ツアイト「フン……だがその程度の力で俺に勝てると思っているのか

?」

コナン(身勝手の極意兆)「慌てるなよ。」

サトシ「でもコナンの奴… いつの間に『真ゲッター』の力を手に入れたんだ?」「new page」

「シンシンシン!!」

光（レイアース）「うまくいったね、コナン君!!」

ノヴァ（レガリア）「いい感じじゃない!!」

コナン（身勝手の極意兆）「ありがとう。光姉ちゃんが

『柱』の力を分けてくれたおかげさ!!」

小狼「『柱』の力を?」

セレナ「それって確かセファイロっていう世界の力よね?」

ジン「それが英雄の力を進化させたとはな。」

ケロベロス「でも、モコナはもうおらんはずやろ? どういうこつ

ちや?」

さくら「そつか!! 『ダイザイアウオッチ』だよ!!」

海（セレス）「コナン君から英雄の力の話を聞いたときに

もしかしたら役に立つんじゃないかと思って。」

風（ウインダム）「それでアクアさんとクレフに協力してもらって

ウオッチの力をブレスレットに少しだけ分けたん

です。」

サトシ「そうだったのか!! ようし… それじゃピカチュウ!!」

俺達もゼンリヨクで行くぞ!!」

ピカチュウ『ああ!! 龍神丸ううっ!!』

龍神丸「オオーツ!!」

ピカチュウ『アームドモード!!』

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ピカチュウがジャンプすると龍神丸は光[!]となってピカチュウは

龍神丸を思わせる鎧を纏う。そして龍神丸の頭部の兜を被る。

【龍神ピカチュウ アームドモード】が登場した!! 「new page」

「シューーーーーー……」

龍神ピカチュウ『……………』

さくら「ほええええええええええええええええ!!」

ケロベロス「何や!?! ピカチュウの奴も姿が変わったで!?!」

プロヴィデンスガンダム「……………」

リボーンズガンダム「……………」

ガンダムバエル「……………」

と、ツアイトはそう言いながら『レグルス・ギア』『ガンダムエピオン』

『プロヴィデンスガンダム』『リボーンズガンダム』『ガンダムバエル』を

オーロラカーテンから召還した。

デイケイド「今度はモビルスーツだと!？」

デイエンド「あの魔神（マシン）は確か、デボネアが融合したレグルスの機体だね。」

ノヴァ（超レガリア）「光!!他の機体は私達に任せて!!」

超魔神ランティス「お前は2人の援護を!!」

光（レクサス）「わかった!!行くよコナン君!!」

コナン（身勝手の極意兆）「ありがとう光姉ちゃん!!ルカリオ!!サトシ兄ちゃん!!」

真ゲッタールカリオ（身勝手の極意兆）『ああ!』

サトシ「俺達の正義パワーを見せてやる!!」

龍神ピカチュウ『よし!力の限り戦ってやる!』

龍神ピカチュウ（龍神丸）『オオーツ!!』

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ツアイト「面白い… 来い小僧共!!」

と、真ゲッタールカリオ・龍神ピカチュウ・光の3人はツアイトへと挑んでいった。その一方…『new page』

宇宙空間

「シューーーーーーシューーン…。」

アクア（このすば）「ここって… 宇宙空間よね?」

ムゲンドラモン「その通りだ。だが、今のお前達では敵う事は不可能だ。」

デイード「それはやってみなければ分からないぜ!」

ワープされた場所は宇宙空間で、デイード達は警戒態勢に入ってい

た。

そしてデイドが腕を鳴らした直後、悟空が彼の隣に移動する。

「シユン!!」

悟空（超サイヤ人）「よっ!!デイド!!」

デイド「あれ?悟空!?何故ここに!?!」

悟空（超サイヤ人）「オラも分かんねえけど、何故かここに来てしまったぞ。」

ヴァンデモン「一人部外者がいるとは... まあいい。まとめて倒してやる!」

ナミ「来るわよ!」

ソニック「一斉に進化だ!」

ソニックの合図でデジモン達は進化し始める。

ウォーグレイモン「グレイモン、ワープ進化!ウォーグレイモン!」

メタルガルルモン「ガルルモン、ワープ進化!メタルガルルモン!」

ホウオウモン「バードラモン、ワープ進化!ホウオウモン!」

ヘラクルカブテリモン「カブテリモン、ワープ進化!ヘラクルカブ

テリモン!」

ロゼモン「トゲモン、ワープ進化!ロゼモン!」

ヴァイクモン「イツカクモン、ワープ進化!ヴァイクモン!」

セラファイモン「エンジェモン、ワープ進化!セラファイモン!」

ホーリードラモン「エンジエウーモン、究極進化!ホーリードラモン!」

ラジエルモン「メイクラックモン、究極進化!ラジエルモン!」

デュークモン「グラウモン、ワープ進化!デュークモン!」

セントガルゴモン「ガルゴモン、ワープ進化!セントガルゴモン!」

サクヤモン「キュウビモン、ワープ進化!サクヤモン!」

デジモン達は究極進化を果たし、戦闘態勢に入る。

悟空（超サイヤ人）「すげえな、これが究極進化か!」

デイド「その通りだ。行くぞ!」

デイド達は駆け出したと同時にアポカリモン達に立ち向かった。

[new page]

コナン(身勝手の極意兆)「ルカリオ!!真ゲッター3モードで大雪山おろし!!」

「シューーーーーーシューーン……。」

真ゲッター3ルカリオ(身勝手の極意兆)『大雪山おろし』

「ブオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ツアイト「ぐうううううううううううううううう!!!?」

と、今度は真ゲッター3モードへとチェンジし、

『大雪山おろし』を発動させて再び吹き飛ばして態勢を崩すと…

コナン(身勝手の極意兆)「これでオーロラカーテンは使えない!!

サトシ兄ちゃん!!光姉ちゃん!!今だ!!」

サトシ「ああ!!行くぞピカチュウ!!龍神丸!!正義パワー全開だ!!」

龍神丸「よし!やるぞ、サトシ、ピカチュウ!」

龍神ピカチュウ『ひっさああつ!』

龍神ピカチュウは登龍剣を構える。

登 龍 剣

龍神ピカチュウ『登龍けええええええええええええええええん!!!!!!』

光(レクサス)「閃光の剣!!!」

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ツアイト「ぐおおおおおおおおお!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、態勢が崩れたツアイトに対して光と龍神ピカチュウが

それぞれ必殺技を繰り出して直撃させて大ダメージを与えると…

[new page]

コナン(身勝手の極意兆)「ルカリオ!!これで決めるぞ!!」

真ゲッタールカリオ(身勝手の極意兆)『ああ!!奴に見せてやる…

!!ゲッターの恐ろしさをな!!』

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、真ゲッタールカリオはそう言いながら両腕にゲッターエネルギー

ギアを圧縮し、

第60話　　崇めよ… 称えよ… 降臨!! 新たな『究極神』　　

ザマス・アーク「この姿こそ『真の正義』… この姿こそ『新の世界』…」

崇めよ… 称えよ… そしてひれ伏せよ!!!!!!
更に気高くも美しく… 究極にして至高の神…

『ザマス・アーク』を!!!」

と、『謎のウオッチ』で融合した合体ザマス・改とゴクウブラックは全身が白一色となり、左目と背中の光輪が真っ赤に発光した姿へと変貌し、

自らを『ザマス・アーク』と名乗った。

キュアプリンセス（身勝手の極意）「ちよつと、何あれ?!?!」

誠司（界王拳）「ザ… ザマス・アークだと!!!」

トランクス（超サイヤ人2）「くっ…!!!」

と、合体ザマスとゴクウブラックが融合を果たした姿を見たメンバー達は驚きの表情を見せる。そして…

ザマス・アーク「どうだ? 美しすぎるだろう? ザマス、もう一体のザマス、

ゴクウブラックの究極の三位一体… そして!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キュアハニー（身勝手の極意）「きゃあああああああ!!!」

キュアフォーチュン（身勝手の極意）「くううううううう!!!」

「!!!!? !!!!!?」

キュアラブリー（身勝手の極意）「あああああああああ!!!」

と、ザマス・アークはそう言いながら強大な闘圧を放ち、

キュアラブリー達を押しつぶした。

バン「!!! お… おい、団長!!! あれは!!!」

メリオダス「マ… マジかよ、まさかザマスの奴!!!?!?!」

マーリン「ラ……ラー・カインの闘圧だと……!!?!?!?!」
「シュー……シュー……」

キュアプリンセス（身勝手の極意）「あ……ああ……。」
キュアテンダー（身勝手の極意）「ザ……ザマスが……」
キュアテンダーX（身勝手の極意）「こ……こんな……力を……」
と、ザマス・アークが闘圧を放ち終わると、
キュアプリンセス達は嗚咽を漏らしながら驚愕していた。
ザマス・アーク「この『聖王』の力が加わった究極の神……

いや、神をも超えた『至高』の存在!!

最早、私の前では破壊神の力や身勝手の極意など

ゴミ同然!! さあ……裁かれない人間から来るがい

い!!」

キュアラブリー（身勝手の極意）「……それじゃみんな、行くよ!!」

キュアプリンセス（身勝手の極意）「うん!!」

ラブリー・プリンセス・ハニー・フォーチュン

「プリキュア! くるりんミラーチェンジ!!」

「ハピネスチャージプリキュア! イノセントフォーム!!」

「パアアアアアアアアアアアアアア!!」

キュアラブリーIF（身勝手の極意）「……………」

キュアプリンセスIF（身勝手の極意）「……………」

キュアハニーIF（身勝手の極意）「……………」

キュアフォーチュンIF（身勝手の極意）「……………」

キュアテンダーIF（身勝手の極意）「……………」

キュアテンダーXIF（身勝手の極意）「……………」

キュアハピネスルークIF（身勝手の極意）「……………」

と、キュアラブリー達はそう言いながらイノセントフォームへと変化した。

キング「姿が変わった!?!」

グロキシニア「どうやら強化形態の様っスね。」

キュアハート「よし、それじゃあたし達も!!」

と、キュアハート達も臨戦態勢を整えようとしたその時……「ne

メリオダス「きてきてきて、そんじやお言葉に甘えて!!」
キュアラブリーIF（身勝手の極意）「みんな…いくよ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア」

と、キュアラブリーの合図でメンバー達は一斉にザマス・アークに立ち向かっていった。そして…!!「new page」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

キュアダイヤモンド「あ…ああ!!!」

キュアセレーネ「う…ううう…」

キュアホワイト「が…は…」

キュアエース「お…え…」

「シユン!!」

キャロル「ウフフ…ごきげんよう、ラー・カイン様に歯向かう

愚かな子猫ちゃん達。」

と、プリキュア達は超高速攻撃で先程の場所から

かなり離れた場所に吹き飛ばされ続けて、

最後は全員、地面に叩きつけられると、

ようやく四聖士（パラディーン）キャロルが姿を現した。

キュアホワイト「あ…あの人は!？」

キュアブラック「四聖士（パラディーン）キャロル…!!!」

キャロル「あら？あなた達は確か、あの時わたくしが

懲らしめてあげた子猫ちゃん達ですね…」

またやられに来たのですの？」

シャイニー・ルミナス「うっ…」

キュアソレイユ「あ…あの時…？」

キュアダイヤモンド「も…もしかして…」

キュアブラック「うん…あたし達…光の園であいつと戦ったん

だけど、

コテンパンにやられちゃって…」

キュアホワイト「そして、殺されそうになった時に

光の園のクイーンが逃がしてくれたの。」

シャイニールミナス「ですがそのせいで、光の園は占領されてし

わ。」

と、キャロルはそう言いながらキュアハートに近づいていったその時…「new page」

アクア（このすば）「女神の雷!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キャロル「!!!」「シユン!!!」

と、突如、上空からアクア（このすば）が降ってくる、

キャロルに目がけて『女神の雷』を放った。

そしてキャロルは間一髪のところ、超高速で回避した。

そして、他のメンバーも次々と上空から降ってきた。

「スタスタスタスタスタツ!!!」

ナミ「大丈夫みんな!?」!!!

元姫「間に合って良かったわ!!」

シャイニー・ルミナス「B・D・Sのみなさん…。」

キュアセレーネ「助かりました!!」

エミリア「どういたしまして!!」

ねね「ところで、あの女は?」

「シユン!!」

キャロル「あらあら…誰かと思えばクロスフロンティアの『駄女神』と

そのお仲間のようにですね。わざわざやられに来るなんて

物好きですこと…ウフフフフフフフフフ!!!」

ラフタリア「あの女…。」

コレット「言ってくれるわね!!!」

アクア（このすば）「それに誰が『駄女神』よ!!」

もう許さないんだから!!覚悟なさい!!」

キュアソード「それならあたし達も…!!!」

キュアコスモ「まだ戦えるニヤン!!」

キュアブラック「プリキュアを甘く見ないで!!!」

「パアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

キュアブラック（s）「…。」

キュアホワイト（s）「……………」
シャイニールミナス（s）「……………」
キュアスター（12星座ドレス）「……………」
キュアミルキー（12星座ドレス）「……………」
キュアソレイユ（12星座ドレス）「……………」
キュアセレーネ（12星座ドレス）「……………」
キュアコスモ（12星座ドレス）「……………」
キュアハート（パルテノンモード）「……………」
キュアダイヤモンド（パルテノンモード）「……………」
キュアロゼッタ（パルテノンモード）「……………」
キュアソード（パルテノンモード）「……………」
キュアエース（パルテノンモード）「……………」
レジーナ（パルテノンモード）「……………」

と、プリキュア達はそれぞれ強化形態へと変身した。そして…

「new page」

「シユン!!」

アクア「それじゃ私も混ぜてもらおうかしら!!」

キュアロゼッタ（パルテノンモード）「アクアさん!!」

キュアソレイユ（12星座ドレス）「来てくれたんですか!!」

キャロル「あらあら…今度は『駄女神』じゃない方のアクアさん
ですか…」

あなたがいるのなら少しは楽しめそうですわね。

それでは、『女の戦い』を始めましょうか!!」

アクア「あーら、望むところよ!!!」

アクア（このすば）「あーっ!!あの女、また私の事を

『駄女神』って言ったー!!!」

絶対にギッタギタにしてやるんだから!!!」

キュアハート（パルテノンモード）「みんな…行こう!!」

一同「うん!!!」

と、こうしてキュアロルVSプリキュア&駄女神連合軍による

『女の戦い』の火蓋がきって降ろされたのであった。そして…「ne

誠司（界王拳）「よし!!」

キュアプリンセスIF（身勝手の極意）「これで決まったわ!!」

と、キュアラブリーIFは必殺技のプリキュア・ピンキーラブシユートを

ザマス・アークに直撃したが…「new page」

ザマス・アーク「愛…だと？笑わせるなああああああああ

!!!

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

メリオダス「ぐあああああああああ!!!」

エスカノール「うぐうううううううううう!!!」

キュアラブリーIF（身勝手の極意）「きゃあああああああああ

!!!

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

と、直撃を受けたザマス・アークは鬨圧を放ち、

プリキュア・ピンキーラブシユートごと

メリオダス達ごと吹き飛ばした。

メリオダス「いててて…」

エスカノール「お…おこがましい…。」

キュアハピネスルークIF（身勝手の極意）「そ…そんな…。」

ゴウセル「団長やエスカノールの攻撃も通用しないとは。」

マーリン「くっ… ザマスめ…」

ザマス・アーク「ククク… どうだ人間、これで分かっただろうか？

如何に貴様等が無駄な足掻きをしているのかを。

最早、貴様等にできる事など何も無い!!!

ましてや…『愛』だの『正義』だのと!!!いう

戯言をほざいている愚か者は特になあ!!!」

キュアラブリーIF（身勝手の極意）「そ… そんな…とない!!」

ザマス・アーク「あ?」

キュアラブリーIF（身勝手の極意）

「そんな事ないよ！大切な人を見たい！みんなの笑顔を守りたい！
そして世界を愛と幸せでいっぱいになりたい!!」

キュアラブリーIF（身勝手の極意）「ご…悟空さん…うう…。」

デイド「おい、大丈夫か？待ってるよ!!今、治してやる!!」
「パアアアアアアアアアアア!!!」

と、デイドはそう言いながら右手をかざすと、
キュアラブリーを回復させた。

キュアラブリーIF（身勝手の極意）「な…治った!!ありがとう
デイドさん!!」

キュアハニーIF（身勝手の極意）「ラブリー!!!」

キュアハピネスルークIF（身勝手の極意）「良かった…!!!!!」

デイド「良いつて事よ!!そんなじゃ行くか!!」

キュアプリンセスIF（身勝手の極意）「私達の力を!!」

キュアフォーチューンIF（身勝手の極意）「好きなだけ使って!!」
「バアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ハピプリメンバー達がそう言うのと突如、虹色の光が発生して
ラブリーの手に集まると、三枚のカードとなった。そして…

フォーエバーラブリー（身勝手の極意）

「かわるんるん…」

「プリキュア!くるりんミラーチェンジ!」

フォーエバーラブリー（身勝手の極意）

「世界に照らす大いなる愛!フォーエバーラブリー!!」

と、キュアラブリーはイノセントフォームを越えたラブリーの愛を
持つ

最強形態『フォーエバーラブリー』となった。「new page」

ラン「フォーエバーラブリー来たー!!!っ!!!」

ハグタン「はぐ〜!!」

メイミ「当然、退屈しないわねあんた達」

セイラ「そうね」

サトシ「これで行けるか…!?」

「シユン!!」

フリーザー「ホー…ホッホッホッホッ
!!!!!!

成程・・・そういう事でしたか。今、全てを思い出しましたよ!!」

さくら「ほえ?」
小狼「何だ!」

と、そこにサトシの手持ちポケモンに一体である

『フリーザー』が何故かフリーザー口調で登場した。

カイト「フ・・・フリーザー?」

セイラ「ど・・・どうしちゃったの一体?」

メイミ「何か悪い物でも食べたの?」

サトシ「そういや、フリーザーの前世は確か『フリーザ』だったな・・・

もしかして記憶が戻ったのか!」

フリーザー「ええ・・・悟空さんとベジータさんの顔を見たら

あの『地獄』での日々が脳裏に蘇って来たんですよ!!

それが私にとってどれだけの苦痛だったか

あなた方にわかりますか!!!!」

カイト「いや、何の事だかさっぱり!」からねえよ・・・」

メイミ「まったくだわ!!それに何でそんなに怒ってるのよ」

セレナ「私達には何の関係もないでしょ」

フリーザー「ぐぬぬ・・・ええい!!こうなればこの怒り・・・

あの『紙切れ』にぶつけて差し上げますよ!!!!

ヌオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

「シューーーーーーシューーン・・・」

ゴールドデンフリーザー「行きますよサトシさん!!!!!!

グズグズするなあああああああ!!!!!!」

と、フリーザーはそう言いながら『ゴールドデンフリーザー』へと

進化を遂げると、そのままザマス・アークの所へと向かって行った。

「new page」

キュアフリーダム「飛び出していつちやったわよあのポケモン」

キュアレーネ「だから何で怒ってるのよ」

キュアエターナル「あはは・・・」

と、ザマス・アークはそう言いながら更にパワーを高めると、
右手から強大なエネルギー体を形成する。

バン「まずいぜ!!!」

メリオダス「逃げろお前等!!!」

ザマス・アーク（フルパワー!!）「滅べ人間共!! 『聖なる光弾（ラー・ボムズ）』!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ザマス・アークは倒れている3人に向けて

『聖なる光弾（ラー・ボムズ）』を発射したその時：「new page」
「シュン!!」

ゴールデンフリーザー『デスボール!!!』

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカー!!!」

ザマス・アーク（フルパワー）「何?」

と、悟空達の前にゴールデンフリーザーが出現して

『デスボール』を放つと、『聖なる光弾（ラー・ボムズ）』の
方向をずらし、爆発させた。

ベジータ「な... 何だと!」

悟空「お... おめえ... 確かポケモンって奴の...」

ゴールデンフリーザー「ええ。お久しぶりですねえ

孫悟空さん『私』はかつてあなたに倒された

『悪の帝王フリーザ』です。」

トランクス（超サイヤ人2）「フ... フリーザだと!!!」

メリオダス「あのポケモンがか?」

!!!

孫悟空「おめえ... それ本当なんか?」

ベジータ「貴様... それなら何で俺達を助けた?」

貴様にとって俺達は敵じゃないのか?」

ゴールデンフリーザー

『ええ、その通りですよ!!あなた方忌々しいサイヤ人のおかげで

私はあの『地獄』を見るハメになったのですからねえ...」

と言いたいところですが、今の私は宇宙の帝王フリーザではなく

マサラタウンのサトシのポケモン・氷の帝王フリーザーです。
あなた達サイヤ人と敵対するつもりはありません』

ベジータ「何だと…。」

悟空「おめえ…。」

ゴールドデンフリーザー

『という訳ですのでこの屈辱と怒りは、あの『紙切れ』に

ぶつけて差し上げます　　行きますよおおおおお!!!』

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ゴールドデンフリーザーはそう言いながら

ザマス・アークへと攻撃を仕掛けた。「new page」

キュアプリンセス「ちよっと…あのポケモン!!!」

誠司「無茶だ!!やめろ!!!」

ゴールドデンフリーザー「喰らいなさい…デスビーム!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

ザマス・アーク（フルパワー）「フン…そんなもので!!!」

「ババババババババババババババババババババババ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、ゴールドデンフリーザーはそう言いながらデスビームを連発するが、

ザマス・アークはそう言いながら超高速で難なく弾き飛ばした。

「シュン!!!」

ザマス・アーク（フルパワー）「珍獣如きが…この高潔なる神を

舐めるなあああああああ!!!」

「バキイイイイイイイイイイイイ!!!」

ゴールドデンフリーザー「ぐわああああああああああ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、その後ザマス・アークはゴールドデンフリーザーの
背後に一瞬で現れると、強烈な蹴りで吹き飛ばした。

キュアハニー「ああ!!!」

誠司「だから言わんこっちゃないぜ!!!」

ゴールドデンフリーザー「くうう…。」

悟空（？）「俺は悟空でもベジータでもトランクスでもない…」

俺は貴様を叩き潰す者だ。覚悟しろザマス!!!」

レイス「という訳で、合体ザマス・改とゴクウブラックが融合した『ザマス・アーク』により大苦戦を強いられるグラン・ゲインズ。そしてそれに追隨するかの如く、他の四聖士（パラディーン）の

ピエラートとキャロルもついに動き出したのであった。劣勢に陥ったメンバー達だったが、

悟空・ベジータ・トランクスが突如、出現した

謎のウオッチにより融合して新たなるトリニティ戦士となり、

戦場の空気を一変させたのであった。果たしてその実力とは…

そして、彼らとザマス・アーク、そして四聖士（パラディーン）との

戦いはどのような決着を迎えるのか…

それでは次回も…刮目せよ!!!!

第60話　　く　崇めよ…　称えよ…!!　降臨!!　新たなる『究極神』

く　（完）

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キユアプリンセス「きやああああああああ!!!?」

キユアハニー「くううううううううううう!!!?」

誠司「ぐわあああああああああ!!!」

と、ザマス・アークはそう言いながら、更にパワーを高めると、

メンバー達はあまりの力に圧倒されていった。

ゴジンクス「へへっ… やっぱ凄え。パワーだな。それじゃ俺の本気を見せてやる!!」

ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、対するゴジンクスもパワーを最大限までに高めて!!!」

体が眩い光に覆われると、ベジータのブルー進化のオーラの上に

界王拳を青色にしたようなオーラを重ねてトランクス(超サイヤ人
ホープ)の

青色のスパークを放出した姿『トリニティブルー』へと進化した!!

「new page」

ゴジンクス(トリニティブルー)「これがゴジンクス『トリニティブ
ルー』だ

ああああああああああああああ

あああああ!!!」

キング「んなあああああああああ!!!?」

ディアンヌ「す… すっごおおおおおおお!!!」

バン「おいおい… マジかよ…。」

と、トリニティブルーの姿とパワーに驚愕の表情を見せるメンバ
ー達。

ザマス・アーク(フルパワー)「トリニティブルーだと?

フン… いいだろう。来るがいい人間

!!」

ゴジンクス(トリニティブルー)「そんじゃ遠慮なくいくぜザマス

!!」

「シュン!!」 「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

返さなくてはなりませんからねえ!!」

ジユカイン「俺もいいぜ!!丁度、試したい技もあったしな!!」

デイド「後はゴジンクスがどれだけ耐えられるか次第だが…

やるしかねえ!!」

ゴジンクス（トリニティブルー）「俺の事なら構うな!!」

こんぐれえ耐えて見せるからよ!!」

キュアラブリー「ゴジンクスさん…わかりました!!みんな、やろ

う!!」

デイド「それじゃ、作戦開始だ!!!」「new page」

マーリン「まずは我々からだ!!」**殲滅の光**（エクスターミネイトレ

イ）」

キング「真・霊槍シヤステイフォル第四形態「光華（サンフラワー）」

ゴウセル「大停電の矢（ブラックアウト・アロー）」

バン「バニシング・キル」

エスカノール「無慈悲な太陽（クルーエルサン）」

グロキシニア「霊槍バスキアス第九形態「死荊（デスソーン）」

ディアンヌ・ドロール「ドロールの舞!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

と、まずは先陣を切って一斉にマーリン達が攻撃を仕掛けると、

ディアンヌとドロールが「ドロールの舞」を発動させて

技の攻撃力を上昇させてザマス・アークに直撃させた。だが、

ダメージを受けたザマス・アークは不死身の力で回復すると

又、パワーが上昇した。

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ザマス・アーク（限界突破×2）「ククク…無駄だと言ってるだろ

うが!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゴジンクス（トリニティブルー）「うわああああああああああああ

ああ!!!?」

と、パワーが上がった影響で『裁きの刃』に威力がさらに増し、

ゴジンクスにダメージを与え続けていく。「new page」

キュアプリンセス「ゴジンクスさん!!!!」

キュアハニー「プリンセス!! 気持ちはわかるけど...」

キュアフォーチュン「ここはあの人を信じましょう!! ラブリー!!」

キュアラブリー「それじゃみんな、もう一度行くよ!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

キュアラブリー・プリンセス・ハニー・フォーチュン（身勝手の極

意）

「プリキュア・ハピネスビッグバーン!!!!」

キュアテンダー・テンダーX・ハピネスルーク（身勝手の極意）

「トリプルファイナルフラッシュ!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカー!!!!」

ザマス・アーク（限界突破×2）「チイ... 小賢しい人間共が... 何

を考えている!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ザマス・アーク（限界突破×3）「一気に葬り去ってくれ!!」

聖なる連弾（ラー・コンボ）!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!」

ハピプリメンバー「きゃあああああああああ!!!!」

と、身勝手の極意を発動させたハピプリメンバーの攻撃を

受けて再び回復したザマス・アークは、

更にパワーを上昇させて聖なる連弾（ラー・コンボ）を放ち、

ハピプリメンバーをあつさりと吹き飛ばし、大ダメージを与えた。

キュアプリンセス（身勝手の極意）「ううう...」

キュアフォーチュン（身勝手の極意）「ああ...」

キュアラブリー（身勝手の極意）「が... ああ...」

ザマス・アーク（限界突破×3）「目障りなゴミ共め... 貴様等は

後でじっくりと始末してやる。

だが、まづは貴様からだ、サイヤ人!!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ゴジンクス（トリニティブルー）「がああああああああああ!!!!」

あ!!!?

と、ザマス・アークは言いながら、『裁きの刃』の威力をさらに増して、

ゴジンクスに大ダメージを与えていく。「new page」

誠司「ゴジンクスさん!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ」

誠司（身勝手の極意）「待ってるよ…もう少しの辛抱だぜ!!」

サトシ「お…おい誠司…お前も身勝手の極意を使えたのかよ

!?

デイド「質問なら後にしろ!このままじゃあいつが持たない!!」

サトシ「ああ、そうだな!!ジユカイン!フリーザー!準備は良いか

!?

ジユカイン『おう!!』

ゴールデンフリーザー『行きますよジユカインさん!!うおおお

おお!!!』

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ゴールデンフリーザーは背中にジユカインを乗せて超高速で飛

び立つと…

デイド「行くぞ誠司!!青龍…。」

誠司（身勝手の極意）「かめはめ波あああああ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゴールデンフリーザー『ぬおおおおおおお!!!』

と、その後にデイドと誠司の合体技『青龍かめはめ波』を放つと、

ゴールデンフリーザーを飲み込んでそのまま向かっていった。そ

して…「new page」

メリオダス「ホロストヴェイン!!」

「バババババ!!!」

メリオダス（分身☒）「全反撃（フルカウンター）!!」

メリオダス（分身☒）「全反撃（フルカウンター）!!」

メリオダス（分身☒）「全反撃（フルカウンター）!!」

メリオダス（分身☒）「全反撃（フルカウンター）!!」

メリオダス（分身☒）「全反撃（フルカウンター）!!」

と、メリオダスがロストヴェインで生み出した分身体が

青龍かめはめ波に次々と『全反撃（フルカウンター）』を発動させて、威力を増幅させていく。

メリオダス「これで仕上げだ!!全反撃（フルカウンター）!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、最後に本物のメリオダスが仕上げの全反撃（フルカウンター）を発動させて、青龍かめはめ波をザマス・アークに向けて放った。その後…

ゴールドデンフリーザー『行きますよジユカインさん!!』

ジユカイン『任せる!!三刀流奥義…』

と、青龍かめはめ波に飲み込まれているゴールドデンフリーザーの背中に乗ったジユカインが刀三本を構えて、必殺技の発動態勢をとると…「new page」

デイド「喰らいやがれ!!青龍!!」

誠司（身勝手の極意）「かめはめ!!」

メリオダス「全（フル）…」

ジユカイン『高速（マッハ）一千・三千!!大千・世界!!!』

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッカーン!!!」

ザマス・アーク（限界突破×3）「ぐおおおおお!!!?」

と、ザマス・アークに合体技

『青龍かめはめ全高速（フルマッハ）一千・三千・大千・世界』が

炸裂し、大ダメージを与えた。だが…

「シューーーーーー…」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ザマス・アーク（限界突破×10）「無駄だというのがわかんのか

ああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

ゴジンクス（トリニティブルー）「ぐおおおおお!!!」

ああああああああ!!!」

と、更にパワーが増大したザマス・アークは、裁きの刃の威力を増幅させて、

ゴジングクスに大ダメージを与えて、追い詰めていった。「new page」

バン「く…くそつたれが!!!」

キング「やっぱり…この作戦は無謀だったの!!!」

マーリン「くっ?!最早、これまでなのか…ん?」

と、メンバー達が絶望する中、マーリンが何かに気が付いた様子だった。

ザマス・アーク（限界突破×10）「ククク…勝ち目がないと判断して、

頭がおかしくなったかゴミ共?

よかろう…これで終わりにして

や…る?!?!」

バリバリバリバリ…」「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!」

ザマス・アーク（限界突破×10）「ぐおわああああああああああ

ああ!!!!!!」

な…何だこれはああああああああ

ああ!!!!!!」

キュアラブリー（身勝手の極意）「ザ…ザマスが!!!!!!?」

キュアプリンセス（身勝手の極意）「こ…これっで!!!!!!」

キュアハニー（身勝手の極意）「まさか!!!!!!」

と、ザマス・アークがそう言いながらメンバー達に攻撃を仕掛けようとした瞬間、

突如、ザマス・アークの体から闘圧が放出されると、

合体が強制解除されて、元のザマスとゴクウブラックに戻っていた。「new page」

「シューーーーーーシューーーーーン…。」

ザマス「な…!!!!!!」

ゴクウブラック「何…だと!!!!!!?」

バン「よっしやああああああああ!!」

キング「合体が解除された!!!」

メリオダス「イツシツシツ!!! どうやら賭けは成功みてえだな!!!」

ザマス「ゴ……ゴミ共め……」

ゴクウブラック「貴様等……何をしたああああああ!!!」

デイド「じゃあ、説明してやるぜ。お前達の合体が解除されたのは、

ザマス・アークウオッチの力が消滅したからだ!!」

ザマス「どういう事だ!!! なぜ、ウオッチの力が消滅したのだ!!!」

マーリン「フツ……ラ!!・カインから聞いていなかったようだな

ウオッチの力は酷使を続けられれば効力を失い、

消滅する事を。」

ゴクウブラック「な……何だと……!?まさか、それで貴様等は!!!」

デイド「ああ!!だから俺達はザマス・アークの特性を逆手にとり、

お前達に攻撃を仕掛け、あえてパワーを上昇させて

ウオッチの力が消えるのを待っていたんだ!!」

メリオダス「後はお前等の合体が解けるのが先か

俺達……特にゴジングスがくたばるのが先かの

賭けだったんだけどな、うまくいって良かったぜ!!」

グロキシニア「ほんと……ヒヤヒヤしたつすよ!!」

ドロール「残念でしたね、ザマス……そして!!!クウブラック!!!」

ザマス「ゴ……ゴミ共が……小賢しい真似を!!!」

ゴクウブラック「クツ!!仕方ない……ザマス糞まれ!!ひとまず撤退するぞ!!」

俺達はこんな所で終わるわけには行かん!!」

マーリン「そうはさせんぞ!!」完全なる立方体（パーフェクト・

キューブ）」

「ピキイイイイイイイイイイイイ!!!」

と、マーリンは瞬間移動で逃走を図った。ゴクウブラックとザマスを

「完全なる立方体（パーフェクト・キューブ）」で包囲した。「new p

age」

「完全なる立方体（パーフェクト・キューブ）」を
破壊できるからな。」

エスカノール「まったたく… おこがましい限りですがね。」
ゴクウブラック「く…くそおおおおおおおおおおおお
ザマス「狼狽えるな、もう一人の私!!私是不死身だ!!
!!!」

例え攻撃を受けても大した問題ではない!!
後ろに隠れている!!」

デイド「そいつはどうか?お前の体をよく見てみるよ!!」
ザマス「何…?ん…なっ!!!ダメージが回復してないだど!!!」
と、デイドに促されて体の状態を確認したザマスは
ダメージが回復しないままの状況に驚愕していた。「newpage」

デイアンヌ「ほんとだ!!」

バン「おいおい…どうなってんだありや♪」

マーリン「おそらく、ザマス・アークウオッチの力が消失したのと
同時に不死身能力も一時的に失っているのだろう。

フツツ…これは思わぬ収穫だな。」

キュアフォーチュン「そ…それじゃあ!!!」

キュアテンダー「これでザマス達は終わりよ!!!」

キュアラブリー「悟空さん!ベジータさん!トランクスさん!!!」

メリオダス「ぶちかませええええええええええええええええ!!!」

ベジータ（幻影）「ファイナル!!」「シューーーーン…。」

トランクス（幻影）「フィニッシュ!!」「シューーーーン…。」

悟空（幻影）「かめはめ…!!!」「シューーーーン…。」

ゴジンクス（トリニティブル）!!「波ああああああああああ
!!!!」

ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、悟空・ベジータ・トランクスの幻影がそれぞれの必殺技の
構えをとったのと同時に、ゴジンクスと再び一つになると、
最強技『トリニティ・ファイナルフィニッシュかめはめ波』を
ザマスとゴクウブラックに向けて放った。そして…「newpage

と、悟空達の所にメンバー達が駆け寄ってきた。

悟空「ああ!! デイードのおかげでピンピンしてっぞ!!」

デイード「しかし… よくあそこまで耐えてくれたな。さすがだぜ!!」

ベジータ「フン! 当然だ。サイヤ人を舐めるなよ!!」

トランクス「これで… 奴らとの因縁もついに終わったんですね。」
メリオダス「まっ!! そう願ってえけどな。お前等も大丈夫か?」

随分と全反撃（フルカウンター）をぶちかましちまったけど。」

ジユカイン『ああ… けどよ、ちよつと疲れたぜ…。』

ゴールデンフリーザー『あの紙切れにも借りを返せましたし、

私達は少し休ませてもらいますよ…。』

「シューーーーーー…。」

と、力を使い果たしたジユカインとゴールデンフリーザーは、

そう言いながらポケモンボールの中に戻っていった。「new page」

サトシ「ジユカイン、フリーザー、お疲れさん!!」

ゲッコウガ『後は拙者達に任せるでござる!!』

龍神ピカチュウ『ゆつくり休んでくれ!!』

メリオダス「さてさてさーて、他の連中はどうなってるかなっ!!」

キュアアテンダー「そうだ!! 早く、ホウちゃん達の加勢に行かなくちゃ!!」

デイード「… (おいおい… アクア (このすば) の奴、『女神覚醒モード』に

なってるじゃねえかよ!?! あのキャラルって女、かなり厄介そうだな。

それに凱とソニックとデジモン達はピエラートと交戦中か…

ここもどうなるかわからないな。そして先に行った龍斗

達は….)

!!!!!!!?
こ… これは
!!!!!!!」

マーリン「ん？どうしたのだデイド？」

グロキシニア「何かあったんスか？」

デイド「マ…マジかよ…あいつらが!!!」

と、戦況把握を行っていたデイドは突如、!!!

驚愕の表情を浮かべたのであった。そして…「new page」

チン・ゲンサイ「フェツフェツフェツ!!ラー・カイン様の力を

使っときながら敗北とは情けない神様じゃ!!

のう、そう思わんか？」

ガルダ（身勝手の極意）「…くっ!!!」

ゴウガ（身勝手の極意）「つ…強え!。」

龍斗（身勝手の極意）「へへっ…やっぱり、俺達の目に狂いはな

かった…ぜ。」

と、チン・ゲンサイはダメージを負って倒れている龍斗達を

見つめながらそう語ると…

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

チン・ゲンサイ（明鏡止水）「…小童共よ!!フェツフェツ

と、チン・ゲンサイは『流派東方不敗』のスキルである
!!!!!!!

『明鏡止水』を発動させたのであった。

レイス「という訳で、大苦戦を強いられながらも

どうにか強敵ザマス・アークを倒した

サイヤトリニティ・ゴジックスとメンバー達。

一方その頃、四聖士（パラディーン）キャロルが

ついに本気で牙をむきはじめ、プリキュア達を瞬く間に

蹴散らし、追い詰められた女性メンバー達であったが、

駄女神アクアくんも自身に秘められた能力を解放して、

残りの女性メンバー達と共に反攻態勢を整えるのであった。

そして、四聖士（パラディーン）最強のチン・ゲンサイに

挑んでいった龍斗君達とピエラートと交戦中のメンバーの

戦いの行方はどうなってしまうのだろうか？

それでは次回も… 刮目せよ
!!!!!!!

第61話 　　く 神を超えろ!! 究極のトリニティ戦士爆誕す!!
（完） 　　く

キャロル(シャイニングドレス)「あ…お…おげええええええええええ…。」

「ガクガクガクガク…!!!」

キュアハート(パルテ!ンモード)「やった!!!」

アクア「キャロルを捉えたわね!!!」

アクア(このすば女神覚醒)「どうかしら…女神の拳のお味は?

でもまだよ!!これからたっぷりと

ご馳走してあげるわ!!」

キャロル(シャイニングドレス)「こ…この…駄女神の分際で!!

シャイニング・アクセルアップ!!」

「シュイン!!」ドガガガガガガガガガガガガガガガガ!!」

と、キャロルは今度はそう言いながら、シャイニング・アクセルアップを

発動させて、アクア(このすば)を次々と攻撃を直撃させていくが…

「ガシツ!!!」

アクア(このすば女神覚醒)「だから、アンタのヘボパンチは効かないって…

言ってるでしょうが!!!! 『フレイムショット

ト』!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キャロル(シャイニングドレス)「あは!あああああああああ

!!!と、アクア(このすば)はキャロルの攻撃が直撃した瞬間にその拳を掴むと、

『フレイムショット』と呼ばれる火の玉攻撃でダメージを与えたのち…

アクア(このすば女神覚醒)「出てきなさい!!神器『アトラス』!!」

「シューーーーーー…。」

アトラス「…。」

アクア(このすば女神覚醒)「喰らいなさい…『ブラッドスラッ

!!!

ざまあみろ、あのクソ女!!… って、
そのアンタ!! 呆気にとられてないで
早くナミを戻しなさいよ!!」

アクア「… え?… あ… そ… そうね…」

「パチン!!」「シユン!!」

ナミ「…………… こ… この駄女神iiiiiiiiiiiiiiiiiiii
!!!!!!

なにさらしとんのじゃボケエエエエエエエエエエエエ!!!!!!

「バツコオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!
!!!!!!

アクア（このすば女神覚醒）「しゅ… しゅみませんでした…」

アクア「な… 何なの?この状況…」

キュアハート（パルテノンモード）「あはは…」

と、アクアの瞬間移動で戻されたナミは鬼の形相ですかさず

アクア（このすば）を拳骨で思いきり殴りつけた。

そして、アクア（このすば）は頭に巨大なたんこぶを作りながら

ナミに謝った。その時…「new page」

「シユイン!!」

キャロル!!（シャイニングドレス）「……………」

アクア「!!!」

キュアハート（パルテノンモード）「キャ… キャロル…」

と、そこへキャロルが、ボロボロの状態で姿を現した。!!!!!!?」

ナミ「しぶとい奴ね…」

アクア（このすば女神覚醒）「簡単に死なれたら困るわよ。

アクシズ教の御神体であるこのアクア様

を

侮辱した罰をもつともつと与えてやるわ

!!

キャロル（シャイニングドレス）「お前え… 駄女神の分際で、

この美しいわたくしの体を

発動させると、次元速をも遙かに凌ぐ超光速で
アクアたちを次々と攻撃し、吹き飛ばした。

六花「……ハ……ハート……」

ねね「ナ……ナミ……」

なぎさ「ア……アクア……さん……」

アクア「あああ……か……」

ナミ「くう……う……」

キュアハート（パルテノンモード）「が……は……」

「シューーーーーー……」

マナ「……」

キャロル（フルパワー）「フン……何という脆弱さ……これでよく

このわたくしに挑んできた者ですわね!!!

さあ……あの駄女神にとどめを刺す!!としま

しょう……」

「ザッ……ザッ……ザッ……」

アクア（このすば女神覚醒）「あ……ううう……」

と、キャロルはアクア（このすば）にとどめを刺すべく歩を進めた

その時……

マナ「……ま……待って……ま……まだ……終わって……ないよ

？」

キャロル（フルパワー）「あ？」

と、変身が強制解除されたマナはフラフラになりながらも

そう言いながら立ち上がった。「new page」

真琴「マ……マナ……」

ララ「だ……駄目ルン……」

キャロル（フルパワー）「あらあら……まだ立てる気力があつたの？

良いでしょう……では貴女からとどめを刺し

て

差し上げますわ!!!!!!無駄に立ち上がった事を

死んで後悔なさい!!

シャイニング・アクセルアップ!!!!!!

と、シャイニング・アクセルアップをいとも簡単に見切った
キュアハート・エボルシアはキャロルの拳を掴んで

そのまま投げ飛ばし、地面に激突させた。「new page」
ねね「う…嘘…。」

ラフタリア「あ…あのスピードを…簡単に見切るなんて…。」
キャロル（フルパワー）「い…今のはマグレよ…マグレに決まっ
てるわ!!!」

今度こそぶち込んでやるわ!!!

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン
キャロル（残像×1万）「……………」」

コレット「なっ!!!」

元姫「じよ…冗談でしょ!!!?」

と、キャロルはシャイニング・アクセルアップを最大限に発動させ
ると、

一瞬で自身の実態残像を1万人出現させた。

キャロル（フルパワー）「ホホホホホ!!!もう逃げられないわよ!!!

無様なミンチ姿にしてあげるわ…

逝きなさい!!『シャイニング・ストリーム』

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、キャロルはそう言いながら自身の必殺技!!

『シャイニング・ストリーム』を発動させると、

実態残像1万体が最早、目視できない程の

超光速で飛び蹴りを次々と繰り出していくが…

キュアハート・エボルシア「……………」

「シユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユンシユン
!!!!!!」

「……………」

と、キュアハート・エボルシアはその超光速の飛び蹴りを
!!!!!!

目をつぶった状態でほとんどその場から動かずに

かすりもさせず完全回避した。そして攻撃を回避された実態残像

は

キュアハート・エボルシア「『エボルシアソード』
ねね「あれは!?!」
!!!!!!」

ラフタリア「何か、ファンネルみたいね!!」

ほのか「『A（アーク）ファンネル』よ。久しぶりに見たわ!!」
真琴「それに、剣になったわ!!!」

と、キュアハート・エボルシアは背中の中からは

無数の『Aファンネル』を展開させて剣状の形態にすると
そこから強大なマゼンタ色のパワーを放出して

大剣を形成した。そして…。

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キュアハート・エボルシア「エボルシア!!女神の鉄槌（セインテイ
ア・クロス）!!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
キャロル（限界突破）「ぎやあああああああああ!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」
と、キュアハート・エボルシアは形成した大剣を

そのままキャロルに目がけて振り下ろして直撃させ、
大爆発を起こした。そして、全ての力を使い果たした

キャロルは元の姿へと戻った。「new page」

「シューーーーーー」

キャロル「あ…あ…あ…が…。」

元姫「や…やったの?」

エミリア「勝った…。」

なぎさ「勝ったんだ!!」

メンバー一同「やったあああああああ!!!」

と、キュアハート・エボルシアが難敵キャロルを撃破した事で
歓喜に沸くメンバー達。だったが…

アクア（このすば女神覚醒）「まだよ…!!!このクソ女、まだ生きて
るじゃない!!」

これでとどめを刺すわ…『ブラッドラン
ス』!!」

「シューーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

ブラッドランス「……………」

キャロル「く……あ……う……」

アクア（このすば女神覚醒）「死ね……このクソ女あああああああ
あああ!!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、アクア（このすば）は、双剣状態だった神器アトラスを

槍状の形態『ブラッドランス』に変化させてキャロルに

とどめを刺そうとしたその時……「new page」

「バシィッ!!!」

アクア（このすば女神覚醒）「!!!」

キュアハート・エボルシア「……………」

と、キュアハート・エボルシアがアクア（このすば）のブラッドラ
ンスを

受け止めて、首を横に振りながら制止した。

コレット「あ……あの子……」

ナミ「ブラッドランスを簡単に受け止めたわ……」

アクア（このすば女神覚醒）「何で!!!どうして止めるのよ!!!!!!」

こいつは敵なのよ!!!おまけにこの全知全

能にして

アクシズ教の御神体であるこのアクア様

を

散々コケにくれた落とし前を

つけさせてやるんだから!!!」

キュアハート・エボルシア「確かにこの人は敵だよ。でも……愛の

為に

戦う人に悪い人なんていないよ!!!」

キャロル「!!!!!!」

六花「フフ!!……マナらしい事を言うわね!!」

ありす「そうですわね!!」

亜久里「それに、シン様ならここで絶対にとどめなんて刺しません

わ!!!」

アクア「まあ… そうよね。女神のアクア、ここはマナちゃんに免じて

引いてもらえるかしら?ここまでキャラルを追い詰めたのは彼女よ?」

アクア(このすば女神覚醒)「……………」

キュアハート・エボルシア「ダメ… かな?」

ナミ「アクア!!」

アクア(このすば女神覚醒)「… わかったわよ!!!!!!」

「シュー……………」

アクア(このすば)「ここはアンタに免じてそのクソ女の命だけは助けてあげるわ!!

でもね、なくのが愛よ!!!!!!そんなものでこれからの戦いを

勝ち切るなんて到底無理だわ!!いずれアンタ達も

その事を思い知る日が絶対に来るわよ!!後は勝手

にしなさい!!」

と、アクア(このすば)はそう捨て台詞を吐きながらその場から離れていった。

キュアハート・エボルシア「ありがとう… アクアちゃん!!!!」

キャラル「あ… あなた… とんだ… 甘ちゃんね… そ… それで…」

ラー・カイン… 様を倒すなんて… 夢の… また夢…

ですわよ…?」

ひかり「確かに、少し前まではそうでした。でも今は…!!!!」

なぎさ「アンタには悪いけど… ラー・カインは絶対に倒す!!」

ほのか「今のあたし達なら… 行ける気がするから!!!」

アクア「そうね!!この戦いが終わったら、あなたを次元管理局に身柄を拘束させてもらうわ… それまではとりあえず

アルテミスで大人しくしてもらうわよ!!」

「パチン!!」「プワプワプワ…」

そんな卑怯な真似をするわけないでしょ!!!」

エミリア「そんなことは今はどうでもいいわ!!早く治療しないと!!」

キュアハート・エボルシア「でもまずは、この刃を抜かないは?!!
くっ… 抜けないよ… どうして!!!」

と、治療をするためにまずは心臓に刺さっている刃を抜こうとする
キュアハート・エボルシアだったが、なぜかビクともしない。そして…
「new page」

キャロル「あ… ラ… カイ… さ… あ… いして… ま… ゴ
フウウウウウウウウ!!!」
「バタツ…!!!」 「ガクツ!!!」

と、キャロルは左手を上空に掲げようとしながら
ラー・カインへの変わらぬ愛を口にしようとするが、
最期は血反吐を吐きながら無残にも絶命してしまった。

キャロル「……………」
ひかる「そ… そんな…」
ララ「う… 嘘ルン…」

真琴「こんな… こんな事って…」
アクア「……………っ!!!」
キュアハート・エボルシア「な… 何で… どうしてよおおおお

おおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおおお

六花「mana……………」
と、キャロルの無残な死に多大なショックを受けたメンバー達であつた。

そして… その一方… 「new page」
ピエラート「… キャロルさんがやられてしまったあーるな…

しかし、誰が彼女にとどめを刺したのであーる?
あの面子の中にポクに動きを悟られないように

『エボルシア・ウオッチ』を発動させて、強化形態『キュアハート・エボルシア』と進化し、難敵キャロルを難なく一蹴したのだった。だが、そのキャロルが何者かの手により壮絶な死を遂げた事で多大なショックを受けるプリキュア達と女神連合のメンバー達。

その一方、別の戦場では四聖士（パラディーン）ピエラートが『死のマジックショー』と称し、他のメンバーを

大苦戦のどん底に陥れていった。果たして彼らに勝機はあるのか…？

そして、チン・ゲンサイと相対する龍斗君達の運命は…

そして、ラー・カインはいつ動き出すのか… それでは次回も…刮目せよ!!!」

第62話　　新たななる進化の女神！その名はキュアハート・エボルシア　!!　(完)

海（超セレス）「な…何か…。」

風（超ウインダム）「ノヴァさんとランティスさんが

サイコフィールドを展開してくれたおかげです…。」

超魔神レガリア「でも…もう一度来られたら、もうもたない…。」

超魔神ランティス「なんとという魔力だ…これが四聖士（パラディーン）の力か…。」

ピエラート「フフフ…そうであるか!!!ではアンコールにお応えして、

もう一度、行くのである!!!」

「パチン!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「バリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!!」

「グゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!」

と、ピエラートはそう言いながら再び先程と同じ

大津波や竜巻、ハリケーンや稲妻、巨大地震といった状況を造り上げた。

アニエス「う…嘘…。」

アデル「ば…化け物か、奴は…!!!」

砂かけ婆「こりや、ぬりかべでも防ぎきれんぞい!!!!」

ぬりかべ「ぬりかべ…。」

と、先程と同じ状況をいとも簡単に作り出した

ピエラートに驚きと絶望的な表情を浮かべるメンバー達。

ピエラート「それでは…これでファイナーレといくのである!!

『死の大自然（デス・エレメンタル）マジック』!!!」

「ドオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ラピス「や…やべえ…!!!」

キュアアイネス「ま…不味いわ!!!」

ラン「コナン…助けてええええええええええええ!!!」

と、メンバー達がとどめを刺されそうになったその時…「new

力か!!!!

ソコック（ダブルオーアマテラス）「最初にこの次元に来た時に

れで納得だぜ!!」

見た有様はあの技が原因か…こ

と、真・天滅波動撃（ファイナル・ゼロスレイヴ）の威力を初めて目の当たりにした他の並行次元組はこぞって驚愕の表情を見せた。そして：

「シューーーーーーシューーン…。」

ピエラート（最終形態）「くっ… ううう… よくも

やってくれたであーるな!!!!」（闘級3900億）

アニエス「あ… あいつは!!!」

アデル「まさか… ピエラートか!!!」

アキノリ「何だあ!?でかくなったぞアイツ!!!」

と、爆発した煙の中からピエラートがピエロの大型の人形をした最終形態へと変化し、そう言いながら現れた。「new page」
ゼロライザーFKD「気に入ってくれたかな？俺達のマジックは？

でもしぶといな… まだやるのか？」

ピエラート（最終形態）「当然であーる!!!ポクの悲願を果たす為…

そして、ラー・カイン様の為、ここで退くわけには

いかないのであーる!!!さあ！マジックショーの続きで

あーる!!!」

ゼロライザーFKD「あいにくだが、俺はここまでだ。

他のみんながネタを出したくて

ウズウズしているみたいだな。そうだろ？」

メイミ「もちろんよ!!散々、マジックをもて遊んでくれて」

カイト「今からお前に… 本物のマジックショーを見せてやるぜ!!」

行くぞゾロアーク!!波動モードだ!!」

ゾロアーク『うん！バクフーン、ジュナイパー行くよー!』

と、カイトがそう叫ぶと、腰のボールから2つ球体が飛び出してゾロアークに入ると三位一体のゾロアークトリニティになるの

だった!!」[new page]

「シューーーーーーシューーン……。」

ゾロアークトリニティ(ジュナイパー)

『平伏せ！我こそは、ゾロアークトリニティ！幻影の覇者たるゾロアークと』

その家臣バクフーン、ジュナイパー！三位一体となって

未来を創出する幻影の王者である！』

鬼太郎「……………」

さくら「……………」

朱夏「……………」

零「……………」

キュアサタン「……………」

キュアエターナル「……………」

「ポクポクポクポク……」「チーーーーーシューーン!!!!!!」

ゾロアークトリニティ『ちよつとジュナイパー！。それやる必要があるの？』

みんなドン引きしているよ』

ゾロアーク(バクフーン)『バカなことを言ってるじゃねえ！』

デイケイド「おい……アイツもアレをやるのか？」

デイエンド「どこかで聞いたようなセリフだが……気のせいかな？」

カイト「いや……多分、気のせいじゃないです」

(まあ、ジュナイパーの性格が『ウオズ』だからな……)」

メイミ「もういいわよ、メタちゃん!!変身よ!!」

メタモン「わかった、変身!!!」

「シューーーーーーシューーン!!!!!!」

セーラームーン(メタモン)「月に代わって……お仕置きよ!!!!!!」

と、メタモンはメイミの指示で『セーラームーン』へと変身した。

光(レクサス)「あつ、セーラームーンだ!!!!!!」

ケロベロス「何や、えらい懐かしいのが出てきたな~!!!!!!」

カイト「そんじゃ、俺達も行くかメイミ!!!!!!」

怪盗キッド（カイト）「ゾロアーク!!ローキック!!」

ゾロアークトリニティ『タイムブレークバースト

エクスプロージョン（ローキック）!!?』

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ピエラート（最終形態）「ぐああああああああああああ!!」

怪盗キッド「…からのナイトバースト!!」

ゾロアークトリニティ『ナイトバースト!!』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ピエラート（最終形態）「ぐおおおおおお!!」

ラン「ピカチュウ!!おしりパンチ!!!」

怪盗セイント・テール（メイミ）「メタちゃんも…おしりパンチ!!!」

原初ピカチュウ（白眼）『はいママ!!おしりパンチ!!』

スーパージェネラームーン（メタモン）「おしりパンチ!!」

「バゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ピエラート（最終形態）「ハヒューー!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

と、ゾロアークトリニティはタイムブレイクバースト

エクスプロージョン（ローキック）を放った後、

すぐさまナイトバーストのコンボ攻撃を炸裂させると、

原初ピカチュウとスーパージェネラームーン（メタモン）が

一緒におしりパンチをピエラートに直撃させて吹き飛ばし、

大ダメージを与えた。「new page」

ソニック（ダブルオーアマテラス）「や…やるじゃねえか、あのポケモン達」

ケモン達」

凱（ガオファイガー）「あ…ああ、大したものだな」

バシヤーマ「ちきしょう あのパエロ野郎」

一反木綿「う…うらやましかばい」

キュアデイスティニー「って、アンタら 何、目を にさせてんだ

!!!?」

キュアアスモデウス「まあ…殿方には目の毒かもしれない技です

わね」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー。。」

怪盗セイント・テール（メイミ）「怪盗セイント・テールに、不可能は無い!!!」

怪盗キツド（カイト）「**ま**たのご来場をお待ちしております。。。。」

光（レクサス）「やった!!!」

ラピス「す。。。すげえ!!!」

ゼロライザーFKD「最高のマジックショーだったよ、2人共!!!」
「シューーーーーーシューーーーーー。。。。」

カイト「へへっ。。。まあ、こんくらい朝飯前だぜ!!!」

メイミ「あなたがピエラートを弱らせてくれたおかげです!!!」

セレナ「ところであなたは。。。？」

「シューーーーーーシューーーーーー。。。。」

マサト「俺の名は阿久津マサト。よろしく!!!」

ラン「よろしくね、マサトお兄ちゃん!!!」

ハグタン「はぐぐ」

ジン「阿久津マサトか。。。」

（俺達の知る『マサト』とは全然違うな。まあ、当然だろうが。）

ラピス「この野郎!!生きてたんならもっと早く来いよ!!!」

鬼太郎「おかえり、マサト君!!!」

光（レクサス）「おかえり!!!」

朱夏「よく帰ってきたな!!!」

美香「マサト君。。。おかえりなさい!!!」

マサト「ああ。。。心配かけてすまなかつたな美香!!!」

デイケイド「お前。。。しばらく見ない間に随分と雰囲気が変わったな。」

デイエンド「前に見たときはナヨナヨした感じだったけどね。」

マサト「まあ、色々ありましたからね。」

アンズ「でも、今までどうしていたの？」

リータ「私達はあれからすぐに捜索に出たんですけど、

まったく見つからなくて。。。」

マサト「その話はこの戦いが終わった後にしよう。今は。。。。」

コナン「マサト兄ちゃんの言う通りだよ。」

と、そこへツアイトとの激闘の後に気を失っていたコナンが姿を現した。「new page」

ラン「コナーーーーーー!!!!!!」

カイト「よう、名探偵。もう起きて大丈夫なのか？」

コナン「誰かさん達がまた泥棒になってたみたいだったからな。」

探偵の血が騒いじまって目が覚めちまったよ!!」

メイミ「あらら・・・それは悪い事をしたわね!!」

キュアフリーダム「でもコナン君、この2人のマジックショーは最高だったわよ!!」

キュアベルゼブ「ええ。アンコールしたいくらいだったわね!!」

カイト「まあ、それはまた別の機会だな。なあ名探偵？」

コナン「ああ。この戦いが終わったらまたバトルと行こうぜ

月下の奇術師さんよ!!

(でも、お前等のマジックショー最高だったぜ!!)

しかしメイミの奴・・・ポケモンの闘級あげる技なんて

いつの間に身に着けたんだ？メタモンだけじゃなく、

トレーナーまでチートになってきたな」

零「ピエラートも倒したことで、残るはチン・ゲンサイか・・・。」

ねこ娘「龍斗達、大丈夫かしら？これまでの3人とは

明らかに別格みたいだけど・・・。」

ジン「あいつらの心配ならいらないだろ。」

デビルオンバーン「ああ。別格なのは龍斗達も同じだからな!!」

マサト「今は彼らを信じて、俺達はラー・カインとの

戦いに向けて態勢を立て直そう!!」

一同「了解!!!」

と、メンバー達とピエラートとの壮絶な『死のマジックショー』はこうして幕を閉じた。と思われたが・・・「new page」

↳ 離れた場所 ↳

「シューーーーーー.....」

四次元シルクハット「.....」

!!!!!!!
「と、ピエラートを消滅させた『???』は、
再び高らかに超絶ゲス笑いをしたのであった。」

レイス「という訳で、ピエラートの変幻自在の『死のマジック』に
大苦戦していたメンバー達だったが、

鉄血龍（オル・ドラゴン）との最終決戦で行方不明となって
いた

ゼロライザーこと阿久津マサト君が帰還し、窮地を救うと、
息を吹き返したメンバー達がピエラートとの
壮絶なマジックショーに決着をつけて、残る敵は
四聖士（パラディーン）最強のチン・ゲンサイとラー・カイ
ンとなった。

グラン・ゲインズのメンバーはこの超強敵の2人を
見事に撃破することができのだろうか？

そして、そのキャロルとピエラートにとどめを刺した
謎の人物・・・彼はいったい何者なのか？

だが、後にこの人物がこの『次元大戦の世界』の存亡に関わ
る

大事件を巻き起こす事になるとは、この時はまだ誰も知る由
も無かった。

果たして、我が主『桑田進之介』はこれから起こるであろう
その危機的状況に間に合うのか・・・？
それでは次回も・・・刮目せよ！！！！

第63話 対決!! 『死のマジック』VS 『奇跡のマジック』!!
（完）

第64話　　激闘!!アルティメットガチンコ
前編　　)

チン・ゲンサイ(明鏡止水)「フェッフエッフエツ!!

さて、続きと行こうかのう... 小童共!!!

ゴウガ(身勝手の極意)「め... 明鏡止水かよ... 上等だぜ!!!」

ガルダ(身勝手の極意)「サイヤ人を甘く見るなよ、爺さん!!!」

龍斗(身勝手の極意)「俺達もギアを上げるぞ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

龍斗(超サイヤ人4ブルー)「.....!!!」

ゴウガ(超サイヤ人4ブルー)「.....」

ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「.....」

と、チン・ゲンサイが明鏡止水を発動させたのに対し、

龍斗達は『超サイヤ人4ブルー』に進化した。

チン・ゲンサイ(明鏡止水)「フェッフエッフエツ!!これは凄いのう

!!

超サイヤ人4と超サイヤ人ブルーの合わ

せ技と見たぞい!!

さあ... 早速その力を儼に見せるのじや

!!!!!!

龍斗(超サイヤ人4ブルー)「言われるまでもねえ!!!炎剛龍砲打!!!」

ゴウガ(超サイヤ人4ブルー)「吠え面かかせてやるぜジジイ!!!」

インフェルノヴァマシンガン!!!

ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「後悔するなよ... 不死鳥爪!(フェ

ニックスクロー)!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

チン・ゲンサイ(明鏡止水)「フェッフエッフエツ!!!そう来なくては

つまらんのう!!!

『竜巻旋風脚!!!』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

キュアフォーチュンIF（身勝手の極意）「嘘…龍斗達、押されてるの!!!」

誠司（界王拳）「マジかよ!?!」

グルキシニア「ドロール君…。」

ドロール「ええ…さすがは親衛隊（ホワイトナイト）最強ですね。」
ベジータ「それに貴様等…何だその姿は!!!超サイヤ人なのか!?!」

ゴウガ（超サイヤ人4ブルー）「その話は後だぜベジータさん!!」

それより、あのジジイの強さは半端じゃ

ねえ!!」

バルダ（超サイヤ人4ブルー）「心してかからないと一瞬でやられるぜ!!!」

悟空「どうやらそうみてえだな。凄え気がビンビン感じっぞ!!!」

メリオダス「さてさてさーて!!いつちよやりますか!!」

サトシ「ようし…俺達も総力戦だ!!」

龍神ピカチュウ『うん!!』

ドラゴニツクリザードン『本当の俺…ようやく参上!!!』

サトシゲッコウガ『行くでゴザル!!』

メガガチゴラス『おう!!』

と、サトシも手持ちポケモンをメガシンカさせて臨戦態勢を取った。

チン・ゲンサイ（明鏡止水）「フェツフェツフェツ!!嬉しいのう!!」

このような老いぼれに寄ってたかっしてくれるとは。

では…儂も少くしだけ本気をだすとするかろう

!!

『界王拳』『天衣無縫の極み』『武装色の覇気』!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、チン・ゲンサイはそう言いながら!!

更に『界王拳』『天衣無縫の極み』『武装色の覇気』を

発動させて、チン・ゲンサイ（中間フォーム）となった。「new p

age」

「シユンシユンシユンシユンシユン…。」

!!!!!!!」

チン・ゲンサイ（中間フォーム）「フェツフェツフェツ…

さあ、いつでも来るが良いぞ!!」

「ズオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

キュアテンダーX（身勝手の極意）「な…何て威圧感なの…?」

キュアハピネスルークIF（身勝手の極意）「こ…これ程だなん

て…!？」

エスカノール「フ…フン!!あのような老いぼれにこの私が押されるはずなど…。」

マリーリン「やせ我慢はよせエスカノール…震えているぞ?」

と、チン・ゲンサイ（中間フォーム）の想像を絶する

威圧感に戦々恐々となるメンバー達。

ベジータ「フン!!臆病者は引っ込んでいろ!!ハアアアアアアア

!!!!

トランクス「でやあああああああ!!!!!!

悟空「ウオリヤアアアアアアアアアアア!!!!!!

デイド「俺もギアを上げるか。行くぜキバット!!準備はいいか

!？」

キバット「よっし!キバって行くぜ!ガブツ!

デイド「変身!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

悟空（界王拳ブルー）「……………!!」

ベジータ（ブルー進化）「……………」

トランクス（超サイヤ人ホープ）「……………」

デイド（キバ）「……………」

と、戦々恐々となるメンバーを尻目に悟空やデイド達は

それぞれ変身して臨戦態勢をとった。

龍斗（超サイヤ人4ブルー）「行くぜ爺さん!!第2ラウンドだ!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

デイド「よし、みんな!!龍斗に続くぞ!!」

悟空（界王拳ブルー）「おう!!」

メリオダス「さてさてさーて!!皆さんいきますか!!」

わかってんの、このウサ公」

?①「何だと貴様 破壊するぞ」

?③「あーわかったわかった!! ホンツトめんどくさっ…。」

「パチン!!」

「シユウウウウウウウウウウウウウウウウ…。」

ザマス「なっ!!!」

ゴクウブラック「何だと…?」

と、?③の少年が指を鳴らすと、ザマスとゴクウブラックが一瞬で全快した。「new page」

?②「まったくもう… こんなウサ公の言う事なんて聞くことないのよ」

?①「何だと貴様、まだ言うか 『全ての破壊神の父』たる

この俺に向かって」

ゴクウブラック「何…? 『全ての破壊神の父』…?」

ザマス「き… 貴様は何者だ!? 確かによく見たら

破壊神ビルスによく似ているが…。」

破壊神ビビス「ああ、そういやあこの次元のお前等とは初対面だったな。

俺の名は『破壊神ビビス』今、言った通り

『全ての破壊神の父』にしていずれば『創造神』となる者だ!!」

と、ビルスによく似た人物は『破壊神ビビス』と名乗った。

ゴクウブラック「おいザマス… 知っているか?」

ザマス「いや… そんな奴など聞いたこともない。

すると貴様… この次元の者ではないのか?」

破壊神ビビス「ん? お前達… だれが『貴様』だ

ああああああああああ 『破壊』!!!!!!」

「ビシビシビシビシビシビシビシビシ…。」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゴクウブラック「うおおおおおおお!!!?」

ザマス「ぐああああああああああ!!!?」

と、ビビスはそう言いながら強大な破壊エネルギーを放出すると、ザマスとゴクウブラックを包み込んだ。

②「ウサ公!!アンタ何やってんのよ!?!ここで

この2人を殺されたらアタイ達が困んのよ」

破壊神ビビス「じやかましい!!誰がウサ公だ

フン!!まあ、このくらいでカンベンしてやるとしよう。」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー。」

と、破壊神ビビスはそう言いながら、ザマスとゴクウブラックを飲み込んでいた破壊エネルギーを消滅させた。「new page」
ゴクウブラック「が……がはっ……。」

ザマス「お……おのれ……。」

③「よかったじゃん君達。命拾いしたみたいで!!」
破壊神ビビス「さて、冗談はこのぐらいにして本題に入ろうか?

ザマスにブラック、まだあきらめたくなければ俺と共に来い。」

ゴクウブラック「!!!!!!」

ザマス「な……何だ!!!!それはどういう……」

「ガシツ!!!!」「ギリギリギリ!!ギリギリギリ!!?!!!!!!」

ザマス「ぎゃああああああああああ!!!!!!」

②『『紙切れ』のくせに何、口答えしてんの?!!

イエスカノーか……はつきりしなさいよ!!

アンタ、男でしょ」

と、②のオネエ口調の男性はそう言いながらザマスの股間をギリギリと握りつぶしていく。

破壊神ビビス「お……おいおい」

③「また悪い癖が出た……これだからアイツと組むのは嫌なんだよね」

ザマス「わ……わかった!!!!いい……いいだろう!!貴様等と組んでやる!!!!」

②「はあく?何か言ったかしら?」

丁度いいんじゃない？」

ザマス「そ…組織だと…？」

ゴクウブラック「そういえばお前達…あのアルトやバイエルンとかいう奴と

雰囲気似ているが、まさか…？」

？③「まあ…大体、察しの通りだけど。

でも俺達はその2人とは少し立場が違うんだよね。」

？②「ウフフ…その事は後でじっくりと教えてア・ゲル」

破壊神ビビス「では話がまとまった所で、ひとまず俺達の次元へ行くぞ!!」

と、ビビス達はそこから撤収しようとした時…「new page」

「シュンシュン!!!」

ビルス「お前か…破壊神ビビスというのは？」

ウイス「ザマスにゴクウブラック…やはり生きていましたか。」と、そこへビルスとウイスが姿を現した。

ザマス「き…貴様等!!!」

ゴクウブラック「何しに来た!？」

破壊神ビビス「狼狽えるな。こいつらに俺達を

どうこうすることなどできはせん。

ビルス…俺達の次元のお前と同様、

俺を『オヤジ』と呼んでくれてもいいんだぜ？」

ビルス「馬鹿を言うな!!何で見ず知らずのお前を『オヤジ』と

呼ばなきやならないんだよ!!!」

ウイス「ところで…あなた方はこれからどうされるのでしょうか？」

？②「アンタたちには関係なくいのよ!!」

？③「邪魔するなら消しちゃうよ?めんどくさいけど…」

破壊神ビビス「まあ待て。お前達…俺達に構っている場合ではな
かろう？」

もうすぐこの世界にとんでもないことが起きるぞ?」

グラン・ゲインズの所に戻ったほうが良いと思うがね？」

ウイス「とんでもない事……ですか？」

ビルス「何だそれは!!!」

?③「それは自分の由で確かめれば?そんなじゃ、

めんどくさくなる前にさっさと行こうか。」

?②「行くわよアンタ達!!!」

ザマス「くっ……グラン・ゲインズ共に伝えておけ!!この借りは必

ず返すとな!!」

ゴクウブラック「まあ……奴らがラー・カインに倒されなければの話だな。」

破壊神ビルス「では、お前達がこの戦いから生き残る事が

出来たならまた会おう!!ひとまずさらばだ。我が息

子よ……。

(そして……白雪龍斗、氷川ゴウガ、鳳凰ガルダよ。)

?②「それじゃあ……マ・タ・ネ」

「シンシンシンシンシンシン!!!」

と、ビルス達はそう言いながら、その場から姿を消した。

ビルス「……くそっ!!あいつ等!!」

ウイス「まあ……仕方ありませんねえ……あの者達……

特に、あの謎の二人組は今の我々で

どうにかできるものではなさそうですし。」

ビルス「何で僕がこんな面倒ごとになんと巻き込まれなきゃならんのだ!!」

破壊剣(ラグナロク)の契約者はまだ戻ってこないのか!!!?

と、ビルスや謎の二人組の強大なパワーを悟って何もできなかつた

ビルスは、イライラを募らせながらそう言い放った。そして……

「new page」

悟空(界王拳ブルー)「うおりやああああああああ!!!」

ベジータ(ブルー進化)「でりやああああああああ!!!」

トランクス(超サイヤ人ホープ)「うおおおおお!!!」

デイド (キバ) 「はあああああああああああ!!!」
「ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!!!」
チン・ゲンサイ (中間フォーム) 「フェツフェツフェツ!! 止まって見えるのう!!」

ほれ... 『昇龍拳』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
悟空 (界王拳ブルー) 「うわあああああああ!!!」
ベジータ (ブルー進化) 「くそつたれがああああああ!!!」
トランクス (超サイヤ人ホープ) 「ぐおおおおお!!!」
デイド (キバ) 「ぐあああああああ!!!」
「ドゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、まずは悟空達がチン・ゲンサイに攻撃を仕掛けていったが、難なく交わされて、昇龍拳で反撃されて吹き飛ばされた。

キング 「悟空!! みんな!!」

グロキシニア 「彼らの攻撃もまともに当たらないっすか... 厄介っスね。」

バン 「おいおい... 感心してる場合じゃねえぜ♪」

メリオダス 「いくぜみんな!! 神千斬り!!!」

エスカノール 「微塵斬り (スーパースラッシュ)!!!!」

サトシ 「俺達も総攻撃だ!!!」

龍神ピカチュウ 『登龍剣!!!』

ドラゴニツクリザードン 『エアスラッシュ!!!』

サトシゲツコウガ 『螺旋手裏剣!!!』

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!」

と、続いてメリオダス達がチン・ゲンサイに攻撃を仕掛けるが...

「new page」

チン・ゲンサイ (中間フォーム) 「フェツフェツフェツ!! 無駄じゃあ!!」

『ジエノサイ! カッター』

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

メリオダス 「うわあああああああ!!!」

と、フルパワーチン・ゲンサイの姿を見て戦慄の表情を見せるメンバー達を尻目に俄然、ファイト満々となる龍斗達であった。今まさに、小細工なしのアルティメットガチンコ勝負が始まろうと
していた!!

レイス「という訳で、ついに四聖士（パラディーン）最強チン・ゲンサイと

激闘を開始したグラン・ゲインズのメンバー達。

その強大な力に圧倒されながらも奮闘する彼らであったが、対するチン・ゲンサイもそれに応えるかのように

フルパワー状態となり、メンバー達はその強大なパワーに圧倒されていった。だが、そんな彼らを尻目に

龍斗君達は更にやる気を漲らせるであった。

果たしてこの勝負の行方は…

そして、しぶとく生きていたザマスとゴクウブラックを

仲間に引き入れた『全ての破壊神の父』を自称する

『破壊神ビビス』と『謎の2人組』：彼らは一体何者なのか？

そして、その目的とは…事態は更に混沌としていく中、これからのグラン・ゲインズの運命はどうなっていくのか？

それでは次回も…刮目せよ!!!!

第64話　　激闘!!アルティメットガチンコ　（前編）

（完）

(温存しておきたいのは俺も同じだしな。)

ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「いいだろう… それなら時間を稼いでやる。」

龍斗(超サイヤ人4ブルー)「すまねえ!!頼んだぜ2人共!!行くぞゴウガ!!」

ゴウガ(超サイヤ人4ブルー)「おう!!」

「シユンシユン!!」

と、龍斗とゴウガはガルダとデイドにその場を任せて、場所を移動した。

メリオダス「あ… あいつ等…。」

サトシ「どこに行ったんだ?あの二人…。」

フォーエバーラブリー(身勝手の極意)「… (まさか、あの二人….)」

チン・ゲンサイ(フルパワー)「ん?逃げたか?まあ良い…

ならばまずは貴様達からだ… 覚悟は

良いな?

ハハハハハハハハハハ!!!」

デイド(キバ)「あいにくだが、ここでくたばるつもりなんぞ無いぜ!!

行くぞガルダ!!」

ガルダ(超サイヤ人4ブルー)「ああ!!(頼んだぜ龍斗、ゴウガ!!)」
「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、デイドとガルダはそう言いながら、

チン・ゲンサイへと立ち向かっていった。そして… 「new page」

↳ ラー・パレス内部 ↳

「シユーーーーー…。」

ラー・カイン「… デュークか。戻ったのか?」

デューク「はい。ですが、戦況はあまりよろしくないようですねえ?」

四聖士(パラディーン)もとうとうチン・ゲンサイ1人だ

デイド「く……ううう……」

ガルダ「く……くそっ……」

キュアテンダーIF（身勝手の極意）「ホウちゃん!!!!!!」

悟空「デイド!!!でえ丈夫か!!!」

チン・ゲンサイ（フルパワー）「さてと……とどめじゃあ!!!!!!」

「ブウウウウウウウウ……」

と、チン・ゲンサイはそう言いながらデイドとガルダに向けて

エネルギー波の発射態勢をとる。

リュウガ? 「やめろこの野郎!!俺が相手だああああああ!!!!!!」

「バインバインバインバイン!!!」

と、リュウガ? は肥満体を揺らしながら、

チン・ゲンサイへと向かっていくが……「new page」

チン・ゲンサイ（フルパワー）「邪魔じゃああああああああ!!!!!!」

「バキイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!!!」

リュウガ? 「うわああああああああああ!!!!!!」

「バインバインバインバインドゴオオオオオオオオオ!!!!!!」

と、チン・ゲンサイはすかさず蹴り飛ばすと、

リュウガ? は大きく跳ねながら吹き飛ばされた。

誠司（界王拳）「龍斗!!」

キュアプリンセスIF（身勝手の極意）「ゴウガ!!」

リュウガ? 「く……くそう……」

チン・ゲンサイ（フルパワー）「フン……まずはお前から死ぬ……」

『真空波動拳』!!!

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

キュアハニーIF（身勝手の極意）「ああ!!!」

キュアフォーチュンIF（身勝手の極意）「は……逃げてええええええええええええ!!!!!!」

ええええええ!!!!!!

リュウガ? 「う……うわああああああああああ!!!!!!」

と、チン・ゲンサイが放った真空波動拳が、

リュウガ? に直撃しそうになったその時……「new page」

キュアエターナル「プリキュア・タイムコントロール『クイツク』!!!!!!」

ルカリオ『と……とんでもない波動……だ……』
デイド「へっ……いよいよ……お出ましかよ……!!!!!!」
キュアハート・エボルシア「ア……アクア……さん……!!!!!!」
アクア「ええ……み……みんな……覚悟は良いわね……!!!!!!」
「シュー……」

ラー・カイン「よくぞここまで上り詰めてきた、グラン・ゲインズ……
そして、平行次元の虫ケラ共よ……。褒美として

この余自らが、お前達の真価を見極めてやろう……フ
フフフ!!!」

と、辺り一帯に凄まじい闘圧を放出しながら、

!!!!!!
ついにラー・カインがメンバー達の前にその姿を現したのであった

レイス「という訳で、龍斗君とゴウガ君がフュージョンした姿

『リュウガ』の奮闘により、四聖士（パラディーン）最強の

チン・ゲンサイを撃破したメンバー達。

勢いに乗る彼らの前について『聖王』ラー・カインが

姿を現したのであった。いよいよ幕が上がる最終決戦の行

方は

どうなっていくのであろうか？

佳境を迎える『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』編……

果たして、グラン・ゲインズ……そして第5世界の運命は……

？

それでは次回も……刮目せよ……!!!!!!」

第65話　　激闘!!アルティメットガチンコ（後編）　　（完）

ラー・カイン「ほう？あの時、次元の王候補（ディオケイター）・ラ
グナと

共にいた小娘か：：少しは成長したようだな。」

キュアハート・エボルシア「そうだよ!!でもあたしだけじゃない!!
あなたを倒す為に、みんな強くなっただから!!

アクアさん!!」

アクア「行くわよみんな!!白魔法（ホワイトアタック）・最大治癒（メ
ガホイル）!!!」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、アクアはそう言いながら白魔法（ホワイトアタック）・最大治癒
（メガホイル）を

発動させて、メンバー全員を全快させた。

龍斗「よっしゃ!!復活だぜ!!!」

ゴウガ「これでもうひと暴れできるぜ!!!」

安「あつ：：みんな!!」

キュアエターナル「安ちゃん!!」

キュアサタン「気が付いたわね。早速だけど：：。」

安「わかってるよ。プリキュア・ライドオン!!」

電子音『R I D E O N』

キュアアーンヴァル『青空駆ける純情天使』キュアアーンヴァル
!!」

メリオダス「サンキュー、ミリカ!!」

悟空（界王拳ブルー）「良し：：行くぞ!!!」

と、最大治癒（メガホイル）で全快したメンバー達が

そう言いながら戦闘態勢をとると：：『new page』

「シユンシユンシユンシユン!!!」

ぬらりひよん「その意気だ!みんな!!」

ウイス「その通りでくす!!オホホホ!!」

エンマ大王「俺達も混ぜらせてもらうぜ!!」

破壊神ビルス「今回ばかりはボクも高みの見物という訳には行かな

ラー・カイン「フフフ… 来い、虫ケラ共よ…!!!」
と、グラン・ゲインズのメンバーはアクアの号令で!!!

ラー・カインへと攻撃を仕掛けていった。「new page」

メリオダス「長引けばこっちが不利だぜ。奴が余裕をかましてる内に

に
一気に仕留めるぜ!!頼むぞみんな!!!!!!

バン「了々解♪バニシングギル!!」

エスカノール「この私を前に余裕をかます等… おこがましい!!

無慈悲な太陽（クルーエル・サン）」

マリーリン「殲滅の光（エクスターミネイトレイ）」

グロキシニア「あつしらも行きますかドロール君!!

「霊槍バスキアス」第九形態「死荊（デスソーン）」

ドロール「落山（ギガ・フォール）」

キング「オイラ達の修行の成果をここで見せる!!

真・霊槍シャステイフォル第六形態「神樹の衣（ユグドラ

クロス）」

ディアンヌ「ドロールの舞!!!!」

ゴウセル「幻影庭園（カレイドスコープ）」

「シューーーーーーシューーン…!!!!!!」

キング・ディアンヌ・ゴウセル

「三位一体合技（トリニティアタック）・怒濤の乱撃（ハイテンション・ラッシュユ）」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

ラー・カイン「フツ… 愚かな。『聖なる重力壁（ラー・グラビテイ）』」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!」

と、ラー・カインはそう言いながら『聖なる重力壁（ラー・グラビテイ）』と

呼ばれる闘圧で重力場を形成して防御壁を作り出し、
メリオダス達の攻撃を相殺した。その後…「new page」

デイエンド「土!!」

デイケイド「ああ!!俺達も行くぞ!!」

電子音「FINAL ATTACK RIDE DEDDEDDEC
EDE!!!」

電子音「FINAL ATTACK RIDE DEDDEDDEE
ND!!!」

キュアアーンヴァル「あたし達も始めから全力よ!!」

プリキュア・マテリアルフォースバースト!!」

キュアサタン「プリキュア・アンガーブラスト!!」

キュアエターナル「プリキュア・エターナルブレス!!」

キュアベルゼブ「プリキュア・ゲシュタルトグラインド」

キュアベルフェゴール「プリキュア・ベルフェゴールソング」

キュアマモン「プリキュア・マモンハンド」

キュアフリーダム「プリキュア・ワームホールスラッシュャー!!」

キュアレヴィアタン「プリキュア・バイラスブレス!!」

キュアアスモデウス「プリキュア・スレイブアロー!!」

キュアルシファー「プリキュア・パラドックスエンドバースト」

キュアストラーフ「プリキュア・グラビドンスラッシュユ!!」

キュアレーネ「プリキュア・エアロブラスト!!」

キュアアイネス「プリキュア・サウンドバズーカ!!」

キュアジャステイス「ジャステイス・アイアン!!」

ラピス「ラピス!ハイパー・ドツカーン!!」

アンズ「ハットリ流忍術奥義... 風間手裏剣!!」

リータ「サテライトバスター... ローリングファイヤ!!」

さくら「火焰(ブレイズ)!!」

小狼「火神招来!!」

鬼太郎「体内電気!!」

ねこ娘「ウニャー...!!!乱れ引つ掻き!!!」

子泣き爺「ふぎや...!!!石化落下」

砂かけ婆「これでも喰らえい!!!砂かけマシンガン!!」

一反木綿「行くば...!!もめん切り!!」

乗り切れることが証明されました

ね!!」

レジーナ（パルテノンモード）「シンが戻ってきたら、褒めてもらおうと!!」

キュアソード（パルテノンモード）「ちよつとレジーナ!! 抜け駆けはダメよ!!」

キュアダイヤモンド（パルテノンモード）「頑張ったのは

あなただけじゃないでしょ

？」

キュアエース（パルテノンモード）「そうですわよ!!!」

レジーナ（パルテノンモード）「何よ! みんなして!!!」

キュアプリンセスIF（身勝手の極意）「龍斗!! ゴツガ!!」

フォーエバーラブラー（身勝手の極意）「お疲れ様!!!」

龍斗（超サイヤ人パープル）「おう!!」

ゴウガ（超サイヤ人パープル）「ざつとこんなもんよ!!」

キュアテンダーIF（身勝手の極意）「ホウちゃんもお疲れ様!!」

ラン「コナンも!!」

コナン「…うん。」

ガルダ（超サイヤ人パープル）「…ああ。」

サトシ「どうしたコナン？」

セレナ「ガルダ君も…？」

デイド「…やっぱりあいつらも感じているみたいだな。」

アクア（このすば）「何が？」

ゼロライザー「アクアさん…。」

アクア「ええ…あのラー・カインにしては

やけにあっさりしすぎているわね。」

ウイス「うーん…私もそう思いますねえ。」

破壊神ビルス「嫌な予感がするな…。」

ケロベロス「まさかまた偽物なんてことは無いんやろうな？」

悟空（界王拳ブルー）「ハツハツハツ!! 考えすぎだぜアクアにビルス

様!!」

んですがね。」

ぬらりひよん「そんな一撃を受けても平然としているとは……。」

エンマ大王「く……くそつ!!!化け物め……!!!」

ラン「コ……コナン……!!!」

コナン「す……済まねえラン……やっぱり、今の俺達が

敵う相手じゃなかったみたいだ……。」

サトシ「くっそ……!!!」

フォーエバーラブリー（身勝手の極意）「そ……そんな……。」

龍斗（超サイヤ人パープル）「あ……あんな野郎、初めてだぜ……。」

デイド「俺もだ。こりや、厄介なんてもんじゃないな。」

ゴウセル「だが、どういう事だ？今でも奴の生体反応はない。」

マーリン「何……!!!ま……まさか……そう言う事か……!!!」

さくら「マーリンさん……？」

ケロベロス「どないしたんや？」

アクア「……ルウエスの時と同じね。『感じない』じゃなく、

『感じる』ができない』のよ!!!」

ラー・カイン「その通りだ……そして残念だったな虫ケラ共……。」

今、余が纏っているのは『聖王破光（ラー・シャイ

ン）……』

お前達にもわかりやすく言うなら、破壊神の力など

足元にも及ばぬもの……といったところだ。

そして、この力は余が意図的に威力を下げない限り、

お前達如きが感知する事さえ敵わぬ領域なのだ。フ

フフ……」

「ブウウウウウウウー……!!!」

と、ラー・カインはそう言いながら前方に闘圧で形成された

エネルギー弾を発生させると……「new page」

破壊神ビルス「不味い！ウイス!!」

ウイス「はい!!!」

超レガリア・超魔神ランティス「サイコ・フィールド!!!」

マーリン「完全なる立方体（パーフェクトキューブ）!!!」

!!!」

龍神ピカチュウ『サ… サトシ…』

「シューーーーーー！！！！ン…。」

サトシ「ピカチュウ!!!」

ラン「あたしのピカチュウ!!!」

コナン「ル… ルカリオ… 俺達を庇って…。」

と、コナン達を庇い大ダメージを受けた手持ちポケモン達は、力を使い果たし、ポケモンボールの中に強制的に戻っていった。

ラー・カイン「ほう… 見上げたものだな。とっさにバリアを展開していたとはいえ、

誰も死んでいないとはな… それだけでも確かにお前達は

格段に進歩したな。褒めてやるぞ… だが… これで最後だ。」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「シューーーーーー！！！！ン…。」

超巨大ゲート「… … … … …。」

と、ラー・カインがそういうと、突如、凄まじい闘圧が辺り一帯を覆い、上空に超巨大なゲートが出現すると、

その穴から不気味な白銀色の光が発生した。「new page」

「ブウウウウウウウー… … … … …。」

デイド「な… 何だあれは… ?」

バン「じよ… 冗談だろオイ…。」

光「あ… あれって… バイキンシヨツカーとの戦いで出てきた…。」

マサト「あの兵器か… … … … …。」

マーリン「くっ… … … … …。」

アクア「あ… あれを防ぐなんて… … … … … 今の私達には… … … … … できない… … … … …。」

ガルダ「… (せめて『あの力』が使えれば… … … … … だが、あれの封印は大神官様にしか解くことはできない… … … … … 打つ手なしか… … … … …)」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

大神官「ごきげんよう、グラン・ゲインズの皆さん。ご健勝で何よりです。」

ベジータ「なっ!!!!!!」

悟空「いいっ!!!!!!」

ぬらりひよん「だ……大王様!!」

エンマ大王「マ……マジかよ……こんな所に来るなんてな……」

ウイス「オホホホ……お久しぶりですぬえ!!! 父上!!!」

破壊神ビルス「だ……だ……大神官様!!!」

と、ビルスは慌てふためきながら大神官!!!!!にお辞儀をした。

大神官「ああ、戦闘中ですからそうかしこまらずに。」

破壊神ビルス「は……はい……しかし、大神官様……」

このような所までどういったご用件でしょうか?

キング「あ……あのビルス様が、あんなに慌てふためくなんて……」

ディアアンヌ「あの大神官って人、ものすごく偉いんだね!!」

メリオダス「まつ、俺も初めてみたけどな。」

ウイス「ちなみに……私の父上でもあるんですがね、オホホホホ

!!!」

ひかる「ひよえ!? そうなの!?!」

ラー・カイン「フフフ……久しいな大神官よ。」

だが、その虫ケラの言う通り何しに来たのだ?

まさか、ギガデウス一派の足元にも及ばんお前如きが

余と勝負するとしても言うつもりではあるまいな? フ

フフ……」

破壊神ビルス「き……貴様……大神官様に向かって……」

大神官「ああ、良いんですよ。それは事実ですし。!!!!!!」

ですからその代わりに……鳳凰ガルダさんというのはあな

たですか?」

ガルダ「そうだが……アンタはこの次元の大神官様なのか?」

大神官「はい。あなたの次元の私から頼まれごとがありますね。」

龍斗「頼まれごと?」

ウイス 『超サイヤ人5』… ですか。素晴らしい!!!」
ガルダ (超サイヤ人5) 「ありがとうな、大神官様。」

これでようやく俺も思う存分戦えるぜ!!!」

大神官 「それは良かったです。後は任せましたよガルダさん、
そしてグラン・ゲインズの皆さん!!!」

龍斗 「おう!!任せとけ!!!」

ゴウガ 「さつきは助かったぜ!!そっちの全王様にも礼を言つといてくれ!!」

大神官 「… はて?何の事でしょうか?」

コナン 「え?」

鬼太郎 「な… 何の事って…」

安 「聖なる巨光 (ラー・バルス) の攻撃からあたし達を助けてくれた事ですよ!!」

マーリン 「あれは全王殿の力なのだろう?」

大神官 「… と言われましたも、全王様はただいま

お休みされてるはずですので…

それに全王様はこの戦いには

介入されないと申しておられましたから。」

悟空 「いいっ!!!本当か大神官様!!!」

ベジータ 「な… 何… だと?」

龍斗 「お… おいおい…。」

ゴウガ 「じゃ… じゃあさっきの攻撃は誰がやったんだよ!」

マナ 「ア… アクアさん…。」

アクア 「… ともんでもなく嫌な予感がするわね…。」

でも、今は気にしている場合じゃないわ…

戦いが始まるわよ!!」

ラー・カイン 「成程… どうやら、ただの虫ケラではなさそうだな。

良かろう… 来るがいい!!!」

ガルダ (超サイヤ人5) 「俺が虫ケラかどうか… お前の体で確かめ

てみる!!!」

と、大神官が封印を解いたおかげで『超サイヤ人5』となったガル

なり、

ラー・カインへと再度、挑んでいくのであった。

果たしてその実力とは……？そして、戦いの行方は……？

更に、裏でうごめく『??』の陰謀とは……？

いよいよクライマックスへと向かう

『聖なる最終戦争（ラー・アルファゲドン）』…

どのような結末が彼らを待ち受けているのであろうか？

それでは次回も…刮目せよ!!!」

第66話　く動き出した聖王　く　完　く

!!!

まりあ「そうよ!!ホウちゃんは絶対に負けない!!」

ナミ「頼んだわよデュード!!!」

デュード(B・Dシステム)「任せとけ!!行くぞガルダ!!」

ガルダ(超サイヤ人5身勝手)「ああ!!これで終わらせてやる!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ガルダとデュードはそう言いながらラー・カインへと攻撃を仕掛けていった。

ラー・カイン(聖王化)「愚かな… 『聖王闘圧(ラー・プレッシャー)』」

「ズドブオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

デュード(B・Dシステム)「うおおおおおおおおおおおおおお!!!?」

ガルダ(超サイヤ人5身勝手)「ぐああああああああああああ!!!」

メンバー一同「うわああああああああああああ!!!」

と、ラー・カインは『聖王闘圧(ラー・プレッシャー)』を発動させると、

デュードとガルダ、そしてグラン・ゲインズのメンバー全員を押し潰していった。そして…

ラー・カイン(聖王化)「終わりだ… 虫ケラ共…。」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

と、ラー・カインは更に『聖王領域(ラー・サンクチュアリ)』と

『聖王破光(ラー・シャイン)』を発動させると、必殺技の発射態勢をとる。

マナ「あ… が…。」

鬼太郎「ぐ… あ…。」

悟空「い… ぎぎ…。」

龍斗「ま… 不味すぎだぜ… これ…。」

アキラ「く… ううう…。」

ラー・カイン(聖王化)「滅びよ… 『聖王螺旋砲(ラー・スパイラルキャノン)』」

「ドオウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ラー・カインはそう言いながら、必殺技である

俺が弱かったばかりに……)」

安「……(あ……あたし達に……もつと力があつたなら……)」

メリオダス「……(また……あのクソ親父の所にいかなきゃならねえのかよ……)」

悟空「……(チチ……悟飯……悟天……悪い……オラ……また死んじまうかもしれねえ……)」

マナ「……(や……やっぱり……)」

アクア「……(い……今の私達が……勝てる相手じゃなかったの……)」

まりあ「……(ホ……ホウちゃん……)」

アクア(このすば)「……(デ……デイド……)」

凱「……(こ……このままじゃ……みんなが……)」

龍斗「……(や……は……やられちまうぜ……)」

デイド「……っ!!!そ……そんな事……!!!」

ガルダ「させるかああああああああ!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ラー・カイン(聖王化)「何……?」

と、メンバー達が死の危機に直面しようとしたその時、

デイドとガルダの体が輝き始めて、

デイドはB・Dシステムの強化形態『キングドライブモード』、

ガルダは再び超サイヤ人5身勝手に変身した後、

ガルダの中に潜んでいた『サイコー』の人格が表に現れて

『ガルダサイコー』へとそれぞれ進化を果たした!!「new page」

「シュー……」

デイド(キングドライブモード)「これが……俺達の全てだ!!!」

ガルダサイコー(超サイヤ人5身勝手)「俺様の名はサイコー……!!」

覚えておけ!!!」

ソニック「……(デイド……お前……)」

ゴウガ「……(あ……あのガルダは……あの時の奴か……!!!)」

ラー・カイン(聖王化)「何だその姿は……フッフ、まあ良い。」

ガルダザイコー（超サイヤ人5身勝手）「ああ…『コイツ』も恵まれているな。

さすがは俺様の後継者だ。だったら意地でも負けられねえな!!!!

デイド（キングドライブモード）・ガルダザイコー（超サイヤ人5身勝手）

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ラー・カイン（聖王化）「な…何だと!!!」

と、メンバー達みんなの思いを受けたデイドとガルダザイコーは更にパワーを限界以上に引き出して、!!

『聖王極大巨光(ラ!・アトミックバルス)』の光を完全に押し戻すと!!

「new page」!!!

ガルダザイコー（超サイヤ人5身勝手）「くたばれラー・カイン!!!」

デイド（キングドライブモード）「これが俺達の…結束の力だ!!!!」

!!!デイド（キングドライブモード）・ガルダザイコー（超サイヤ人5

身勝手）

「キングフェニックス…ボルテツカアアアアアアアアアアア

ア!!!」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

超巨大ゲート「」

「シューーーーーー……」

?ラー・カイン（聖王化）「うおおおおおおおおおおお!!!」

「!!!!」

「バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ

!!!!」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ン!!!!

と、デイドとラルダザイコーの技が一つとなり、

『キングフェニックスボルテツカ』となって、

メンバーのダメージを回復させた。「new page」

ラピス「よっしやああああああああああ!!!」

真琴「だいぶ楽になったわ!!!」

ノヴァ「ありがとうアクア!!!」

アクア（このすば）「フフン…感謝しなさい!!!」

ナミ「アンタじゃないでしょ!!!」

「パコン!!」

と、アクアのポケにツツコミをいれるナミ。

「シューーーーーー…」

デイド「へへツ…やっぱりこうでなくちやな!!」

ガルダザイコー「フツ…それじゃ俺様は限界だからお役御免とさ

せてもらうぜ!!」

と、ガルダザイコーはそう言いながら人格を元のガルダと入れ替わった。「new page」

ガルダ「またお前の手を借りちまったなザイコー…」

まりあ「やったねホウちゃん!!!」

いおな「かつこよかつたよ!!!」

悟空「凄かったなオメエ!!特に最後の方はよ!!」

ベジータ「貴様…あれは一体、何だ!!!」

ガルダ「話せば長くなるから、また今度教えてやるよ。」

特に悟空さんにはな。」

ゴウガ「あーあ…結局お前がおいしいところを持っていったな。」

ひめ「ボヤかないのゴウガ!!」

めぐみ「これで終わったんだね…」

龍斗「けどよ…アイツはまだ生きてるみたいだけど、どうすんだ?」

セレナ「でもその前に…」

カイト「どうすんだこの状況…」

と、戦闘で大部分が滅ぼされ、世界の終わりのような状況となっていた

第5世界を見て、メンバー達は困惑していた。「new page」

光「こうなったのも…全部アイツのせいだ!!!!!!」

ナツメ「お…お父さん…お母さん…みんな…」
なぎさ「アンタ…あたし達の世界を返してよおおおおお!!!!!!」
零「……………」

と、大切なものを奪われた第5世界組のメンバーは
怒りと悲しみを露わにした。

鬼太郎「みんな…」

ねこ娘「やっぱり、あぁなつちやうわよね…」

さくら「あたし達の世界も、バイキンショットカーとの戦いで

一度、無くなっちゃったから…」

マナ「その気持ち…凄くわかるよ…」

大神官「ご心配には及びません。この世界なら『超ドラゴンボール』
で

元通りにして差し上げますよ。」

ほのか「超ドラゴンボールってあの…?」

刻「何でも願いが叶うとかいう球の事かよ?」

ウイス「ええ。あなた方はラー・カインを打倒した功労者ですから、

全王様もわかってくださいますよ。」

海「そ…それじゃ…本当に…?」

アキノリ「この世界は元に戻るんげな!!」

風「あ…ありがとうございます!!!」

ぬらりひよん「良かったな君達…!!だがその前に、大王様…」

エンマ大王「ああ…落とし前をつけなきゃな!!!!」

ビルス「覚悟は良いな?ラー・カイン…」

今のお前ならば今度こそ破壊できるぞ。」

「ブウウウウウウウウウウウウー…」

と、ビルスはそう言いながら右手をかざすと、
!!!!!!!

破壊エネルギー弾を形成した。

ひかる「ウサギさん…」

士「やれやれ…やつと仕事をする気になったようだな。」

安「これで…本当に終わるんですね…」

ソニック「下っ端じゃねえか!!」

コレット「まさか、たった一人で私達と戦うつもりかしら?」

海東「いや、さすがにそれは考えにくいだろうね。という事は…

ラー・カインを逃がすつもりなのかもしれないよ?」

ジン「何だと!!!」

誠司「そんな事させるかよ!!!!!!」

ラー・カイン「フ…フフ!!… 言ったであろう…」

切り札は最後まで取っておくものだな…。

今回は余の敗北を認めてやろう…

だが覚えているがいい、虫ケラ共よ…

余は必ずまたこの世界へと戻ってくる…

その時こそ、余の悲願を成就させて見せようぞ…」

ぬらりひよん「ラー・カイン!!!」

エンマ大王「お前… その為にデュークを残したのか!!!!!!」

土「やれやれ… まさか、自分が負けることまで想定していたとは

な。」

ラー・カイン「フフフ… ハハハハハ… さあ、デュークよ…

撤退するぞ…」

デューク「かしこまりました、ラー・カイン様!!… では…。」

コナン「逃がすかよ!!! 龍斗兄ちゃん!!!!」

龍斗「おう!! 任せろ!!!」

アクア「みんな、撤退を何としても阻止して!!!!!!」

一同「了解!!!」?

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、ラー・カインとデュークの撤退を阻止しようと

メンバー達が一斉に向かっていったその時… 「n e w p a g e」

「ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ラー・カイン「ああああああああああああ!!!」

メンバー一同「!!!」

デューク「なあって言うと思っただんですかあ〜? とんだバカです

ねえ…

第68話 　　↳ 惨劇… グラン・ゲインズ最大の危機

!!

↳

↳ 次元の狭間 　　↳

バイエルン「…ん？」

アルト「どうした？バイエルン。」

レイス「どうやら、彼らがラー・カインを倒したようだね。」

進之介「本当!? 凄いなみんな… それじゃ、第5世界は!!」

バイエルン「いや… 事態は更に悪い方向へと進んだようだ。」

進之介「どういう事…？」

レイス「…デューク君か。」

バイエルン「そうだ。ラー・カインが敗北したことで、

ついに正体を表したようだな。」

アルト「正体だと？確かに奴は親衛隊（ホワイトナイツ）の中でも
異質な存在だったようだが、僕等が気にする程ではないだろ
う？」

レイス「… どうやら急いだほうがよさそうだね。」

バイエルン「ああ。このままでは第5世界はおろか、

次元大戦の世界全てが滅ぶかもしれん。」

進之介「ええ!? それってどういう…。」

アルト「フン… そういう事か。おい、失敗作!!」

着いたら早々、大仕事をやることになりそうだぞ。心してお
け!!」

レイス「その通りだね。我が主… 君が『次元の王の後継者』とし
ての

資質を示すのにこれ以上ない舞台になりそうだよ。フッフ
!!!」

進之介「あの… 喜んでる場合じゃないと思うんだけど…」

バイエルン「フツ… 我々が到着するまでに彼らや世界が

生き残っていることを祈るとしよう。」

ラン「うん」

サトシ「どうみてもただのゲスにしか見えないぜ」

ありす「でも、皇位継承者ということは、立場的には

ものすごく偉いはずですよね…?」

真琴「何でそんな奴が…。」

ねこ娘「わざわざラー・カインを生み出して部下なんかになっていたの?」

シャナ「それにアイツの目的は何なの…?」

亜久里「全部答えていただきますわよ!!」

ジャックハルト「あなた方4流如きに答える筋合いなど微塵もありませんがねえ…」

まあ、良いでしょう。ヒマつぶしに教えて差し上げましょう!!

更に耳を深く深く深くかっ!!ぼじってよ〜

くつつつく
!!!!!!!

聞いてくださいねえ〜

まず最初の質問ですが… 私がこのバカ人形を

生み出した理由は二つあります!!!

一つはこの私が動きやすくする為…

いわゆる影武者という奴です!!」

士「影武者だと…?」

海東「成程… 確かに皇位継承者ともなれば、

周りからのマークは厳しくなるだろうからね。」

平家「ですから、それなりの力を持つラー・カインを生み出すことで

周りの目をそちらへ引き付けて自らは

親衛隊（ホワイトナイツ）デュークとして暗躍していた… ということですか。」

トランクス「しかし… これ程の戦力を持っているのなら、

わざわざそんなことをしなくても良さそうな気はするんですが…。」

マーリン「いや…この次元でラー・カインよりも強力な勢力があるとするば…。」

メリオダス「…ギガデウス一派か!!!」

ジャックハルト「その通りです。この次元に来た当初の私達が

ギガデウス一派と正面から戦うのは中々厳しいと

思いましたからねえ…そこで私はこのバカ人形

を生み出して

『三將軍（ゼネラーレ）ラー・カイン』として仕立て上

げ、

まずはこの次元の様々な時間軸を巡り、力を蓄えて

いきました。」

マイ「様々な時間軸を巡り…という事は!？」

トランクス「俺達の世界を襲ったのは貴様の差し金だったのか!!!」

ウイス「そしてあなたはそこで『全王様の力』を手に入れたわけ!

すね。」

ビルス「姑息な奴め…!!!」

と、そこへ吹き飛ばされたビルス達が姿を現した。「new p

age」

ひかる「ウサギさん!!ウイスさん!!」

ララ「無事だったルン!!」

ビルス「自分の技でやられるほど間抜けじゃないぞ…。」

大神官「ところで…その時間軸の全王様はどうなったのでしょうか?

か?

それに多分、私もいたと思いますが…。」

ジャックハルト「ああ…その時間軸のあなたならこの私が

ケチヨンケチヨンにして差し上げましたよ!!

所詮はギガデウス一派の足元にも及ばないザコで

したしね!!

そして、全王は力を奪い取った後、

あなた諸共消して差し上げましたよ。力さえ奪っ

てしまえば

ソニック「ま……まさかデイド……。」

凱「あれを使うつもりか……？」

ねね「でも……もうそれしか手はないわね……!!!」

コレット「最後に私達の意地を……。」

アキラ（このすば）「そ……そうね……見せてあげるわ!!!!」

デイド「それじゃみんな……行くぞ!!『ファイナル……フュー

ジョン』!!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、デイドがそう合図をすると、B・D・Sのメンバー全員が

眩い光を放ちながら光の結晶体になって融合すると、

光のドラゴンのような容姿の最終形態『ゴッドドラゴン』へと変化

を果たした。「new page」

「シュー……シュー……シュー……。」

デイド（ゴッドドラゴン）「これが……俺達の切り札だ!!!!!!」

ベジータ「あ……あいつ等……。」

バン「まだ……あんなモンを持つていたのかよ……。」

ゆづき「す……凄い……!!!!」

鈴音「これなら……いけるか……!!!」

ジャックハルト「ほ……う……楽しませてくれるじゃありませんかあ

!!!!!!
ではお手並み拝見と行きましょう……行けえええ

えええ!!!!」

ガルダザイコー（超サイヤ人5身勝手）×100「死ね」

デイド（キングドライブモード）×100「くたばれ」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

と、ジャックハルトの合図でガルダザイコーとデイドの鏡像は

一斉にゴッドドラゴンに襲い掛かるが……!!!!!!

デイド（ゴッドドラゴン）「シャインブレイド!!!!」

「ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

ガルダザイコー（超サイヤ人5身勝手）×100「ぐあああああ

ああああ!!!!」

マサト「し……進之介君!!!!」

悟空「へへっ……!!!」

メリオダス「待ってたぜ……王様!!!!」

アクア「あ……あああ……良かった……」

マナ「シー……!!!」

と、進之介の姿を見たメンバー達は一斉に喜びを爆発させた。そして……

鬼太郎「シン!!」

さくら「シンさん!!!」

亜久里「シン様ああああああああああ!!!!!!」

レジーナ「お……おがえりい……!!!!!!」

真琴「もう……遅いんだから!!!」

六花「どうしていつもこんな夕イミングなのよ……!!!!」

ありす「まあまあ……良いじゃないですか!!」

と、他のドキプリメンバーや鬼太郎達が進之介のもとへと駆け寄ってくる。

マナ「シン……シン……」

アクア「ううう……でも……ラピス達が……ラピス達が……」

進之介「ラピス達が……?そうか……ごめん、

やっぱり間に合わなかったみたいだね。でも……」

「シュー……」

ジャックハルト・イデア「フッフ……やっと来ましたよ!!」

之介君……

待ちくたびれましたよお!!!!!!」

と、吹き飛ばされていたジャックハルト・イデアはそう言いながら

再びメンバー達の前に姿を現した。「new page」

ビルス「あ……あの野郎……」

エンマ大王「……くっ!!!」

レイス「我が主……喜ばしい再会だが、今は……」

進之介「うん、わかつてる。」

ごめんミリカ……マナ……みんな……離れてて。

新たな形態『ラグナエクス・HI（ハイ）』へと変身すると、
ラー・カインと同化を果たしたジャックハルト・イデアとの
最終決戦の火蓋が切って降ろされようとしていた。

果たして我が主は見事に勝利し、倍返しを成し遂げることが
できるのだろうか・・・？そして、『次元大戦の世界』の運命

は・・・？

いよいよ大詰めを迎える『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲ
ドン）』編

それでは次回も・・・刮目せよ！！！！！！
！！！！！！

第68話　　～ 惨劇・・・グラン・ゲインズ最大の危機！！　　～

完　　～

と、ラグナエクスHIはそう言いながらまたもラグナロクⅢを一閃すると、

再び青色の閃光が放たれてデイド（ゴッドドラゴン）（鏡像）残り50体を

一瞬で撃破し、ジャックハルト・イデアに又もダメージを与えた。

「new page」

龍斗「ま……ただぜ……。」

いおな「ていうか、あれだけの数のゴッドドラゴンをも倒したの」

ねね「何なの？このあっけなさは」

ソニック「心配して損したぜ」

ゴウガ「やっぱり世界は広いぜ…… あんな次元を超える怪物がゴロゴロいるとはよ。」

ベジータ「どうなってやがる……？」

トランクス「斬ったというより、ただ剣を振るったようにしか見えませんが……。」

悟空「相変わらず訳わかんねえなあ、アイツの力…… いい意味でだけだよ!!」

大神官「ほう…… そういう事ですか。」

ウイス「ええ…… あの斬撃…… つい最近見た覚えがあります。」

ビルス「お前達…… 覚えてないのか？」

あの『デアボリス』を叩きのめした『あの男』の斬撃をな!!

真琴「…… あっ!!!」

バン「あのバケモン野郎か!!!」

メリオダス「そーいやあ、あいつの斬撃と今のシンの斬撃…… どこか似てるな!!」

めぐみ「ねえ…… そのアイツって誰なの？」

コナン「そんなに凄い人なの？」

マーリン「まあ…… その男の存在はまだ知らないほうが良いだろうな。」

アルト「フン…… 下手したらソイツの話聞いただけで

シヨック死するかもしれんからな。」

バイエルン「君達がこれから先、それなりに成長したならば

いずれ聞かせてやろう。」

セレナ「何か……あまり聞きたくないわね」

ジン「ああ」

アキラ「少なくとも……今の俺達ではその男の爪の垢にも

及ばないというのは間違いないだろうな」

ジャックハルト・イデア「フッフ、成程……今のあなたの斬撃……

『次元斬絶（ファルシオン）』ですか。」

ほのか「えっ?」

ねこ娘「次元……斬絶（ファル……シオン）?」

シヤナ「何なのそれ?」

レイス「説明しよう。次元斬絶（ファルシオン）とは

次元ごと絶ち斬る他、因果律・物理・質量等、

ありとあらゆる法則を無視して攻撃できるスーパースキル

さ。

会得すれば今のよう物理的な攻撃を難なく消滅させる

月光蝶ですら容易く斬ることができる。」

トウマ「簡単に言えば、斬れないものはこの世からなくなるという

事ですか。」

アキノリ「す……凄え!!!」

ジャックハルト・イデア「フッフ……ですが、まだ会得したばかり

なのか、

威力はさほどでもありませんねえ!!

まあ、先程の4龍戦士共の鏡像でしたら

それで充分だったのでしようが、

私には大した問題ではありませんねえ!!

ヒハハハハハハ!!!」

龍斗「あんのゲス野郎……!!!」

デイード「好き放題言いやがって……!!!」

ラグナエクスHI「だったら、これで!!『次元斬絶（ファルシオン）』

多元宇宙を構成している物質でこの平行次元に

存在する宇宙とは比較にならない程の強大なパワーを

秘めているんですよおっ!!おかげでバカ人形の力も

この通り・・・今の私は無敵の超人どころではないのです!!

さあ・・・4流ゲインズのみなさん、覚悟は良いですかあ〜?」

マーリン「ダークマター・・・だと?」

レジーナ「それに・・・多元宇宙って何なのよ?」

デイド「聞いたことがあるな・・・確か・・・。」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ゴウガ(超サイヤ人パープル)「多元宇宙だか何だか知らねえけど、

上等じゃねえか!!」

龍斗(超サイヤ人パープル)「そんな脅しに乗るかよ!!」

ガルダ(超サイヤ人5身勝手)「片付けてやる!!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

まりあ「ホウちゃん!!」

めぐみ「龍斗!!ゴウガ!!」

レイス「君達、待ちたまえ!!!」

と、龍斗達はジャックハルト!!アイデアに立ち向かっていくが・・・「n

ewpage」

ジャックハルト・アイデア(聖王化∞)

「ゴミ虫共め・・・気安く近づいたら潰しちやいますよ?ホイ!!」

「ピン・・・!!」「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

龍斗(超サイヤ人パープル)「なっ・・・ぎゃあああああああああ

ああ!!!」

ゴウガ(超サイヤ人パープル)「げあああああああああああ

ああ!!!?」

ガルダ(超サイヤ人5身勝手)「ごあああああああああああ

ああ!!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

アキノリ「こりや、ヤバすぎるぜ!!」

ジャックハルト・イデア（聖王化∞）

「ヒハハハハハハハハハハ!!!!そう悲観することはありませんよ!!

私が強くなりすぎただけですからねえ!!

ですが… あなたの力も素晴らしかったですよおっ!!

ヴォルクルスに情報を流して次元の狭間に

封印させた甲斐があったというものです!!」

マーリン「やはり、あの時にヴォルクルスが現れたのは奴の仕業
だったのか。」

バン「くそつたれが…!!!」

ジャックハルト・イデア（聖王化∞）

「ただ… 正直な話、一つ問題が発生しましてねえ…:

あなたを次元の狭間に封印したのは良かったんですが、

どうやって解放するかまではまっつたく考えていなくてです

ねえ…:

どうしたものかと悩んでいましたら…:

まさか、あの『史上最強の化け物』が

介入してくるとは思いもしませんでしたよおっ、

ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハ!!!!」[new page]

鬼太郎「史上最強の化け物…?!!!!

メリオダス「それってまさか…!!!!」

士「…『闇黒神キングダーク』の事か!?!」

ジャックハルト・イデア（聖王化∞）

「ええ…:その通り…:まさかあのバイキン何某が

この次元に介入して次元の王の力を狙いだしたと

聞いた時はどうしようかとヒヤヒヤしましたよおっ!!

何せ奴らの戦力はあのギガデウス一派すら

比較対象にもならない史上最悪の化け物軍団…:

幾ら私でも奴らと真面にやりあっては勝ち目は有りませんから

ねえ…:

あの時にバイキン何某と正面から戦うのは流石にリスクが大きす

ない!!!!!!
」

と!!ラグナエクスHIはそう言いながら何とか立ち上がった。

六花「シン!!」

ねこ娘「いくらアンタでも...もうアイツに勝つのは...。」

ジャックハルト・イデア!!(聖王化∞)

「ヒハハハハハハハハハ!!!!それでこそです!!」

ではそんなあなたに敬意を表して...この世界が生き残る

ラストチャンスを与えましょう!!複製鏡(ミラー・ヴァイス) ∞
!!!!!!!

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー。」

デアボリス(フルパワー)(鏡像)「.....。」

ランギク(フルパワー)(鏡像)「.....。」

ネビュリア(フルパワー)(鏡像)「.....。」

ゴウメイズルー(鏡像)「.....。」

アンチノン(鏡像)「.....。」

パンツアード(鏡像)「.....。」

と、ジャックハルト・イデアは複製鏡(ミラー・ヴァイス) ∞を発動させると、

何と、デアボリス達バイキンショットカー軍団が姿を現した。「ne
w page」

悟空「いいいいいいいいいいいつ!!!!!!?」

ベジータ「な...何だとおおおおおおおおおおお!!!!!!?」

メリオダス「何で...あいつ等が!!!!!!」

海東「土...。」
!!!!!!

士「不味過ぎるな...これは...。」

ビルス「おいウイス、これはどういう事だ!?!」

ウイス「おそらく...あの戦いで姿を現した時に

彼らの戦闘を見ていたのでしよう。

ですがまさか...ここで召喚してくるとは...。」

龍斗「な...何だよ!?!あの化け物共は!!!!!!」

コナン「確か、シン兄ちゃん達が戦った

バイキンショットカーって組織の奴らだよね...。」

「ドサドサツ!!!」

く テツカマンブレードの宇宙 く

「シユウウウウウウウウウウ!!!」

ラダム獣「キシヤアアアアアアアアアア!!!?」

テツカマンブレード「な… 何だこれは!!? うも…!!!?」

アキ「デ… D… ボウイ…」

ノアル「せ… 世界の終わりだとしても… 言うのかよ…」

テツカマンエビル「お… おのれ… 兄さんを殺すのは… 僕…

だ…」

「ドサドサツ!!!」

く ファイオーレ王国 く

王国の人々「ぎやああああああああ!!!」

ウエンデイ「そ… そんな…」

シャルル「ウ… ウエン… デイ…」

エルザ「み… みんな… な… しつ… かり…」

グレイ「く… くっそお…」

ハツピー「ナ… ナツウ…」

ルーシイ「く… くる… しい… おげええええええ!!!」

ナツ「ル… ルーシイ… ハツ… ピー… みんな… な…」

「ドサドサドサドサツ!!!」

と、第3世界や他の世界にも『∞・ナノマシン』が散布されると、世界を崩壊させながら、次々と人々や共に戦った仲間が倒れていった。「new page」

マナ「い… 嫌ああああああああああ!!!」

鬼太郎「森のみんなああああああああ!!!」

さくら「あ… あ… お… お兄ちゃん… お父さん…」

ケロベロス「ユエ!!!」

バン「エレイイイイイイイイイイイ!!!?」

キング「お… 王国の… みんなが…!!!?」

出現させた。「new page」

キョウガ（思念体）「おい teme エ… それをコイツに渡すのは

さすがにまだ早すぎんじゃねえのか？」

シン・ザ・バーネット（思念体）「確かに。だが… グランバニアの小娘が

呼んでいるようだから。もう一人の我よ…

これはお前が『真の次元特異点』となる為の力だ。これを手にした瞬間… お前は『次元

大戦の世界』の

歴史全てを背負う事となるだろう。

その覚悟はあるか？」

進之介「ある!!! 次元の王!! その力を僕に与えて!!」

キョウガ（思念体）「ハーーーーーッハッハッハッ!!! 即答だな
オイ!!」

さすがは俺様がちったあ見込んだ野郎だぜ!!」

シン・ザ・バーネット（思念体）「フン… 聞くだけ無駄だったか。
良からう…!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
「シューーーーーーッ…。」

と、シン・ザ・バーネットはそう言いながら『次元特異点』の力を
進之介に与えた。すると、進之介の体からピンク色の光が放たれ
た。「new page」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

進之介「す… 凄い… 力が漲る!! これが『次元特異点』の力…。」
キョウガ（思念体）「おいクソガキ!! 一つ言つとくがよ、

そいつはまだ teme エには過ぎた力だ!! だが…

それを使えたなら、俺様もちったあ teme エの力を認
めてやるぜ。」

シン・ザ・バーネット（思念体）「無意味だが、お前の信念とやらを

ネビュリア (フルパワー) (鏡像)・ゴウメイズルー (鏡像)
アンチノン (鏡像)・パンツアード (鏡像)

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ジャックハルト・イデア (聖王化∞)「ぐうううううううううううううううう!!!」

「シューーーーーー」

進之介(?)「……………」

レイス「わ……我が主……」

コナン「シン……兄ちゃん?」

龍斗「な……何だよ、あの姿は!!!」

アルト「おいバイエルン……失敗作のあの姿はまさか!!!」

バイエルン「ああ……どうやらうまくいったようだな。」

メリオダス「あ……ああ……ああああ……」

バン「おい……何、震えてんだよ団ちよ♪」

グロキシニア「ド……ドロール君……これは夢じゃないっすよね?」

ドロール「え……ええ……多分……現実です。」

キング「グロキシニア様やドロールさんまで……」

キング「シンのあの姿が……どうかしねの?」

マーリン「ミリカ殿……まさか、あれが……」

ミリカ「え……ええ……『次元の王』よ!!!」

進之介(?)「レイス……口上だ。」

レイス「……は?口上?」

進之介(?)「聞こえないのか?早くしろおおおおおおお!!!」

「……………」

レイス「は……はっ……かしこまりました!!!」

ジュナイパー「ではレイス殿……私も共祝おうじゃないか!!!」

レイス・ジュナイパー「祝え!!そして刮目せよ!!!これが次元を超え……」

過去と未来を背負い我らを新たな歴史へと

導く

age」

バン「お…おい団長!!あれは!!!?」

メリオダス「ダ…絶対制圧反撃(ダークギアス・カウンター)…。」
マーリン「これは驚きだな。まさかまたあの技が押めるとは…。」
グロキシニア「もう無茶苦茶つスね…。」

ドロール「あれは絶対に敵に回してはいけませんね…。」

ガルダ「…。(ネビュリア…いつか本物のお前にあった時は、

『あの時の借り』を返してやる!!)」

まりあ「ホウちゃん?」

ジャックハルト・イデア(聖王化∞)

「おくのくれ!!!!役立たず共がああああああああああ!!!!!!

デアボリス!!!!もうこの世界がどちなるうと構いません!!!!!!

派手に吹っ飛ばしてやりなさい!!!!!!

デアボリス(フルパワー)(鏡像)!!!!「御意!!!!!デアボリック・ノヴァ!!!!!!

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

「バリバリバリバリバリバリバリ!!!!!!

と、デアボリス(鏡像)はそう言いながら、デアボリック・ノヴァ

の魔力を

極限までに高めると、デアボリック・ジエノサイダーをも凌ぐ超巨

大な

電撃を纏った漆黒のエネルギー弾を形成した。

沙耶「ひ…ひい…。」

ちひろ「な…何よ…あれえ…。」

安「も…もうやだ…。」

デアボリス(フルパワー)(鏡像)

「死ぬ…『デアボリック・スーパージエノサイダー』!!!!!!

「ドオウアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!

と、デアボリス(鏡像)は『デアボリック・スーパージエノサイダー』
を
発動させて、その超巨大なエネルギー弾を振り下ろした。だが…

「new page」

「シン・ラグナ（破滅力）」

「あなたのようなゲス野郎は王になる器じゃない
生きとし生けるもの達の幸福を願い……世界を良くするのが王様
の役目だ!!!」

「世界を食い物にする事しかできないあなたのくだらない幻想の方
が……」

「ミックズだああああああああああああああああああああああああ
「ジャックハルト・イデア（聖王化∞）」

「ゴミじゃないいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
ああああああああああああああああああああああああああああああ
「シン・ラグナ（破滅力）」

「消え失せろジャックハルト!!!!!!これが俺の!!!!!!いや……!!!!!!
『次元大戦の世界』全てを懸けた!!!!『100!0倍返し!』だ

「ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
」

「ド」オワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
「イ」オワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
「バ」アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
「gob」

「ジャックハルト・イデア（聖王化∞）」

「ぴゃああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
」

「ハ」ッシュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
「ジャックハルト・イデア（聖王化∞）（魂）」

「ハ」ッシュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
「ジャックハルト・イデア（聖王化∞）（魂）」

「ハ」ッシュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
「ジャックハルト・イデア（聖王化∞）（魂）」

は

この時はまだ誰も知る由も無かった。

次回でいよいよ最終回を迎える『次元大戦ファーストシーズ

ン』…

どのような結末…そして、新たな展開が待ち受けているの
であろうか？

それでは次回の『次元大戦ファーストシーズン最終回』も…

刮目せよ

!!!!!!

!!!!!! 第70話 終結の刻(とき)!!次元を駆ける『1000倍返し』
く (完) く

先の『バイキンシヨツカー』との戦い…
そして、今回のジャックハルトの一件…

次元の王候補（ディオケイター）・ラグナや
メリオダス達グラン・ゲインズがいなければ、
とうにこの次元は滅んでいた。

奴らはもう、単なる『烏合の衆』ではないぞ。

人間を見下してあぐらをかく時代はもう終わったのだ。

これからは俺達も、もつと力をつける必要がある!!」

キューザック「ゼ…ゼルドリス様…何とご立派になられた事か
!!

このキューザック…感極まっております!!」

チャンドラー「フン…何じやい!!飯にも、坊ちゃんと『次期魔神
王』の座を

争おうかという者とは思えん腰の引けたセリフじゃ
のう!!」

ゼルドリス「……………」

ルウエス（回想）「キャハハハハ!!何心にもない事を言ってるのゼ
ルドリスくん?

君が誰よりもあのクソ爺の事を一番憎んでいる筈
じゃない!!

だってそうでしょ?君の大事な大事な恋人の『ゲル
ダ』ちゃんが

死んじやったのはあのクソ爺のせい何じやないの?

それにあのクソ爺ね…誰にも魔神王の座を

譲るつもりなんてないよ。」

と、ゼルドリスは『次期魔神王』の言葉を聞くと、

以前、ルウエスに告げられた事が脳裏をよぎり、一瞬無口となった。
ゼルドリス「……………（次期魔神王…か。）」

エスタロツサ「おいおい…どうしたゼルよ?黙り込んじゃまって。

魔神王になる気がねえんなら、俺が代わりになってや
ろうか?

『あのクソガキをケチョンケチョンにできるぐらいに
力つけりやあそれで構わねえぜ!!』だそうです。」

デリエリ「ケツから言つて、なんだそれ……。」

エスタロツサ「ハツ!!面白くなつてきたじゃないの。行こうぜゼル
!!」

ゼルドリス「……わかった。神官ゼロス、あなたの提案を飲もう。

これから厄介になる。」

ゼロス「さすがは魔王様のご子息にして

魔王代行……賢明なご判断ですね。では!!」

「パチン!!」

「シューーーーーー……。」

キューザック「……は?」

チャンドラー「……ひ?」

と、ゼロスがそう言いながら指を鳴らすと、

キューザックとチャンドラーが

何事もなかったかのようにきれいに復活した。「new page」

フラウドリン・グレイロード「な……何いいいいいいいい!!!!!!」

メラスキュラ「……もう、どうなってんのよ……。」

ゼルドリス「キューザック、チャンドラー……大丈夫か?」

キューザック「ゼ……ゼルドリス様ああああああああ!!!!!!」

チャンドラー「こ……ここにはいないが……坊っちゃんあああああ
ん!!!!!!」

ゼロス「良かったですえお二人共。満場一致で私共の提案を

受け入れてもらえた、まあご褒美ですよ。ですが、

次に変な真似をしたら……わかっていますね?あしからず

!!!」

「ジロツ……。」

「キューザック「は……はい……。」

チャンドラー「わ……わかりました……。」

と、ゼロスは笑顔でそう語った最後に、残忍な鋭い目つきをして

キューザックとチャンドラーにくぎを刺した。

1429

ゼルドリス「ではこれより、魔神王の名の下に

『次元霸王の歴史の全平行次元』へと向かい…

ギガデウスの復活と我等魔神族の強化へと乗り出す!!

(メリオダス…俺はもつと強くなり、必ずお前を超えて見せる!!)

その日まで敗北する事は決して許さんぞ…!!)」

魔神族一同「はっ!!」

ヴォルクルス「では行くぞ…ゼロス殿、よろしく頼む。

(次元の王候補(ディオケイター)・ラグナ…

そして、グラン・ゲインズよ。

しばらくの間、この次元はお前達に預ける。

我らの強化とギガデウス様復活のメドが立てば、

必ず、この次元をいただきに来るぞ。

それまで精々、守り切る事だな。)

ゼロス「かしこまりました。では参りますよ!!」「new page」

ゼルドリス「その前に神官ゼロス…一つ聞いていいか？」

ゼロス「何でしょうか？」

ゼルドリス「あなた達の歴史の全平行次元にも

あの『闇黒神キングダーク』のような存在はいるのか？」

ゼロス「あの『モクモク野郎さんそのもの』は

始めから存在してませんでしたけど、

同じくらいの力を持つ存在はチラホラいましたよ。

まあ、みくんな霸王様が消しちやいましたけど」

フラウドリン・グレイロード「な…何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

メラスキュラ「ちよ…ちよつと待つて!!

あの男…確かに相当な化け物だとは思ってたけど、

そこまでの力があつたの!？」

モンスピート「成程…どうりであのキングダークの姿を見ても

平然としていた訳か。」

デリエリ「ケツから言つて、平然とするどころか喧嘩売っていたか

らな。」

バリオス「もしや、その霸王様も桑田進之介と同じ

あの『次元特異点』の力を持っていると…？」

ゼロス「それは…秘密です

(フッフ…面白くなってきましたね。

さて、桑田進之介さん…霸王様をがっかりさせないように

これからも頑張ってくださいね。

まあ、その前に『存在が消えない事』を祈りますけど。

それともう一人の私、神官レイス…

貴方の今後も楽しみにしていますよ。)」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

と、ヴォルクルスや十戒達はゼロスの力でその場から虚空へと消え、

『キョウガの歴史の全平行次元』へと旅立っていった。そして…「new page」

～ 第5世界 ～

悟空「いちいちちちち…。」

メリオダス「みんな…生きてるか？」

なぎさ「は…はい…」

零「何とかな…。」

龍斗「ふう…死ぬかと思っただぜ。」

コナン「ラン…大丈夫か？」

サトシ「セレナも…。」

ラン「う…うん!!!」

セレナ「コナンやサトシ…みんなも無事でよかったわ!!」

ソニツク「まあ…ホントに吹っ飛ばされるかと思っただけだな。」

デイド「直撃してすぐに他の宇宙や次元に飛んでいったから、

思ったより被害を受けなかったみたいだな。」

レジーナ「でも…シンは…？」

亜久里「シン様…。」

真琴「まさか…ジャックハルトと一緒に消えたんじゃないわよね

!？」

アニエス「そんなこと… ある訳ない!!」

ねこ娘「そうよ!! だって彼は…。」

鬼太郎「次元の王になる男だからね!!」

ミリカ「… シン…。」

マナ「… シー…」

と、マナが上空に向けて大声でそう叫んだその時… 「new pa

ge」

「シュー…」

シン・ラグナ「…」

光「シン!!!」

マサト「進之介君!!!」

バン「あの野郎…!!! 生きてたか!!!」

ベジータ「フツ… 当然だ!!」

メンバー一同「シュー…」

と、シン・ラグナが登場するとメンバー達は

一斉に駆け寄り、歓喜の輪を作った。

大神官「大したものですね。」

ウイス「はい。さすがは全王様もお認めになった方です。」

ビルス「まあ… それにしちゃあ、随分と手こずったようだけど

ね。」

エンマ大王「ヘツ!! それじゃお前は奴をどうにかできたってのかよ

!？」

ビルス「… フン!! と… 当然だ… あんなもの、僕ならすぐに破

壊出来たぞ。」

アルト「おいおい… 目が泳いでるぞ破壊神ビルス… なあバイエ

ルン。」

バイエルン「フツ… しかし、彼は見事だったな。神官レイスよ…

君の感想は… おや?」

レイス「… さすがだ!! 我が主。」

シン・ラグナ「レイス…。」

レイス「君…いや、あなた様の活躍でこの次元は救われた。

改めて…あなた様に忠誠を誓いましょう。

未来永劫に渡ってこの次元に君臨し…

我らを導いてくださる次元の王よ!!!」

マナ「そうだよ!!!」

鬼太郎「君にはもう…その資格がある!!」

さくら「私も…! そう思います!!」

メリオダス「俺もお前が王となる気なら、どこまでもついていくぜ

!!」「new page」

シン・ラグナ「…そうはならないよ。」

美香「…えっ!？」

マサト「進之介君…。」

レイス「何故だい? せっかく最強の『次元特異点の力』を手に入れたというのに…」

最早、他の武器を集めずとも君はその力を得たというだけで

十分に次元の王となる資格があるんだよ?」

バイエルン「神官レイスの言う通りだ、桑田進之介…」

『多元宇宙の力』をも打ち破った君は

もう、ギガデウス一派でさえも敵ではないだろう。」

アルト「目の前にぶら下がっている王の座を

ムザムザと捨てるつもりなのか?」

シン・ラグナ「…今の…ズタズタになっちゃった

この世界で僕に王様になれというの?

それにこの世界が救われたのは、

マナ… ミリカ… メリオダス… 悟空さんを

始めとしたこの次元のみんな…

それに、この次元の人達じゃない

龍斗… デイード… コナン君… 安… 沙淡…

ちひろ…

そして士さん達、別の平行次元のみんなの力があつたからなんだ!!」

コナン「シン兄ちゃん……。」

デイード「お前……。」

龍斗「な……何かそう言われると照れるじゃねえか!!」

安「そ……そうですよ、もうく!!」

ミリカ「……フツ!!あなたらしいわねシン。」

士「ならばどうする?桑田進之介。」

シン・ラグナ「僕の答えは決まってるよ。この次元を……新たに創造させてもらう!!」

マーリン「フツ……そうか。」

ウイス「ですが……新たに創造するという事は……

この次元はこれまでの物とは

様子が変わってくるかもしれないね。」

大神官「ええ。ですが、このままにしておくよりは遥かにいいですよ。」

ビルス「別にいいんじゃないの?おいしい物さえちやんとあればね。」

ひかる「もう!!ウサギさんったら……。」

メリオダス「まつ!!そうだったらそうだったで新たな旅を始めればいいさ!!」

悟空「へへっ!!そうだな!!」

なぎさ「シン……。」

光「お願い!!」

ナツメ「やってちょうだい!!」

シン・ラグナ「わかった!!それじゃあ…… (行くよ……次元の王!!)」

シン・ザ・バーネット(声)「(フツ……それがお前の選択なら構わんが、

もう2度と……王にはなれんかもしれないぞ?)」

んぞ?)」

シン・ラグナ「…… (なれるさ!!グラン・ゲインズのみんな……

それに、この次元が存在する限りはね!!)」

シン・ザ・バーネット(声)「(フツ……仲間との絆……そして次元

ルカリオ『ああ!!』

サトシ「そうだな でも…俺達ももつと強くならなきゃな!!なあ
ピカチュウ!!」

ピカチュウ『うん』

ラン「これからも一緒に頑張ろうね、私のピカチュウ!!」

ピカチュウ（ラン）『はい、ママ!!』

士「また新しい旅が始められそうだな。」

海東「フフツ…士…またそれを言うかい？」

僕等の旅に終わりはないさ。命ある限りね!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして…眩い光が消えていき、世界の再構築が終わると…「n

ewpage」

く ブリタニア・リオネス王国 く

ハウザー「あれ？」

ギルサンダー「俺達…生きてるのか？」

マーガレット「ああ…ギル!!!」

ギルサンダー「マーガレット!!」

グリアモール「ベロニカ様!!」

ベロニカ「グリアモール!!」

エレイン「きつと、バン達が…グラン・ゲインズの皆さんが…。」

ジェリコ「勝ったんだな…さすがだぜあいつ等!!」

けどよ…ここはブリタニアか?いつの間に戻ってきた

んだよ?」

ギーラ「アルトさんとバイエルンさんの力で、リオネス王国は

別世界に転移していたはずですが…。」

ウエンデイ「あの…すみません、グラン・ゲインズのみなさんを

知ってるんですか？」

グレイ「それに今、バンって言ったか?そいつはひよつとして、

七つの大罪のバンか？」

ハウザー「そうだが…そう言うお前等こそ、見た事ねえツラだけ
どよ…」

七つの大罪を知ってるのか？」

エルザ「知ってるも何も私達はい最近、

その者達と共に戦ったばかりなのでな。」

ルーシィ「良かった〜… 私達、生きてるんだねハッピー〜!!」

ハッピー「あい〜!!」

バルトラ「失礼だが… お主達は何者かね？」

ナツ「俺達は… フェアリーテイルの魔導士だ!!!」

マーガレット「フェアリー… テイル？」

と、ナツ達が自己紹介をしたその時…

？「あの〜… 悪いんだけど、ここがどこか教えてもらえないか？」

グレイ「何… っておい!? 何だあ!？」

ルーシィ「ス… スライムが… しゃべったあああああああああ

あああ!？」

ハッピー「あい〜〜〜〜〜っ!!!!!!?」

ナツ「? 誰だお前？」

リムル「俺の名前は『リムル・テンペスト』!!」

『ジュラ・テンペスト連邦国』の盟主だ!!」

と、ナツ達の前に突如現れたスライムは

『ジュラ・テンペスト連邦国』の『リムル・テンペスト』と名乗った。

どうやら突然、ブリタニアに国ごと転移してきた(させられた)よ

うである。「new page」

〜 D・B次元 〜〜

クリリン「良かった〜… 悟空達勝ったんだな。」

悟飯「さすが父さん達ですね!!」

トランクス(少年)「さすがパパ!!」

ピッコロ「あれだけの面子がいて負けたのでは、話にならないだろう。」

Dボウイ「お前達… 何故こんな所に!？」

ブルマ「あなた達は確か…。」

天津飯「Dボウイ!!それにスペースナイツの連中か!!」

アキ「お久しぶりです皆さん!!」

ノアル「どうやらお互い、どうにか生きてるみたいだな!!」

クリリン「ああ!!でもよ、こんな所にも何も…ここは俺達の世界
なんだけどな。」

シンヤ「兄さん… どうやら、さっきの光の影響みたいだね。」

僕等の宇宙とこの者達の宇宙が融合してしまったようだ。」

Dボウイ「何だ?!? 一体、誰の仕業だ?まさか… ケンゴが!」

シンヤ「いくらなんでもそこまでの力はないさ。」

あの次元の王とやらが関係してるんじゃないか?」

?「あの… その話、詳しく聞かせてもらえませんか?」

ピッコロ「何?」

クリリン「お… 女の子!」

悟飯「その姿… プリキュアではないですよ?」

アキ「テツカマンとも違うわね…。」

Dボウイ「誰だ? 君は…。」

響「私の名前は『立花響』… S・O・N・G・所属の『シンフォギ
ア装者』です!!」

と、悟飯達の前に、S・O・N・G・所属の『立花響』と名乗る少
女が

『シンフォギア装者』の姿で登場したのだった。

「どうやら突然、組織ごとD・B次元に転移してきた(させられた)よ
うである。[new page]

〜 大貝町 。

百田「ア… アニキ… 俺達… 生きてるんすね!!」

二階堂「あ… ああ!! マナ達が勝ったんだな!!!」

あゆみ「あなた…。」

健太郎「よく頑張ったなマナ… ありがとう… グラン・ゲインズ
の皆さん、

そして、進之介君…。」

セバスチャン「ジコチュートリオの皆様もご苦労様でした。」

ベール「危うく、1万年どころか永遠の眠りにつくところだったけ

どな。」

マーモ「まったくくだわ。でもこれで、この前の借りは少しは返せたわね。」

イーラ「まあ、プリキュアやレジーナ様達は

こんな程度の状況では済まなかっただろうけどな。

(キュアダイヤモンド… またお前に会える日を待っている。)

?「ふわあく!!良かったですねみなさん… 元気になって!!生きてるって感じですよ!!」

?「ワン!!」

?「そうラビ!!」

二階堂「ん…?」

マーモ「な… 何よアンタ!?!」

セバスチャン「プリキュア… ですかな?」

キュアグレース「はい!!あたしは『キュアグレース』!!」

この子は『ラテ』!!そして『ラビリン』ですよ!!」

ラテ「ワン!!」

ラビリン「よろしくラビ!!」

と、そこへ『キュアグレース』と名乗る

つい最近誕生したプリキュアが登場し、自己紹介をしたのだった。どうやら、第3世界防衛の為に誰かに連れてこられたようである。

「new page」

く 友枝町 く

桃矢「大丈夫か?ユエ」

ユエ「ああ… どうやら終わったみたいだな。」

?「はい!!全部元通りになって、ウルトラハッピーですよ!!」

?「また… きれいな花が咲いて良かったです!!」

ユニ「…?」

桃矢「… お前等… プリキュアなのか?」

キュアハッピー「はい!!わたしは『キュアハッピー』!!」

キュアブロッサム「わたしは『キュアブロッサム』ですよ!!」

と、気が付いた桃矢とユエの前に

『スマイルプリキュア』の『キュアハッピー』と

『ハートキャッチプリキュア』の『キュアブロッサム』が登場した。

どうやらキュアグレースと同様、誰かに第3世界防衛の為に

連れてこられたようである。「new page」

く ゲゲゲの森 く

カワウソ「良かったなー、みんな元通り!!」

たんころりん「これでこの森が全滅したの2度目だな...」

油すまし「鬼太郎が居なくても、この森は立派に守って見せるぞ!!

と、大口いったけど情けないな...」

? 「いや、鬼太郎はそうは思わないだろう。」

? 「少なくとも俺が知る鬼太郎さんはな。」

? 「せやから、そう気を落とさんという!!」

? 「その通りです。」

山小蔵「え?」

提灯お化け「き... 君達は?」

石動零「俺の名は『石動零』、この世界の鬼太郎とは面識はないが、

奴の事は良く知っている。」

ナダ「ワイの名は『ナダ』や!!よろしゅう頼むわ!!」

尊「俺は希望ヶ花市の名家庭瀬家の当主... 『庭瀬 尊』だ!!」

紗雪「『高社紗雪』と申します。」

と、ゲゲゲの森に『武士道は花と共に』の主人公『庭瀬 尊』と

その仲間たちが現れた。実はこのキャラクター達、アクア達次元管

理局と

同盟関係にある『数多の次元をまたにかける大企業連合の若女社

長』により、

第3世界防衛の為に派遣されたメンバー達であり、

後にグラン・ゲインズへとその若女社長の仲間と共に

彼女に率いられて加入する事となる。そして... 「new page

e」

く 第5世界 く

電子音「K I N G D A R K!!」

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と、バイエルンはそう言いながら懐から『キングダーク・ウオッチ』をとりだすと、

進之介が光に包まれて、体の消滅が収まっていき、元の状態へと戻った。「new page」

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー」

進之介「う。。。うう。。。」「ガクツ。。。」

マナ「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー!!」

マーリン「どうやら。。。消滅が収まったようだな。」

さくら「良かった。。。」

ケロベロス「世界を救った英雄にこんな消え方されたら、目覚め悪いで!!」

海東「君。。。もしかしてそのウオッチは。。。」

士「キングダークの力か。。。?」

アルト「ご名答さ。」

バイエルン「もう力の大半を使って、残りカス程度の力しかなかったが。。。」

ひとまずはうまくいったようだな。」

レイス「だが。。。まだ安心するのは早いようだね。」
「スツ。。。」

と、レイスはそう言いながら進之介の体に手を当てる。

アクア「。。。どういう事?」

アルト「ウオッチの力でひとまず抑えられてはいるが。。。」

まだ失敗作の中には『次元特異点の力』が
種火程度には残っているようだな。」

バイエルン「その種火がまた一気に燃え上がれば、

今度こそ。。。桑田進之介は消滅する。

それを回避するためには。。。

この種火を完全に封印するしか方法がないだろう。」

ゴウガ「おいおい!!そりゃねえだろ!!!」

サトシ「何てこった……。」

ガルダ「大神官様…… 何とかできないのか？」

大神官「無理です。先程も言いましたが、

『次元特異点の力』は『次元大戦の世界の歴史そのもの』と

言っている力…… 我々どころか、例え超ドラゴンボールを

もってしてもどうにもならないでしょう。」

安「そ…… そんな……。」

ちひろ「では…… 私達にできる事は何もないんですか……？」

ラピス「シンに…… 全部助けてもらったのに…… あたし達から……

してあげられることは何もないなんてよ……。」

ラン「そんな…… そんな事って……。」

ハグタン「はぐ……。」

ジン「……。」

セイラ「やりきれないわね……。」

マナ「どうして…… どうしてよお……。」

アクア「何で…… シンばかりがこんな目に合わなければならぬの

よ…… ううう……。」

レイス「だがバイエルン君…… 方法が全くないわけではないのだろ

う？」

バイエルン「ああ。奴がまた力を貸してくれるかはわからんが……

行ってみるしかならう。」

士「…… キングダークの所へ行くのか？」

マーリン「そう言えばお前達は、バイキンショットカーの一応の傘下

だったな。」

アルト「フン!! そうは言ってもほとんど信用されてはないが、

その失敗作を救うにはそれしか方法がないな。

それに、そのせい僕等はジエネシスにも信用されてないし

な。」

海東「確かにね…… キングダークとしても今、彼に消えてもらって

は

余興を楽しめないだろうから、行ってみる価値はあると思う

よ。」

メリオダス「…頼めるか？アルト、バイエルン…!!」

鬼太郎「僕達には彼が必要なんだ!!!」

マナ「お願いします!!」

アクア「シンを…助けてください!!!!!!」

と、メンバー達は一齐にアルトとバイエルンにそう懇願した。

アルト「わかったわかった!!!うるさい奴らだ。」

バイエルン「彼に消えてもらっては困るのは我々も同じだ。」

この件は我々が責任をもって預かろう。行くぞアルト

!!

アルト「了解!!」

「シユンシユン!!」

と、バイエルンとアルトはそう言いながら、その場から消えて

バイキンショットカー要塞『イーヴィルフオート』へと向かった。「n

ew page」

ぬらりひよん「みんな…悲しい気持ちはわかるが…。」

エンマ大王「俺達は…前に進まなきゃならない!!!」

進之介の思いを無駄にしない為にもな!!」

ナツメ「エンマ様…。」

泪「ああ、エンマやぬらりの言う通りだ!!」

ソニック「俺達はこの次元の危機を乗り越えて、

こうして生きてるんだ!!胸を張ろうぜ!!」

士「女隊長…前にも言ったが、お前がすっかりしてなくてどうす

る？

進之介の事はあの2人に任せて俺達は一旦戻り、

今後の方針を決めるべきだと思うがな。」

メリオダス「士の言う通りだぜミリカ…俺達の旅はまだ続くんだ

!!

デイド「行こうぜアクア!!俺からも一つ提案があるしな。」

ベジータ「提案だと?」

バン「何だそりゃ?」

デイド「それは戻ってから話すぜ。さあ……!!!」

アクア「……わかりました。ではラスト・ウォーリア基地へ帰還し
今後の方針を立てましょう!!」

メンバー一同「了解!!」

と、グラン・ゲインズのメンバーはそう言いながら、

ラスト・ウォーリア基地へと帰還し、今後の方針を立てる事となつた。そして……「new page」

↳ 翌日 バイキンショッカー要塞『イーヴィルフオート』↳

ばいきんまん「キングダーク。あのガキ共が勝ったみたいだな?」

キングダーク『当然だ。あの様な塵屑共如きに負けている様では話
にならぬ』

ケイオス「キングダーク様がお認めになったと言うあの少年ですか
……」

バカなスーパーヒーロー共とそんなに変わりなさそうに
見えますけど……」

サクリファイス「キングダーク様はあの少年をそれ程お気に召され
たのですか?」

キングダーク『あの小僧には『正義も悪も超越する』と言う確固た
る信念を感じた。

確かに甘い部分もあるが……正義正義とほざき、人間中
心の秩序を

築く事しか頭がない愚かな者共に比べれば余程面白
みがある……。

我はあの小僧が『最強の次元の王』となり、

我と並び立てる存在となれるか……

或いは『無を超える存在』となれるかどうか興味があ

るのだ……』

フュー「へ……面白いね彼。キングダーク様がそこまで興味を持つ
なんて……

それに……多元宇宙の力に匹敵する『次元特異点の力』か……
彼を使ったら面白い実験が出来そうだな……」

キングダーク様、試して見てもいい？」

キングダーク『まあ待てフューよ…。確かにお前には面白い実験になるかも知れぬが

あの小僧はまだ熟しきっておらぬ…。どうせなら熟し切ってから

行った方がより面白い実験になるのではないか？』

フュー「うくん：そうだね。確かにあなたの言う通り、

どうせなら熟し切ってからの方が面白い実験が

出来るかも知れないね。じゃあ、今は我慢するかあ。

まあ、今回の『聖なる最終戦争（ラー・アルマゲドン）』を利用して

色々面白い実験も出来たし、まあ満足かな♪」

ばいきんまん「まくた変な実験したのかお前…」

フュー「なくにばいきんまん様。僕は好きなだけ面白い実験を

させて貰えるって言うからこの組織に参加したんだよ？

僕が何をしたって自由なんでしょ？」

ばいきんまん「まあ、そりやそうだが…」

キングダーク『フューよ…。お前は好きなだけ楽しい実験をすればよい…。

我はその実験がより楽しく素晴らしい実験になる様に

それに相応しい場を提供するだけの事だ…』

フュー「ありがと♪キングダーク様」

エッグマン「やれやれ調子の良い事じゃわい…」

ばいきんまん「キングダーク、一つ聞かせて。もしラグナのカギ共が負けたら

あの次元をどうするつもりだったんだよ？」「new page」

キングダーク『そうなった場合はあの次元には用はない…。

あのジャックハルトと言う塵屑を始末して

次元の王の力を回収したまでの事…』

ばいきんまん「はひ？ そうなのかよ。」

キングダーク『冗談だ。フフツ…。だが桑田進之介以外の者が次元の王になっても』

我にとつては不快にしかならぬがな。それに…』

ばいきんまん「それに？ 何だよキングダーク…。もったいぶつてよ。」

キングダーク『いや、何でもない…。気にするな。』

（しかし、あの『小虫』め…。ギガデウス一派を利用して何を企んでいるのだ…。？ 奴にとつても桑田進之介は興味のある存在のはずだが…。つくづく我の癪に障る事をしてくれる…。気に入らん男よ…。）

ばいきんまん「ふうん…。まあいいぜ。しかし、ラグナのガキの周りに

集まった他の平行次元の連中は何なんだ？

あの例の『サイヤ人』のガキ共は知ってるがよ、

『B・D・S』だの『勇者探偵隊』だの…

訳の分からねえ連中まで出て来やがって…

クツパ「これもあのバイエルンやアルトの仕業なのか？」

キングダーク『喜ばしい事ではないか…。桑田進之介の家臣が

増えたとても見ておけば良い…』

ガイ「その『勇者探偵隊』なる者達がいる次元には

『ダークネス帝国』とか言う組織もおるようですな…

あ奴等の次元への侵攻はどうされますかの？」

キングダーク『そんな事はどうでも良い。我の今の一番の興味は

桑田進之介を最強の次元の王とし、

我と並び立てる存在とする事…他は後回しで構わぬ

…』

フュー「最強の次元の王の誕生か…。それはそれで面白い実験になりそうだ♪

まあ、僕の今の一番の興味はそのサイヤ人達の方かな？」

ばいきんまん「それにしてもラー・カインの奴も最後は無様だった

な。

だと思つてた

か…

あれだけ他人を虫けら扱いしときながら自分は部下
ジャックハルトの駒でしかなかったとはよ…。

一番の虫けらは他でもないあいつ自身だったって事

哀れなもんなのだ。ハツヒツフツヘツホ〜♪

しかし、俺様はあのジャックハルトを

割と気に入ってたんだけどな。

本来なら仲間を平気で消す奴なんざムカつくだけだ

が、

あそこまでのドゲス野郎だと逆に面白い奴だった

ぜ。」

キングダーク『所詮はその程度の塵屑だったと言う事よ。

愚か者に相応しく…そして醜い末路であつたわ…

クハハハハ…』

ラー・カインがジャックハルトの駒でしかなく、自身が一番の虫け

らだったと

嘲笑いながらキングダーク達は談笑していた。

ばいきんまん「後、キングダーク…そのラグナのガキの事だが…

その『次元特異点の力』とかいう奴の代償で

消えちまうかも知れねえみたいじゃねえか。

今はお前のウオッチの力で抑えてるみたいだが…

助けてやらねえのかよ？」

キングダーク『我が助けるのは簡単だ。だが…』

ブル・ドーザ「失礼いたします!!キングダーク様…

次元の監視者(ダイダロス・アイ)のアルトとバイエ

ルンが

やってまいりましたが…いかなさいますか?!

追い払うのであれば、お任せを!!!」

ばいきんまん「噂をすりや、何とやらだぜ。どうするよキングダー

ク？」

キングダーク『無論、ここへ通せ。我からもあ奴らに話がある。』

ばいきんまん「まあ、そうだろうな。おい新入り!!」

さつさとあいつ等をここへ連れてこい。

それとな... お前みたいなの2流のカスが

あの2人を追い払える訳がねえだろうが!!」

ブル・ドーザ「は... はい!!かしこまりましたのであります!!!では!!!」

と、ブル・ドーザはビビりながらもアルトとバイエルンを出迎えに行った。「new page」

キングダーク『さてと... お前達、少し席を外せ。これだけの面子が一緒では、

あの2人もさぞや話しにくいだろうからな。』

ケイオス「は... はい。」

サクリファイス「かしこまりました。では後程...。」

フュー「それじゃ僕は実験の続きでもしようかな♪じゃくね!!」

と、そう言いながらフューたちはその場を後にした。

ばいきんまん「さてと... そんなじゃ俺様は

『アスタロト』のどこにでも行ってくるか!!」

クツパ「『ナイトオブダークネス』にか?」

ガイ「どうしたんじゃバイちゃん... 急に?」

ばいきんまん「あいつに『多元宇宙』の事を話しておこうと思って

な。」

エッグマン「ああ、この間のデルザリオとの戦いの件だな。」

ばいきんまん「もしあいつ等が俺達みたいに『多元宇宙』から

宣戦布告でもされたら、ひとたまりもねえだろうから

な。

『アスタロト』と俺様の仲だしよ。

どうせお前もその2人に多元宇宙の事を話すつもり

なんだろう?」

キングダーク『うむ... ジャックハルトが『ダークマター』を使っ

た以上、

あの次元も最早、多元宇宙とは無関係ではいられんだろうからな。』

ばいきんまん「そりやそうだな・・・そんじゃ俺様は行ってくるぜ。ばいばいきくん!!」

クツパ「それじゃ、ワシ達も行くか!!」

ガイ「そうじゃな。」

エッグマン「ではキングダーク様・・・失礼します。」

と、続いてばいきんまん達もその場から撤収していった。「new page」

キングダーク『さて・・・これで遠慮はいらんぞ。入ってくるが良い!!』

「シユンシユン!!」

アルト「邪魔するぞ。」

バイエルン「ご無沙汰してます、キングダーク様・・・

ますますのご健勝で何よりです。」

キングダーク『氣を使わずともよい・・・桑田進之介の事であれば

我はいつでも相談に乗ろうではないか。

早速、話してみるがいい。』

バイエルン「では・・・ん?」

?「キングダーク様、シンちゃんがどうかしたの!?

おい・・・そのクソ共!!シッちゃんに何があったんだよ!?

さつさと話しやがれコラア!!!!!!H?

アルト「何・・・!!!き・・・貴様は!!!!!!」

バイエルン「コレはこれは・・・!!貴女もお久しぶりですな・・・『姫様』。」

と、アルトとバイエルンは突如現れた人物に驚きの声を上げた後、キングダークに進之介に関するこれまでの経緯を話し始めたのであった。そして・・・「new page」

↳ 翌日 ラスト・ウォーリア基地 ↳

進之介「・・・う・・・こ・・・ここは・・・?」

進之介「ミリカ……また後でゆつくりと話せばいいよ。

それよりも大事なことがあるんでしょ？」

アクア「う……うん……それじゃ……入ってきてちょうだい！！！！」
「ザッザッザッザッ……」

ナツメ「……………」

トウマ「……………」

アキノリ「……………」

ケースケ「……………」

アヤメ「……………」

零「……………」

刻「……………」

遊騎「……………」

泪「……………」

平家「……………」

と、アクアがそう言うと、医務室の中にナツメ達妖怪探偵団と

コードブレイカーのメンバーが登場した。「new page」

鬼太郎「ナツメ……」

光「コードブレイカーのみんなもどうしたの？」

アクア「みんな……残念なお知らせだけど、ナツメちゃん達妖怪探偵団と

コードブレイカーのみんなは、今日をもってグラン・ゲインズを

脱退する事となりました。」

アニエス「……え？」

バン「おいおい……どういうこったよそれ？」

ぬらりひよん「理由は我々から話そう。」

エンマ大王「勝手ばかり言っすまないけどな。」

と、そこへぬらりひよんとエンマ大王が姿を見せた。

シヤナ「エンマ大王……ぬらりひよん。」

メリオダス「一体どうしたんだよ、急に。」

ぬらりひよん「みんなの活躍で、第5世界をレグルス帝国軍から取

り戻し、

この世界は新たな時代の幕が開けた。

それで、旧連邦政府の幹部と協議した結果…

これまでの体制を一新して、新たにこの世界の中核となる

組織を設立する事となった。」

トランクス「新たな組織…。」

マイ「そうなんですか…もしかしたら、その新しい組織のトップに…。」

エンマ大王「ああ!!この俺…エンマ大王が初代議長に就任する事になったんだ。」

砂かけ婆「そ…そりや、凄いのう!!!」

目玉おやじ「妖魔界のトップがそのまま人間界のトップになるのか…

まさに新たな時代の訪れに相応しかろう!!」

ねこ娘「私達の世界じゃ、まだまだ考えられないけどね。」

ぬらりひよん「そして、妖怪探偵団とコードブレイカーには、

新たな組織で我々のサポートをしてもらおうと考え
てな。

彼らに打診したところ、さすがに迷ったようだが、

快諾をもらったという訳だ。」

ナツメ「みなさん…わがまま言ってすみません。」

この世界を救ってもらったのに、何の恩返しもできないまま
抜けることになりましたが…今までお世話になりました。」

零「確かにナツメの言う通りだ。だが…この世界を守る連中も

必要だろうと考えた結果だ。しかし俺達はお前達と過ごした
日々…

そして、共に戦った経験を生涯忘れる事は無いだろう。

さよならだ、グラン・ゲインズのみんな。」

マナ「気にする事なんてないよ!!!」

進之介「こちらこそありがとう!!僕がいなくなってた間、

君達が頑張ってくれてたのはみんなわかっているからね!!
だから今度は、君達が君達の為に戦う番だよ!!」

トウマ「進之介さん……。」

刻「そう言ってもらうと助かるぜ!!」

泪「今まで世話になったな!!」

アキノリ「みんなのこれからの戦い……無事を祈ってるぜ!!」

平家「あなた方の進む道に、栄光あれ!!」[new page]

「シューーーーーーシューーン……。」

沖原「失礼します。」

マサト「失礼します。」

美香「失礼します!!」

と、そこへマサト達も室内へと入ってきた。

リータ「マサトさん…… 美香さん」

アンズ「ひよつとして、お二人とも……。」

美香「うん。私達もこの世界に残るわ。」

マサト「考えたけど……俺は木羅マサキとしてこの世界に

多くの災いをもたらしてきた。

だから、それを償う意味でもこの世界の新たな未来を

築いていこうと思ったんだ。」

ラピス「そっか……寂しくなるな。」

マーリン「確かに、この世界にはゼロライザーの力も必要だろうか
らな。」

沖原「その件ですが……マサト。」

マサト「はい。進之介君……これを!!」

「スッ……!!!」

天滅槍(ゼロライド)「……………」

と、マサトは進之介の前に、解放前の天滅槍(ゼロライド)を差し
出した。「new page」

ララ「オヨお!?!」

アデル「あ……あれは!?!」

キング「天滅槍(ゼロライド)……!?!」

進之介「マサト君… 美香ちゃん… これって…。」
マサト「… 王様になってよ!!俺達にはもう必要がないものだからね。」

美香「あなたの戦いを見て確信したの。」

次元の王になれるのは、あなただけだつて!!」

沖原「どうか受け取つてほしい。これは我々… いや、

第5世界に生きる全ての人々の総意と考えてもらつて構わない。」

レイス「ほう?この世界に来た当初は我が主に

それを渡すのはかなり否定的だったが…

君達も異論はないのかい?」

ぬらりひよん「異論など… あろうはずがない!!!」

エンマ大王「俺達としても、進之介に次元の王になつてもらわねえと

いざつて時に守つてもらえねえからな!!

頼んだぜ進之介… この次元の未来をお前に託す!!!!!!」

進之介「ありがとう!!エンマ大王、そしてマサト君!!」

!!!!!!

マサト「フフツ… 最後に、君のような人に会えて光栄だったよ。」

美香「これからも… 私達なんかより遥かに大変だと思うけど、

あなた達なら大丈夫!!」

沖原「グラン・ゲインズの皆さん… これまでありがとうございま
した!!!」

マーリン「こちらこそだ、沖原殿。」

ディアンヌ「マサト!!美香を泣かせたら駄目だからね!!」

美香「も… もう、ディアンヌつたら!!」

マサト「フフツ… 了解。」[new page]

アクア「それじゃ挨拶はこれくらいにして… 今後の方針を説明するわね。」

私達グラン・ゲインズは次に、『クロスフロンティア』へと向
かいます!!

メリオダス「クロスフロンティア?」

コナン「その世界って確か、デイド兄ちゃん達の世界だよね？」
悟空「それは良いんだけどよ、何しに行くんだ？」

デイド「主に戦力強化が目的だ。今回の戦いで俺達は

破壊神レベルの敵を打ち破ったとはいえ、

この次元の敵のレベルの高さを嫌というほど認識したか
らな。

敵が

これからは破壊神レベルどころかあのラー・カイン以上の

ゴロゴロ出てくるだろうと思ひ、アクアに提案して承諾を
もらった。

もちろん、ここにいるメンバー全員、

一から徹底的に鍛えなおす意味でもな!!」

龍斗「おもしろえじゃねえか!!」

ゴウガ「ああ!!俺達はもつと強くならなきゃいけない!!」

ガルダ「進之介ばかりに負担をかけさせない意味でもな。」

サトシ「いくらシンがズバぬけて強くても、俺達全員が強くならな
きや

絶対にこれからのバトルを乗り越えられないからな!!」

コナン「元々、俺達はそのつもりでこの世界に来たんだからね!!」

ラン「そうだよコナン!!一緒に強くなるう!!」

安「私達も望む所です!!」

ちひろ「はい!!行きましょう、クロスフロンティアへ!!」

ソニツク「その意気だぜ、みんな!!」

アクア(このすば)「徹底的にしごいてあげるから、覚悟しなさい!!」
デイド「じゃあ決まりだな!!クロスフロンティアもこの次元に負
けないくらい、

戦士のレベルは高いからな、きつとみんなびつくりするぜ
!!」

悟空「へへッ……そりや楽しみだな!!!!!!」

ベジータ「カカロット……抜け駆けは許さんからな!!」

トランクス「父さん……俺ももつと強くなります!!!!!!」

さくら「……………」

ケロベロス「さくら…… どないしたん？」

小狼「それは…… ネメシスのカードか？」

と、さくらは以前、聖魔天使ネメシスから託された緑色のカードを眺めていた。「new page」

マーリン「結局、そのカードは発動しないままだったか。」

ノヴァ「そうだね…… 一体何なんだろうそのカード……」

クレフ「今でも何の魔力も感じないからな……。発動してない所を見ると、

我々が感じ取れないわけではないようだが……」

マナ「多分だけど…… ネメシスさんの力が目覚めるには

何かきっかけがあるんだと思う。」

マーリン「きっかけだと？」

海「どういう事？」

マナ「あたしがリバーシアになれたのは、トランプ共和国での戦いで

一度、消えちゃってパトリシアさんに『転生』させてもらったからなの。

ネメシスさんの力が同じような出来事で目覚めるのか

どうかはわからないけど、ただ一つ言えるのは……『願う』ことかな。」

小狼「願い…… か。」

ケロベロス「せやけど…… 何を願えばいいんや？」

力を目覚めさせてほしい…… とかじゃないんやろ？」

ホーク「わかったぜ!!残飯食わせる!!だろ？」

バン「そりや師匠だけだっつーの♪」

マーリン「それにケロベロス殿…… さすがにそれは単純すぎだろう。

私はバイキンショットカーとの戦いでさくらが『ツバサ』へと

突然変異した中にそのヒントがあるとみているがな。」

さくら「うーん・・・あの時はマーリンさんが私を庇って、

頭の中が真っ白になってたからよく覚えてないんです。

でも・・・言われてみたら何かありそうな気がする。

私・・・早くネメシスさんに力を貸してもらえるように

頑張ってお願ひしてみます!!」

小狼「さくら・・・。」

ケロベロス「よっしゃ! それでこそワイが見込んだ

カードキャプターさくらや!!」

知世「さくらちゃん、わたくしにできる事がありませんたら、

何でもお手伝いしますね!!」

さくら「ありがとう、小狼君、ケロちゃん、知世ちゃん!!」

ランティス「小狼」

小狼「ランティスさん!!」

ランティス「クロスフロンティアについたらお前との約束・・・

ようやく果たせそうだな。」

光「小狼君を弟子に取るって言った件ね!!」

ランティス「ああ。小狼・・・いま一度聞くぞ。

お前には今、俺が持てる全てを

叩きこんでやる!! ついてくる覚悟はあるか?」

小狼「はい!! もちろんです!! よろしくお願ひします!!」

光「よかったね、小狼君!!」

ケロベロス「小僧・・・途中で根を上げるんやないで。」

さくら「もう!! ケロちゃんったら!!」

レイス「ところでミリカ君、我が主はどうするんだい?

はつきり言ってしまうえば修行どころではないし、

破壊剣(ラグナロク)もこの有様なんだがね・・・。」

破壊剣(ラグナロク)(石化)「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

と、レイスはそう言いながら力を使い果たし、

石化してしまった破壊剣(ラグナロク)をメンバー達に見せた。「n

ew page」

真琴「ラ・・・破壊剣(ラグナロク)が・・・。」

ユニ「石になっちゃってるニヤン…。」

メリオダス「それじゃ… シンは戦えねえって事か…。」

レイス「破壊されたわけでも契約者の資格を失ったわけでもなさそうだから」

とりあえずそれによつて死ぬことは無さそうだが…。」

アクア「そうよね… 流石にこれでは一緒に行けないわ。」

とりあえず… あの二人が戻るのを待つしかないわね。」

「シユンシユン!!」

アルト「呼んだか？」

バイエルン「遅くなって申し訳ない。」

と、アルトとバイエルンがそう言いながらメンバー達の所に戻ってきた。

メリオダス「アルト!! バイエルン!!」

悟空「戻ってきたみてえだな!!」

マナ「それで… シンは… シンは助かるんですか!」

アルト「……………」

バイエルン「……………」

レジーナ「ちよつと!! 何よその沈黙!」

士「キングダークの力を貸してもらえなかったのか？」

アルト「いや… 力は貸してはもらえるんだがな…。」

バイエルン「違った形で… だがね。」

コナン「違った形…?」

龍斗「おい、オツサン!! どういう事だよそれ？」

レイス「とりあえず説明してもらえるかな？」

バイエルン「いいだろう。」

アルト「実はな…。」「new page」

く バイキンショッカー要塞『イーヴィルフォート』(回想)く

アルト「と言う訳き」

バイエルン「何とかしていただけませんか? キングダーク様」

キングダーク『ふむ…』

アルトとバイエルンは進之介の現在の状況を一通り説明し終えた

ところで…

アルト「それと…さつきから僕らを睨みつけている

あいつはどうにかならないのか？」

キングダーク『ん…？』

ルウエス「うゝ…！」

と、キングダークの近くには以前、進之介によって倒され、

その後キングダークの手で蘇生されたルウエスもその場で話を聞いていた。

そして、アルトとバイエルンを恨めしそうに睨みつけている。

バイエルン「姫様…： そう言う訳でキングダーク様にご相談に

伺ったのでございますが…： 何かありますかな？」

ルウエス「気安く声をかけるんじゃないやねえよ」

バイエルン「おや…： これは冷たいご反応ですな。」

ルウエス「お前の本性はとづくにばいきんまん様から聞いてんだよ。

このクソバイエルン!!よくも僕を騙しやがったな!!!」

バイエルン「フツツ…： その節は失礼致しましたな。」

アルト「ふん、流石に聞かされてない方が可笑的いか。

しかし…：前に見た時よりも比較にならない程の力をつけているじゃないか。

どこかで修行でもしたのか？」

ルウエス「あれから『多元宇宙』に対抗出来るように死ぬほど修行したからね。

今ならお前ら程度を木っ端微塵にする位訳ないよ。試してやろうか？」

キングダーク『ルウエスよ…：。こ奴等に手を出してはならんと命じた筈だぞ』

ルウエス「で…： でもキングダーク様!!こいつらは!!」

キングダーク『こ奴に踊らされたお前にも責任はあるのではないか？』

ルウエス「うぐ…：」

キングダークの言葉にルウエスはバツが悪そうな顔をする。
アルト「そうだな。大体、僕等だつてあの後デアボリスに

消されかけたんだ。お相子だろ」

ルウエス「知るかよそんな事!!このクソアルト!!」

キングダーク『あの時の事ならば心配はいらん。』

あのキョウガと言う小虫が現れずともどちらにしろ

我がデアボリスを止めていたからな』

バイエルン「どちらにしろ、我々はあなた方の傘下に入らなければ

ならなくなつた訳ですが」

キングダーク『一応の形だけなのだから問題なからう?現にこうして

ここへの出入りも許可しているのだからな』

アルト「それはそうだがな」

バイエルン「それよりもキングダーク様…桑田進之介の件ですが…」

キングダーク『我がどうにかしてやるのは簡単だ…。だが、それは面白くない』

アルト「あのな…。面白い面白くないの問題じゃ…」

キングダーク『お前達としても我に頼り続けてプライドが傷つかんのか?』

アルト「うっ…。」

キングダークに痛い所を突かれてアルトは顔を顰める。「new page」

バイエルン「ですがキングダーク様…。今回ばかりは我々の力でもどうにもならないのですが…」

キングダーク『正直我は『グラン・ゲインズ』にはがっかりしてない』

バイエルン「…と、申されますと?」

キングダーク『あの『ジャックハルト』が多元宇宙の力を手にして全く歯が立たんと言うならまだ分かる。』

だが…あれだけの面子がいながら殆どが『ラー・カイ

例え滅ぼした所で元に戻すだろうしな。

『あの男』と『その部下の小娘達』は何れ必要になるだろう。

ギガデウスの事を考えればな…』

アルト「ギガデウスだと…？おいおい今更奴が復活した所で何になる？」

今の失敗作に奴が対抗出来ると思うか？」

バイエルン「キングダーク様はギガデウスが復活すれば

何かが起こるとお考えなので？」

キングダーク『ああ。恐らくだが…あの『ジャックハルト』以上の事態が

起きるのは間違いあるまい。その時の事を考えて置かねば

しても 例え、次元特異点の力を使いこなせるようになったと

桑田進之介はギガデウスに敗北するかも知れん』

バイエルン「ギガデウスがそこまでの力を手にすると？」

アルト「考えすぎじゃないのか…？」「new page」

キングダーク『…お前達には話しておくでしょうか。先程、あの小虫…

『キョウガ・クスル・グランバニア』の家臣である

『神官ゼロス』が、ヴォルクルスと魔族…

そして『他のギガデウス一派』を

『自分達の歴史の全平行次元』へと連れて行ったようだ。

おそらくはギガデウスをより強化させて

復活させるつもりなのかもしれん。」

アルト「何だと!!!」

バイエルン「キヨウガ・クスル・グランバニアが

ギガデウス一派と手を結んだというのですか？」

キングダーク『手を結んだかどうかまではわからん。

そこでギガデウス一派を強化して、

等、

桑田進之介を成長させる為の肥やしにでもするつもりかどうかは定かではないが……
いずれにしても以前とは比べ物にならない程の力をつけるのは間違いないだろう。

それこそ……3000年前の次元の王やデアボリス

爪の垢にも及ばぬ程にな。

それに……多元宇宙に行くのは桑田進之介にとっても
これからの戦いに向けての良い経験になる筈だ。

どうだ？ バイエルンよ……」

バイエルン「……少々考えさせていただけますか？ 多元宇宙の……」

しかも『あの男』の所に行くとなると

一応、グラン・ゲインズにも

相談しなければならぬと思いますので。」

ルウエス「何だよ……せっかくキングダーク様が協力するって

言ってくれてるのにビビっちゃった訳？ 情けないな……!!」

アルト「何だと貴様!!!!」

キングダーク『止めろ! ルウエス。下らん挑発をするな』

バイエルン「アルトも抑えろ。」

ルウエス「チエツ!!」

アルト「チイツ!!」

バイエルン「取りあえず時間を頂けませんか？ 何か動きがあれば

こちらから連絡いたしますが故。」

キングダーク『良からう……。どちらにしろ何れは多元宇宙の力は

この戦いには関わってくる。これは必要な事になる

と思うぞ？

じっくりと考えてみるが良い。ハハハハハハハハ

ハハ!!!!!!」『new page』

く!!! 現在

アルト「……という訳さ。」

バイエルン「さてと……どうするかね？ 桑田進之介。」

めぐみ「全平行次元の外側にある、『無数の宇宙の集合体』…?」
ひかる「そんな宇宙があるの!? キラやば☆!!!」

龍斗「うーん… わかったような… わからねえような…。」

ゴウガ「とりあえず、とんでもなくヤベエ場所という事だけはわかったな。」

ガルダ「つまりは、あのジャックハルト… もしくはそれ以上のク
ラスの奴らが

その多元宇宙という所にはゴロゴロいるという事だな。」

バイエルン「まあ、そういう事だが…。」

アルト「はつきり言えば、そのジャックハルトやあの時の失敗作で
さえ、

多元宇宙ではまだまだ2流のカスなんだぞ。

ましてやその部類の奴にデコピンの風圧で木っ端微塵にさ
れた

お前等4流レベル程度の人間が容易く踏み込んで

いい場所ではないという事だ。わかったか? 馬鹿共!!」

安「あ… あれで2流のカス… ですか…?」

ちひろ「そ… それを言われたらさすがにショックですね」

サトシ「まあ… なんとなくわかったけどな…。」

セレナ「でも何かあの言い方、腹立つわね」

ひめ「相変わらずメツチャ失礼」

コナン「まあ… あの人なりに俺達を心配してくれてるんだよ。多
分」

バイエルン「では桑田進之介よ… どうするかね?

いずれにせよこの全平行次元にはキングダム以外に

君を助けられる者は、ほぼ皆無と言っつていいだろう。

確かに、リスクの方が大きすぎるが、

提案を受け入れるしか選択肢はないと私は思うがね?」

進之介「… 僕は…。」「new page」

レイス「… バイエルン君、その提案を飲む前に

我が主と行ってみたい所がある。返事はそれからでも良い

かい？」

アルト「何？行ってみたい所だと？」

バイエルン「どこかね？まさか、アテがあるというのか？」

レイス「私の友人である『佐田京也』にこの事を相談してみたい。

もしかしたら彼の眷属達なら、なんとかできるかもしれない。

い。

可能性は低いかもしれないが、多元宇宙に向かうリスクを考

えたら、

行ってみる価値はあると思う。

それに……今の我が主には休息も必要だと思っからね。」

進之介「レイス……ありがとう!!それじゃ、行ってみようかな。」

アルト「『佐田京也』だと!？」

デイド「まさか……『ジャスティスナイト』のリーダーの名か!？」

バイエルン「ほう？そんな大物がまさか君の友人だったとはな。

成程……確か彼の眷属にはあの『オールフェス』もいた

な。

良いだろう……行ってみるがいい。リスクを負わずに

彼を救える

可能性があるのならそれに賭けてみるのも悪くはな

い。」

レイス「礼を言おうバイエルン君……ミリカ君、いずれにせよ

すぐに、ここを発つわけではないのだろうか？」

アクア「え……ええ……出発は明後日の予定だから。

本当はあなたなんか頼みたくないけど……

シンをお願いね……!!!」

レイス「フツ……私としても君に頼まれるのは調子が狂うんだが

ね。

良いだろう。我が主の事は私が責任をもって面倒を見よう

じゃないか。

ではバイエルン君……明後日には戻って来るから、

キングダークにもそのように伝えてくれたまえ。」

バイエルン「了解した… 成果を期待しておこう。」

アルト「確かその次元には『ナイツオブダークネス』もいたはずだ。

気を付けていけ!!」

レイス「ああ… もし彼らが現れても佐田君達が相手をしてくれるだろう。」

その辺はあまり心配してないよ。」

進之介「ミリカ… マナ… みんな、行ってくるよ!!」

マナ「いつてらっしやい!!」

亜久里「お早いお帰りを!!」

アクア「待つてるからね… シン!!!!」

レイス「では… いざ参ろうじゃないか、我が主!!」

「シューーーーーー」

と、進之介とレイスはそう言い残してその場から姿を消し、

『ジャステイスナイト』がいる平行次元へと向かって行った。「new

page」

鬼太郎「シン…。」

メリオダス「治るといいけどな、あいつ。」

悟空「ああ。」

バイエルン「では我々も一旦失礼しよう。キングダークに

この件を伝えなければならぬのでね。」

アルト「また明後日に来てやるよ。じゃあな!!」

「シュンシュン!!」

と、続いてアルトとバイエルンもその場から姿を消した。

バン「あいつ等も行っちゃったか。」

マーリン「ではアクア殿… 一通り終わった所で、出発準備と行こ

うか。」

ナツメ「私達も手伝います!!ねえ、みんな!!」

トウマ「うん、もちろん!!」

零「グラン・ゲインズとしての最後の任務だな。」

刻「っし!! いっちゃやってやるか!!」

マサト「俺達も手伝おう、美香!!」

美香「はい!!」

アキラ「わかったわ!!総員、作業開始!!」

メンバー一同「了解!!」

と、メンバー達は次なる目的地『クロスフロンティア』に向けての出発準備を始めたのであった。そして…

く 明後日 く

マナ「そっか…結局ダメだったんだね。」

進之介「うん…京也や眷属のみんなも

頑張ってくれたんだけど、仕方ないよ。」

レイス「だが、我が主にとってもいい休養になったはずだ。

佐田君や眷属達とも仲良くなれたようだしね。」

エスカノール（普通）「それは良かったですね。」

アキラ「行くのね…多元宇宙へ。」

進之介「うん。ごめんねミリカ…心配ばかりかけて。

必ず良くなって戻って来るから!!」

龍斗「つたりめえだ!!!」

ゴウガ「お前は俺等の目標なんだからよ!!!!」

ガルダ「俺達のもっと強くなる!!だからお前も、多元宇宙の奴らに負けるなよ!!」

コナン「気を付けてね、シン兄ちゃん!!」

進之介「うん!!ありがとう!!デイド…みんなの事、よろしく頼むよ!!」

デイド「ああ!!任せておけ!!」

メリオダス「また会うときにはお前より強くなってるかもな!!」

悟空「楽しみだな!!ようやく本腰入れて修行できっからよ!!」

ベジータ「今度こそお前より先に行ってやるぞカカロット!!」

「シンシンシン!!」

アルト「挨拶は済んだか?失敗作。」

バイエルン「キングダークが待っている。

早く君に会いたがっているようだから行くぞ。」

レイス「では、諸君…しばしの別れだが、お互い頑張ろうじやな

マーリン「これで保護者代わりも卒業だな、団長殿。」

アルト「フン… ホントに失敗作を慕う女は変わり者ばかりだな。バイエルン「フフツ… 生みの親としては悪くはない気分だがな。」

レイス「では、我が主… そろそろ行こうじやないか!!」

進之介「わかったよ。じゃあみんな、待たね!!!」

「シューーーーーーシューーン…。」

!!!

と、進之介はアルトとバイエルン、そしてレイスと共に

バイキンシヨツカー要塞イーヴィルフオートへと向かって行った。

沖原「行ってしまったな…。」

美香「はい… また会えるといいですね。」

マサト「会えるさ… 今度は真の次元の王となった彼とね!!」

そんな彼を出迎えられるようにこの世界を良くしていかな

いとな!!」

マナ「シン… 待ってるからね!!!」

アクア「あなたは私達の… うちん、この次元の希望だから!!!」

それじゃ総員!!! 『クロスフロンティア』に向けて出発よ!!」

メンバー一同「了解!!!」

と、進之介を見送つた。グラン・ゲインズのメンバー達は、

デイドが用意した『次元ゲート』を使用して

次なる目的地… 『クロスフロンティア』へと

向かって行ったのだった。すると… 『new page』

物陰

メリム「あいつが桑田進之介… 次元の王の後継者か。」

まさか、あの神官レイスがついてやがるとはな。

ミリカには悪いけどよ、桑田進之介が戻ってきたら

この次元の今後を背負うにふさわしい男かどうか…

確かめさせてもらうぜ!!

3000年前の悲劇を繰り返す訳にはいかないからな!!」

と、以前木羅マサキとなったマサトを一蹴して食い止めた

謎の竜人の女性『メリム・サマンドラ』が

物陰から進之介を見た後にそう語るのであった。

後にこの2人はD. B次元編で初の邂逅を果たすこととなる。そして・・・「new page」

く
???
く

ゼロス「霸王様・・・仰せの通り、ヴォルクルスさん達を

『例の場所』へとお連れしました。」

キョウガ「そうかよ。まあ、ご苦労だったぜ。

さてと、後は奴らがどこまで俺様の思う通りに力つけんのか・・・

そーいや、あいつ等の仲間はまだいたんだっけな。

何つつたっけか・・・ザコ過ぎて忘れちまったじゃねえかよ。」

ゼロス「おやおや・・・霸王様ったら、ええつと確か・・・

『テラゼウス』さんに『アイリス』さん達・・・

『六祈將軍（オラシオン・セイス）』の皆さんに

『理想郷（アルカディア）』の皆さんですよ。

同じギガデウス一派ですが、それぞれ派閥が違う者達のようにです。」

キョウガ「ったくよ・・・ギガデウスがいりやあ、

派閥なんざどうでもいいだろうが!!

覚えんのも面倒臭えしよ。

んな事より、あのクソガキも動いたようだな。」

ゼロス「しかし、あの方も大変ですなえ。あの歴史の全平行次元で唯一、

『次元特異点の力』をどうにかできたであろうモクモク野郎さんの気まぐれで

今の進之介さんでは明らかに荷が重い『多元宇宙』に

行かされることになるとは・・・まさか、こうなる事を承知の上で、

ラグナロク・ジエンドをお貸しになったのですか?」

キョウガ「あのクソゲス野郎に調子こかせんのも胸糞悪かったからな。

たかだか多元宇宙の欠片如きを手にしたぐらいだよ。

まあ、クソガキの方もあの程度の力を発動させたぐらいで消えちまう奴ならそれまでだけだな。

ああ、そういやよ……欠片って言やあ、

コイツをギガデウスの野郎にぶち込めると思うか？」

「スツ……」『ピカアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!』

と、キョウガが懐からクリスタルの欠片のようなものを取りだすと、

辺り一帯が眩く輝き始めた。「new page」

ゼロス「相変わらず、憎らしい程に美しい光ですねえ。

まるで霸王様の『覇滅力』と対極するかの如く……。

まあ、ギガデウスさんがそれなりの力をつけたうえで

注入すれば行けそうかと。」

キョウガ「これでも本体から脱皮した抜け殻みてえなものらしいからよ。

気に食わねえが、試してみる価値はありそうだけ。

この……『秘宝エンドレス・ルクス』の欠片をよ。」

ゼロス『『秘宝エンドレス・ルクス』……我々の歴史の全平行次元、

そして次元力の集合体『オリジン・シン』を生み出したときれる存在……

しかしその秘宝は誕生以来、何人たりとも目にした事がなく、

我々の歴史の全平行次元に存在するのか、

進之介さんがいる全平行次元、又は多元宇宙に存在するの

か……

どこにあるのかは定かではありませんね。

ではその欠片は責任をもって私がお預かりしましょう。

エンドレス・ルクスの本体を捜す手掛かりになるかもしれない

せんし、

もちろん時が来ればギガデウスさんにプレゼント致します

けど。」

キョウガ「ああ、頼んだぜ。どうにかしてその石ころを

あのクソガキが俺様と同じ域に来るまでには見つけねえとな。」

ゼロス「もし仮に発見できたとしたら・・・如何いたしますか?」

キョウガ「決まってんだろ・・・その秘宝をぶった斬る!!」

最強の力を持つのは俺様だけで十分だからよ。

まあ、そんな時が来るまではあのクソガキや

ギガデウス一派の連中で暇つぶしするがな。」

ゼロス「かしこまりました。では行つて参りますよ!!」

「シュン!!」

と、ゼロスはそう言いながらその場から姿を消した。

キョウガ「フン・・・ちったあ面白くなつてきたな。

さてと、クソガキよ・・・この俺様に見せてみるや、

テメエがこれから創る歴史つて奴をよ!!

アーーーーーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

!!!!!!

!!と、キョウガはそう言いながら高らかに笑い出したのであった。そ

して・・・「new page」

くバイキンシヨツカー要塞 イーヴィルフオート く

「シューーーーーーシューーーーーーシューーーーーー。」

ルウエス「あ、シンちゃん、久しぶりく!!良かった、元気そうじゃん!!」

進之介「あつ、ルウエス!!久しぶりだね!!」

アルト「何だ・・・今度はお前もいるのか?ブル・ドーザ」

ブル・ドーザ「いたら悪いか!?フン!!久しぶりに

その憎つくきの弱者共の顔を見てやろうと思ったの

だ!!」

キングダーク『よく来たな桑田進之介・・・この度の戦い、見事で

あったぞ。

さすがは我が見込んだ者だ』

進之介「キングダーク・・・つてあれ?何か前に見た時と姿が違うよ

うな」

キングダーク『ハハハ… そうだったな。我はこうして人型になる事もできるのだ。』

驚かせてすまなかった。では、本題に入るとしようか。

さて… ここに来たという事は、やはり『次元特異点の力』は

封印できなかつたようだな?』

アルト「フン、やはり覗いていたか…。」

レイス「ああ。ジャステイスナイトにいる『オールフェス』に

封印を試みてもらつたが力及ばずだったよ。」

キングダーク『だから言ったであろう…多元宇宙へ行つて『あの男』に会えと』

バイエルン「はい。ですが、桑田進之介も少しは骨休めができたでしょう。

全くの無駄足ではなかつたようです。」

アルト「そうだな。で?この2流のカスがここにいるのは

失敗作に倒された恨み事でも言いに来たか?」

ブル・ドーザ「当然だ!!その弱者の小僧や神官には恨みがある!!」

レイス「やれやれ… ほとんど自業自得だというのにね。そうだろう?我が主。」

進之介「そ… そうだね」

ブル・ドーザ「…と言いたい所だが、キングダーク様からお前達には

手を出すなと言う仰せだからな。今は我慢してやる」

レイス「おや、流石にここで過ごす事になって

レグルス帝国軍への忠誠心はなくなつたのかな?」

ブル・ドーザ「未練が無くなつた訳ではないがな…。」

だが最早、吾輩はレグルス帝国には戻れぬ。

それに…あれ程の無様を晒したにも拘らず

キングダーク様は吾輩を蘇らせて只でさえ強者だつ

この化け物は…だがまあ、今はありがたいが。」

キングダークが容易くキングダーク・ウオッチに『5000万道力』もの力を

抱き込んだ事にバイエルン達は驚愕と共にキングダークに恐怖を抱いていた。

ルウエス「キングダーク様…僕には修行で力を付けろって言ったのに…」

そいつらには簡単に力を上げちゃうの？」

ばいきんまん「そうなのだ!!俺様だつて『デルザーナイン』の連中位の力は

最低でも欲しいぞ!『ジャンヌ』ちゃん達やお前直属の部下共に

何時までも負けている様じゃ大首領として威厳が…」

キングダーク『絶対的な存在に頼り切っては終わりだと

教えているはずだぞルウエス、ばいきんまん。

お前達は修行で力を付けるのだ。

それに、こ奴らに力を与えたのはあくまで多元宇宙で

最低限の活動ができる程度だ』

ルウエス「むすう…」

ばいきんまん「どケチ…」

ブル・ドーザ「吾輩も…もっと強者になりたい…」

ばいきんまんはキングダークに『どケチ』と言うがキングダークは無視した。「new page」

キングダーク『今ならば多元宇宙に行くには十分なはずだ。問題なかろう?』

アルト「確かにそうだが…」

キングダーク『何だ?5000万では物足りんか?』

何なら『5000兆道力』位にしてやっても良いが?』

バイエルン「いえ、力はこれで十分です。

我々は戦いに行くわけではありませんが故。」

キングダーク『それで結構』

アルト「やれやれ…消えてもらっては困るとはいえ、

何で僕が失敗作の為にここまでしなきゃ行けないんだ。」

レイス「しかし…バイエルン君から聞いたのだが、

貴方をも超える存在がいるとは驚いたな…

その人物が先程言っていた『あの男』なのかい?」

キングダーク『ああ…。その男の名は『マスター・バリンジャー』…

『多次元魔術師』の生き残りにして最強の男だ。

桑田進之介よ…この名を覚えておけ。

この男は必ずお前にとつても良き道標となろう」

進之介「『マスター・バリンジャー』…どんな人だろう…。」

進之介はまだ顔を知らない『マスター・バリンジャー』の名を徐に
呟いた。

キングダーク『その男なら間違いなくお前の『次元特異点』の力を

完全に封印する事が出来るはずだ。

お前が『真の次元の王』となる事が出来るようになる

までな。

しかも、ジャックハルトとの戦いで発動させたものは

まだまだ本来の力とは完全とは程遠い』

進之介「やっぱり…ジャックハルトを倒した時の力はまだ完全
じゃないんだね。」

キングダーク『当たり前だ。あんな程度の力は単なる爪の垢程度に
過ぎん。

『次元特異点の真の力』を完全に会得できれば…

今の我にも引けを取らぬ存在になれる筈だ。

(最も我は無限に力を増大し続ける存在だがな…。)

進之介「そうなんだ…。じゃあ、あなたの前に立つ為にも

その力を必ずいつかは使いこなせるようになってみせるよ
!!」

キングダーク『フフフフ…楽しみにしておるぞ?』

レイス「やれやれ…。その前に多元宇宙から無事に

戻ってこられるかどうかだがね。」

バイエルン「行くぞ、桑田進之介。」

アルト「さつきと来い!! 失敗作。」

進之介「わかった!!」

ルウエス「シンちゃん!!」

進之介「え?」

進之介が多元宇宙へのゲートを向かおうとした時、

ルウエスが声をかけてきた。

ルウエス「多元宇宙はシンちゃんが思っている以上に

過酷で危険な所だよ…気を付けてね!!」

ばいきんまん「ええ?! ルウエスちゃん、何でこんなガキの心配なんか…」

ブル・ドーザ「そうですぞ姫様!! こんな弱者小僧の心配など…」

ルウエス「ばいきんまん様とバカは黙っててよ。」

ばいきんまん・ブル・ドーザ「あ…はい…」

ルウエス「シンちゃんには何れ借りを返すつもりだから、

死なれちゃ困るの!! それに…パワーアップした僕の方

も

見せてあげたいしね」

進之介「ルウエス…うん!! 楽しみにしているよ!!」

ルウエス「後、シンちゃんの家臣はともかくだけど、

お前ら二人は死んでもいいからな。いや、寧ろ死んじまえ!!」

バイエルン「やれやれ…酷い言い草ですな。」

レイス「おやおや… ついに君までもお姫様に

嫌われてしまったようだね、バイエルン君。」

バイエルン「フツ…。」

アルト「フン… そう簡単にお前の思い通りになつてたまるか!!」

進之介「ありがとうルウエス。必ず戻ってくるからね!!」

ルウエス「う… うん!! き… 気を付けてね!!」

行つてらっしゃい、シンちゃん (//▽//) ポツ」

進之介の笑顔を見てルウエスは思わず顔を赤くした。

彼もお終いなのです。わかったかな？」

ブル・ドーザ「そ… そうなのでありますかああああああ!!!」
ルウエス「ぼ… 僕に相応しいお… おと… ここ… (〽▽〽)ポッ!!!」

わ… わかったよキングダーク様、ばいきんまん様…。

シンちゃんの帰りを信じて待つてる。」

キングダーク『結構』

ばいきんまん「さすがルウエスちゃん!!おりこうさんですね〜。

(くそっ… 何で俺様がこんな心にもねえことを

言わなきゃならねえんだよ!!ああ、虫唾が走るぜ…

だが、俺様にここまで言わせたからには、

必ず死んでも戻って来やがれ… ラグナのカキ!!)」

と、ルウエスを心にもない(?)セリフで大人しくさせたばいきん
まんは、

冷や汗をかきながら心の中でそう呟くのであった。そして…「n
ew page」

〜 多元宇宙と平行次元を繋ぐ回廊 〜

アルト「ここが多元宇宙と平行次元を繋ぐ回廊か。」

レイス「いつも我々が使うものとはさすがに勝手が違うようだね。」

進之介「それに… 何か体がやけに重くない?」

バイエルン「多元宇宙は全平行次元と比べて

一効倍の重力があると言われている。

その影響かもしれないな。」

アルト「おいおい… そんなところで普通に生きてるのか?多元宇
宙の連中は…。」

レイス「噂に聞いていた通り、何もかもが規格外のようだね。」

進之介「でも… もう後戻りはできない!!

みんななどの約束を果たす為にも、必ず生きて帰るんだ!!!」

バイエルン「フツ… 勇ましい事だな。」

我々と最初に出会った頃の君からは

まるで想像ができない程のセリフだ。

さて… そろそろ『境界』だぞ。」

一つの時代の終わりを迎えた『次元大戦の世界』。
そして、新たな時代の訪れとともに
グラン・ゲインズのメンバー達もまた、

『妖怪探偵団』『コードブレイカー』『ラスト・ウォーリア』の
面々との突然の別れに驚きながらも決意を新たに
それぞれの戦いへと突入していくのであった。
ついに大団円を迎えたこの次元大戦ファーストシーズン：
次なるステージではどのような猛者達との戦い、
そして、新たな仲間との出会いが我々を待っているの

か…

それでは『次元大戦セカンドシーズン（仮称）』も…
グラン・ゲインズのメンバー全員「刮目せよ」

!!!!!!

最終話

く 創造される新たな歴史（ものがたり）

（完）